

青森県埋蔵文化財調査報告書第93集

売場遺跡発掘調査報告書

(第3次調査、第4次調査)

大夕ルミ遺跡発掘調査報告書

昭和59年度

青森県教育委員会

売場遺跡発掘調査報告書正誤表

1・2次

頁	行	誤	正
15	7	滞状	带状
15	20	滞状	带状
20	18	14C	¹⁴ C
20	26	14C	¹⁴ C
139	9		文末に（坂本洋一）を加える
266	14	(7~11・18)	(7~11)
267	2	(20~22)	(18~22)
286	図212	16番の実測図を上下逆にする	
353	24	番号18の分類の項の「Ⅱ」を削除	
514		(磨敲凹石類4)	(石皿類)

3・4次

頁	行	誤	正
165	15	表材	素材
166	27	礫石	礫岩
184	表石斧13	砂岩凝灰岩	砂質凝灰岩
308	17	ピットのの	ピットの
345	1	次の表	第97表
345	11	下の表	第98・99表
347	26	(加藤・鶴丸：1980)	(加藤・鶴丸：1980P.104)
354	14	第 図	第222図
354	16	第 図	第223図
363	第226図	Ⅲ b類ス2分布図	Ⅲ b類ス分布図
366	第106表(2)	角度A	角度A>B
366	第106表(2)	49%	49個
368	4	親指母指球	親指と母指球
368	8	4指	5指
373	7	第 図	第228図
376	36行目の次に 加藤晋平・鶴丸俊 1980『図録石器の基礎知識Ⅱ 先土器(下)』		

青森県埋蔵文化財調査報告書第93集

売場遺跡発掘調査報告書

(第3次調査、第4次調査)

大タルミ遺跡発掘調査報告書

昭和59年度

青森県教育委員会

目 次

例言

第 章 調査概要

第 1 節 第 3 次調査の概要 1

第 2 節 第 4 次調査の概要 1

第 章 縄文時代の遺構と遺物

第 1 節 検出遺構と遺構内出土遺物 4

(1) 竪穴住居跡と出土遺物 5

(2) 土壌と出土遺物 47

第 2 節 遺構外出土遺物 71

(1) 土器 71

(2) 石器 145

第 章 平安時代の遺構と出土遺物

第 1 節 検出遺構と出土遺物 192

(1) 竪穴住居跡と出土遺物 192

(2) 土壌と出土遺物 212

第 2 節 遺構外出土遺物 297

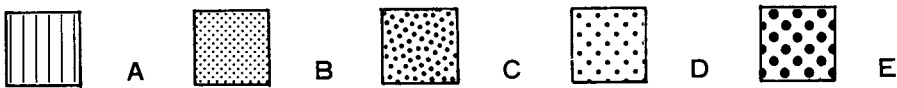
第 章 溝状ピットと出土遺物 308

第 章 第 3・4 次調査の成果 327

第 章 売場遺跡の分析と考察 329

凡 例

1. 後編の記述ならびに挿図は、原則として、前編の基準と同様である。
2. 遺構名は、種類ごと・検出順に、第3次調査では300番台・第4次調査では400番台の番号を付して呼称した。調査時の名称を使用したため欠番もある。
3. 実測図中における表現方法のうち、礫石器のスクリーン・トーンの使用部分は原則として下記のとおりである。



- | | | |
|--------------|--------------|-----------------------------|
| A つるつるしている部分 | B ザラザラしている部分 | C 面が荒れていて、
多数の凹みが観察される部分 |
| D 敲打痕のある部分 | E 凹み部分 | |

他の部分は、それぞれ実測図中に記載した。

4. 石器観察表中、石質の略称は下記のとおりである。

頁	頁岩	流	流紋岩	花閃	花崗閃緑岩	砂	砂岩
珪頁	珪質頁岩	安	安山岩	閃	閃緑岩	泥	泥岩
緑頁	緑色頁岩	古安	古期安山岩	斑粍	斑粍岩	粘	粘板岩
黒	黒曜石	多安	多孔質安山岩	チャ	チャート	凝	凝灰岩
石	石英	玄	玄武岩	ホ	ホルンフェルス	輝凝	輝緑凝灰岩
鉄石	鉄石英	斑	斑岩	石ホ	石英ホルンフェルス	千輝	千枚岩質輝緑凝灰岩
玉	玉ズイ	玢	玢岩	緑千	緑色千枚岩	スコ	スコリア
碧	碧玉	輝	輝緑岩	礫	礫岩		

5. 歴史時代の遺物で、環元炎焼成のもの（須恵器）は断面を黒塗りで表現した。また内面黒色処理されたものはスクリーン・トーンで表現した。

第1章 調査概要

第1節 第3次調査の概要（昭和57年度）

4月26日 器材を運搬。翌27日には、八戸市立市川公民館において調査折合せ会議を行い、調査方法等について共通理解を図った。28日には、作業員に対する説明会を行った。一方現場では、第一・二次調査で使用したグリッド杭等の位置や、道路建設予定地内の工事用センター杭、幅杭等の位置を確認して調査区のグリッド設定作業を開始した。

5月6日から大グリッド25 と35ライン以西の粗掘りに取り掛かった。11日には、25 において溝状ピット4基、平安時代の土壌1基を確認するとともに、縄文時代早期の包含層に達した。

13日には遺物の取り上げや、遺構精査を開始し、併せて、標高点の移動、調査区域の地形図作成等を行った。

5月下旬 35 等で、須恵器片の集中する部分がみられ、そこに歴史時代の住居跡と思われる落ち込みを確認した。また、25～30 の粗掘りに取掛かった。

6月上旬 25 、 では遺物が農密に分布し、この取り上げが進むにつれて除々に縄文時代早期の住居跡等の遺構が確認され始めた。また、35ライン以西では、溝状ピットや歴史時代の住居跡、土壌、等が次々と検出され、先に遺構の分布は薄いと推測した55ライン以西でも、多数の遺構が確認され始めた。

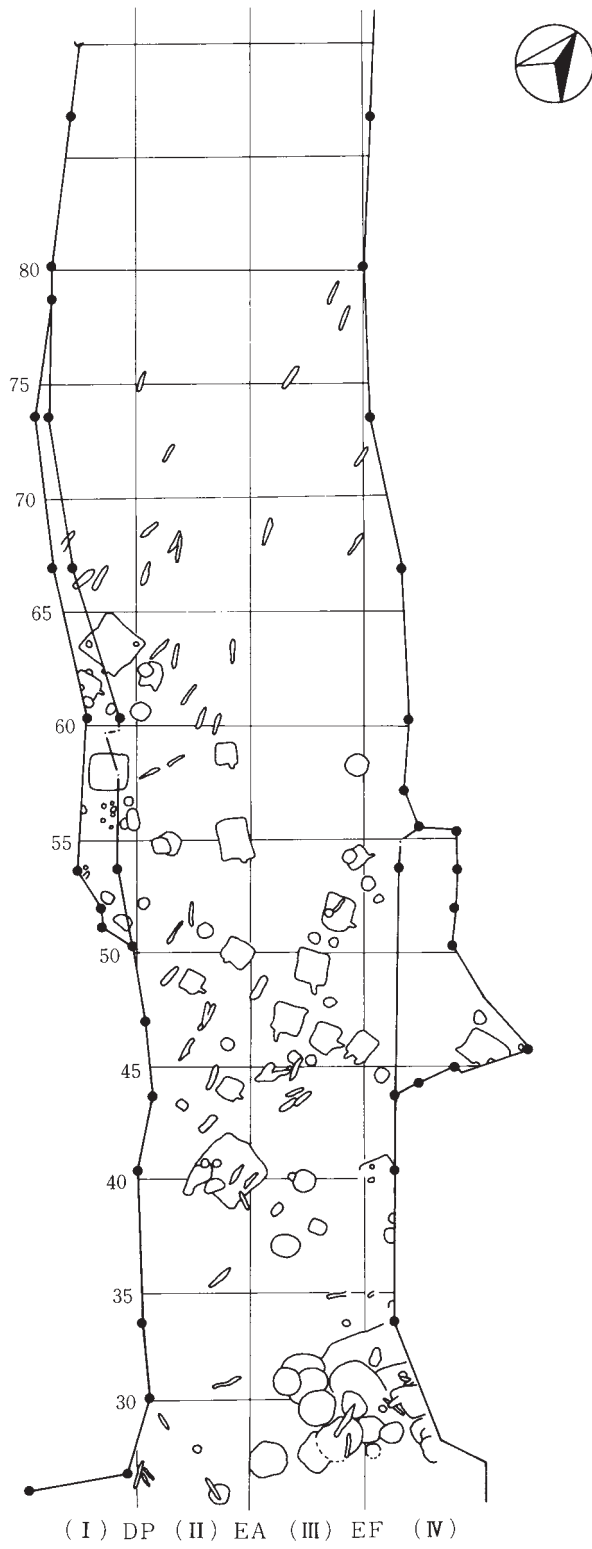
7月に入り、縄文時代の包含層や、住居跡の精査が進むにつれて遺構数は増加し、更に、その遺構の多くは重複していたため、調査は難航した。

7月から10月にかけて、相次ぐ遺構の確認と精査が続き、最終的に縄文時代早期の竪穴住居跡12軒、土壌8基、歴史時代の竪穴住居跡16軒、土壌28基、溝状ピット56基を検出し、10月16日すべての調査を終了した。

第2節 第4次調査の概要（昭和59年度）

4月16日 器材を運搬。3次調査の際、一部プランを確認できた2軒の歴史時代の竪穴住居跡を中心として大グリッド55 ・60 の盛土の排除、及び粗掘を開始し、翌17日には早くも遺構精査に入った。20日には10数基の土壌を検出し、26日には45 においても歴史時代の竪穴住居跡1軒と土壌3基を検出した。更に5月11日には50 で縄文時代早期初頭の竪穴住居跡を1軒確認した。

遺構近くに排土場所が得られたことなどから精査もはかどり、5月16日には、縄文時代1軒、
歴史時代3軒の竪穴住居跡と、歴史時代の土壇22基、及び溝状ピット5基のすべての調査を終
了した。 (三宅)



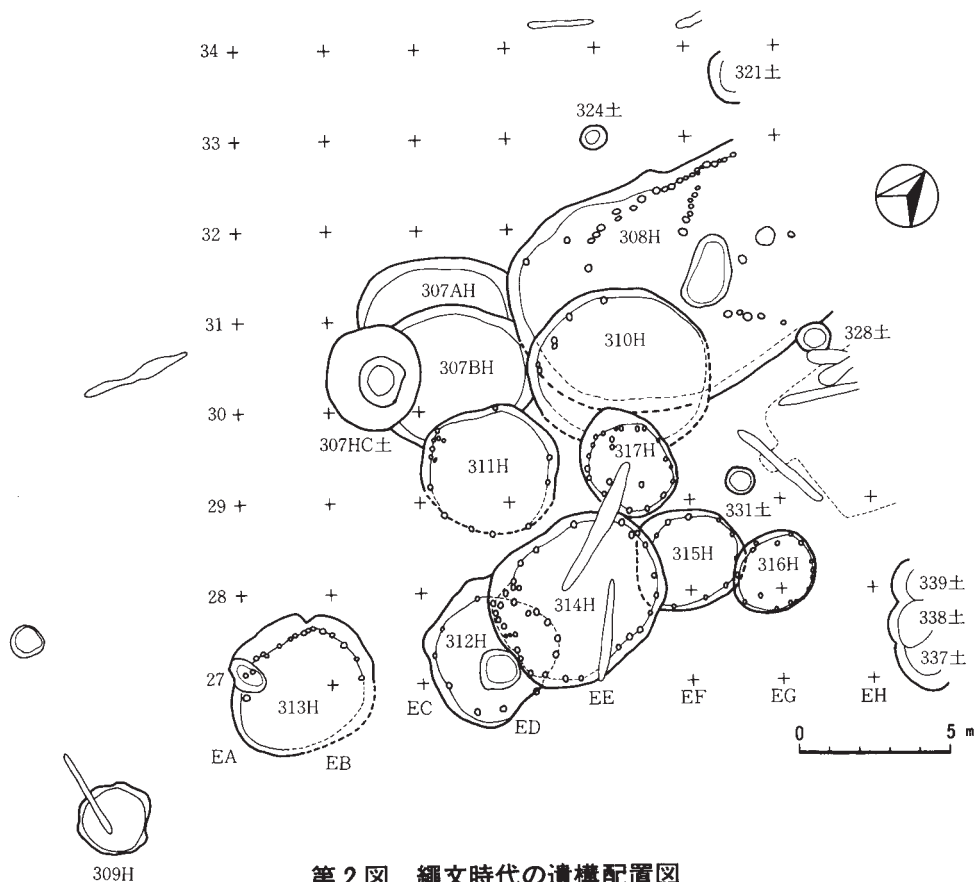
第 1 図 第 3 ・ 4 次調査遺構配置図

第 章 縄文時代の遺構と遺物

第 1 節 検出遺構と遺構内出土遺物

縄文時代の遺構は、すべて早期のものであるが、早期初頭の第404号竪穴住居跡を除く他の遺構は33ラインから東側の比高差約 3 m 50cm、勾配約10°の斜面上に立地している。また遺構は、E A ~ E H - 27~33グリッドの間の500m²の狭い範囲に集中していたため、重複するものが多い上に、斜面上に構築されたことから、東壁側の確認が困難なものが多かった。更に、10数型式に及ぶ土器が出土し、その分布も密であったため、各遺構に各期の遺物が入り込み、特に、石器に関しては、遺構との伴出関係は全く不明である。

なお、第三・四次調査において検出した遺構は、竪穴住居跡13軒、土壌7基、焼土遺構23箇所、集石2箇所、剥片の集中地点が1箇所である。



第 2 図 縄文時代の遺構配置図

(1) 竪穴住居跡と出土遺物

第307号A・B竪穴住居跡及びC土壌

EC-30・31グリッド及びその周辺で検出したが、遺構の重複確認等が遅れたため、壁や床面等全体的にやや大きく掘り過ぎる結果となった。覆土を検討したところ、住居跡2軒と土壌1基が重複していることが判明した。なお、第3図は、セクション図に基づいた推定ラインであり、個々の住居跡・土壌の大きさや形状等の細部については不明である。

第307号A竪穴住居跡

位置 EC-31グリッドに位置する。

重複 第307号B竪穴住居跡及びC土壌の覆土の一部を切って構築されている。

覆土 12層に区分できたが、自然堆積の状況である。全体的に若干の浮石粒(1~5mm)を含むが、A10、A12層は5~10mm、また、A4層は3~5mmの浮石粒を多量に含んでいる。

形状 床面の大きさから直径4m30cmの円形と考えられる。

壁 西壁の一部が約40°の角度で立ち上がり、壁高は約50cmであるが、南壁は確認できなかった。

床面 西壁側は、八戸火山灰第1層を床面とするが、南側ではB竪穴住居跡の覆土B3層を床面とし、ほぼ平坦である。

柱穴 確認できなかった。

出土遺物 (第4図1~6)、第43図1・4・5・10、第49図8)

土器は、第1群(1、赤御堂式)と第2群土器(2~6、早稲田5類)が、若干出土した。

石器は、石鏃・石匙・不定形石器(第43図1・4・5・10)・石斧(第49図8)が出土した。

時期 早稲田5類期と考えられる。

第307号B竪穴住居跡

位置 EC-30グリッドに位置する。

重複 A住居跡に西壁を、また、C土壌に南西壁を切られている。

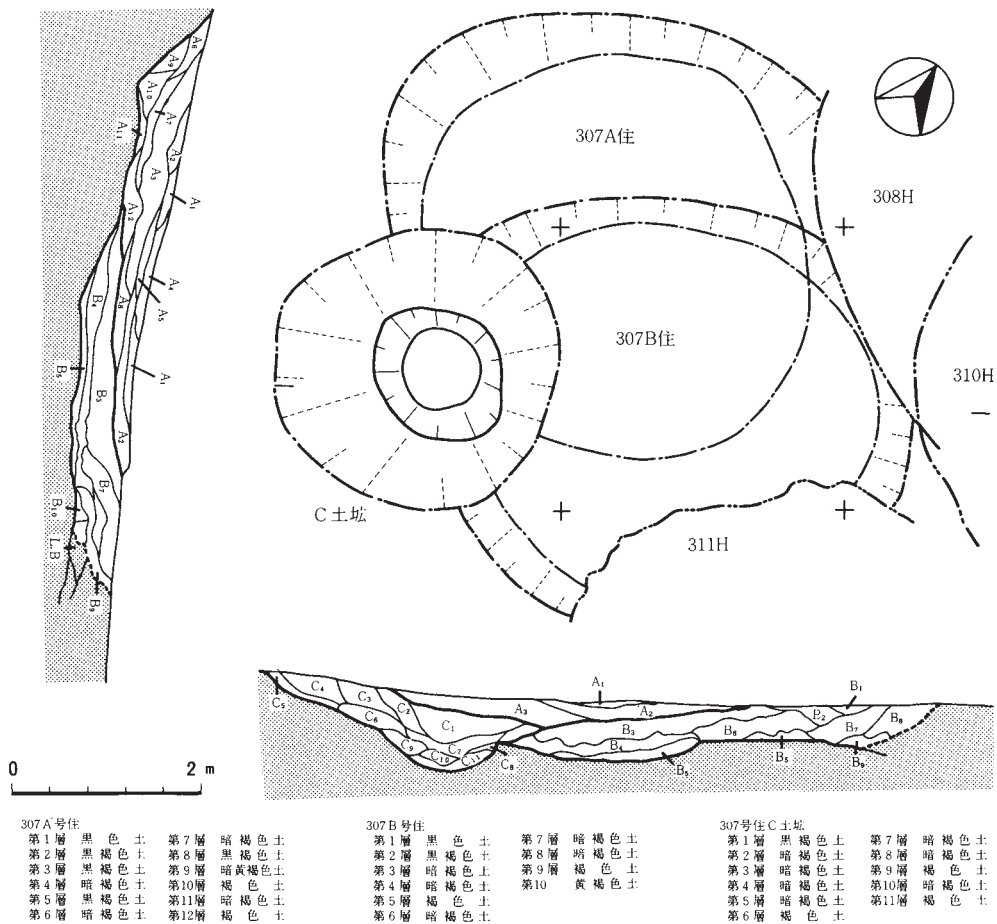
覆土 10層に区分できたが、ほぼ自然堆積の状況で、全体的にしまっている。B6層は多量の焼土を含んでいるが、投げ込まれた可能性がある。B8・9層はやや大きめの浮石粒を含み、B4層は灰黄褐色土をまばらに、B5層は浮石粒が多量に混入している。

形状 床面の大きさから直径4m50cmの円形と考えられる。

壁 明瞭でない。

床面 西側は八戸火山灰第1層が床面で堅い。また、全体的に緩やかな起伏がみられる。

柱穴 確認できなかった。



第3図 第307号A・B竪穴住居跡、C土塚平面図

出土遺物 (第4図7~12、第43図2・3・6~9、11~13)

土器は第 群土器 2点 (7・8、物見台式)、第 群土器 1点 (9、ムシリ 式)、第 群土器 3点 (10、売場 群) 第 群H類土器 2点 (11・12) が出土した。11・12は、C土塚の18と同一個体である。

石器は、石匙が2点と不定形石器が7点、石斧が1点 (49図1) 出土した。

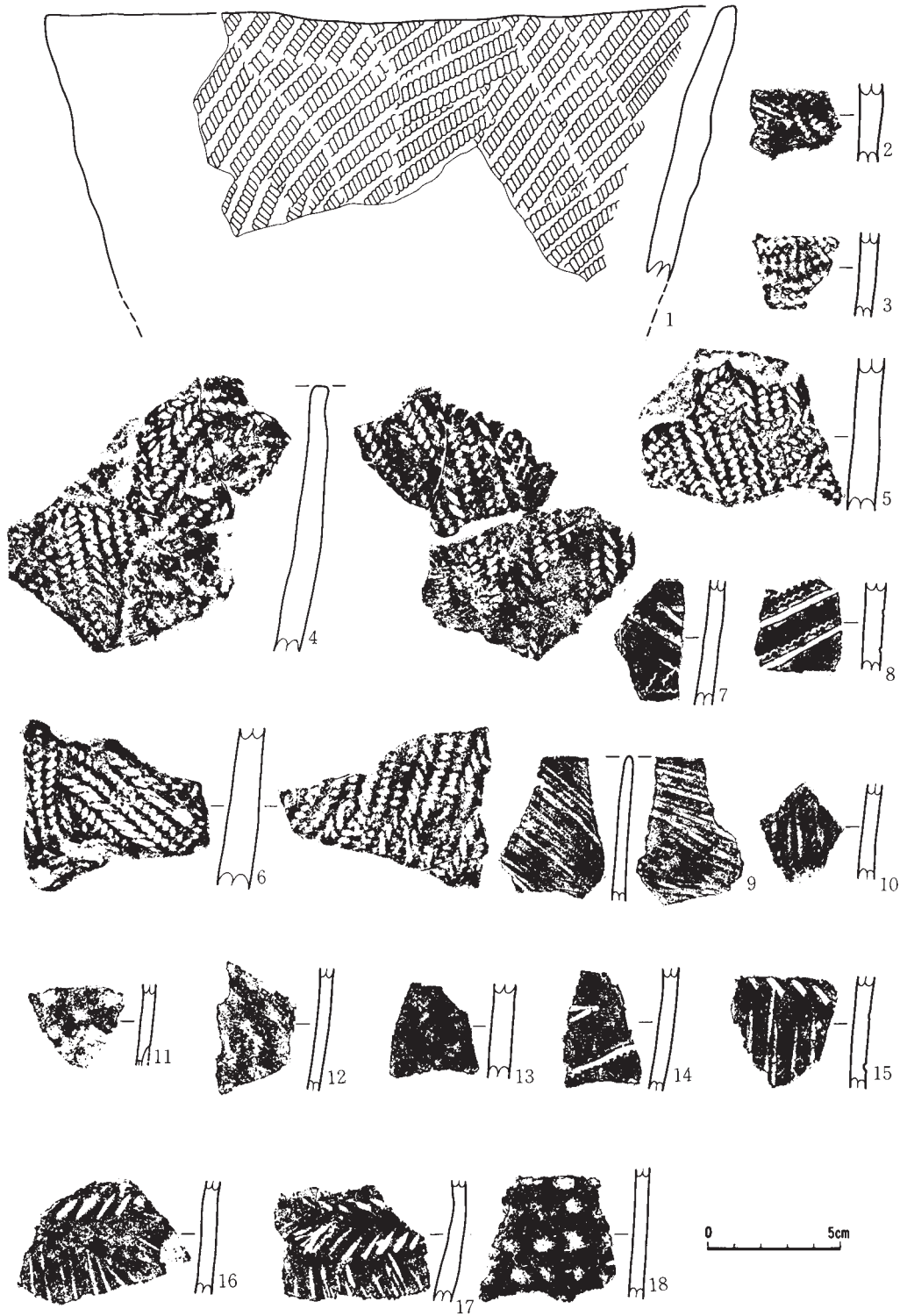
時期 ムシリ 式と考えられる。

第307号住居跡C土塚

位置 EC - 29グリッドに位置する。

重複 B住居跡の南西壁を切り、A住居跡に北西壁の一部を切られている。

覆土 11層に区分できたが、自然堆積の状況である。全体的に1~5mmの浮石粒を含



第4图 第307号A·B竖穴住居跡、C土坑出土土器実測·拓影图

むが、特にC 6・9層が多く含む。また、C 1層は10mmの浮石粒を多く含み、C 4、5層は浮石粒とともに細砂粒をも含む。

形状・壁・底面 底面は平坦でなく、中央部近くが径 1 m40cmの円形状に一段深くなり、そこから約30°の緩やかな角度で立ち上がる。最深部が80cmで径 3 mのスリ鉢状土壌であろう。

出土遺物（第4図13~18、第49図4）

土器は、第 群土器（13・14、物見台式）と、第 群土器（15~17、売場 群）、第 群H類（18）が出土している。18は、器面の所々をヘラ状工具で浅く削り取ったような窪みが多数みられ、他に類例がない。器厚は約 5 mmで、植物性繊維を含まず、砂粒を多量に含む。また、焼成は良好で、緻密で堅い。胎土・器厚等は第 群土器（ムシリ 式）の一部に類似する部分もある。

石器は、石斧が1点である（第49図4）。

時期 ムシリ 式の後半期、売場 群期と考えられる。

第308号竪穴住居跡

位置 E D ~ E G - 30~32グリッドに位置し、北側は調査区域外に延びている。

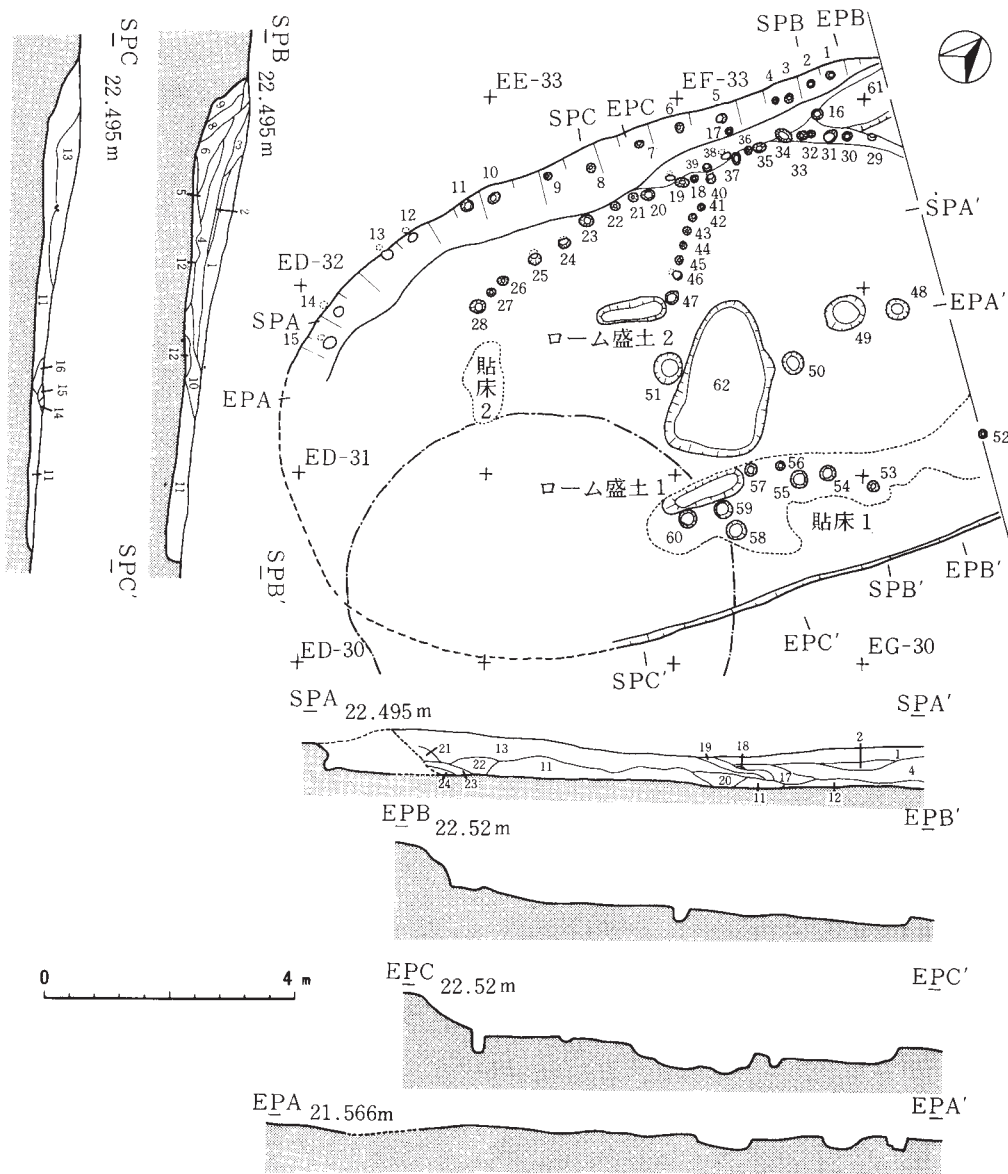
重複 第310号竪穴住居跡を切る。

覆土 24層に細分できたが、ほぼ自然堆積の状況である。覆土の6箇所に焼土が存在するが、いずれも床面に達していない。

形状 短軸は 7 m60cm、長軸は不明であるが、11mを超える楕円形の大型住居と考えられる。

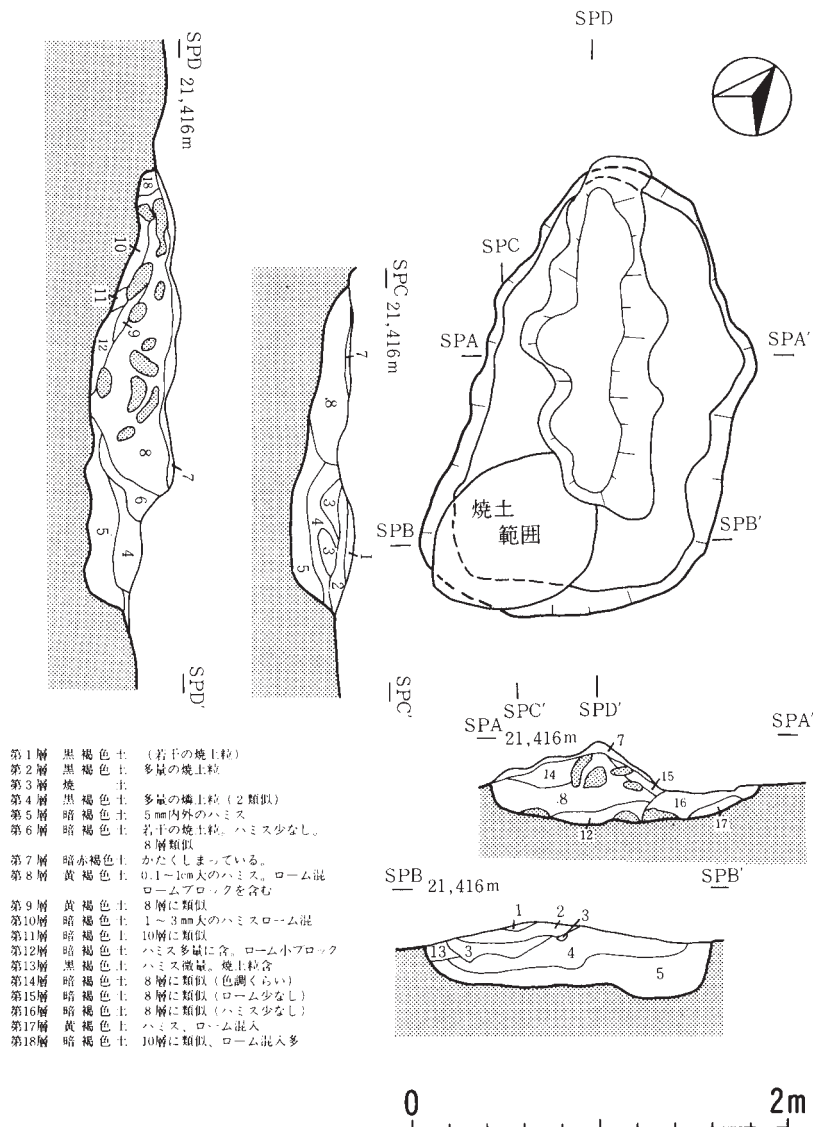
壁 西壁は高さ60~70cmで45°~65°の角度で立ち上がる。しかし斜面下方にかかる東壁は、一部約20cmの壁高を観察したものの、多くはテストトレンチによる壁高を継ぎ合わせてプランを把握した。

床面 ほぼ平坦であるが、東側へ緩やかに傾斜し、その比高は20cm程度である。北西側の床面は、八戸火山灰第 層であるため硬いが、東側等では、第310号竪穴住居跡の覆土や標準土層第 層の中位が床面であり、確認の困難な部分もみられた。しかし、その一部にはロームをたたき固めた厚さ 2 ~ 6 cmの貼り床が存在した。貼り床 1 は、東壁から約 1 m離れ、長さ 5 m50cm、幅90cm ~ 1 m50cmの広いものであるが、その東壁側のラインは大きく入り組んでいる。貼り床 2 は、長さ 1 m30cm、幅40~70cmの小範囲である。また、住居跡のほぼ中央部の床面又は、貼り床上に、固くしまったロームの盛土が 2 箇所存在した。ロームの盛土 1 は、長さ 1 m40cm、幅40cm、厚さ 3 ~ 7 cmで、ロームの盛土 2 は長さ 1 m12cm、幅33cm、厚さ 5 ~ 13cmで、両者はほぼ平行し、その長軸は住居跡の長軸と同一である。



- 第1層 黒褐色土 1cm~1mm大のバミス粒混入。しまりあり。
- 第2層 黒褐色土 5mm~1mm大のバミス粒、カーボン混入は多い。しまりあり。
- 第3層 黒褐色土 5mm~1mm大のバミス粒混入。2層よりバミスの混入は多い。しまりあり。
- 第4層 黒褐色土 2層に類似。色調が明るい。しまりややあり。
- 第5層 黒褐色土 2層に類似。バミスの混入が若干多い。しまりややあり。
- 第6層 黒褐色土 1cm~1mm大のバミス粒をかなり混入。斑状に黄褐色土を混入。しまりあり。
- 第7層 黒褐色土 1cm~5mm大のバミス混入。しまりややあり。
- 第8層 黒褐色土 6層に類似。バミス・黄褐色土の混入はかなり多い。
- 第9層 黒褐色土 5mm内外のバミスをかなり混入。下面近くは、明黄褐色を混入。
- 第10層 黒褐色土 6層に類似。バミスの混入が若干少なく色調がやや暗い。しまりあり。
- 第11層 暗褐色土 5mm~1mmのバミス混入。しまりあり。
- 第12層 黄褐色土 3mm内外のバミス混入。黄褐色土・黄褐色粘土と若干の黒褐色土が斑状に混入。粘性大。
- 第13層 黒褐色土 3mm内外のバミス混入。しまりあり。
- 第14層 橙土 焼土
- 第15層 橙土 焼土及び焼土粒混入。
- 第16層 暗褐色土 焼土粒混入。
- 第17層 黒褐色土 2層に類似。色調が明るい。焼土粒若干混入。しまりややあり。
- 第18層 褐色土 焼土および焼土粒多量に混入。
- 第19層 黒褐色土 2層に類似。1cm~5mm大の炭化物混入。しまりややあり。
- 第20層 黒褐色土 13層に類似。バミスの混入がひじょうに多い。しまりややあり。
- 第21層 暗褐色土 1mm大のバミス混入。しまりややあり。
- 第22層 黒褐色土 11層と13層の間層。
- 第23層 黒褐色土 13層に類似。色調が若干明るい。しまりややあり。
- 第24層 黒褐色土 1mm大のバミス混入。しまりあり。

第5図 第308号豎穴住居跡平面図



- 第1層 黒褐色土 (若干の焼土粒)
- 第2層 黒褐色土 多量の焼土粒
- 第3層 焼褐色土
- 第4層 黒褐色土 多量の焼土粒(2種類)
- 第5層 暗褐色土 5mm内外のハミス
- 第6層 暗褐色土 若干の焼土粒、ハミス少なし。
- 第7層 暗赤褐色土 8層類似
- 第8層 黄褐色土 0.1~1cm大のハミス、ローム混
ロームブロックを含む
- 第9層 黄褐色土 8層に類似
- 第10層 暗褐色土 1~3mm大のハミスローム混
- 第11層 暗褐色土 10層に類似
- 第12層 暗褐色土 ハミス多量に含、ローム小ブロック
- 第13層 黒褐色土 ハミス微量、焼土粒含
- 第14層 暗褐色土 8層に類似(色調くらい)
- 第15層 暗褐色土 8層に類似(ローム少なし)
- 第16層 暗褐色土 8層に類似(ハミス少なし)
- 第17層 黄褐色土 ハミス、ローム混入
- 第18層 暗褐色土 10層に類似、ローム混入多

第6図 第308号竪穴住居跡ピット62平面図

ピット 62個検出したが、このうち、60個は柱穴と考えられる。

ピットNo.62 (第6図)

焼土と盛土を伴うもので、住居跡のほぼ中央に位置する。覆土の多くは人為堆積の状況を示し、これを18層に区分した。3層が焼土、2層と4層は焼土粒を多量に含み、1、6、13層は少量含む。7層はローム質で非常に固くしまり、8層以下を覆っている。幾分、火を受けている。8・9・14~16層はローム質を主とする埋め土で、特に8層は、ロームブロック塊を多量に含んでいる。形状は、底辺 2 m90cm、長辺 4 m90cm、短辺 4 m50cmの不等辺三角形を呈

第308号住居跡ピット一覧

No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
平面形	円形	円形	楕円形	円形	円形	楕円形	楕円形	楕円形	円形	楕円形	円形	円形	円形	円形	円形	円形	円形	円形	楕円形	楕円形	円形	円形
大きさ	12	11	13×10	10	14	14×10	16×12	14×10	12	22×16	20	14	18	18	20	16	12	12	20×12	22×16	16	12
深さcm	5.4	9.8	8.9	11	15.6	9	15.6	10	17	15	21.3	20	20	30	20	16.7	12	15	27	30	23	31
備考													横	横	横	横						
No.	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44
平面形	楕円形	楕円形	楕円形	円形	円形	円形	円形	円形	円形	円形	楕円形	楕円形	円形	円形	楕円形	楕円形	円形	円形	円形	円形	円形	円形
大きさ	22×18	18×16	22×18	14	12	24	12	16	22	12	14×12	28×20	18	18	20×16	18×10	12	16	12	12	10	12
深さcm	36	40	40	25	26	27	30	19	25	22.7	25	24	27	14	27	10	17	30	9	11	15	11
備考		斜	斜													斜	斜	斜	斜			
No.	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66
平面形	円形	円形	円形	楕円形	楕円形	円形	楕円形	円形	円形	円形	円形	円形	円形	円形	円形							
大きさ	12	14	20	48×32	66×52	32	52×42	14	14	22	30	14	20	30	28	26						
深さcm	10	23	39	23	23	16	40	11	16	14	19	16	20	22	28	31	15					
備考		斜																				

する。深さは、東側が40～60cmと深く、西側が20～30cmと浅い。東側覆土の上位には、焼土が径約1m、厚さ20～30cmで堆積し、これを除く部分は、約90cmの厚さで、8層を主とする土層によって埋められ、床面から最高40cmほど盛り上がり、固くしまった7層に覆われている。なお、この埋め土は、焼土を多量に含む4層を切っているが、ピットの縁辺は非常に固くしまり、形状自体は当初からのものである。

柱穴は60個検出されたが、西壁側に多く、東壁側では余り検出できなかった。

これらの柱穴は、以下の5グループに分けられる。

- A 西壁の上部に並ぶもの（1～15）
- B 西壁の壁際に並ぶもの（18～28）
- C 西側床面に半円状に並ぶもの（29～47）
- D 住居跡の主軸上に位置するもの（48～51）
- E 東壁側のもの（52～60）

Aグループは、壁上部に設けられた支柱穴と考えられ、その大半は、若干斜めに掘り込まれている。しかし、12～15は、他と全く異なり、ほぼ真横に20～30cm掘り込まれている。

Bグループは、ほぼ壁際を巡るが、南西では壁から徐々に離れ、貼り床2付近では検出できなかった。

Cグループは、径約5mの半円状に配列し、やや細いが深い柱穴である。

Dグループは、住居跡のほぼ主軸上にあり、他に比べてその径は太いが、深さは50が40cmであるほかは、他とほぼ同様である。なお、50の底面に接し、円礫と、伏せられた状態の土器底部が検出された。

Eグループは、貼り床が円形に切れていたため確認されたもので、他に比べ明瞭な配列を示していない。

以上の柱穴の配列から、Cグループの柱穴を、Eグループの一部(52~57)とともに1軒の住居跡における柱穴配置とみなし、A・Bグループ等の住居跡との重複と考えることができる。しかしながら、セクションの観察では切り合いが確認されず、また、ピット62の盛り上がった埋め土を切っていないことから、推定される小型の住居跡は、少なくとも大型住居跡を切るものではない。この場合、貼り床の範囲が小型の住居跡の想定範囲を大きく超えていること、及び52~57の柱穴がその貼り床で検出されていることから、この両者ともCグループの柱穴よりも新しいものであることが明白である。

以上のように、Cグループの柱穴列を、より古い住居跡のものとも考えることもできるが、更には、増築ないし構築当初からの住居構造である可能性も考えられ、ここでは以下の理由により構築当初からの構造と考えたい。それは、中央部に位置し、互いに平行するローム盛土の存在による。この盛土の長軸は、大型住居の長軸に一致するもので、Cグループの47、Eグループの57にほぼ接している。これはピット62を挟んで、盛土と柱穴が対応しているものと見なすことができ、Cグループ等の柱穴は、大型住居における間仕切りの性格をもっていると推察される。更にローム盛土の長軸線上で、12~15の柱穴が横に掘り込まれていることや、貼り床2付近ではBグループに連なる柱穴を検出できなかったことも考慮するならば、本住居跡は、単に大型であるばかりでなく、特殊な構造、性格を備えていたものと考えられる。

出土遺物

土器 第7図1~第8図30)

本住居跡からは、第群土器(1~3、物見台式) 第群土器(4~10、ムシリ式) 第群土器(12、売場群) 第群土器(11)等が出土したが、本住居跡に関連すると思われるものは第群土器(第7図13~第8図、早稲田5類)である。

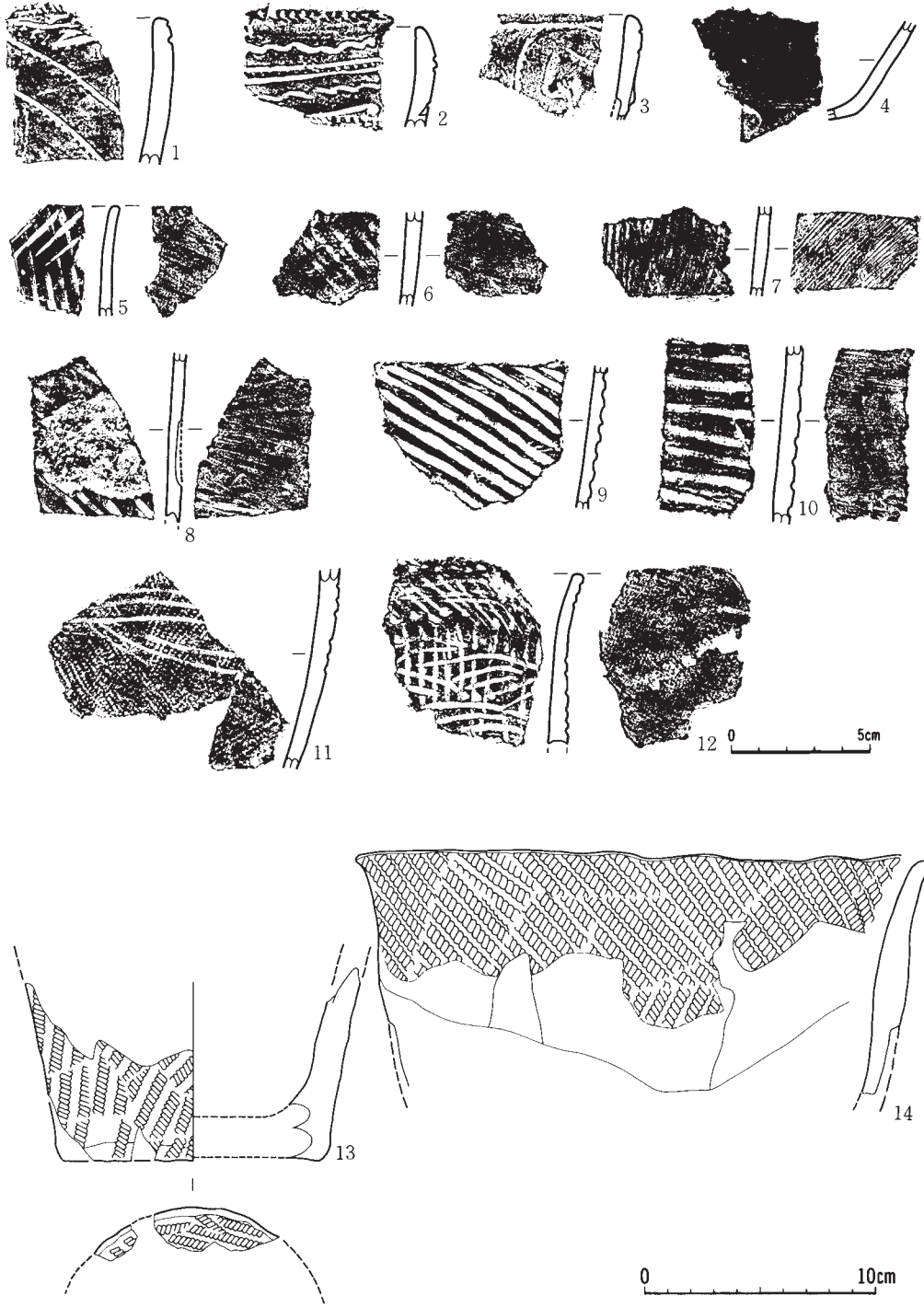
13は第50号ピット出土のものである。15・16・21は、口唇上端に縄端による刺突ないし斜縄文を施文し、口縁部文様帯は横位の押圧縄文によって構成されている。19・20は押圧縄文によって鋸歯状を構成している。

また、有孔土製品が12点出土し、これは全体の約40%を占めているが、その出土状況はピット内2点、床面ないし床面直上4点、覆土7点と様々である(第136図1~11、第137図24・25)。

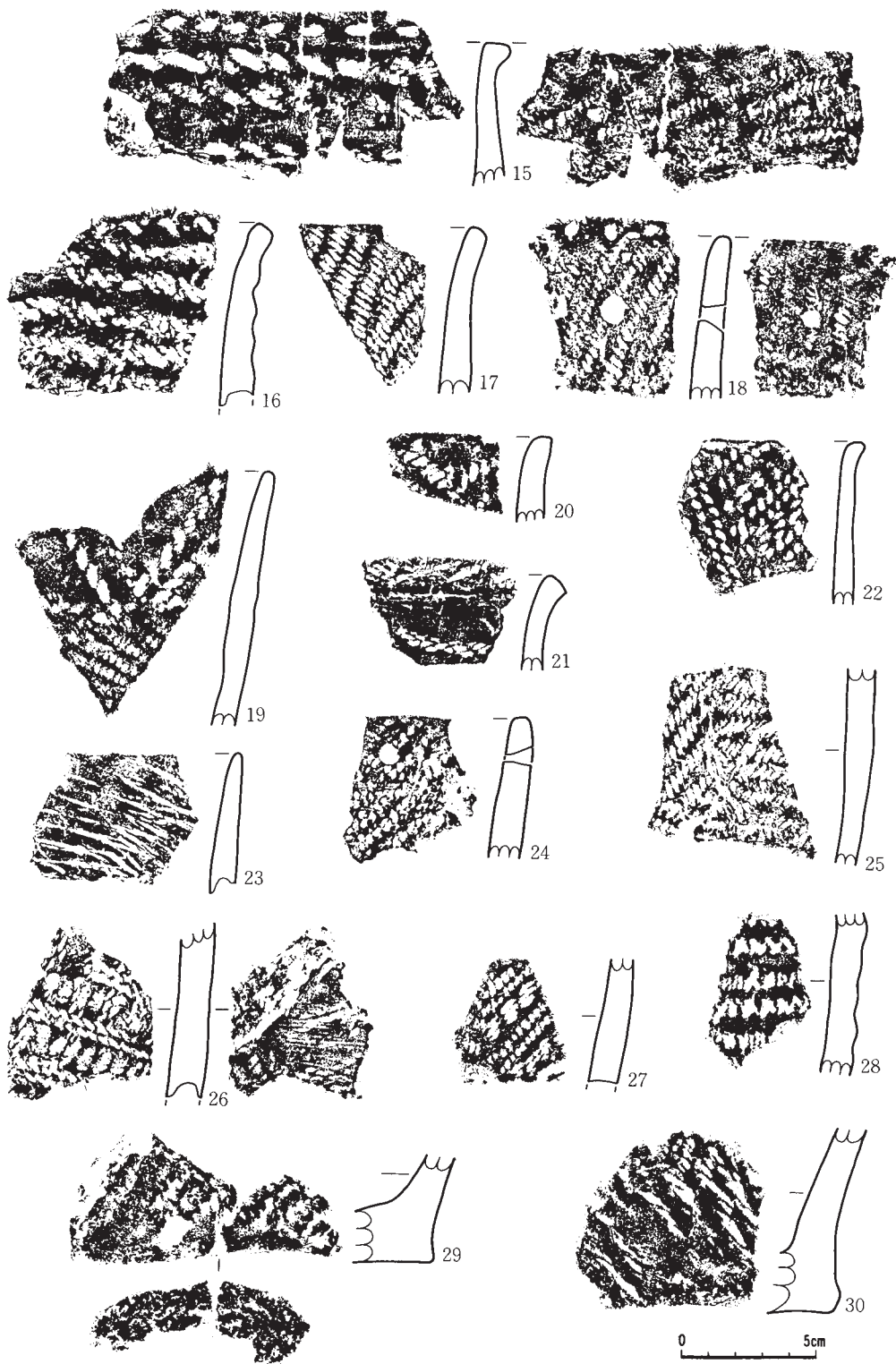
石器(第44図14~第46図39、第49図5~第50図14)

石器は、石縁、石槍、石匙、籠状石器等の剥片石器類26点、スリ石、凹石、石皿等の礫石器類が7点出土したが、本住居跡に伴ったものと断定できるのは、ピット50から出土した第45図35と第49図5及びローム盛土1から出土した第44図17の3点だけである。

時期 早稲田5類期である。



第7图 第308号竖穴住居迹出土土器拓影·实测图



第 8 图 第308号竖穴住居跡出土土器拓影图

第309号竪穴住居跡

位置 D S - 25グリッドに位置する。第 層の中ほどにおいて、1 m80cm×60cmの範囲で板状の炭化木材を検出し、何らかの遺構に伴うものと考え周囲の精査を行なった結果、径が2 m50cm前後のほぼ円形のプランを確認した。しかし、後に、この炭化材は遺構確認面から約30cm、床面から60cm前後も浮き上がることになり、本遺構に伴うものでないことが明らかになった。

重複 第305号溝状ピットに切られているが、壁の一部だけで、床面には達していない。

覆土 10層に区分できたが、自然堆積の状況である。このうち、1・2層は色調が若干異なることから分けたが、標準土層の 層下に相当する。パミスの粒子は、他に比べ5層が2～4mmと大きく、その混入量は4・5・8層が多い。

形状 長軸2 m84cm、短軸2 m32cmで南北にやや長く、ほぼ円形である。

壁 北壁から西壁にかけては、急角度で立ち上がる20～30cmの壁高を確認したが、他では2～10cmで、かなり不明瞭な部分もある。

床面 八戸火山灰第 層を床面とし、固くしまっているが、地形の傾斜同様、東側へ傾斜し、約40cmの比高差がある。

ピット 壁に沿って19個、また、西側の床面に約1 m間隔で2個、計21個検出した。深さは10cm未満の浅いものが11個あり、その多くは西側にみられた。

出土遺物

土器は、小破片が35点出土した。これには、第 群土器（1・2、ムシリ式）、第 群土器（3～6、赤御堂式）、第 群土器（7～10、早稲田5類）がある。

石器は、小形の縦型石匙が1点出土した（第46図40）。

炭化木材 材質は嶋倉巳三郎氏によって「サクラ」と鑑定された。

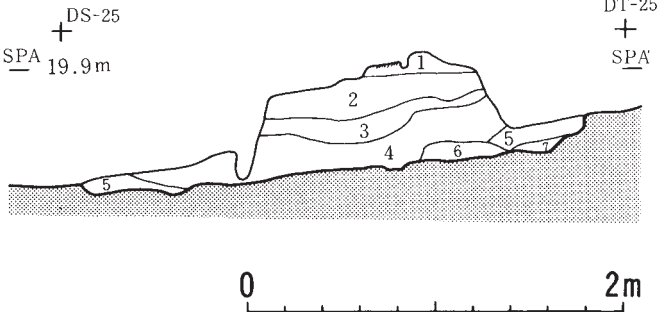
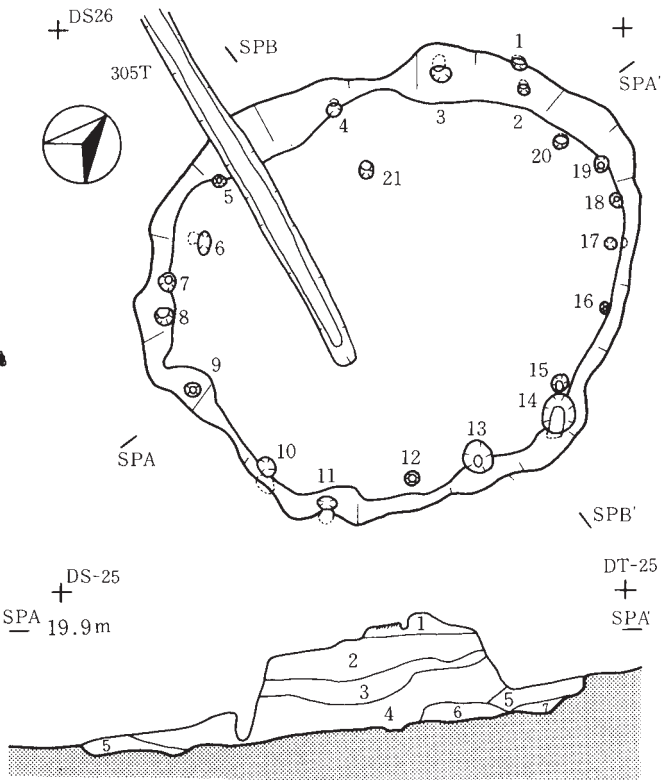
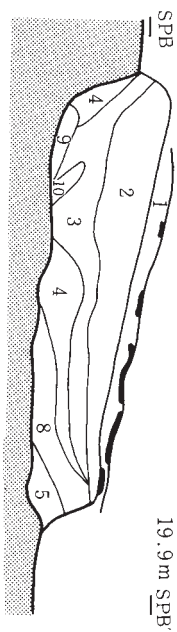
時期 床面近くから早稲田5類相当の土器が出土し、この時期の住居跡と考えられる。したがって、炭化木材は、これより以降となろう。

第309号住居跡ピット一覧

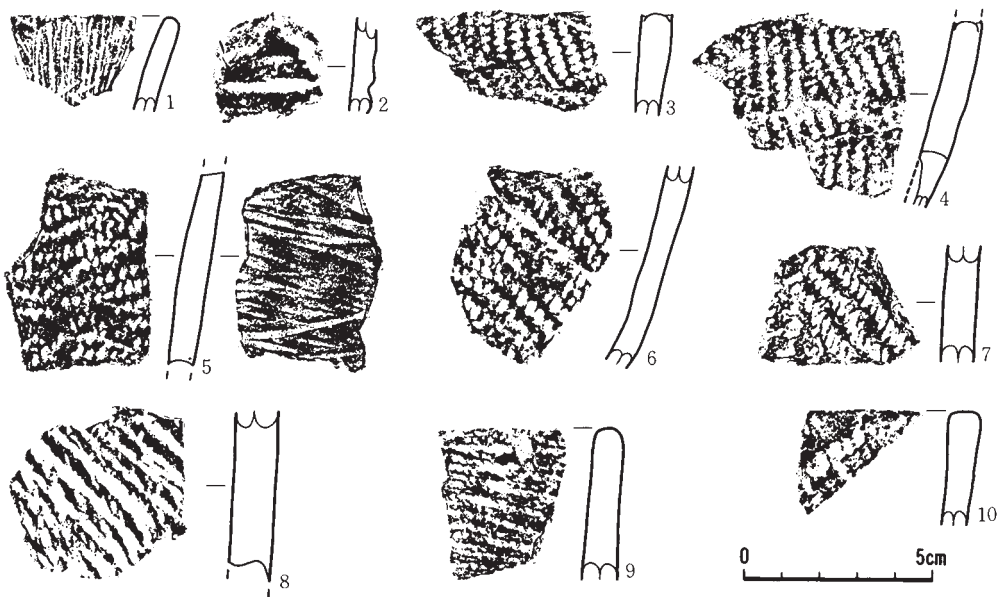
No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
平面形	楕円形	円形	楕円形	楕円形	円形	楕円形	円形	円形	円形	円形	楕円形	円形	楕円形	楕円形	円形	円形	円形	楕円形	円形	円形	円形	
大きさ	7×5	7	10×8	8×8	7	13×6	10	10	8	10	10×6	8	17×15	21×17	10	5	6	8×6	7	8	8	
深さcm	7	4	6	4	7	8	9	13	10	11	16	25	23	16	12	13	8	12	13	8	7	
備考	斜	斜	斜	斜		斜				斜	斜						斜			斜		

第310号竪穴住居跡

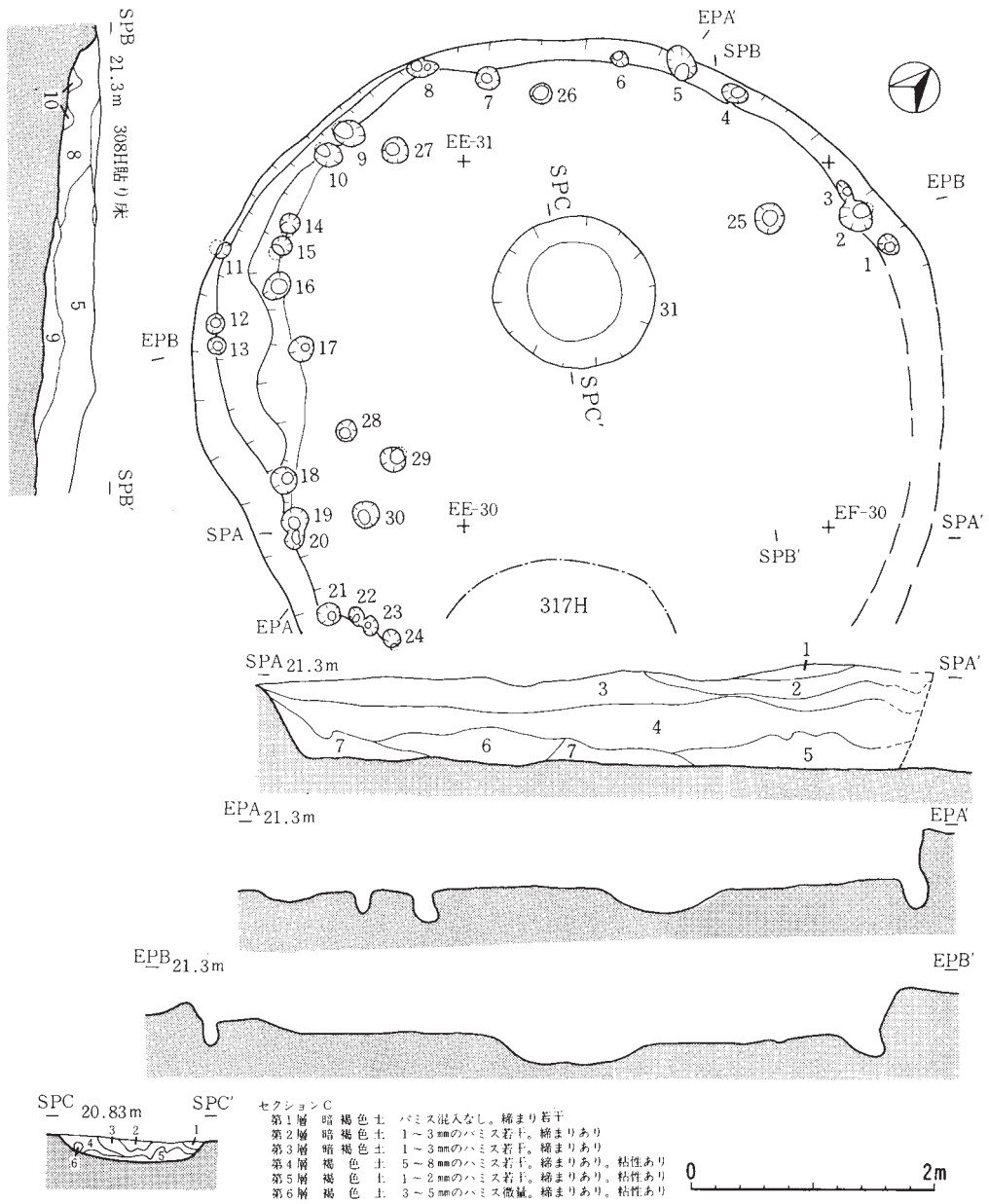
位置 E E - 30グリッドに位置する。第308号竪穴住居跡の床面を追求していた際に確認した。



- 第1层 土色
- 第2层 褐色
- 第3层 褐色
- 第4层 褐色
- 第5层 黑褐色
- 第6层 暗褐色
- 第7层 暗褐色
- 第8层 暗褐色
- 第9层 暗褐色
- 第10层 暗褐色



第9图 第309号竖穴住居迹平面图·出土土器拓影图



第10図 第310号竪穴住居跡平面図

重複 第317号竪穴住居跡が東側の床面を切り、また、第308号竪穴住居跡は、本住居跡の西側半分を覆って構築されている。

覆土 10層に区分できたが、自然堆積の状況である。1・2層は、標準土層 層に含まれる中掬浮石粒を若干含み、ほぼ標準土層 層上に比定することができる。各層とも粒径1~5

mm程度のパミスを含むが、8層が最も多く、10層が少ない。7層は粒径が8mmの大きなものも含んでいる。5・7層は黒褐色土を、6層は暗褐色土を、8・9層は黄褐色土を斑状に含んでいる。また、5層以下は硬くしめるが、特に9層が硬い。覆土上面の一部に第308号竪穴住居跡の貼り床が存在する。

形状 上場の径5m80cm、下場の径5m20cmのほぼ円形と考えられる。

壁 最も明瞭に壁高等を確認できたのは、セクションベルが残されていた30ラインで約60°の角度で立ち上がる60cmの壁高を確認した。しかし、第308号竪穴住居跡がこの上位に構築された関係で、残存する壁高は20～30cmであった。

床面 ほぼ平坦であるが、若干東側に傾斜し、その比高差は約20cmで、全般的に硬い。南西壁に接し、幅20～50cm、長さ3mの、一段高くなった部分が弧状にみられた。

ピット 31個検出したが、31を除き、他は柱穴と考えられる。大半は本住居跡のものであるが、25～30の何本かは第308号住居跡のものである可能性もある。

ピット 31は、床面精査後に検出されたもので、径が約1m30cmのほぼ円形で、覆土は全体的に固くしまっている。また、深さは約15cmで皿状を呈している。ピット内からは遺物は出土していないが、その覆土から、本住居跡以前のものと考えられる。

第310号住居跡ピット一覧

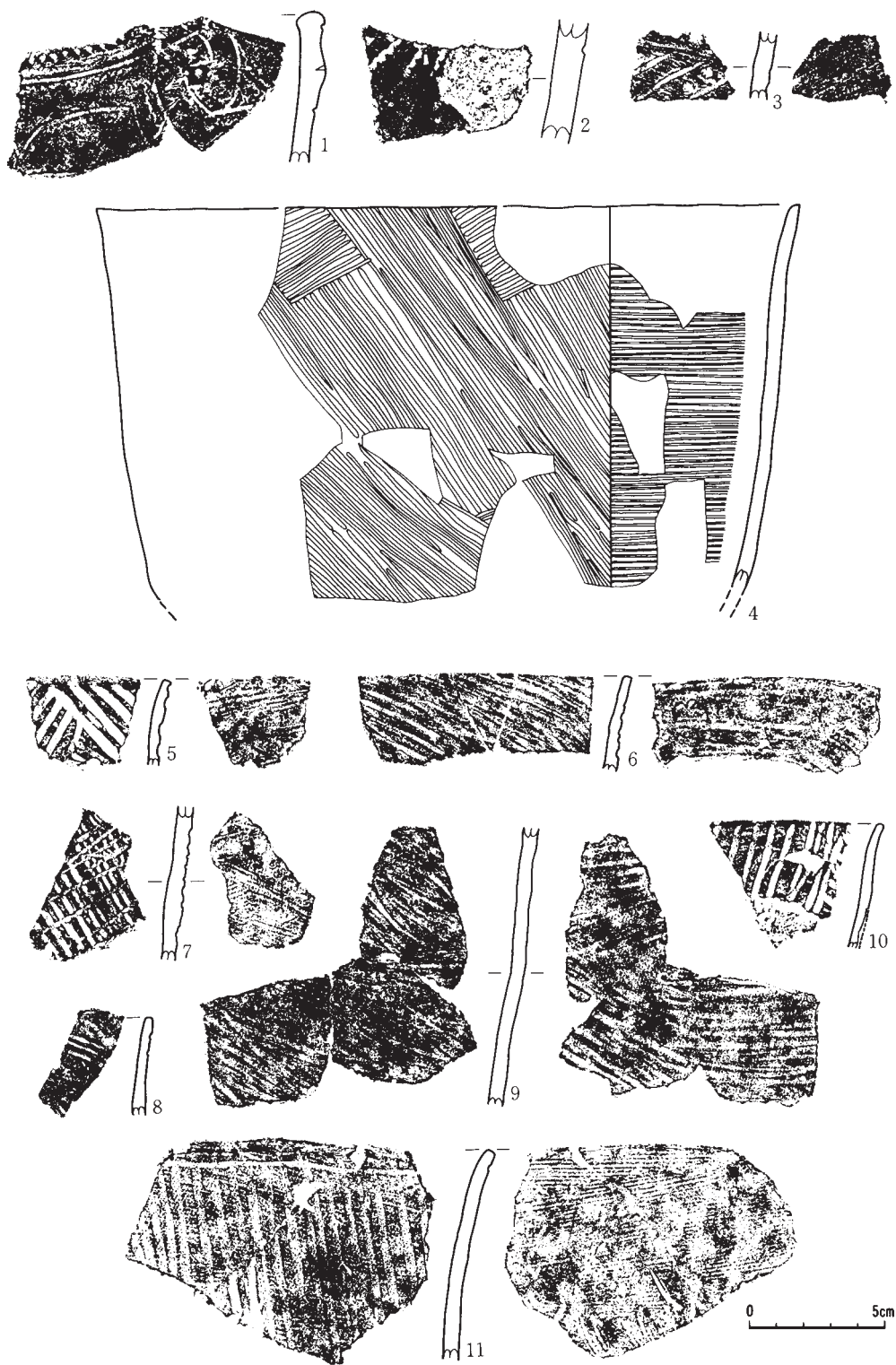
No	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
平面形	楕円形	円形	楕円形	楕円形	楕円形	円形	円形	楕円形	楕円形	楕円形	楕円形	円形	円形	円形	円形	楕円形	円形	円形	円形	円形	円形	円形
大きさ	18×15	27	20×15	20×14	29×21	15	18	27×14	27×20	24×18	14×9	17	14	16	14	24×20	21	21	22	15	18	11
深さcm	17	17	14	19	25	19	16	7	18	20	19	19	20	25	29	23	18	15	9	7	14	14
備考		斜			斜				斜	斜	斜				斜	斜						
No	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44
平面形	円形	円形	円形	円形	円形	円形	円形	円形														
大きさ	11	15	23	18	22	18	21	21														
深さcm	4	15	16	32	14	15	24	17														
備考		斜					斜															

出土遺物（第11図1～第13図30、第46図41～第47図46、第50図16～第51図23）

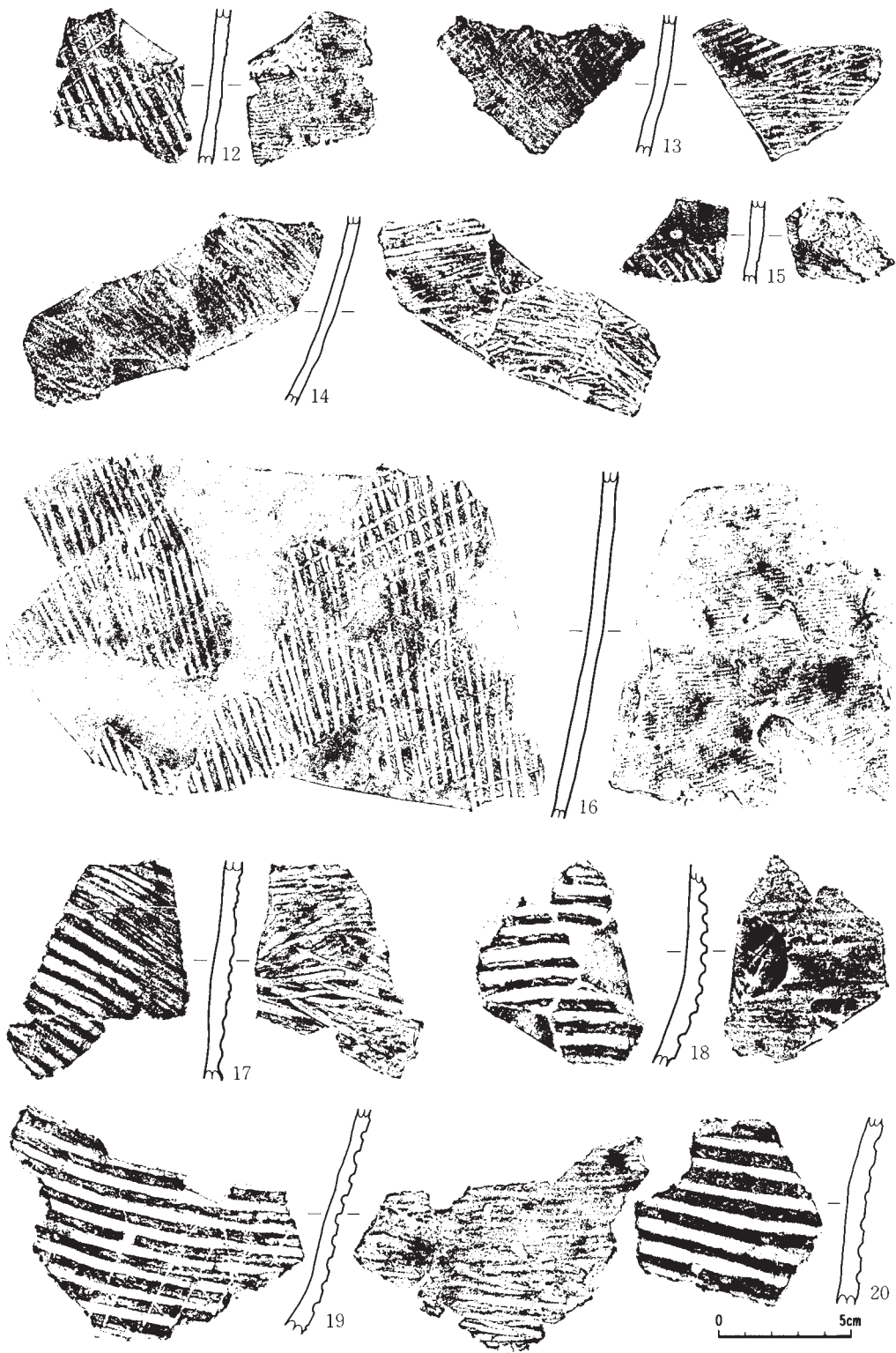
第群土器（1・2、物見台式）第群土器（4～16、27、29、ムシリ式）第群土器（17～21、25、30、売場群）第群土器（3、24、28、売場群）第群土器B類（22～24）が出土した。図上復原した4の一部は、第338号土壌から出土したものである。

石器は、剥片石器6点（第46図41～第47図46）と礫石器が8点（第50図16～第51図23）出土した。41は篋状石器であるが、主要剥離面、第1次剥離面とも完全に除去している。同42は、残核であろう。礫石器には、スリ石、石錘、石皿、凹石がある。

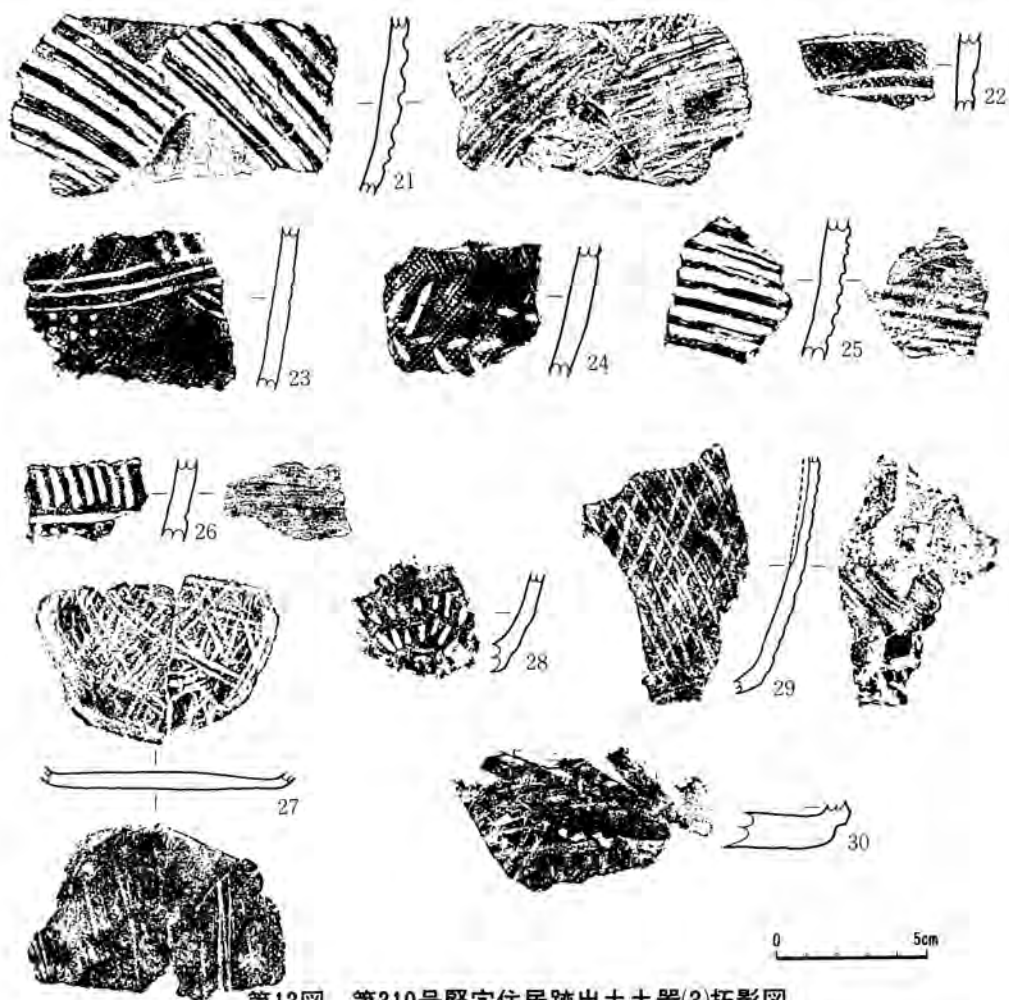
時期 第群・第群土器は覆土の上部から出土したが、第群・第群土器は混在状態で、断定はできないが、おおむね、ムシリ式のものといえる。



第11図 第310号竖穴住居跡出土土器(1)拓影・実測図



第12图 第310号竖穴住居迹出土土器(2)拓影图



第13図 第310号竖穴住居跡出土土器(3)拓影図

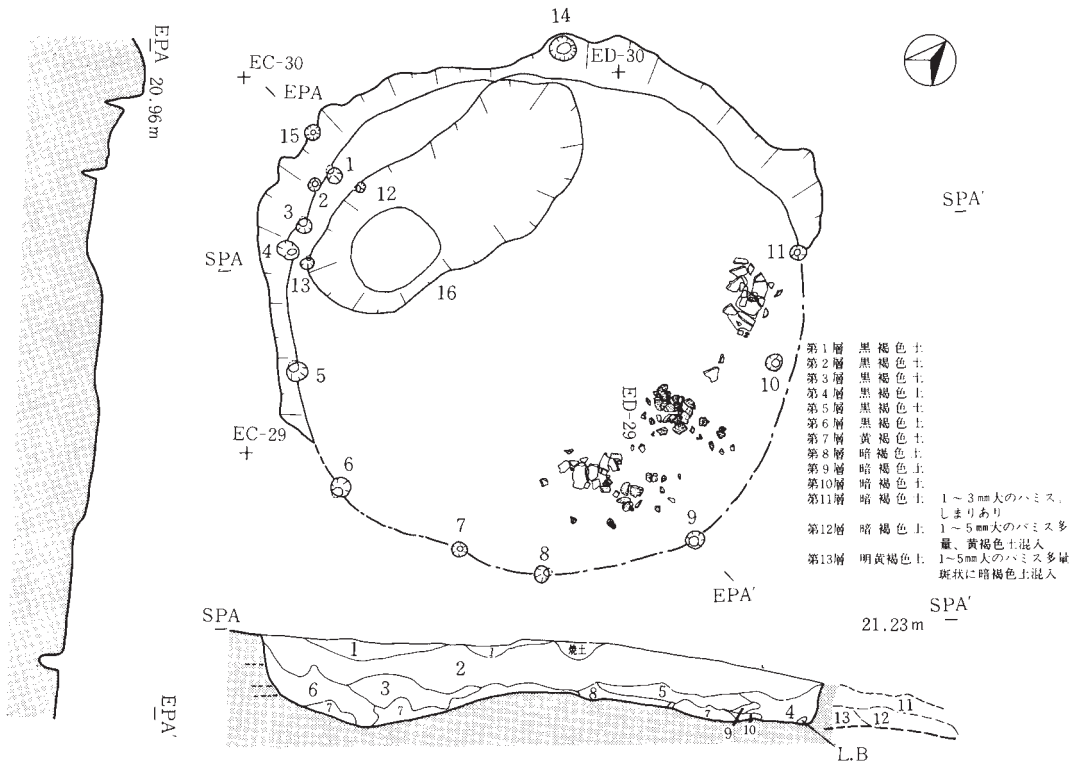
第311号竖穴住居跡

位置 EC - 29グリッドに位置する。

第307号竖穴住居跡の調査時に半円状の落ち込みを確認し、土層観察用に残されていたセクションベルトを検討した結果、住居跡であることを確認した。しかし、このセクションベルトにより東側では、遺構と認識しないまま第 層上面まで調査を進めたためプラン等は全く不明である。なお、住居跡と確認の後、第 層を精査し、本住居跡のものと考えられる柱穴を検出したが、不明瞭なものも多く、断定はできない。

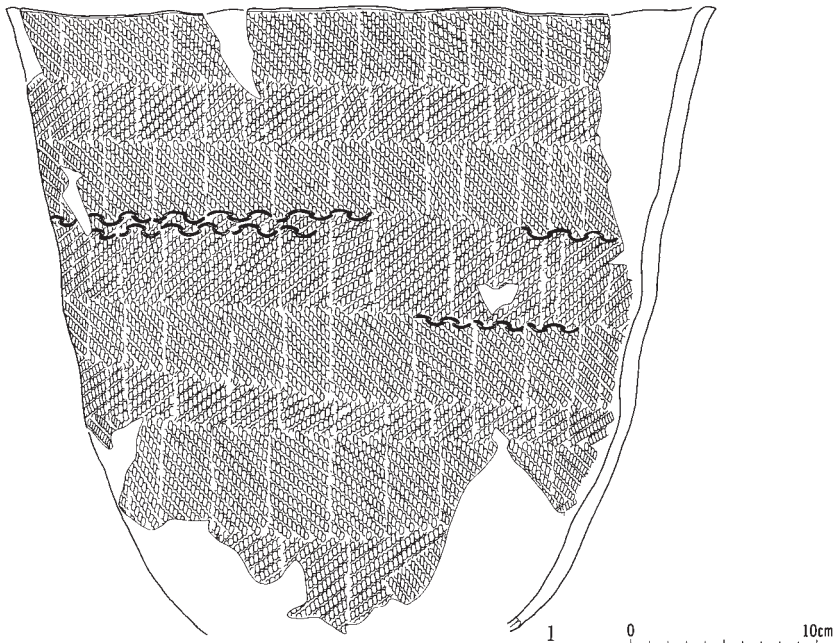
重複 第307号B住居跡と重複するが、その関係は不明である。

覆土 10層に区分できたが、ほぼ自然堆積の状況である。4層以下は全体的にしまりがあって固い。各層ともパミスを多量に含むが、1・8・10・11層がやや少なく、その粒子の大

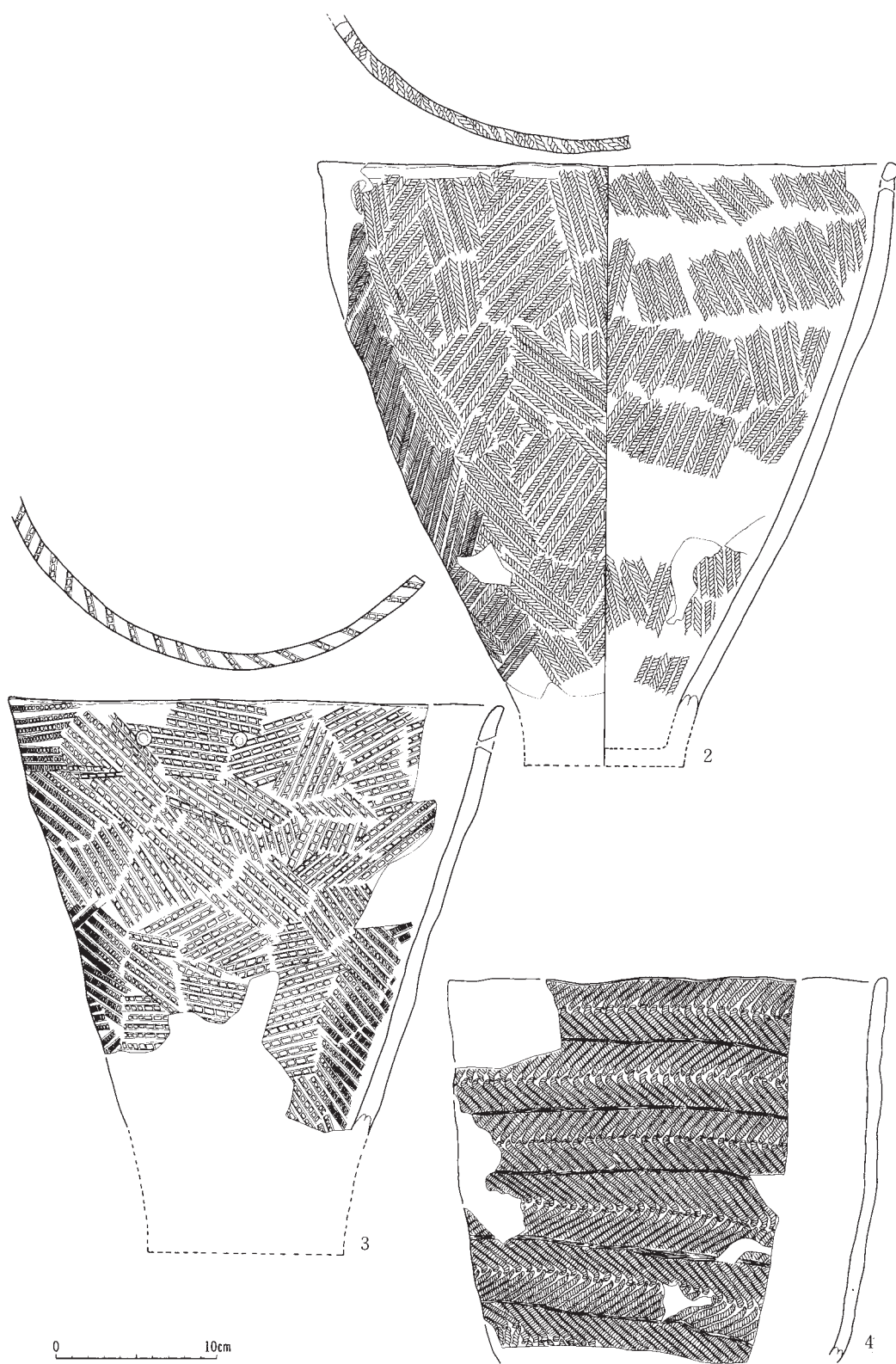


第14図 第311号竖穴住居跡平面図

0 2m



第15図 第311号竖穴住居跡出土土器(1)実測図



第16图 第311号竖穴住居跡出土土器(2)実測図

きさは1～5mmのものが一般的であるが、5層は1～3mm、4層が1～7mmである。また、4層は黄褐色土を斑状に含んでいる。覆土最上層に径約35cm、厚さが最大15cmの焼土が存在した。

壁 セクション面及び西壁側で、60°～90°の立ち上がりをもつ30～50cmの壁高を確認したが東側は不明である。

床面 東側へ約20cm傾斜するが、ほぼ平坦といえよう。なお、エレベーションは、柱穴検出後のものであり、本来の面よりは10cm前後下がっていると考えられる。

ピット 17個検出した。16以外は柱穴と考えられるが、8～10は不明瞭で、断定できない。

16は、径2m50cm×1m、深さ15cmの不整な長楕円形のピットである。その南側は、径60～70cmの楕円形戦に凹み、北側の面よりも約20cm低い。このピットが、本住居跡に伴うものか、重複するものかは不明である。

第311号住居跡ピット一覧

No	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	
平面形	円形	円形	円形	楕円形	楕円形	円形	円形	円形	円形	円形	円形	円形	円形	楕円形	円形	楕円形							
大きさ	13	10	11	17×15	17×14	16	12	11	15	14	13	10	11	21×19	11								
深さcm	18	16	14	14	12	35	28	16	18	13	22	22	23	26	34								
備考																							

出土遺物（第15・第16図）

住居跡と確認後は、第 群土器（早稲田 5 類）の微細な破片が若干出土しただけであるが、当初推定したプラン内からは、第 群土器（物見台式）から第 群土器まで種々出土している。その多くは小破片であるが、覆土の2層上面と同下面に相当する面から、各々2個体分の破片が出土した。そのレベル差は約20cmである。上位面から出土したものは第 群土器（第15図1、第16図4、長七谷地 群）に近似するものであるが、下位面から出土した土器は第 群土器（第15図2・3）である。後者は、本住居埋没過程で廃棄されたものと考えられ、前者は、ほぼ同層位の焼土とともに埋没後に残されたものと考えられる。

石器は出土していない。

時期 第 群土器（早稲田 5 類期）、ないしはそれ以前と考えられる。

第312号竪穴住居跡

位置 EC-27グリッドに位置する。昭和55年度の調査時に住居跡1軒の存在が推定されていたが（312号）、後にこれと並んで別の1軒が確認され（313号）、更に、調査が進展するにつれて、前者が重複している可能性が強くなった。このため再度セクション面を観察したところ、重複することが明らかとなり、新しい方を第314号竪穴住居跡とした。しかし、遺物は、



第17図 第312号竖穴住居跡平面図

すべて当初からの住居跡番号で取り上げた。なお、セクションラインの東側は昭和55年度の調査区域である。

重複 第314号竖穴住居跡に北側の壁を切られているが、床面は切られず、ほぼ同一面をなしている。

く覆土 8層に区分できたが、ほぼ自然推積の状況である。パミスの大きさは、5層が1～5mmとやや大きめであるが、混入量は1層が多い。4層は黒褐色土を斑状に含み、6層はロームの小ブロックを含む。7層は、ローム、黒褐色土、暗褐色土が混合し、固くしまっている。

形状 上場では地形の傾斜や重複の関係もあり、径5m20cm前後と推定されるが、下場は、径が4m20cmのほぼ円形である。

壁 確認することができたのは主に西側の壁で、約40～50°の角度で立ち上がっている。その高さは40～60cmであるが、セクション面の東側では4～5cmで、一部では全く検出でき

なかった。

床面 ほぼ平坦で、全体的に固くしまっている。中央からやや東寄りで、1 m28cm × 1 m15cm、深さ 6 cm前後のほぼ方形の浅い掘り込みを検出した。この底面は特に固くしまっていたが、焼土等は存在しなかった。また、この掘り込み周辺も非常に固く、たたきしめたような床面であった。

ピット 壁に沿って15個の柱穴を検出した。その径、深さとも20cm内外の明瞭なもので、北壁側の柱穴の間隔は密であるが、他はほぼ等間隔に並ぶ

第312号住居跡ピット一覧

No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	
平面形	楕円形	楕円形	楕円形	円形	楕円形	円形	円形	楕円形	楕円形	楕円形	楕円形	円形	楕円形	円形	円形								
大きさ	20×17	22×16	24×21	22	26×18	23	26	25×19	27×21	26×21	32×27	20	25×20	18	16								
深さcm	25	10	26	21	16	21	23	27	31	19	18	23	24	17	24								
備考		斜		斜																			

出土遺物 (第18図1～14、第47図49)

土器は第 群土器(1～4、物見台式)と、第 群土器(5～9、売場 群)、第 群D類土器(11～14)が出土した。図示したものは床面ないし、これに近いものである。

11～14は同一個体で、口唇部の外側、及びこれと平行に幅約 6 mmの低い隆帯を貼り付け、この上に貝殻腹縁による刺突列を施文している。また、この間の狭い文様帯に刺突が施されているが、その施文具は不明である。胴部は、貝殻腹縁による押し引き文、内面は条痕文である。

14は底部近くのもので、丸底に近似する尖底と考えられる。

石器は、石鏃が1点である(第47図49)。

時期 ムシリ 式、ないしはこれに近接した時期と考えられる。住居跡内からは、出土数は少ないが、ムシリ 式に含まれるものの中でも沈線が特に太いもの(第 群)だけが出土し、貝殻腹縁文を施文した土器との関係において注目される。

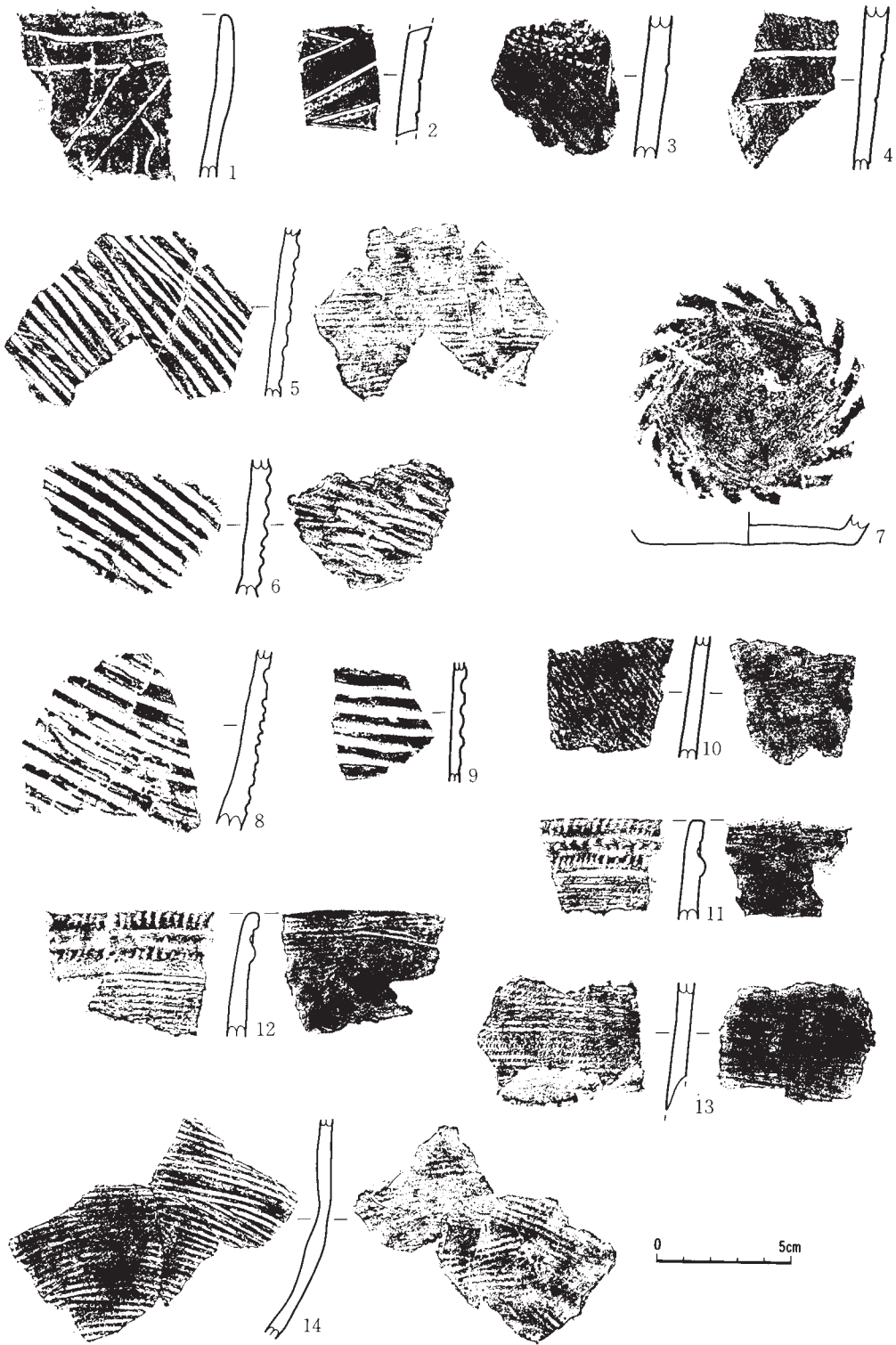
第313号竪穴住居跡

位置 EA - 26・27グリッドに位置する。

覆土 9層に区分できたが、自然堆積の状況である。パミス粒子の大きさは各層によって異なり、1～3層が1～10mmと大きなものを含み、4層が1～5mm、その他は1～3mmである。その混入量は、2・3層が特に多い。また、1層に若干の炭化物が含まれ、4層には黒褐色土が斑状に含まれている。

形状 長軸 5 cm20m、短軸は推定 4 m70cmで、隅丸方形に近い円形を呈する。

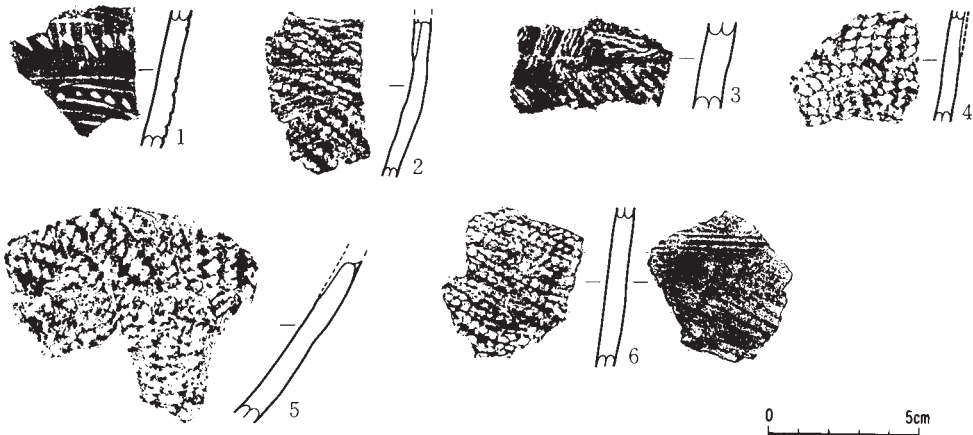
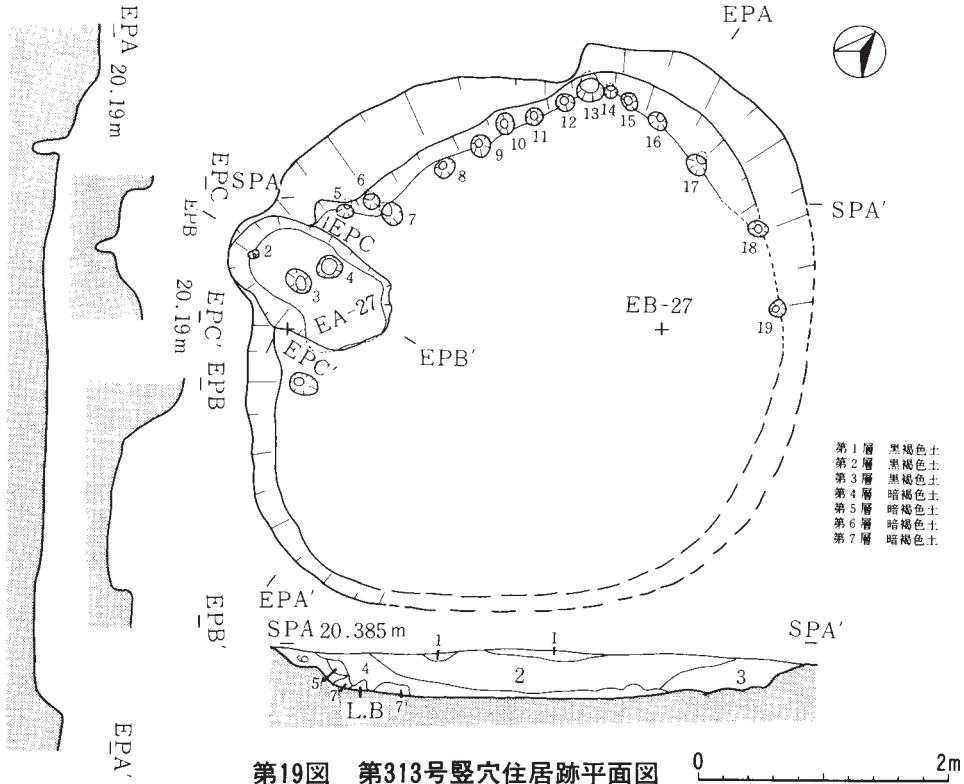
壁 壁高は20～30cmで、かなり緩やかな立ち上がりを示している。東壁から南壁にかけては昭和55年度の調査区域に含まれ、床面とともに確認し得なかった。



第18图 第312号竖穴住居跡出土遺物拓影图

第313号住居跡ピット一覧

No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
平面形	楕円形	円形	楕円形	円形	楕円形	円形	楕円形	方形	円形	円形	円形	円形	楕円形	円形	楕円形	楕円形	楕円形	楕円形	円形			
大きさ	23×17	8	23×16	20	13×11	14	18×16	16×13	15	16	13	15	22×19	10	15×12	16×13	20×16	16×12	13			
深さ cm	19	5	13	10	24	19	29	24	21	12	20	20	20	15	10	30	22	16	17			
備考					斜	斜	斜						斜	斜			斜					



ピット 西壁側にほぼ半周する壁柱穴を19個検出したものの、南側では、全く検出できなかった。この19個のなかには、極めて浅いものも含めたが、全般的に深く、明瞭なものが多い。住居内の中央部には検出されなかった。

床面 ほぼ平坦である。西側は八戸火山灰第 層を床面とし、固くしまっているが、東～南側では軟らかく、壁と同様確認できなかった。

重複 西壁側に、長軸を東西にとる長さ 1 m 38cm・幅87cm・深さ27cm前後の長楕円形の土壌が存在する。これは、住居跡のプラン・床面追求時に検出したもので、ピット 3・4 がこれを切っており、本住居跡よりも古い時期のものであることが判明した。しかし、この覆土からは、遺物が出土せず、その構築期は不明である。

出土遺物（第20図）

覆土や床面上から若干の土器が出土した。

1 は、第 群土器に相当し、横位の沈線に沿って付された劣截ないし多截竹管による刺突が特徴的である。内面にはかすかに貝殻条痕が施されている。植物性繊維は含まない。

2 は、R L の縄文を浅く施文したもので、第 群土器に含めておくが、器厚、胎土等多くの点で第 群土器に近似する。内面の接合部分に貝殻条痕文を施している。

6 は 2 と同様、L R を縦位回転した斜縄文が浅く施文され、内面には貝殻条痕文が施されている。器厚、胎土からは第 群土器に含まれるものに類似するが一応 群に含めておく。

3 は、胎土に若干の植物性繊維を含むが、第 群土器であろう。上半分に細い撚糸文が斜位ないし横位に施文され、下半は無節の斜縄文と思われる。

4 と 5 は第 群（赤御堂式）に相当し、床面より出土したものである。5 は底部にごく近いもので、器表面の上半が赤褐色、下半は炭化物等が付着し黒褐色を呈している。4 は剥落した器表面下にも縄文が施文されている。

石器は、出土しなかった。

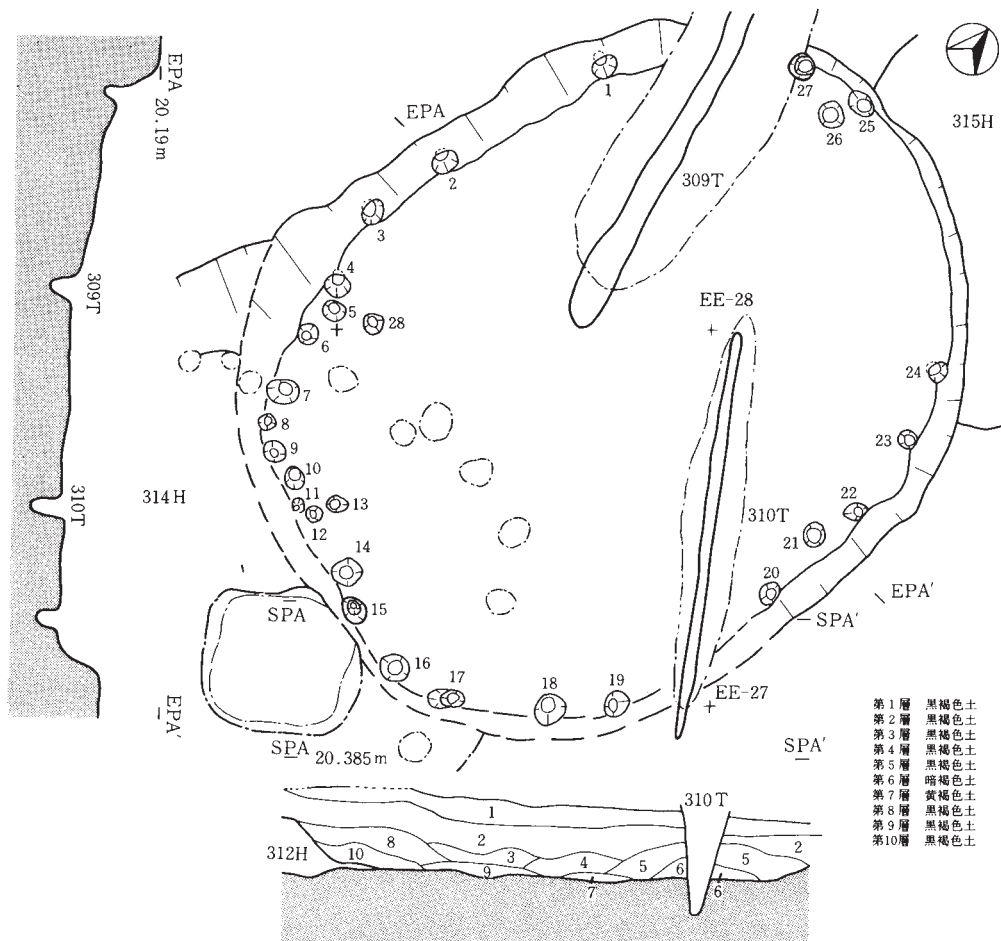
時期 本住居跡は、床面上の遺物から、赤御堂式期のものと考えられる。

第314号竪穴住居跡

位置 E D・E F - 27・28グリッドに位置する。

重複 第312号、315号竪穴住居跡を切っている。溝状ピットとの新旧関係は明瞭でないが、第309号、310号溝状ピットは、共に本住居跡より新しいものと考えられる。

覆土 10層に区分できたが、ほぼ自然堆積の状況である。各層ともパミスを含む。その粒子の大きさは 2 層が 1～5 mm、8 層が 1～10mmで、それぞれパミスを多量に含むが、他は 1～3 mmで、10層を除きその含有量は少ない。8層に若干の炭化物が含まれ、6層には黄褐色土が斑状に含まれている。覆土に焼土が 2 箇所存在したが、いずれも床面から浮いている。



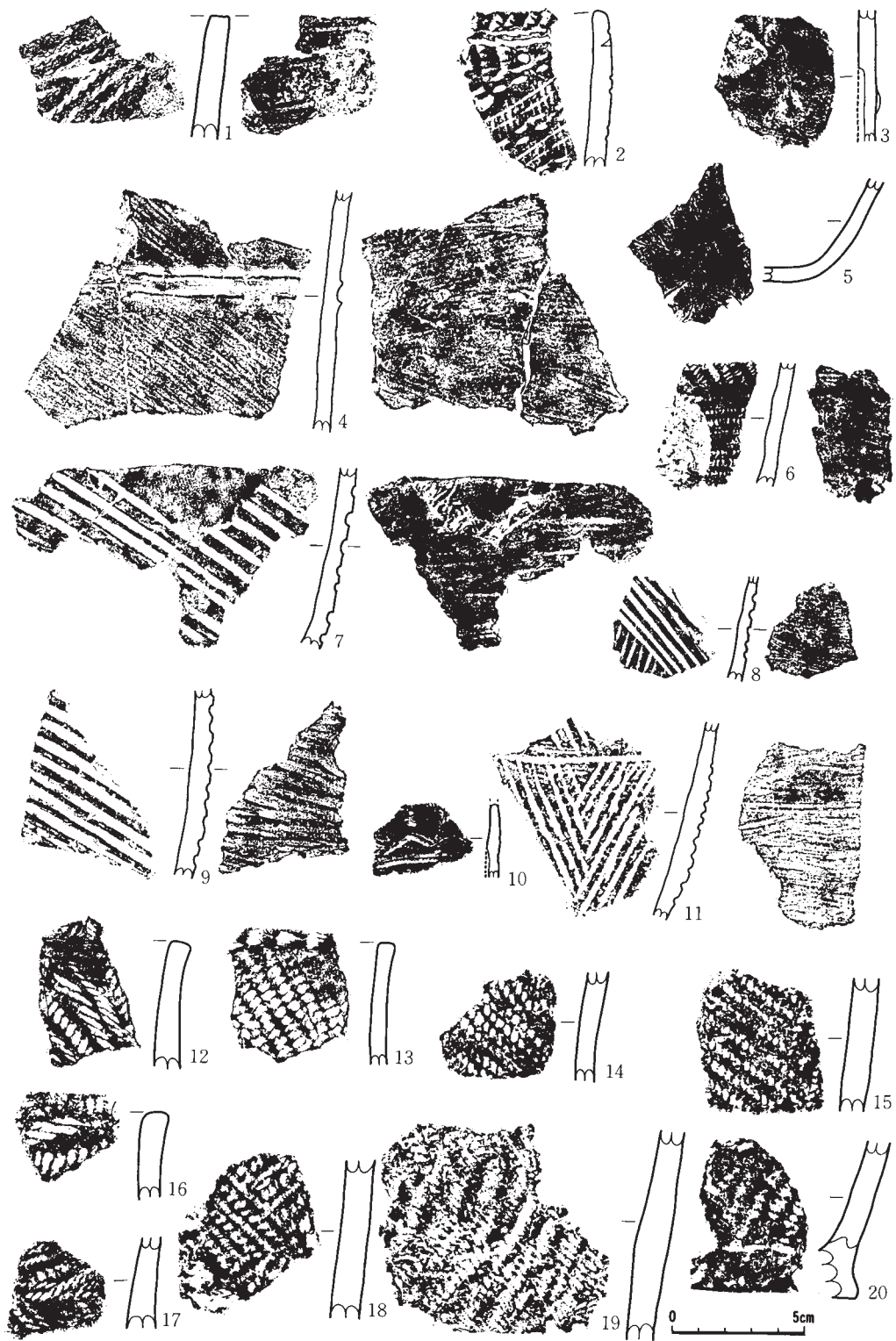
第21図 第314号竪穴住居跡平面図 0 2m

第314号住居跡ピット一覧

No	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
平面形	楕円形	楕円形	楕円形	円形	楕円形	円形	楕円形	円形	円形	円形	円形	円形	楕円形	楕円形	楕円形	円形	楕円形	円形	円形	円形	円形	楕円形
大きさ	21×17	21×17	20×16	20	19×7	16	25×18	14	17	16	10	13	17×14	25×23	24×19	24	29×15	25	20	16	18	19×15
深さcm	18	16	15	21	20	23	26	23	23	16	20	14	19	18	31	20	31	33	26	15	16	17
備考	斜	斜	斜	斜							斜											
No	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44
平面形	円形	楕円形	楕円形	円形	円形	円形																
大きさ	14	19×14	25×17	21	20	16																
深さcm	23	20	20	24	24	24																
備考		斜																				

1つは1m10cm×80cm、厚さ約20cmの不整円形、他の1つは第310号溝状ピットに切られているが、大きさは60cm×50cm、厚さ約15cmの半円状である。

形状 上場は、推定で長軸約6m、短軸約4m85cmで、下場は長軸5m70cm、短軸4



第22图 第314号竖穴住居跡出土土器拓影图

m20cmの、南北に長い楕円形である。なお、セクションラインの東側は、昭和55年度の調査範囲である。

床面 若干東側に傾斜するが、ほぼ平坦である。全般的に硬いが、たたきしめたような面は存在しなかった。

ピット 壁に沿って28個検出したが、すべて柱穴と考えられる。

出土遺物

土器（第22図1～20）は、約150点出土したが、すべて小破片である。第 群土器（1、螢沢AII式）？、第 群土器（2、物見台式）第 群土器（3～11、ムシリ 式）第 群土器（13・14、赤御堂式）第 群土器（12・15～20、早稲田5類）等各期のものが出土した。ただし、覆土の最上層からは、第 群土器（長七谷地 群）が数多く出土しているが、これは、ある一定のレベルで住居跡外にも広がっているため、遺構外の遺物として扱った。

1の施文具は貝殻腹縁と考えられるが断定できず、また、その施文手法も明らかでない。

3と4は幅約5mmの細隆起線をもつもので、3は口縁部からやや斜位に垂下する細隆起線と口縁に平行な細起線をもつが、いずれも剥落している。4は、口縁と平行な2本の細隆起線をもつもので、胎土に多量の金雲母を含む。

石器（第47図47・48・50～59、第51図24～第52図37）

石器は、石鏃、石匙、不定形石器等の剥片石器類と、石斧の破損品、スリ石、敲石等の礫石器類が出土している。

時期 早稲田5類期と考えられる。

第315号竪穴住居跡

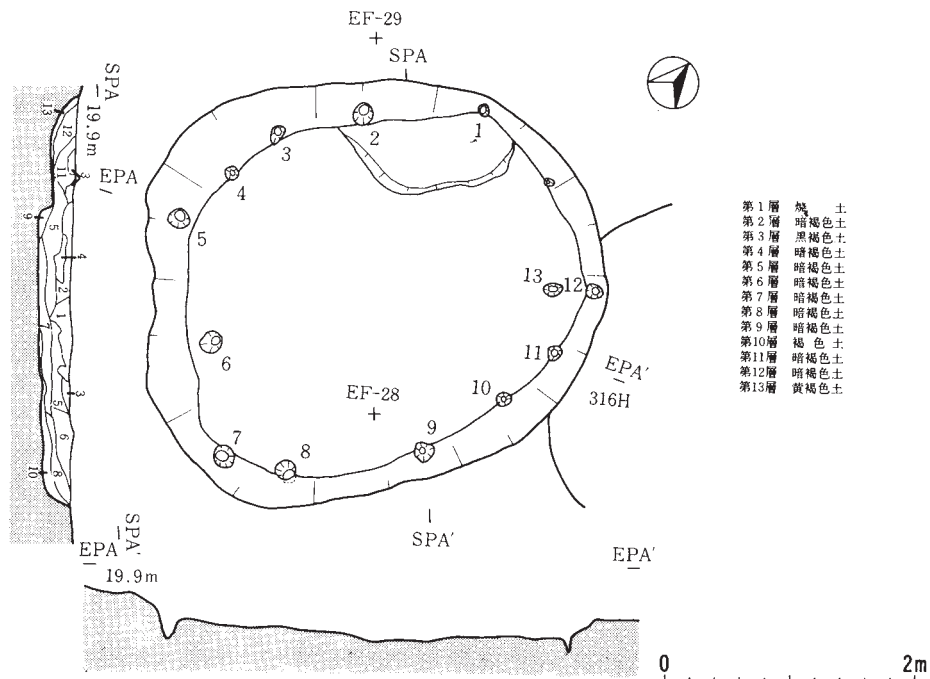
位置 EE・EF - 28グリッドに位置する。

重複 第314号竪穴住居跡が南西壁の一部を、また、第316号竪穴住居跡が北東壁の一部を切っているが、どちらも床面には達していない。

覆土 13層に区分できたが、自然堆積の状況である。パミス粒子の大きさは、2層と8層が1～5mmで、他は1～3mmである。混入量は2層のみ多量に含み、他は少量ないし微量である。また、2層と4層には黒褐色土が、12層には黒褐色土と灰黄褐色土が斑状に混入している。焼土が2箇所存在するが、いずれも床面から15cm前後浮いている。大きさは、1m×50cmで厚さ10cmのものと、径約30cmで厚さ約10cmのものである。

形状 上場で長軸3m82cm、短軸3m34cm、下場で長軸3m20cm、短軸2m75cmで長楕円形を呈する。

壁 一部に70°前後の角度で立ち上がる部分もみられるが、多くは40°～60°で比較的緩やかに立ち上がる。西側の壁は20～30cmの壁高を確認したが、東側の壁は、傾斜地の下方に位置し



第23図 第315号竖穴住居跡平面図

第315号住居跡ピット一覧表

No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
平面形	円形	円形	楕円形	円形	楕円形	円形	円形	円形	円形	円形	円形	円形	楕円形	円形								
大きさ	9	17	16×11	11	17×15	19	17	17	17	12	12	13	16×11	7								
深さ cm	9	7	8	5	15	16	14	14	14	13	20	6	9	11								
備考									斜													

ため、5～10cmの壁高を確認するにとどまった。

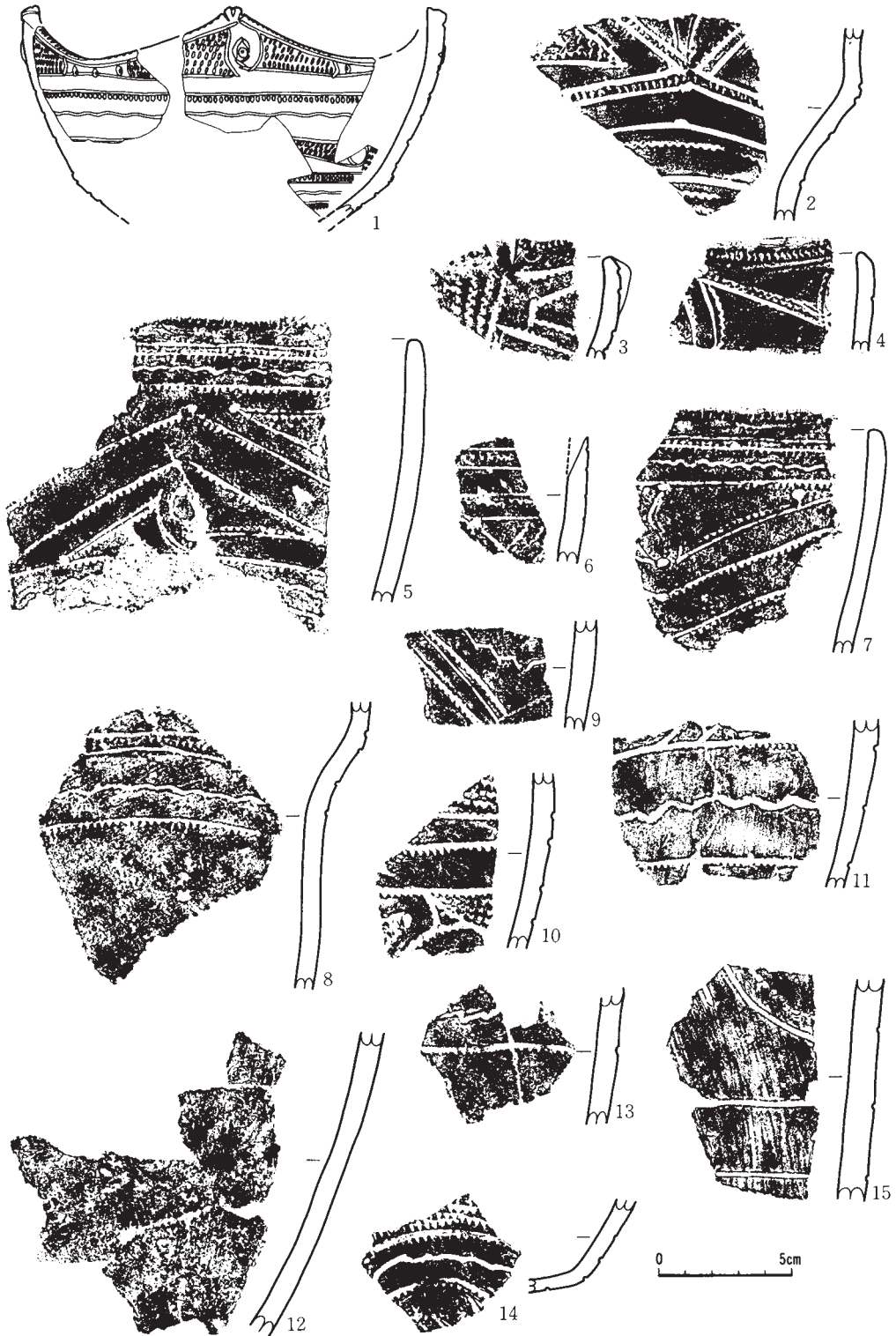
床面 部分的に硬いところもあるが、たたきしめたような面はみられなかった。全体的に緩やかに東側に傾斜し、約10cmの比高差はあるが、ほぼ平坦といえる。北西壁に接し、1m 30cm×60cmの1段高くなった部分がみられたが、この面も床面と同様硬いとはいえない。

ピット 壁に沿って12個、長軸上の壁から若干離れて2個の計14個を検出したが、これらは柱穴と考えられる。

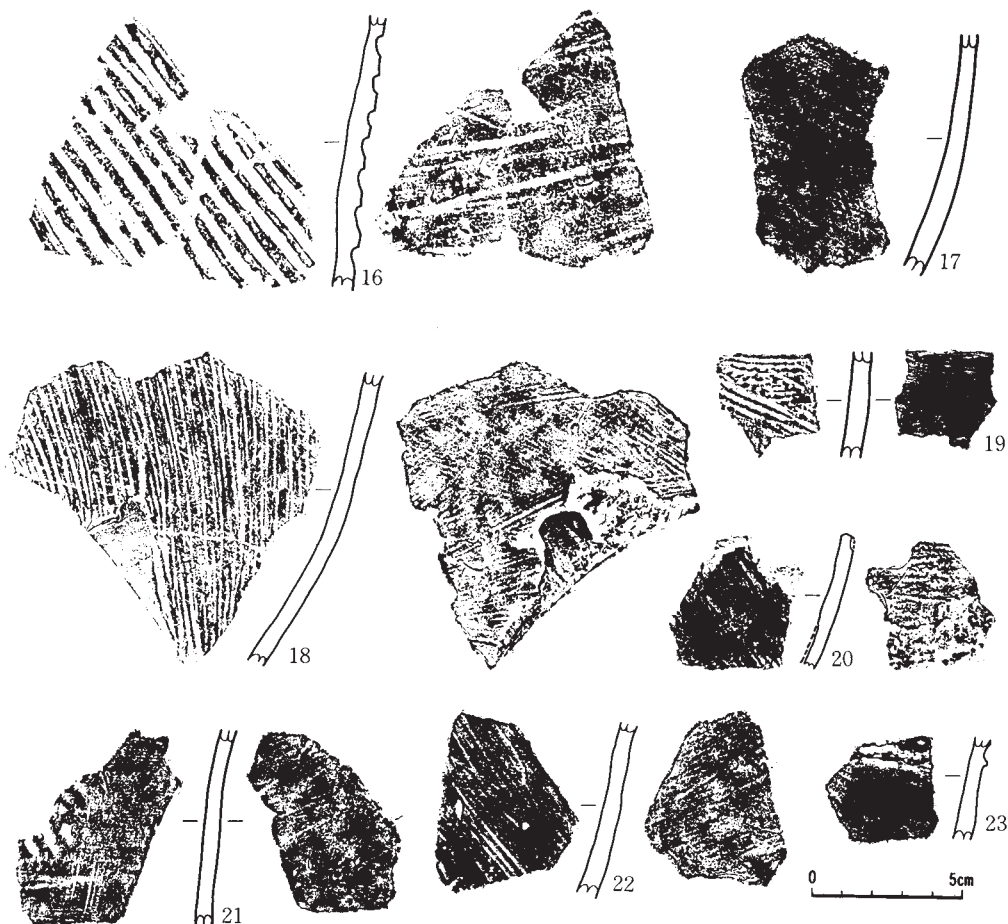
出土遺物

土器(第24図・第25図)は、第 群土器(第24図、物見台式)と第 群土器(18・20・23・ムシリ 式)、第 群土器(16、売場 群)、第 群D類土器(17・21・22)、同E類土器(19)が出土した。

1は、4波状口縁をもつ小形の土器で、沈線で区画した三角形等の内部を鋭く細かな刺突文



第24图 第315号竖穴住居跡出土土器(1)拓影・実測図



第25図 第315号竪穴住居跡出土土器(2)拓影図

で充填しているが、貝殻腹縁文は全く用いていない。14は、平底状の底部片である。21は絡条体圧痕文が施文されている。なお、5と7、及び8と12は同一個体である。

石器は、石匙（第48図60）、スリ石（第52図38）、石錘（第52図39）が各1点出土した。

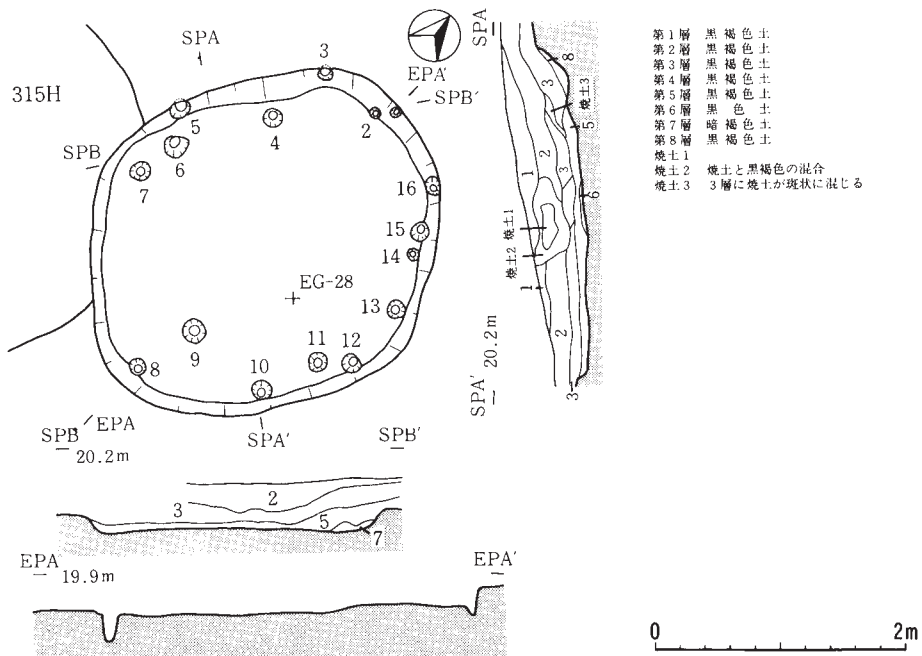
時期 出土土器のなかでは物見台式がやや多いものの、床面上には上記の各類がみられ、特定し得ないが、第 群のD類やE類が関連するかもしれない。

第316号竪穴住居跡

位置 EF・EG - 28グリッドに位置する。

重複 第315号竪穴住居跡の北東壁の上部を、極くわずかに切る。

覆土 焼土を除き、9層に区分できたがほぼ自然堆積の状況である。1・2層は、標準土層第 層の中位にほぼ相当する。パミスの大きさは、1層と3層が5mm、他は3mm前後



第26図 第316号竪穴住居跡平面図

第316号住居跡ピット一覧

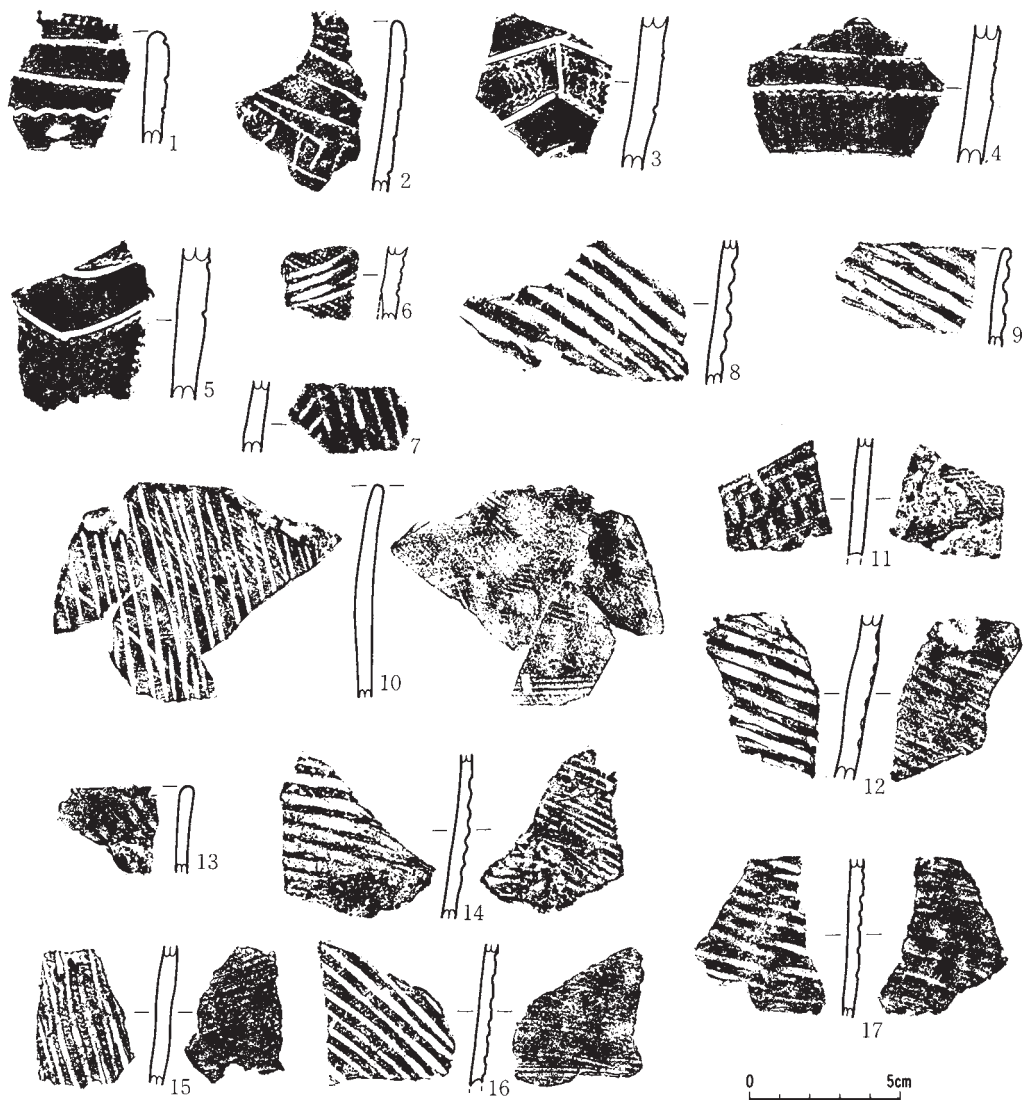
No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
平面形	円形	円形	楕円形	円形	楕円形	円形	円形	円形	円形	円形	円形	円形	円形	円形	円形	楕円形						
大きさ	9	8	9×13	16	13×17	18	16	13	19	16	13	14	15	9	14	12×16						
深さcm	10	9	9	14	13	17	15	11	13	15	11	12	11	9	10	5						
備考																						

であるが、その混入量は全般的に少なめで、6層はパミスを含まない。焼土は2箇所に認められたが、いずれも床面から20cmほど浮いている。焼土1は、径が約60cmの不整な円形で、厚さは約30cmであるが、中心部が焼土、その周辺は焼土と黒褐色土との混合である。この焼土は覆土の第2層を切っているが、掘り込んだ形跡は認められなかった。焼土2は、範囲が40×20cmと小さく、厚さも7cm程度で、焼土のブロックが斑状に混じっていることから、投げ込まれたものと思われる。

形状 上場が径2m70cm～2m80cm、下場が径2m40cm～2m60cmの隅丸方形に近い円形である。

壁 西側で高さ10cm前後の壁を確認することができたが、他の住居跡に比べて、掘り込みが極めて浅い。このため東側の壁は辛うじて確認できた部分が多い。

床面 東側へ緩やかに傾斜、その比高差は約10cmである。床面は幾分硬いものの、た



第27図 第316号竪穴住居跡出土土器拓影図

たきしめたような面は認められなかった。

ピット 壁ないし壁に沿って11個、やや内側に5個の柱穴を検出したが、深いもので17cm、おおむね12cm前後のものが多く、全般的に浅い。

出土遺物

土器(第27図)は、覆土の1・2層(標準土層)から第 群土器(早稲田5類)が出土したが、3層以下からは第 群土器(1~5、物見台式)、第 群土器(7~17、ムシリ式)、第 群B類土器(6)が出土している。

8、9は第 群土器に類似するが、器厚や沈線の深さ等から、第 群に含めておく。

石器は、不定形石器（第48図61）と石錘（第53図40）が各1点出土した。不定形石器は、分厚い不定形は剥片を素材としたもので、打点側の背面を調整した搔器である。

時期 ムシリ 式期と考えられる。

第317号竪穴住居跡

位置 EE - 29グリッドに位置する。

重複 第310号住居跡を切り、第309号溝状ピットに一部切られている。

当初、第309号溝状ピットを、不明瞭ながら中撒浮石粒が混じった、黒褐色土の落ち込みとして確認し、精査したところ、ピット北端部の開口部や底面が予想したプラン以上に大きく延び、更に、覆土の上部から土器が多量に出土し、焼土も入り込んでいた。

このため、他の遺構と重複している可能性も考慮し、セクションベルトAラインの東側周辺を精査したところ、復原可能な土器が約3個体分出土したが、その一部は溝状ピットの開口部に散在していた（セクションbの4層から7層にいたる破線が、土器の出土レベル）、また焼土は土器の下位にあって、溝状ピットに流れ込んだ状況を示すものと、ピット内に捨てられた状態のもの等が存在する。したがって、溝状ピットは、復原可能土器や焼土より以前に存在したことが判明し、更に、セクションベルトBラインの15層下面を床面とする住居跡の存在が推定された。この住居跡については、後に第310号住居跡の床面を追求していた際、ようやく西壁側のプランを確認することができた。

覆土 9層に区分できたが、ほぼ自然堆積の状況である。ただし、1層は、やや不自然で、住居埋没過程において再度掘り込まれた痕跡とも考えられる。

2層が1～5mmの粒子のパミスを多く含むほかは、全体的にパミスの混入量は少ない。

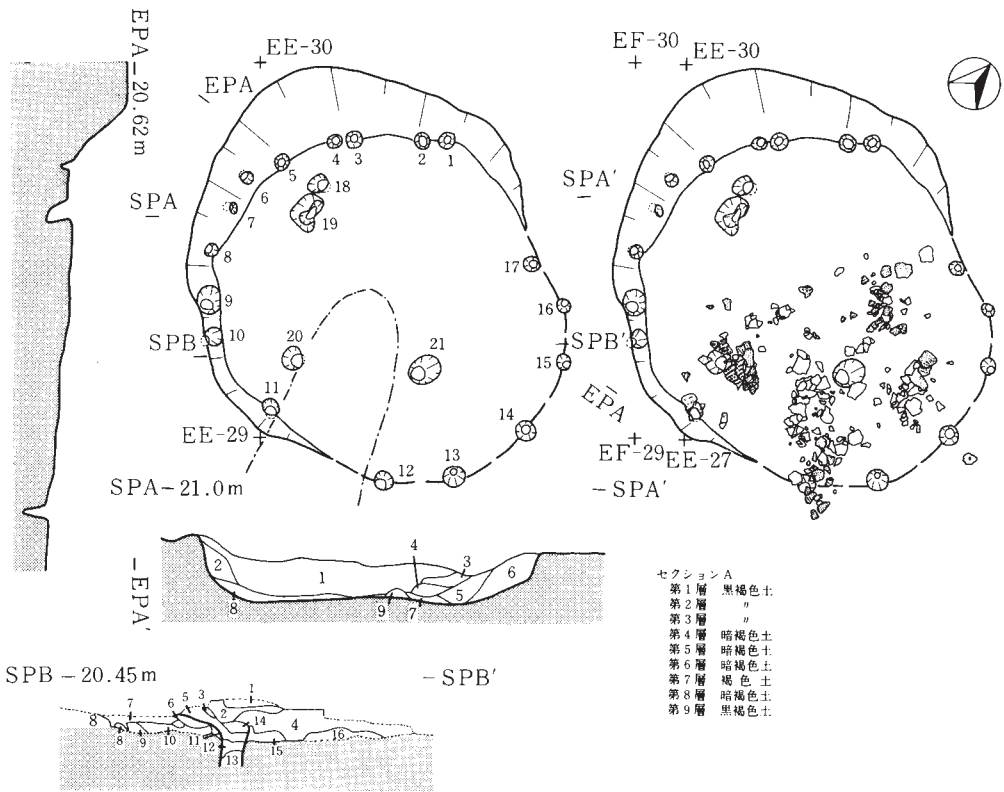
形状 柱穴の配列から推定すると、下場で、長軸2m90cm、短軸2m60cmの楕円形に近い円形と考えられる。

壁 西側で、45°～50°の角度で立ち上がる高さ40cmの壁を確認したが、東側では全く検出できなかった。

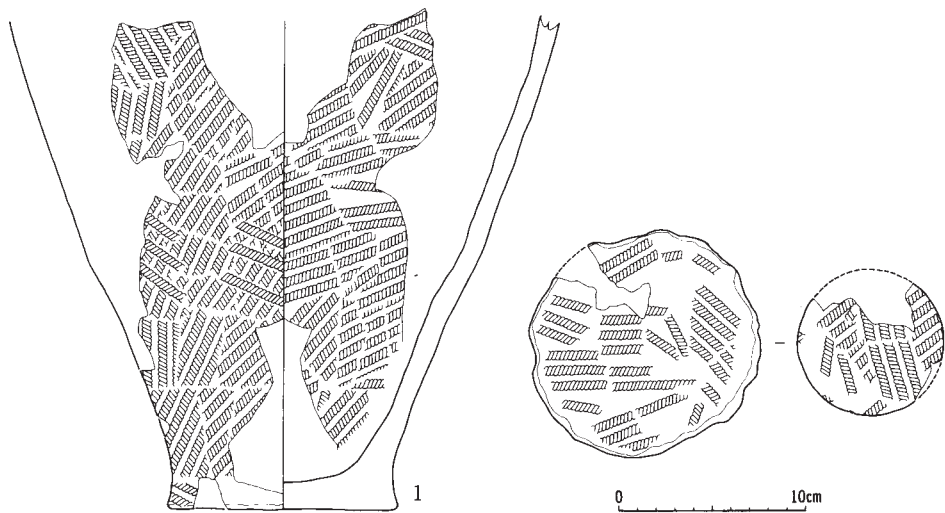
床面 西から東へ緩やかに傾斜する。その差は約20cmであるが、本来は平坦ないし5～10cm程度の差であろう。たたきしめたような硬い面は認められなかった。

第317号住居跡ピット一覧

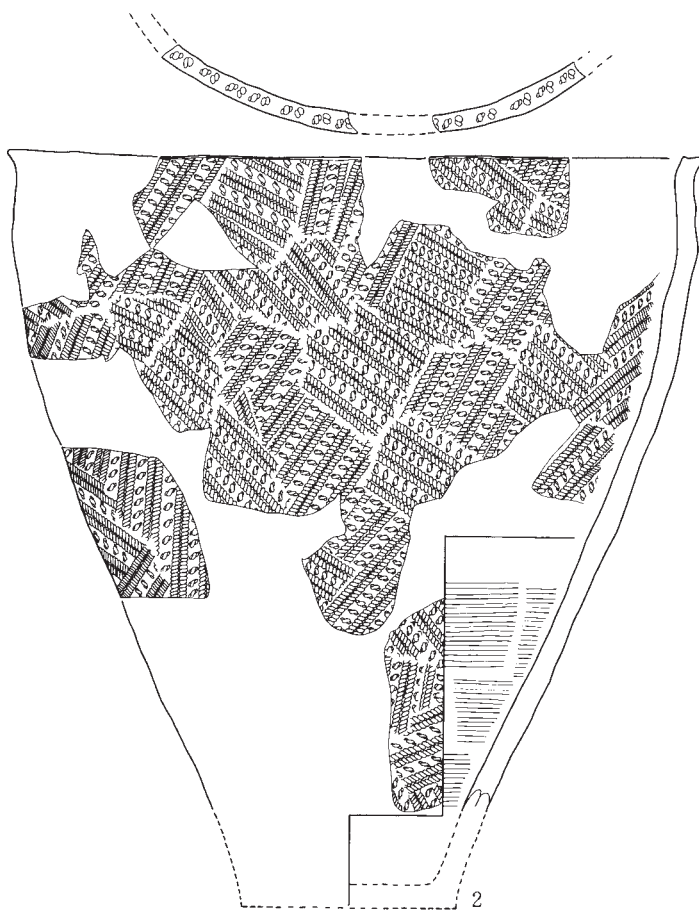
No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
平面形	円形	円形	円形	円形	円形	円形	楕円形	円形	楕円形	円形	楕円形	円形	円形	円形	円形	円形	円形	楕円形	不整形 方形	円形	楕円形	
大きさ	13	13	12	12	11	10	7×10	12	18×22	13	11×15	15	17	14	12	10	12	14×18	23×29	18	21×27	
深さcm	14	13	15	15	9	18	16	15	15	20	15	17	21	25	22	17	12	17	17	18	12	
備考							斜	斜	斜		斜	斜										



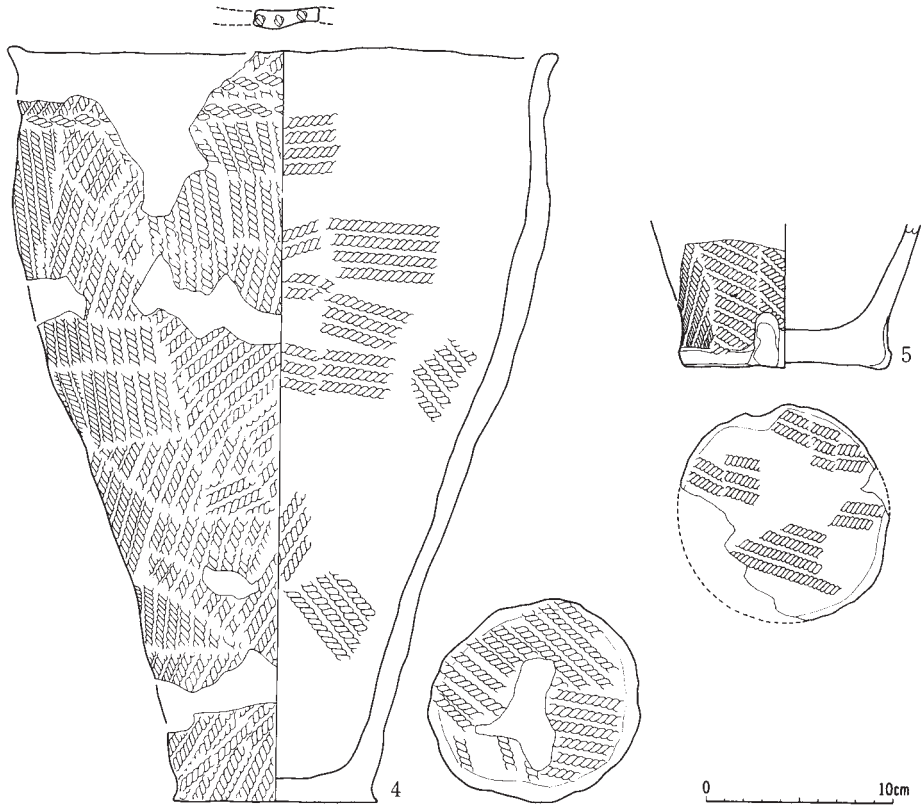
第28図 第317号竖穴住居跡平面図



第29図 第317号竖穴住居跡出土土器(1)実測図



第30图 第317号竖穴住居迹出土土器(2)实测图



第31図 第317号堅穴住居跡出土土器(3)実測図

ピット 21個検出した。そのうち17個は壁柱穴で、内側の4個は支柱穴と考えられる。

出土土器 (第29図～第32図)

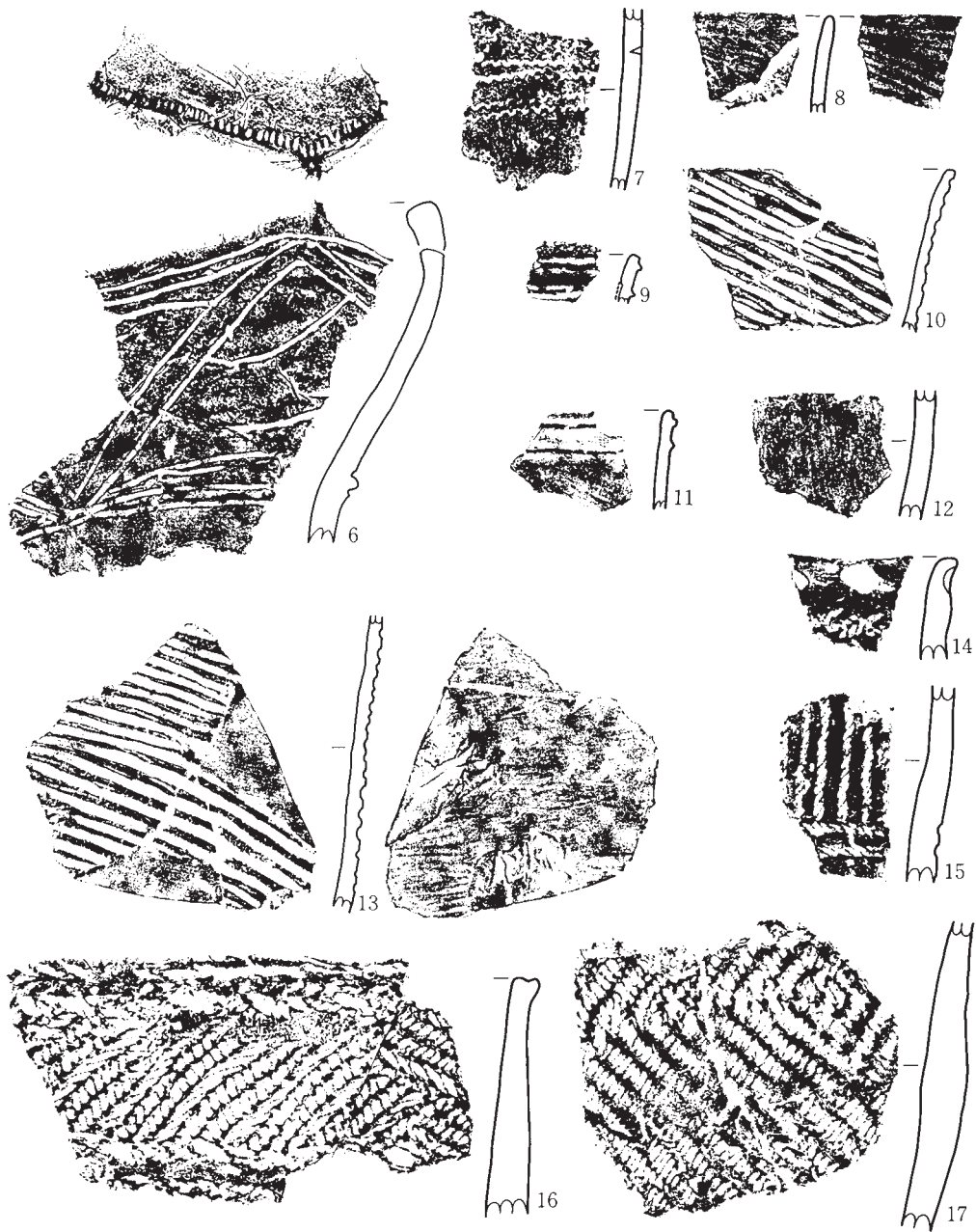
第 群土器 (6・7・12、物見台式)、第 群土器 (8～10・13、ムシリ 式)、第 群土器 (1～5、14～17、早稲田5類) が出土した。

6は、貝殻腹縁文を用いず、沈線文と刺突文で文様構成したものである。7は、6とは逆に沈線文を用いず、貝殻腹縁文と刺突文で文様を構成している。

9・11は同一個体で、口縁と平行な微隆起線文をもつ土器である。

14は、口唇部直下に指頭圧痕と押圧縄文を巡らせている。15は、口縁部近くの破片で、横位と縦位の押圧縄文で文様を構成している。16は、1段R縄2本と同L縄1本を左に不完全に撚り合わせた綾形状縄文で、同一原体を用いた押圧縄文が口唇部上端と口唇部直下に各1条、また、胴部文様帯との区画として2条施文されている。12は、0段多条による結束第1種羽状縄文を施文している。

1は、器面の内外・底面とその内面にも縄文を施文したものである。



第32図 第317号竪穴住居跡出土土器(4)拓影図

2は、LRとRLの縄を右撚りにした直前段合撚の原体を用い、全体的にやや乱雑な菱形を構成している。内面の胴部下半には、横位の条痕が施されている。この胴下半部の破片は、第308号住居跡の西壁側のほぼ中央部付近から出土したもので、上半部とは直接接合していない。

3は、L縄2本とR縄1本を右に若干撚り合わせた綾杉状縄文の原体を用い、口縁部は右下がり、左下がりの押圧縄文をそれぞれ10条近く施文して鋸歯状を構成し、胴部では横位に10数段施文している。本群土器の中で、このように器面全面が押圧縄文によるものはまれである。

4は、LRの斜縄文で、下半部は横位回転が主体であるが、上半部の回転方向は一定していない。器内面は、口縁部直下に約20cm幅で横走る縄文帯を、次に5cm幅の無文帯を設け、更に約10cmの縦位回転施文による縄文帯を設けている。口唇上端には、同一原体の末端による刺突を施している。

5は、底部破片で、O段多条のLRの斜行縄文で羽状を構成している。極くわずかに上げ底で(2mm程度)底部周縁は外側に張り出し、その周縁の4箇所には、底面側から胴部側に指で引きずった幅広の指頭痕が施されている。

石器(第48図62~65、第53図41)

石鏃、石槍、石匙の破損品等及び、石錘が各1点出土した。石槍(第48図62)は、先端部を若干欠損している。先端部側の最終調整は、左側縁が表面のみ、右側縁が裏面のみ行われている。

時期 西壁側の床面上から物見台式やムシリ式とともに早稲田5類の小破片が数片出土したことから、本住居跡の構築時期も早稲田5類期と考えられる。また、溝状ピット上に散在した土器や、復原できた土器も同類のものである。したがって、溝状ピットも、早稲田5類期のもので、住居廃絶後の間もない時期に作られ、その後土器が廃棄されたものと考えられる。

第404号竪穴住居跡

位置 DN-53グリッド及びその周辺で検出した。第1層上面で径2mほどの黒褐色のシミ状の落ち込みを確認したが、他の縄文時代の各遺構と様相がかなり異なることから、住居跡の遺構とは考えていなかった。しかし、この黒褐色土の上面から日計型押型文が出土したため、セクションベルトを設けて約50cm掘り下げたところ、堅くしまった床面を検出し、住居跡であることを確認した。

覆土 15層に区分できた。各層とも1~3mmないし1~5(2・3・5・13・15層)のパミスを含むが、特に、2・4・5・8・11~13は多量に含んでいる。また、各層とも非常に固くしまり、粘性もある。

形状 東西にやや長い楕円形で、長軸5m30cm、短軸4m70cmである。

壁 地形の傾斜と同様、北側が高く50cm前後の壁高で、全般的に60°ぐらいの立ち上がりを示している。ピット4と21から南側では低く、同1と23の間は明瞭でない。

ピット 30個検出したが、形状や大きさは様々である。このうち、壁柱穴は23個検出された。残りのピットのうち、26は、中心からややずれるものの、柱穴と考えられるが、その他

はごく浅く大きなもので、柱穴とは考えられない。

床面 ピット 1 と同22を結ぶラインの北側は、八戸火山灰第 層を床面とし、固くしまっている。全体的に南側へ緩やかに傾斜し、20cmほどの比高差がある。

第404号住居跡ピット一覧

No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
平面形	円形	楕円形	楕円形	円形	楕円形	円形	楕円形	円形	円形	円形	円形	円形	楕円形	円形	楕円形	楕円形	楕円形	楕円形	円形	円形	円形	円形
大きさ	14	16×13	23×18	12	26×18	15	15×9	12	15	14	13	11	9	13×8	13	10×7	9×7	14×11	10	13	14	13
深さcm	11	10	8	15	12	16	14	9	14	25	24	19	12	9	14	12	14	17	13	14	15	8
備考																						斜
No.	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44
平面形	円形	楕円形	楕円形	楕円形	楕円形	楕円形	楕円形	楕円形														
大きさ	11	25×17	60×20	50×40	87	30×27	40×32	80×40														
深さcm	12	12	16	18	11	6	10	10														
備考																						

重複 南西壁側に、長軸 2 m10cm、短軸 1 m10cm、深さ40cmの土壌を検出し、そのほぼ中央部に更に径12cm、深さ12cmの小ピットがみられたが遺物は出土しなかった。住居の床面を精査中に検出したもので、その覆土の状態から本住居跡より古いものと思われる。

出土遺物

土器（第34図、第35図）

すべて第 群土器（日計式）で、極めて微細なものを含めると約180点出土した。遺物は、確認面から床面に至る住居跡のほぼ全面から出土したが、セクションラインから北側はやや少なめであった。床面から出土した遺物は24を含め13点である。

1・2 は日計型押型文で、重層 字状文である。1 は確認面からの出土資料で、調整は器面の内外とも特に良好である。

上記 2 点以外は、すべて縄文を施文したものないし無文である。同一個体の破片も多いが、あまり接合せず、形状等を知ることのできるものはない。

3～8 は口縁部文様帯に口縁と平行な沈線を施文したものである。3・4 は口縁部片で、口唇部は胴部側に比べて薄く仕上げられ、4 にはスリットが加えられているが、3 にはない。6 と 7 は同一個体と考えられるもので、浅いが太い沈線を 5 条施文している。9は無文土器と思われる。

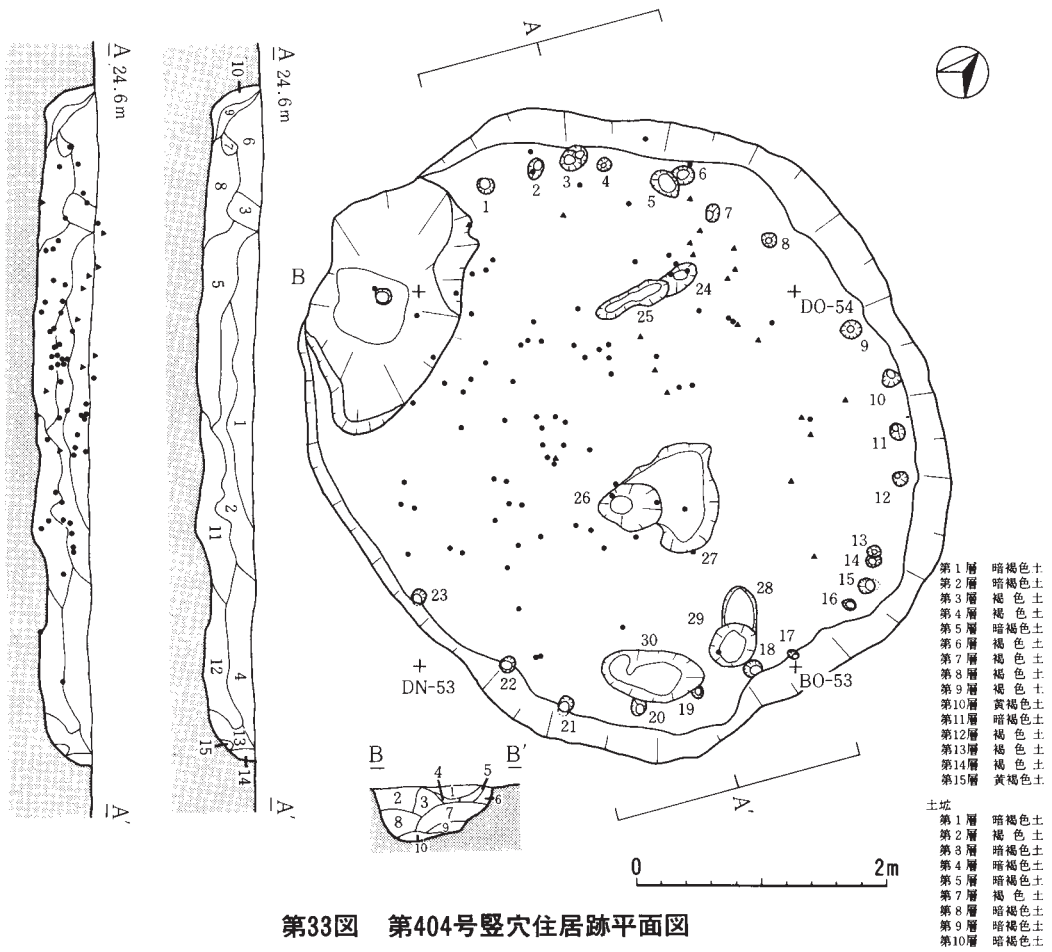
胴部の施文は、斜行縄文、羽状縄文（11・12・18）、撚糸文（13・26）、附加条（16・27・28）が等がある。なお、撚糸文は単節LRを軸に巻いたもので、羽状縄文は結束しない異原体による。

底部は丸底ぎみの尖底と考えられる。13・25・29～31が底部近くの破片で、擦痕等の調整痕をもつが無文のものが多い。

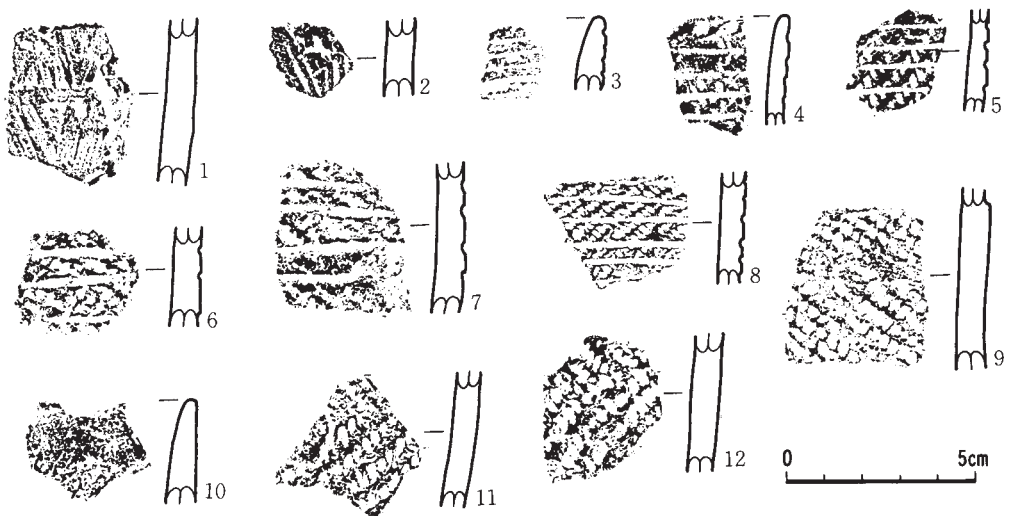
石器は、敲石とスリ石が各 1 点出土した（第53図42・43）

時期 日計式期の住居跡である。

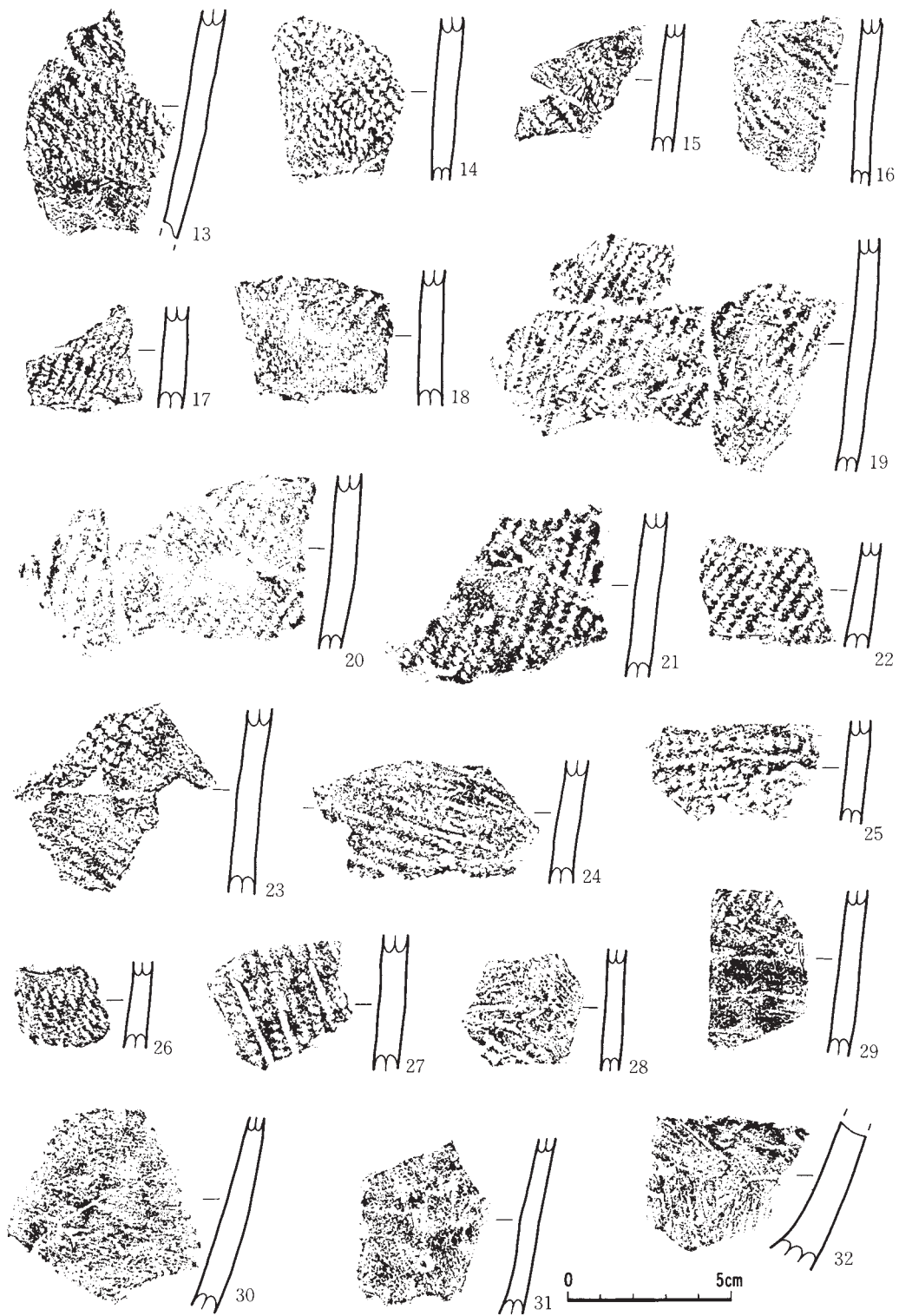
（三宅）



第33图 第404号竖穴住居迹平面图



第34图 第404号竖穴住居迹出土土器(1)拓影图



第35图 第404号竖穴住居跡出土土器(2)拓影图

(2) 土壌と出土遺物

第321号土壌

位置 E G - 33グリッドに位置するが、約半分は調査区域外である。

覆土 7層に区分できたが、自然堆積の状況である。各層ともパミスを多量に含有し、その粒子は1・5・7層が大きく、特に、1層は8mmのものも含んでいる。

形状 径1m80cmの円形で、深さは約35cmである。

壁 西壁の立ち上がりは約60°であるが、斜面下の東壁は、約40°の緩やかな立ち上がりを示している。

底面 若干西側に傾斜し、ナベ底状を呈する。

出土遺物 礫が1点出土した。

時期 不明である。

第324号土壌

位置 E E - 33グリッドに位置する。

覆土 11層に区分できたが、自然堆積の状況である。全体的に硬くしまっている。各層ともパミスを多量に含み、その大きさは、6・9～11層が5mmと大きい。

形状 径1m70cm前後の略円形で、深さは約25cmである。

壁 西壁側の立ち上がりが60°～70°の急角度を示すのに対し、斜面下の東壁側では45°前後の緩やかな立ち上がりを示している。

底面 径90cmの略円形で、ほぼ平坦である。

出土遺物 出土しなかった。

第328号土壌

位置 E G - 30グリッドに位置する。

重複 第342号溝状ピットに西壁の一部を切られている。

覆土 10層に区分できたが、自然堆積の状況である。各層ともパミスを含むが、3・6・7・9層は、その混入量が少ない。また、粒子の大きさは、9層が8mmと大きく、3・6層が1mmと小さい。他は3mmである。

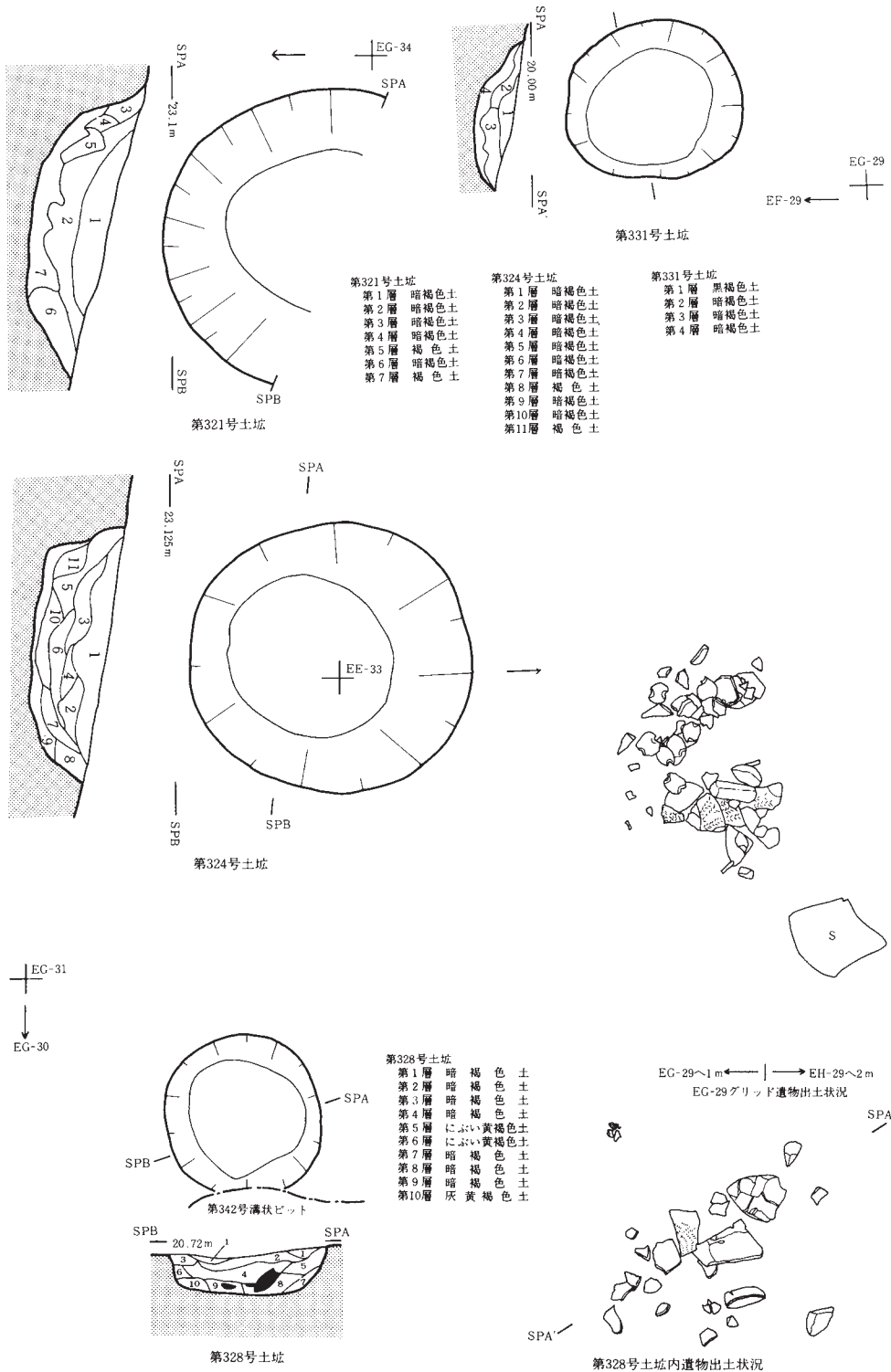
形状 径95cm前後の略円形で、深さは約25cmである。

壁 全体的に60°～80°の急な角度で立ち上がる。

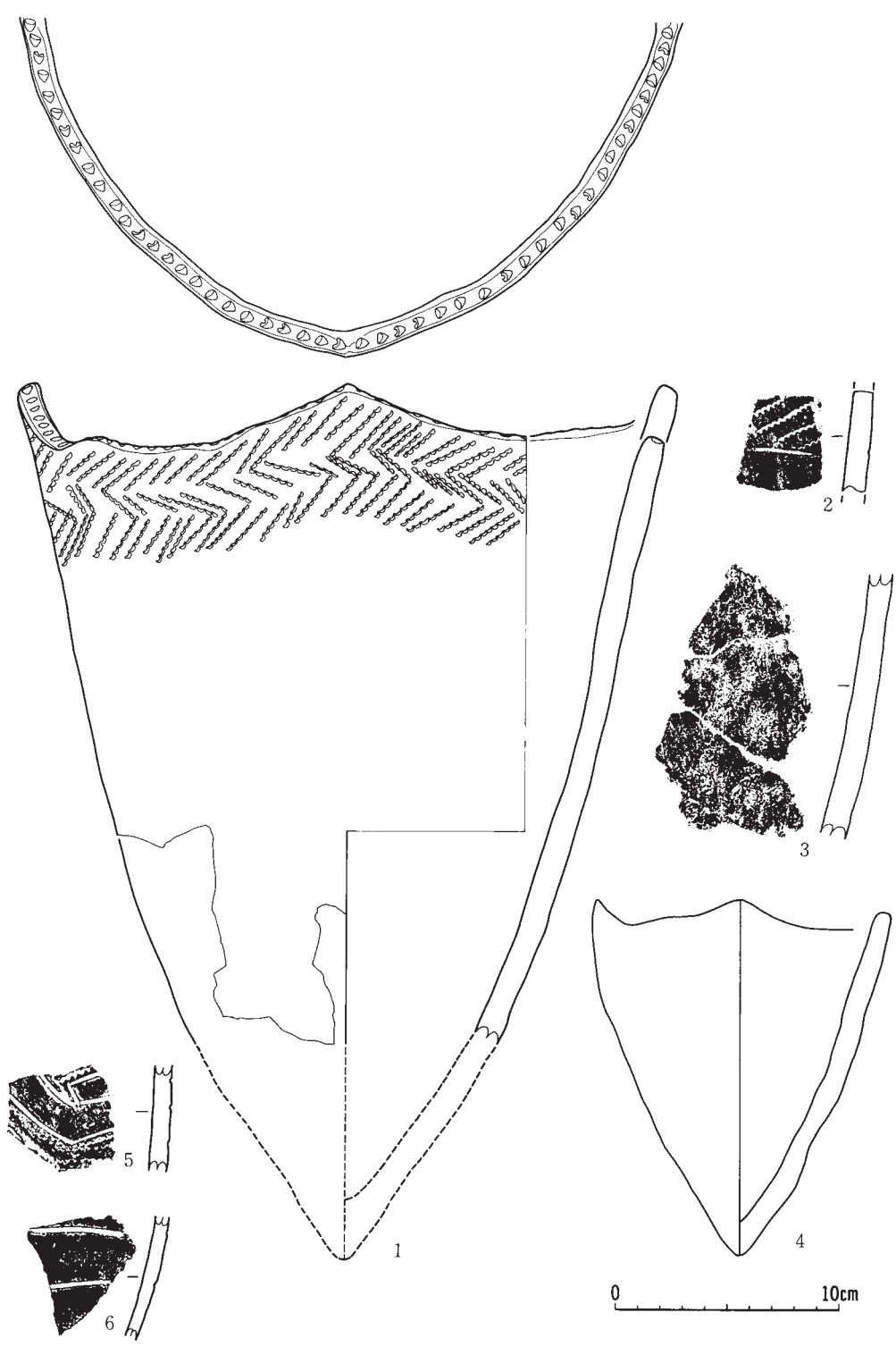
底面 ほぼ平坦で、径70cm前後の略円形である。

出土遺物 (第37図1～4、第53図44、45)

底面近くから小形の尖底土器が横倒しの状態で出土した。第37図1の土器は、本土壌から出土したものと、約4m離れたE G - 29グリッドの西側で一括して出土したものととの接合であ



第36図 第321・324・328・331号土坑平面図



第37图 第326·331号土坛出土土器实测·拓影图

る。

1・2は第 群土器で、無文土器の3・4も同様であろう。

石器は、スリ石と打製石斧が各1点出土した(第53図44・45)。

時期 第 群土器、吹切沢式系の蛭沢A 式期と考えられる。

第331号土壌

位置 EF - 29グリッドに位置する。

覆土 4層に区分できたが、自然堆積の状況である。各層とも1～5mmのパミスを含むが、3層は8mmのものも含んでいる。混入量は2層が少ない。4層には、にぶい黄褐色土が斑状に少量混じる。

形状 径1m10cm前後の略円形で、深さ約23cmである。

壁・底面 全体的に丸底状を呈しており、壁と底面の区別は困難である。

出土遺物 覆土から第 群土器(物見台式)が2点出土した。(第37図5・6)

第337～339号土壌

EH - 26～28グリッドで3基検出したが、いずれも約半分が調査区域外にかかる。土壌上面に復元可能な第 群土器(早稲田5類)が分布し(第88図5、第89図9)この遺物を取り上げた直下から第 群土器(物見台式・ムシリ 式)と、径約4mの略半円状の落ち込みを検出した。当初、これを住居跡と推定したが、精査の結果、3基の土壌の切り合いと判明した。第337号土壌が最も古く、第339号土壌が新しい。

第337号土壌

位置 EH - 26～27グリッドに位置し、一部は昭和55年度に調査されている。

重複 第338号土壌に東側を切られている。

覆土 7層に区分できたがほぼ自然堆積の状況である。全般的にパミスを多量に含むが、19・23層は少ない。パミスの大きさは、18層が1～5mmと大きい。21・23層は黄褐色土を多く含み、22層には炭化物が含まれている。

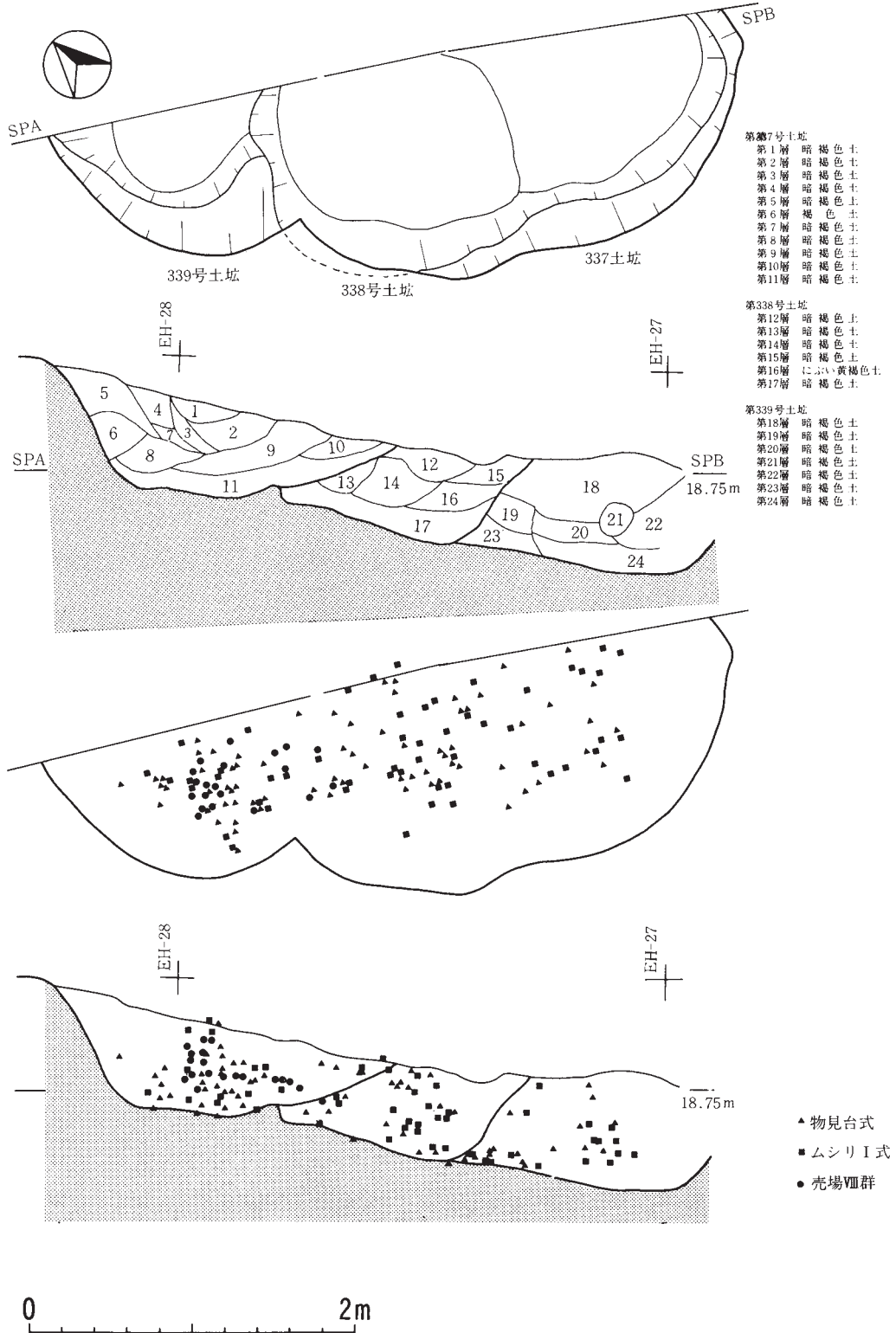
形状 下場で直径1mの円形であろう。掘り込み面からの深さは60cmである。

壁 東側では、60°前後の角度で立ち上がる高さ約25cmの壁を確認した。他では、立ち上がりの角度が45°～50°とやや緩やかで、高さ40～50cm前後の壁を確認した。

底面 八戸火山灰第 層を床面としているため硬い。平坦であるが、東側へ若干傾斜している。

出土遺物(第39図3・第40図)

第 群土器(1・2、吹切沢式系) 第 群土器(3～8、物見台式) 第 群土器(22～26、ムシリ 式) 第 群土器(21、売場 群) 第 群土器(20、売場 群)等が出土したが、20



第38図 第337～339号土塚平面図、遺物分布状況

と21は覆土からではなく、土壌全体を覆う層からの出土である。

1 は表裏とも貝殻条痕文、2 は横位の短い貝殻腹縁刺突文が施文され、表裏には細かな条痕を施している。一応、第 群に含めたものの断定はできない。

時期 ムシリ 式期である。

第338号土壌

位置 E H - 27グリッドに位置する。

重複 第337号土壌の西壁を切り、第339号土壌に西壁を切られている。

覆土 6層に区分できたがほぼ自然堆積の状況である。各層とも1～3mmのパミスを多量に含む。17層には炭化物が若干含まれている。

形状 下場で径1m40cmの楕円形と考えられ、掘り込み面からの深さは55cm前後である。

壁 セクション面では約60°の角度で立ち上がる壁を確認した。他でもほぼ同様であるが、第339号土壌に切られた西壁では約7cmの壁が残存していた。

底面 八戸火山灰第 層を床面としているため硬く平坦であるが若干東側に傾斜する。

出土遺物（第39図・第40図）

第 群土器（9～11、物見台式）、第 群土器（27～30、ムシリ 式）が出土した。

30の破片の一部は、第314号住居跡の覆土（E D - 28グリッド）から出土したものである。

時期 ムシリ 式期である。

第339号土壌

位置 E H - 27・28グリッドに位置する。

重複 第338号土壌の西壁を切っている。

覆土 11層に区分できたが、自然堆積の状況である。6・11層を除く各層とも多量のパミスを含む。4～6層には黄褐色土が小ブロック状に混入し、9・10層には炭化物が含まれている。

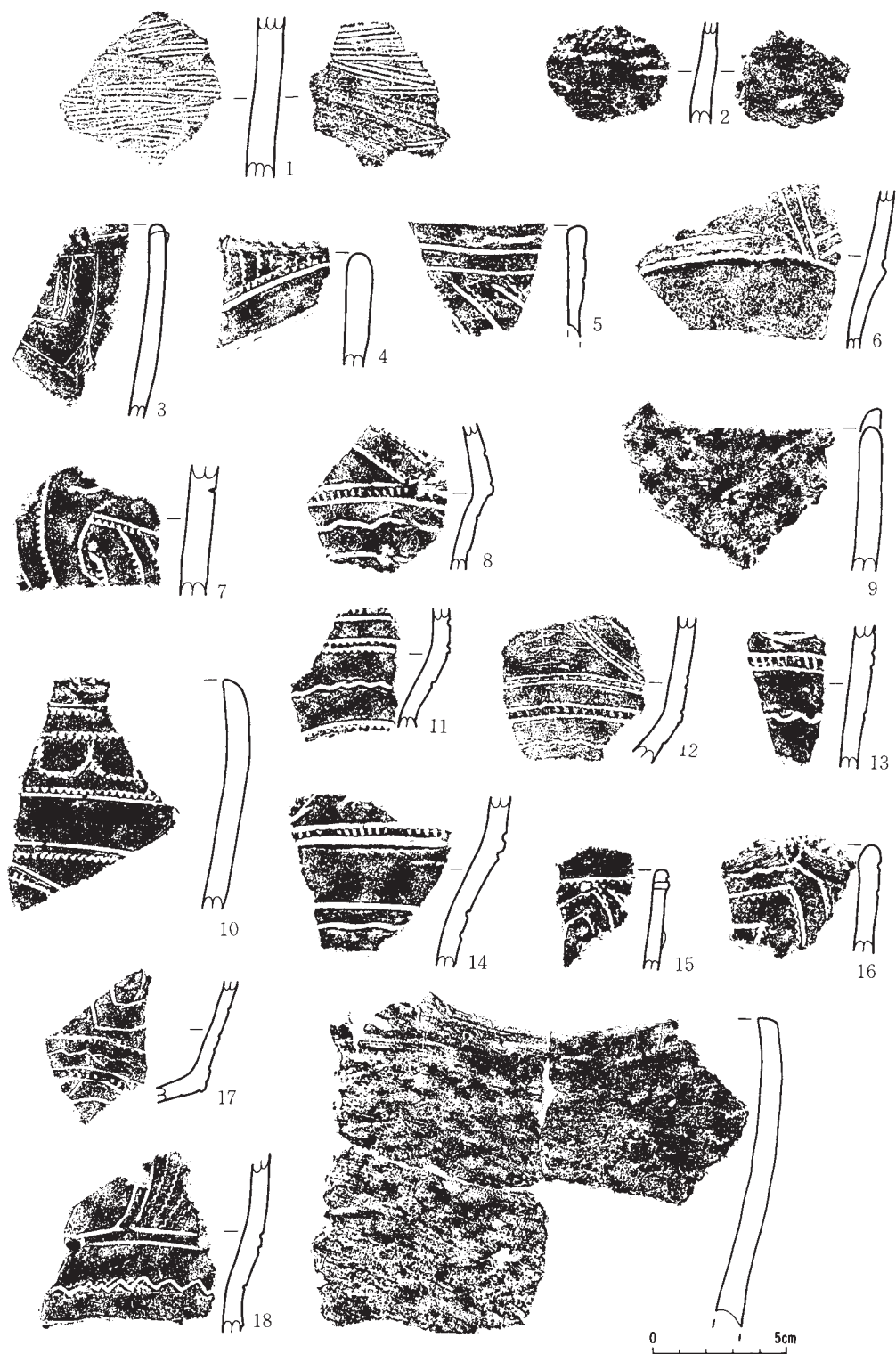
形状 開口部に比べ底面が小さく、上場の径が2m30cm、下場の径が70cmで、円形と考えられる。掘り込み面からの深さは約50cmである。

壁 西壁及び南壁は約50°の立ち上がり、東壁では約30°の極めて緩やかな立ち上がりを示している。

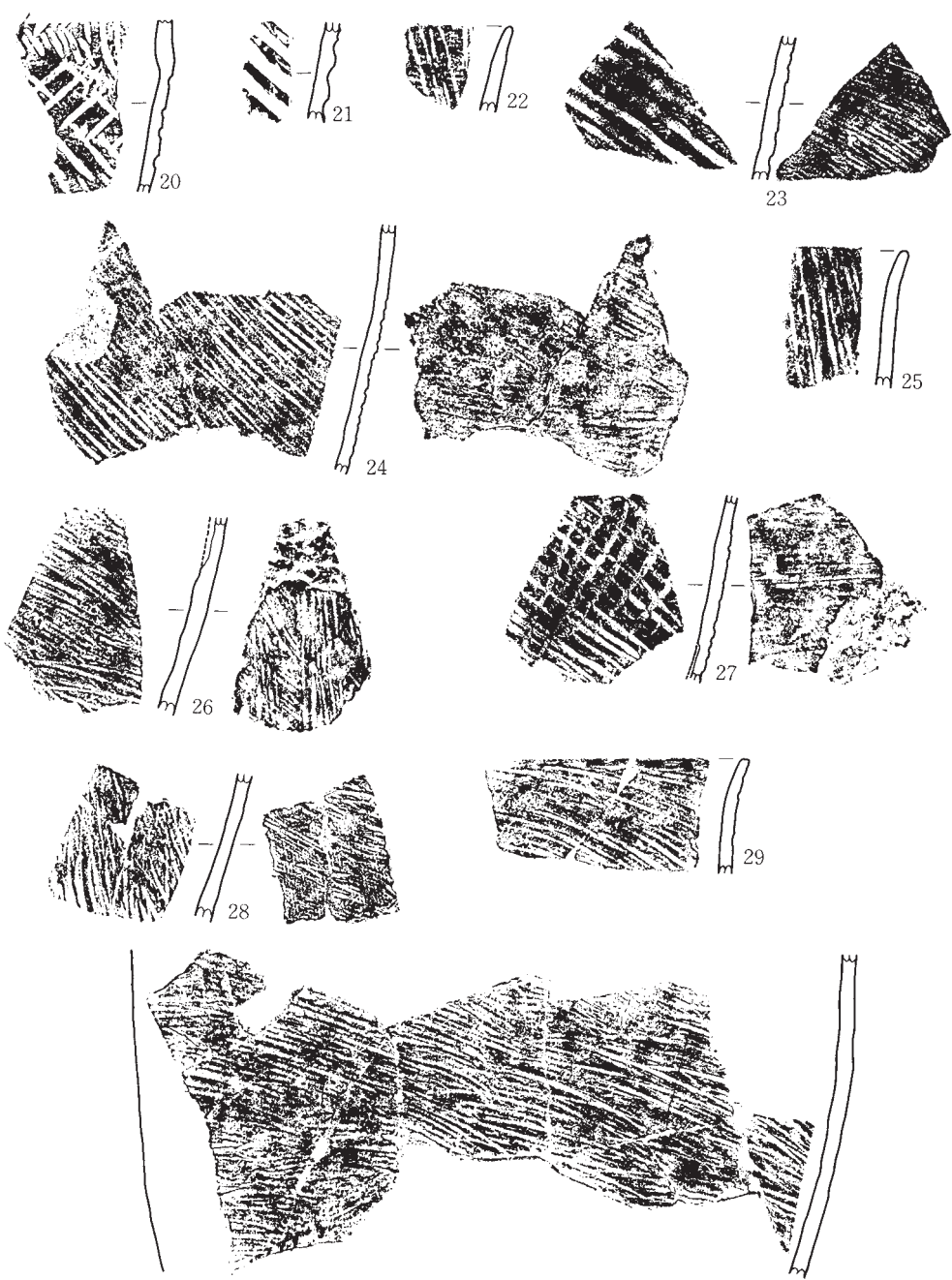
底面 八戸火山灰第 層を床面としているため硬く、ほぼ平坦である。

出土遺物（第39図・第41図）

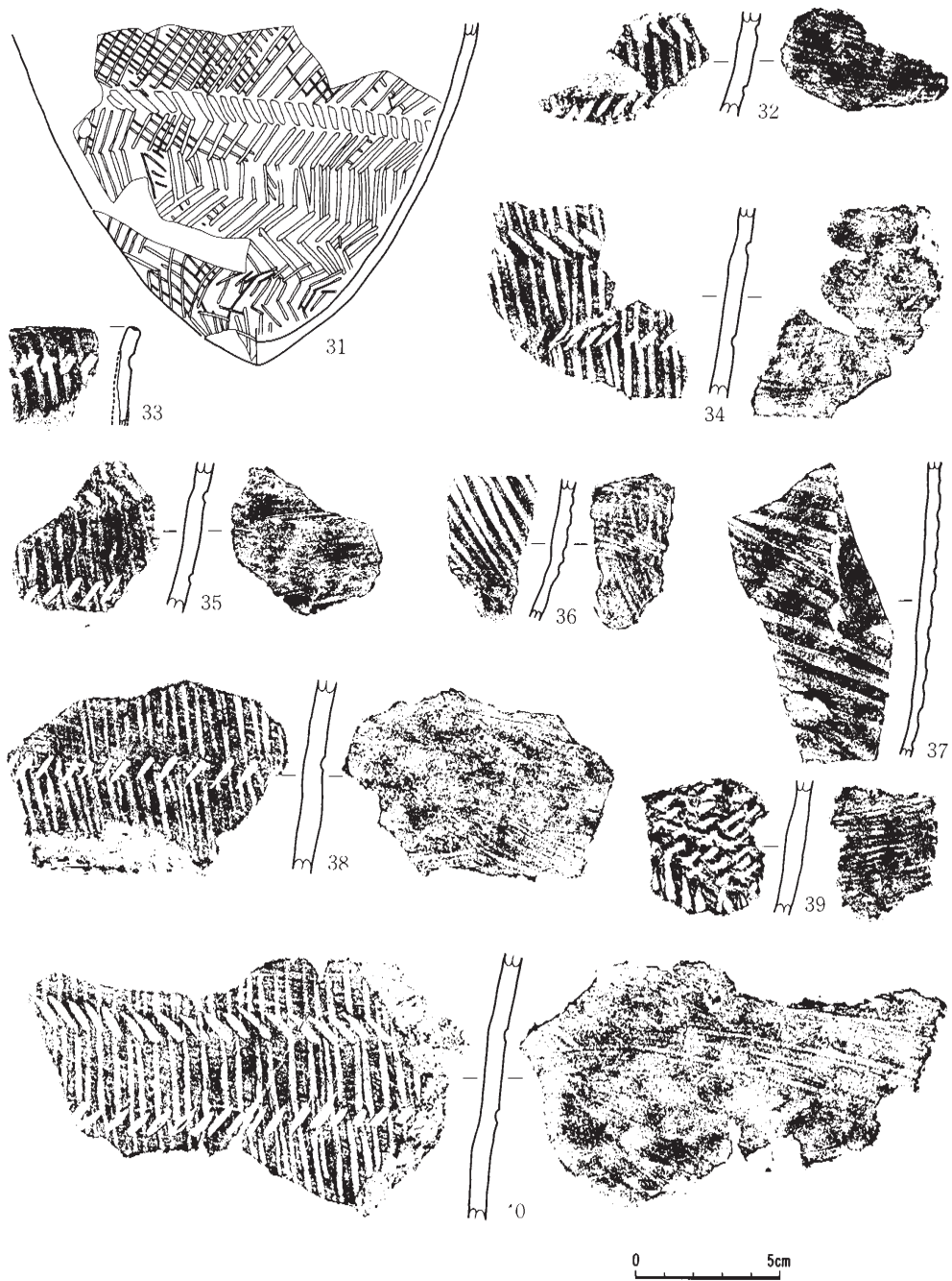
第 群土器（13～19、物見台式）、第 群土器（36・37、ムシリ 式）、第 群土器（31～35・38～40、売場 群）等が出土した。



第39图 第337~339号土坛出土土器(1)拓影图



第40图 第337~339号土坛出土土器(2)拓影图



第41图 第339号土坑出土土器(3)拓影·実測图

17は平底に近いが、底面の中央部がやや突出する。

36・37は第 群に近似するが、沈線が浅い。

矢羽状の沈線文を構成するものや、短沈線、刺突文等を特徴とする第 群土器が、本土壇だけに包含されていることから、本群土器がムシリ 式土器よりも後出のものであることが確定した。

31は尖底部で、内外面ともに条痕文が明瞭に施されている。全体的には、ほぼ縦位の沈線施文後に矢羽根状の沈線が施文されているが、逆の部分も一部にみられる。

34・35・38・40は、同一個体である。

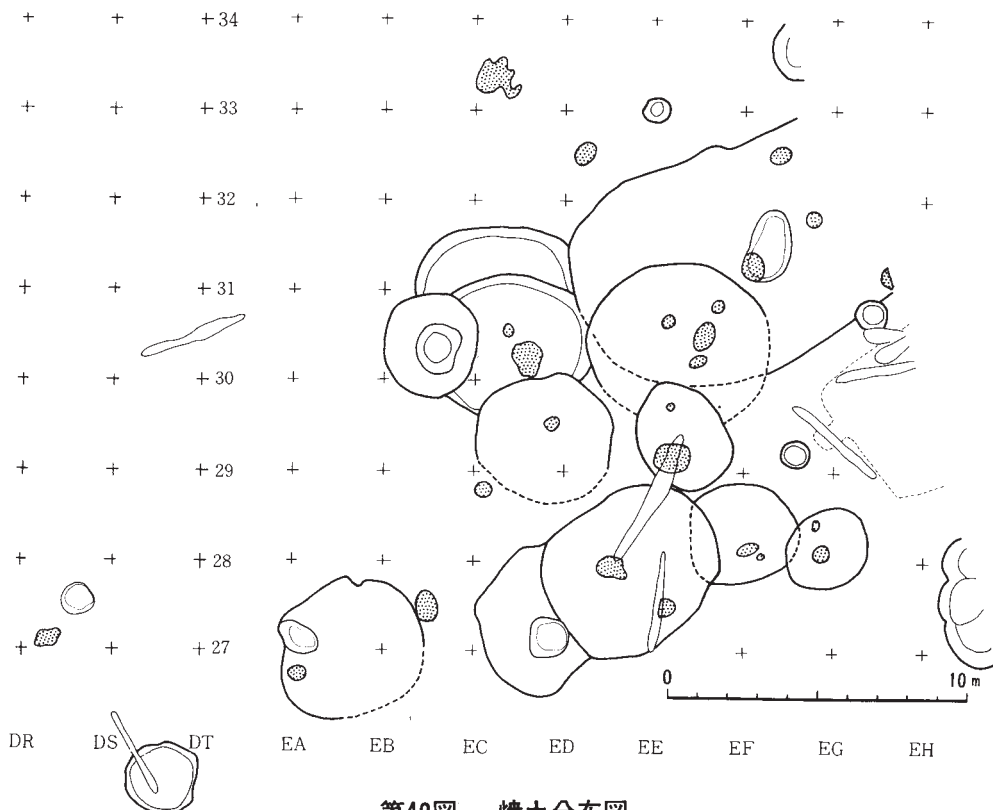
時期 売場 群期のものである。

焼土（第142図）

焼土は25カ所で検出したが、遺構に伴うものは第308号竪穴住居跡ピット62におけるものだけで、他は住居埋没過程に残されたものが18カ所と、遺構外に6カ所である。その大きさは、1 m50cm × 1 m10cmから20cm × 30cmまであり、また、厚さは5 cm ~ 20cmまで様々である。

集石

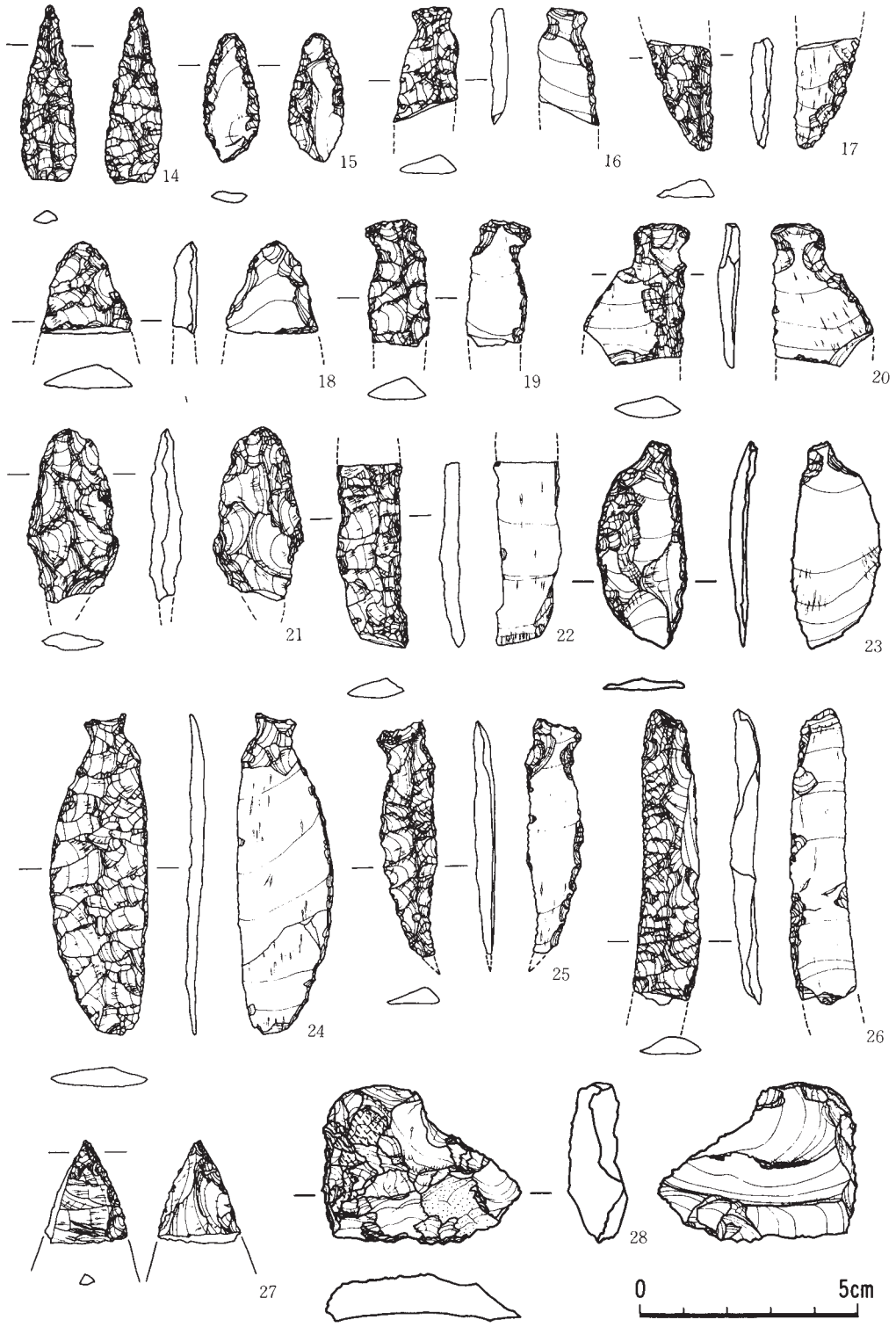
E E - 28およびD Q - 43グリッドの2カ所において、礫が10数個まとまって出土したが、いずれも焼けたものと焼けていないものが混じていた。礫はチャートが多い。（三宅）



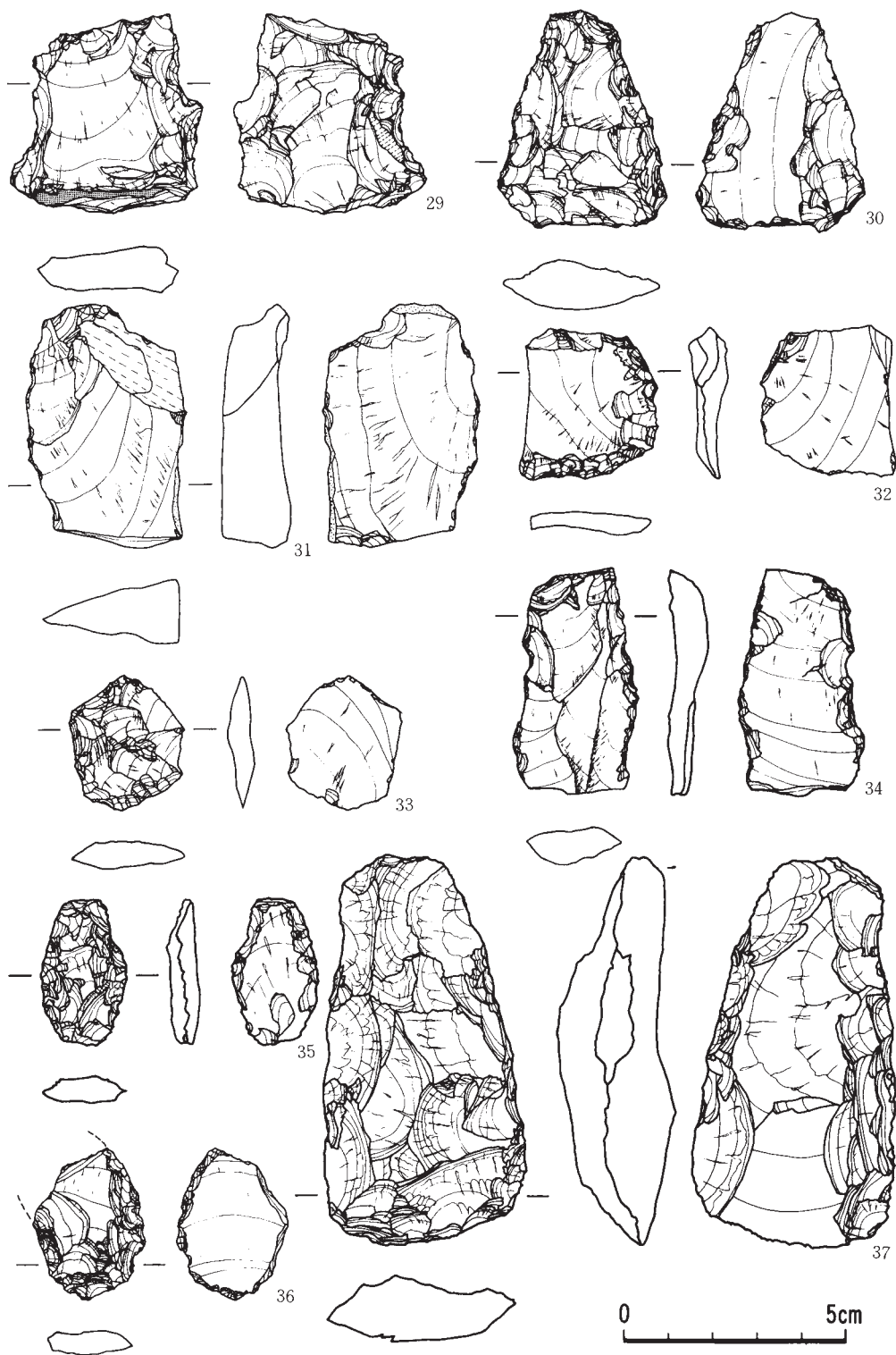
第42図 焼土分布図



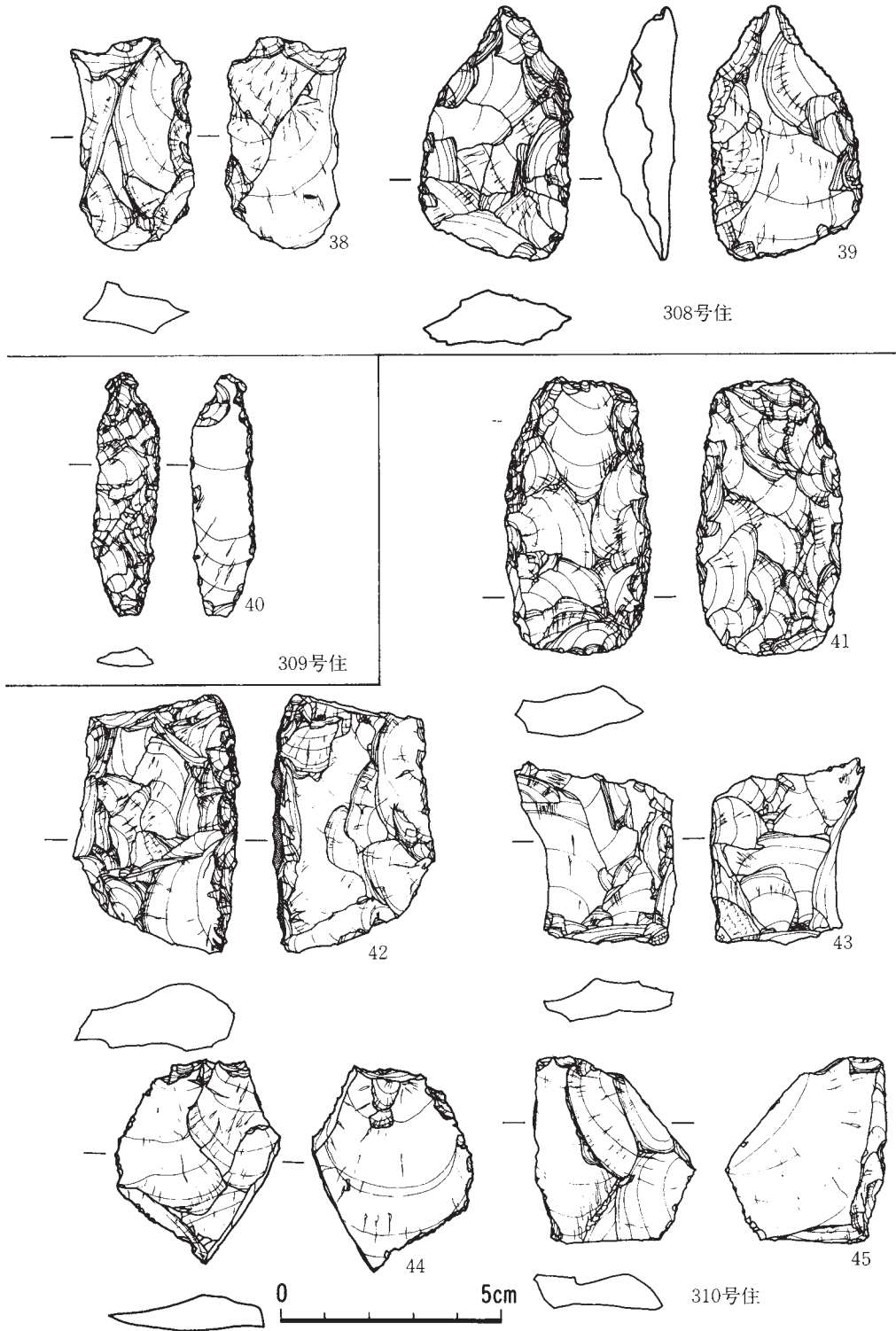
第43図 遺構内出土剥片石器実測図(1)307号住関係



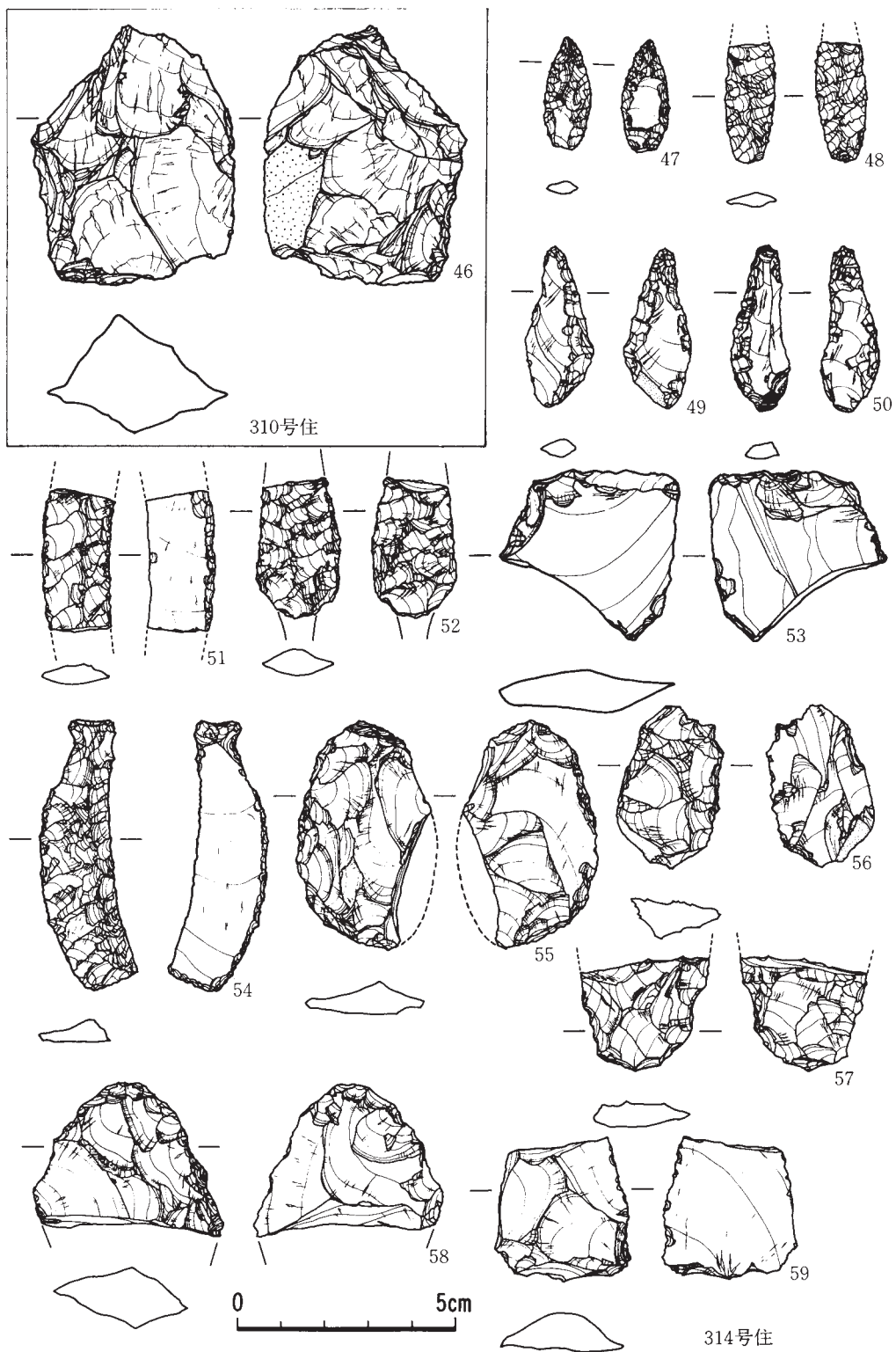
第44图 遺構内出土剥片石器実測図(2)308号住



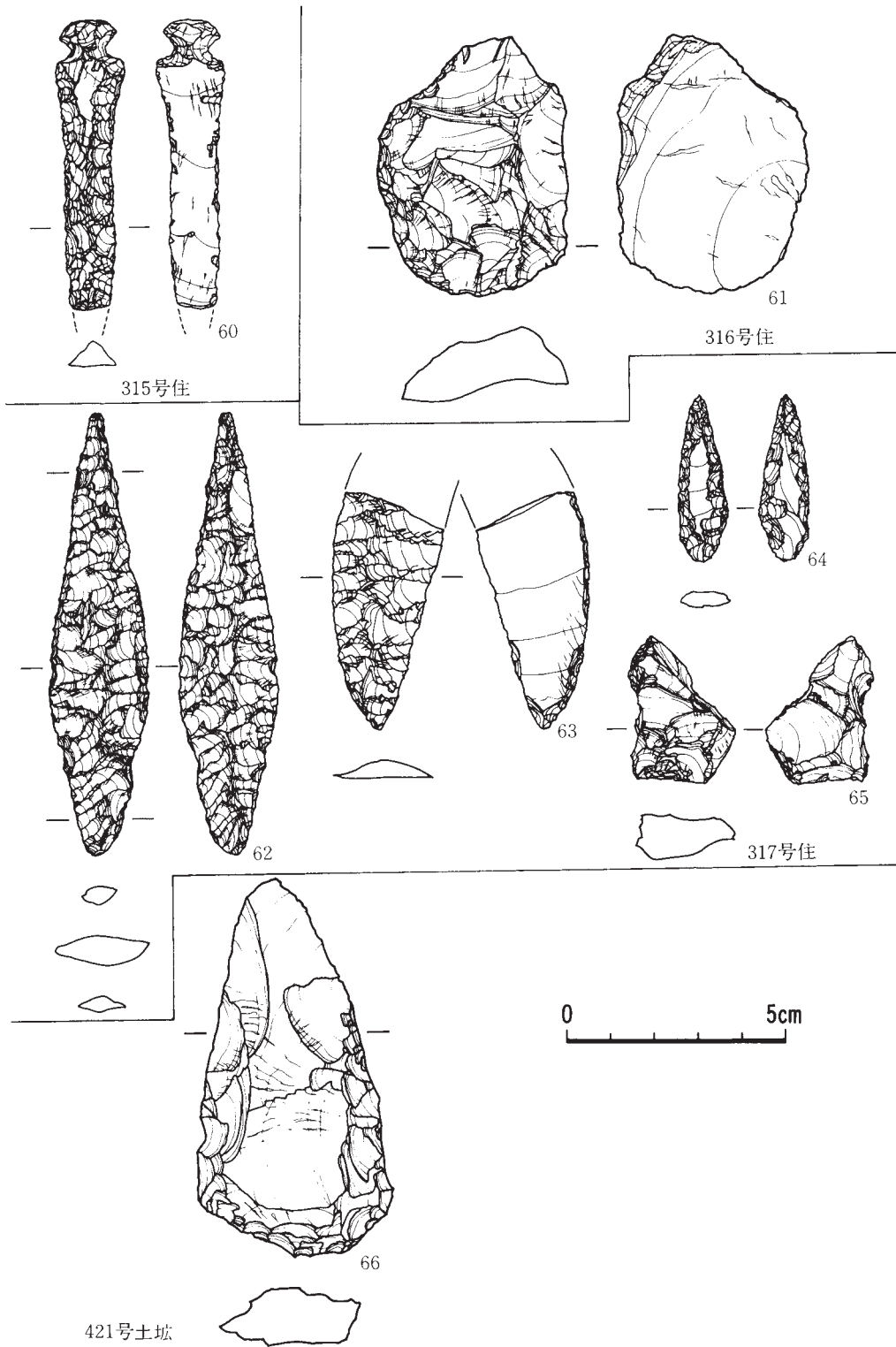
第45图 遺構内出土剥片石器実測図(3)308号住



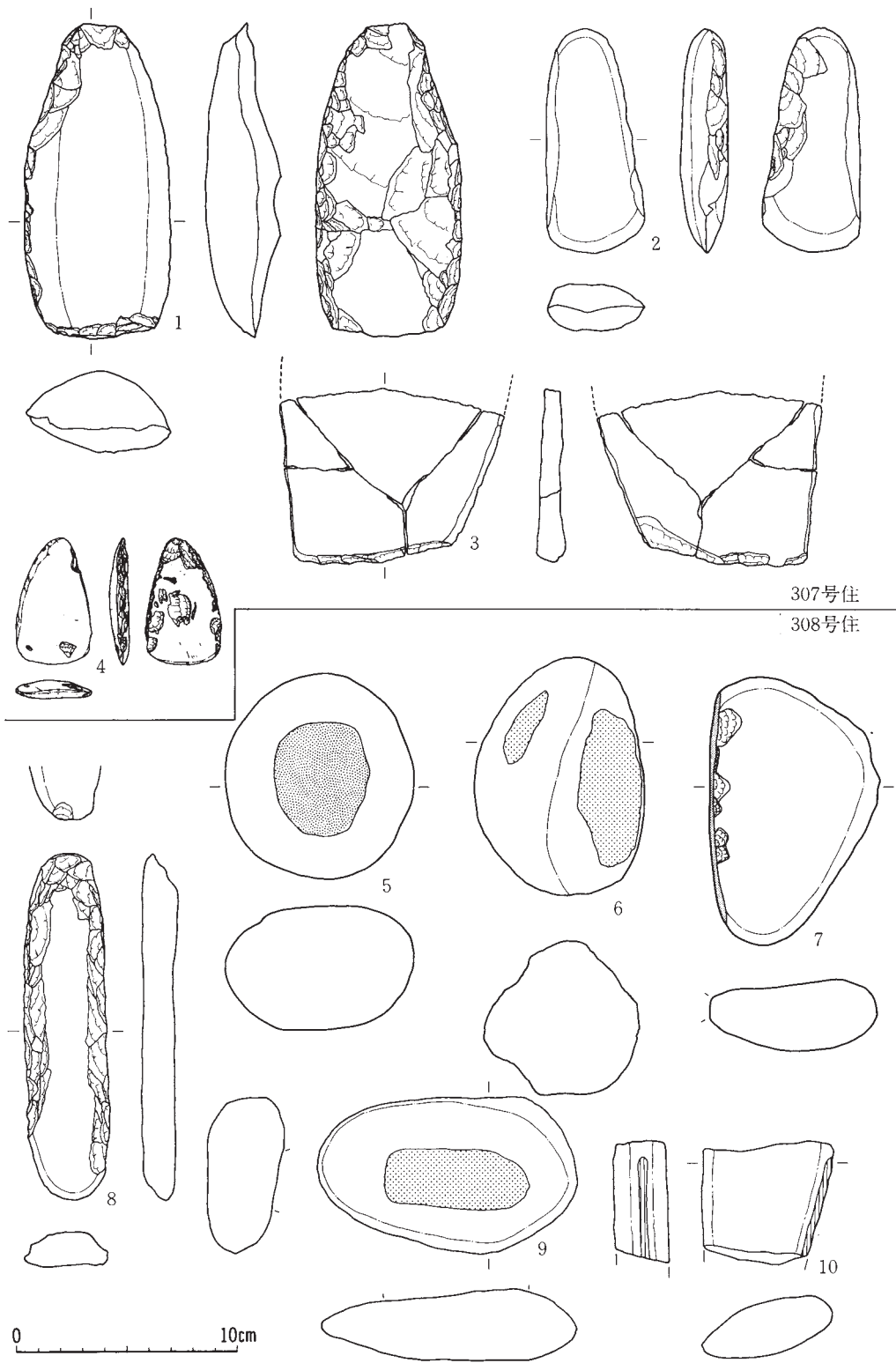
第46图 遺構内出土剥片石器実測図(4)



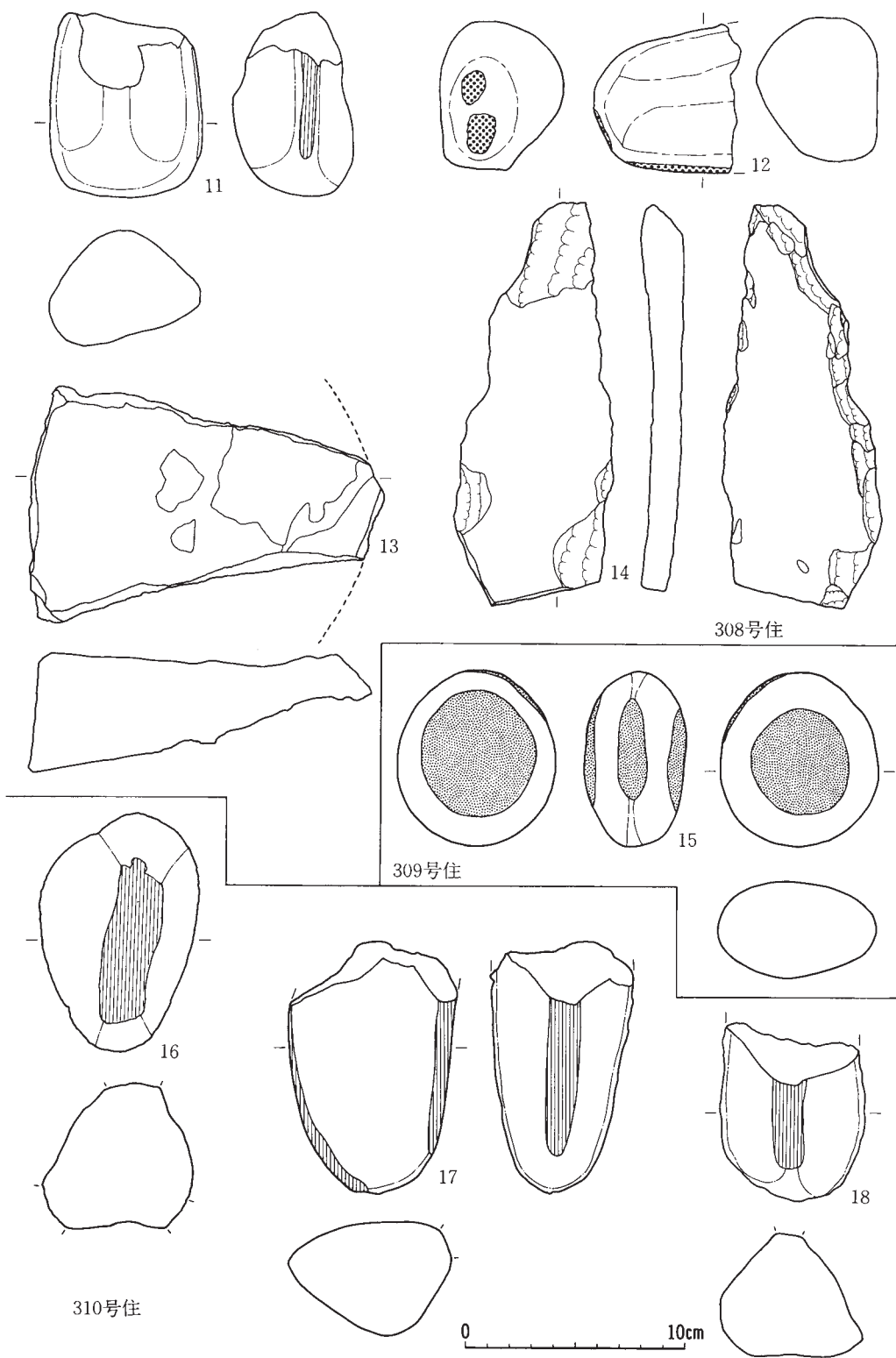
第47图 遺構内出土剝片石器実測图(5)



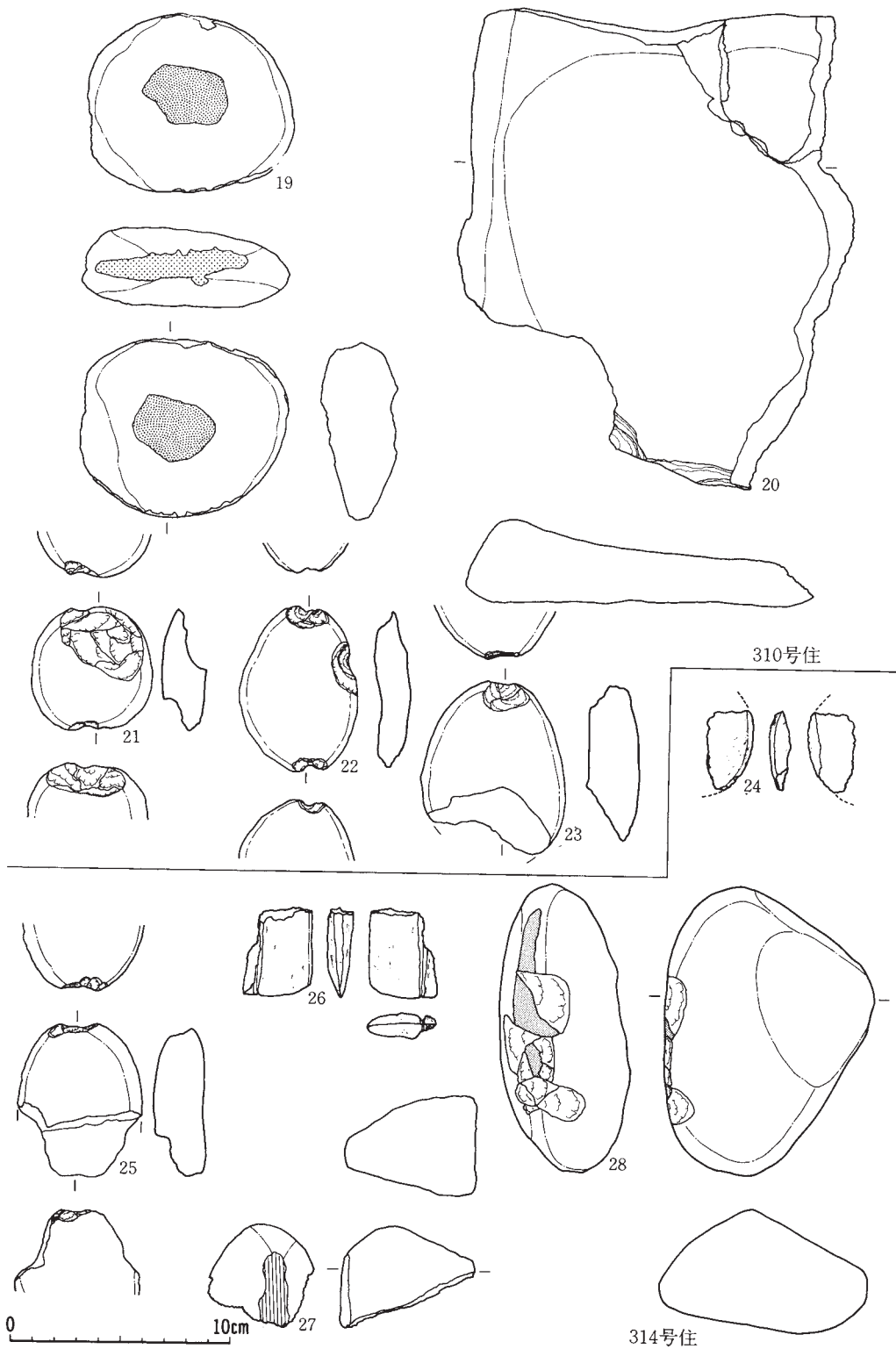
第48図 遺構内出土剥片石器実測図(6)



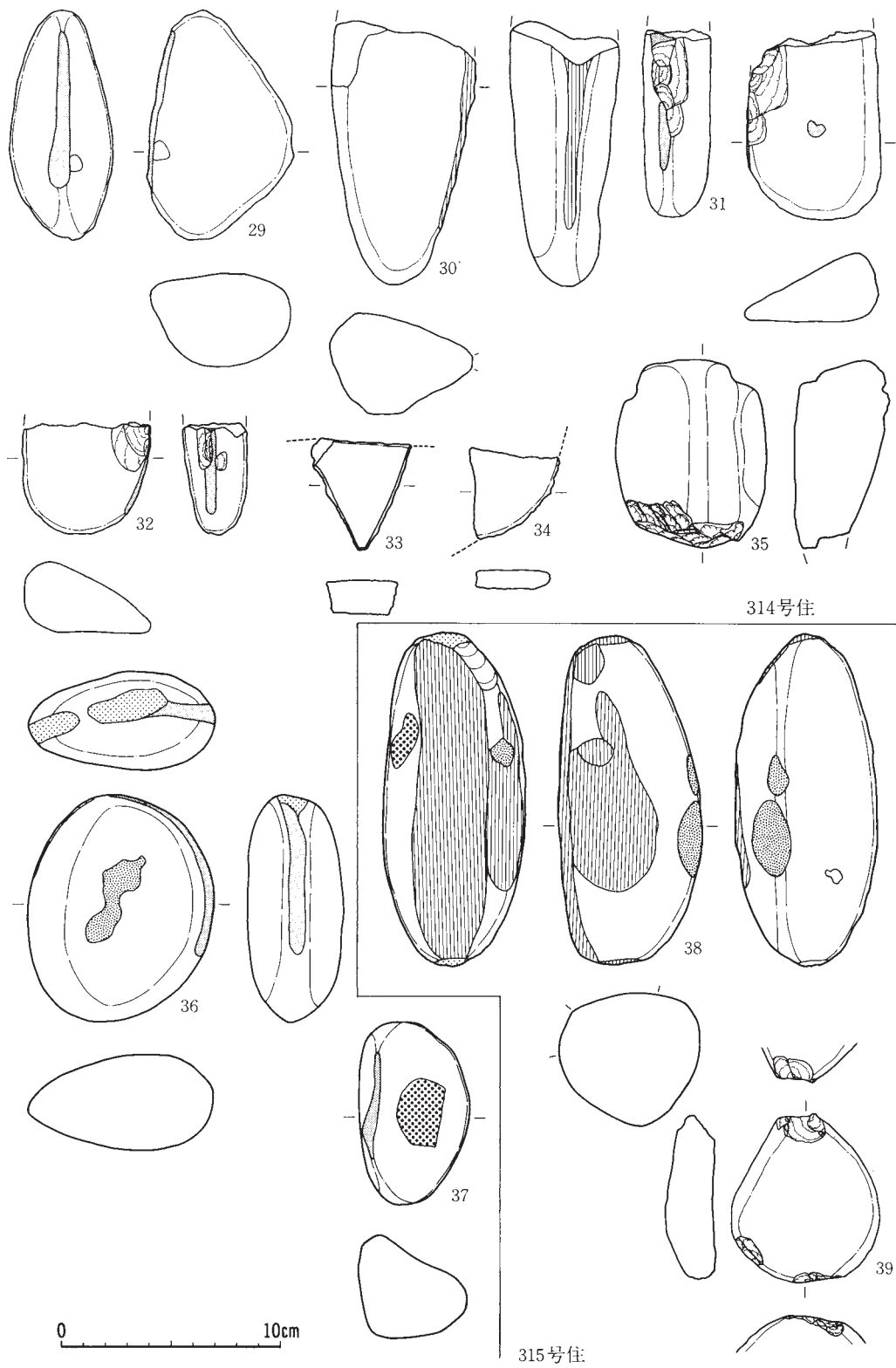
第49図 遺構内出土礫石器実測図(1)



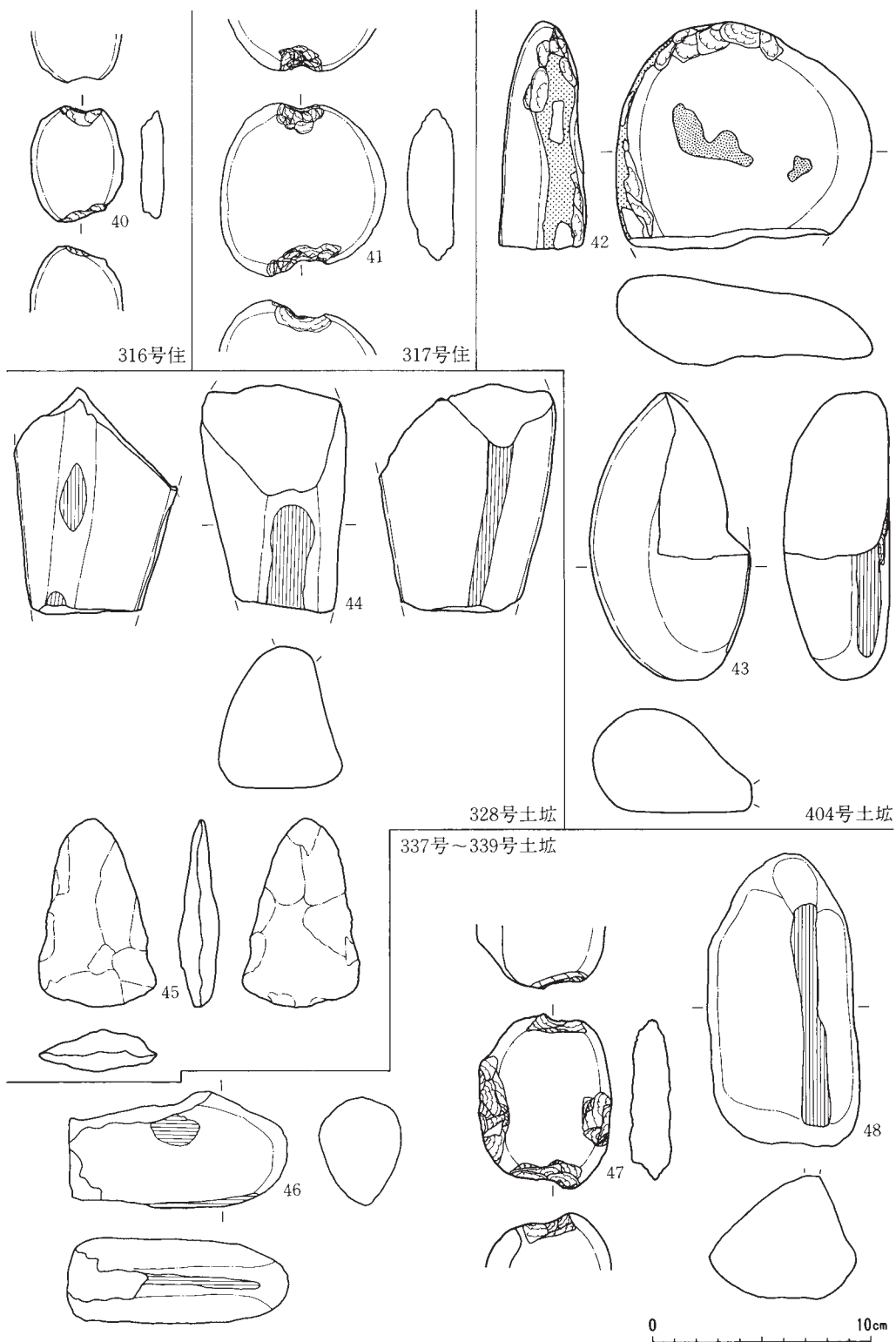
第50図 遺構内出土礫石器実測図(2)



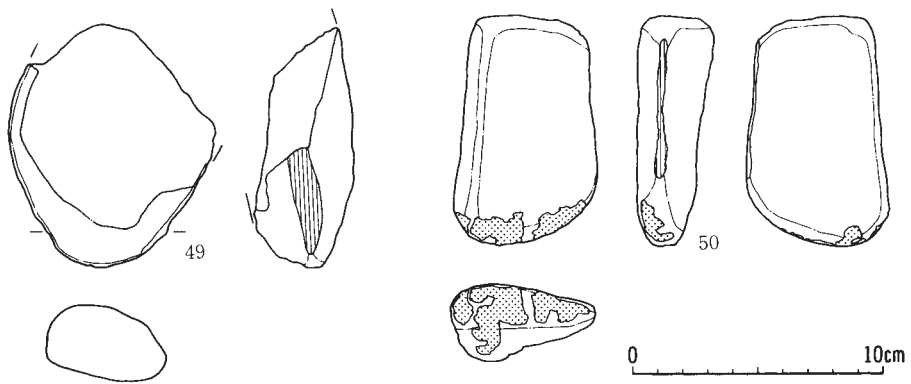
第51図 遺構内出土礫石器実測図(3)



第52図 遺構内出土礫石器実測図(4)



第53図 遺構内出土礫石器実測図(5)



第54図 遺構内出土礫石器実測図(6)

第1表 遺構内出土石器計測表(1)

図版 番号	名 称	出土遺構	層位	計 測 値				石質	備 考	図版 番号	名 称	出土遺構	層位	計 測 値				石質	備 考
				長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)							長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)		
43-1	石 鍬	307H A住		3.2	1.2	0.6	1.4	頁 岩		45-34	不定形石器	308H	フク土	5.1	2.8	0.8	13.8	頁 岩	
-2	石 匙	307H B住	フク土	5.6	1.6	0.5	4.1	"		-35	"	"	"	3.3	2.0	0.6	4.0	"	
-3	"	"	"	(6.8)	1.8	0.5	(4.6)	"		-36	"	"	"	(3.4)	(2.5)	(0.5)	5.8	"	
-4	"	307H A住	"	(4.2)	(1.4)	(0.5)	(2.8)	"		-37	篋 状	"	"	8.8	4.6	2.3	102.5	ホルン フェルス	
-5	"	"	"	(4.5)	2.0	0.5	(6.3)	"		46-38	不定形石器	"	"	4.9	2.6	1.1	16.8	頁 岩	
-6	不定形石器	307H B住	"	1.8	2.7	0.4	1.3	"		-39	"	"	"	5.8	3.4	1.2	27.5	"	
-7	"	"	フク土	2.9	2.9	1.2	10.7	"		-40	石 匙	309H	"	5.5	1.4	0.4	6.6	"	
-8	"	"	"	3.0	2.0	0.7	3.1	"		-41	篋 状	310H	"	6.3	3.3	1.7	33.8	"	
-9	"	"	"	2.7	1.9	0.8	2.9	"		-42	不定形石器	"	"	5.8	3.7	1.7	38.9	"	
-10	"	307H A住	"	5.0	3.7	1.5	8.1	"		-43	"	"	"	3.9	3.5	2.2	25.4	"	
-11	"	307H B住	"	(2.4)	2.5	0.7	(4.3)	"		-44	"	"	"	4.6	3.7	0.9	13.5	"	
-12	"	"	"	4.9	3.1	0.8	—	"		-45	"	"	"	4.5	3.7	1.0	19.1	"	
-13	"	"	フク土	5.0	3.8	1.6	27.6	"		47-46	"	"	"	6.1	4.7	2.8	63.5	"	
44-14	石 鍬	308H	床 面	(4.0)	1.2	0.5	(2.1)	"		-47	石 鍬	314H	"	2.6	1.1	0.3	3.0	"	
-15	"	"	"	2.9	1.2	0.4	0.4	"		-48	"	"	"	(2.8)	1.2	0.3	(1.1)	"	
-16	石 匙	"	"	(2.6)	(1.5)	0.4	(1.6)	"		-49	"	312H	"	3.7	1.6	0.6	4.4	"	
-17	"	"	ローム	(2.7)	(1.4)	(0.4)	(1.4)	"		-50	不定形石器	314H	"	3.8	2.1	0.7	5.2	"	
-18	石 槍	"	床 面	(2.0)	(2.1)	(0.5)	(2.1)	"		-51	石 匙	"	"	(3.2)	1.5	0.4	(5.5)	"	
-19	石 匙	"	"	(2.9)	(1.4)	0.5	(2.2)	"		-52	"	"	床	(3.1)	1.9	0.6	5.4	"	
-20	"	"	フク土	(3.4)	(2.3)	0.4	(3.5)	"		-53	不定形石器	"	フク土	4.0	3.9	1.2	19.7	"	
-21	石 槍	"	"	3.9	2.0	0.7	6.0	"		-54	石 匙	"	"	(6.1)	1.7	0.3	(7.9)	"	
-22	石 匙	"	"	(4.2)	1.5	0.4	(3.4)	"		-55	不定形石器	"	"	5.2	3.0	0.7	12.5	"	
-23	"	"	"	4.7	2.0	0.3	3.2	"		-56	"	"	"	3.6	2.4	1.3	7.8	"	
-24	"	"	"	7.3	2.2	0.4	8.0	"		-57	"	"	"	(2.4)	(3.3)	(0.7)	(3.4)	"	
-25	"	"	床 面	(5.3)	1.3	0.5	(3.1)	"		-58	"	"	"	4.4	3.3	2.1	22.0	"	
-26	"	"	フク土	(6.8)	(2.4)	0.7	(6.5)	"		-59	"	"	"	3.1	3.1	1.1	9.9	"	
-27	不定形石器	"	"	(2.4)	(1.9)	(0.5)	(1.9)	"		48-60	石 匙	315H	床	(6.6)	1.6	0.5	(7.8)	"	
-28	"	"	"	3.6	4.6	0.6	4.0	"		-61	不定形石器	316H	フク土	5.9	4.3	2.3	52.2	"	
45-29	"	"	"	4.5	4.2	1.0	26.2	"		-62	石 槍	317H	"	10.1	2.3	2.7	15.6	"	
-30	篋 状	"	床 面	4.9	3.8	1.0	17.5	珪 頁 岩		-63	石 匙	"	"	(5.2)	(2.4)	0.5	(7.5)	"	
-31	不定形石器	"	フク土	5.4	3.5	1.4	32.8	頁 岩		-64	石 鍬	"	"	3.8	1.2	0.4	3.7	"	
-32	"	"	"	3.4	3.2	0.4	6.8	"		-65	不定形石器	"	"	3.6	2.5	1.1	11.1	"	
-33	"	"	"	3.1	2.6	0.6	4.3	"		-66	篋 状	421土壇	"	8.7	4.5	1.5	55.0	鉄石英	

第2表 遺構内出土石器計測表(2)

図版 番号	出土遺構	計測値				石質	分類	類	度	h	複	合
		長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)							
49-1	307H A住											
-2	307H A住											
-3	307H B	(7.8)	(10.0)	(0.9)	(104)							
-4	307H C土	5.7	3.4	0.8								
-5	308H	9.2	8.6	5.8	668		I				aタ1	
-6	"	10.8	6.9	7.0			IV	a			タ1	
-7	"	12.2	7.7	3.3	381	砂岩	III	b	ス2	○	aタ1	
-8	"	15.6	3.6	1.7	164	頁岩	II	b		○	タ2	
-9	"	8.9	7.9	6.2	686	安山岩	IV	a	ス2			
-10	"	(5.6)	(6.1)	(2.5)	(131)	砂岩						
50-11	"	(8.5)	7.0	4.8	(393)	砂岩	III	b	ス2			
-12	"	(6.6)	(6.7)	(5.5)	(332)	砂岩	III	b	ス2			
-13	"	15.5	10.5	5.0	1192	安山岩						
-14	"	(18.6)	(7.1)	(2.0)	(272)							
-15	309H	8.0	7.2	4.5	355	安山岩	I	a			タ2	
-16	310H	10.9	7.1	6.7	661	安山岩	III	b	ス		bタ	
-17	"	(10.9)	(7.2)	(5.9)	(625)	砂岩	III	b	ス2			
-18	"	(8.1)	(6.5)	(5.2)	(352)	チャート	III	b	ス2			
51-19	"	9.2	8.0	3.5	369	安山岩						
-20	"	(20.4)	(18.2)	4.1 2.0	—	凝灰岩						
-21	"	5.7	5.5	1.9	77	砂岩						
-22	"	7.4	5.3	1.8	87	砂岩						
-23	"	(7.7)	6.6	2.5	(168)	砂岩						
-24	314H	(3.7)	(2.1)	0.8	(6.9)							
-25	"	(6.9)	(5.6)	(2.3)	(91)	安山岩						
51-26	314H	(4.0)	(3.0)	(1.1)	(17.8)							
-27	"	(3.7)	(6.6)	(4.7)	(118)	砂岩	III	b	ス2			
-28	"	13.1	9.5	5.8	885	安山岩	III	b	ス2	○	aタ1	
52-29	"	10.4	6.4	4.3	384	安山岩	III	b	ス2	○		
-30	"	(12.1)	(6.4)	(4.4)	(435)	安山岩	III	b	ス2			
-31	"	(8.5)	6.0	2.8	(226)	砂岩	III	b	ス2	○	aタ1	
-32	"	(5.0)	(5.6)	(2.9)	(110)	砂岩						
-33	"	(5.0)	(4.2)	(1.9) (1.2)	(41)							
-34	"	(4.1)	(4.1)	(0.8)	(10.6)							
-35	"	(8.9)	6.8	4.1	(321)	チャート	IV	c			ハ	
-36	"	10.3	8.6	4.4	542	砂岩	I	b			タaタ1	
-37	"	8.2	5.5	4.0	238	安山岩	III	b	ス2		aタ1	
-38	315H	14.9	6.8	6.5	892	安山岩	III	b	ス2	○	aタ1	
-39	"	7.5	6.8	2.5	206	凝灰岩						
53-40	316H	5.3	4.2	1.1								
-41	317H	7.8	7.4	2.2	190	砂岩						
-42	404H	(10.0)	(12.2)	(3.7)	(618)		I	b		○	タaタ1	
-43	"	(13.1)	(7.3)	(4.9)	(583)		III	b	ス2			
-44	328土坑	(10.1)	(7.7)	(6.5)	(628)	砂岩	III	b	ス2			
-45	"	8.6	5.4	1.6	82	凝灰岩						
-46	337H	(9.9)	(5.3)	(3.8)	(298)	砂岩	III	b	ス2			
-47	"	8.0	6.0	1.9	132	チャート						
-48	"	13.5	6.7	6.4	716	チャート	III	b	ス2			
54-49	"	(9.6)	(8.2)	(3.5)	(311)	砂岩	III	b	ス2			
-50	"	9.2	5.5	2.8	224	砂岩	III	b	ス1		cタ	

第2節 遺構外出土遺物

(1) 土器

第3・4次調査において出土した組文時代早期から前期初頭の土器は、以下の如く第1・2次調査とほぼ同様に分類したが、この他、縄文時代後期及び弥生時代の土器が数片出土しているため、これを追加した。

- 第 群 日計式土器に相当するもの
- 第 群 白浜式・小般渡平式土器に相当するもの
- 第 群 寺の沢式土器に相当するもの
- 第 群 吹切沢式・螢沢A 類に相当するもの
- 第 群 物見台式に相当するもの
- 第 群 ムシリ 式に相当するもの
- 第 群 新たに売場 群と称するもの
- 第 群 新たに売場 群と称するもの
- 第 群 赤御堂式に相当するもの
- 第 群 早稲田5類土器に相当するもの
- 第 群 東釧路 式・中茶路式に相当するもの
- 第 群 早稲田5類と長七谷地 群の間に相当すると思われるもの
- 第 群 長七谷地 群に相当するもの
- 第 群 早稲田6類・春日町式に相当すると思われるもの
- 第 群 型式の特定できないもの
- 第 群 縄文時代後期の十腰内 式に相当するもの
- 第 群 弥生時代中期の二枚橋式に相当するもの
- 第 群土器(第55図)

いわゆる日計式土器で、胎土に多量の植物性繊維を含み、その走痕は、器面の内外で明瞭に観察することができる。

本群土器は、昭和57年度の調査でも大グリッド60 等にかかる遺構の内外から若干出土したが、昭和59年度の調査では、日計式期の住居跡1軒と同時期の包含層を確認した。しかし、包含層は単一のものではなく、第 群土器や縄文時代後期の土器(第 群)も混在していた。また、その分布範囲は、DN - 60グリッド周辺に多く、当該期の第404号竪穴住居跡の周辺(DN - 53グリッド等)では極めて少なかった。なお、押型文土器は、本台地から南に突き出た小舌状台地の先端部においても採集されている。

本群土器を次のように細分した。

A類 日計型押型文のもの

B類 縄文を地文とし、沈線を施文したもの

C類 無文のもの

D類 無文ないし縄文を施文した胴部破片

A類(1～3、28～30)

4点で、いずれも小破片ないし微細な破片である。

1～3・30は、いずれも重層 字状文であるが、原体の幅、大きさ等は明らかでない。陰刻線の幅は2mm弱、その間隔は3mmで広いが、浅い彫刻のため、器面では不明瞭である。30は底部近くの破片であろう。

28・29は、昭和57年度の表面採集資料である。29は重層 字状文、28は、陰刻線の幅・間隔ともに約1.5mmのやや浅い彫刻の重層長菱形文と考えられるが、原体の大きさ等は不明である。29は陰刻線の幅・間隔とも2mm弱で、他に比べてやや深い彫刻の重層 字状文と考えられる。

1・2の焼成は良好で、緻密で堅い。器面調整は1・2が特に良好で、3・28～30は良くない。

B類(4～9)

縄文を地文として沈線を施文したものは6点である。

口唇部をもつもの、もたないもの各3点である。口唇部は、胴部側より薄く仕上げられているが、特に薄く鋭角なもの(4・5)と、やや丸みをもつもの(6)とがあり、3点とも口唇部にスリットが施されている。

口縁と平行に施文される沈線は、各々2～3条認められるが、その沈線は細くやや鋭いものが1点(9)、丸みをもって特に太いものが3点(6～8)ある。

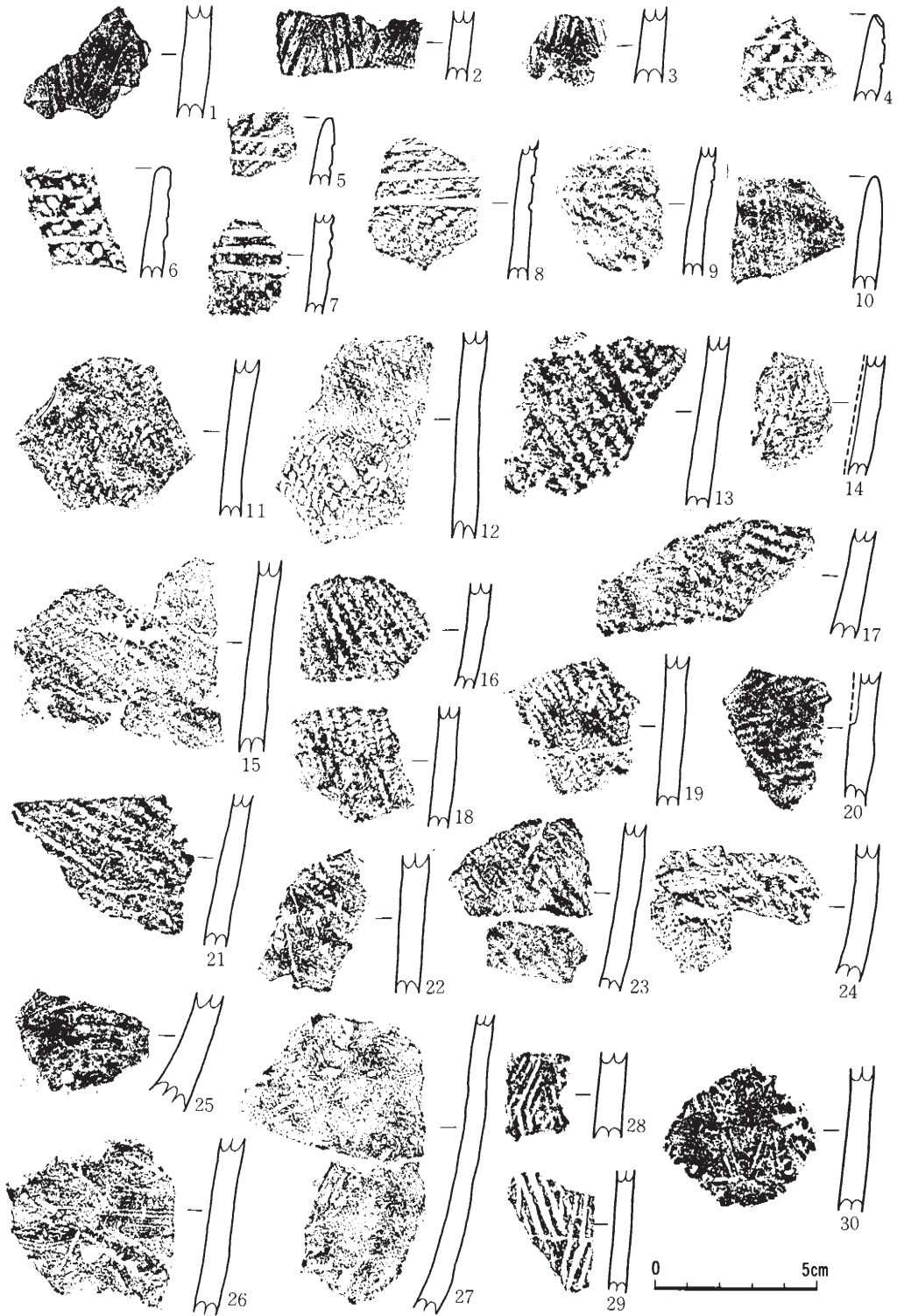
地文の縄文は、単節の斜行縄文で、全般に浅く施文され不明瞭であるが、6は深く施文され節も大きく明瞭である。

焼成は全般に良好で堅いが、9は悪くてもろい。器面調整はあまり良好でない。8は胎土に特に多くの砂粒を含む。

C類(10)

口縁部が無文のものは1点である。遺構外として取り上げたが出土区はDN-53グリッドで、第404号竈穴住居跡出土の無文土器(第34図9)と同一個体と考えられる。

口唇部は、胴部側に比べて薄いが、丸みをもって仕上げられている。焼成は良好であるが、やや軟質である。器面調整は良くない。



第55图 第 I 群土器拓影图

D類(11~27)

無文ないし縄文を施文した胴部等の破片は、微細なものも含めると約100点出土した。その大半は、B類の胴部から底部に至るもので、C類のものと判断できるものはない。

施文された縄文には、通常の2段単節の斜縄文が多く、他に、無節(20・23)、3段複節(11・12)、2段単節の縄を用いた撚糸文(14)がある。なお、第404号竪穴住居跡から数点出土した。異原体を用いた無結束の羽状縄文や、附加条の縄文はみられない。縄文の施文は全般的に浅いため、明瞭でない。

無文のもの(24~27)は、いずれも底部に近い破片である。器面調整の際の細かな擦痕が器表面に若干認められる。26と27は同一個体であるが、25もその可能性がある。(三宅)

第 群土器(第56図1~3)

白浜式、小般渡平式土器に相当するものは、図示したもののみで、極めて少ない。いずれも胎土中に植物性繊維を含まない。1は砂粒を多く含む。内面の調整は良好である。

1は貝殻条痕文を地文とし、口唇直下に粘土のまくれ返りをもつ縦位の爪形文を2段、1.5cm下位には横位の爪形文を3段口縁と平行に施文している。その間には、貝殻腹縁文を若干施文している。2も縦位の爪形文を地文で、一部に粘土のまくれ返りがみられる、3は貝殻条痕文とし、長めの貝殻腹縁文列を、また、口唇上端には同じく貝殻腹縁文による短い刺突列を施文している。(三宅)

第 群土器(第56図4)

寺の沢式に相当するものは1個体で、胎土中に極く微量の植物性繊維と、若干の白色凝灰岩粒を含む。内面の調整は、縦位に平滑に行われ、良好である。底部近くの破片で、貝殻腹縁文を全面に施文しているが、上位は横位に、以下は縦位である。(三宅)

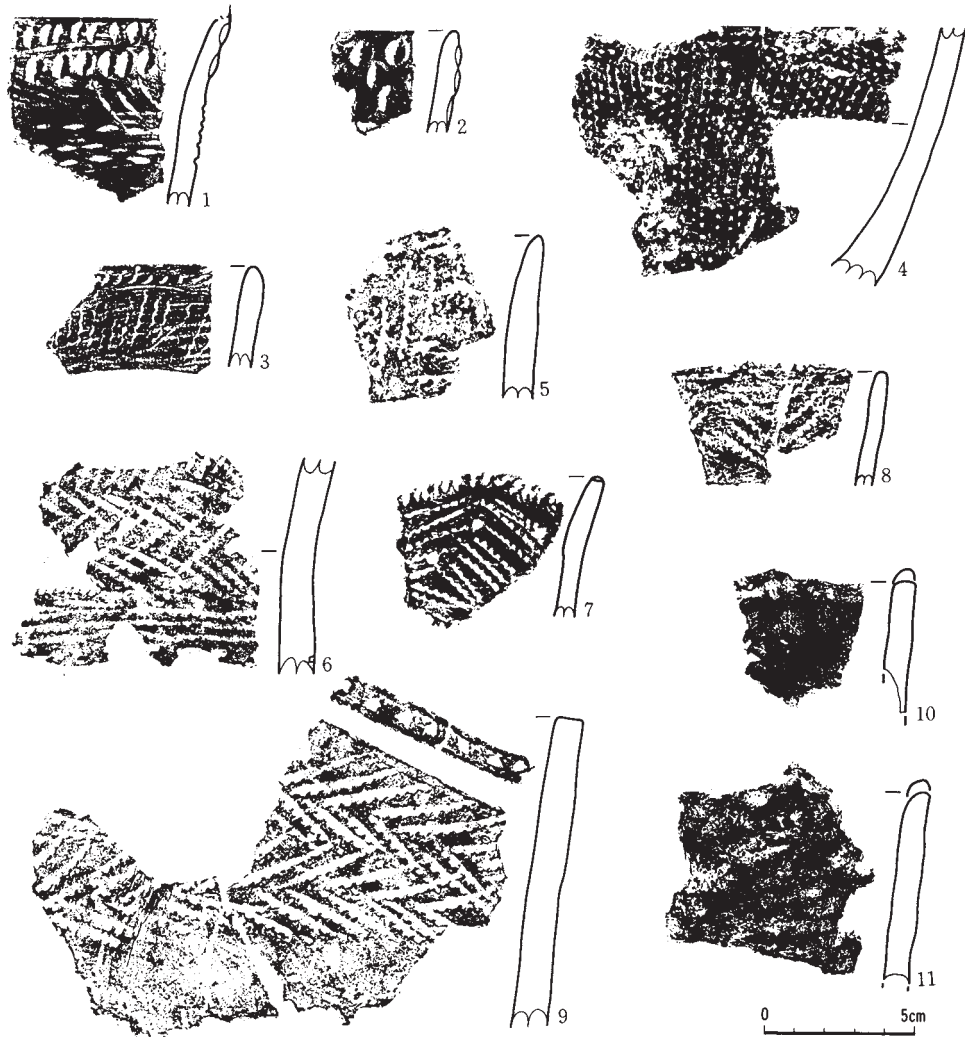
第 群土器(第56図5-10)

吹切沢式(A類)、螢沢A式(B類)に相当するものである。第3次調査では後者に類似のものが第328号土壌、及びEG-29グリッドとその周辺に集中していた。2個体復原できたが、約80片の破片ほとんどが無文の胴部破片である。

胎土中に植物性繊維を含まず、全般的に多量の砂粒を含有する。第37図1のように器面調整の良好なものは少ない。

口縁は、大振りの4波状口縁のものと小突起を4カ所に付すものがある。資料が少ないため断定できないが、口縁部文様をもつものは前者、無文のものは後者のようである。前者の口唇上端には、半截竹管刺突文を施したもの(5、9)と貝殻腹縁による刺突を施したもの(7)とがみられる。

口縁部文様帯をもつものは、その幅が7cm前後と考えられ、矢羽根状に構成した貝殻腹縁文



第56図 第II・III・VI群土器拓影図

が施文されている。6は、その下位に横位の腹縁文を、また、7は波頂部を頂点とした多重の三角形を構成し、その一部の頂点に刺突を施している。

口縁部文様帯をもつものの胴部、及び無文土器の内外面は全くの無文で、条痕文等は施されていない。

貝殻腹縁による押し引き文や条痕文が全くみられず、若干異質であるが、資料も少なく、矢羽根状の貝殻腹縁文を施文していることから、一応螢沢A式とする。 (三宅)

第 群土器 (第57図～第64図)

物見台式に相当するものである。破片数・個体数とも多いが、復原できたものはない。

本群土器は、貝殻腹縁文や刺突文を主体とするが、物見台式や千歳式のように幾何学的な文様構成をしないもの（A類）、沈線文・貝殻腹縁文・刺突文等によって、幾何学的な文様構成をするもの（B類）、文様構成の主体が沈線文と刺突文で、貝殻腹縁文の使用が極端に少ないもの（C類）、ほぼ無文の土器で、胎土や器面調整等の面から、本群に含まれると考えられるもの（D類）とに細分されるが、第3・4次調査ではA類土器は出土していない。

B類土器（第57図～第63図）

物見台式・千歳式のように、沈線文・貝殻文・刺突文等によって幾何学的な文様を構成するものである。

胎土には、植物性繊維を全く含まない。砂粒・沼鉄・白色凝灰岩を含むが、いずれも余り多量には含んでいない。また、約30%のものに金雲母が含まれている。器面調整は、全般的に良好で光沢を有するものが多いが、ほとんど行われぬものも多々みられる。器内面に条痕文を施したものは、全くない。

器形 4波状口縁のものと平縁のものがある。波状口縁のものには、波頂部の両側に小突起をもつものがあり（121）、また、平縁のものにも小突起をもつものがあるが（47、99）、いずれも少数例のようである。

口頸部は、おおむねキャリパー状をなすが、内湾するものとほぼ直立するものがあり、胴部文様帯との境は逆「く」の字状に強く屈曲するものが多い。この屈曲部以下の胴部は、底部からやや外反ぎみに立ち上がる。底部形状は、底部そのものの資料が少ないため明確ではないが、丸底にかなり近い尖底と考えられる。小形の土器には、丸底のもの（122・123の同一個体）と平底に近いもの（第24図12、第39図47）とがある。後者は、完全な平底ではなく、底部周縁よりも中心部が突出したナベ底状のものである。なお、小破片のなかに乳頭状突起をもつものもあるが、その比率は不明である。

口唇部の断面形状には、丸みをもつもの、やや外傾するもの、平坦なものなどがみられるが、内面側の稜線を別にして、器面側の稜線が明瞭なものは少なく、全体的に丸みを帯びている。

口唇部直下に貫通孔をもつものが若干ある（112、113）が、いずれも小形の土器である。

文様 文様は口唇部内面・口頸部・胴部に施文されるが、平底・丸底のものではその底面にも施文される。

口頸部文様帯と胴部文様帯の区画は、器形の屈曲部によるが、この屈曲部にはおおむね2条の平行沈線が巡っており、隆帯的な効果を生じたものが多い。沈線文の間隔は、通常6～7mmであるが、1cmを超え、最大幅1.5cmのものもある（70、119）。この沈線文間には、通常貝殻の腹縁部の背面側を押し付けたものと、若干引きずった条痕的な文様が付されるが、沈線に沿って貝殻腹縁文を施文したものや、沈線文間を2～3条の貝殻腹縁文で充てんしたのものもあ

る(70、116~119の同一個体)。

口唇部の内面に貝殻腹縁ないしヘラ状工具による刻みを付したものが多く、約80%を占めるが、このなかで、内面のコーナーに短かく施文したものが約90%を占めている。口唇の上端に付したのものには条痕文的なもの(13)、口縁と直交する腹縁文をもつもの(109)、口唇に沿って施文したもの(99、100の同一個体)がある。なお、13の内面には横位の腹縁文も施されている。また、内面に口縁と直交する長めの腹縁文を施文したものが2例存在する(116~119および120と121の同一個体)。

口頸部文様帯と胴部文様帯は、沈線文、小波状沈線文、貝殻腹縁文、刺突文等の組合せによって幾何学的な構成をなしている。

口頸部文様は、1・2に代表されるような三角形や長方形・鼓状等の比較的単純な文様を、波頂部ラインを境として対称的に割付けたものが多いようである。その単位は、波頂部間を1単位とするものと波頂部と波底部間を1単位とするものがあり、後者が多い。その単位間には入組状の沈線文が縦位に描かれ、その中心部には小円形の刺突文を付している。この他口頸部文様には、入組状沈線文が横位に巡るもの(14、17、18、48)、文様帯がX字状に分割され三角形と菱形との組合せにより構成されると考えられるもの(29・41)等あるが、小破片が多いため全容は明らかでない。単位文様の中に、小波状沈線文を施文したもの(2、34)、貝殻腹縁文で充てんしたもの(13、20、98、99、100、101と102の同一個体)、刺突文で充てんしたもの(第24図1)もあるが、全般的に少なく、沈線に沿った貝殻腹縁だけのもの、ないしは2~4条付加したもの(5、19、29他)が多い。

屈曲部以下の胴部文様帯では、文様は胴部の上部ないし中央やや下部まで展開する。無文と考えられるもの(72、73他)、全面に展開するもの(122、123の同一個体他)は少ない。平行沈線と横位に巡る小波状沈線の組合せのもの、幾何学的文様構成のもの(1、2、4、64、80他)とあるが、いずれが多いかは不明である。また、後者の文様構成には、90のように入組状の文様を構成したものもあるが不明な点が多い。しかし、口頸部文様帯の構成とは異なっている。

以上の文様構成は、沈線文、小波状沈線文、貝殻腹縁文、刺突文等の組合せによるが、この個々の要素について若干述べておく。

沈線には、通常の沈線文のほか、明神裏式に多用される押し引き手法によるものが一例みられる(5、7の同一個体)。沈線は鋭く深く施文されて明瞭なものが多いが、浅く不明瞭なものもある(107~110の同一個体、111)。

小波状沈線は、口唇直下、口縁部文様帯下部、胴部文様帯中に横位に施文されるが、斜位の沈線文間に施文した例(1、55、74、80)、縦位に短かく施文した例(45、64)、単位文様の中

に施文した例等がある。小波状沈線の施文手法には、通常の手法のほか、若干ひねりを加えて施文したものも多い。また、押し引き的手法によったものも1例ある(122、123の同一個体)。

貝殻腹縁文は、沈線を縁取るように沿って施文したものの、沈線の溝に腹縁を当てて施文したものなど副次的に用いられたものが多い。沈線によって区画された単位文様の中を充てんしたもの、沈線に対して直交する短かい刺突文的な施文のもの(45、64)もあるが、いずれも少数例である。しかし、単位文様の中を、貝殻腹縁押し引き文によって充てんしたものはない。特に、後者は5とともに明神裏式に関係するものと考えられる。なお、沈線に沿う貝殻腹縁文を一部欠くものは多いが、全く欠くものが少数みられる(34、47、97)。

刺突文には、小円形のものと若干長めのもの(9、10)とがある。後者はまれな例であり、明神裏式に通じるものであろう。小円形の刺突は、先端の鋭利な工具によって4～6mmと深く施文されたものが多い。その施文部位は、文様のコーナーや沈線の交差部分、小波状沈線文の終起点、および入組状沈線文の終起点および中心部等に施文される。特に、入組状沈線文の中心部、波頂部下の胴部文様帯との区画文中に施された場合には、瘤状の小隆起上に施されたものが多い。この瘤状の小隆起には、粘土粒を貼付けたもの、周囲から寄せ集めたもの、内面から指で押し出したもの等がある。5、9、10のように文様帯中に単独で施文されたものは少ない。また、沈線上に多数の刺突文を施文した例はない。

以上、B類についてその特徴を述べたが、116～119と120、121の2個体は口頸部文様帯幅が特に広く、これに従って文様構成も大きく展開している。また、口唇部断面形状、口唇内面に施文された長めの貝殻腹縁文など、他と異なる点が多い。これをB類2種として、他のもの(B類1種)と一応区別しておく。

C類(第64図1～11)

文様構成の主体が沈線文と刺突文とによって行われ、貝殻腹縁文の使用が極端に少ないもので、蛇王洞層に類似すると考えられる。なお、3～5、7～11は同一個体である。

小破片のため、器形等については不明であるが、緩やかな波状口縁を呈する。

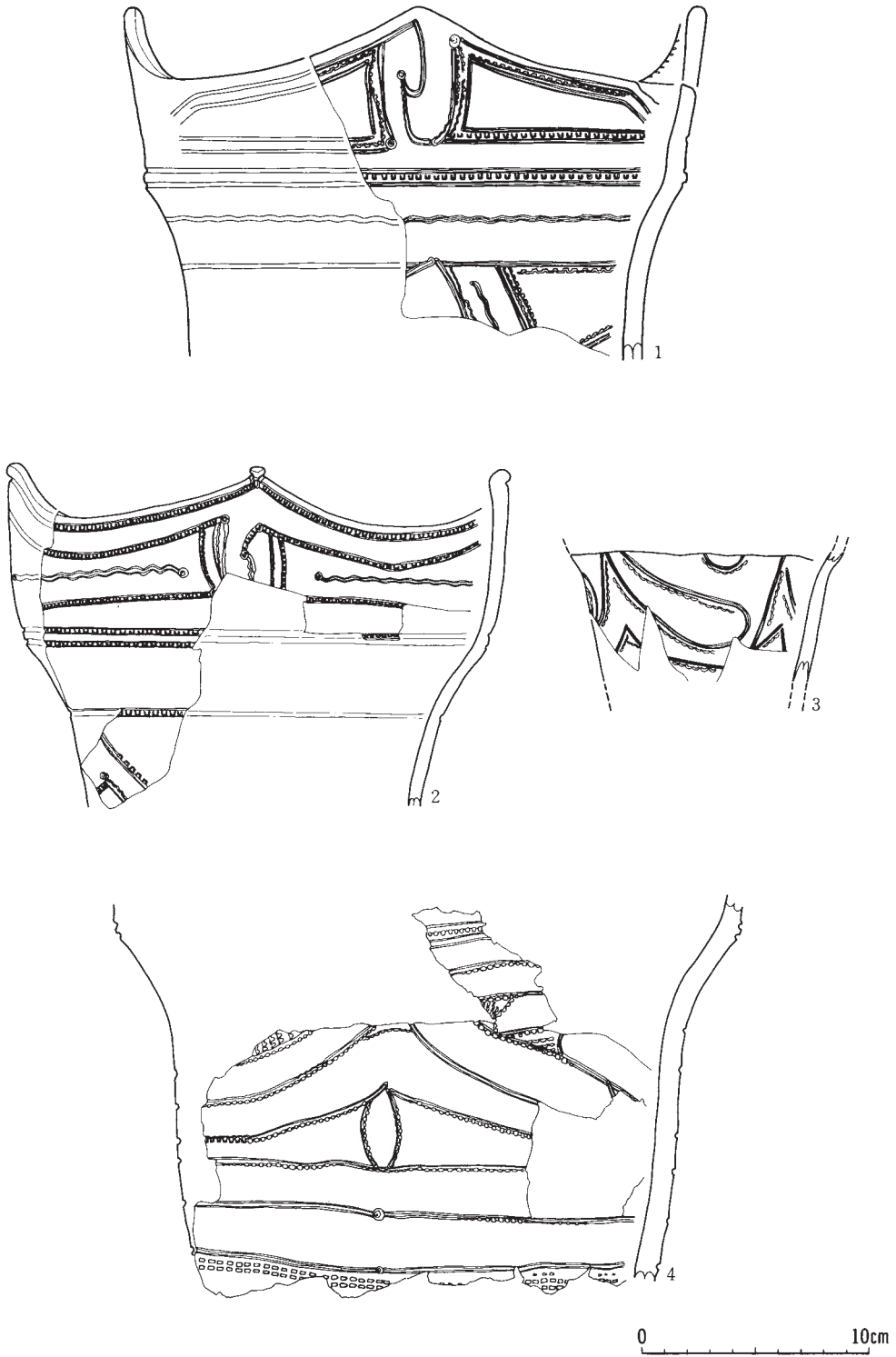
2と6は、器内面に荒い条痕文を施している。器面内外の調整はほとんど行われていないが、1、2の器表面はやや良好である。

1は、平行沈線文によって菱形を構成したもので、刺突文、貝殻文は施文されていない。

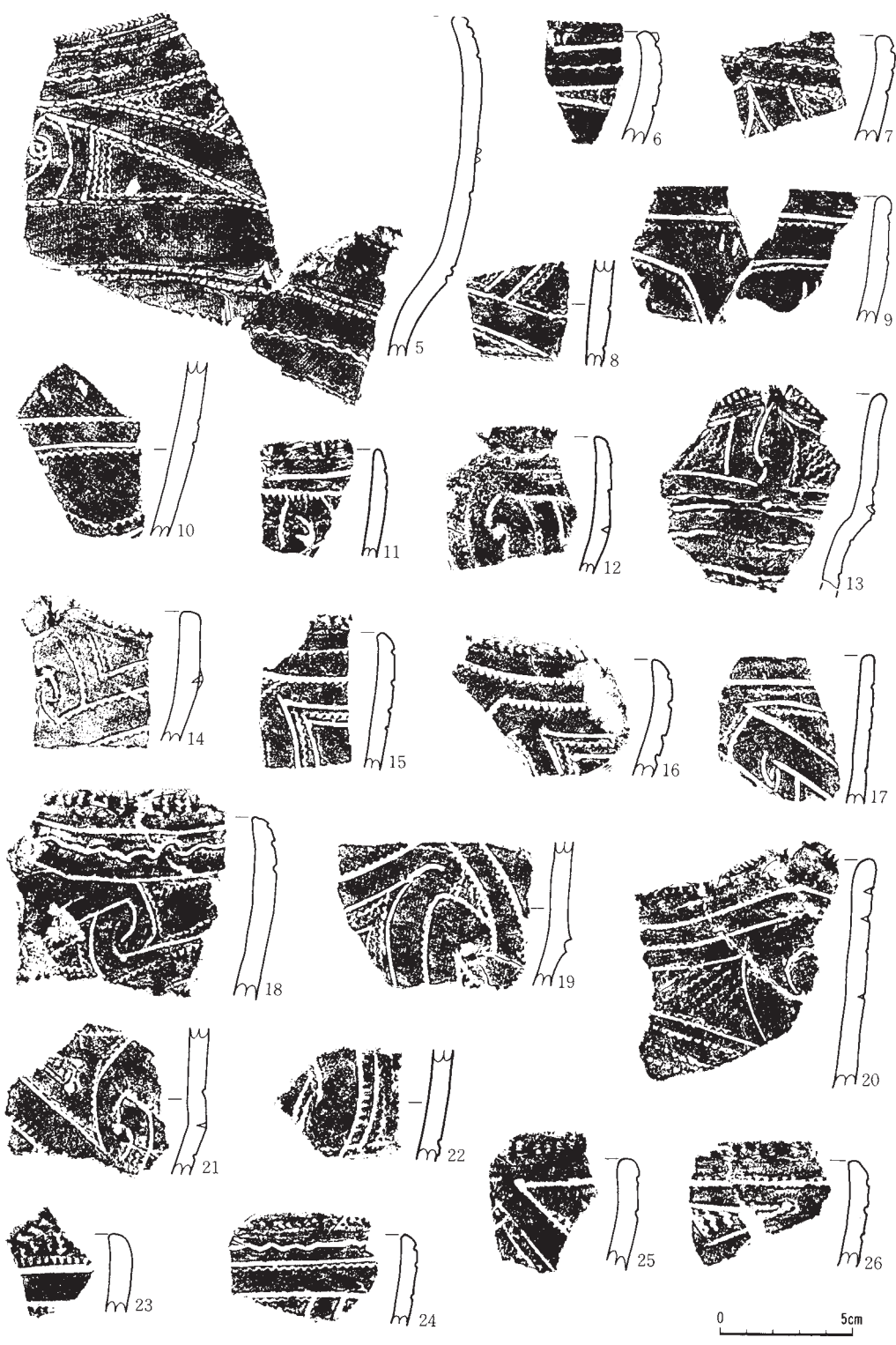
2は、波状口縁を呈するもので、6条の斜行する平行沈線に沿って小円形刺突列を施文したものである。貝殻腹縁文が口縁部から垂下している。

6には、沈線文、刺突文、貝殻腹縁文が施文されている。

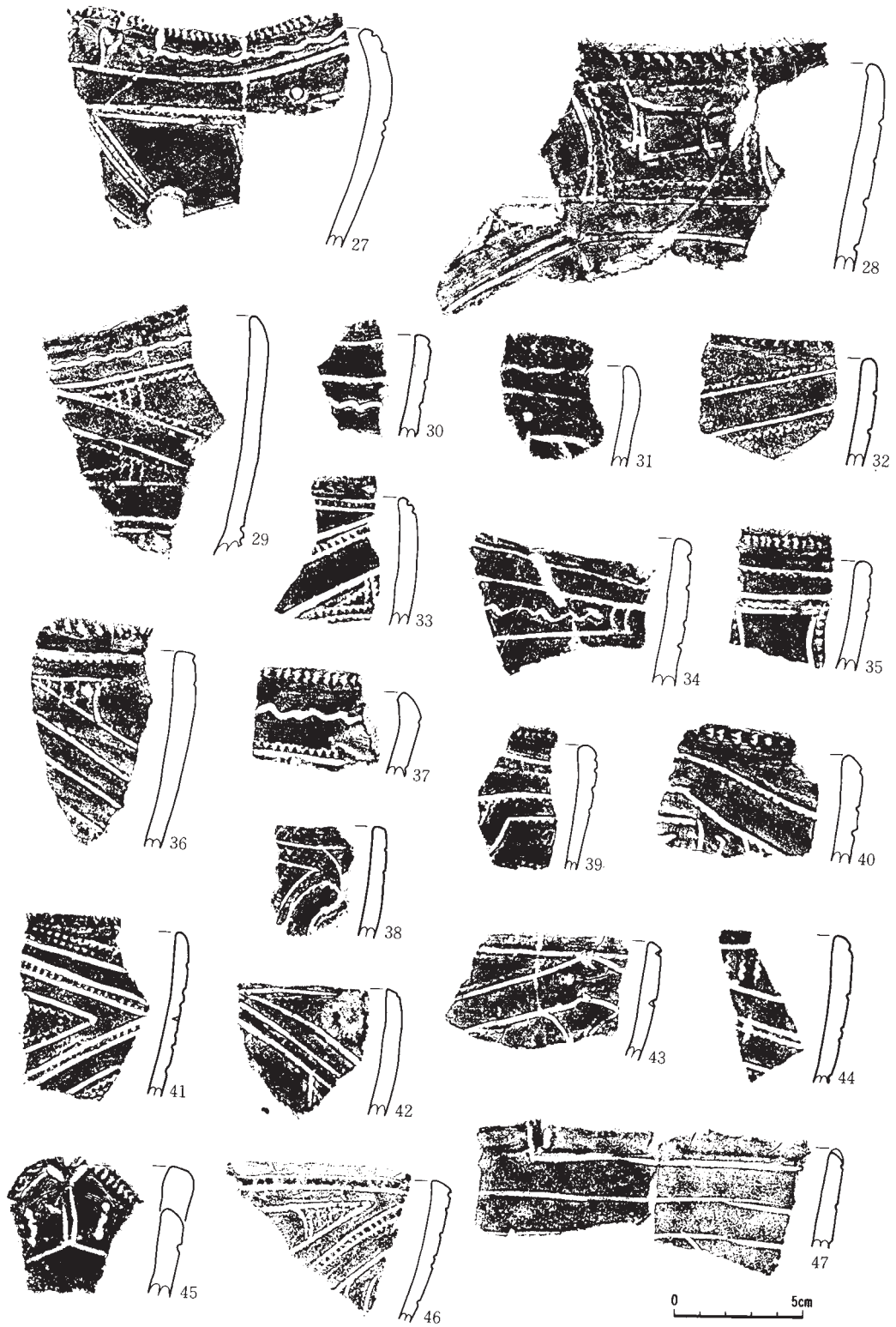
3以下は同一個体で、半截竹管状の工具によったと考えられる平行沈線文と刺突文及び短かい条痕文によって文様を構成している。平行沈線は、口縁に沿うものと、波頂部から左右に斜



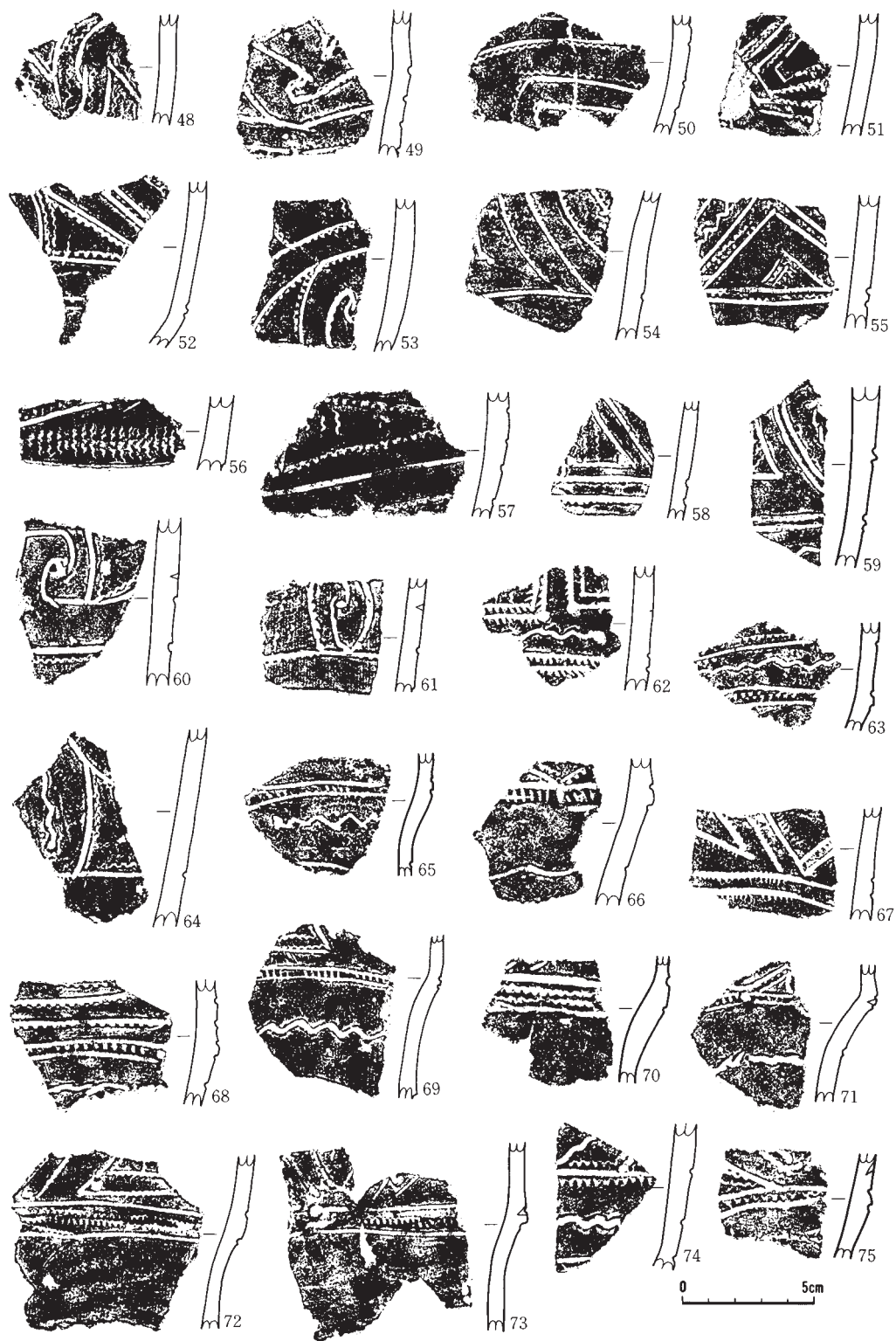
第57图 第V群土器实测图



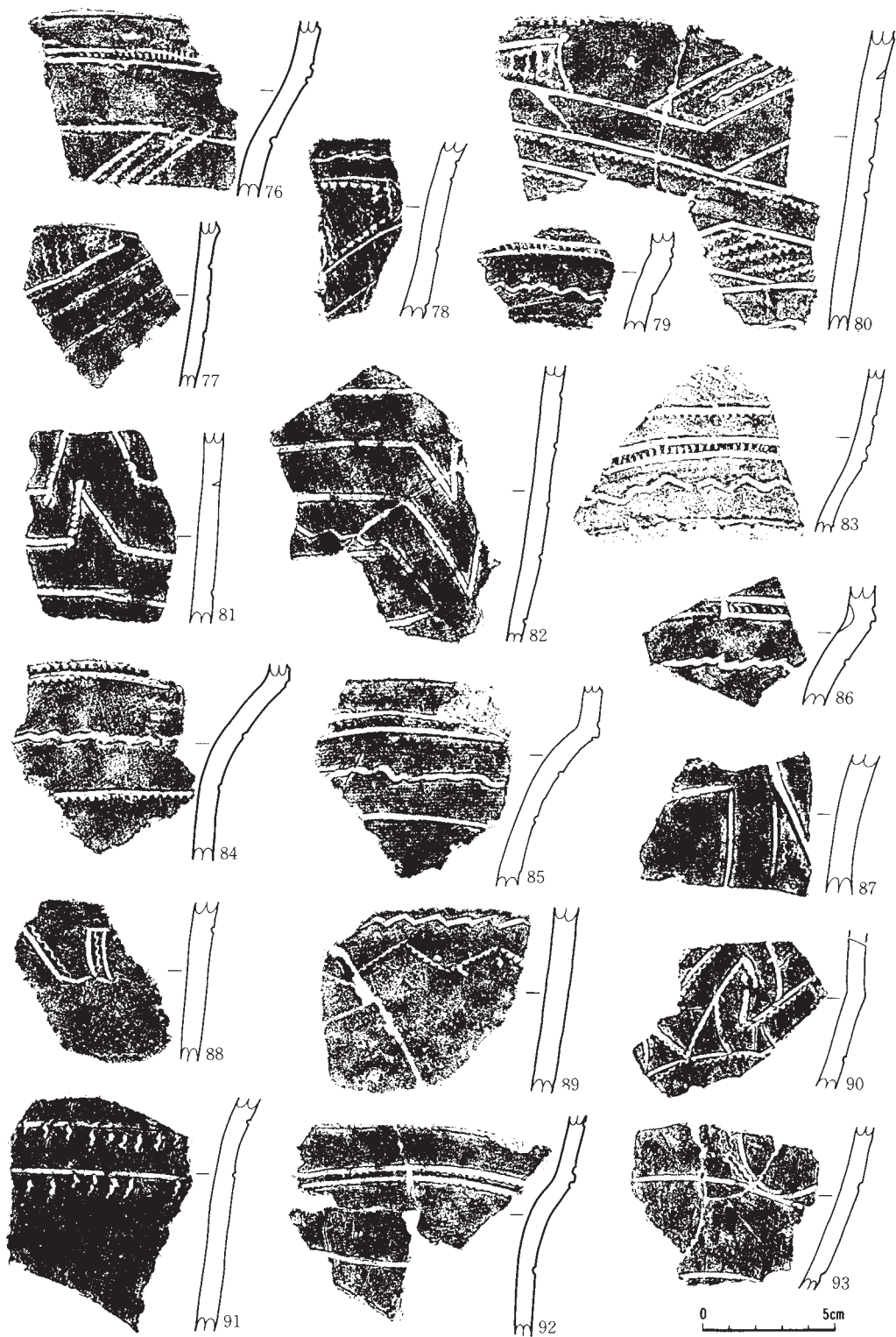
第58图 第V群土器拓影图



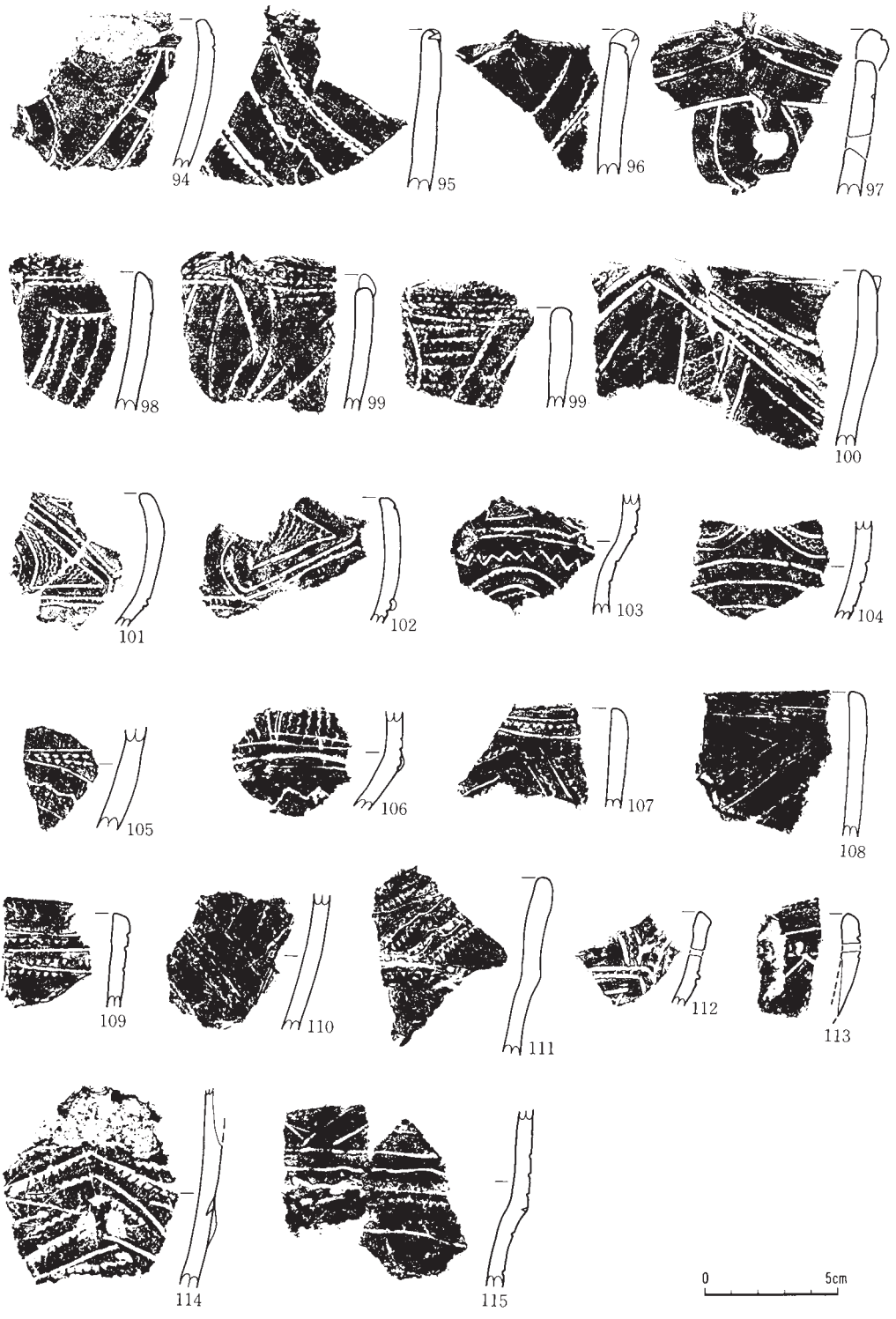
第59图 第V群土器拓影图



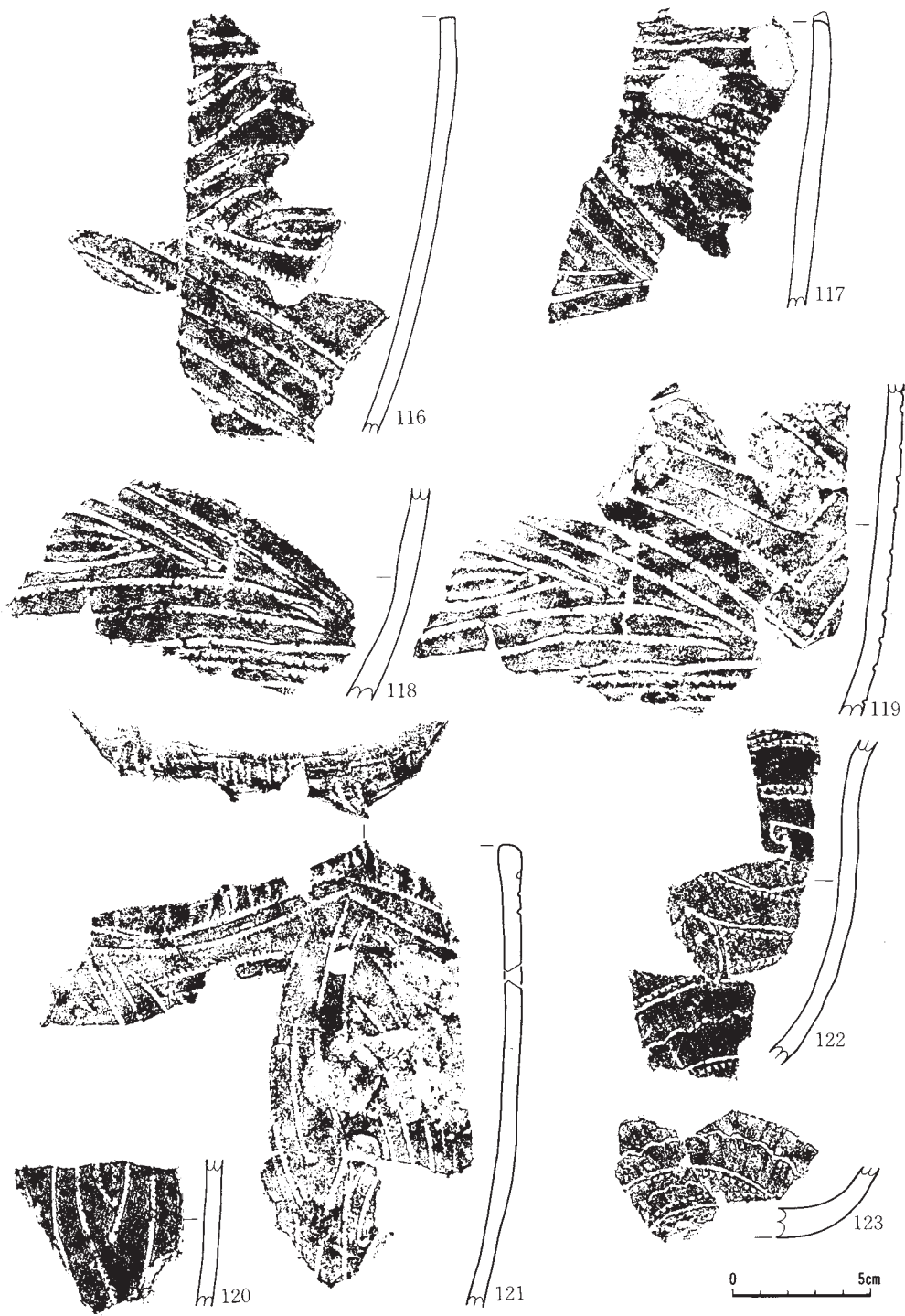
第60图 第V群土器拓影图



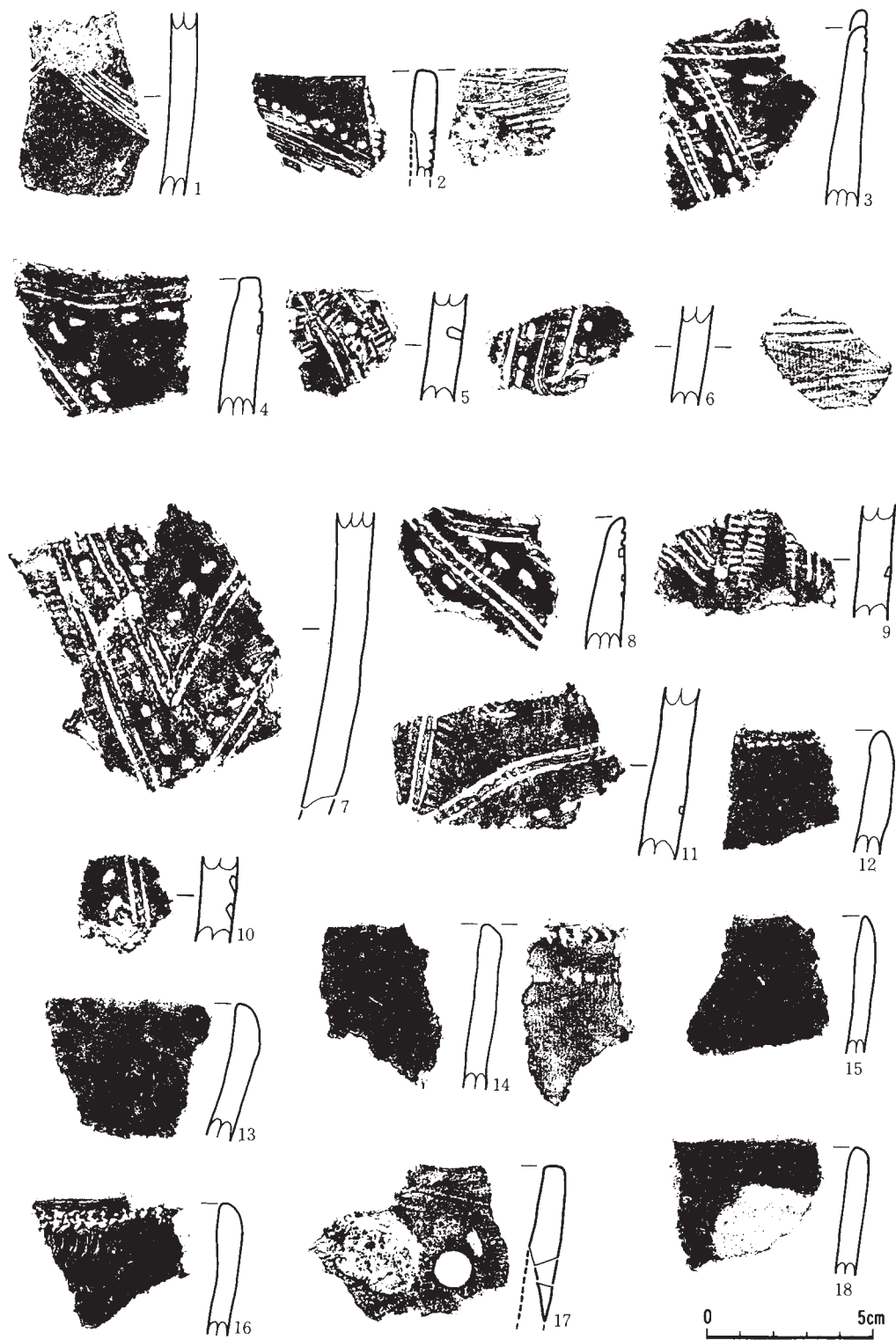
第61图 第V群土器拓影图



第62图 第V群土器拓影图



第63图 第V群土器拓影图



第64图 第V群土器拓影图

位に数条施文され、この平行沈線に沿って刺突文が施文されている。条痕文は沈線文が施された範囲に施文され、空白部にはほとんど及んでいない。この手法は、B類の文様帯区画部に用いられる手法に共通するといえる。

D類（第64図12～18）

器表面がほぼ無文であるが、胎土や器面調整等の面から第 群、特にB類に伴出することが明白なものである。

12、14、16の口唇部の内面コーナーには、貝殻腹縁による刻みが加えられている。12は、口縁に沿って貝殻腹縁文を施文している。16の口唇部直下には、横位と縦位の貝殻腹縁文が重複して施文され、この若干下位には爪形が残されている。 （三宅）

第 群土器

縄文時代早期後葉のムシリ 式土器に対比できるものであるが、ほとんど破片で、約500点出土した。全体の器形を明確に知り得るものはない。本群土器は、大グリッド25 ・ ・ ・、30 ・ ・ ・、70 ・ に主に分布し、出土層位は第 層であるが、第 層にも少数みられる。ここでは、主に文様を中心に分析を行い、施文文様の相違から次のように分類した。

A類土器：沈線文のみを施文した土器

C類土器：条痕及び擦痕のみを施文した土器

D類土器：隆起線文を施文した土器

E類土器：絡条体圧痕文を施文した土器

F類土器：文様不明の底部片

（胎土について）

一般的に、砂粒・石英・長石・白色凝灰炭粒・沼鉄を含むが、個体により含有量に差がある。繊維の混入は認められない。

（粘土帯の接合について）

粘土帯の幅は、3～4cmが一般的であるが、中には5cmほどの幅をもつものもみられる。接合面の断面形状は、口縁部側が滑らかな凸状、底部側は、滑らかな凹状で、接合部分での剥落はあまりみられない。口縁部側の断面形状では、擬似口縁を呈するものがみられる。接合部分の厚さは接合部分以外と比べて特に厚くなるとはいえない。そのため接合面を観察し得ない破片では、明確にその接合部分及び粘土帯の幅を知り得ることはできない。

（土器について）

A類土器（第65図～第72図）

沈線文のみを施文した土器を一括した。更に文様により4種類に分類できる。

AⅠ類土器 （第65図1～第68図98）

平行沈線文を施文したものであるが、文様により、更に、A I - 1（単純な平行沈線文を施文したもの）、A I - 2（格子目状沈線文を構成するもの）に分類できる。

A I - 1：（1～68）単純な平行沈線文を施文したものである。破片数382点で、本群土器の中で最も多く出土し、E E - 28、E F - 28を中心に集中している。器形を、復原し得たものはないが、深鉢形の平底土器と思われる。口縁は、（28）を除くとすべて平縁である。（28）は、やや大きめの波状口縁を呈し、口縁部はやや外反している。他の口縁部片の立ち上がりは、直立するものと外反するものがあるが、その割合は半々である。口唇部の形状は、平坦あるいは平坦に近いものが多く、（6）のように削り取ったように平坦なものもみられる。底部片は5個体（64～68）あるが、すべて平底を呈している。底部の立ち上がりは、直立するものとやや外傾しながら立ち上がるものとに分けられる。（68）はやや上げ底気味の形状を呈している。底部の厚さは、5～6mm程度で極めて薄いといえる。推定される底径は、（65）8cm、（67）8.4cm、（68）8cm。胎土に、金雲母を含むものが1点（6）みられる。焼成は全般的に良く、色調は黒褐色、明褐色、暗褐色、赤褐色を呈し、器厚は4～5mm前後で、薄い。器表面に炭化物が附着するものが3点（21、48、55）みられる。文様は、器表面にほとんど斜位の平行沈線文を施文しているが、縦走（7）横走（26）するものもみられる。土器片の約半数は、器表面に、内面と同様の貝殻条痕による調整を行った後に、平行沈線文を施文している。内面には、土器片の約8割に貝殻条痕による調整が行われている。貝殻条痕は、条の幅が狭く緻密なものから、幅のやや広いものまで多様であるが、貝の種類の違いによるものか、貝殻の使用部分の違いによるものと思われる。また、横位、斜位に施され、中には光沢をもつほどよく調整されているものもみられる。

（69）は胴部に段（隆帯か？）をもつものであるが、文様的には、本類と同様なのでここでとりあげる。1点のみ出土した。この段は内面から押し出したような形状を呈する。丸底あるいは尖底に近い底部をもつ深鉢形土器と思われる。文様は、器表面に貝殻条痕による調整を行った後、細く浅い平行沈線を斜位（右下り）に施文している。内面には、貝殻条痕による調整が行われている。

A I - 2：（70～98）格子目状の沈線文を施文したもので、大グリッド25 を中心に32点出土した。器形は、深鉢形と思われる。口縁部の立ち上がりは、直立するものとやや外反するものがあり、口唇部の形状は平坦に近い。底部片はないが、平底を呈するものと思われる。推定される口径は、（76）約30cm、（77）約20cmで、やや大型である。焼成は一般に良く、色調は明褐色、暗褐色を呈している。器厚は5～6mm前後である。

文様は、器表面に内面と同様の貝殻条痕による調整を行った後に、斜位（右下りと左下り）の平行沈線文を施文することによって格子目状の沈線文を構成している。（77）は、口唇直下に

1条の横位の沈線を巡らし、胴部のみ格子目状沈線文を構成し、口縁部付近は、斜位（右下り）の平行沈線文になっている。ほとんどの土器片の内面に、貝殻条痕による調整が行われている。

A 2 類土器（第70図99～第71図123）

沈線によって幾何学的な文様を構成するものを一括した。破片数25点で、大グリッド25・に分布する。器形は、全体を知り得るものはないが、深鉢形土器と思われる。口縁部は、すべて平縁で外反するものが多く、口唇部の形状はおおむね平坦に近い。推定される口径は、(104) 19cm、(118) 13cmである。器厚は4～6mm前後である。また(118)にはスス状の炭化物の附着がみられる。焼成は一般によく、器表面は明褐色、黒褐色、暗褐色を呈する。文様は、以下のように5種類に分類できる。

A 2 - 1：(100～113) 異方向の平行沈線を交互に組合せることによって幾何学的な文様を構成する。すべての器表面に平行沈線施文前に貝殻条痕による調整が行われている。

A 2 - 2：(99) 1点のみであるが斜位の平行沈線の施文角度を変えることによって文様を構成する。器表面には、A 2 - 1同様の調整が行われている。

A 2 - 3：(114～116) 器表面に、斜位の貝殻条痕による調整を行った後で、口唇から7.5cmほどの幅に斜位の平行沈線文を施文し、それを区画するように1条の横位の沈線を巡らして、上部文様帯を構成する。

A 2 - 4：(117～119) 器表面に貝殻条痕による調整を行った後に、梯子状の沈線文を施文する。

A 2 - 5：(120～124) 全体的な文様は不明であるが、幾何学的な文様を構成していると思われる。

ほとんどの土器片の内面には、貝殻条痕による調整が行われている。

A 3 類土器（第72図1）

水波文状に沈線を施文したもので、E E - 28、E F - 28から1個体のみ出土した。底部片はないが、平底の深鉢形土器と思われる。平縁で、口縁部はやや外反する。文様は、器表面に貝殻条痕による調整を行った後に、沈線を水波文状に施し、それを鱗状に何層にも配している。内面には、目の細かい貝殻条痕による調整が行われている。焼成は良く黒褐色を呈する。器厚は4～5mm前後である。

A 4 類土器（第72図125～140）

口頸部文様帯と胴部文様帯を構成するもので、E G - 30を中心に16点出土した。器形は、平縁の深鉢形土器と思われる。口縁部はやや外反し、口唇部の形状は平坦である。文様は、器表面に貝殻条痕による調査を行った後で、斜位（右下り、縦位に近い）の平行沈線文を施文している。そして、口唇直下に斜位（左下り）の短い平行沈線文を施文して、口頸部文様帯を構成

する。また、口唇から7cmの胴部にも同様の短い平行沈線文を施文して、胴部文様帯を構成している。内面には、貝殻条痕による調整が行われている。

C類土器（第73図141～156）

器表面に条痕あるいは擦痕のみを施したものを一括した。(141～147・156)は、器表面に貝殻条痕を施したものである。口縁部はやや外反しながら立ち上がり、口唇部の形状は平坦に近い。内面には、貝殻条痕による調整が行われている。(156)の推定底径は8cmである。

(155)は、小型の深鉢形平底土器で、上げ底気味の底部形状を示している。器表面には、細かい貝殻条痕が施され、内面にも同様の調整が行われている。推定底径は5.5cmで、器厚は4～5mmである。

(149、150、152)は、同一個体で深鉢形を呈する。器表面には粗い貝殻条痕が施され、更にそれをナデたような様相を呈する。内面にも同様の調整が行われている。

(153、154)は、口縁部片であるが、やや外反しながら立ち上がり、口唇部が丸みを帯びている。器表面には、工具は不明であるが細かい擦痕がみられ、内面にも同様の調整痕が認められる。

(151)は、棒状工具による擦痕と思われ、内面も同様である。

(148)は、前述のどれとも異なり、条の極めて細い調整痕がみられるが、工具は不明である。

D類土器（第74図157～第75図170）

隆起線文を施したものを一括した。更にDⅠ類（微隆起線文を施したもの）と、DⅡ類（細隆起線文を施したもの）に分類できる。

DⅠ類土器（157～165）

いわゆる微隆起線文を施したもので14点出土した。器形は、平縁の深鉢形土器と思われ、口縁部はやや外反し、口唇部の形状は平坦である。器厚は、4～5mm前後であるが、中には3mmと極めて薄いものもみられる。文様は、微隆起線を数本平行に施すもの(158、159)と、2本の微隆起線で区画した中に梯子状の微隆起線を施すもの(160～165)とがある。

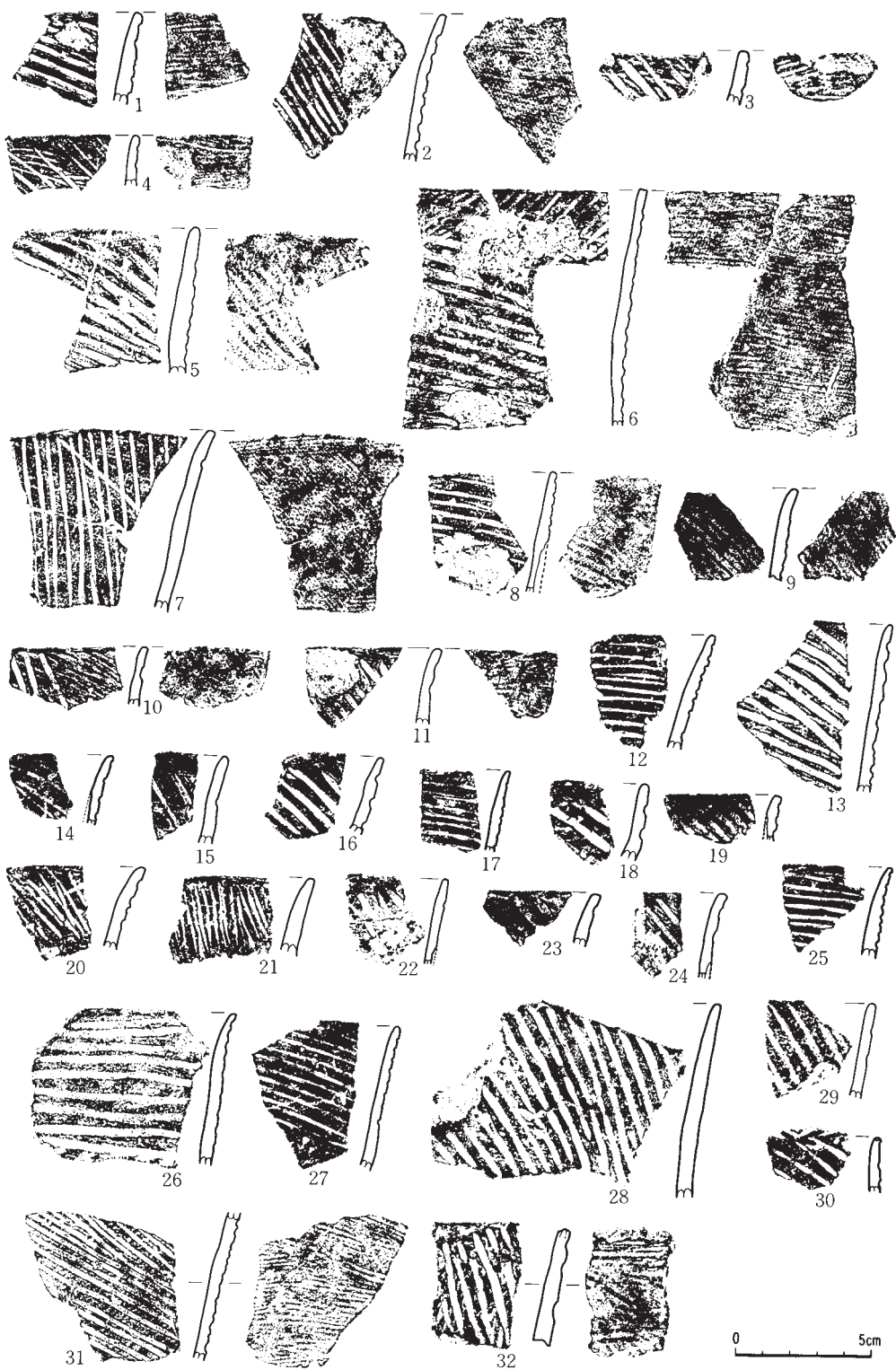
(157)は、上部にやや横位の梯子状の微隆起線文を施文し、それ以外の器表面に貝殻条痕による調整痕のみを施している。

(164)は、胎土に金雲母を含み、補修孔が1個みられる。

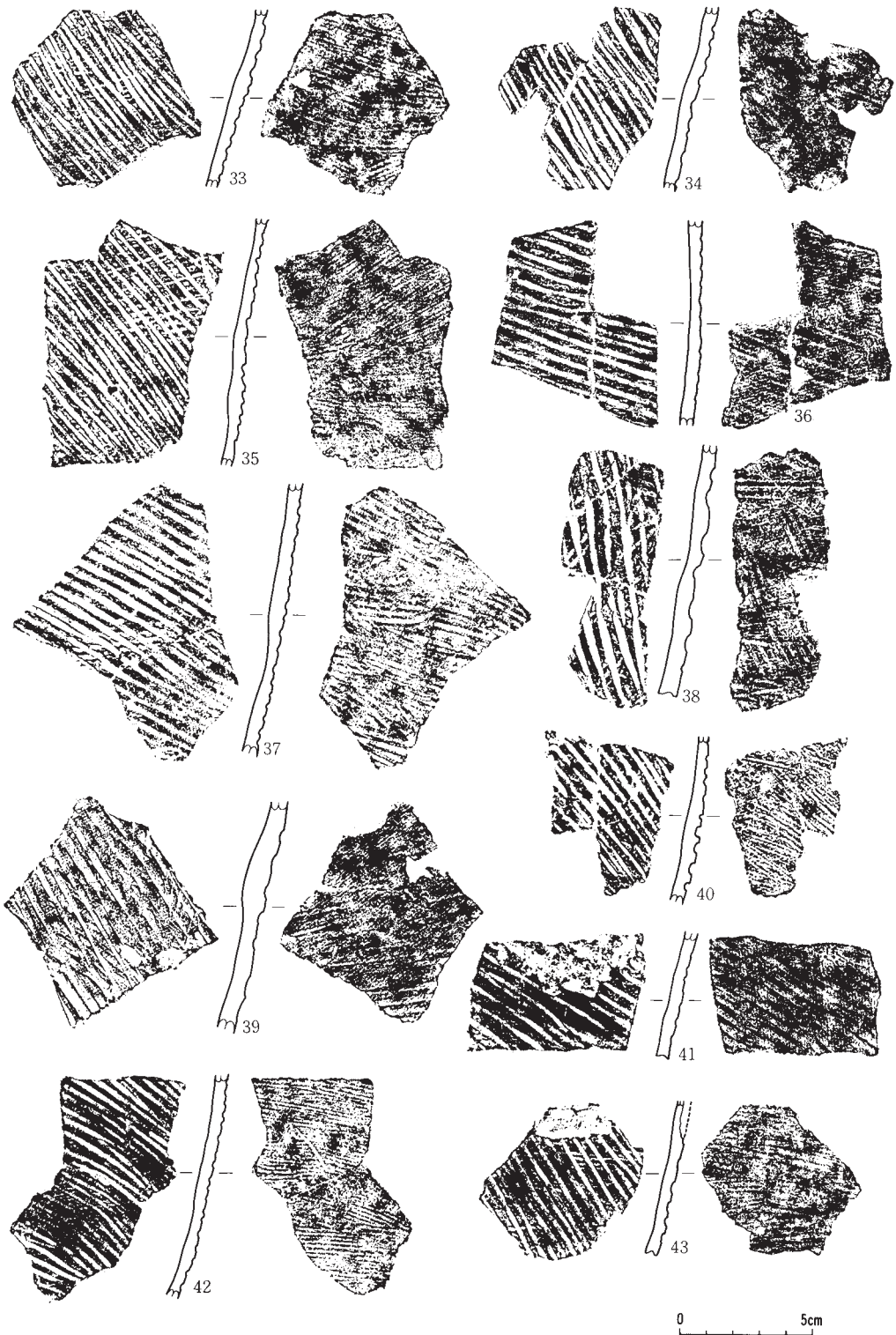
本類のすべての土器の内面には、貝殻条痕による調整が行われ、特に(160)は、光沢をもち良く調整されている。

DⅡ類土器（167～170）

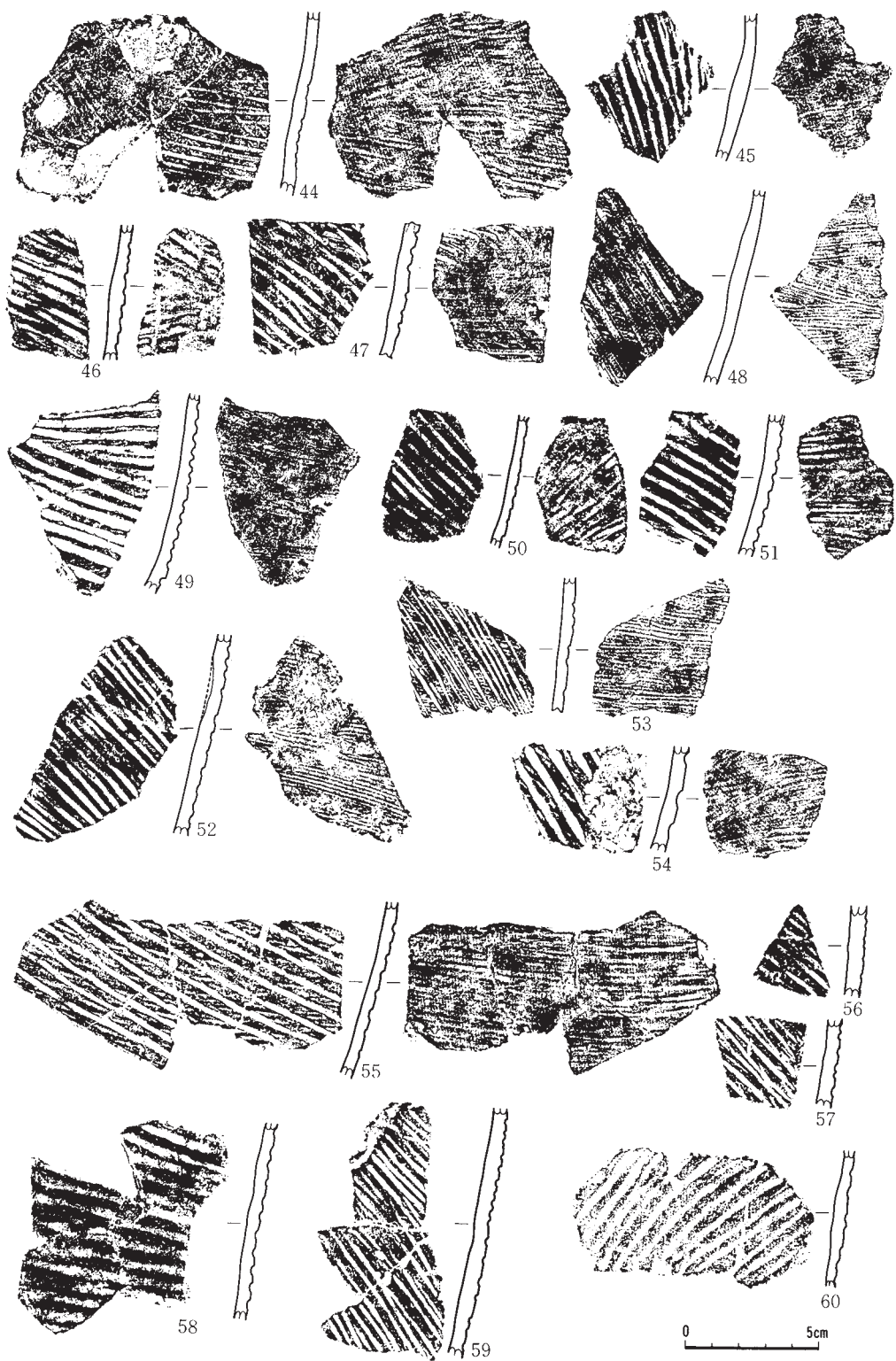
細隆起線文を施したものである。(167・168)は、2本ないし3本の細隆起線を横位に巡らす。(168)には、補修孔が1個みられる。



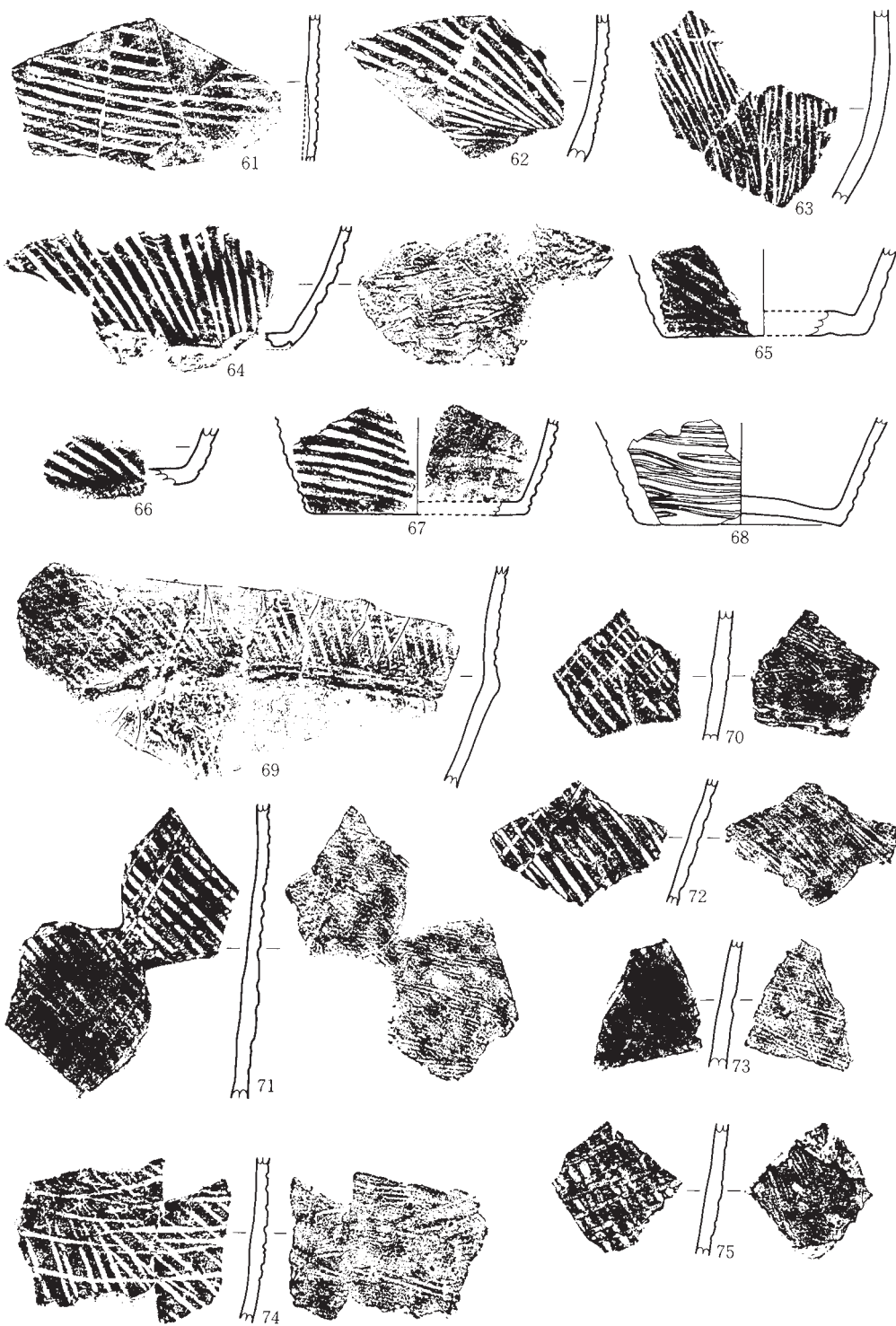
第65图 第VI群土器拓影图



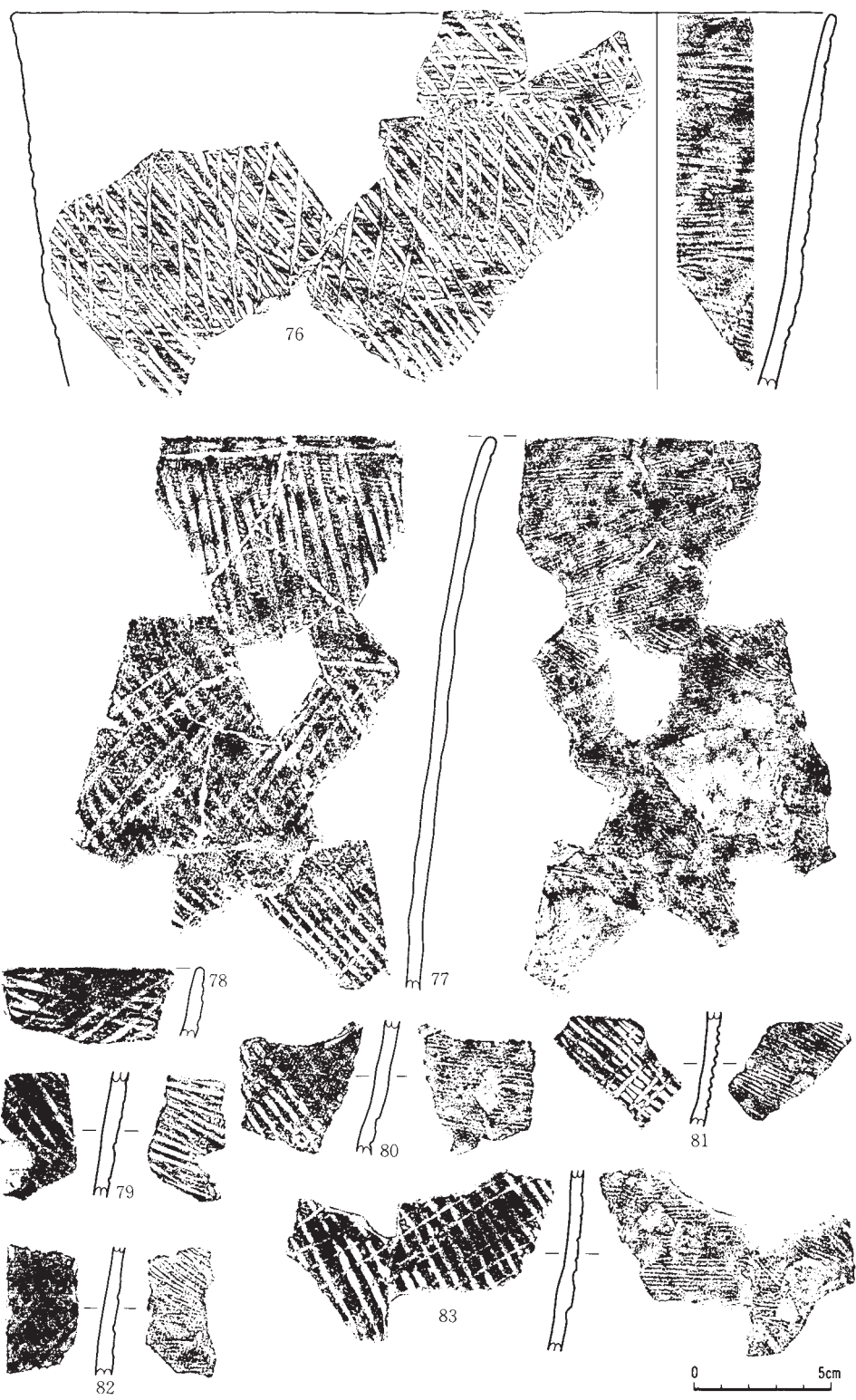
第66图 第VI群土器拓影图



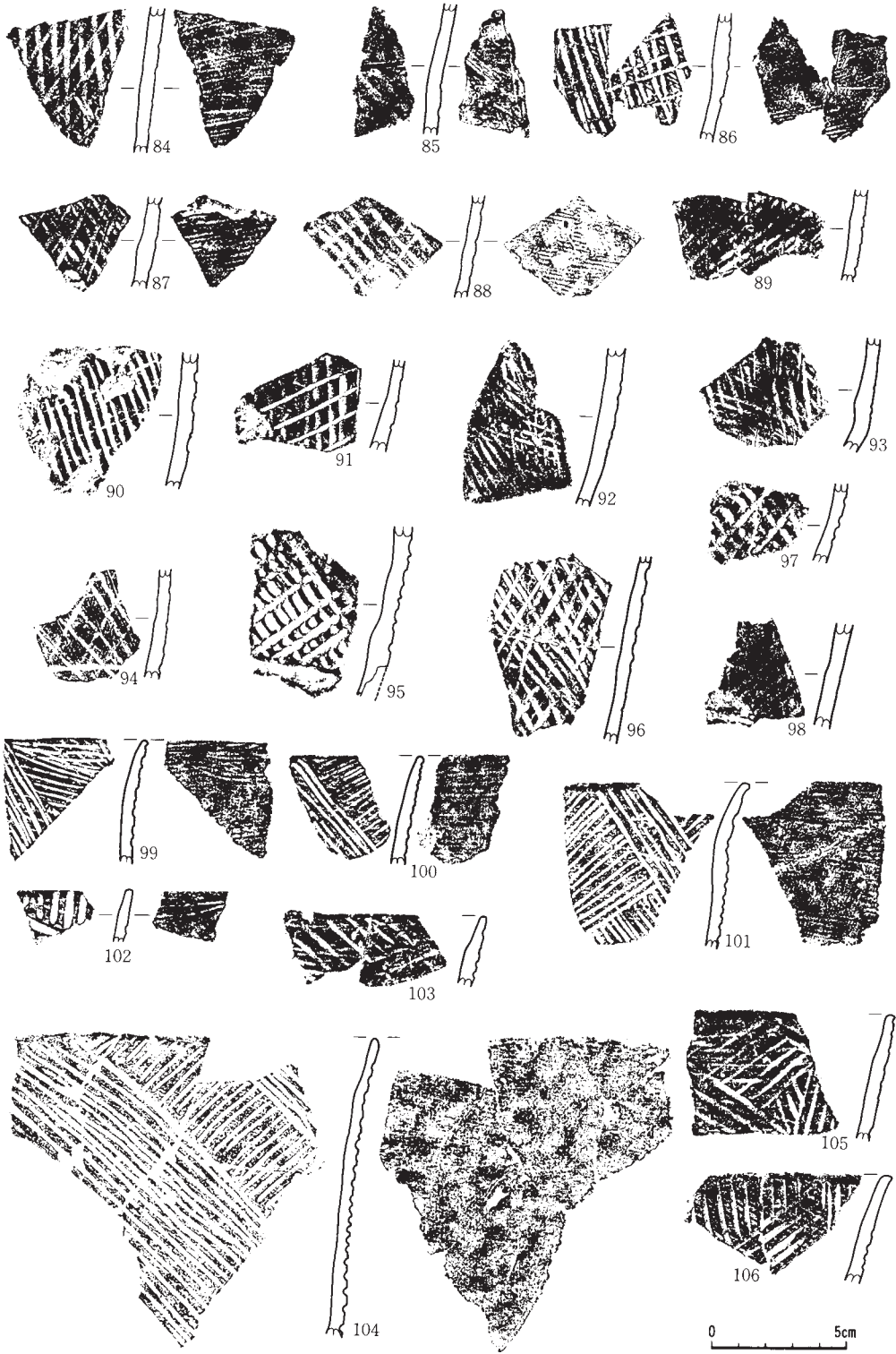
第67图 第VI群土器拓影图



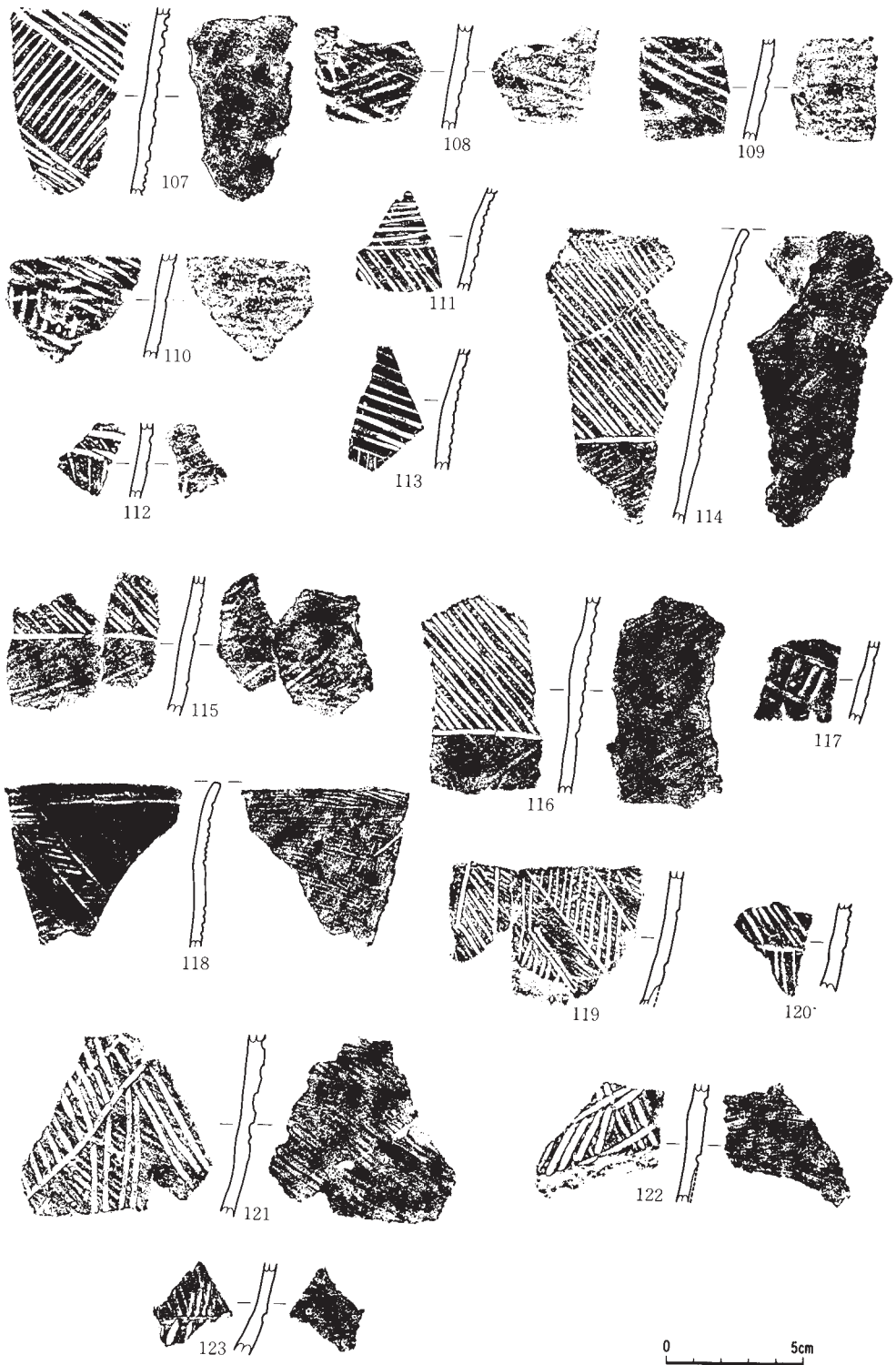
第68图 第VI群土器拓影图



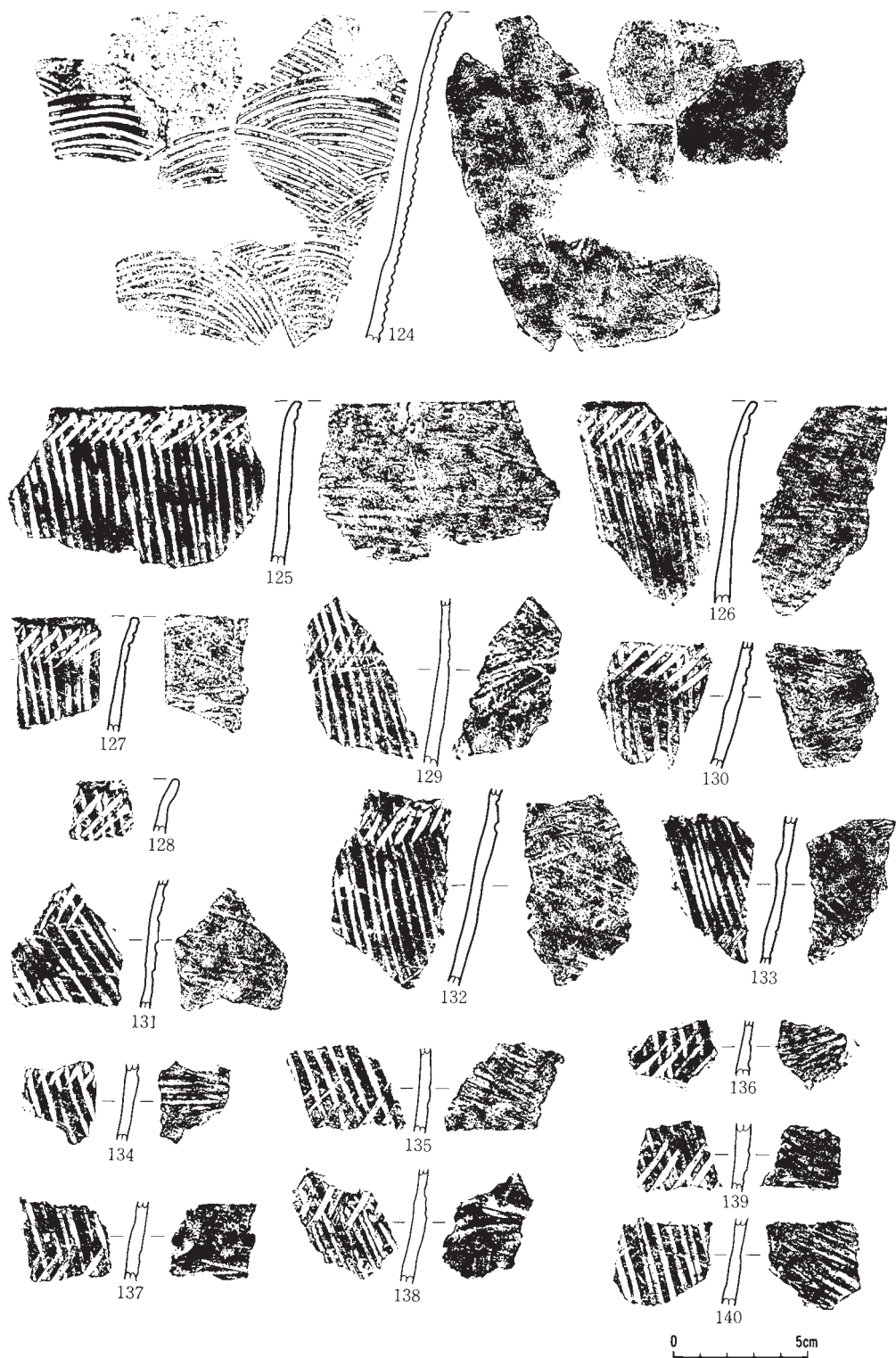
第69图 第VI群土器拓影图



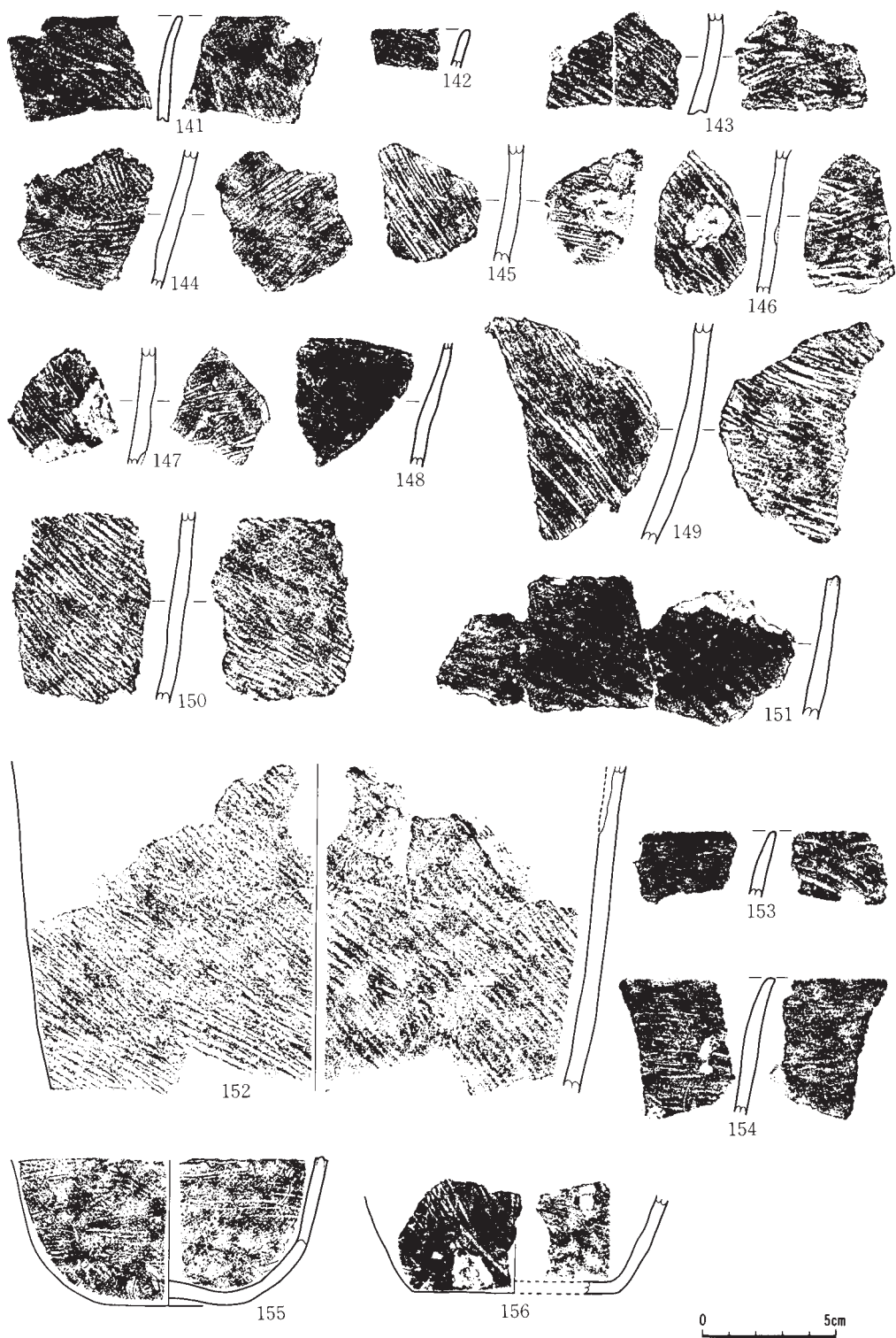
第70图 第VI群土器拓影图



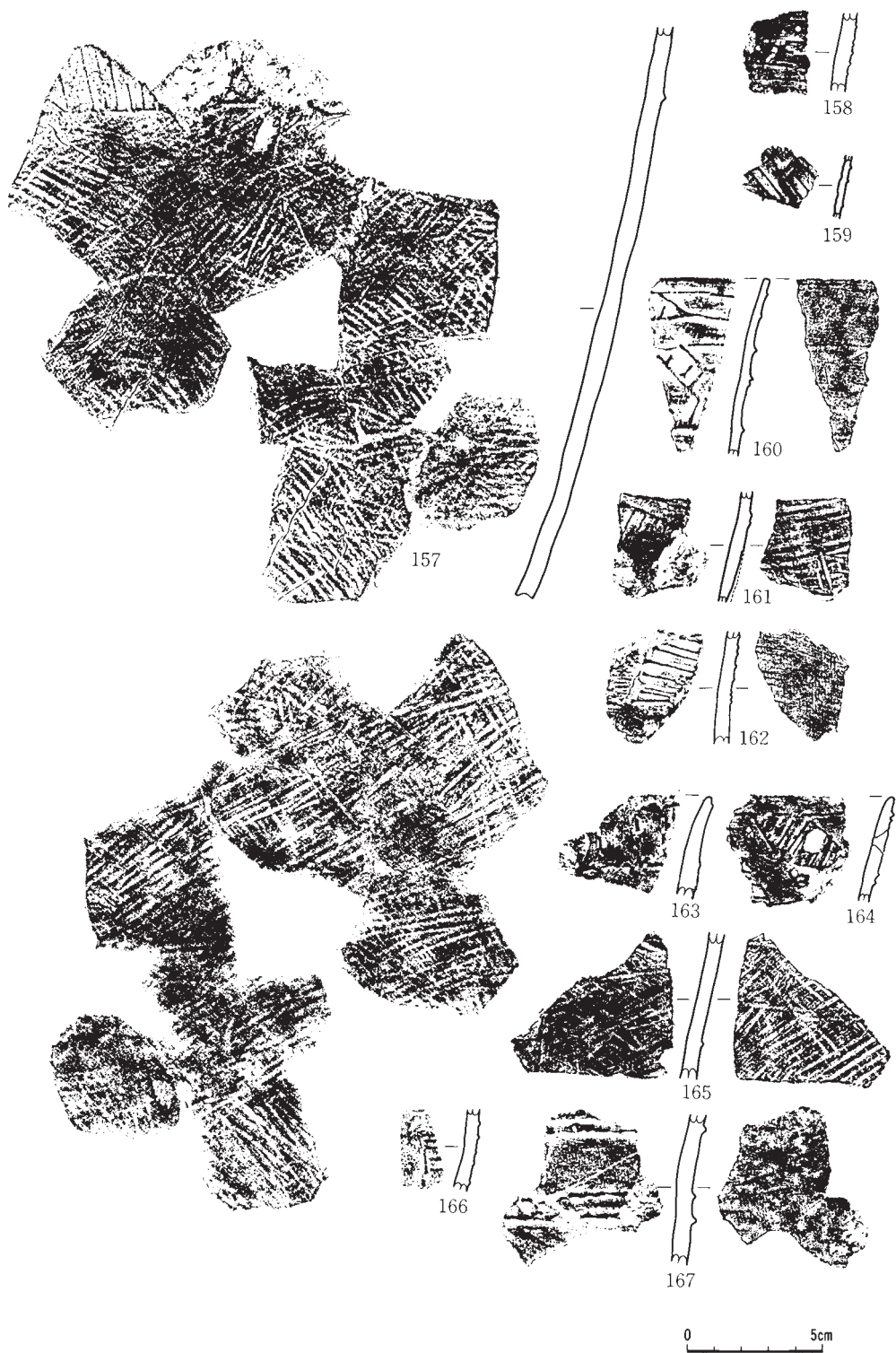
第71图 第VI群土器拓影图



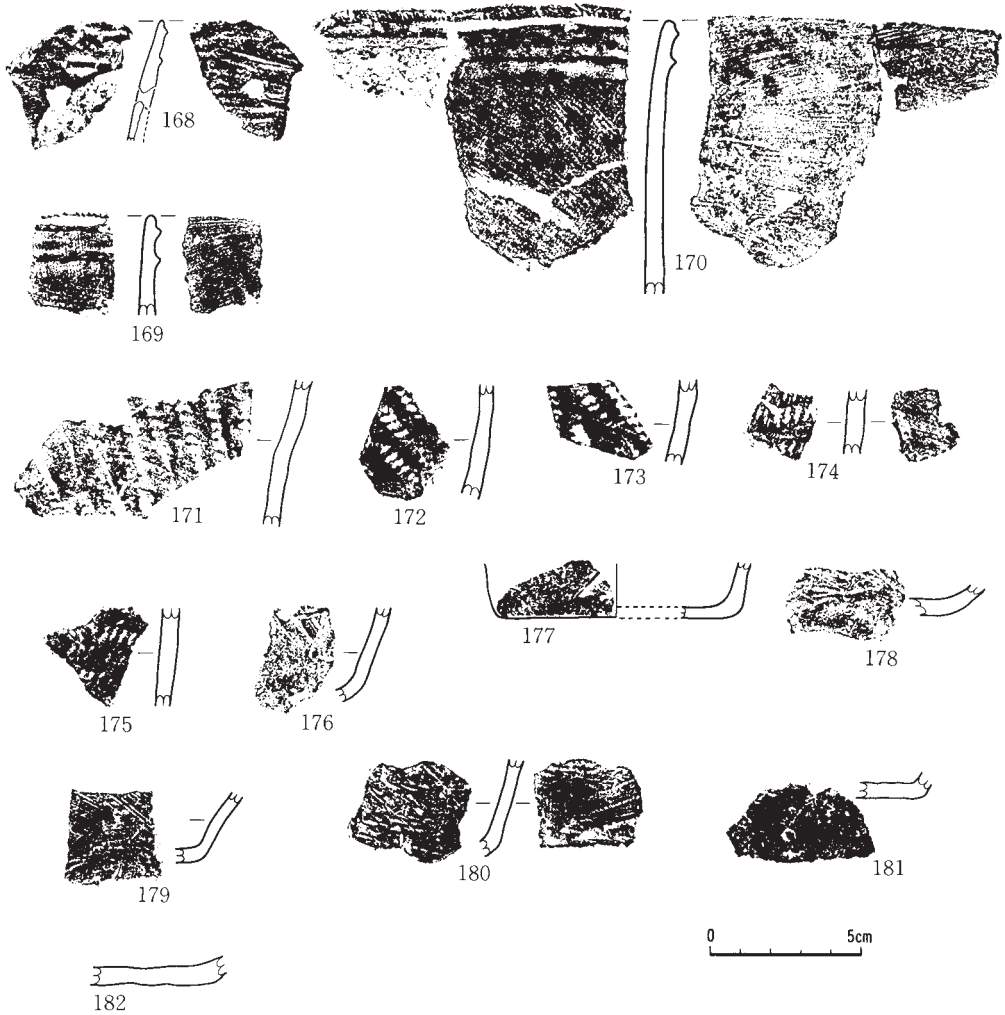
第72图 第VI群土器拓影图



第73图 第VI群土器拓影图



第74图 第VI群土器拓影图



第75図 第VI群土器拓影図

(169・170) は、同一個体で、平縁の深鉢形土器である。口縁部はやや外反し、口唇部には細かい刻み目が密に施されている。推定口径は18cmで、器厚は6～7mm前後である。文様は、器表面に貝殻条痕による調整を行った後で、口唇直下に2本の細隆起線を横位に巡らしている。胎土には、石英を多量に含む特徴があり、内面には、器表面と同様の調整が行われている。

E類土器(第75図171～175)

絡条体圧痕文を施文したもので、5点出土した。器形は不明である。

(171～173) は、同一個体と思われ、1段Rの絡条体圧痕が4～5mm程度の間隔で斜位に施文される。圧痕がつぶれたような形状を呈していることから、施文後に器面を何かでナデたと思われる。内面には、工具は不明であるが調整痕が認められる。

(174、175)は、1段Lの絡条体圧痕を横位に施文し、内面には、条間の狭い調整痕がみられる。

色調は、暗褐色、黒褐色を呈し、器厚は5～6mm程度である。

F類土器(第75図176～182)

胴部文様の不明なものや明確でない底部片を一括した。すべて平程を呈する。(176、178、179、180)は、器表面に貝殻条痕による調整痕がみられる。(179、180、181、182)の内面には、貝殻条痕による調整痕がみられる。推定底径は(177)7.8cmである。(一条)

第 群土器(第76図～第77図)

太く、彫りの深い平行沈線文を施文したものを一括した。平行沈線文の施文は第 群土器(ムシリ 式土器に対比)に類似するが、胎土、器厚、沈線の太さ、探さに違いがみられるので分離した。総破片数約150点で、主に大グリッド25・・、30、70に分布した。出土層位は第 層であるが、第 層にも少数みられる。

(胎土について)

砂粒、白色凝灰岩粒、沼鉄を含む。第 群土器に比べて、焼成の良いものもあるが、おおむね焼きがあまく、胎土は緻密さに欠ける。内面も粗いものが多い。

(土器について)

復原し得たものがないため、明確な全体器形は不明であるが、平縁の深鉢土器と思われる。口縁部の立ち上がりは、やや外反するもの、直立するもの、内湾するものがみられ、口唇部の形状は、平坦に近い。底部片は2点のみであるが、平底を呈する。(23、35)の胴部片は、その形状から丸底、あるいは尖底の可能性はあるが、推測の域を出ない。

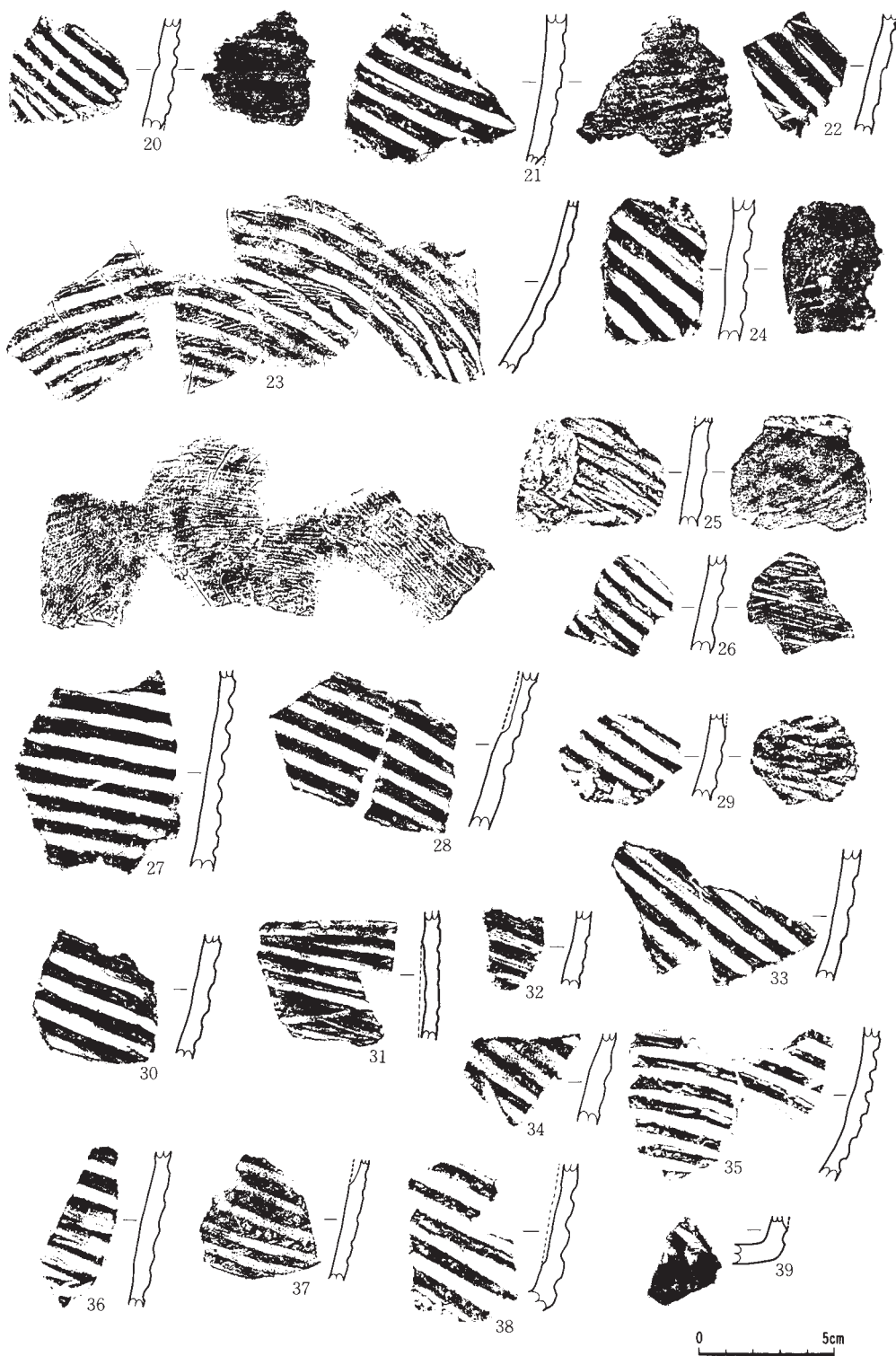
文様は、器表面に斜位(右下り)の平行沈線文が施文されるが、沈線の幅は4～6mm前後と太く、彫りの深さも1～2mm前後で深い。器表面に、貝殻条痕による調整を行った後で、平行沈線文を施文しているものが4点(13・14・18・23)みられる。施文工具について断定はできないが、先の丸い棒状工具か、半截竹管の丸い部分を使用して施文したと思われる。また、2～3本程度の工具を1単位として、施文した可能性も考えられる。

本群のほとんどの土器片の内面に調整痕が認められる。いわゆる貝殻条痕によるものも数点(10・13・14・18・23・31・32)みられるが、多くは、貝殻条痕とは異質な調整痕がみられる。どのような調整がなされたかは断定できないが、一本又は数本の沈線施文と同様の棒状工具によってなされたか、あるいは、絡条体の原体を引きずることによってなされたか、いずれの可能性も考えられる。

器厚は、6～8mm前後で第 群土器より厚目である。(一条)



第76图 第VII群土器拓影图



第77图 第VII群土器拓影图

第3表 第VI群土器觀察表

図	版	出土地点	層	部位	外 面	内 面	分 類	備 考
65-	1	EE-28	IV	口縁	平行沈線文	貝殻条痕	A ₁ -1	
	2	EF-27・28	"	"	" (貝殻条痕)	"	"	
	3	EH-29	IV下	"	" "	"	"	
	4	DT-22	IV上	"	" "	"	"	
	5	EE・F-28	IV	"	" "	"	"	
	6	DQ-26	"	"	" (貝殻条痕)	"	"	
	7	EF-28	"	"	" "	"	"	
	8	ED-28	"	"	" "	"	"	
	9	EG-30	"	"	" "	"	"	
	10	EG-27	"	"	" (貝殻条痕)	"	"	
	11	EE-27	"	"	" "	"	"	
	12	EE-28	"	"	" "	貝殻条痕	"	
	13	EF-29	"	"	" "	"	"	
	14	25W	"	"	" "	"	"	
	15	EE-28	"	"	" (貝殻条痕)	貝殻条痕	"	
	16	EF-27	"	"	" "	"	"	
	17	EG-27	"	"	" "	貝殻条痕	"	
	18	EH-27	"	"	" "	"	"	
	19	EH-27	"	"	" (貝殻条痕)	"	"	
	20	EE-29	"	"	" "	"	"	
	21	EE-29	"	"	" "	"	炭化物	
	22	25III	IV下	"	" "	"	"	
	23	EF-27	IV	"	" "	"	"	
	24	EF-27・28	"	"	" "	貝殻条痕	"	
	25	EG-27	"	"	" "	"	"	
65-	26	EF-28	IV	口縁	平行沈線文	貝殻条痕	A ₁ -1	
	27	EE-29	"	"	" "	"	"	
	28	EF-28	"	"	" "	"	波状口縁	
	29	EG-29	V	"	" "	"	"	
	30	EF-27	IV	"	" "	"	口唇に刺突	
	31	EE-28	"	胴	" (貝殻条痕)	"	"	
	32	EE-27	"	"	" "	"	"	
66-	33	EE-27	"	"	" "	"	"	
	34	EF-27・28	"	"	" "	"	"	
	35	EE-28	"	"	" "	"	"	
	36	EE-28	"	"	" "	"	"	
	37	EF-27	"	"	" (貝殻条痕)	"	"	
	38	EF-27	"	"	" "	"	"	
	39	EF-27	"	"	" "	"	"	

図	版	出土地点	層	部位	外 面	内 面	分 類	備 考
67-	40	EG-27	IV	胴	平行沈線文	貝殻条痕	A ₁ -1	
	41	EF-30	"	"	" (貝殻条痕)	"	"	
	42	EE-28・29	"	"	" "	"	"	
	43	EG-27	"	"	" "	"	"	
	44	ED-29	"	"	" "	"	"	
	45	EH-27	"	"	" "	"	"	
	46	DM-77	"	"	" "	"	"	
	47	EG-27	"	"	" "	"	"	
	48	DQ-26	IV下	"	" (貝殻条痕)	"	"	炭化物
	49	EE・F-29	IV	"	" "	"	"	
67-	50	DL-74	"	"	" "	"	"	
	51	EG-27	"	"	" (貝殻条痕)	"	"	
	52	EG-29・30	"	"	" "	"	"	
	53	DS-26	"	"	" "	"	"	
	54	EG-27	"	"	" "	"	"	
	55	EE-28	"	"	" "	"	"	炭化物
	56	30IH	"	"	" (貝殻条痕)	"	"	
	57	30IH	"	"	" (貝殻条痕)	"	"	
	58	EG・H-27	IV	"	" "	"	"	
	59	EG-28・30	"	"	" "	"	"	
68-	60	30IH	"	"	" "	"	"	
	61	EE・F-28	IV	"	" "	"	"	
	62	EE-29	"	"	" "	"	"	
	63	EF-27	"	"	" "	"	"	
	64	EG-29・30	"	底	" "	"	"	
	65	EG-27	"	"	" "	"	"	
	66	DM-74	"	"	" "	"	"	
	67	ED-29	"	"	" "	"	"	
	68	DQ-26	"	"	" "	"	"	
	69	EE-28	"	胴	" "	"	"	
69-	70	EE-27	"	"	格子目状沈線 (貝殻条痕)	"	A ₁ -2	
	71	EG-30	"	"	" "	"	"	
	72	EG-27	"	"	" "	"	"	
	73	EF-29	"	"	" "	"	"	
	74	EH-27	"	"	" "	"	"	
	75	EC-29	"	"	" (貝殻条痕)	"	"	
	76	EA-22・23	IV上	口縁	" "	"	"	
	77	EE-28・29	IV	"	" "	"	"	
	78	EG-29	"	"	" "	"	"	
	79	DL-74	"	胴	" "	"	"	
80	EG-28	"	"	" "	"	"		

第4表 第VI群土器觀察表

図	版	出土地点	層	部位	外 面	内 面	分 類	備 考
	81	EG-28	IV	胴	格子目状沈線 (貝殻条痕)	貝殻条痕	A ₁ -2	
	82	EG-30	"	"	"	"	"	
	83	EG-30	"	"	"	"	"	
70-	84	EF-27	"	"	"	"	"	
	85	EE-29	"	"	"	"	"	
	86	EG-28	"	"	"	"	"	
	87	EE-29	"	"	"	"	"	
	88	EG-28	"	"	"	"	"	
	89	EE-29	"	"	"	"	"	
	90	30IH	"	"	"	"	"	
	91	EG-27	IV	"	"	"	"	
	92	DM-74	"	"	"	"	"	
	93	DN-74	"	"	"	"	"	
	94	EE-28	"	"	"	"	"	
	95	30IH	"	"	"	貝殻条痕	"	
	96	EH-28	IV	"	"	"	"	
	97	30IH	"	"	"	"	"	
	98	DQ-59	IV	"	"	"	"	
	99	EH-28	"	口縁	幾何学文様	貝殻条痕	A ₂	
	100	EF-28	"	"	"	"	"	
	101	EH-27	"	"	"	"	"	
	102	EE-29	"	"	"	"	"	
	103	EH-28	"	"	(貝殻条痕)	"	"	
	104	EG·H-27	"	"	"	貝殻条痕	"	
	105	EG-29	"	"	"	"	"	
	106	EG-27	"	"	(貝殻条痕)	"	"	
71-	107	EF-27	"	胴	"	"	"	
	108	EG-28	"	"	"	"	"	
	109	EH-28	"	"	"	"	"	
	110	EH-28	IV下	"	"	"	"	
	111	EH-28	IV	"	(貝殻条痕)	"	"	
	112	EC-28	"	"	"	"	"	
	113	EF-28	"	"	"	"	"	
	114	EH-27	"	口縁	"	"	"	
	115	EH·G-27	"	胴	"	"	"	
	116	EG-27	"	"	"	"	"	
	117	EG-28	V	"	"	"	"	
	118	EF-27	IV	口縁	"	貝殻条痕	"	炭化物
	119	EF-28	"	胴部	"	"	"	
	120	30IH	"	"	"	"	"	
	121	EG-27	VI	"	(貝殻条痕)	"	"	

図	版	出土地点	層	部位	外 面	内 面	分 類	備 考
	122	EG-27	IV	胴部	幾何学文様 (貝殻条痕)	貝殻条痕	A ₂	
	123	EE-28	"	"	"	"	"	
72-	124	EE-27·28	"	"	水波文状沈線 (貝殻条痕)	"	A ₃	
	125	EE·G-30	"	口縁	頸部・胴部文様帯	"	A ₄	
	126	EG-30	"	"	"	"	"	
	127	30IH	"	"	"	"	"	
	128	EE-29	IV	"	"	"	"	
	129	EG-28·29	"	胴	"	"	"	
	130	EG-30	"	"	"	"	"	
	131	EG-30	"	"	"	"	"	
	132	EG-28	"	"	"	"	"	
	133	EG-30	IV下	"	"	"	"	
	134	EG-29	IV	"	"	"	"	
	135	EG-30	"	"	"	"	"	
	136	EG-30	"	"	"	"	"	
	137	EG-27	"	"	"	"	"	
	138	EE-28	"	"	"	"	"	
	139	EE-29	"	"	"	"	"	
	140	EE-28	"	"	"	"	"	
73-	141	EG-30	"	口縁	貝殻条痕	"	C	
	142	EF-27·28	"	"	"	"	"	
	143	EE-29	"	胴	"	"	"	
	144	EG-27	"	"	"	"	"	
	145	EF-27	"	"	"	"	"	
	146	EG-30	"	"	"	"	"	
	147	EF-28	"	"	"	"	"	
	148	EG-30	"	"	擦 痕	擦 痕	"	
	149	EG-28	"	"	貝殻条痕	貝殻条痕	"	
	150	EG-28	"	"	"	"	"	
	151	EG-27	"	"	擦 痕	"	"	
	152	EG-28	"	"	貝殻条痕	貝殻条痕	"	
	153	EH-27	"	口縁	擦 痕	擦 痕	"	
	154	EG-27	"	"	"	"	"	
	155	EF-28	"	底	貝殻条痕	貝殻条痕	"	
	156	EG-27	"	"	"	"	"	
74-	157	DN·M-74	"	胴	微隆起線 (貝殻条痕)	"	D ₁	
	158	E F - 28	"	"	"	"	"	
	159	DN-74	"	"	"	"	"	
	1160	EG-27	"	口縁	"	貝殻条痕	"	
	161	DN-74	"	胴	"	"	"	
	162	DQ-27	"	"	(貝殻条痕)	"	"	

第5表 第VI・VII群土器観察表

図	版	出土地点	層	部位	外面	内面	分類	備考
	163	EF-28	IV	口縁	微隆起線		D ₁	
	164	EG-27・29	"	"	"	貝殻条痕	"	補修孔
	165	DM-74	"	胴	(貝殻条痕)	"	"	
	166	EC-29	"	"	"	"	"	
	167	EG-27・29	"	"	細隆起線	貝殻条痕	D ₂	
75-	168	EG-28	"	"	"	"	"	補修孔
	169	EF-28	"	口縁	"	"	"	口唇に刻み
	170	EF・G-2	"	"	"	"	"	"
	171	DT-21	IV上	胴	1段R絡条体圧痕	"	E	
	172	EA-24	"	"	"	"	"	同一個体
	173	20III	IV	"	"	"	"	
	174	EH-28	"	"	1段L絡条体圧痕	貝殻条痕	"	
	175	EH-27	"	"	"	"	"	
	176	EE-29	"	底	"	"	F	
	177	EG-27	"	"	"	"	"	
	178	EF-28	"	"	"	"	"	
	179	EE-28	"	"	"	貝殻条痕	"	
	180	EE-28	"	"	"	"	"	
	181	EE-28	"	"	"	"	"	
	182	EF-28	"	"	"	"	"	

図	版	出土地点	層	部位	外面	内面	分類	備考
	18	DM-74	IV	胴	太い平行沈線			貝殻条痕
	19	EH-27	"	"	"	"	"	調整痕
77-	20	EE-28	"	"	"	"	"	"
	21	EG-28	"	"	"	"	"	"
	22	EH-28	"	"	"	"	"	"
	23	DR-27	"	"	"	"	"	貝殻条痕
	24	EG-28	"	"	"	"	"	調整痕
	25	EG-27	"	"	"	"	"	"
	26	EE-27・28	"	"	"	"	"	"
	27	EG-27	"	"	"	"	"	"
	28	EF-28	"	"	"	"	"	"
	29	EG-27	"	"	"	"	"	調整痕
	30	30IH	"	"	"	"	"	"
	31	EF-33	IV下	"	"	"	"	貝殻条痕
	32	EG-27	IV	"	"	"	"	"
	33	EF-27・29	"	"	"	"	"	"
	34	EE-27	"	"	"	"	"	"
	35	330H	"	"	"	"	"	調整痕
	36	EF-27	IV	"	"	"	"	"
	37	DR-27	"	"	"	"	"	調整痕
	38	EG-27	"	"	"	"	"	"
	39	EF-27	"	底	"	"	"	"

(第VII群土器)

図	版	出土地点	層	部位	外面	内面	分類	備考
76-	1	EE-27・28	IV	口縁	太い平行沈線	調整痕	VII	
	2	ED-28	"	"	"	"	"	
	3	EE-28	"	"	"	"	"	
	4	EF-28	V	"	"	"	"	
	5	EE-82	IV	"	"	"	"	
	6	30IH	"	"	"	"	"	
	7	EF-28	IV	胴	"	"	"	
	8	EE-28	"	"	"	"	"	
	9	EE-29	V	"	"	"	"	
	10	DS-26	IV	"	"	貝殻条痕	"	
	11	EG-30	IV下	"	"	調整痕	"	
	12	EG-29	"	"	"	"	"	
	13	DR-27	IV	"	"	貝殻条痕	"	
	14	DS-28	"	"	"	"	"	
	15	DR-27	"	"	"	"	"	
	16	EE-28	"	"	"	調整痕	"	
	17	EE-28	"	"	"	"	"	

第 群土器 (第78図～83図)

矢羽根状沈線文や縦位斜位等の沈線文、更に、これらの沈線文に短沈線・刺突文等を加えたものを特徴とするもので、尖底の深鉢形土器である。

本群土器は、従来、ムシリ 式としてとらえられてきた。しかし、大グリッド55 において、ムシリ 式等、他型式の土器をほとんど混じえずに分布していたこと、また、本群土器を覆土に包含する第339号土壌が、ムシリ 式を包含する第337・338号土壌を切って掘り込まれていた事などから、これを独立した型式としてムシリ 式から分離させることにした。ただし、この文様の諸要素は、本群のみでなく、第 群A・B類もこれに含まれる可能性が大であり、これについては後述する。

胎土・成形等 植物性繊維を全く含まず、細かな砂粒を含むが、その含有量の個体差が大きい。やや軟質なもの、もろいものも若干あるが、一般的に緻密で硬い。色調は黄褐色系のものが多い。器厚は、4.5～10mmで、平均7.1mmであり、第 群よりは厚く、第 群とほぼ同程度である。

粘土帯の接合は、明瞭に観察される。一般的には口縁部側が凸、底部側が凹で、第IX群土器(赤御堂式)や第 群土器(早稲田5類)に多くみられる。成形途中に施文し、これを上位の粘土帯が覆う例(4)もある。

器表面の調整は、平滑で一般的に良好であるが、条痕を施するものもある。内面は個体による差が著しく、ほとんど無調整なもの、平滑なもの、貝殻条痕文をもつもの、細かな肋脈の貝殻(?)条痕をもつもの、施文具の不明な条痕をもつもの、器表面と同様の棒状工具による乱雑な沈線をもつものなどがある。また、指頭による凹凸が残るものが多い。

器形 全体の形状を知ることのできるものはないが、第339号土壌出土のものや、60、63にみられるように、尖底、ないしは極めて小さな平坦部をもつ尖底である。口縁部は、わずかに外反するものとほぼ直立するものがみられる。胴部の中位ないしやや下位に、太く低い隆帯を巡らしたものや若干肥厚させて段を設けたものもある。

口唇部 ほぼ平坦で、上端に刻みを施す例が多い。

施文具 沈線は先端の丸い棒状工具、ないしは半截等の竹管類によると考えられる。短沈線や刺突は主に半截ないし劣截竹管・円竹管が用いられるが、先端部が長方形の割りばし状の工具も用いられている。

本群土器をその文様により、以下のように5分類したが、復原できたものがないため文様構成の全容を知ることのできるものはない。

A類 沈線文のみのもの

B類 A類の沈線文に短沈線ないし刺突を加えたもの

C類 平行ないし弧状沈線に刺突を加えたもの

D類 刺突文のみのもの

E類 沈線文に結節回転文、貝殻腹縁文を加えたもの

A類 (1 ~ 26)

沈線文のみのものは、更にその文様により、1種 矢羽根状のもの、2種 縦位、斜位、格子目状のものに細分した。

1種 (1 ~ 16)

矢羽根状の沈線文を構成したもので、B類とともに本群土器の特徴的なものの一つである。

1 ~ 3・8は同一個体で、縦位に浅い沈線を施文し、その後、矢羽根状に沈線を施文している。内面には、同一工具による縦位・斜位等の太くやや深い沈線が施文されている。

4 ~ 6は同一個体で、器表面には矢羽根状の沈線文、内面には細かな条痕文を施文している。

2種 17 ~ 26)

縦位・斜位・格子目状の沈線文を施文したものである。

17・18は沈線と称するよりも、器面の調整痕的なもので、極めて不明瞭である。むしろ18の器内面のほうが明瞭である。

19は、器面の内外とも斜位の沈線文である。沈線の施文後に幅広の隆帯を貼り付けているが剥落している。20と同一個体であろう。

21 ~ 23、24・25は同一個体で斜位の沈線が交差し、格子目状をなしている。

B類 (27 ~ 41)

A類の沈線文に短沈線ないし刺突文を加えたもの

口縁とほぼ平行に1列の短沈線ないし刺突文を加えるが、斜位のもの(32)や2列施文して矢羽根状としたもの(29)もある。

刺突文は、半截、劣截等の竹管を用いたことが明瞭で、器面に表皮面側を斜めに幾分強く当てがったものと、若干引きずったものがあり、短沈線は、丸棒状の工具を用いて若干引きずったと考えられるものである。

33・34は同一個体で、矢羽根状沈線の交差部分に刺突を加えたものである。37・41も同様であるが、若干の段をなす部分に短沈線を加えている。

なお、27・39・40は器厚が特に薄く、また、胎土、焼成等が第 群土器に近似しているため、本群土器からは除くべきかも知れない。

C類 (42 ~ 53)

平行ないし弧状沈線文に刺突文を加えたもの

42・43は平行沈線文に沿って、又は平行沈線文間に刺突列を数段加えたものである。42は口

唇部に幅広の隆帯を貼り付け、この隆帯上及び器面との接点にも刺突列を施している。

45・49・50は、全体は不明であるが、幾何学的な文様を構成すると考えられるものである。50は、円竹管による刺突文で、内面は施文具の不明な条痕文である。47・48は第313号住居跡出土の第20図1と同一個体で、弧状沈線文をもつ。

D類(51~53)

刺突文のみのもの

51~53は、第339号土壌内出土の39と同一個体である。先端が長方形の、割りばしに類似した工具による乱雑な刺突文である。器面の内外とも、50と同様、貝殻とは異なる施文具を用いた条痕文が施文されている。

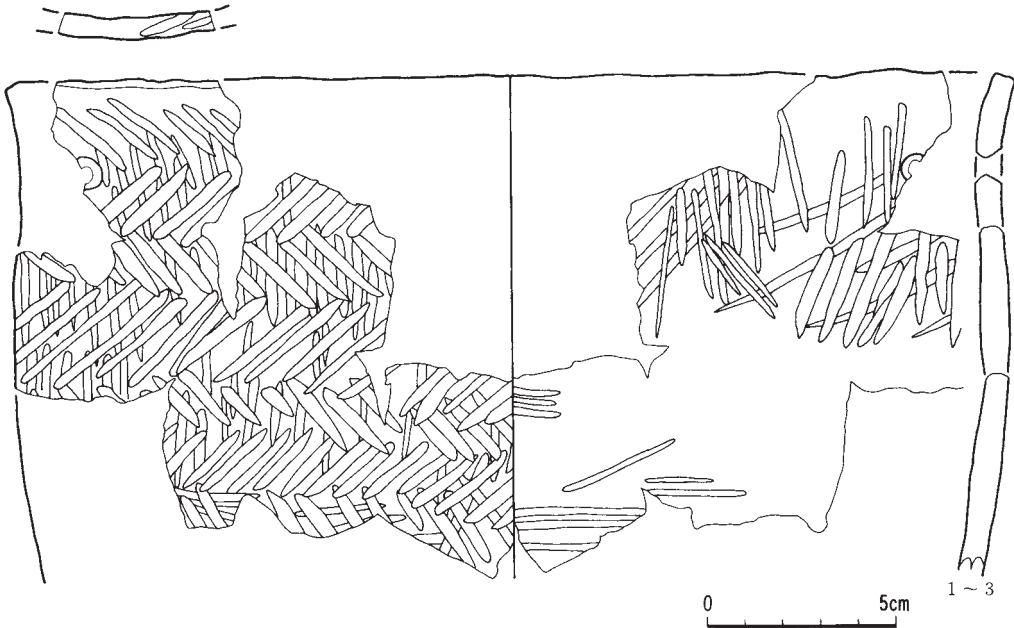
E類(54~59・61・62)

沈線文に結節回転文、貝殻腹縁文等を加えたもの

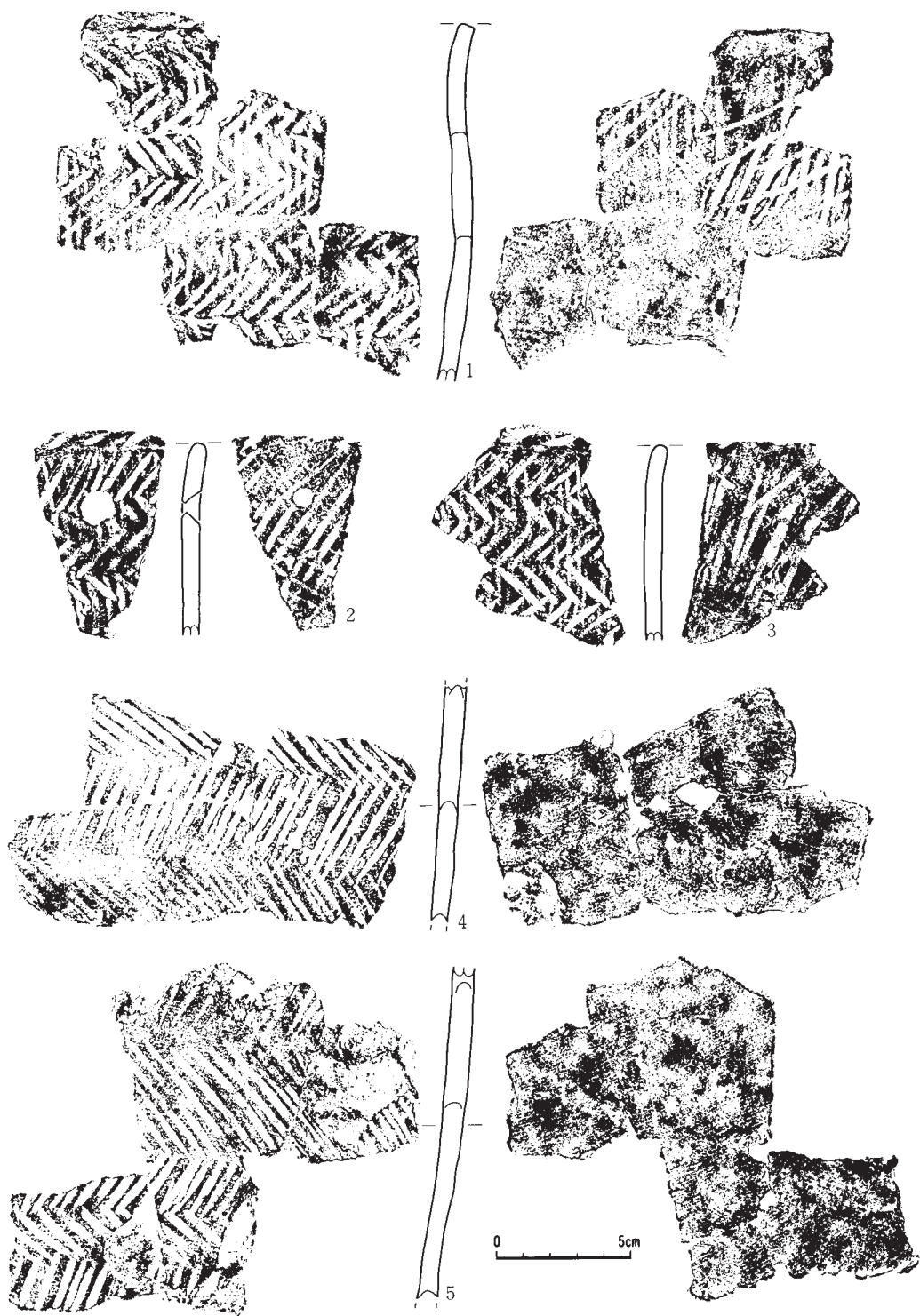
62を除き、同一個体である。

62は、器表面に貝殻条痕文と、斜行する調整痕的な極めて浅い沈線が施され、更に横位の結節の回転文と、斜めに並ぶ短沈線列が施文されている。内面には、器表面より明瞭な縦位の沈線が施文されている。

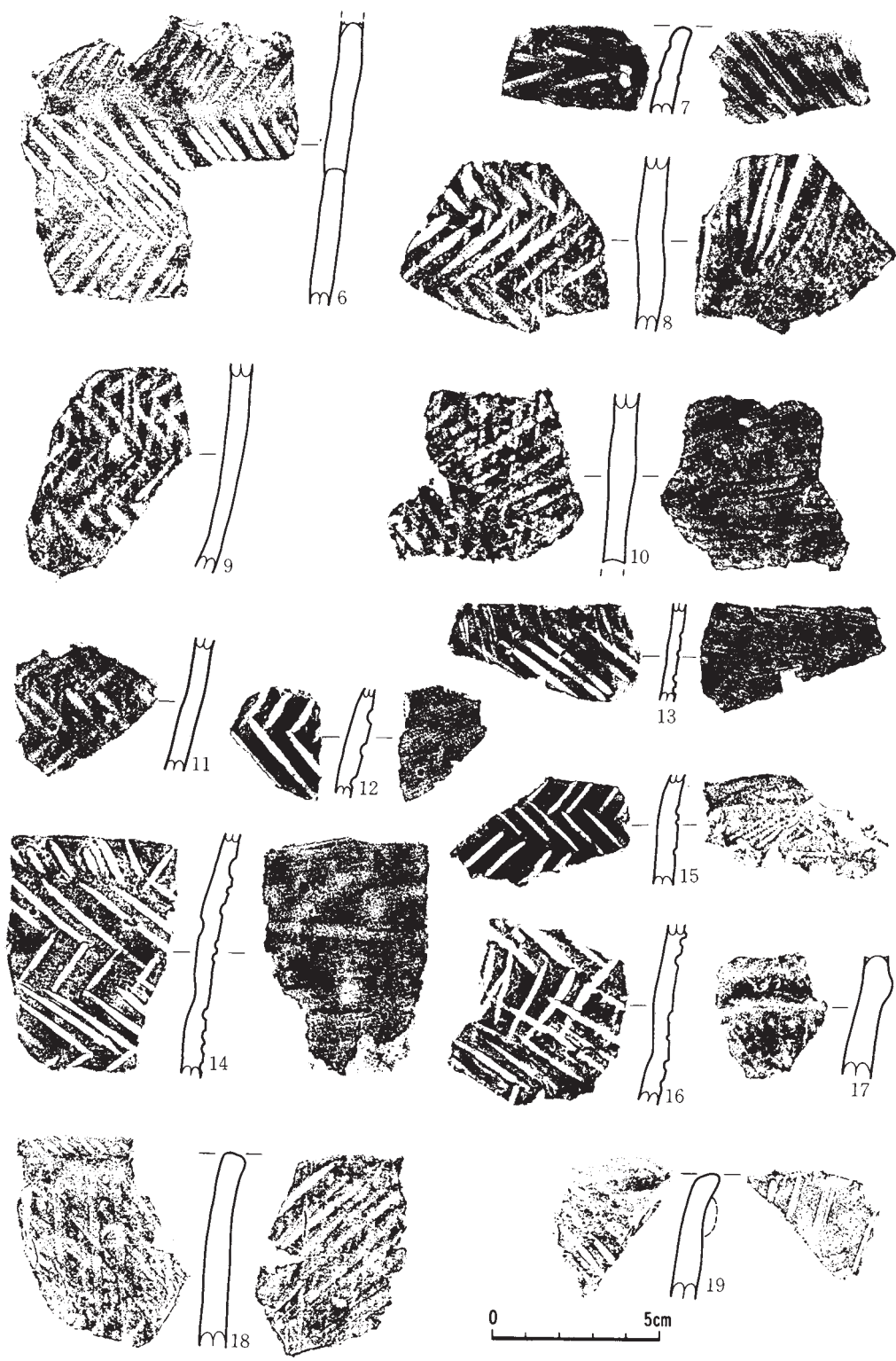
54・59等は同一個体で、縦位ないしやや斜位の沈線がやや乱雑に施文され、これに結節回転文、貝殻腹縁刺突文、鋸歯状沈線文が施文されたものである。貝殻腹縁刺突文は斜位に施文されているが、数条を単位としてその傾きを変えている。



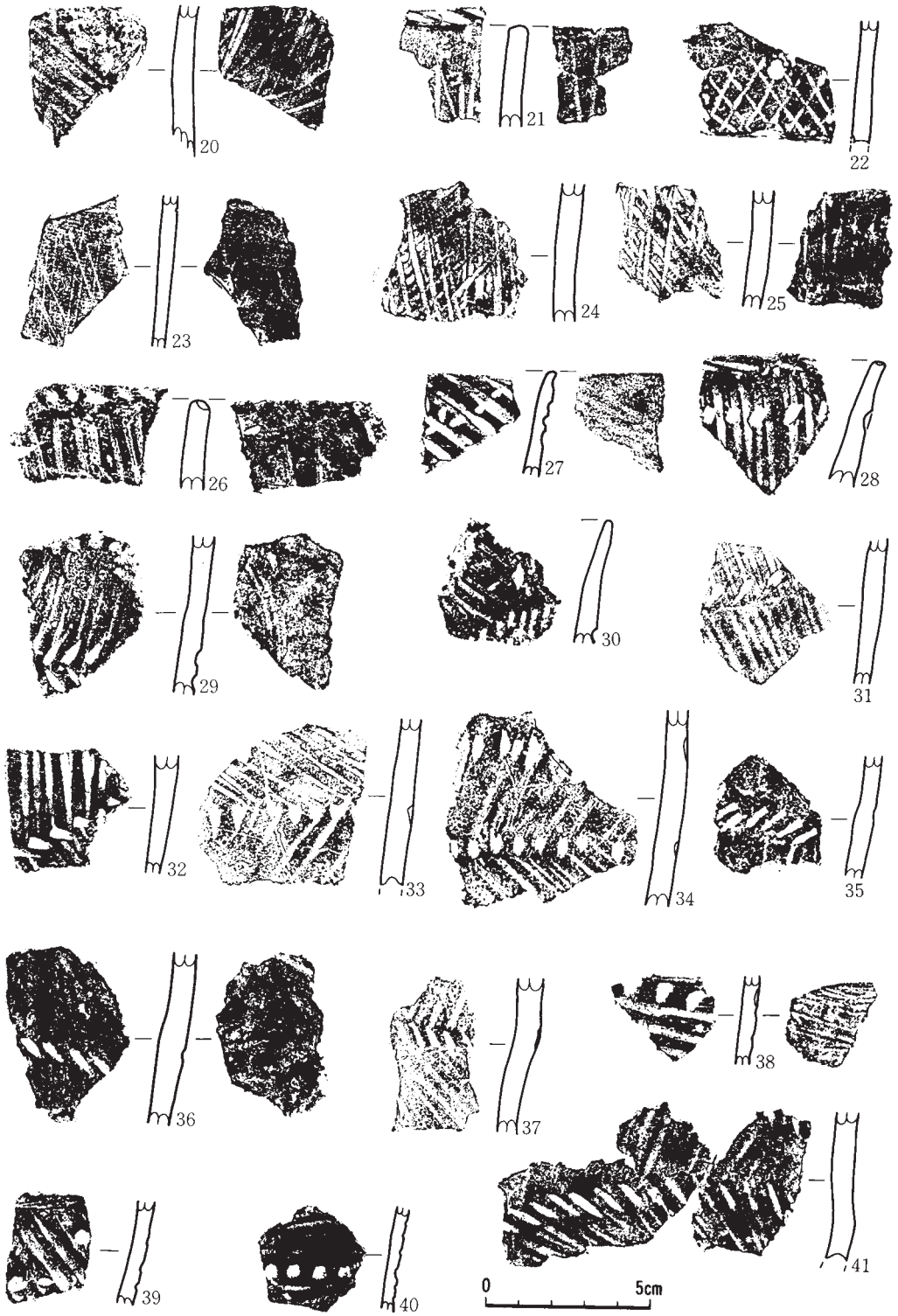
第78図 第VIII群土器実測図



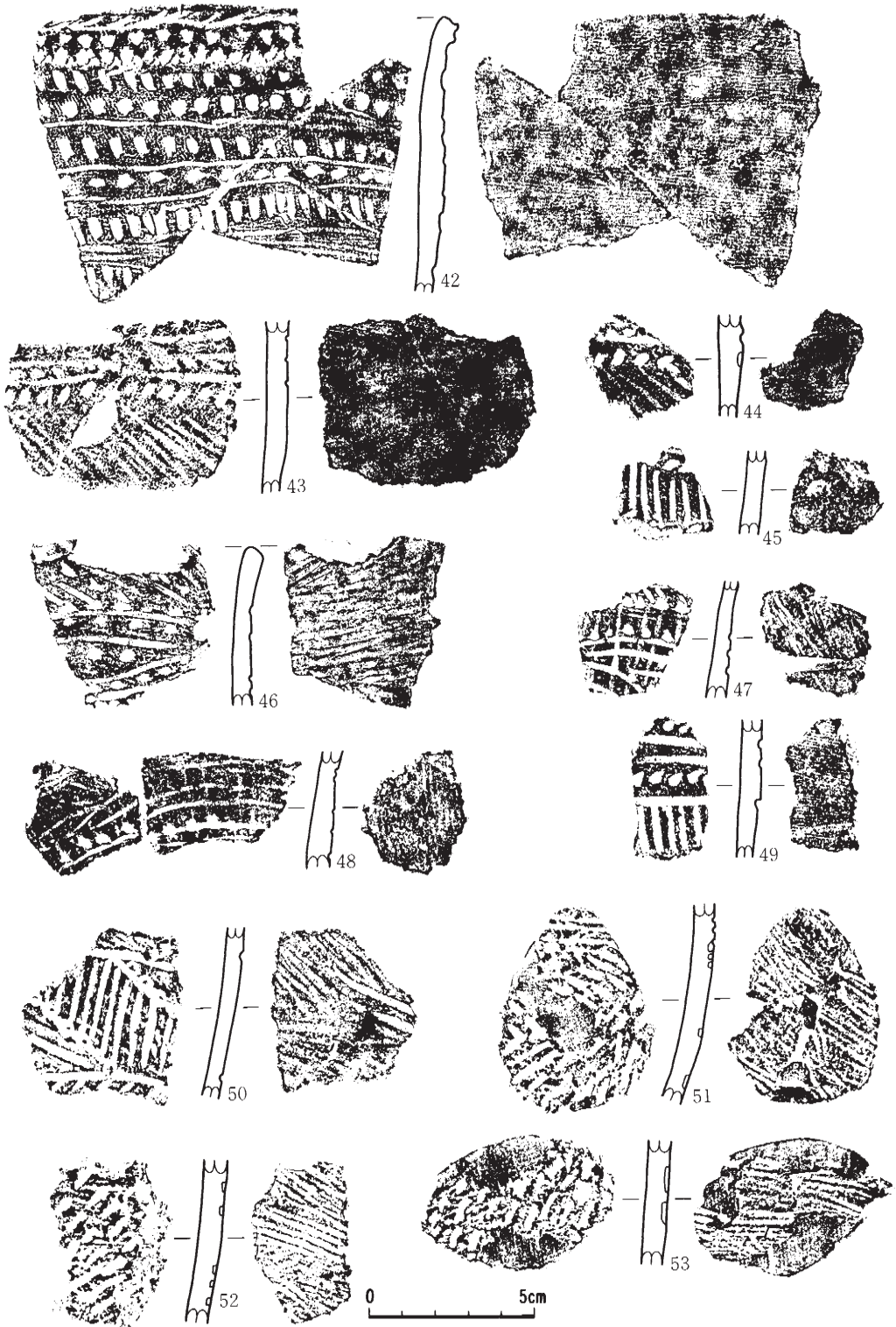
第79图 第八群土器拓影图



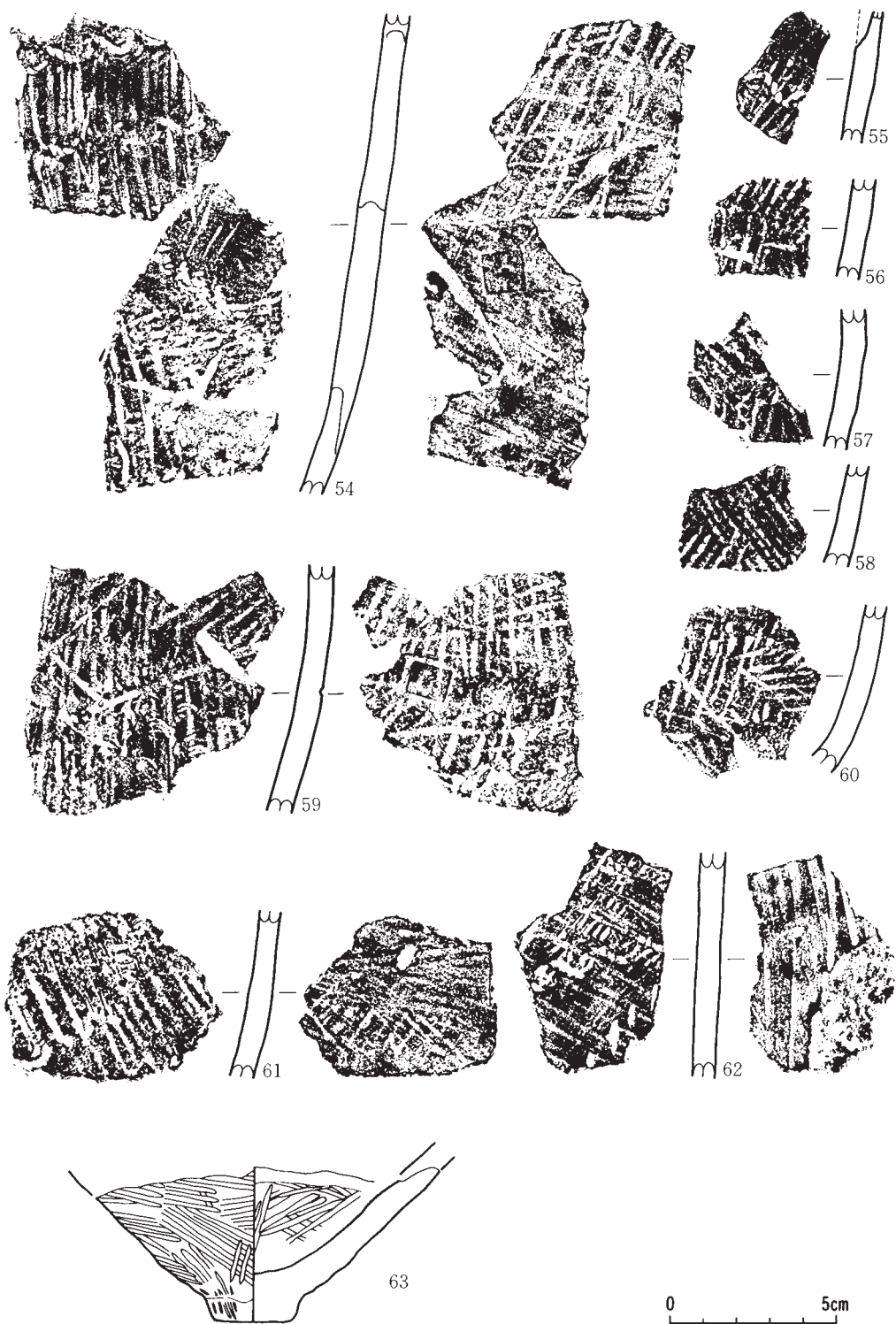
第80图 第Ⅷ群土器拓影图



第81图 第八群土器拓影图



第82图 第八群土器拓影图



第83图 第八群土器実測・拓影图

第 群土器（第84図～第86図）

早稲田 4 類、赤御堂式に相当するものである。

分布 25 とその周辺に集中的に分布する。

胎土 砂粒、白色凝灰岩粒、沼鉄等を含むが、砂粒は少なめである。植物性繊維は含まない。

器厚 5 mm～10mmの間であるが、接合部等を除き平均 7 mmである。

器形 復原し得たものはないが、底部が鋭角な尖底の深鉢形土器である。口縁部はほぼ直立して立ち上がるが、口唇部近くで外反するものが多い。口唇部上端は、平坦であるが外傾するものが多く、他に丸みをもつもの、平坦なもの等がみられる。

口唇上端の施文 縄文を回転施文したものが圧倒的に多く、他に半截竹管状の工具による刺突文を施文したものがあり、何ら施文のないものは少ない。また、口唇部を器表面側から押したものもみられる。

施文 器面全面に縄文のみを施文したものが圧倒的に多いが、竹管類による刺突文、沈線文を施文したもの（2・3の同一個体）縄文押圧によって若干の文様を付したもの（4・8・12）また、口唇部に隆帯を巡らしたもの（5・7）もみられる。縄文は R L が圧倒的に多く、L R は少ない。他に無節のもの（53・54）や、不完全な撚り戻しの直前外反撚（52）がある。施文方向は、横位に回転施文し、糸を斜行させたものが圧倒的に多く、糸を縦走させたもの（6他）横走させたもの（4他）施文方向を変えて羽状を構成したもの（42）は少ない。

器内面は、口縁部破片でみた場合、無文のものが圧倒的に多く、縄文施文のものが約30%、条痕文施文のもの（5他）は約3%である。

34は撚糸文を施文したものである。赤御堂式では撚糸文は異質であるが、胎土に植物性繊維を含まず、器面状況から本類に含まれるものと考えた。

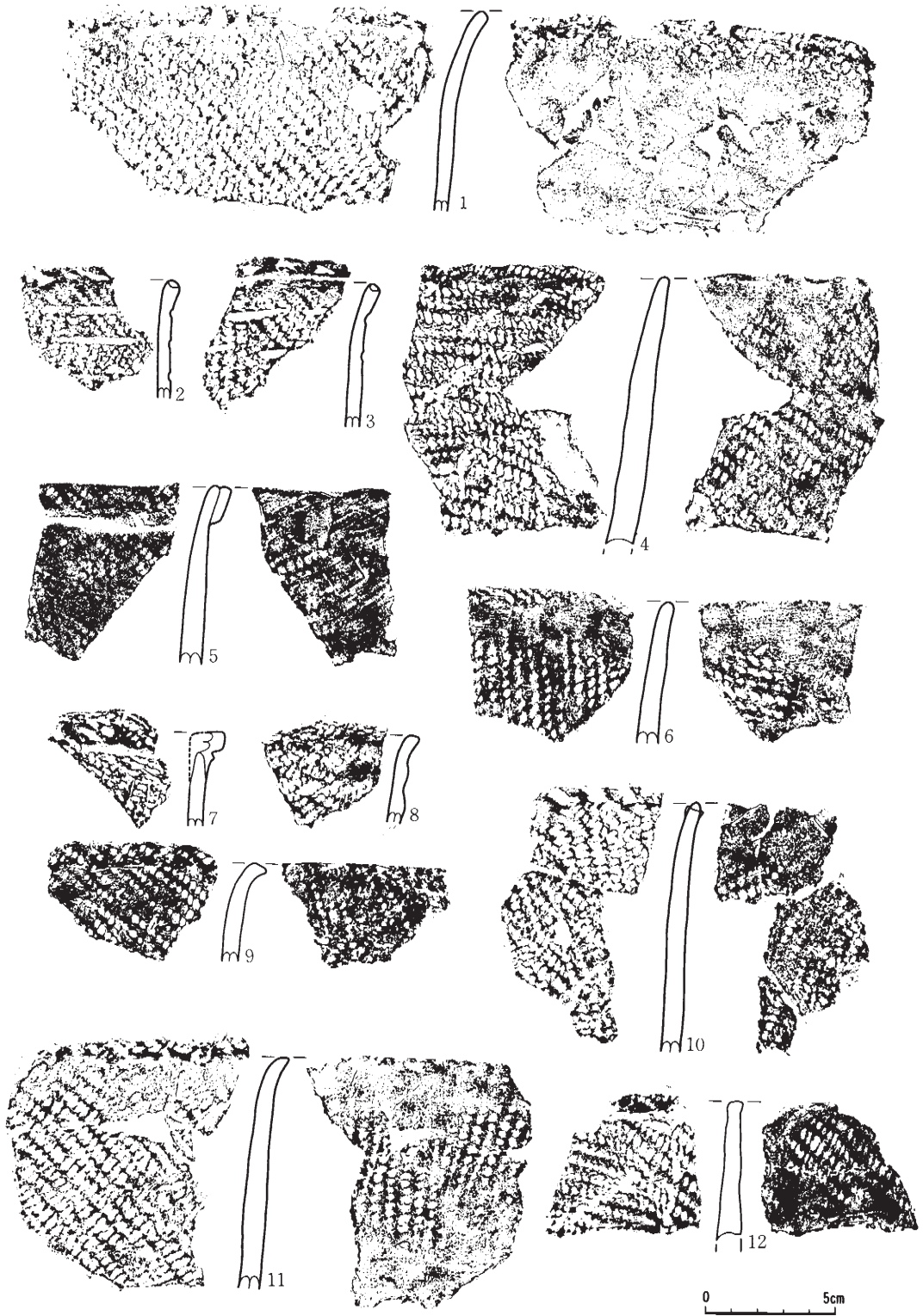
5及び37の胎土等は第 群土器 B 類に類似する点がある。特に5は縄文の施文が浅く不明瞭であることも類似している。 (三宅)

第 群土器（第87図1～第93図66）

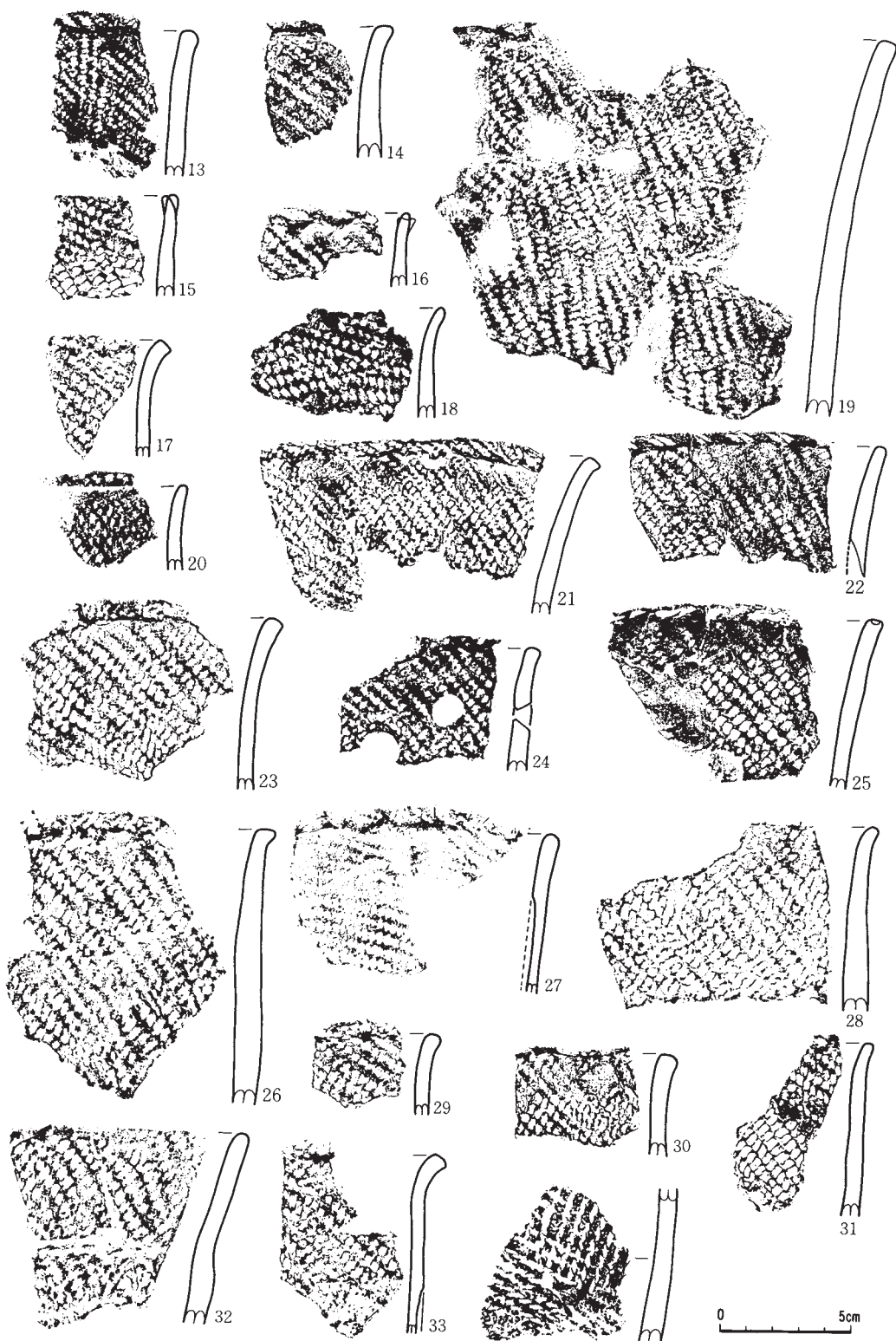
早稲田 5 類に相当するものである。

胎土には、植物性繊維、砂粒、白色凝灰岩、沼鉄を含む。最も普遍的かつ多量に含有されているのが植物性繊維と砂粒である。砂粒は全体的に細かい。白色凝灰岩は、前記の2種類に次いで含有量は多く、その粒径は砂粒と同様細かい。沼鉄は、いわゆる高師小僧と称されるもので、含有量は全体的に少なく、全く含まれないものもみられる。多くは細かなものであるが、径 5 mm の管状のものを含むものも存在する。

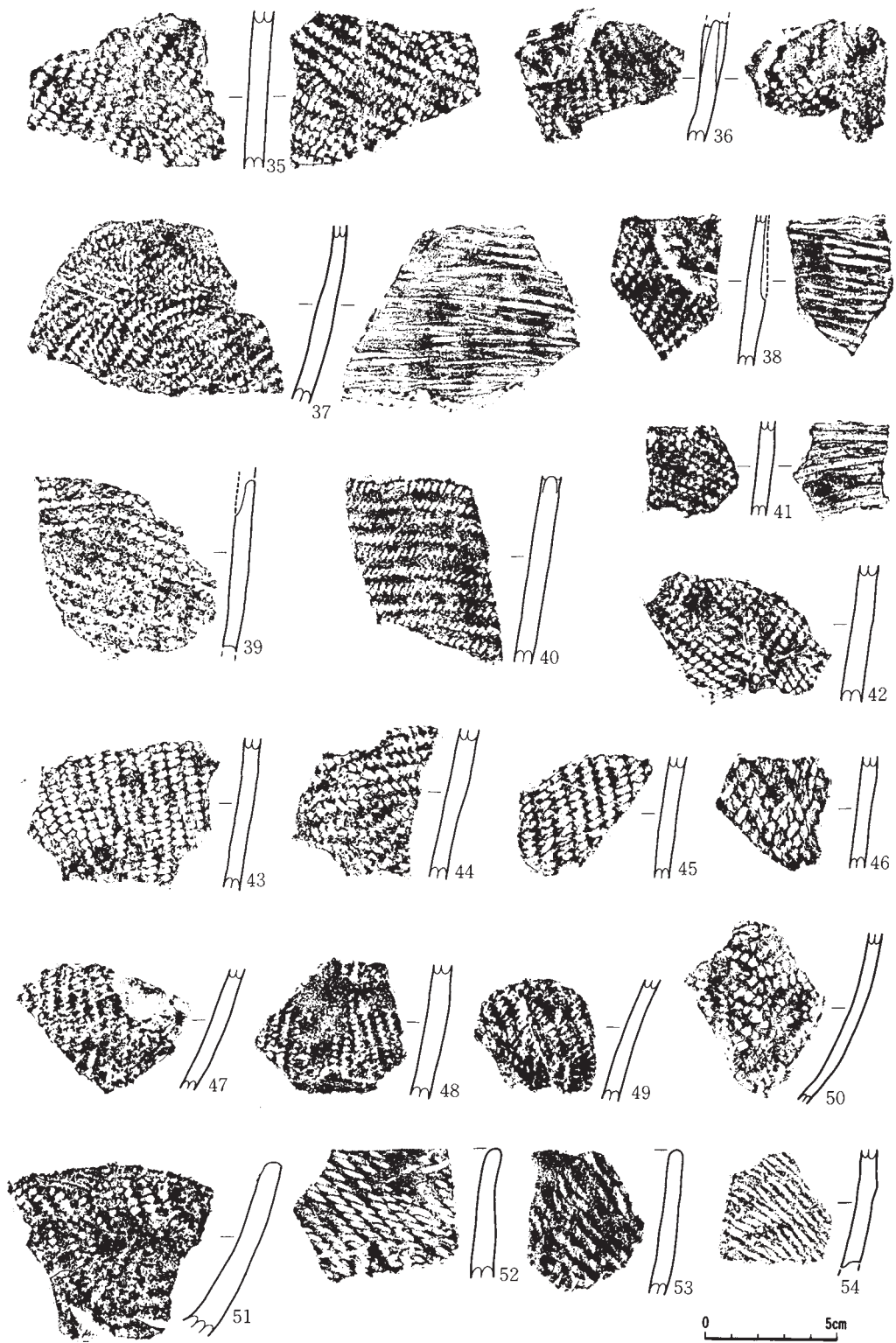
接合面を観察できるものが多く、その断面形状は口縁部側が凸状、底部側が凹状をなしてお



第84图 第IX群土器拓影图



第85图 第IX群土器拓影图



第86图 第IX群土器拓影图

り、いずれも滑らかな面をもっている。しかし、上位の粘土帯を底部側へ長く引き伸ばしたものは余り多くない。接合部近辺の器厚は、ほかの部分とほぼ同程度のものが多いが、やや厚くなり帯状に巡るものもある。(2他)。また、粘土帯の接合と縄文の施文を交互に行って成形する例はない。内面には、指頭による凹凸がみられるが、器面調整されて、顕著でないものも多い。

器形は、底部から胴部中央近くまで直立ないし、やや外傾し、ここから口縁部までは外傾して立ち上がるもの(第16図3他)、胴部中央付近で強く外傾して膨らみ、ここから口縁部まではほぼ直立するもの(2他)、底部から口縁部までやや外反するが、ほぼ直線的に立ち上がるもの(9他)などがある。

底部形状は、その周縁部が張り出したものが多く、49個体中39個体で約80%を占めるが、その張り出しは弱いものが多い。上げ底のものは1例である(4)

文様の施文部位は、内面・口唇部・器表面・底部のすべてがその対象である。施文具は縄文原体が中心で、貝殻と指頭が少数例に用いられている。

復原できた10個体のうち、内面が無文のものは5個体、縄文を施文したものが4個体、貝殻条痕文を施文したものが1個体(第30図2)である。このほか、器内面に貝殻条痕文を施文したものが1例(42)、縄文と貝殻条痕文の両者を施文したものが1例(40)ある。

縄文が施文されたものでは、内面の全面に及ぶものはなく、帯状に施文され、その間に無文帯をもっている。無文帯の部位は、ほぼ口縁部文様帯、胴部から底部にかけての屈曲部、及び底部近くである。このほか、底部の内面にまで縄文を施文したものが1例ある(第29図1)が、極めてまれな例である。

口唇部形状は、その断面形状が丸味をもつものと、やや平坦なものがあり、後者が多い。この上端に何らかの施文をしたものは、口縁部資料97個体中判別不可能なもの13個体を除く84個体についてみると、56個体で67%の高率を占めている。これには縄文原体が用いられ、回転施文したもの、押圧したもの、末端部を刺突したものがあり、各々ほぼ同数であるが後2者は判別困難なものも多い。

底部資料49個体のうち判別不可能なもの6個体を除く48個体についてみると、縄文を施文したものは32個体で、75%の高率を占めている。また、底部の周縁に指頭圧痕をもつものは8個体約18%で、その施文間隔は広いものが多いようである。

器表面は、押圧縄文を施文して口縁部文様帯を構成するもの(A類)と、全面に縄文を回転施文したもの(B類)とがある。

A類

押圧縄文によって文様帯を構成したものは、口縁部97個体中27個体で約28%を占め、このほか口縁部に近い部位のものが11個体(14他)、胴部に近いものが5個体(17他)ある。

縄文を地文として2条押圧したもの(第31図3)もあるが、多くは無文面上に押圧している。押圧縄文による文様は、口縁と平行に数条施文したもの(11他)と、口縁部文様帯の区画として、その上下ないし下位にのみ施文したものがあり、後者には、この文様帯中に縄文を回転施文したもの(1・17他)と、この間に縦位の押圧文を施文したもの(5・14他)がある。このほか斜位に押圧して鋸歯状文を構成したもの(10・12他)や、縦位に施文したもの(16)があるが、後者はその下位に横位の押圧縄文が施文されていると考えられる。

文様帯中に指頭による圧痕文を付したものが2例(1、第32図14)存在する。

文様帯幅は4～6cmのものが多いが、10cmを超えるもの(1・14)、更には押圧縄文による文様が器面全面に及んでいるものもある(第30図3)。

B類

器面の全面に縄文を回転したものは、口縁部資料97個体で、72%の高率を占めている。その施文手法はA・B類とも同様で、単方向の斜縄文であるものは少なく、ほとんどの例では同一原体を用いて横位・縦位に回転施文して乱雑な羽状縄文とし、全体的には菱形を構成している。異原体を用いて同様の構成をしたものが1例(2)、結束第1種羽状縄文によるものが1例(第32図17)存在する。

縄文の種類には、無節(31他)、単節(6・9他)、結束第1種羽状縄文、O段多条のR縄を用いた極く弱い反撚の縄文(36)、1段のLとRを縄用いた極く弱い撚り合せによる綾杉状の縄文(1・28他)、直前段合撚の縄文(3・52他)、異段の縄文(RとRLを左撚りにしたものであるが、微細破片のため図示していない)単軸絡条体第1類(57～61)がある。このうち単節の縄文が約70%、綾杉状の縄文が約20%、直前段合撚の縄文が5%強を占めており、各縄文原体はO段多条によるものが多い。綾杉状の縄文の場合、L縄とR縄が各1本のもので(28他)と、いずれか一方が2本によるものがあり、後者が多い。また、直前段合撚の縄文には2段の縄によるものと、1段の縄によるものがある。後者は1例のみ(5)で、一方の縄は特に撚りの細い縄を用いており、撚りの戻りが不完全であるため、綾杉状の縄文(55)に類似したものとなっている。

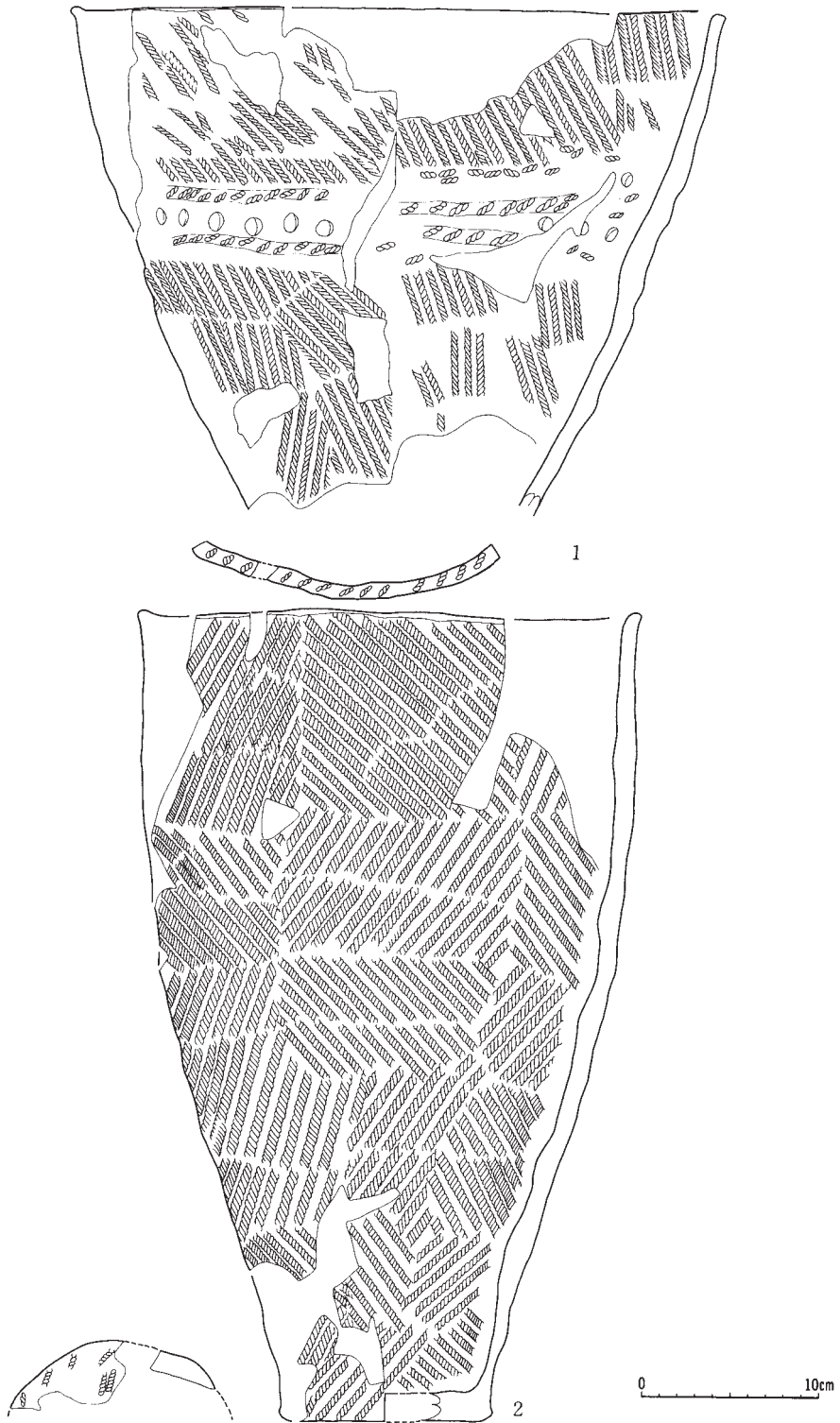
なお、同一個体の31・34は、直前段反撚による無節の縄文であるが、第 群土器(第一・二次調査の項参照)に類似する点をもっている。(三宅)

第 群土器(第93図67)

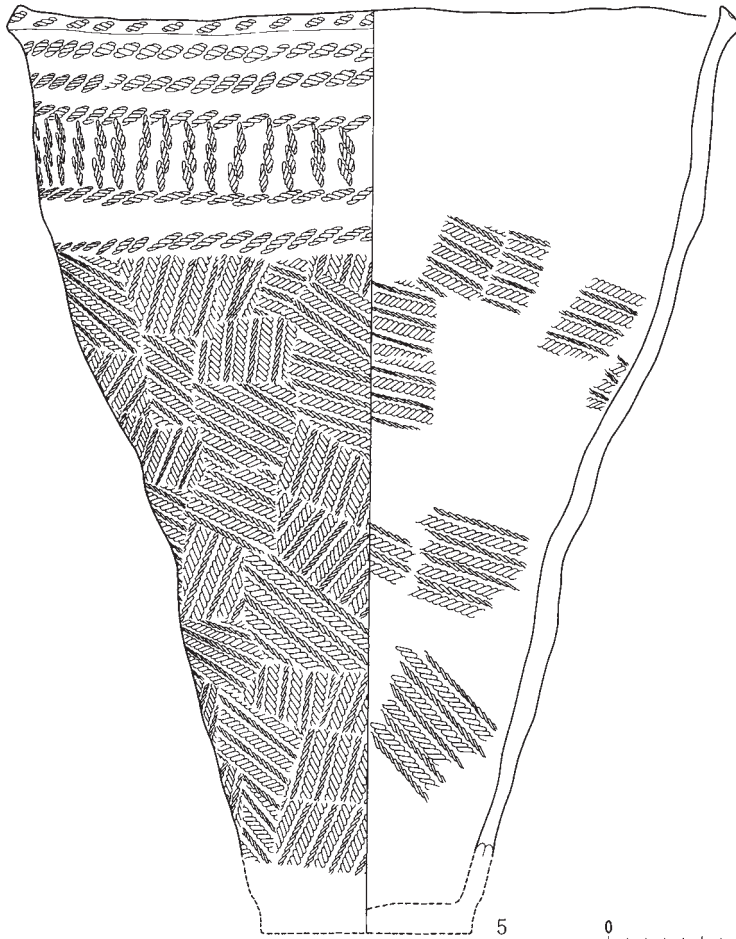
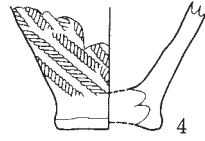
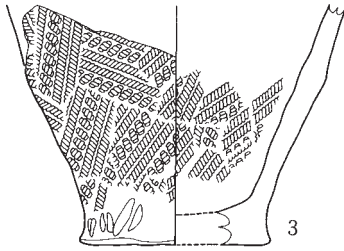
東釧路 式に相当するものは、第308号竪穴住居跡のもの(第8図28)を含め2点である。いずれも微細な破片で単軸絡条体第5類を押圧したものである。

第 群土器

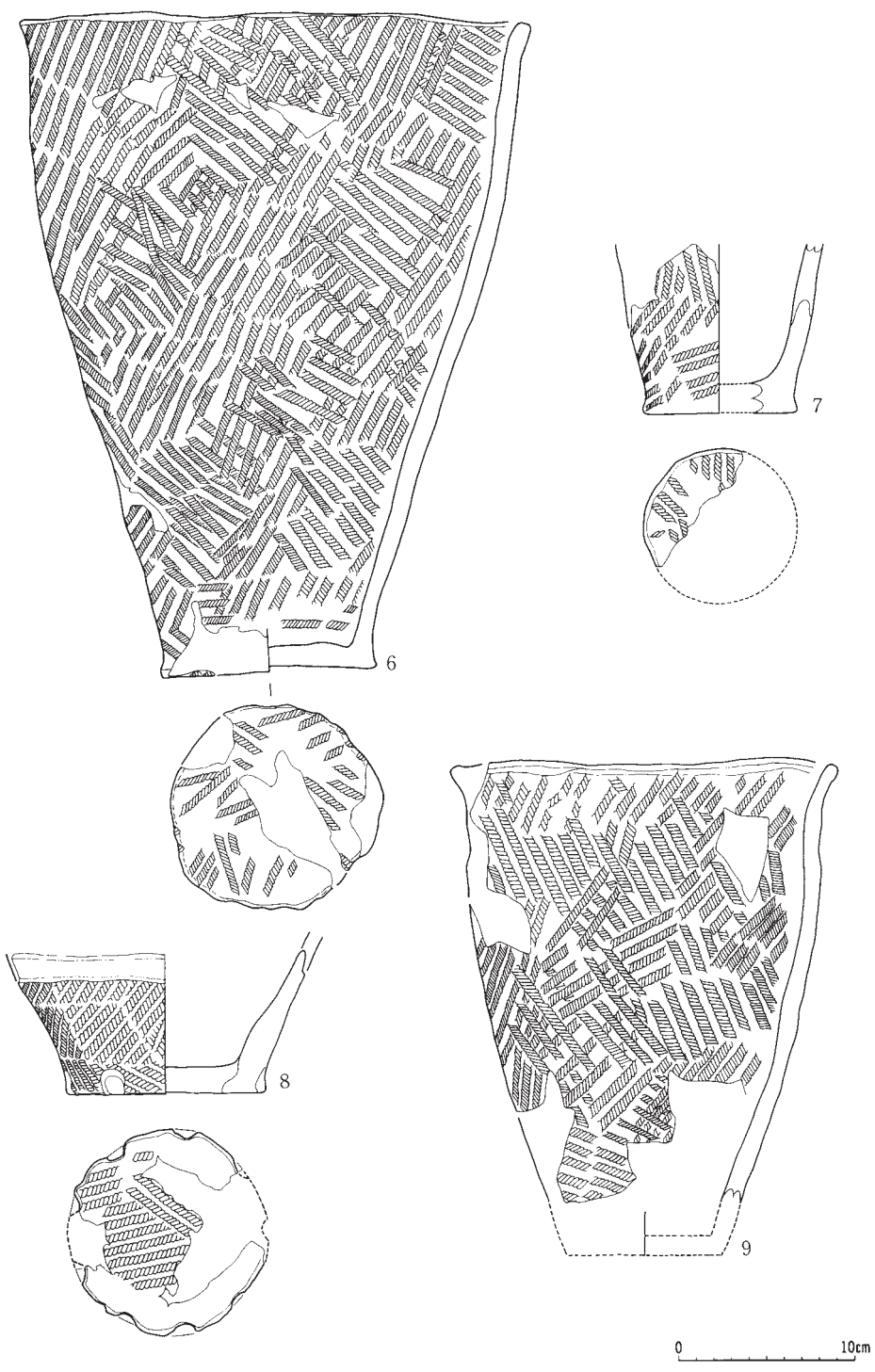
第3・4次調査では出土しなかった。(三宅)



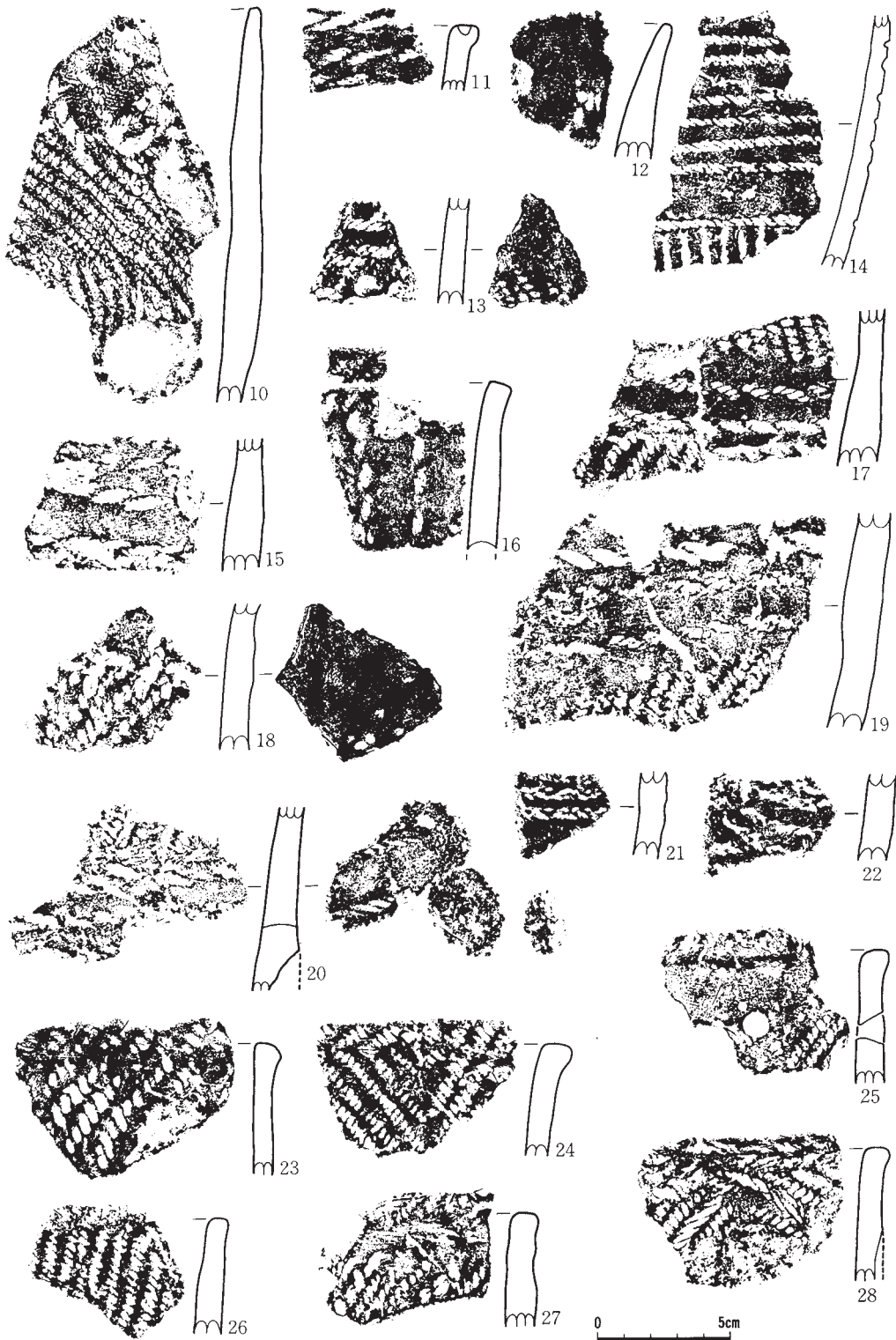
第87图 第X群土器実測图



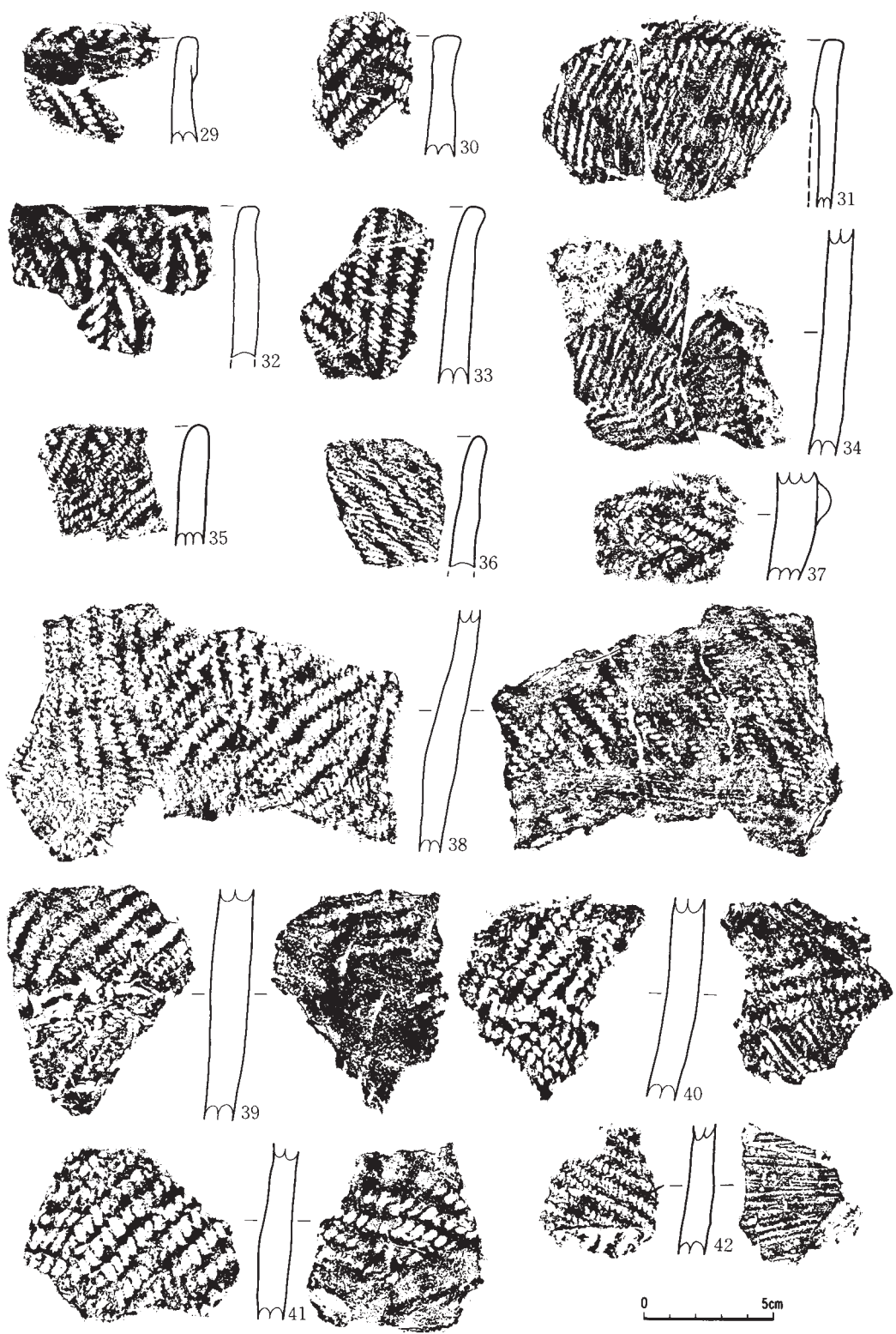
第88图 第X群土器实测图



第89图 第X群土器实测图

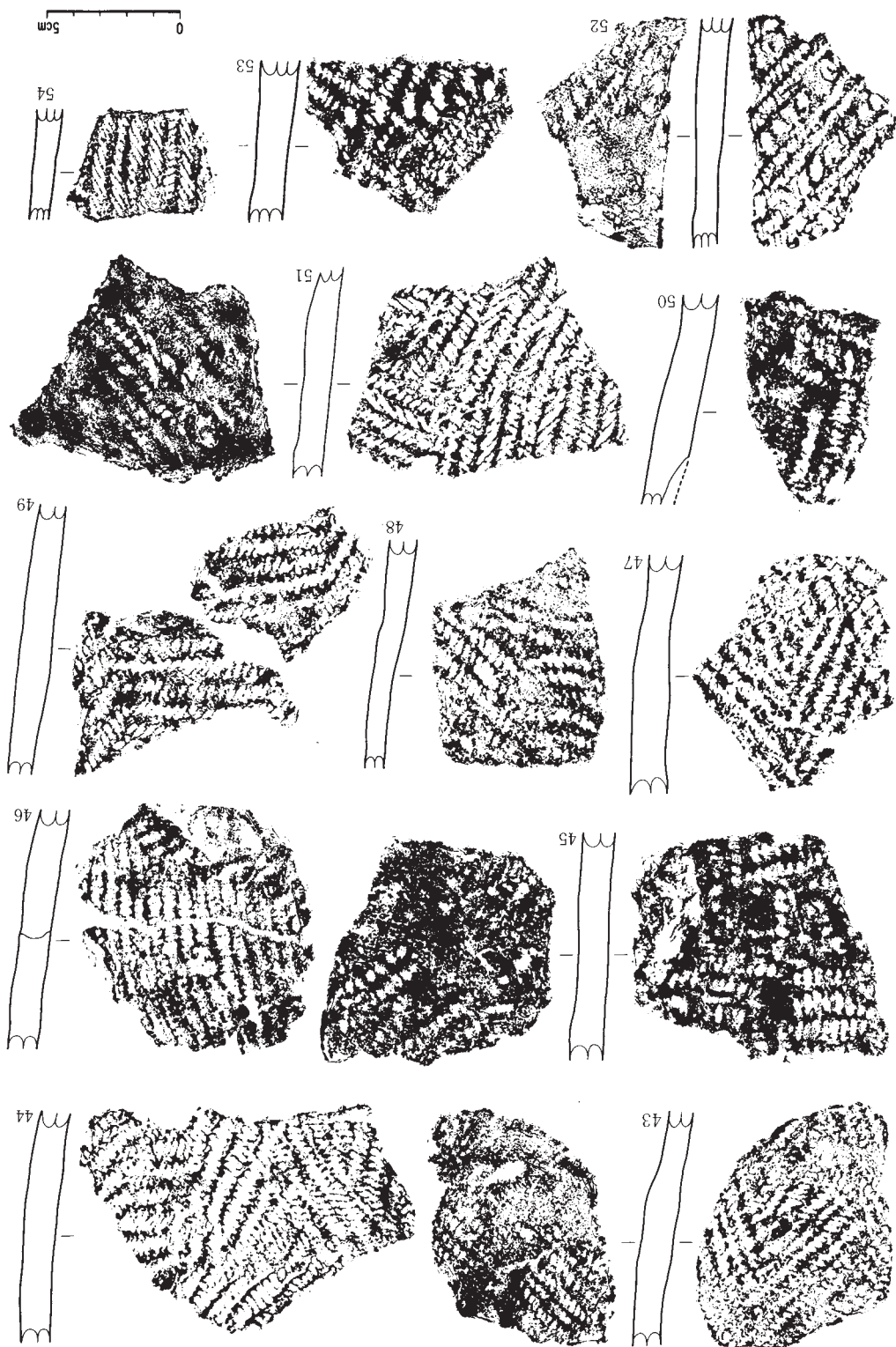


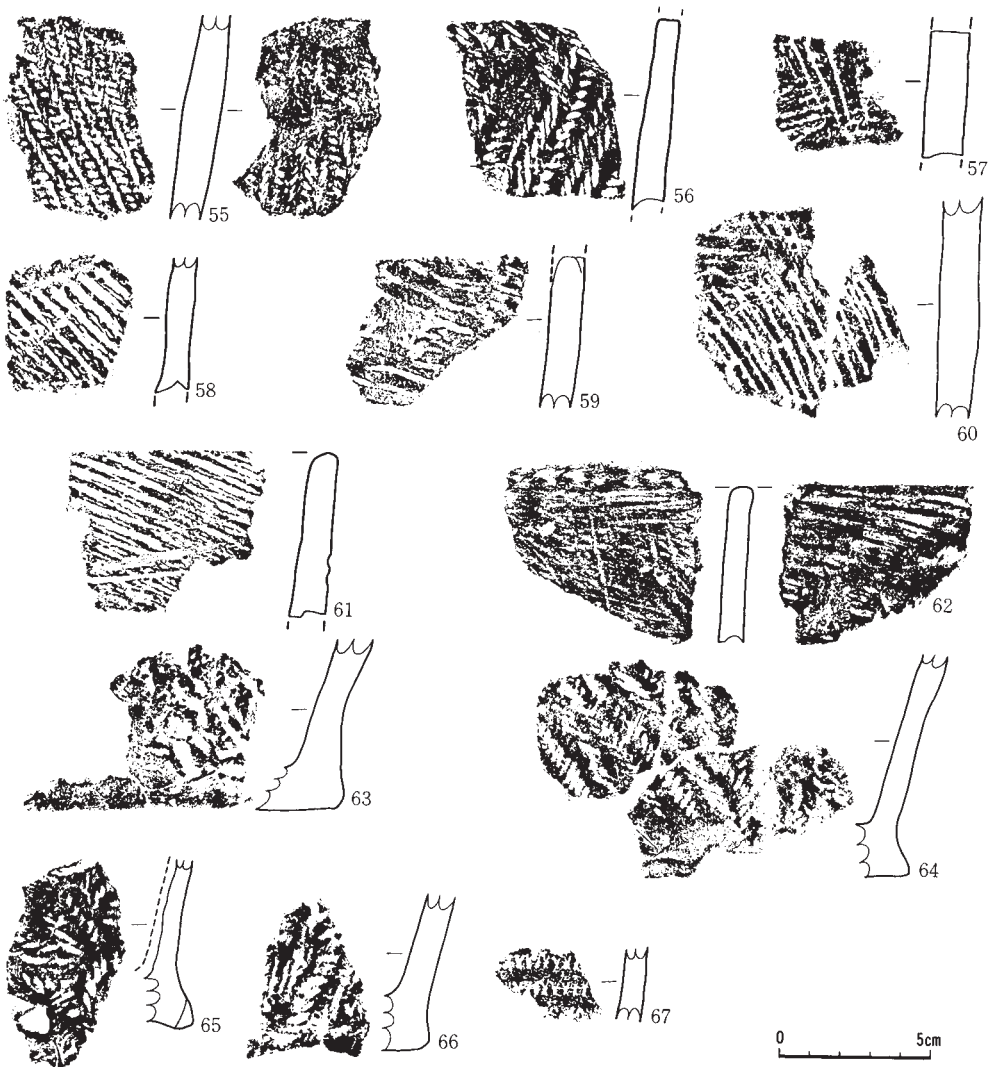
第90图 第X群土器拓影图



第91图 第X群土器拓影图

第92图 第X群土器拓影图





第93図 第X・XI群土器拓影図

第 群土器（第94図～第97図）

結束されない2種類の縄文による羽状縄文が特徴的で、長七谷地 群に相当するものである。第 層の最上部ないし各住居跡の最上層に包含されていたが、幾つかの個体にまとまるものが多い。

胎土に植物性繊維と砂を多量に含み、繊維の走痕は器面の内外において明瞭に観察される。焼成は良好で、緻密で硬い。器内面は、平滑で光沢をもつもの、ほとんど無調整のもの等もみられるが、1～2cm幅のヘラ状工具による細かなスジ状の痕跡を残す調整が特徴的である。

器形は、口径に比べ器高が低い丸底の土器で、胴部の上位から口縁部にかけてはほぼ直立、

ないし極くわずかに内湾する。口縁は、平縁である。

口唇部の断面形状は丸味を帯びるものと平坦なものがあり、この他、内削状のものが1例(9)ある。

本群土器は、口縁部文様帯を構成するものをA類、構成しないものをB類とする。

なお、用いられる縄文原体には無節(1・20他)、単節・複節(8・12他)のものが多く、他に結束第1種羽状縄文が1例ある(第16図4)。

A₁類 押圧縄文により文様帯を構成したものであるが、第3・4次調査では出土しなかった。

A₂類(4・34)

平行押型文を施文したもので、口縁部に施文したものが1個体(4)、口縁部は不明であるが胴下半部に施文したものが1個体(34)の2個体出土した。前者は、長さ2.5cm、直径5mmの軸に9条彫刻したものであるが、その彫刻は斜めに削っているため一方が浅く、他方が深い。後者は、長さ2cm、直径5mmの軸に5条彫刻したものであるが、その彫刻は前者と違い、ほぼ同じ深さである。

A₃類(2・11・22・35)

横走する縄文により文様帯を構成するものである。ただし、完全に横走したものは口縁部近くと考えられる22だけで、他は幾分斜行しており、この点B類と大差ない。

2は、口縁部文様帯下に施文する際、原体の末端を特に強く回転施文しており、またこれによって粘土が細い隆帯状に盛り上がったため、文様帯区画的な効果を生じている。胴部は上位3段が整然とした羽状を構成しているが、以下は乱雑に幾度も重複して施文されている。

35は、単軸絡条体第1類による横走する燃糸文で、胴部は不明であるが、34のように方向を変えて施文した、重複する燃糸文であろう。

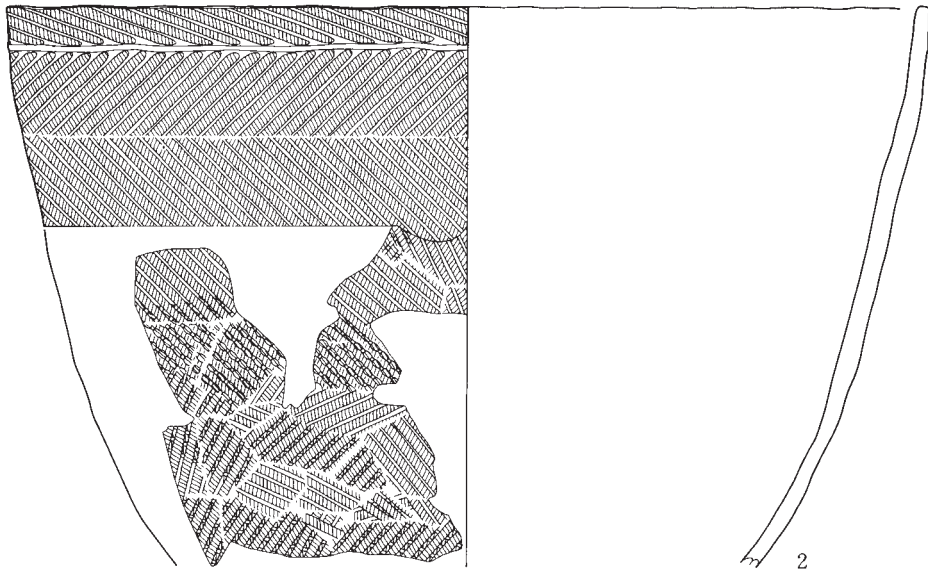
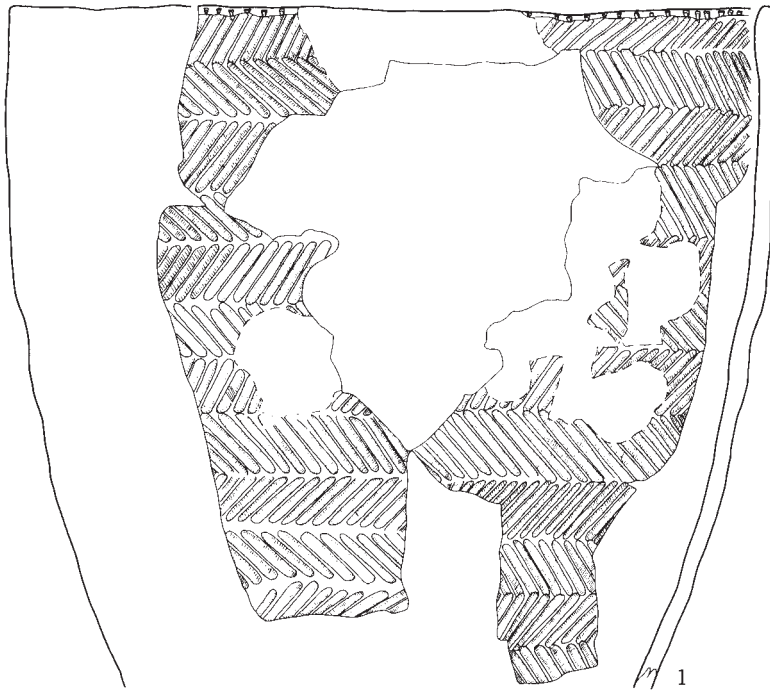
B類

特に口縁部文様帯を構成しないものである。単方向の斜縄文のものもあるが、多くはA類の胴部と同様で、異なる方向に撚った2本の縄文原体を用い、段を変えて交互に帯状に施文した羽状縄文が全面に施されている。

1は、口唇直下を極く狭い無文帯とし、先端部が分厚い篋状工具による刺突列を加えたもので、以下、羽状縄文が整然と施文されている。 (三宅)

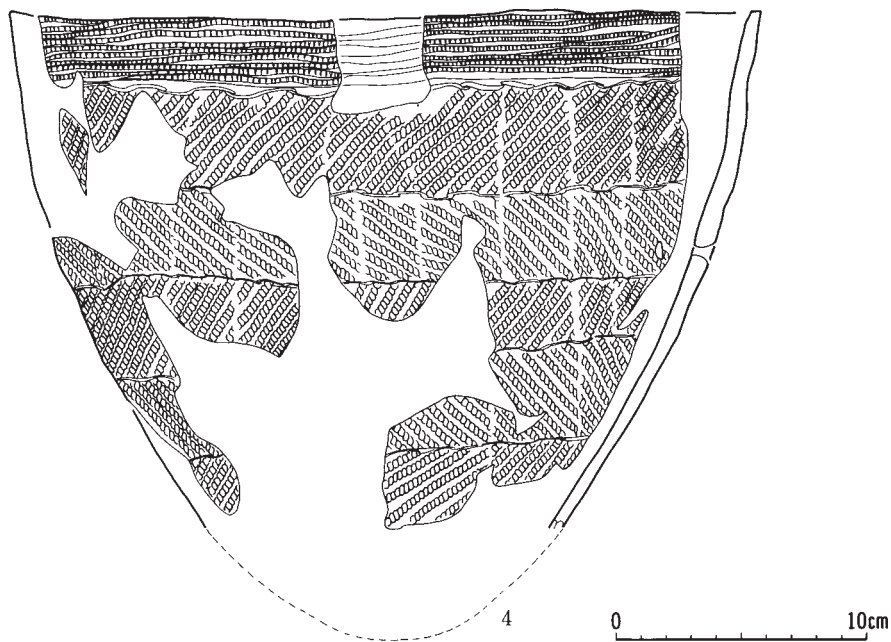
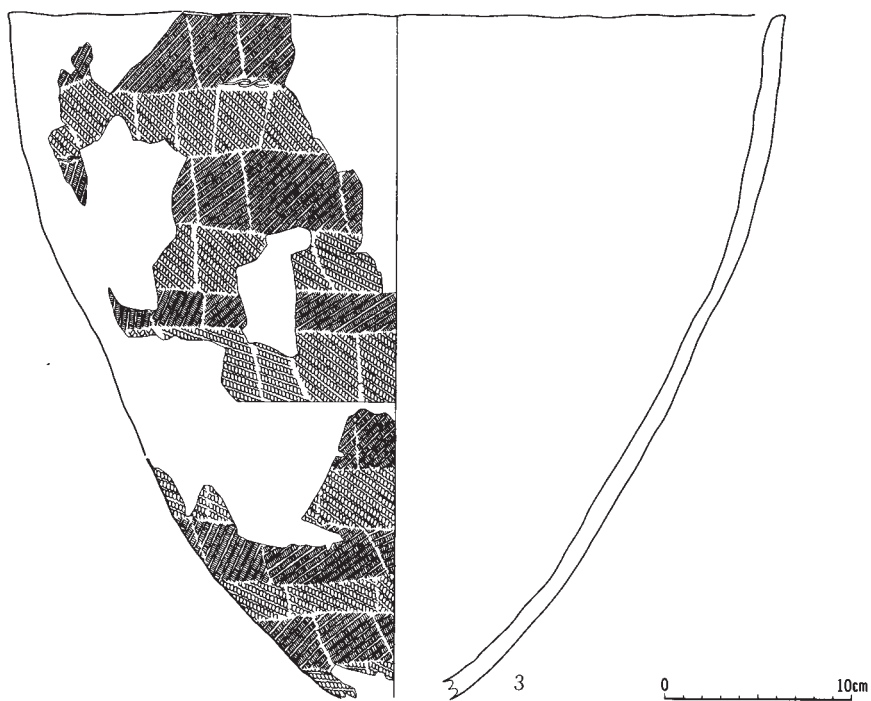
第 群土器

早稲田6類、春日町式に近い土器であるが、第3・4次調査では出土しなかった。

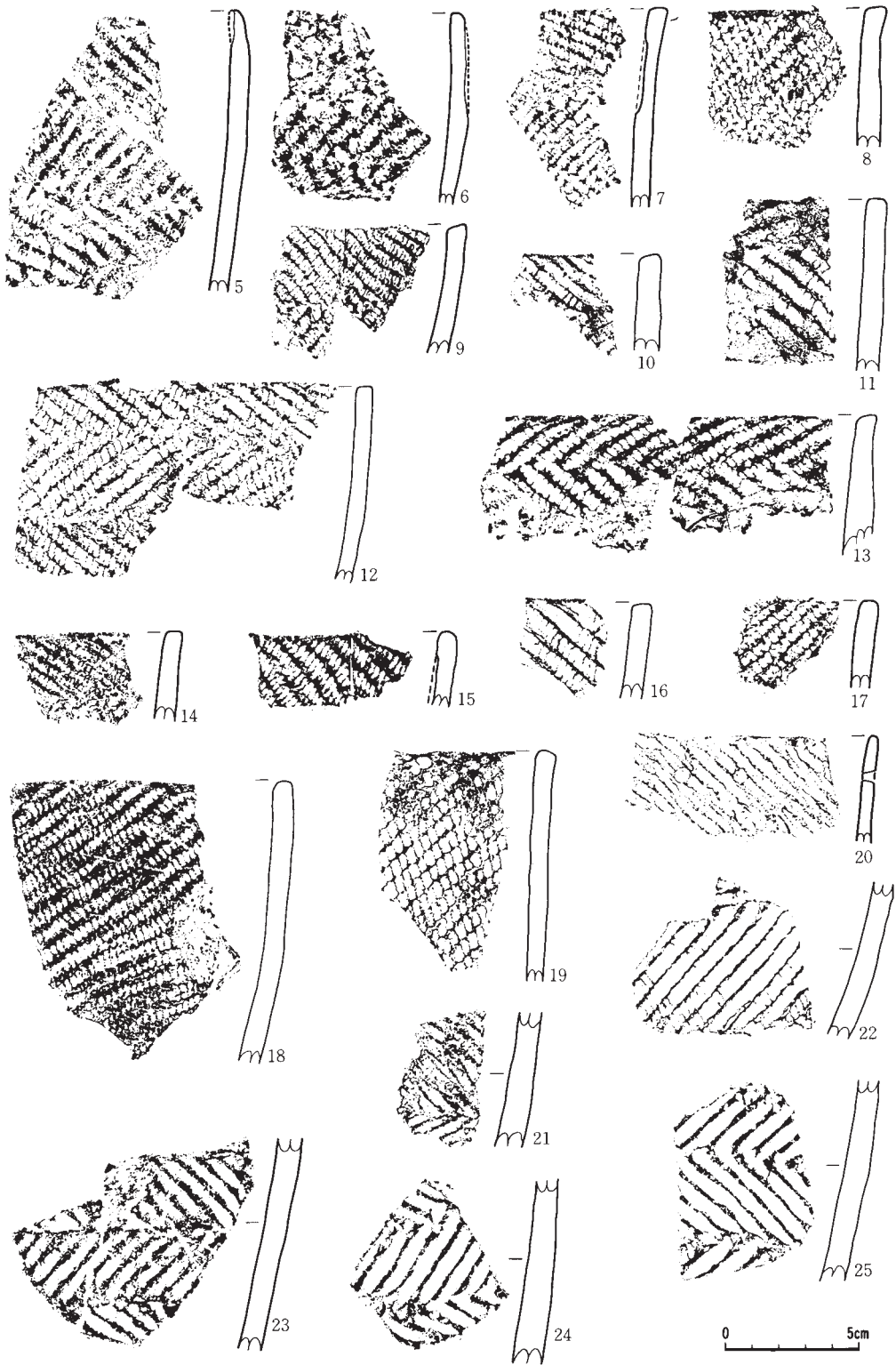


0 10cm

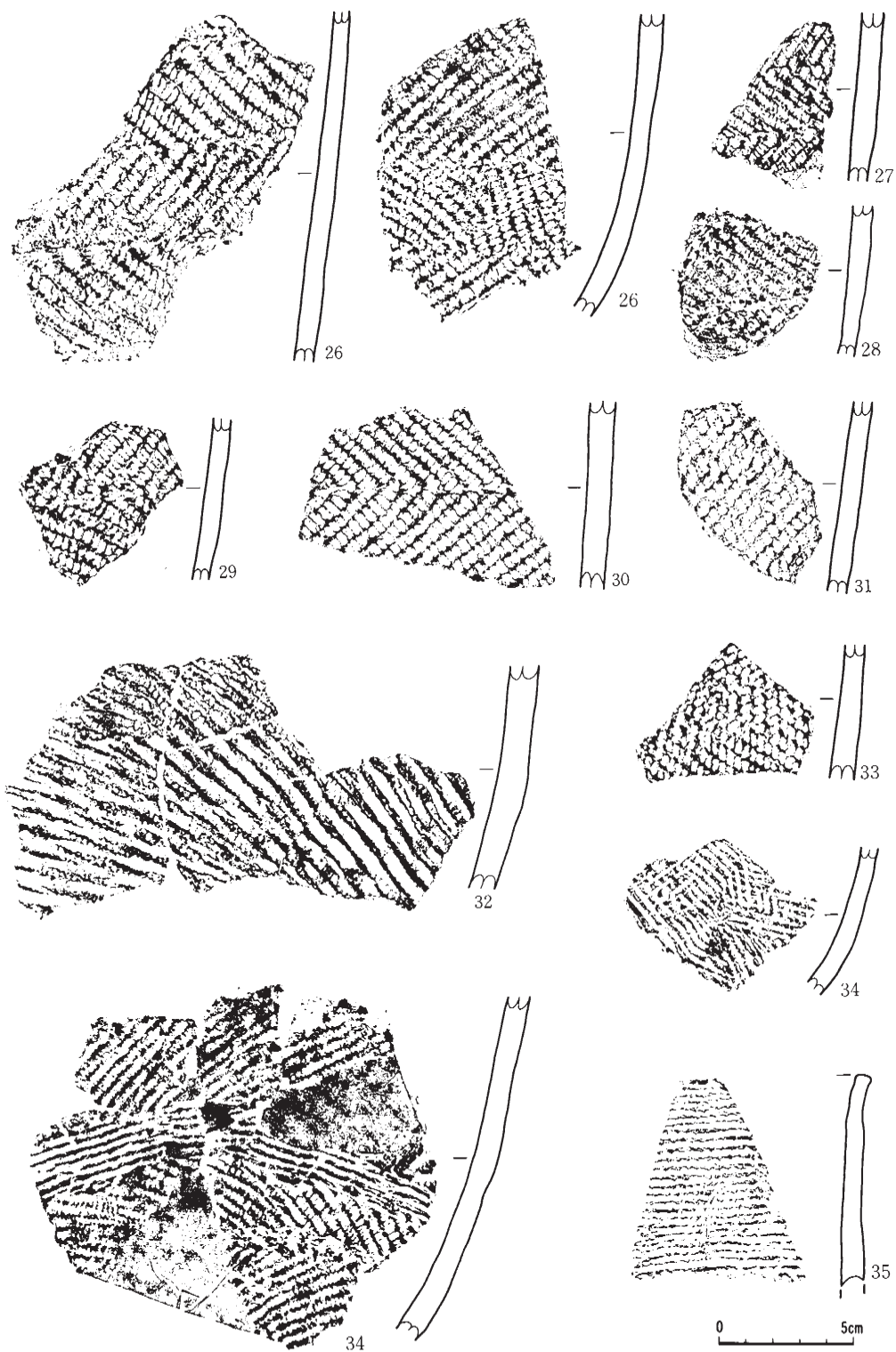
第94图 第Ⅷ群土器実測図



第95図 第Ⅳ群土器実測図



第96图 第四群土器拓影图



第97图 第Ⅳ群土器拓影图

第 群土器

所属する型式を特定できないものを一括したが、おおむね、第 群から第 群に関連すると考えられるものである。これらを、更に7類に分類した。

A類 縄文を施文したもの

B類 縄文と刺突及び沈線が施文されたもの

C類 絡条体圧痕文を施文したもの

D類 細隆起線文と貝殻文を施文したもの

E類 半截竹管による平行沈線文を施文したもの

F類 刺突文を施文したもの

G類 半截竹管による平行沈線文に刺突を加えたもの

H類 器面に浅い窪みを多数もつもの

A類(1~9、99)

器面のほぼ全面に、縄文を施文したと考えられるもので、4個体ある。1~3、4~7、8~9は各々同一個体である。

1~3は、胎土に植物性繊維を含まない。また、砂粒の含有量も少ない。焼成は良好で、緻密で硬い。器厚は4~5mmと薄い。縄文は無節のR縄で、条の太さは2mmである。内面は平滑で、貝殻条痕文を施している。口唇上端は平坦である。

4~6は、胎土に植物性繊維を含まないが、砂粒を多く含む。焼成は良好で、緻密で硬い。器厚は6~7mmである。縄文は単節のRL縄で、その節は1.5mm×1mmである。口唇上端は平坦で、刺突に近い刻みが施されている。内面はほとんど無調整で、指頭による凹凸が顕著である。

7~9は、胎土・焼成・器厚等が4~6と類似する。縄文は、無節のL縄を軸に巻いた撚糸文であるが、その条は1mm未満と極めて細い。内外面とも良く調整され平滑であるが、内面に調整痕を残している。

99は、胎土・焼成・器厚等が4~9に類似する。器形の概略を知ることのできる数少ないものであるため、図上復原した。推定口径は32.8cm、残存部分の推定高は32cmであるが、胴下部の破片の位置は約6cmほど上にずれる可能性もある。器形は、口縁部が若干外反し、頸部がややすぼまり、胴部中央がやや膨らむものと考えられ、尖底の可能性が強い。縄文は無節のR縄である。内面にはほぼ全面に条痕文が施されているが、接合部の段や指頭の凹凸が明瞭に残っている。口唇部はやや薄く仕上げられているが、上端は平坦で、先端が平らな棒状工具様のものを用いた刺突が施されている。

以上の4個体のうち、1~3は胎土、器厚等の点では第 群土器に近似するが、その他の3

個体は第 群土器に近似している。

出土地点は、1～3が第316号竪穴住居跡の、また99は第315号竪穴住居跡の上層であり、4～6は大グリッド55で第群と同一、また、7～9は前者に近い60で第群土器などに混在していたが、第群土器とは胎土等が全く異なっている。

B類(10～25)

縄文と刺突及び沈線が施文されたものは、3～4個体である。

10は、胎土に微量の植物性繊維を含む。砂粒の含有も少なく、やや軟質である。器厚は6mmで、口唇部形状は丸みを帯び、その上端にかすかに刻みが施されている。幅4mm、高さ3mm弱の細い隆帯を巡らして胴部文様帯と区画し、刺突文を口唇直下と隆帯に沿って各1列施文している。更に、口唇直下の刺突文列の下位に1条の沈線を巡らしている。沈線文以下には隆帯上も含めてRLの斜縄文を施文しているが、ごく浅く施文されているため、不明瞭である。口縁部文様帯の内部は縦位回転、胴部は横位回転の施文であろう。節の大きさは2mm前後である。

11・14、16～18は同一個体である。口唇部上端は丸みを帯びている。胎土に微量の植物性繊維を含む。砂粒の含有はやや多く、緻密で、硬い。器面調整は良好で、器厚は5～7mmである。刺突列が1～2列斜位に施文され、RLの斜縄文もこれに沿って斜位回転施文されている。したがって、11では刺突列が右下がりのため、縦走する縄文となり、14・16等では左下がりのために縄文は横走している。

刺突施文と縄文施文の前後関係は不明であるが、18の右下の沈線は、縄文施文後のものである。縄文の施文は浅く不明瞭である。節の大きさは3×2mmである。

12・13・15は同一個体で、更に、11・14等と同一個体の可能性もあり、胎土等も類似する。器厚は6mm前後である。縄文の回転方向は、平行沈線の傾斜と一致している。節の大きさは2.5×2mm前後であろう。

19～25は同一個体と考えられ、11・12の土器と同様、植物性繊維を極く微量に含む。他に比べて、砂粒の含有量が多い。緻密で硬いが内面調整は余り良くない。器厚は6～7mmである。縄文を地文として、沈線・短沈線・刺突によって文様を構成しているが、その詳細は不明である。沈線は3条を単位とし、胴部を巡る沈線の下位に、弧状に施文している。刺突は4列を単位とし、斜めに数箇所施文され、短沈線は矢羽根状等に施文されている。24は口縁部近くの破片であろう。地文の縄文はRLで、節は1mm未満の極めて細かなものである。

以上の各個体は10を除いてはその文様帯がかなり広く、ほぼ器面の全面に展開されているものと考えられる。また、これらの文様構成要素のほか、植物性繊維を極く微量に含むことにおいても一致している。胎土に植物性繊維を含み、縄文を施文している点を除けば第群に類似

する。その一方で、縄文を施文する点においては、第 群等に類似するものの、その節は小さく、施文が極めて浅いなど異なる面も多い。特に、11等では、全体の文様構成を考慮して縄文が施文されているが、既知の諸型式にはみられない手法といえよう。

C類 (27~32)

絡条体圧痕文を施文したものであるが、第 群や第 群に含めたものとは、胎土や器厚等が異なっているものである。

第315号竪穴住居跡出土のものも含めると、2個体で、いずれも植物性繊維を含まない。砂粒の含有量は中程度で硬い。

単軸絡条体第 1 類の圧痕文と押し引き文を併用したものである。口唇部直下では絡条体圧痕文を左上がりに、また、その下部には右下がりに数段施文して口縁部文様帯を構成している。右下がりに施文された絡条体圧痕文の各段の境、及び胴部には押し引き文が横位に施文されている。この施文具は、貝殻によるものと考えられるが明瞭でない。

D類 (33~35)

細隆起線文に貝殻文を加えたものは、第312号竪穴住居跡出土の 1 個体である (33) が、ほかに胎土等が類似する貝殻腹縁による押し引き文を施文したのもあるため、これも一応本類に含めておく。

33は、口唇部の外側とその 1 cm下に幅 6 mmの低い隆帯を貼り付け、これに貝殻腹縁による刺突文を、また、この間の狭い無文部に別な工具による刺突を施している。以下、胴部は貝殻腹縁による横位の押し引き文である。胎土に植物性繊維を含まない。砂粒の含有量は中程度で、緻密で硬い。器厚は 6 ~ 7 mmである。

34・35は同一個体であるが胴部破片のため、隆帯や貝殻腹縁刺突文はみられない。貝殻腹縁による押し引き文を、その方向を変えて施文している。器厚は 5 ~ 6 mmで、胎土等は33に類似する。

C・D類とも胎土等はほぼ同一である。第312号竪穴住居跡では、D類が第 群土器とともに床面上で検出され、第 群土器に伴出する可能性も否定できない。

E類 (36~38)

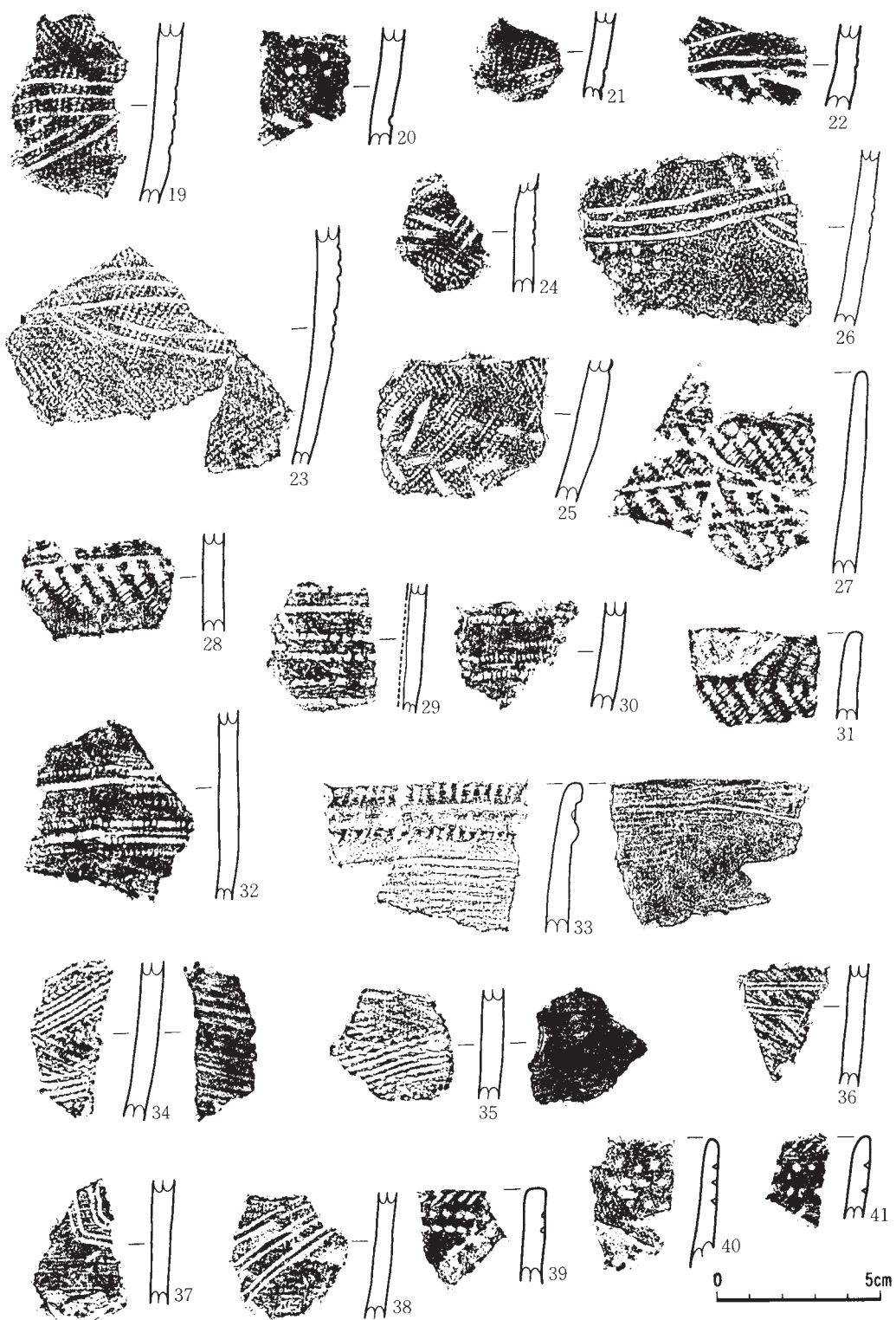
半截等の竹管類で平行沈線文を施文したものは 2 個体である。

37・38は同一個体で、器表面に条痕風の横位の調整痕がみられる。胎土に植物性繊維を含まず、砂粒の含有量が多い。緻密で硬く、器厚は 5 ~ 6 mmである。

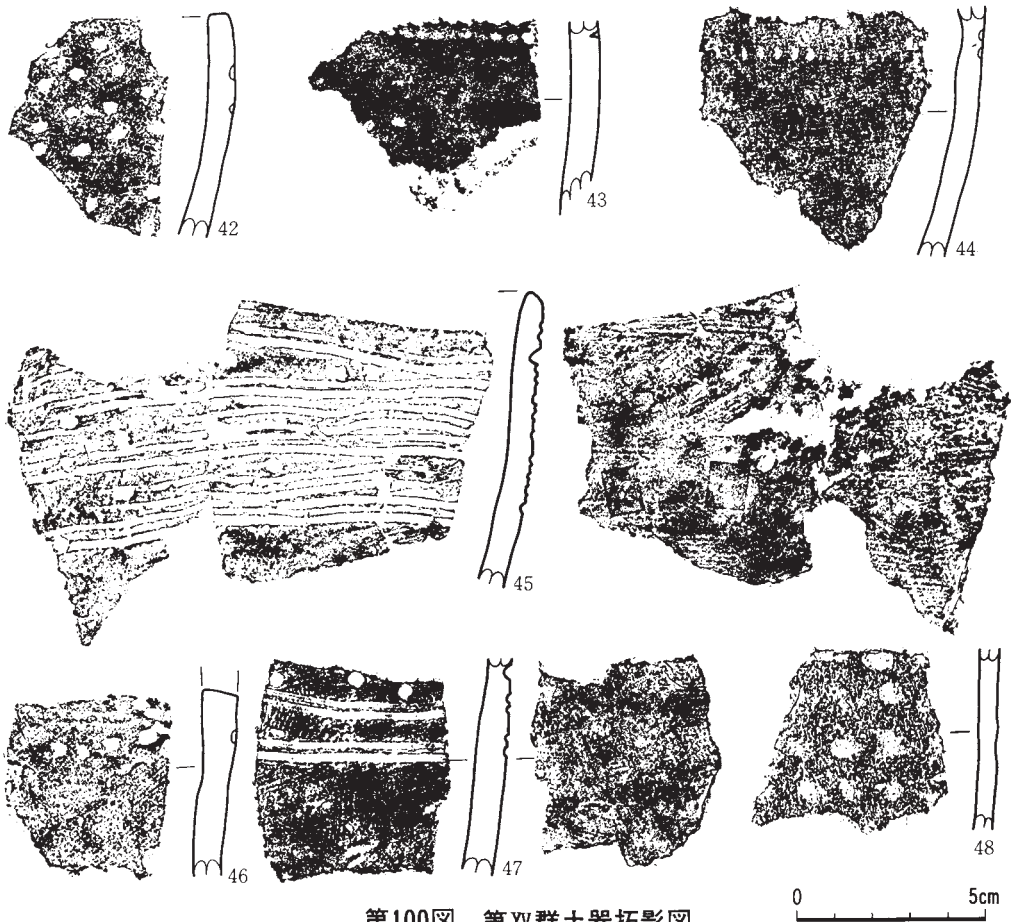
36も胎土に植物性繊維を含まない。砂粒の含有は少なく、緻密であるが若干軟質である。上下 2 条の平行沈線文は左端で連結されている。表裏両面に調整痕がみられる。貝殻によるものではないが、その調整具は不明である。器厚は 5 ~ 6 mmである。



第98图 第XV群土器拓影图



第99图 第XIV群土器拓影图



第100図 第XIV群土器拓影図

F類 (39～44・46)

刺突文を施文したものは6個体で、40と41は同一個体である。

39～41は器厚が5～6mm前後と薄く、他は6～9mmとやや厚い。胎土に植物性繊維を含まず、砂粒の含有が多い。緻密で硬い。

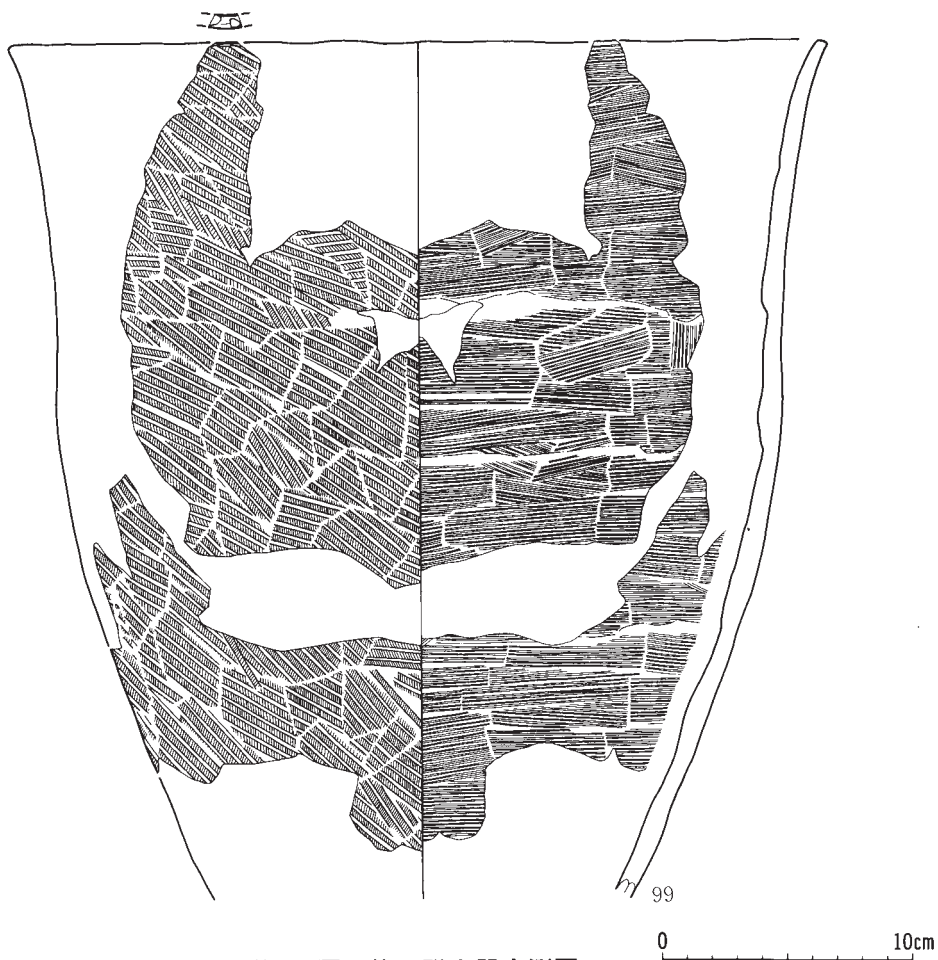
刺突具は、44が多截竹管、46は半截ないし劣截竹管で、39～41、43は先端が細い棒状工具で、46を除き、深く刺突されている。

42は、1段目と3段目が半截竹管による深い刺突、その他は縄文原体の末端刺突である。

G類 (45・47)

半截竹管類による平行沈線文に、刺突文を加えたものは2個体である。

45は、波状口縁で、半截竹管類による平行沈線を横位にやや乱雑に施文して口縁部文様帯とし、ヘラ状の工具によってその所々に刺突を加えている。胴部は無文のようである。内面に細



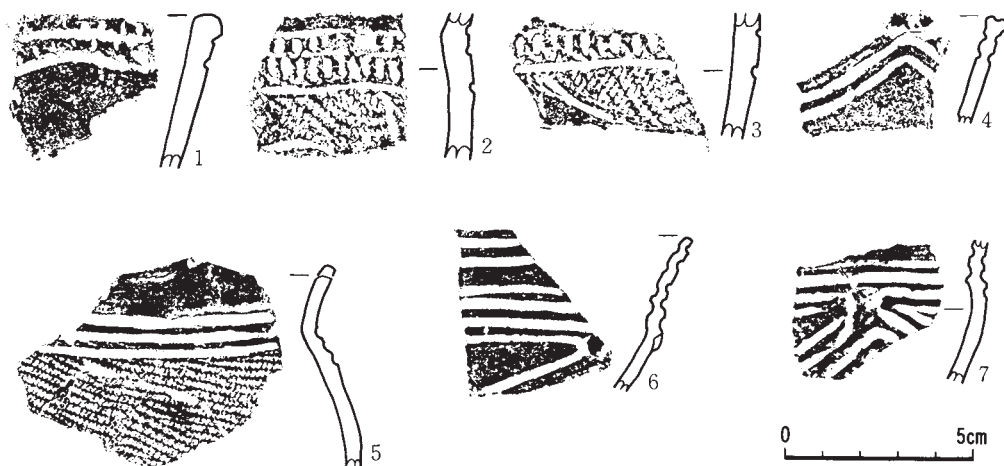
第101図 第XV群土器実測図

かな貝殻条痕が施されている。植物性繊維は含まないが、砂粒・白色凝灰岩粒を多く含む。やや軟質で、器厚は8 mm前後である。

47は、表裏面に細かな貝殻条痕文を施している。刺突は、ヘラ状ないし多截竹管であろう。胎土は45と類似するが、緻密で硬い。

H類(48)

器面の所々にヘラ状工具で浅く削り取ったような窪みが多数みられるもので、同一個体の胴部破片が第307号B住居跡から出土した。器厚は約5 mmで、植物性繊維を含まず、砂粒を多量に含むが、良く調整されており、緻密で堅い。器内面には、条痕等を施していない。胎土・器厚等は、第 群土器(ムシリ 式)の一部に類似する。 (三宅)



第102図 第XVI・XVII群土器拓影図

第 群土器（第102図1～3）

縄文後期の十腰内 式に相当すると考えられるもので、DN - 61・72、DM - 71等のグリッドから計5片出土した。調整・焼成とも良好で、緻密で硬い。

1は緩やかで大振りな波状口縁を呈する深鉢形土器であろう。口縁に沿って沈線を巡らし、これに刻みを加えている。

2・3は同一個体で、小形の鉢の肩部付近であろう。沈線を3条巡らし、この間に刻みを付している。沈線以下は磨消縄文であるが、文様は不明。RLの縄文を用い、方向を若干変えて施文している。（三宅）

第 群土器（第102図4～7）

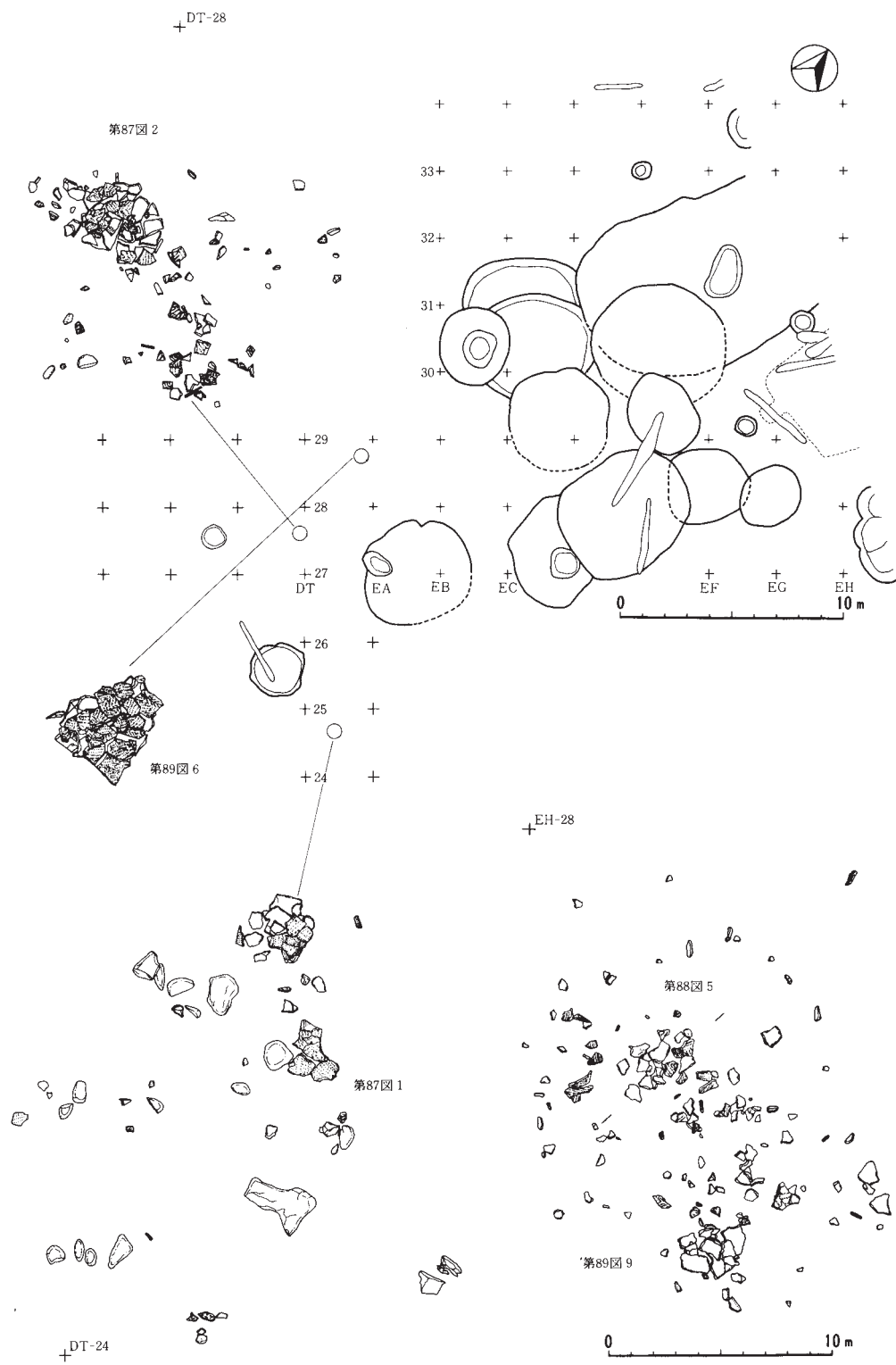
弥生時代の土器で、ほぼ二枚橋式に相当するものである。EE - 65・66グリッドから4片出土した。

5は小形の鉢形土器と考えられる。頸部に沈線を巡らし、以下は、ほぼ横走るLRの縄文を施文している。

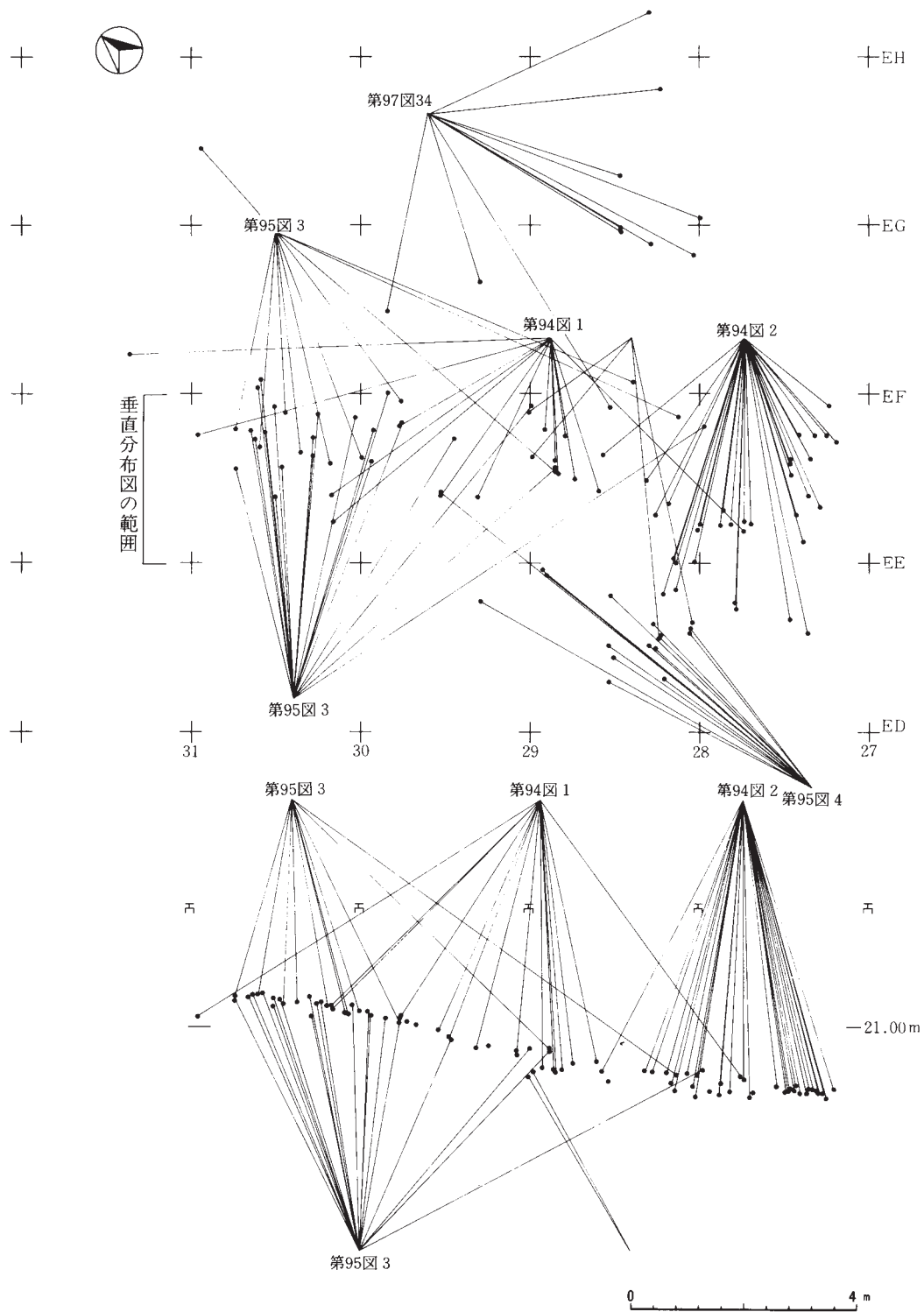
4・6・7は各々別個体で、台付浅鉢と考えられる。6・7には変形工字文が施文され、6には瘤状の粘土粒が付されている。（三宅）



第103図 土器分布状况



第104図 遺構外出土復原土器出土状況



第105図 第Ⅳ群土器（長七谷地Ⅲ）接合資料分布図

(2)石器

石鏃 (第106図1～第107図46)

遺構内出土が7点、遺構外出土が62点であるが、このうち完形品は41点である。有茎は4点で、残る65点は無茎であるが、ここでは無茎鏃の中に尖基鏃等として通常別分類されるものも含めている。

本遺跡から出土した石鏃は、以下のように全体的形状と基部形状を組み合わせて分類した。

有茎鏃	A類	三角形鏃	1種	凹基
	B類	五角形鏃	2種	平基
	C類	木葉形鏃	3種	円基
無茎鏃	D類	不定形鏃	4種	尖基
			5種	長脚

有茎鏃 (1～4)

有茎鏃は4点と少ない。いずれもその基部は尖基状をなし、これに茎が付く。返しは小さい。

無茎鏃

A類

全体的形状が三角形を呈するものである。その基部は、B類に比べて幅広である。基部形状により3種に細分されるが、1種と2種は大差がない。

1種 凹基のもの (23・28・29・39)

29は表裏面とも周縁部のみ調整したもので、23は尖頭部の作りが幾分丁寧なものの、主要剥離面、1次剥離面とも大きく残している。他の2点は、丁寧な調整による両面加工品である。いずれも、その基部は極くわずかに凹む程度であり、2種と大差はない。

2種 平基のもの (24・26・27・34)

図示したもののほかに3点あるが、いずれも周縁部だけを調整した粗雑なものである。

24・26・27は、両面とも丁寧な調整がなされている。34は両面とも調整されて主要剥離面等を残していないが、周縁部には微細な調整が施されていない。また、側縁は若干膨らむが、この点は3種に類似している。

3種 円基のもの (7・35～38)

7を除き、基部ばかりでなく、両側縁も膨らみをもち、全体的に丸みを帯びる。器体の調整は粗雑である。38は主要剥離面を大きく残している。

B類

全体的形状が五角形を呈するもので、基部形状により3種に細分される。なお、25・43及び第5種を除き、その基部は極めて狭い。

1種 凹基であるもの(30~33・43)

図示したもののほかに2点ある。

器体の中央部から基部にかけての側縁がほぼ平行している。43を除き、両面とも丁寧な調整が施され、1次剥離面、主要剥離面とも残存しない。43は他と異なり、幅広の器体で持ちも深い。調整も器体の周縁部が主体で、主要剥離面等を大きく残している。微細な調整を加えてない点が、34に類似する。

2種 平基であるもの(16・19~21・25)

図示したもののほかに1点ある。25を除き、器体の最大幅はほぼ中央にあり、基部にかけて若干しぼっている。1種同様、両面とも丁寧な調整が施されている。25は、器体中央から基部にかけての側縁がほぼ平行で、1種に類するが、更にその基部は幅広であって、この点A類に近似している。

5種 長脚であるもの(40~42)

図示したもののほかに1点ある。一応、全体形状を五角形としたが、上記1・2種とは大きく異なっている。41・42が典型的なもので、器体中央部の側縁は平行であるが、以下、大きく広がり、深い決りをもっている。一般的な長脚鍬とはやや異なるが、本遺跡における凹基のもの多くは極く浅いものであるため、これと区別するために長脚の名称を用いた。

C類(5・6・8・10~14・17・18)

全体形状が木葉形を呈するものであるが、菱形を呈するもの(8)も含めている。基部形状にはやや尖ったもの(尖基、5・8・10・22・46)と、丸み帯びるものがある。5・15・22・46の調整は丁寧であるが、他はやや粗雑で、11・14・17・18は主要剥離面等を大きく残している。なお17・18は黒曜石製で、その他は頁岩である。C類は、図示したものの以外に2点ある。

D類

不定形なもので、小剥片の周縁に若干の調整を加えたものである。図示したものの以外に3点ある。

なお、上記分類が不可能な破損品が他に3点ある。

石槍(第107図47~55)

遺構内出土が3点、遺構外出土が20点で、計23点である。このうち完形品は7点で、30%である。

器体の形状により、特に細長いものを柳葉形(A類)とし、木葉形のもの(B類)と一応区別しておく。

A類(47・50)

柳葉形を呈するものは2点である。

47の器体中央部は薄いレンズ状の断面を呈している。しかし、尖頭部及び基部では急峻な調整を加え細身に絞り、断面形状は菱形に近い。この急峻な調整は、尖頭部では左側縁の表面と右側縁の裏面、そして基部では、逆に左側縁の裏面と右側縁の表面に施され、その結果、器体は若干よじれている。

B類(48~54)

木葉形を呈するものは7点図示したが、他に破損品が11点ある。

53は、器体の中央部に最大幅をもち、以下、やや急峻な調整を加えて、上半身よりも絞って基部を作り出している。裏面は図示していないが、その剥離面は平坦面をなし、これを打面として表面側のやや急峻な調整がなされている。

55は、基部の可能性がある。断面形状は47同様、菱形に近い。

51~54を除き、調整は全般に粗雑で、周縁には微細な調整が余り施されていない。

なお、54の基部は、若干つまみ状に作られ、縦型石匙とみることも可能である。

石匙(第107図56~第109図91)

遺構内19点、遺構外47点出土し、このうち完形品は29点である。

石匙は、刃部とつまみの位置関係により、縦型石匙(A)と横型石匙(B)に分けられる。縦型石匙は63点で、横型石匙は3点である。

A 縦型石匙

縦型石匙は、その刃部形状により4類に分け、これを更に各々2分した。

類 片側の側縁が内湾し、他の側縁が弧状に膨らむもの

類 片側の側縁が直線的で、他の側縁が弧状に膨らむもの

類 両側縁が直線的なもの

類 両側縁が弧状に膨らむもの

a種 幅が狭く甲高なもの

b種 幅が広く扁平なもの

類(56~59、73~76、81)

片側の側縁が内湾し、他の側縁が弧状に膨らむものは3点(小破片のため図示しなかったもの10点を除く、以下同じ)である。76を除き、右側縁が内湾し、左側縁の主要剥離面側には、左側縁を調整するための打面と刃潰しを兼ねた調整剥離面が並んでいる。また、76と81を除き、その断面形状は、右側縁側が急峻な角度をなす不等辺三角形を呈している。右側縁側の角度は55°~70°で60°を示すものが多い。76は左側縁が内湾しているが、調整されたものではない。単に、素材となった剥片の形状が類似しているだけで、調整は右側縁先端部にのみ施されている。81は、幅広なb種に属し、断面形状は薄いD字状であるが、その稜線はa種同様に右側に寄っ

ている。

類 (69・72・77・83)

片側の側縁が直線的で、他の側縁が弧状に膨らむものは4点である。形状的に 類と 類の中間的なものであるため、類別に迷うことが多い。69がa種、他はb種に相当するが、71の稜線は右に大きく寄って700~750の急峻な角度をなし、この点a種に類似する。背面調整と刃潰しを兼ねた調整を施したものは70・77の2点である。72は、右側縁の表裏に調整剥離が並び、約70°の角度をなし、左側縁は鋭利で、主要剥離面側に刃コボレ状の微細な剥離が並んでいる。

類 (60・68・78・84・85・91)

両側縁が直線的であるものは13点である。b種に含まれるものは、85・86の2点で、いずれも作りが粗雑である。本類のものには、更に先端部が尖るもの(60~62他)と平らなもの(63・64他)がある。特に両面加工された61は、その先端部が磨滅し、錐としても使用されたことを物語っている。62・63は背面調整用等の小剥離をもつが、いずれもほとんど残存していない。91は表裏とも丁寧な加工により薄いレンズ状に仕上げられ、また、つまみの作りも他と異なっているが、一応石匙として本類に含めておく。

類 (79・82・86・88・90)

両側縁が膨らむものは5点である。79は ~ 類の、本遺跡の主体をなすものに近似するが他は、幅広の寸詰りの形態である。

B (87・89)

模型石匙は2点である。打点の位置は87が背面右、89が背面左方向にある。いずれも刃部は膨らんでいる。

筥状石器 (第110図92~104)

搔器的機能をもつもので、石筥又は筥状石器(類)と称されているものとトランシェ様石器(類)と称されているものを一括した。計13点である。

類 (95・104)

トランシェ様石器と称されるものに類するものは、2点である。

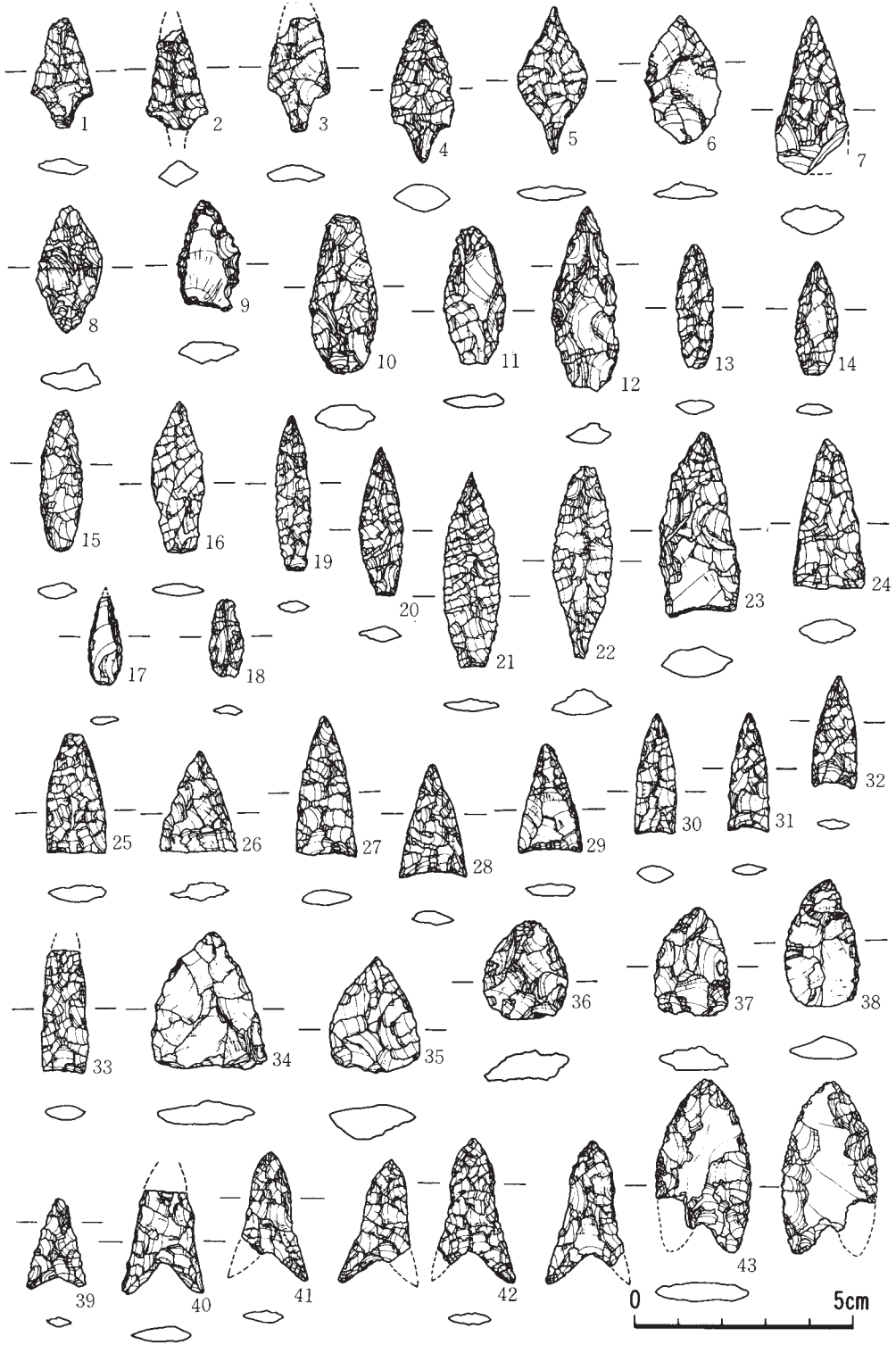
7の図は主要剥離面倒であるが、剥片の縁辺部を集中的に調整している。背面は第1次調整を大きく残しており、調整剥離は右側縁に若干施されているだけである。

104は節理面を刃部として利用しており、これに若干の調整を加えている。

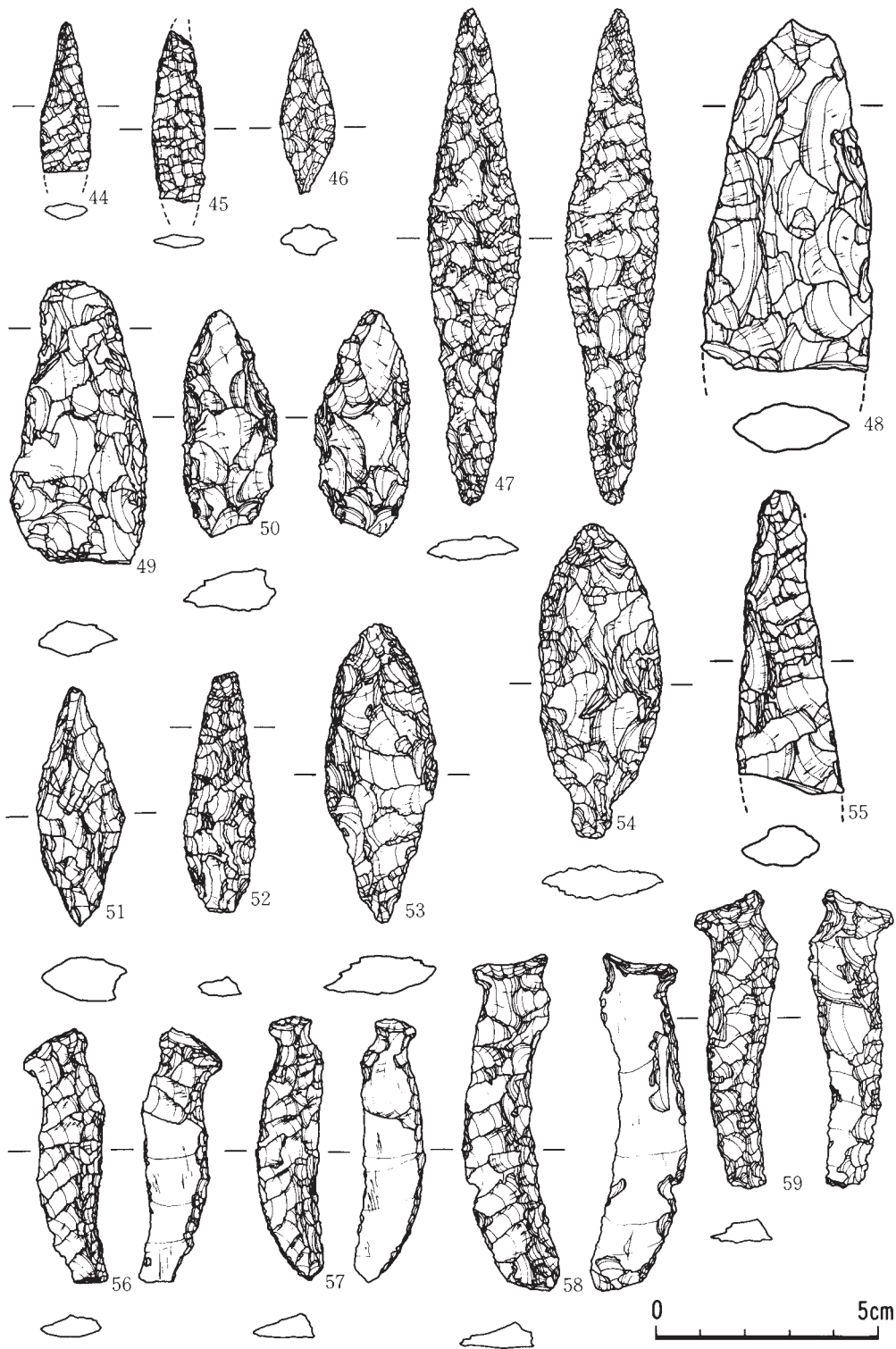
類 (92~94、96~104)

通常筥状石器と称されているもので、これは刃部の作出が荒いもの(a)と丁寧なもの(b)とがある。

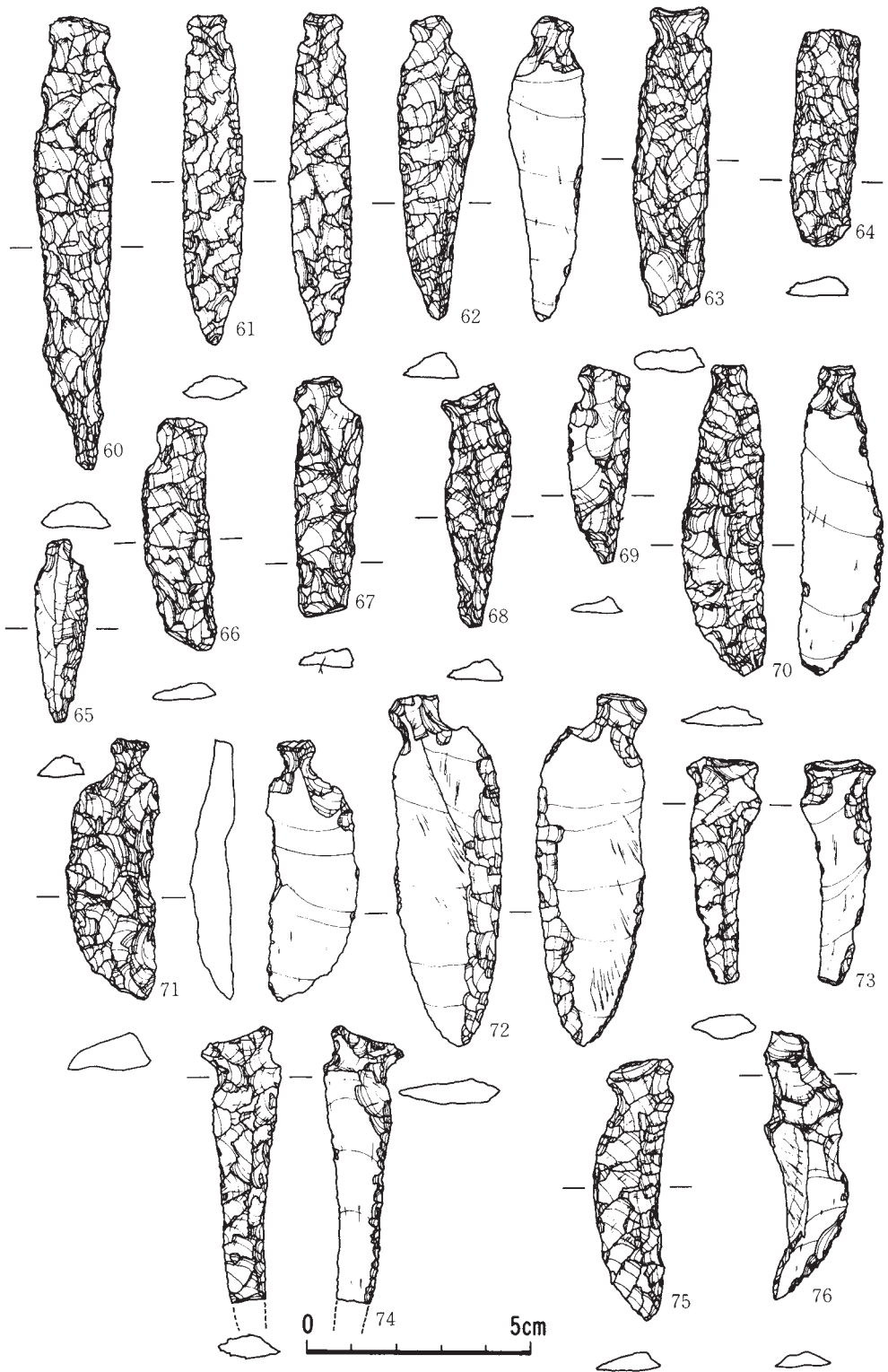
a類 (96~99)



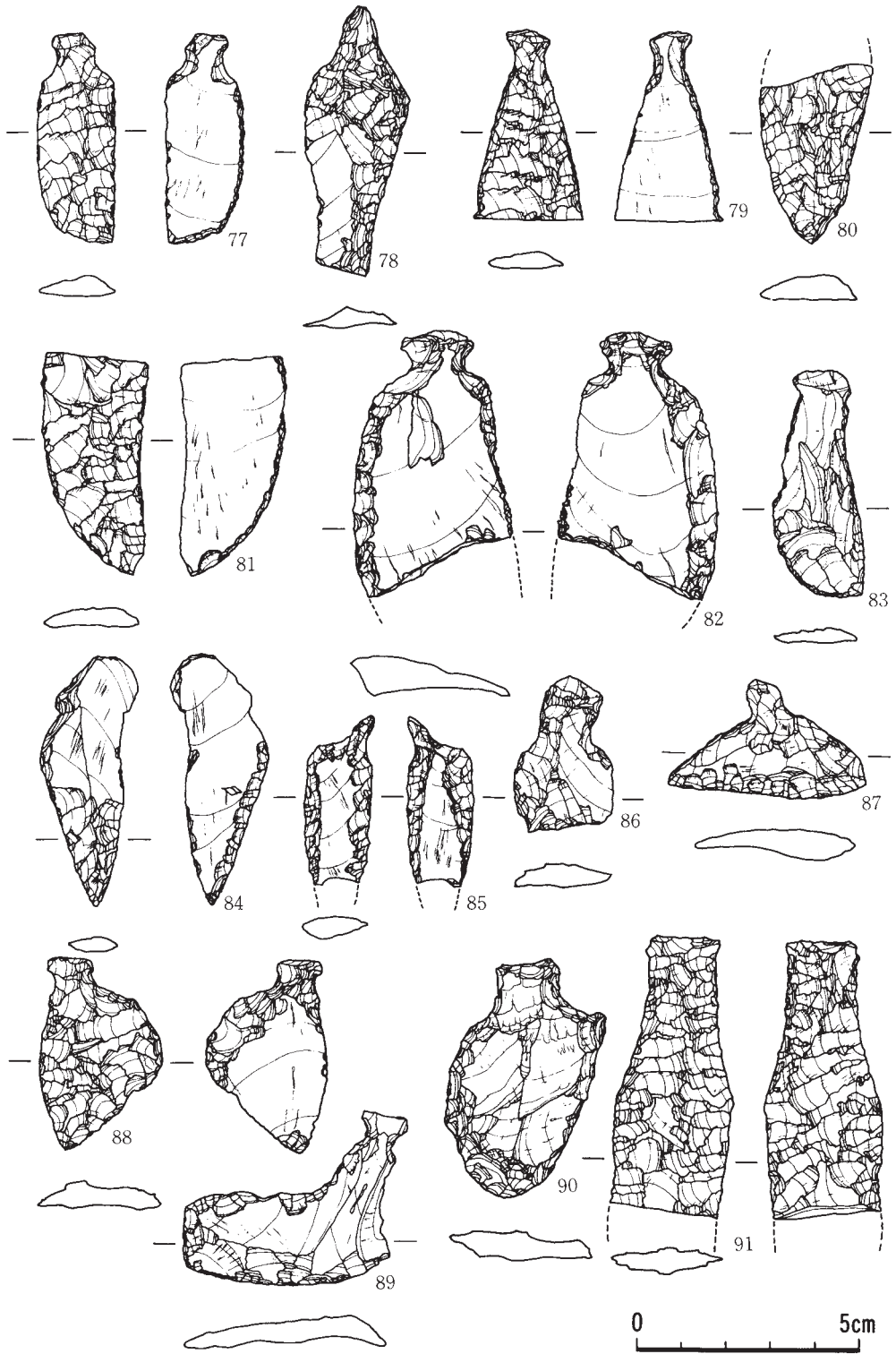
第106图 遺構外出土石器実測図



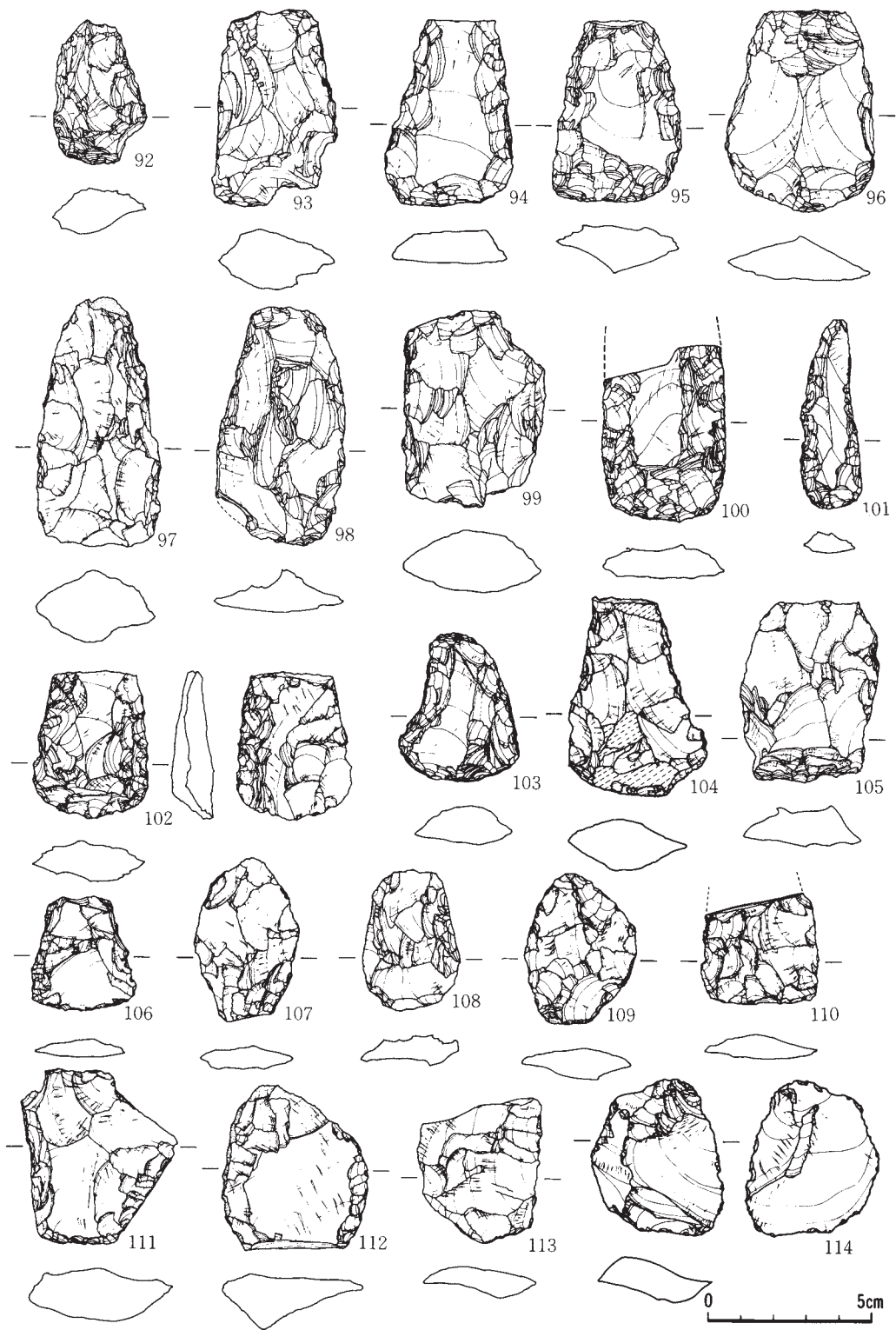
第107图 遺構外出土石器実測図



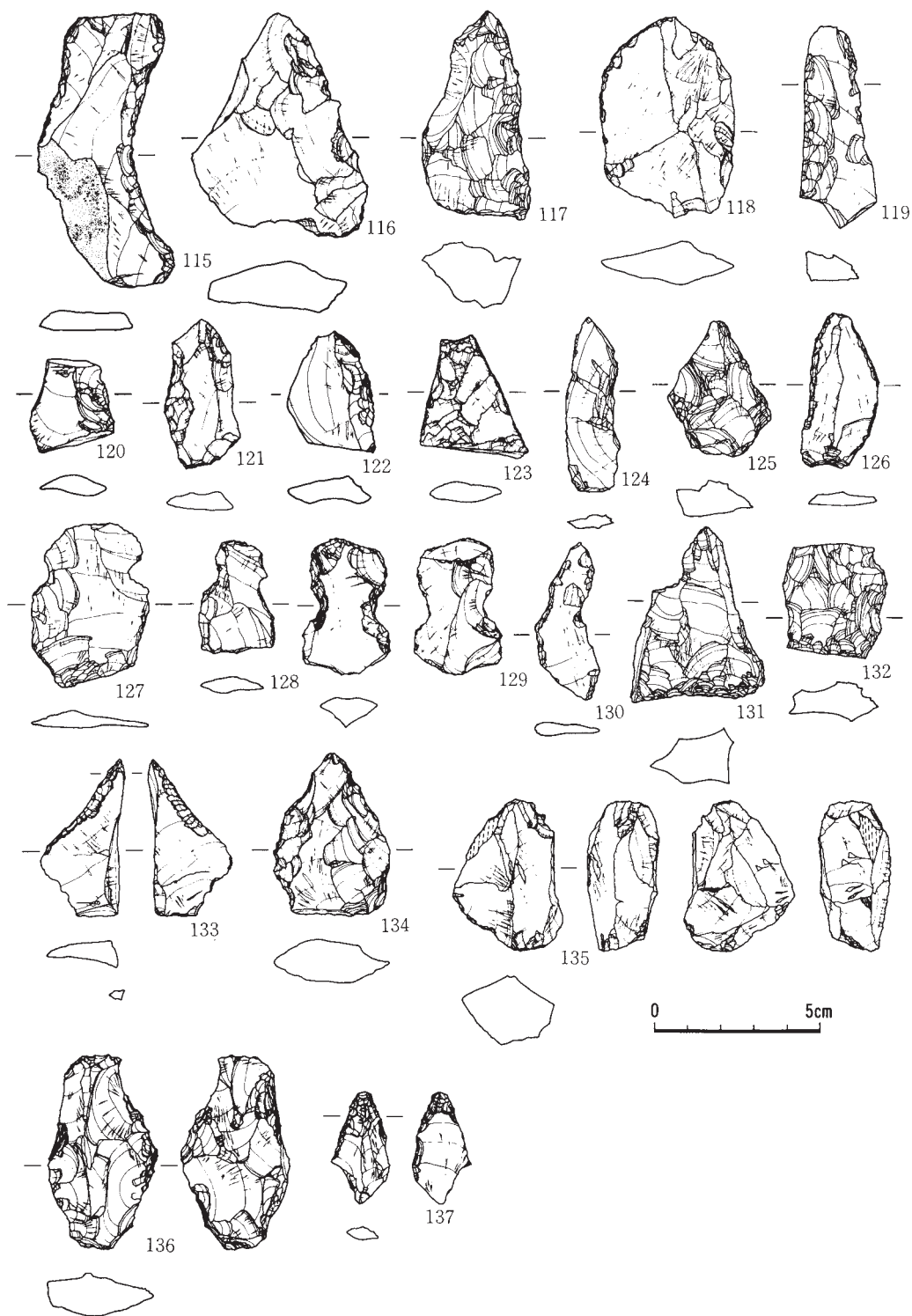
第108図 遺構外出土石器実測図



第109図 遺構外出土石器実測図



第110图 遺構外出土石器実測図



第111图 遺構外出土石器実測図

刃部の作出が荒いものには、扁平なもの(96・98)と甲高のものがある(97・99)

96の背面における刃部および中央の稜線、更に主要剥離面側では磨耗した面がみられる。特に背面には刃部に直交する使用痕が明瞭に観察される。

97・99は主要剥離面をほとんど残していない。特に97は、一部に礫表皮面を残しており、その厚さと調整のあり方からするならば、小円礫から直接製作された可能性が強い。

b類(92～94、100～103)

丁寧な調整によって刃部が作出されたものである。94と100は、主要剥離面および第1次剥離面とも大きく残し、周縁部のみ調整している。

彫器(第111図131・132)

槌状剥離が施されたものである。

131は、分厚い不定形の剥片の先端部から右側縁に4条、左側縁に3条の槌状剥離が加えられている。

132は、両面加工品の欠損品の左側縁に、下端から槌状剥離を3度加えている。

抉入削器(第111図127～130)

不定形な剥片の両側縁に抉入部をもつものである。側縁の一方にのみ作出したものはない。

石錐(第111図133・134・137)

不定形な剥片の一端に鋭利な機能部を作出したものである。

134は両面加工されている。

以上の定形的石器のほかに、多数の不定形石器がある。これには比較的丁寧に両面加工されたもの(105、107～110)、二側縁ないし一側縁に比較的丁寧な調整を加えたもの(106・111他)、極く一部にのみ調整が加えられたもの(118他)等がある。なお、105は片面しか実測していないが、ピエス・エスキーユかと思われる。先端部は光沢をもち、96の筥状石器と同様な縦位に走る使用痕が観察される。(三宅)

剥片の接合

D S - 57グリッドにおいて、剥片類が直径60cm、厚さ20cmのレンズ状をなして堆積し、計272点出土した。チップ類も多数出土したが、その範囲外にはほとんどみられない。

5点の接合資料を得たが、図示したのは6種類の母岩に属するもの13点で、他に最低2種類の母岩が認められる。以下、その概略を述べる。

接合資料 1(第113図)

剥片6点の接合で、2は同一母岩である。剥片1を除き、すべて自然面を残している。

下設打面からの加撃によって剥片を剥離した際(剥片1の背面中央)その末端近くで力が上方向と右方向に分散したため剥片2・3も同時に生じている。この後、打面を右へ90°転じて剥

片 4・5 を剥取し、再び下設打面から剥片 1 および欠失する剥片を、更に打面を右に転じて剥片 6 を剥取している。

接合資料 3 (第114図、第115図)

剥片14点の接合である。4～7は同一母岩と思われる。

剥片 1・5・6を除く剥片剥離は、同一打面上で行われている。剥片 1 は、剥片剥離作業面の背面側からの剥離であり、石核面調整を目的とした剥離であろう。剥片 5・6 は、同 2～4 を剥取後、打面を90°転位し、右側の自然面を打面として剥離している。剥片の剥離は、長軸上の同一の作業面において、おおむね左右交互に行われているが、打面の再生、調整は行われていない。なお、剥片14の剥取前に、左下端から1回の剥片剥離がなされている。

接合資料 4 (第115図)

剥片 6 点の接合である。

剥片 1 に石核の調整面を大きく残している。上設打面より数枚の剥片を剥取後、上設打面右端からの加撃により剥片 1～3 を含む分厚い縦長の剥片を剥離し、この剥片自体を石核として剥片 2・3 を剥離している。石核本体からは、4・5・6 の順で剥片が剥離されている。

接合資料 5 (第115図)

剥片5点の接合である。剥片 3・4 は自然面を残している。

すべて同一打面上からの剥離によるものであるが、剥片 1 は頭部を欠いている。剥片 2～4 は剥離に際し、打面部が若干調整されている。

接合資料 8 (第116図・第117図)

剥片15点の接合である。原石は円礫に近いものと考えられる。

円礫を回転させながら石核面調整を行って、ほぼ自然面を除去し、全体的に二等辺三角形のくさび状の石核をかたち作っている。自然面を残す破片 7・8 は、裏面側の調整剥片であろう。

剥片 1 は上設打面からではなく、その左端に残る自然面を打面としたものであり、これも石核面調整剥片とも考えられる。この後剥片 2・3 を剥取し、この剥離面を打面として剥片 5・6・9～13を連続的に剥取し、更に、打面調整を兼ねたと考えられる剥片14を剥離後、再び上設打面から剥片14・15を剥取している。以上の剥片のうち、縦長の剥片は 5・6・15の3点しかなく、他は不定形な剥片である。剥片 2～4 は、打面再生ないし調整剥片と考えられるが、本石核から剥取された剥片には、不定形なものが多いことを考慮するならば、これらも打面再生等を兼ねた目的剥片といえよう。

接合資料 9 (第117図)

剥片 5 点の接合である。ただし、剥片 1 と 3 は同一加撃によるが、途中で力分散し 2 つに分かれたものである。

両極に打面をもつ石核から剥取されたもので、 1 ~ 4 が下設打面、 5 が上設面からの加撃による剥離である。

接合資料 10 (第118図)

10 ~ 12は同一母岩と考えられる。

剥片7点の接合によるが、剥片2・3は同一加撃によって生じたものである。

この接合資料にみられる剥片剥離に先立ち、下方に石核面の左方向からの加撃による剥離面が1面観察され、上設打面からは最低5枚の剥片剥離が行われている。剥片1と5は頭部を欠いている。剥片1・2(+3・5)は、同一打面からの剥離である。剥片6の剥離に先立ち、石核面の左側を調整して新たに90°転位した打面を設け、横長の剥片6を剥取している。また、剥片4・7の剥離に先立ち、打面右側を若干調整し、剥片6を剥取後再び打面を90°転位して上設打面から4・7を剥取している。剥片の形状は、全般的に分厚く、幅広である。

接合資料 11 (第118図)

剥片4点の接合資料である。資料7と同一母岩と考えられる。

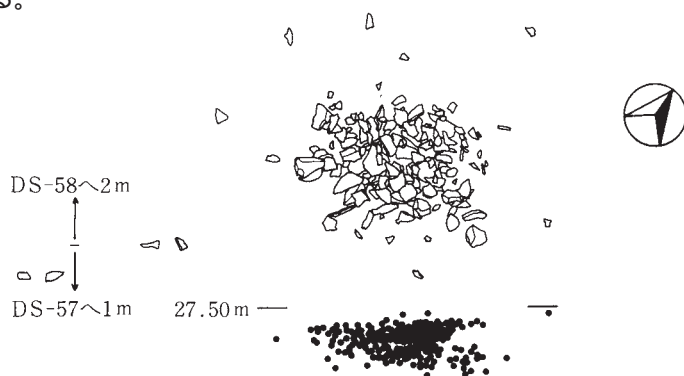
剥片1・3は自然面を打面とし、剥片2・4は単打面である。剥片剥離は1(欠)234と進むが、剥片1・(欠)3と剥片2・4の打面は90°異なる。このあり方は、これらの剥片剥離に先立つ剥離と同様である。7にもみられたように、かなり打面を転位して剥片の剥離がなされている。

接合資料 12 (第119図)

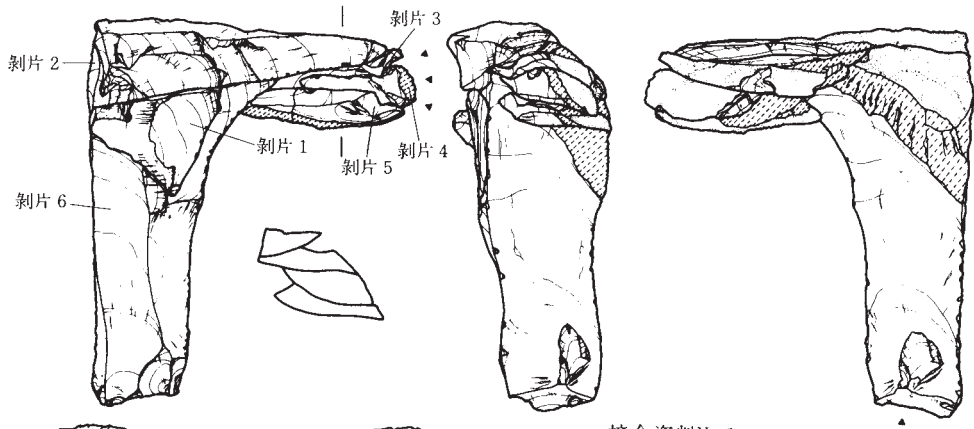
剥片5点の接合資料である。剥片4を除き、すべて自然面をもつ。

打面は数回の調整によって作り出されている。すべての剥片は、この打面からの加撃によって剥離され、(欠)12欠-3欠-欠45の順で剥離が進んでいる。剥片1を除く各剥片は、4~5cm幅の打面をもち、特に剥片5は、6×3.5cmの大きな打面をもつ分厚い剥片で、やや縦長の不定形な剥片である。剥片3の背面右側縁には、微細な刃コボレが認められる。

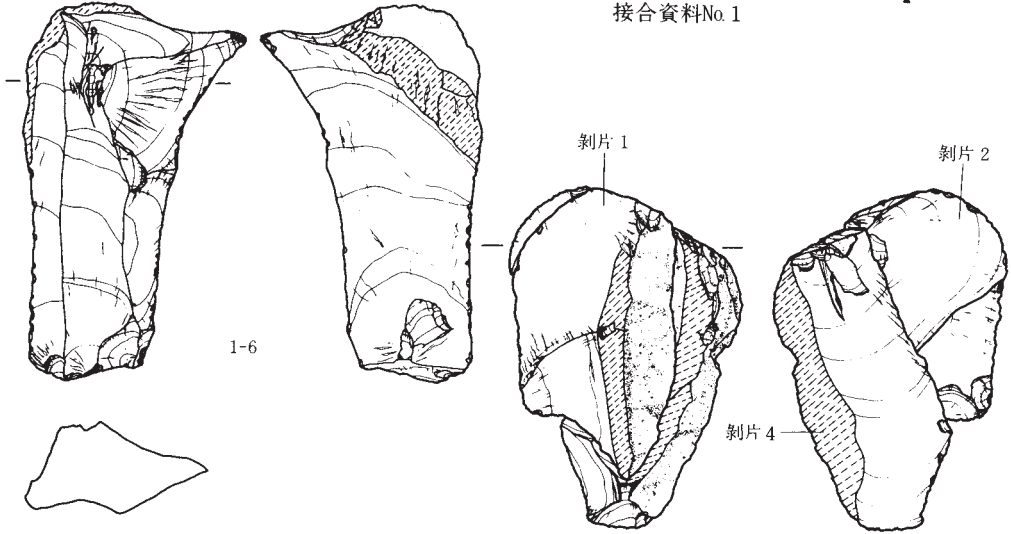
(佐藤)



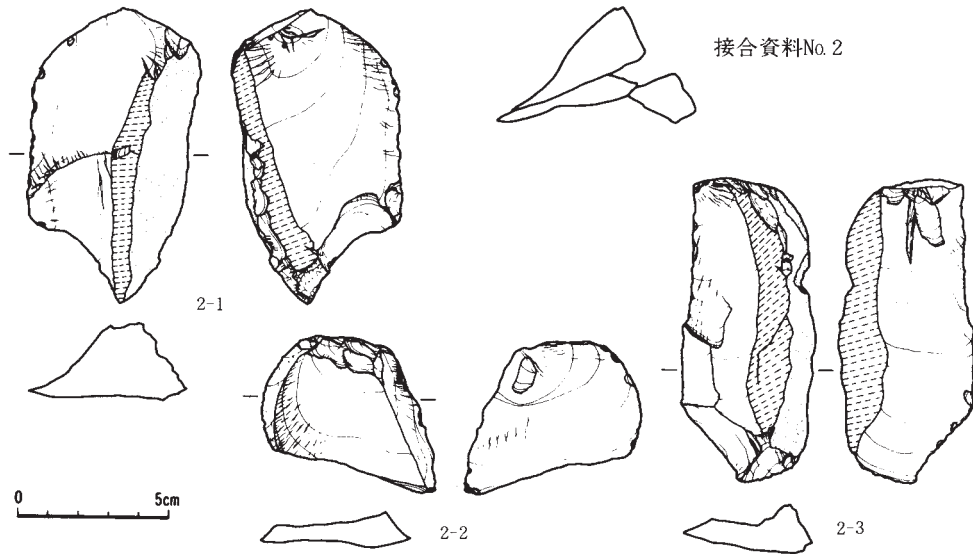
第112図 接合資料出土状態



接合資料No. 1

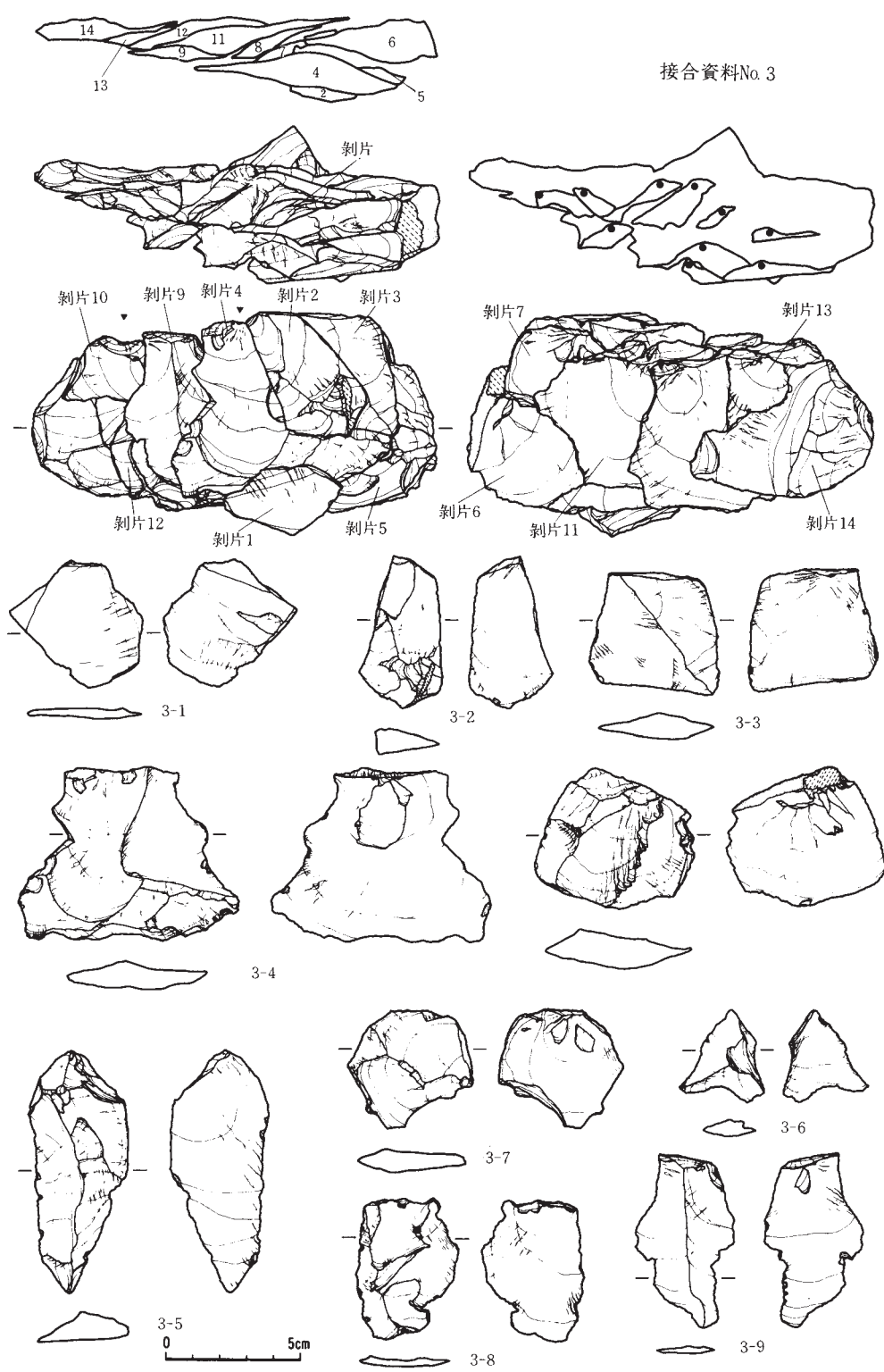


接合資料No. 2

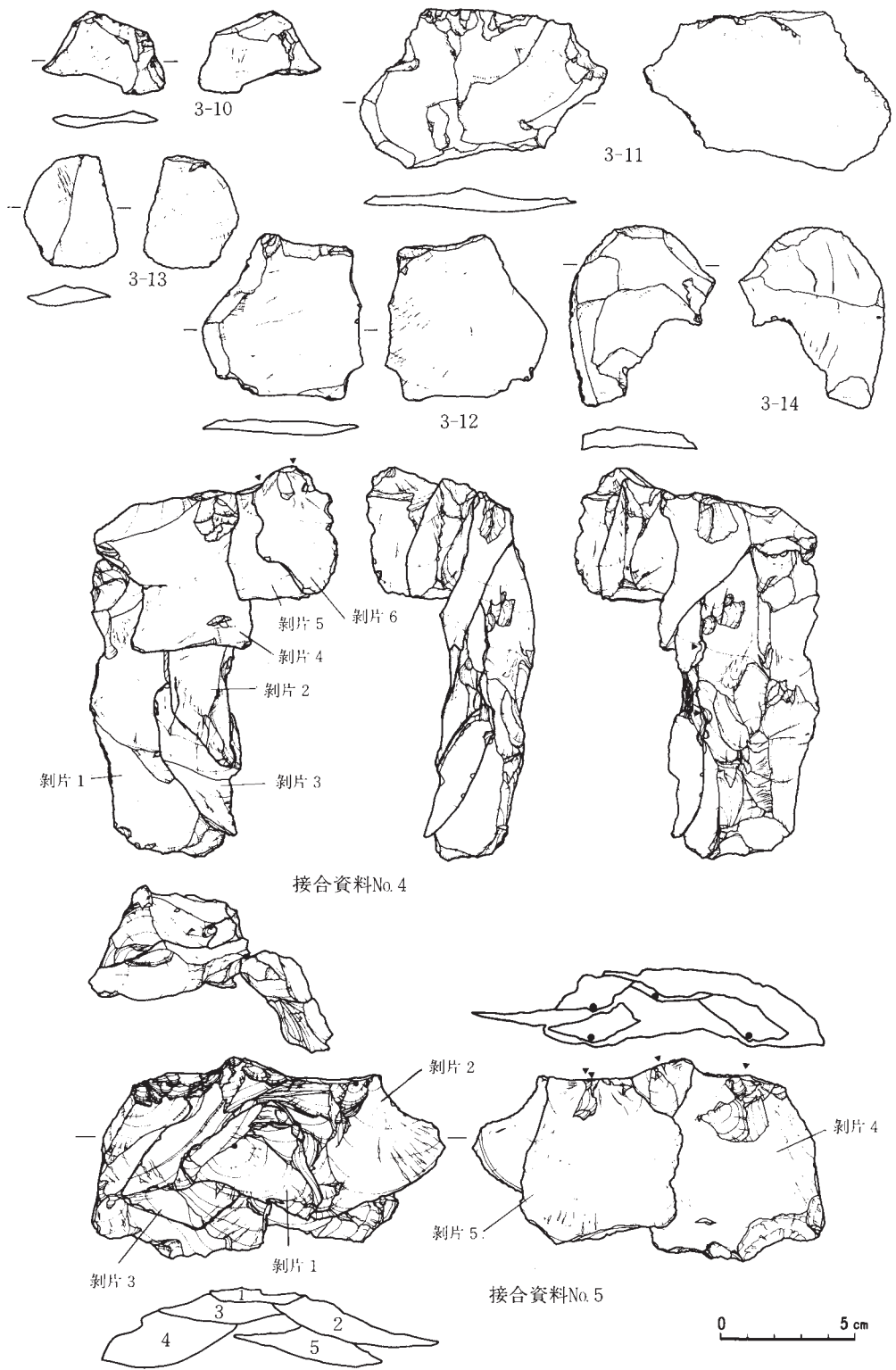


0 5cm

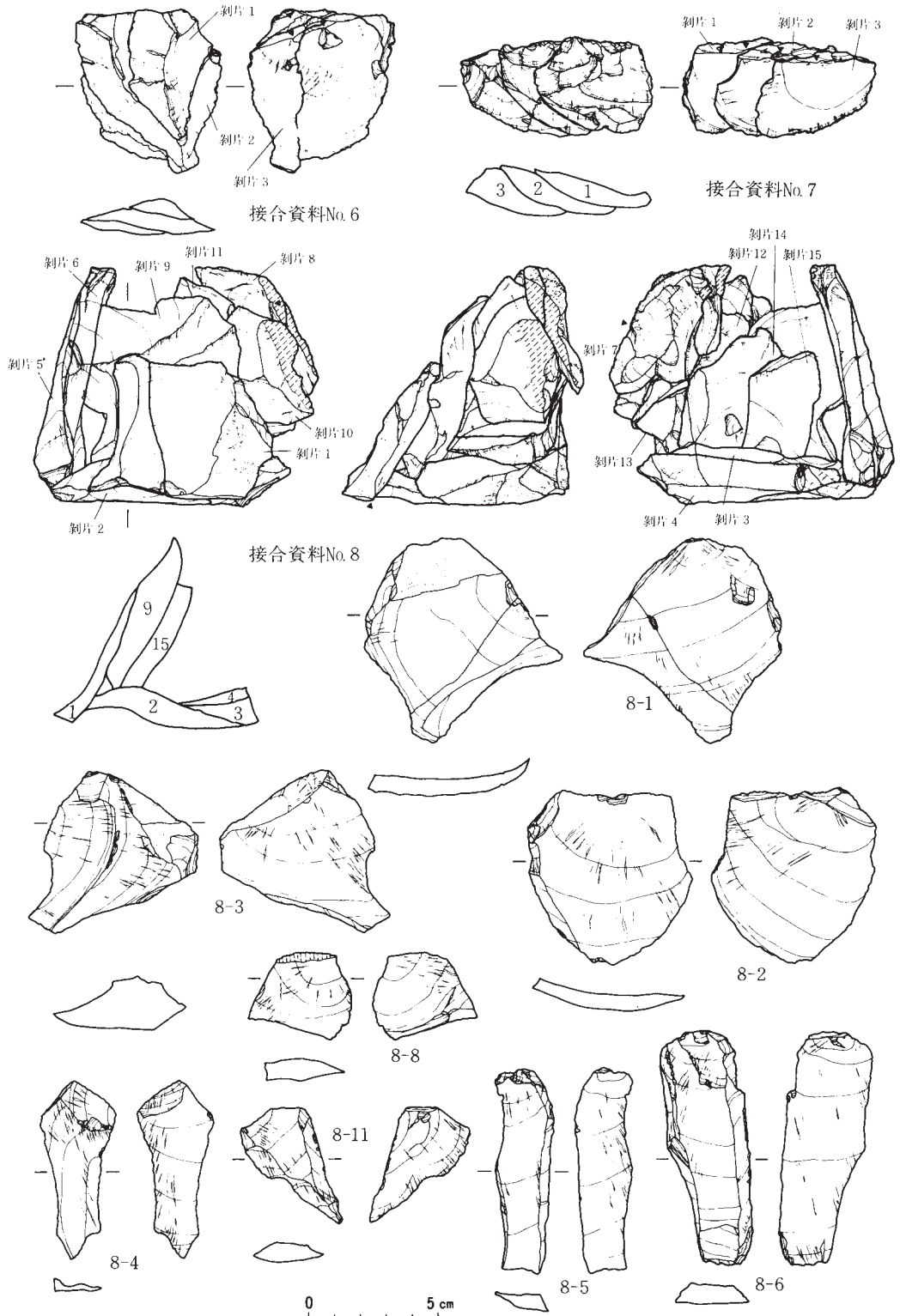
第113图 剥片接合資料実測图



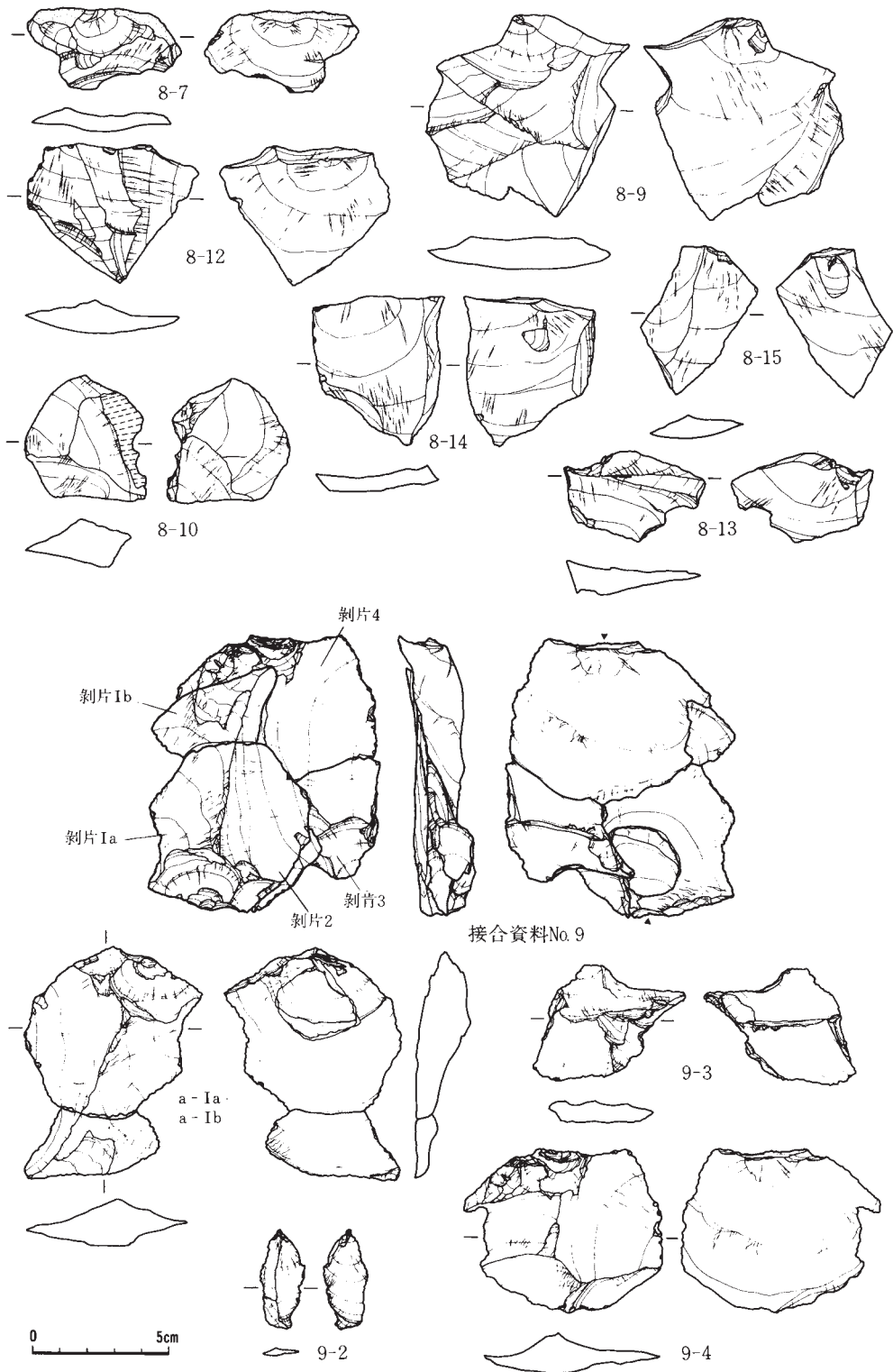
第114図 剥片接合資料実測図



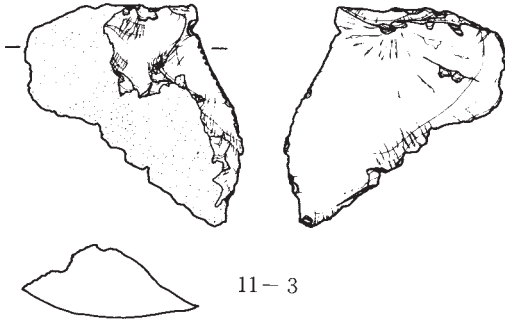
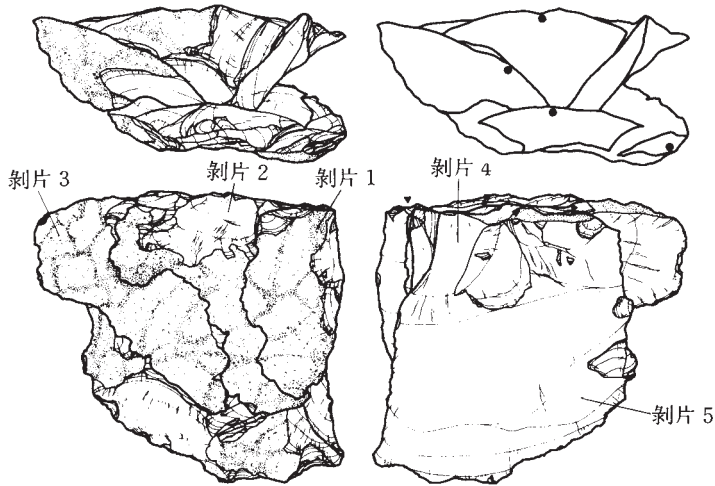
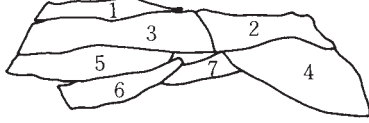
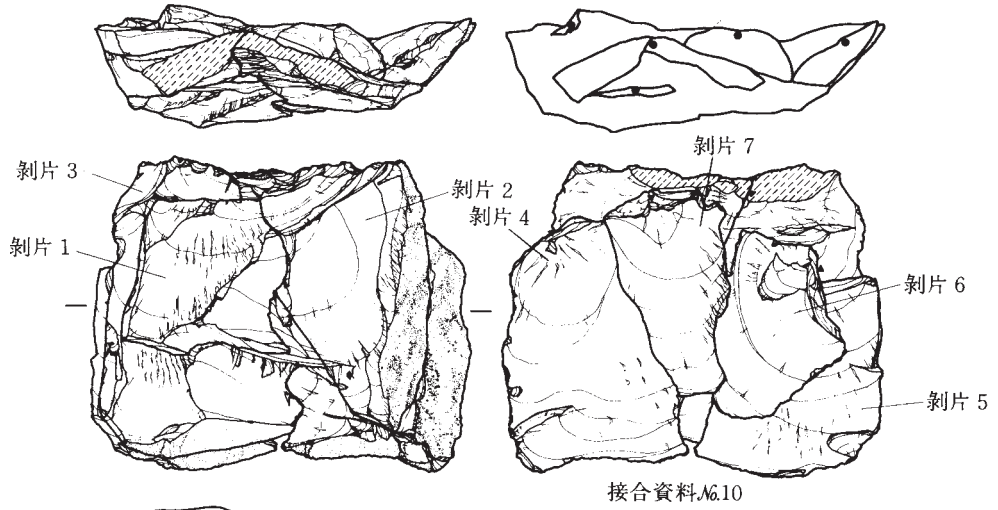
第115図 剥片接合資料実測図



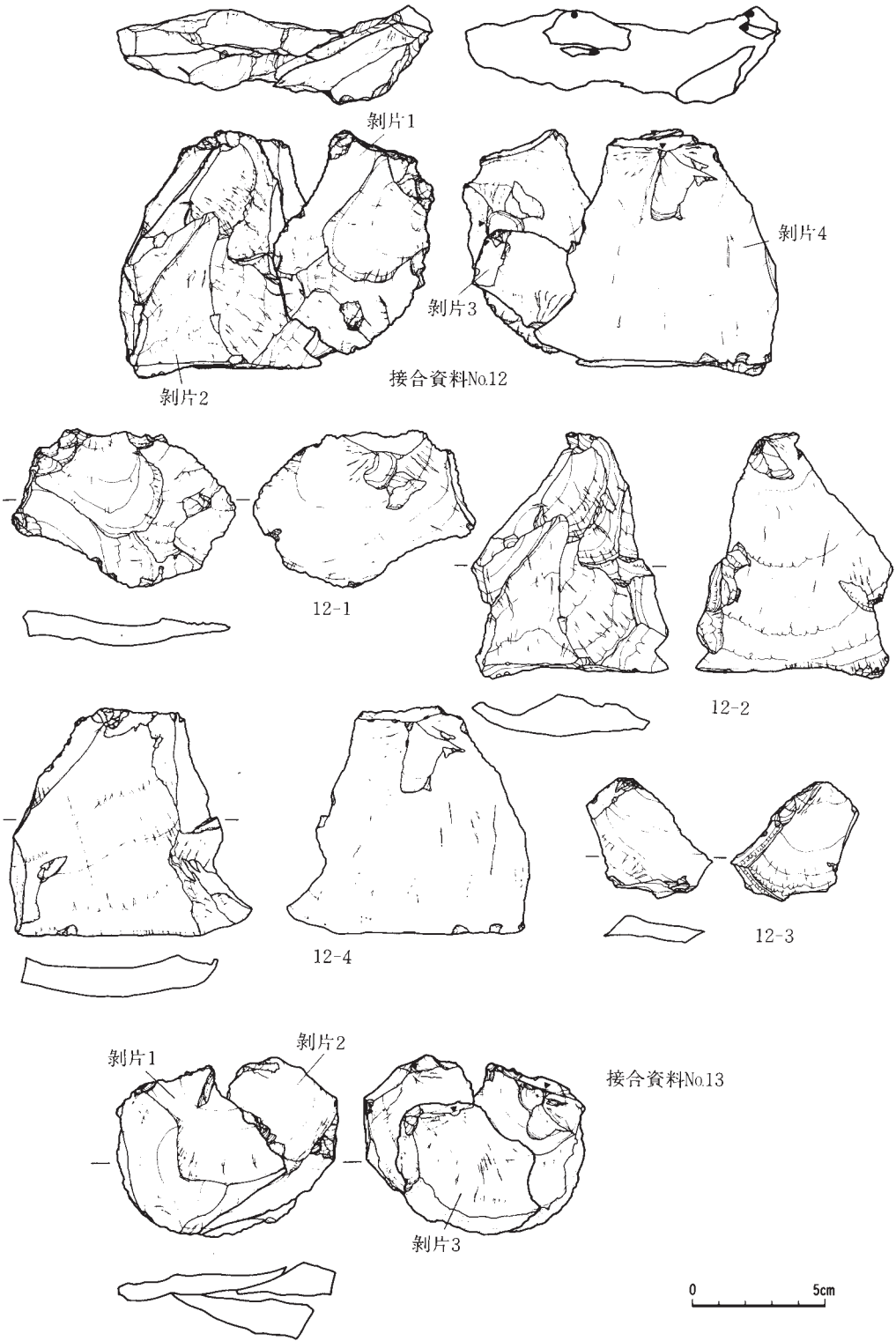
第116图 剥片接合資料実測图



第117図 剥片接合資料実測図



第118图 剥片接合資料実測图



第119圖 剝片接合資料實測圖

磨製石斧

9点出土した。完形品は2点で、他はすべて欠損品である。

1は、ほぼ全面を細かい叩き潰しで成形し、刃部は研磨により作出している。裏面に若干の自然面を残している。表面基部の剥離痕は、敲打痕の状態から、若干凹んでいる部分が成形時の敲打でより大きく剥離したものと思われる、使用及び器体成形における意図的な剥離によるものではないと思われる。表面右側縁の中央に凹みが作られているが、これは器体成形と同様の叩き潰しによるもので、縄かけ等の器体固定の用途を有するものと思われる。

2は、擦切磨製石斧の刃部欠損品で、両側縁に擦り切り痕が残存する。器体中央から頭頂部に向かって表面に2条、裏面に1条の溝が作られ、器端寄りに貫通孔がある。また、表面に、穿孔を途中で中止したとみられる凹みが観察される。溝は器端に向かって傾斜し、端部の器厚をより薄くしている。これは穿孔を容易にするためと思われる。孔の用途としては、器体を固定する用途等が考えられるが、推測の域を出ない。

3は、肉厚で刃部角は約65°である。片刃で、表面に研磨・剥離の痕跡を有し、裏面は自然面である。研磨痕は基部寄りには少なく、刃部寄りに顕著である。剥離は研磨後に行われている。この石斧の工程は、表材から目的とする刃部角に折り取り、折り取った面及び鑄部分まで研磨して刃部を作り出す。この後に剥離による器体成形を行い、更に剥離によって鋭利になった側縁を敲打（叩き潰し）によって調整したと推察される。基部寄りに器幅が狭くなっている部分は器体固定の用途を有すると思われるが、破損品の再加工の可能性も考えられる。

4は、器体成形を剥離・敲打によって行い、刃部を研磨している。刃部の約3分の2を欠失している。

5・6・7・8は、刃部片である。5は刃部の表面中央と裏面全体に使用による剥離がみられる。6は表面中央左側が若干破損している。8は片刃で、5・6はともに偏刃である。7は非常に薄く、縦に割れている。 (白鳥)

打製石斧

9点出土した。完形品4点、欠損品5点である。

11は、銚状の平面形を呈する。器体中央から基部が棒状に加工され、刃部も先端の幅が狭い。両刃で、刃部は、長軸断面の中軸線でほぼ対称形を成す。裏面はほぼ平坦である。握斧及び柄に装着しての使用の両者が考えられる。

12は、自然面が多く残存し、刃部及び右側縁の刃部寄りを剥離によって成形している。刃部は大きく破損している。

13・14は、類似した形状で、共に裏面が自然面である。13は裏面の両側縁に剥離痕を有するが、14は片側の側縁のみである。14がより肉厚である。

19は、薄手の両刃で、著しい偏刃である。磨製石斧の可能性も考えられるが、磨滅により判然としない。 (白鳥)

環状石斧

1点出土した。二つに割れ、1片はE C - 28グリッド 層から、1片はE G - 30グリッド 層下部から出土した。中央に貫通孔があり、全面研磨されている。 (白鳥)

石錘

昭和57年度35点、昭和59年度3点が出土した。38点中破損品は8点である。

決りの位置から4類に細分した。1類・決りが長軸線上にあるもの、この類で2類に近いものを 2類とした。2類・長軸・短軸に差がないもの。3類・決りが短軸線上にあるもの。4類・決りが3箇所以上のもの。

ほとんどが1類に含まれる。 2類は10・29の2点、2類は3・11・16・33の4点、3類は13・16・24・35の4点である。4類は昭和57・59年度の調査では出土しなかった。

決りは、18・19がややずれているほかは、ほとんど中軸線上に位置する。

平面形状は長楕円形ないし小判形で、左右対称のものが大半を占める。ほかには三角形状及び丸みのある三角形状のもの、円形ないし方形のもの、側縁の一方がほぼ直線で他方が弧状を呈するものがある。不整形のものも数点ある。14は両側縁を打ち欠いて長方形状に成形したものである。

厚さは均一のものが多いが、やや大形のものに断面形状が三角形を呈するものがある。16・35は裏面が凹んでいる。

長さは、4.8cm～11.1cmで、5.6cm～7.6cmに集中する。平均は6.9cmである。

幅は、4.0cm～8.5cmで、4.6cm～6.7cmに集中する。平均は6.0cmである。

厚さは、1.1cm～3.5cmで、1.6cm～2.4cmに集中する。平均は2.1cmである。

重量は、45g～426gで、82g～130gに集中する。平均は124.7gである。

長幅比では1：1～1：2.5に大部分が含まれる傾向を示す。

長厚比では1：2.5～1：4に大部分が含まれ、1：3～1：4にその大半が含まれる傾向を示す。

素材の石質は、砂岩20点(52.6%)、安山岩13点(34.2%)、チャート2点(5.4%)、礫石・泥岩・凝灰岩各1点(各2.6%)である。(破損品も含む)

焼き弾けたものが1点ある。(23)

昭和57年度出土のものは全体に小形で軽量である。3～16はE G - 29グリッドからの出土で、4～16は尖底土器(第37図 - 1)と共伴して出土した。他の石錘もこのグリッドを中心としたブロックからの出土である。

昭和59年度出土の石錘は、昭和57年度出土のものに比して大形で重い。 (白鳥)

磨敲凹石類

磨敲凹石類は従来の磨石・擦石・敲石・凹石等を一括したものである。

Ⓐ類 円盤状の形態で、平坦面に成形・使用痕がみられるもの

Ⓐ類ケ 成形・使用痕が「研磨」のもの(1~3)

タ 成形・使用痕が「敲き」のもの(31)

Ⓑ類 円盤状の形態で側縁に成形・使用痕がみられるもの

Ⓑ類ス・タ 成形・使用痕が「擦り」ないし「敲き」のもの(16・32)

Ⓐ類 棒状の形態で、平坦面に成形・使用痕がみられるもの

Ⓐ類ス 成形・使用痕が「擦り」のもの(42)

Ⓒ類ボ 成形・使用痕が凹みのもの(41)

41は端部に「剥離」がみられる。

Ⓑ類 長い側縁をもつ形態で、その側縁に成形・使用痕をもつもの

Ⓑ類ス 成形・使用痕が「擦り」のもの(4~14・17~30・33・34)

「擦り」の程度は34が「1」のほかは全て「2」である。5・21・23・33は平坦面に部分的な「敲き」を伴っている。

Ⓐ類 ~ 類以外の形態で、平坦面に成形・使用痕がみられるもの

Ⓐ類タ 成形・使用痕が「敲き」のもの(40)

Ⓑ類 ~ 類以外の形態で、側縁に成形・使用痕がみられるもの

Ⓑ類ス・タ 成形・使用痕が「擦り」ないし「敲き」のもの(37・39)

Ⓒ類 ~ 類以外の形態で、端部に成形・使用痕がみられるもの

Ⓒ類ス・タ 成形・使用痕が「擦り」ないし「敲き」のもの(35・36・38) (坂本)

石皿

7点出土した。すべて欠損品である。

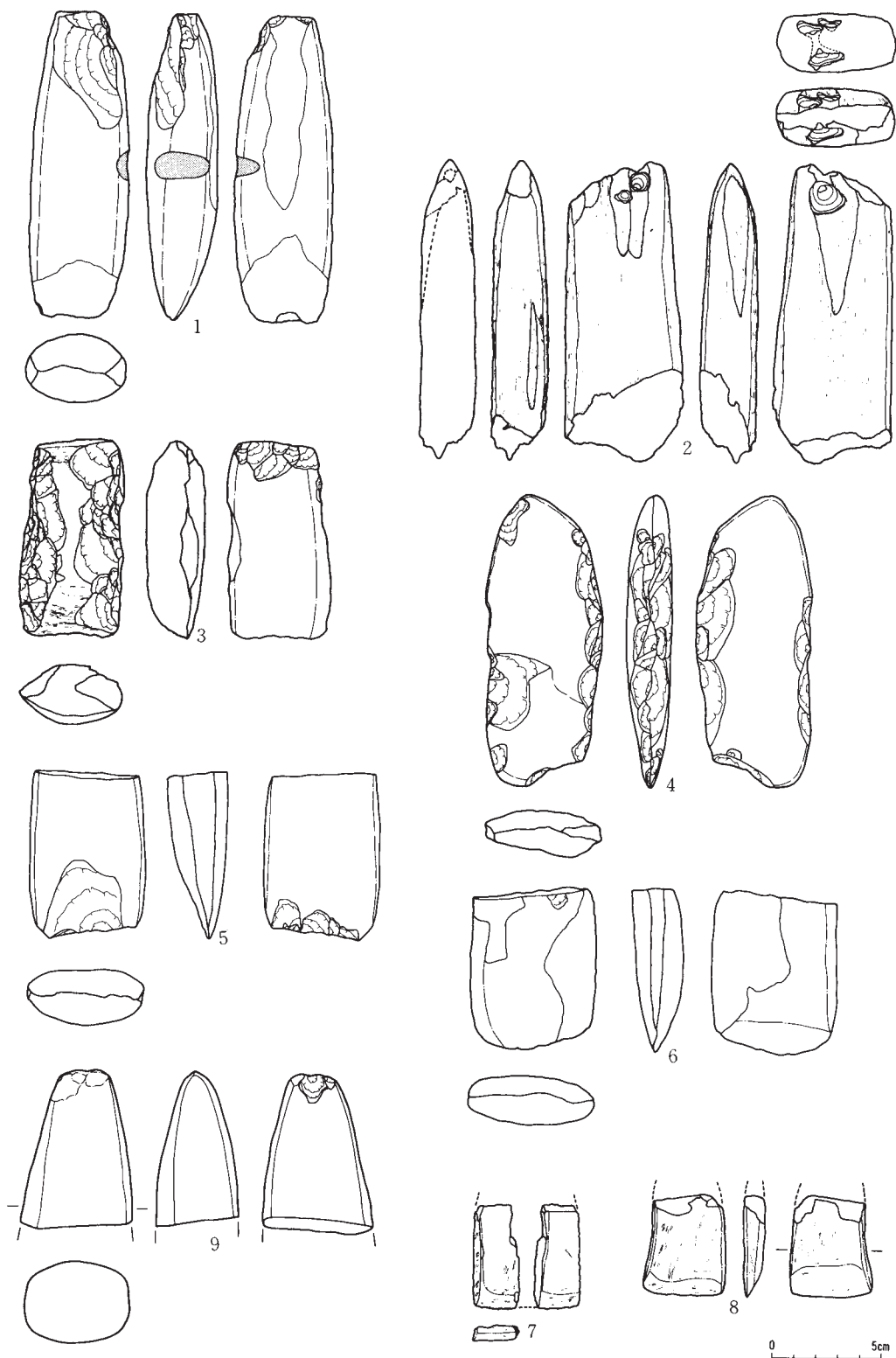
1は、千枚岩の薄い礫を素材としたもので長楕円形の機能面を有する。1側縁に成形の痕跡を残すほかには特別な成形痕は認められない。中央で大きく2つに割れて出土した。

他はすべて小破片で、全体像を把握できる資料はない。

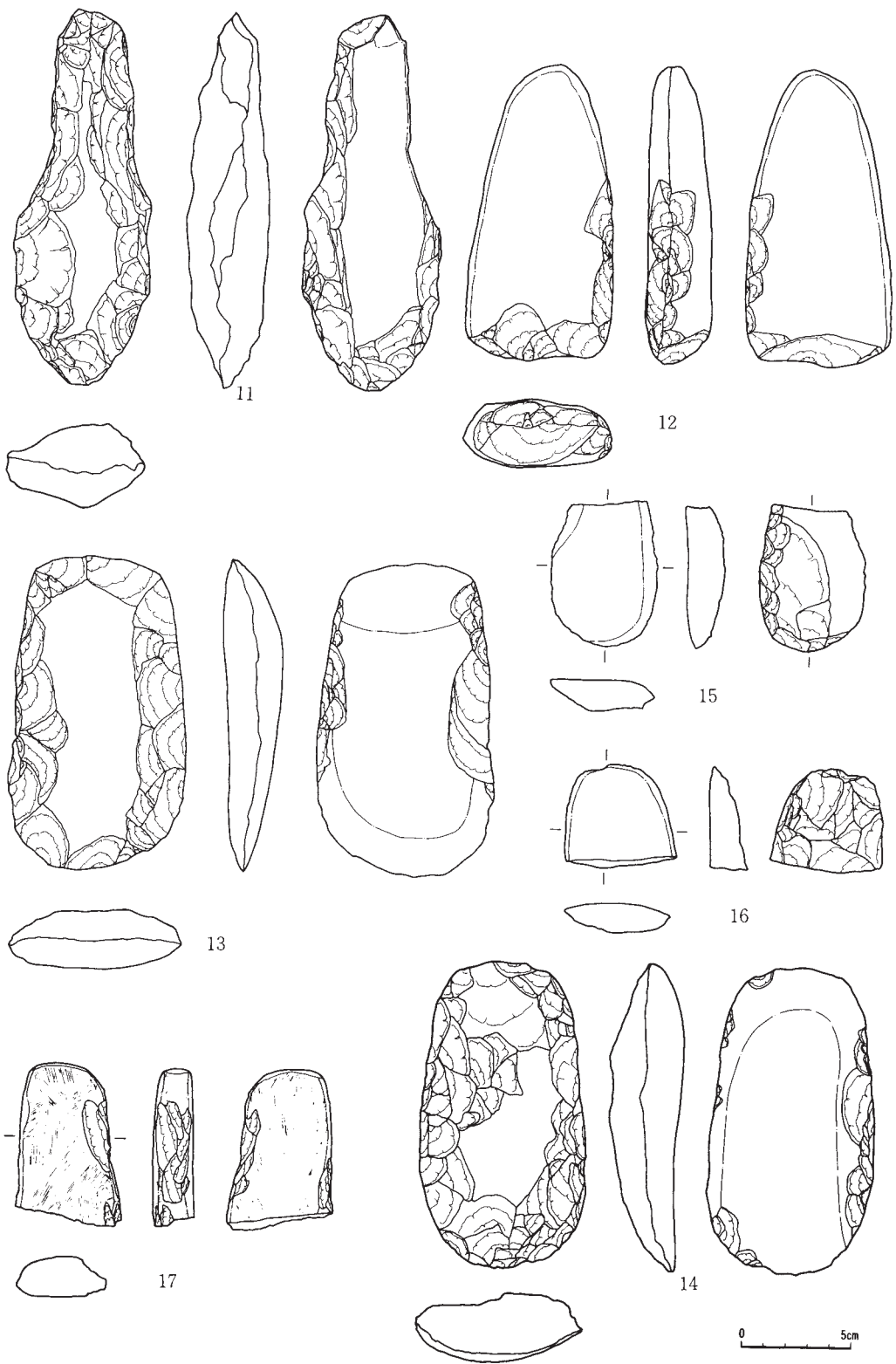
台石

15点出土した。すべて欠損品である。

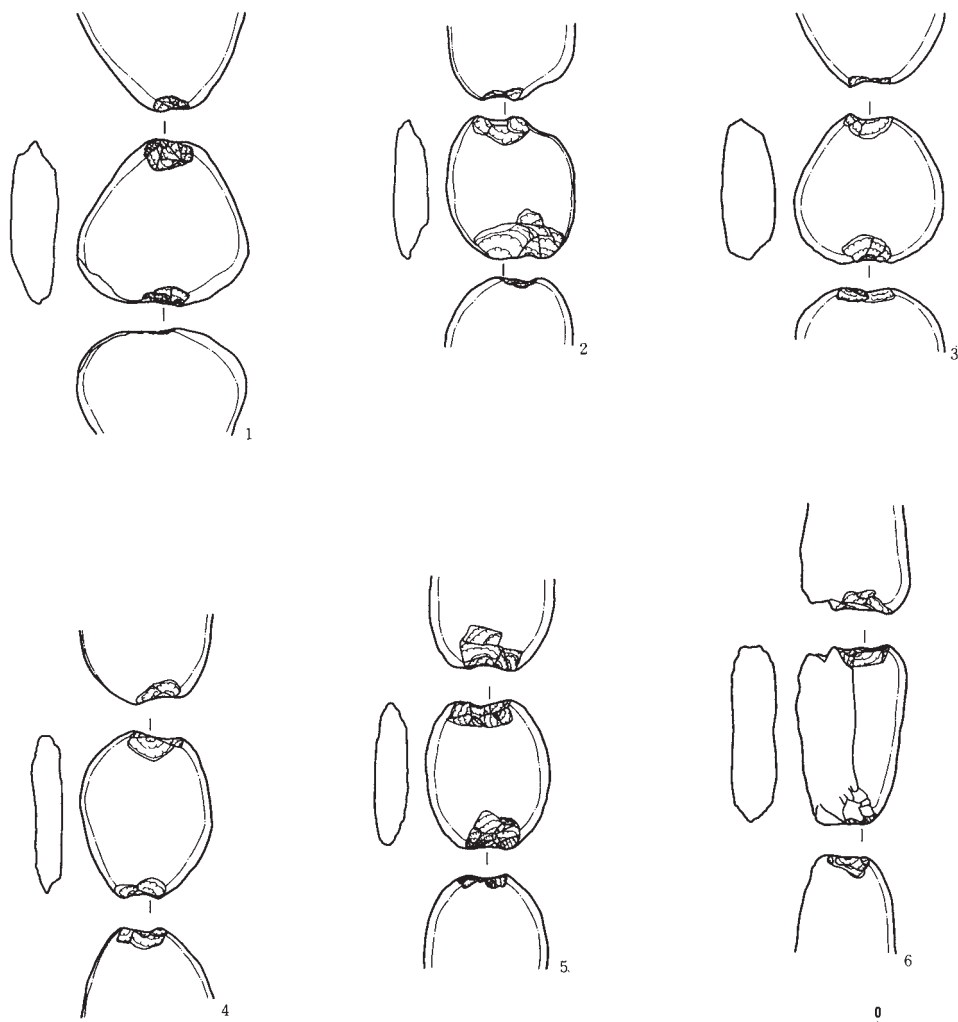
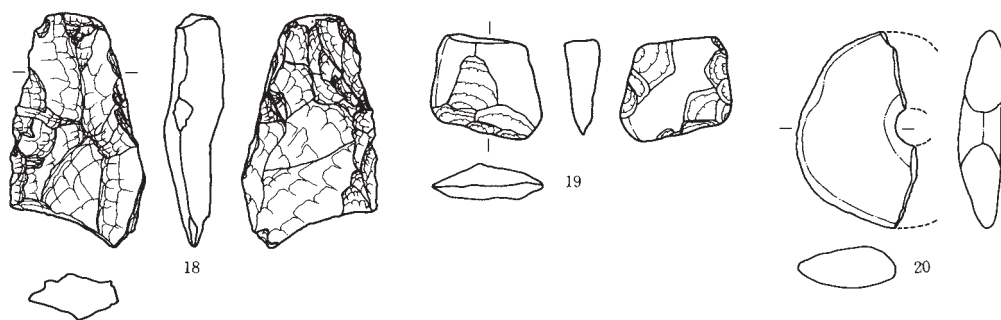
1と2を除いてすべて板状の破片で接合したものは少ない。表面に光沢を有するものも数点あるが、敲打・研磨等の顕著な痕跡は認められない。安山岩及び砂岩など堆積岩を素材としている。 (白鳥)



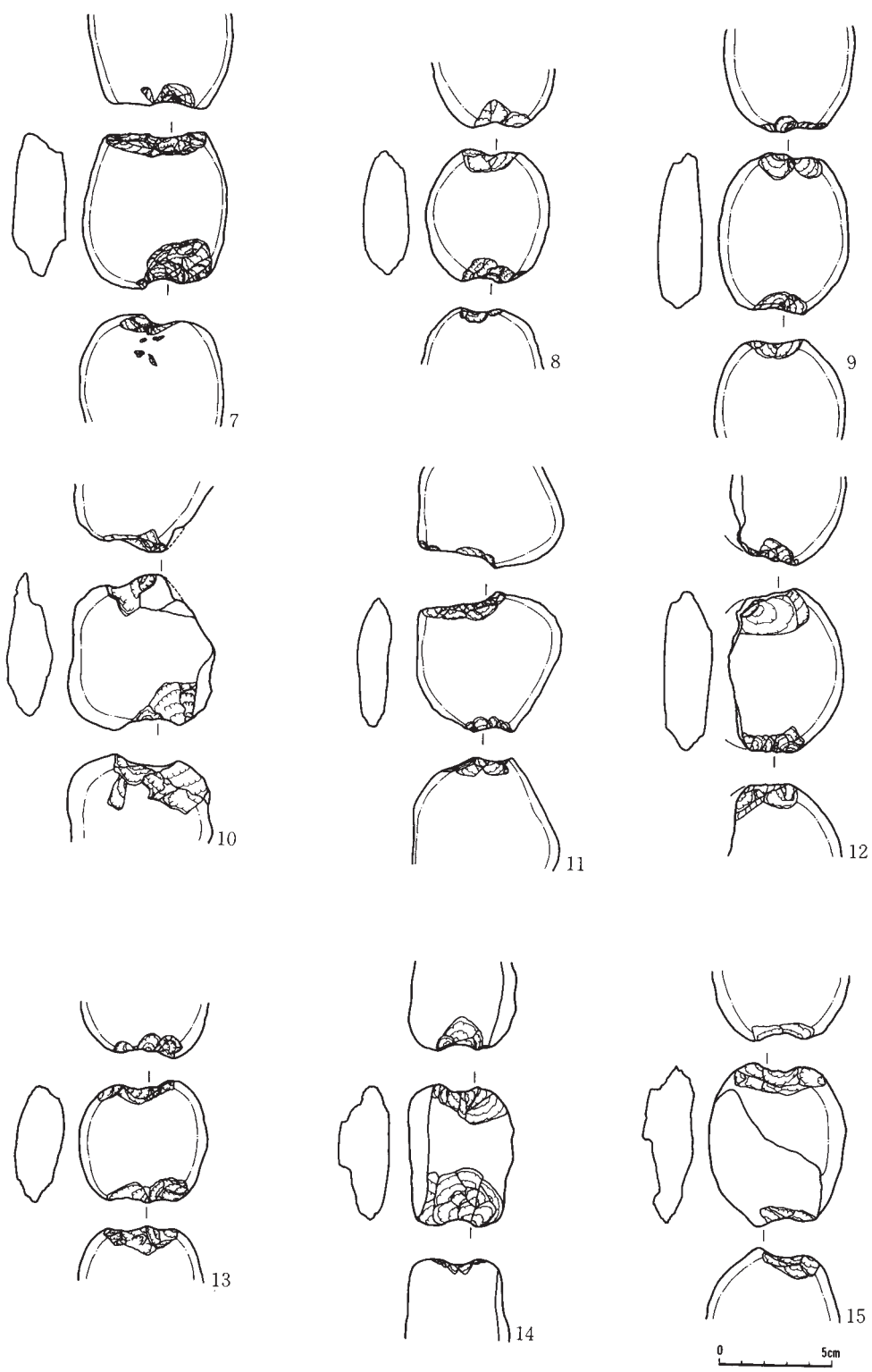
第120图 遺構外出土石器実測図



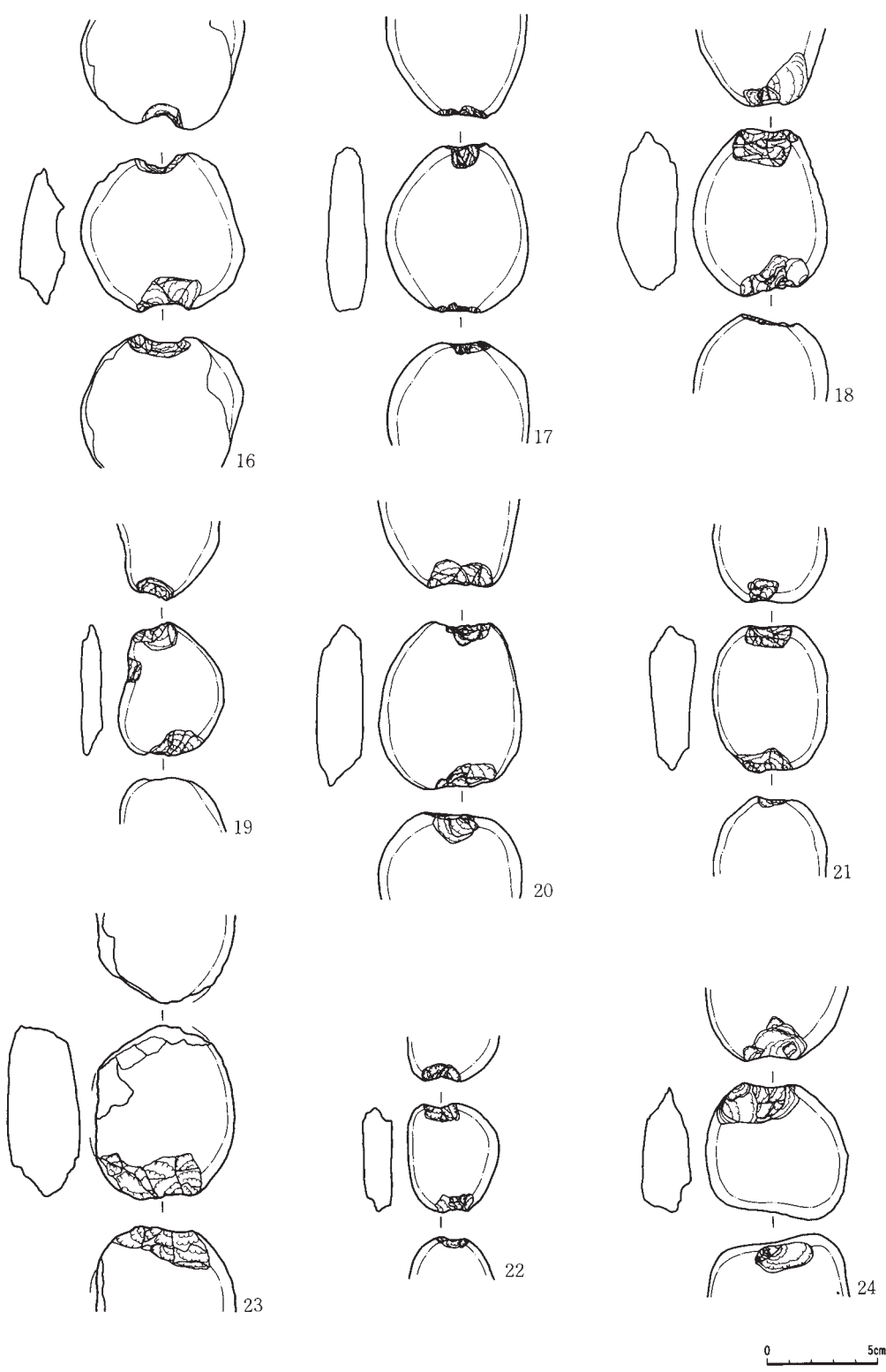
第121図 遺構外出土石器実測図



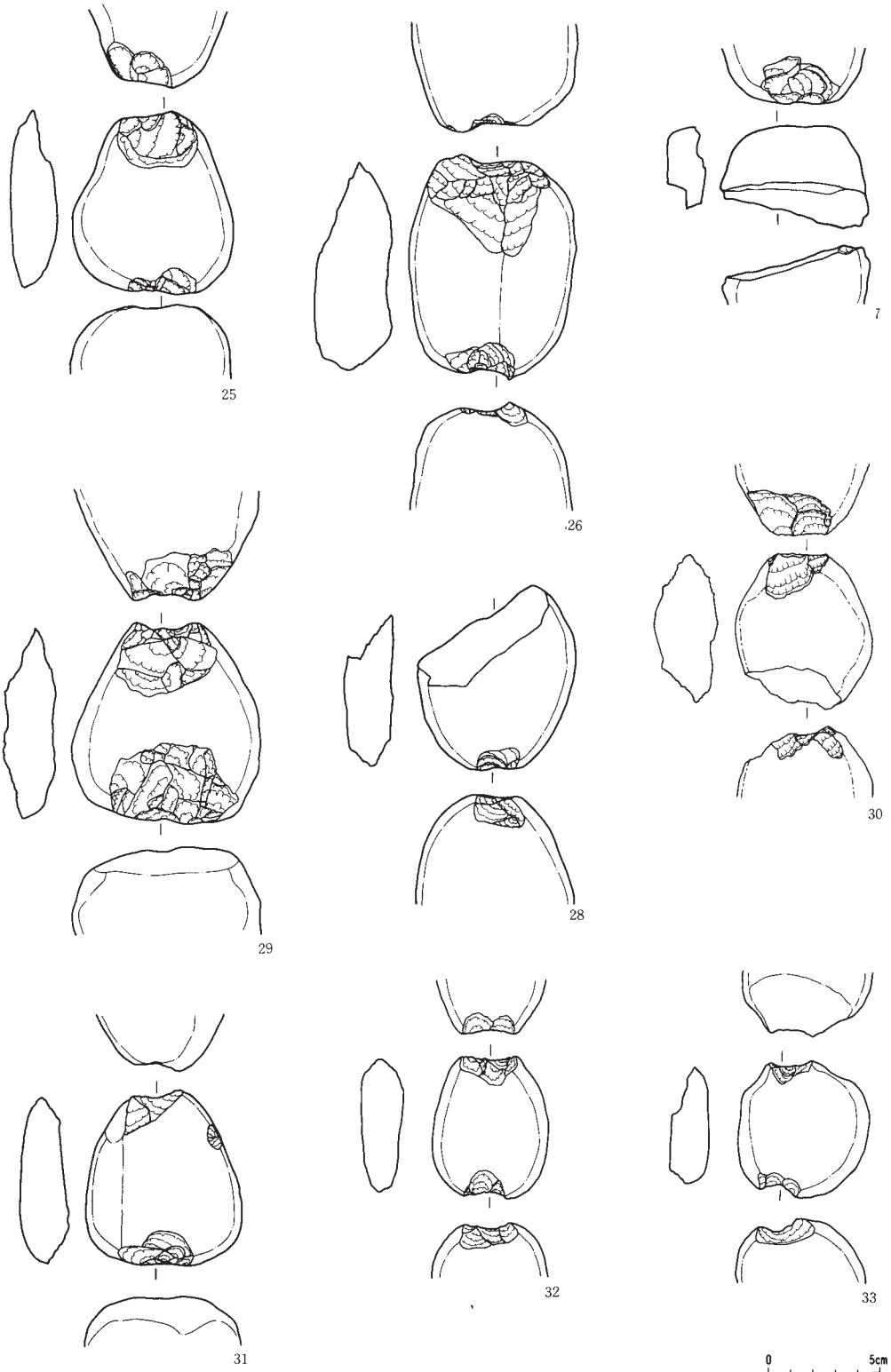
第122図 遺構外出土石器実測図



第123図 遺構外出土石器実測図



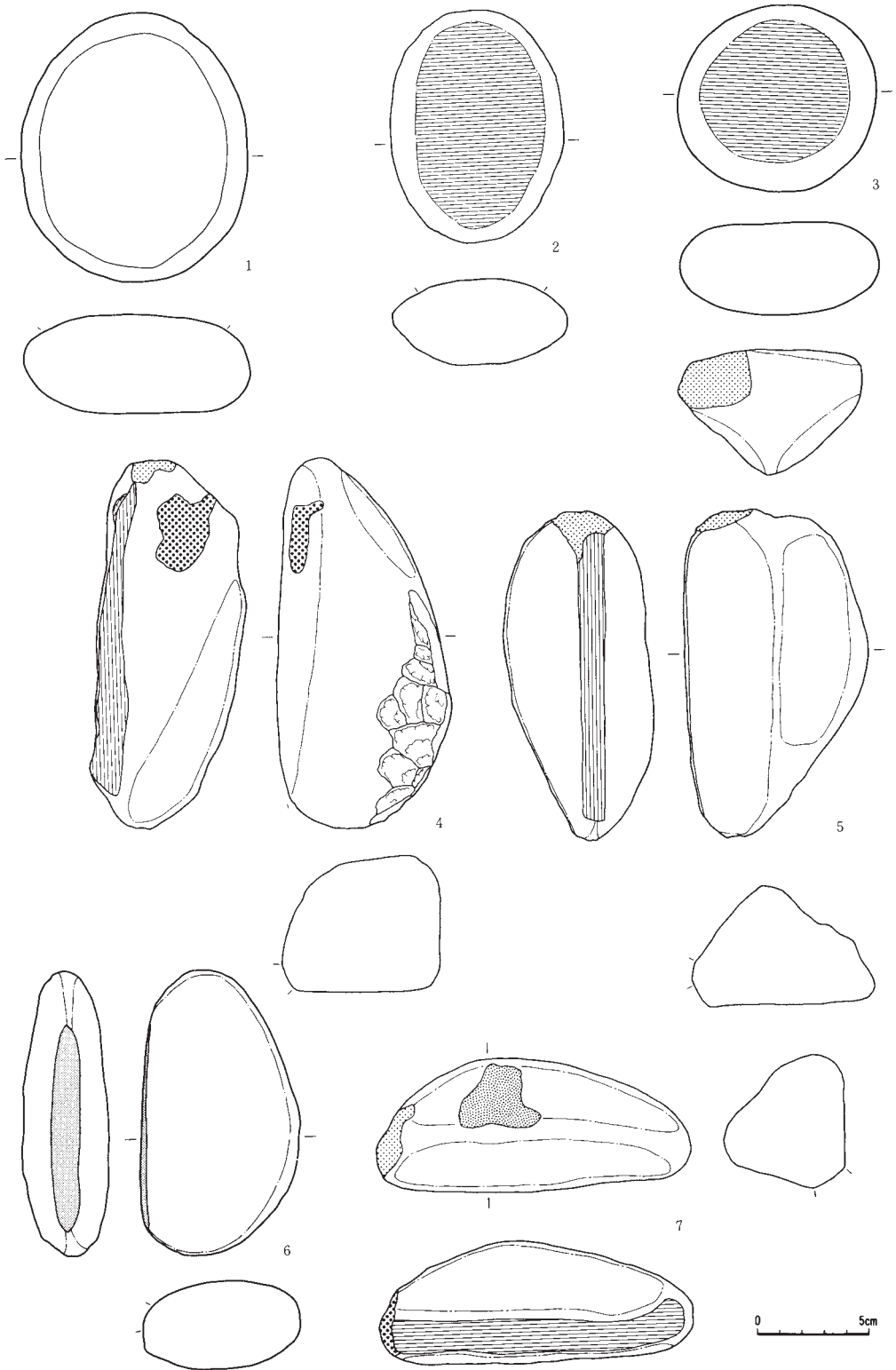
第124図 遺構外出土石器実測図



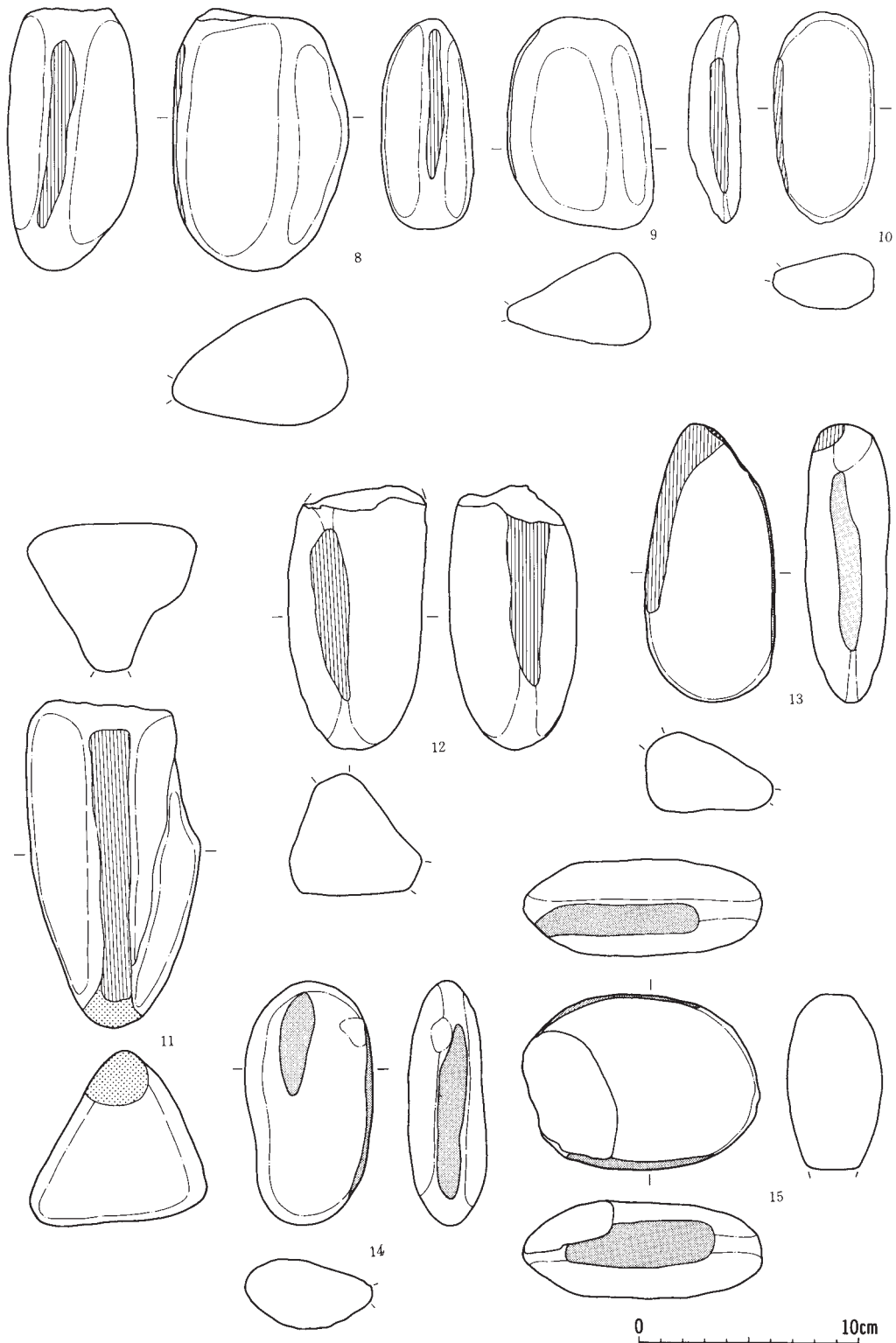
第125図 遺構外出土石器実測図



第126図 遺構外出土石器実測図



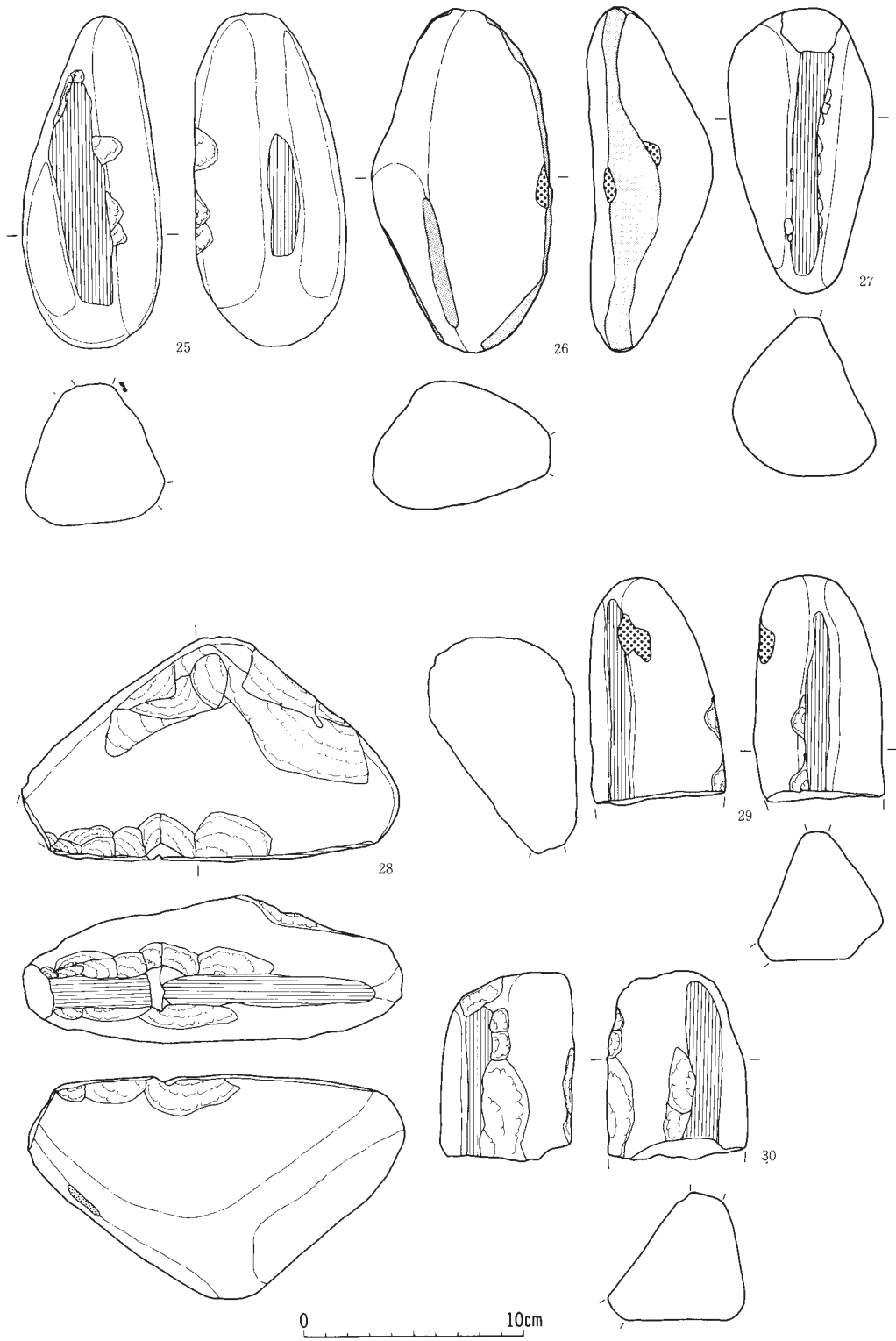
第127図 遺構外出土石器実測図



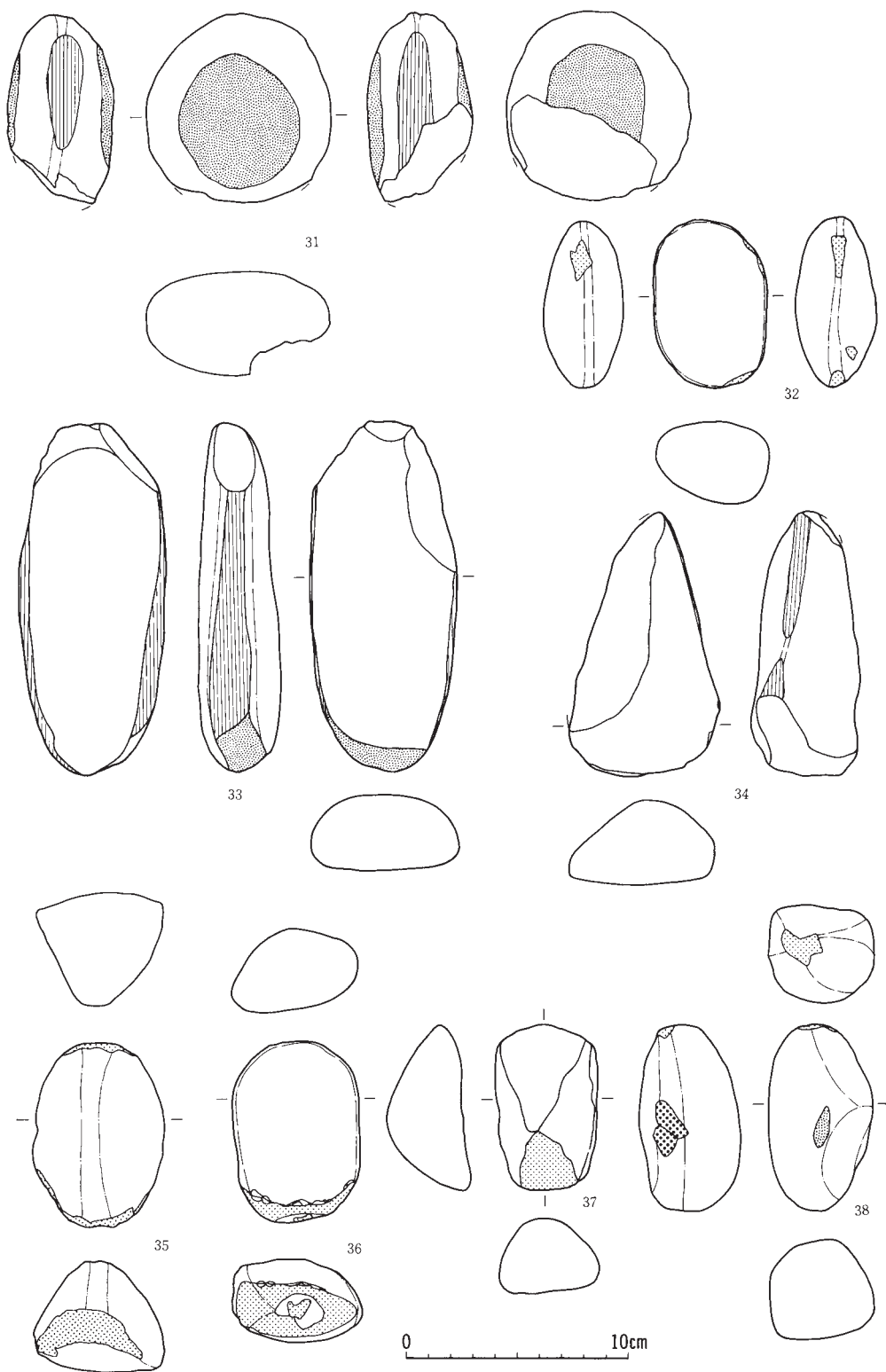
第128図 遺構外出土石器実測図



第129図 遺構外出土石器実測図



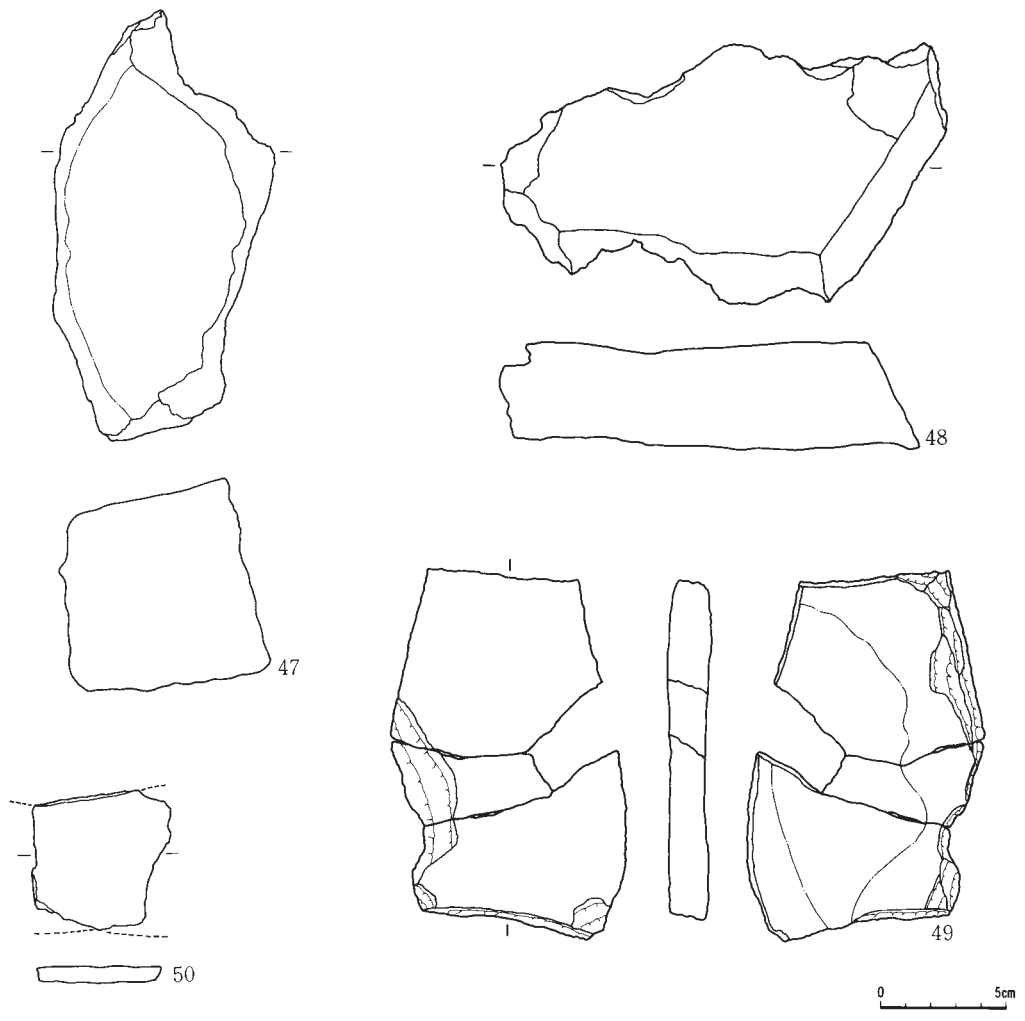
第130図 遺構外出土石器実測図



第131図 遺構外出土石器実測図



第132図 遺構外出土石器実測図



第133図 遺構外出土石器実測図

第6表 遺構外出土石器計測表(1)

図版番号	名 称	出土区	層位	計 測 値				石質	備 考
				長(mm)	副(mm)	厚(mm)	重(g)		
-1	石 鏃	EE-28	Ⅳ	2.8	1.4	0.6	0.9	頁岩	Ⅱ (2.0 長幅比)
-2	"	303H		(2.3)	1.4	0.6	(1.4)	"	(")
-3	"	401H	フク	(2.6)	1.4	0.4	1.1	"	(")
-4	"	306H		3.3	1.4	0.6	2.2	"	Ⅱ (2.4 ")
-5	"	EA-66	Ⅳ下	3.4	1.6	0.3	1.2	"	Ⅱ (2.2 ")
-6	"	ED-27	Ⅳ	2.9	1.6	0.5	1.8	"	I (1.8 ")
-7	"	EE-28	"	(3.7)	(1.7)	0.7	(3.1)	"	"
-8	"	EE-28	"	2.9	1.5	0.7	1.7	"	I (1.9 ")
-9	"	334TP	フク	2.6	1.4	0.5	3.9	"	"
-10	"	ED-29	V	(3.5)	(3.2)	0.9	(3.5)	"	"
-11	"	EG-27	Ⅳ	3.2	1.4	0.3	1.3	"	Ⅱ (2.3 ")
-12	"	EE-29	"	4.2	1.5	0.7	3.4	"	Ⅱ (2.9 ")
-13	"	EE-28	"	2.9	0.9	0.4	0.7	"	Ⅲ (3.2 ")
-14	"	DT-28	"	2.6	0.9	0.4	0.7	"	Ⅱ (2.9 ")
-15	"	EF-27	"	3.2	0.9	0.5	1.2	"	Ⅲ (3.6 ")
-16	"	EG-27	"	3.5	1.2	0.4	1.2	"	Ⅱ (2.9 ")
-17	"	ED-29	"	(2.0)	0.8	0.2	(0.3)	黒曜石	"
-18	"	EG-29	V	1.8	0.8	0.3	0.4	"	Ⅱ (2.2 ")
-19	"	EF-29	Ⅳ	3.6	0.8	0.4	0.7	頁岩	Ⅳ (4.4 ")
-20	"	ED-28	"	3.4	1.0	0.4	0.9	"	Ⅲ (3.4 ")
21	"	DR-27	"	4.5	1.3	0.3	1.4	"	Ⅲ (3.5 ")
22	"	EK-45	Ⅱ	(4.4)	1.3	0.6	(3.0)	"	"
23	"	DS-31	Ⅳ下	4.2	1.8	0.6	4.4	"	Ⅱ (2.3 ")
24	"	60Ⅲ		3.4	1.6	0.6	2.2	"	Ⅱ (2.1 ")
25	"	ED-28	Ⅳ	(2.2)	1.4	0.4	(1.1)	"	"
26	"	DM-52	Ⅳ	2.3	1.8	0.4	1.2	"	"
27	"	EE-31	Ⅳ上	3.2	1.4	0.4	0.9	"	Ⅱ (2.3 ")
28	"	ED-31	"	2.6	1.5	0.4	1.0	"	I (1.7 ")
29	"	EF-28	Ⅳ	2.4	1.5	0.4	0.9	"	I (1.6 ")
30	"	DR-26	Ⅳ下	2.8	1.0	0.4	0.9	"	Ⅱ (2.9 ")
31	"	EE-29	"	2.7	1.0	0.3	0.5	"	Ⅱ (2.8 ")
32	"	DT-47	Ⅱ	2.5	1.0	0.2	0.5	"	Ⅱ (2.5 ")
33	"	DR-54	Ⅲ	(2.8)	1.1	0.3	(1.0)	"	"

図版番号	名 称	出土区	層位	計 測 値				石質	備 考
				長(mm)	副(mm)	厚(mm)	重(g)		
34	石 鏃	EH-27	Ⅳ	3.2	2.6	0.6	4.0	頁岩	I (1.2 長幅比)
35	"	EE-27	Ⅳ	2.7	2.1	0.8	3.0	"	I (1.3 ")
36	"	EG-27	Ⅳ	2.2	1.9	0.8	2.4	"	I (1.2 ")
37	"	EG-27	"	2.5	1.7	1.6	2.3	"	I (1.5 ")
38	"	EH-29	V	2.9	1.6	0.5	1.7	"	I (1.8 ")
39	"	DL-74	Ⅳ	2.0	1.3	0.4	0.6	"	I (1.5 ")
40	"	EC-29	Ⅳ	(2.4)	1.9	0.4	(1.2)	"	"
41	"	EE-28	"	3.0	(1.5)	0.3	(0.7)	"	"
42	"	EG-27	"	3.3	(1.7)	0.3	(1.1)	"	"
43	"	EH-27	"	(4.0)	(2.2)	(0.4)	(3.5)	"	"
44	"	ED-27	"	(3.4)	1.1	0.4	(1.1)	"	"
45	"	DR-27	"	(3.9)	1.2	0.3	(1.4)	"	"
46	"	320H		3.7	1.2	0.8	2.3	"	Ⅲ (3.1 ")
47	石 槍	DQ-26	Ⅳ	11.2	2.1	0.8	13.8	"	V (5.3 ")
48	"	DS-26	V	(8.0)	(3.8)	2.4	(65.3)	"	"
49	"	ED-28	"	(6.4)	3.1	1.4	(28.2)	"	基部欠損
50	"	EE-28	"	5.1	2.2	1.0	9.1	"	Ⅱ (2.3 ")
51	"	EE-29	Ⅳ	5.4	2.0	1.0	9.6	"	Ⅱ (2.7 ")
52	"	DR-27	"	(5.4)	1.6	0.7	(6.3)	"	"
53	"	EC-29	"	6.8	2.6	0.9	13.5	"	Ⅱ (2.6 ")
54	"	EE-27	"	7.1	2.7	0.8	14.3	"	Ⅱ (2.6 ")
55	"	ED-28	V	(6.9)	(2.5)	1.0	(14.6)	"	"
56	石 匙	ED-28	Ⅳ	5.7	1.5	0.9	4.9	"	"
57	"	ED-31	"	5.9	1.4	0.6	5.0	"	"
58	"	DQ-27	"	7.5	1.6	0.5	8.3	"	"
59	"	EE-29	"	(6.7)	1.8	0.5	(5.7)	"	先端部欠損
60	"	EF-27	"	10.1	1.8	0.8	14.2	"	"
61	"	EH-28	"	7.4	1.4	0.6	6.9	"	"
62	"	EG-27	"	6.8	1.7	0.7	6.2	"	"
63	"	EG-28	"	(6.9)	1.7	0.7	(9.2)	"	"
64	"	EG-29	"	(4.9)	1.4	0.5	(4.4)	"	"
65	"	DT-26	"	4.1	1.2	0.5	2.2	"	"
66	"	EE-29	"	5.2	1.5	0.5	4.2	"	"
67	"	EG-27	"	(5.4)	1.5	0.6	(5.6)	"	先端部欠損
68	"	EE-29	"	(5.5)	1.4	0.5	(3.7)	"	"

第7表 遺構外出土石器計測表(2)

図版番号	名 称	出土区	層位	計 測 値				石質	備 考
				長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)		
69	石 匙	EE-29	IV	4.4	1.4	0.4	2.5	頁岩	
70	"	EF-30	IV	6.9	1.9	0.6	7.0	"	
71	"	305H		5.8	1.9	0.8	9.3	"	
72	"	EC-27	IV	7.9	2.4	0.7	11.7	"	
73	"	ED-33	"	(5.0)	1.7	0.5	(3.5)	"	先端部欠損
74	"	EH-27	"	(6.2)	1.8	0.5	(4.2)	"	"
75	"	EG-28	"	5.8	1.7	0.6	5.3	"	
76	"	EH-27	"	6.0	1.9	0.6	4.5	"	
77	"	55II		4.9	1.7	0.5	4.3	"	
78	"	DR-27	V	6.1	2.3	0.6	7.2	"	
79	"	55II		(4.3)	(2.4)	(0.4)	(4.3)	"	
80	"	EE-29	IV	(4.1)	(2.5)	0.6	(5.5)	"	
81	"	表採		(4.9)	(2.3)	0.6	(7.0)	"	
82	"	EF-30	IV	(6.1)	(3.6)	1.0	(19.6)	"	
83	"	60III		5.1	1.95	0.5	3.4	"	
84	"	ED-29	IV	5.7	1.8	0.5	5.5	"	
85	"	EG-28	"	(3.9)	1.5	0.5	(2.8)	"	
86	"	EE-29	"	(3.5)	(2.2)	(0.6)	(2.7)	"	
87	"	ED-27	"	2.6	4.5	0.6	4.2	"	横型
88	"	DR-52	III	4.3	2.8	0.6	6.9	"	
89	"	ED-29	IV	4.0	4.7	0.7	8.6	"	横型
90	"	EA-81	"	3.1	5.5	0.7	13.0	"	"
91	"	EB-28	"	(6.2)	2.6	0.7	(12.2)	"	
115	"			8.3	3.9	0.9	27.9	"	
92	石 筥	ED-29	IV	4.4	2.8	1.4	17.4	"	75°(刃部角)
93	"	EC-27	"	6.0	3.6	2.1	37.7	"	65° "
94	"	EF-28	"	(5.8)	3.9	1.1	(27.8)	"	80° "
95	"	DS-26	"	5.6	3.9	1.7	34.5	"	50° "
96	"	EG-27	"	6.2	4.6	1.5	41.1	"	65° "
97	"	DR-57	"	7.7	3.9	2.5	58.0	"	75° "
98	"	DT-33	III	4.4	3.7	1.2	35.5	"	55° "
99	"	EG-30	V	6.1	4.4	1.9	58.0	"	65° "
100	"	DS-59	IV	(5.3)	3.8	1.2	(29.4)	"	65° "
101	"	EF-28	"	5.8	1.8	0.7	6.7	"	55° "

図版番号	名 称	出土区	層位	計 測 値				石質	備 考
				長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)		
102	石 筥	EA-28	IV	(4.5)	3.6	1.2	(21.1)	頁岩	60°(刃部角)
103	"	DT-23	"	7.3	4.0	1.4	20.7	"	65° "
104	"	DN-52	"	6.3	4.3	1.6	37.0	"	60° "
105	スクレーパー	EG-29	V	5.6	4.1	1.6	37.9	"	
106	"	EG-27	IV	4.3	3.0	0.8	12.7	"	
107	"	ED-29	"	5.0	3.2	0.9	13.3	"	
108	"	EG-28	"	3.5	3.0	1.4	12.7	"	
109	"	EE-29	"	6.4	3.4	0.8	11.6	"	
110	"	EG-28	"	(3.3)	(3.6)	(0.8)	(12.5)	"	
111	不定形削器	ED-34	"	5.6	4.6	1.6	36.7	"	
112	"	EE-30	"	5.1	4.6	1.8	36.8	"	
113	"	ED-29	"	4.1	3.8	1.0	17.7	"	
114	"	301H	フク	4.8	3.8	1.1	20.5	"	
116	"	DM-54	VI	7.0	4.8	1.6	44.5	"	
117	"	EA-23	IV上	6.3	3.3	2.1	36.1	"	
118	"	DT-27	IV	6.1	4.0	1.2	26.1	"	
119	"	309土坑		6.1	2.6	1.1	14.6	"	
120	"	301H		2.8	2.5	0.7	4.3	"	
121	"	EE-28	IV	4.5	2.2	0.8	6.8	"	
122	"	301H	床	3.7	2.5	0.9	7.5	"	
123	"	EA-21	IV	4.0	3.1	0.7	7.2	"	
124	"	EG-28	"	5.3	1.6	0.6	3.8	"	
125	"	EE-27	"	4.2	3.0	1.2	11.2	"	
126	"	DS-27	"	4.7	2.1	0.6	4.4	"	
126	"			5.9	3.3	1.2	27.1	"	
137	"			3.3	1.8	0.6	4.2	"	
127	扶 入	EG-27	IV	5.0	3.5	0.6	8.4	"	
128	"	EE-29	"	3.4	2.4	0.5	2.3	"	
129	"	307溝ピット	フク	4.1	2.6	0.9	12.9	"	
130	"	ED-28	"	4.8	1.8	0.4	2.6	"	
131	彫 器	EF-27	IV	5.1	4.2	2.0	32.3	"	
132	"	EH-27	"	3.4	3.1	1.2	15.1	"	
133	ドリル	EF-28	"	4.8	2.4	1.0	6.7	"	
134	"	EA-25	IV下	4.9	3.5	1.4	21.8	"	
135	コ ア	DR-26	"	4.6	3.1	2.1	29.7	"	

第8表 遺構外出土石器計測表(3)

石 斧

図版番号	出土区	層位	計 測 値				石 質	備 考
			長(cm)	副(cm)	厚(cm)	重(g)		
1	ED-41	II	13.9	4.5	4.0	31.4		磨製石斧
2	EE-29	V	(13.7)	(5.4)	(2.6)	(31.7)	緑色・頁岩	"
3	EG-28	IV	8.8	4.5	2.6	18.3	頁岩	"
4	60I一括		(13.3)	5.3	2.0	(22.6)	砂岩	"
5	DP-28	IV下	(7.3)	5.3	(2.6)	(16.4)	安山岩	刃部"
6	DR-58	IV	(7.0)	5.7	(2.2)	(16.4)	"	"
7	DQ-26	"	4.8	(2.2)	0.6	(11.1)	粘板岩	"
8	EF-29	"	(4.7)	3.7	1.1	(32.5)	緑色頁岩	"
9	ED-32	IV	(7.3)	(5.0)	(3.8)	(19.8)	凝灰岩	59年度"
10	DN-54	IV	(6.3)	(4.0)	(3.4)	(13.5)	"	"
11	ED-30	IV	17.1	6.2	3.7	40.2	頁岩	打製石斧
12	EP-29	IV	13.5	6.7	2.9	39.3	砂岩	"
13	50II		14.0	7.8	2.5	45.2	砂岩凝灰岩	"
14	30III		14.0	7.5	3.5	50.4	安山岩	"
15	DS-31	II	(6.5)	4.9	1.5	(7.3)	安山岩	"
16	DT-47	II	(4.6)	(5.6)	(1.6)	(41)	頁岩	"
17	EG-30	IV	(7.5)	(4.8)	(1.9)	(11.4)	緑色・頁岩	"
18	DS-25	IV	(9.4)	(5.4)	2.3	(10.3)	ホルンフェルス	"
19	DS-26	IV	(3.9)	4.5	(1.3)	(2.8)	"	"
20	EC-28		(7.9)	(4.7)	1.6	(7.3)	安山岩	環状石斧

石 錘

図版番号	出土区	層位	計 測 値				石 質	備 考
			長(cm)	副(cm)	厚(cm)	重(g)		
1	EG-28	IV	6.7	6.3	1.8	111	砂岩	
2	EG-28	"	6.0	5.1	1.4	60	"	
3	EG-29	IV下	6.1	5.9	2.2	108	"	
4	EG-29	"	6.6	5.2	1.7	83	"	
5	EG-29	"	5.9	4.8	1.3	61	"	

図版番号	出土区	層位	計 測 値				石 質	備 考
			長(cm)	副(cm)	厚(cm)	重(g)		
6	EG-29		6.9	(4.2)	2.1	(82)	砂岩	
7	"		(6.7)	6.2	2.5	(147)	"	
8	"		5.9	5.5	2.1	69	"	
9	"		7.0	5.8	2.0	122	安山岩	
10	"		6.8	6.6	2.2	111	"	
11	"		6.7	6.7	1.6	90	"	
12	"		7.3	(5.1)	2.1	(128)	"	
13	"		5.6	5.3	2.3	100	"	
14	"		6.2	4.6	2.3	94	"	
15	"		7.3	6.0	2.4	127	礫岩	
16	"		7.3	7.0	2.1	141	砂岩	
17	EE-27	IV	7.6	6.4	1.9	130	"	
18	EG-30	"	7.5	6.0	2.8	172	"	
19	"		6.0	4.6	1.1	45	"	
20	EH-28	IV	7.5	6.4	2.1	158	"	
21	EG-30	IV	6.5	5.0	2.1	101	"	
22	EG-28	IV	4.8	4.0	1.6	45	"	
23	EH-28	"	(7.6)	6.3	3.2	(228)	安山岩	
24	DS-23	IV上	7.0	6.3	2.3	129	"	
25	EG-27	IV	8.3	7.2	2.8	200	凝灰岩	
26	DS-22	IV上	9.6	7.5	3.5	327	泥岩	
27	EG-27	IV	(4.6)	(6.7)	1.8	(65)	砂岩	
28	EF-28	"	(8.4)	(6.9)	2.2	(152)	"	
29	EG-27	IV	8.8	8.5	2.4	271	チャート	
30	EF-29	"	7.1	6.0	2.9	150	"	
31	EF-29	"	7.8	6.9	2.1	163	砂岩	
32	EF-28	"	6.3	5.2	2.1	104	安山岩	
33	EF-29	"	6.0	5.9	1.6	72	"	
34	EF-27	"	8.4	7.7	3.2	275	"	
35	EE-27	"	7.3	6.0	1.8	92	砂岩	
36	DO-52	VI	10.0	7.9	2.2	244		
37	DM-55	"	11.1	8.4	3.1	426		
38	DN-53	"	(8.8)	(8.7)	(4.0)	(326)		

第9表 遺構外出土石器計測表(4)

石 錘

図版番号	出土区	層位	計測値				石質	備考
			長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)		
39	310H		7.4	5.3	1.8	87	砂岩	
40	317H		7.8	7.4	2.2	190	"	
41	310H		5.7	5.5	1.9	77	"	
42	312H		(6.9)	(5.6)	(2.3)	(91)	安山岩	
43	315H		7.5	6.8	2.5	206	凝灰岩	
44	330H		8.0	6.0	1.9	132	チャート	
45	310H		(7.7)	6.6	2.5	(168)	砂岩	
46	316H		5.2	4.1	1.0	33	安山岩	

図版番号	出土区	計測値				石質	分類	類	度	h	複合
		長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)						
-1	EG-29	12.0	10.3	4.5	911	安山岩					
-2	EG-29	10.5	7.6	4.0	512	"	I				aケ2
-3	DO-51	8.3	8.4	4.2	483	"					
-4	60I	16.7	8.5	6.4	1099	"	IIIb	ス	2	○	
-5	EC-28	14.6	8.1	5.4	845	砂岩	IIIb	ス	2		cタ・aタ1
-6	EE-34	12.8	7.1	3.9	492	"	IIIb	ス	2		
-7	EE-28	14.0	5.8	5.3	588	礫質砂岩	IIIb	ス	2		cタ
-8	EE-77	(11.6)	8.3	5.7	(794)	安山岩	IIIb	ス	2	○	
-9	60I	9.9	6.5	4.2	378	"	IIIb	ス	2		
-10	50II	9.5	4.5	2.4	152	"	IIIb	ス	2		
-11	S-表採	15.3	7.5	7.5	1023	凝灰	IIIb	ス	2		
-12	EF-29	(12.0)	6.8	5.7	(586)	石英カレンフェルス	IIIb	ス	2		
-13	50II	12.7	5.8	3.6	335	凝灰	IIIb	ス	2	○	
-14	EC-28	11.1	5.8	3.5	317	安山岩	IIIb	ス	2		
-15	20II	(10.7)	8.0	4.4	(520)	砂岩					
-16	EC-29	10.9	8.0	3.3	453	"	Ib	ス			
-17	50II	11.3	7.1	3.8	449	凝灰	IIIb	ス	2		

図版番号	出土区	計測値				石質	分類	類	度	h	複合
		長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)						
-18	EH-28 EG-27	15.1	7.7	6.3	1084	砂岩	IIIb	ス	2		
-19	35III	14.6	7.3	5.3	717	安山岩	IIIb	ス	2	○	
-20	60I	(16.2)	9.4	5.2	(824)	砂岩	IIIb	ス	2	○	cハ
-21	DS-26	(11.7)	5.2	4.7	(379)	"	IIIb	ス	2	○	aタ1
-22	EF-27	(7.7)	(7.4)	(5.7)	(425)	安山岩	IIIb	ス	2	○	
-23	35II	11.0	5.9	2.8	243	砂岩	IIIb	ス	2	○	aタ1
-24	60I	9.3	5.3	4.2	324	安山岩	IIIb	ス	2		
-25	EF-29	15.2	6.8	6.3	885	"	IIIb	ス	2	○	
-26	60II	15.7	8.0	5.1	773	"	IIIb	ス	2	○	
-27	DO-61	12.9	6.9	7.1	839	"					
-28	L-74	(17.1)	9.9	6.1		砂岩	IIIb	ス	2	○	
-29	EG-28	(10.2)	(6.0)	(5.9)	(459)	安山岩	IIIb	ス	2	○	
-30	EC-27	(8.1)	(7.1)	(5.9)	(477)	"	IIIb	ス	2	○	
-31	BEH-27	(8.5)	8.3	4.5	(442)	"	Ia				タ1
-32	DS-26	7.7	5.2	3.6	205	チャート	Ib	ス			cタ
-33	EC-28	(15.7)	6.6	3.6	(613)	凝灰岩	IIIb	ス	2		bス aタ1
-34	EG-27	11.6	6.8	4.4	342	砂岩	IIIb	ス	1		cタ
-35	EC-28	8.4	5.7	5.1	276	"	IVc			○	タ
-36	55II	8.0	5.7	3.7	280	"	IVc	ス			
-37	EC-28	7.4	4.8	3.4	166	"	IVb	タ	2		タ bタ2
-38	EF-30	8.4	4.9	4.5	231	チャート	IVc		1		タ bタ2 aタ1
-39	DST-27	9.6	5.8	4.8	437	砂岩	IVb	ス	1	○	aタ
-40	ED-76	8.7	6.7	5.0	401	安山岩	IVa				タ
-41	30II	12.2	5.3	3.3	291	"	IIa	ボ		○	a cハ
-42	D-25	(14.2)	(5.7)	(2.9)	(270)	砂岩	IIa	ス	2		aタ1
-43	DS-31	(8.0)	(7.6)	(2.6)	(176)	"	IVa	ケ	2		ボ
-44		13.9	11.6	6.7	977	安山岩	III				

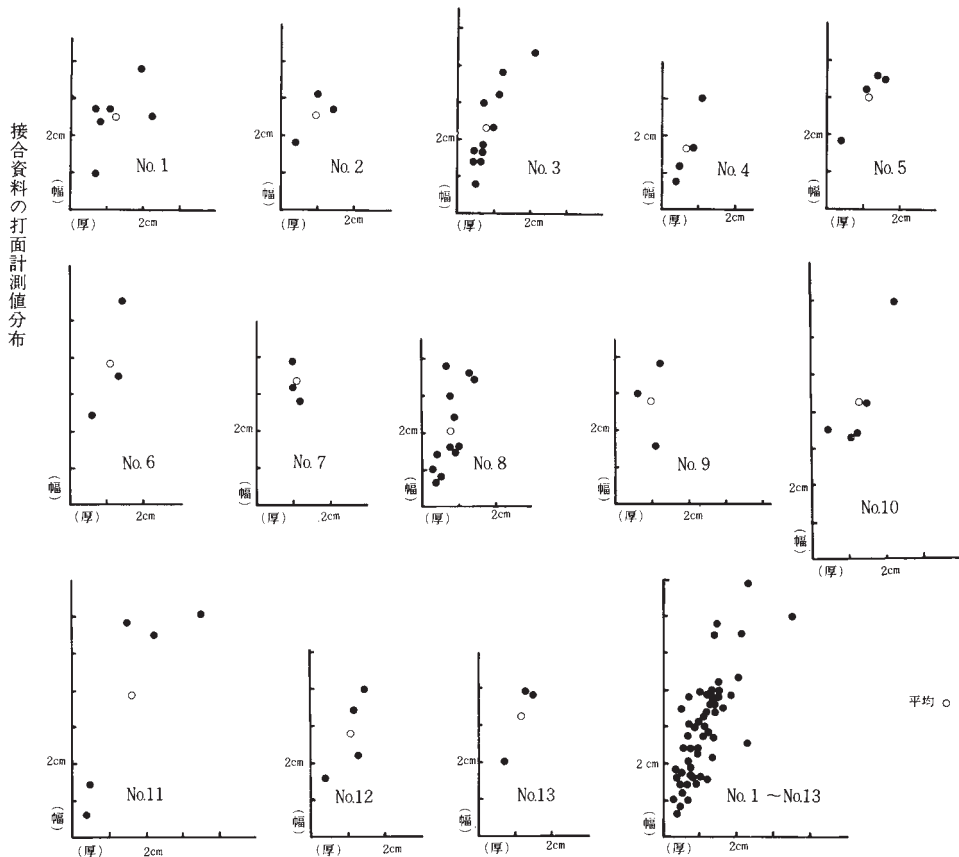
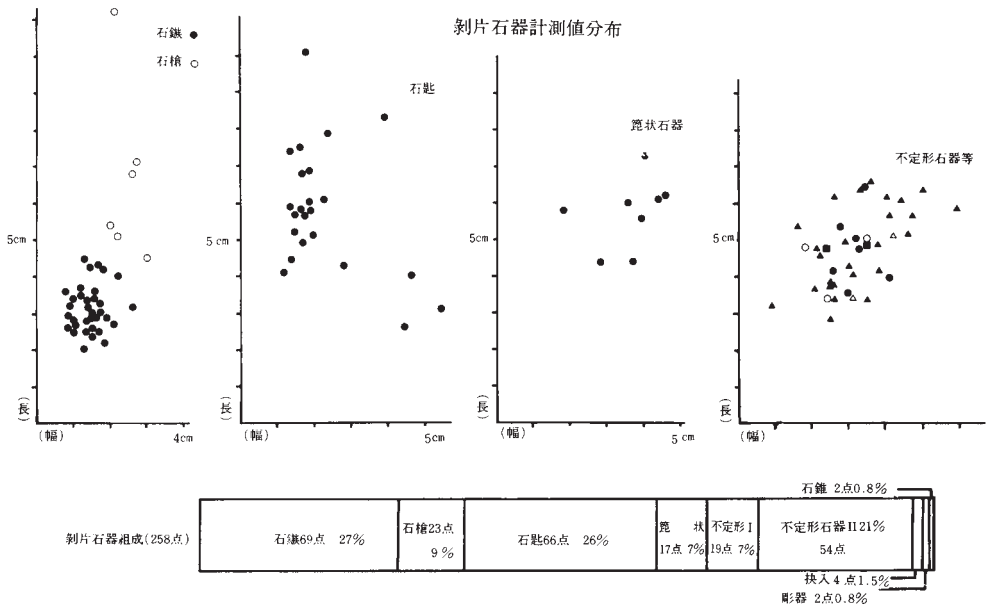
第10表 遺構外出土石器計測表

剥片接合資料

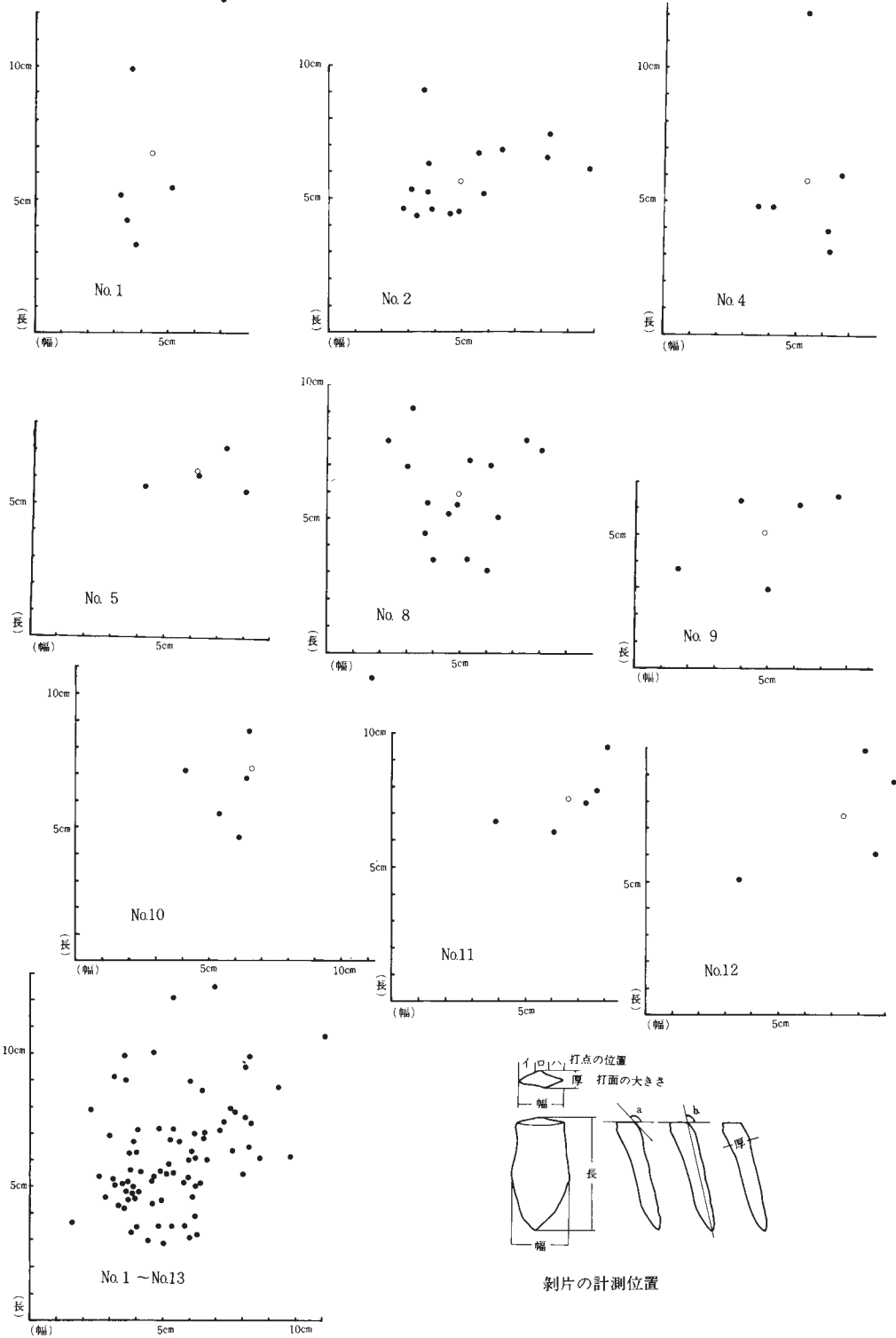
剥片No	計測値(最大)			打面		打点位置 (イ,ロ,ハ)	打面種類	末端形状	打角	
	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	幅(mm)	厚(mm)				a	b
①-1	42	35	14	10	7	イ	単	ヒ	135	96
-2	99	36	27	25	23	ハ	"	フェ	115	107
-3	55	51	15	24	8	ロ	"	ス	110	104
-4	33	38	11	27	11	"	"	フェ	115	96
-5	51	32	10	27	7	"	"	"	130	110
-6	125	70	34	38	19	"	"	ス	120	102
②-1	90	60	27	31	10	"	"	フェ	130	87
-2	54	60	10	18	4	イ	"	ヒ	135	102
-3	101	47	18	27	14	ロ	"	"	120	106
③-1	46	39	4					フェ		
-2	53	31	11	18	7	ハ	単	"	139	120
-3	45	49	11	30	7	ロ	"	ヒ	130	102
-4	65	82	13	38	12	"	"	ス	110	98
-5	90	36	15	8	5	"	自然	ヒ	115	107
-6	52	58	22	43	21	"	"	"	105	102
-7	52	37	5	17	5	イ	単	フェ	110	117
-8	44	46	9	14	5	ロ	"	"	125	107
-9	63	37	11	23	9	"	"	"	120	121
-10	46	28	8					"		
-11	61	98	14	32	11	イ	単	"	118	106
-12	68	65	13	14	6	"	"	ス	125	121
-13	43	33	9	17	7	ハ	"	ヒ	110	112
-14	67	56	12					フェ		
④-1	121	54	28							
-2	32	63	10	30	11	ロ	単	ヒ	120	111
-3	39	62	15	12	5	"	"	"	110	121
-4	60	67	24					"		
-5	48	41	13	17	8	ロ	単	"	130	104
-6	48	36	11	8	4	"	"	フェ	125	118
⑤-1	56	42	9					ス		
-2	55	80	16	35	16	ロ	単	ヒ	110	97
-3	68	53	12	18	4	ハ	"	フェ	110	116
-4	71	72	20	36	14	"	調整	"	120	93
-5	61	62	15	32	11	ロ	単	ス	110	95
⑥-1	47	39	11	35	13	"	調整	フェ	125	118
-2	50	63	10	55	14	"	単	"	110	104
-3	50	39	9	24	6	イ	"	"	105	105
⑦-1	35	49	10	32	10	ロ	"	"	120	108

剥片No	計測値(最大)			打面		打点位置 (イ,ロ,ハ)	打面種類	末端形状	打角	
	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	幅(mm)	厚(mm)				a	b
⑦-2	35	54	13	28	12	ロ	単	ヒ	120	115
-3	30	45	15	39	10	"	"	フェ	120	114
⑧-1	79	75	12	10	3	イ	自然	"	125	126
-2	70	62	14	34	14	ロ	単	ヒ	120	110
-3	72	54	18							
-4	69	30	9							
-5	79	23	8	7	4	ロ	単	フェ	115	121
-6	91	32	13	16	8	ハ	"	ス	110	114
-7	31	60	10	38	7	イ	"	フェ	120	115
-8	35	40	9	24	9	ロ	"	"	120	106
-9	76	81	21	15	9	"	"	ス	115	96
-10	52	46	20							
-11	45	37	10	14	4	ハ	単	ヒ	115	122
-12	51	64	15	36	13	ロ	"	"	125	107
-13	35	53	13	8	5	ハ	"	フェ	120	124
-14	56	49	11	30	8	"	"	ヒ	115	87
-15	56	38	12	16	10	ロ	"	"	115	102
⑨-1a	61	62	20	16	11	ロ	"	ヒ	130	95
-1b	63	40	11							
-2	37	16	4							
-3	29	50	7	30	6	ロ	単	ヒ	94	60
-4	64	76	17	38	12	ハ	"	ス	125	97
⑩-1	55	54	10	35	5	ロ	単	"	120	112
-2	106	111	28	69	23	"	"	ヒ	130	105
-3								ヒ		
-4	86	65	19	42	15	イ	"	フェ	130	127
-5	68	64	10					ヒ		
-6	46	61	10	33	11	イ	単	"	115	96
-7	71	41	10	34	12	ロ	"	"	110	88
⑪-1	67	39	14	14	5	イ	調整	ス	105	84
-2	78	77	16	58	15	ロ	"	ヒ	115	97
-3	74	73	25	55	22	"	単	フェ	115	97
-4	63	61	12	6	4	"	"	"	135	151
-5	95	81	34	60	35	"	調整	ヒ	120	108
⑫-1	61	86	16	34	12	"	単	ス	115	115
-2	99	82	18	16	4	イ	"	フェ	120	124
-3	51	35	11	22	13	ハ	"	ヒ	105	102
-4	87	93	17	40	15	"	"	"	120	106
⑬-1	55	52	17	20	7	ロ	単	ヒ	125	112
-2	72	49	18	38	15	"	調整	"	120	98
-3	60	60	13	39	13	"	単	"	125	105

※フェーフェザ ヒーヒンジ スースデニ



第134図 剥片石器・接合資料計測値分布



第135図 接合資料計測値分布

有孔土製品

土器片を打ち欠き等によってほぼ円形に整形し、これに孔をうがったもので27点出土した。すべて第 群土器（早稲田5類）であるが、土製品の分布は、遺構内又はその近辺に多く、第 群土器が集中的に出土した区域には少ない。なお、27点中13点は第308号竪穴住居跡内からの出土である。

多くは胴部破片を素材にしたと考えられるが、口縁部及びその近くを素材にしたものが2点（18・21）ある。

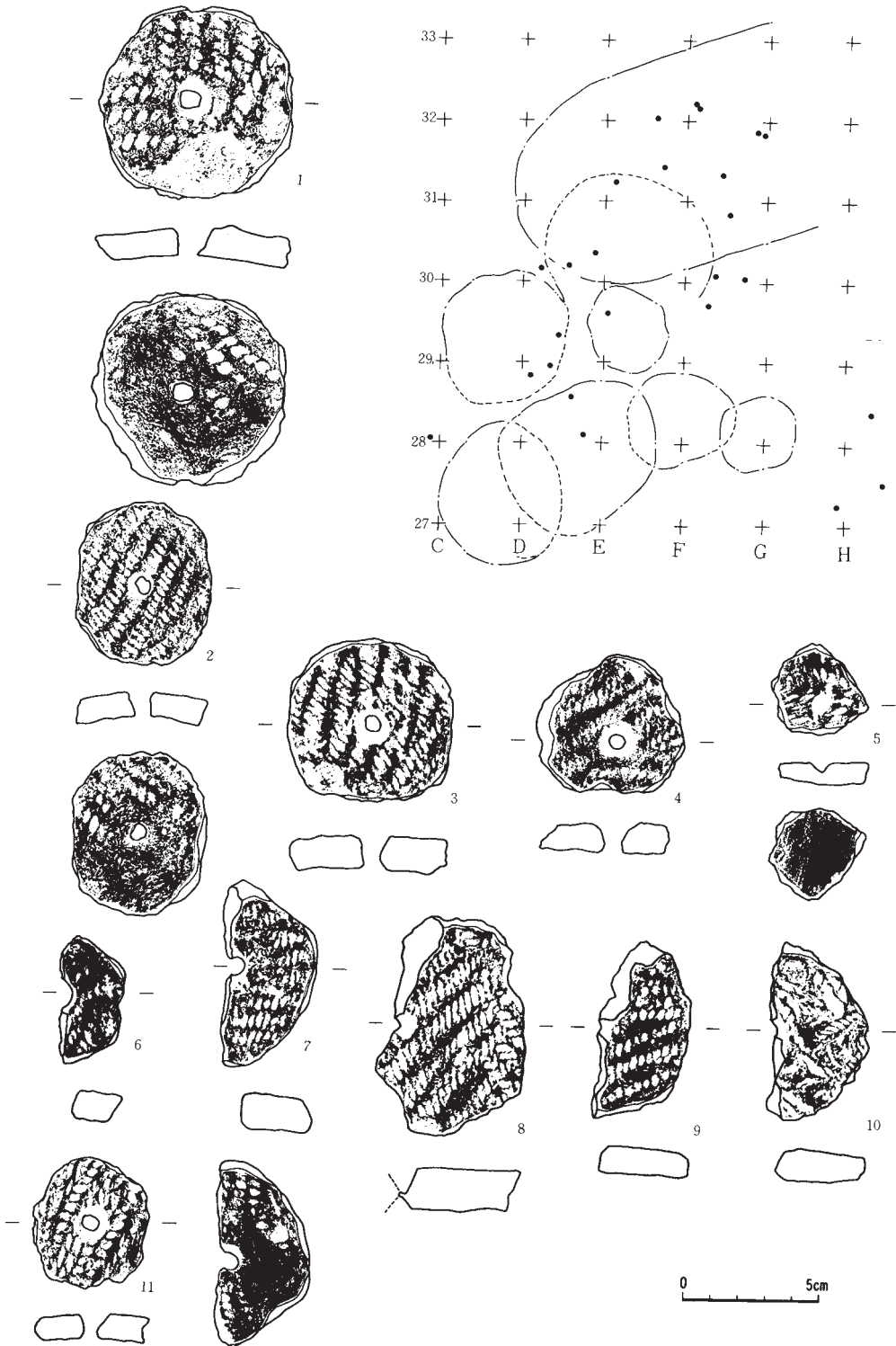
大きさは、最大で径約80mm、最小で径30mmで、その平均は55mmである。重量は、完形品の場合、最大63.8g、最小9.2gで、平均31gであるが、ほぼ半分に割れた破損品では最大59.4gあり、その平均は25gである。

周縁は荒い打ち欠きによったもの、細かな打ち欠きによったもの、一部ないしほぼ全周擦られたものなどがあり、この順序がほぼ整形の順序と一致するが、荒い打ち欠きだけのもの（7・8・13・17）擦ったもの（1・3・15・17）は少なく、多くは細かな打ち欠きによっている。

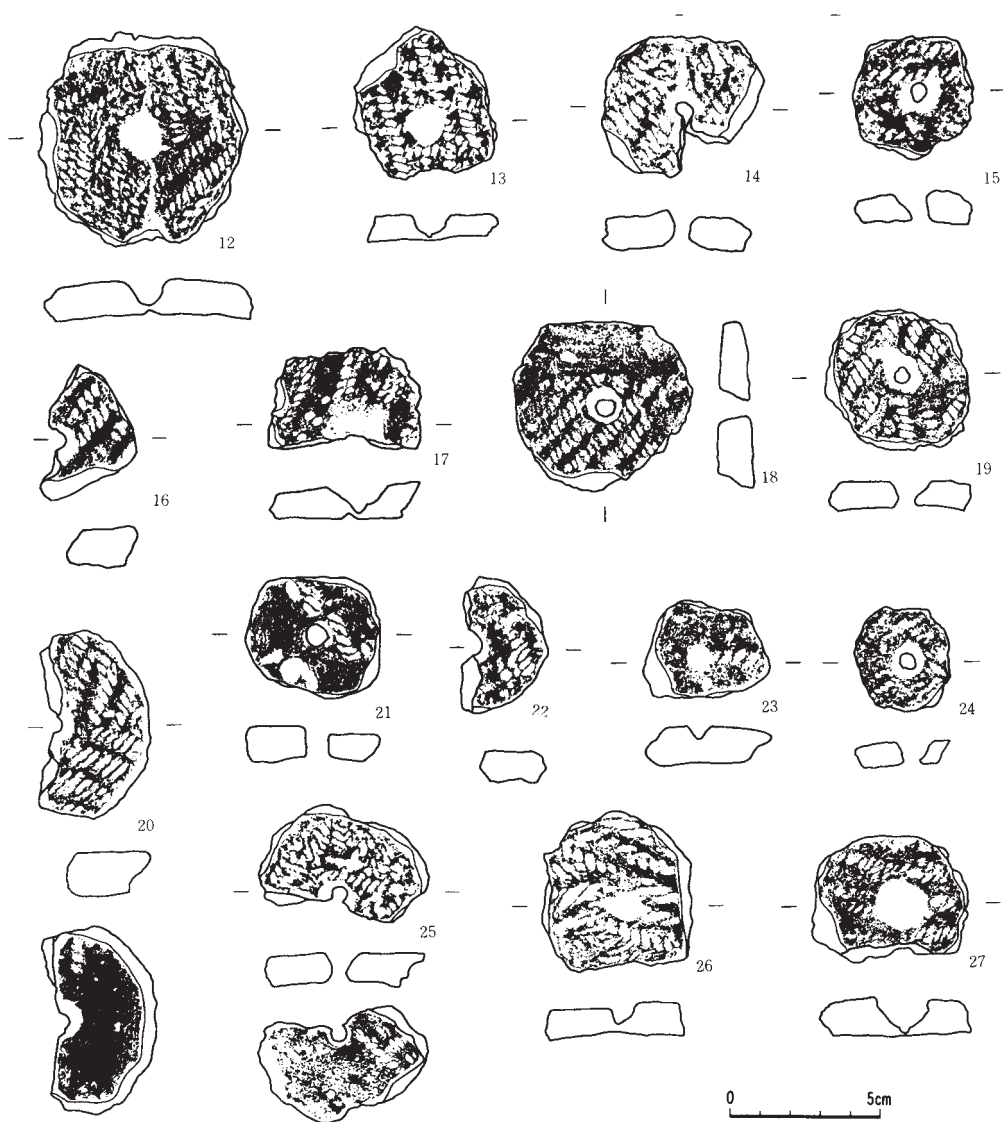
穿孔は両面から行われるが、未貫通のものが3点（8・12・17）、一面から行われて未貫通のものが4点（5・23・26・27）ある。穿孔されたものの中で完形品は10点、破損品は9点、未貫通のものでは完形品6点、破損品2点である。（三宅）

番 号	出 土	地 点	径mm	厚mm	重 量g	孔	縄
1	308H	フク土	74~67	11	59.2	○	表LR※ ウラLR※
2	308H	フク土	59~49	10	34.9	○	表LR※ ウラRL※
3	308H	1号ピット	64~58	11	46.9	○	LR※
4	308H	フク土	55~51	11	31.4	○	LR※
5	308H	床面	36~29	9	29.2	○	表? ウラヘラナデ
6	308H	1号ピット	(46)	12	(10.9)	○	LR※
7	308H	フク土	(68)	12	(27.5)	×	LR ウラLR※
8	308H	フク土	(79)	13	(59.4)	×	LR※
9	308H	フク土	(66)	12	(28.1)	○	LR※
10	308H	フク土	(63)	11	(26.4)	○	?
11	308H	床面	48~40	12	26.7	○	L(R・R・L・L)
12	ED-28	IV	73~66	12	63.8	×	L(R・L)※
13		IV	51~41	10	21.2	×	LR※
14	ED-29	IV	(55)	13	(25.7)	○	LR※
15	312H	フク土	45~41	11	17.6	○	LR※
16	312H	フク土	(45)	12	(14.4)	○	LR※
17	317H	フク土	(51)	11	(19.2)	×	RLR+L・L
18	EA-24	IV	60~55	10	39.5	○	LR※ D縁
19	ED-30	IV	53~43	13	27.3	○	LR※
20	EF-29	IV	(60)	15	(32.5)	○	表LR※ ウラLR※
21	EB-28	IV	48~40	11	22.2	○	LR※
22	EG-27	IV	(44)	12	(12.1)	○	RL※
23	EH-28	IV	(41)	15	16.5	×	LR※
24	308H	床面	35~31	10	10.8	○	RL
25	308H	床面	(56)	12	(24.0)	○	表LR ウラLR RL
26	BH-27	IV	57~49	11	32.6	×	R(L・R・R)※
27	25III-括		(51)	15	32.5	×	LR※

第11表 有孔土製品観察表



第136図 有孔土製品



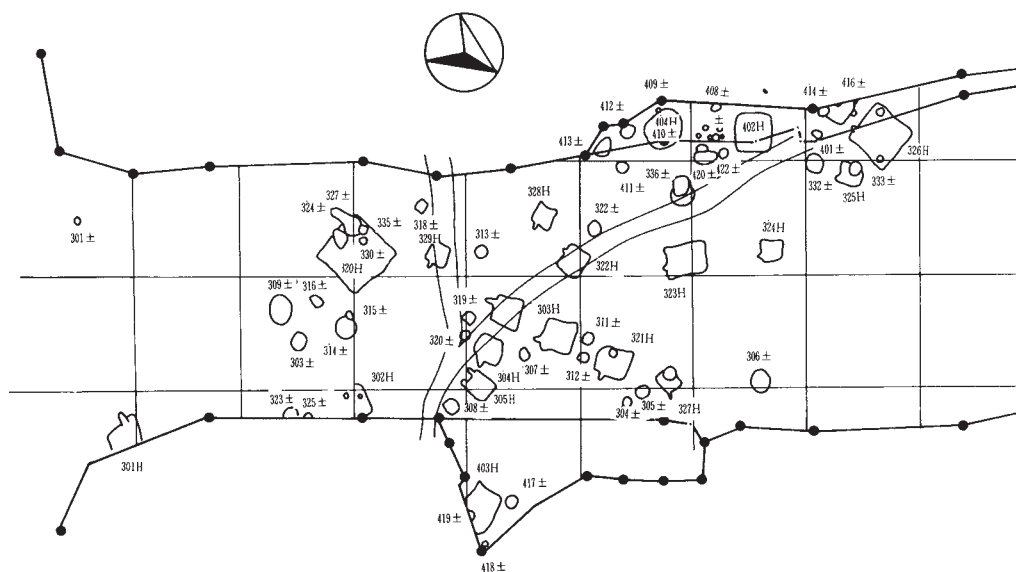
第137図 有孔土製品

第 章 平安時代の遺構と出土遺物

第 1 節 検出遺構と出土遺物

竪穴住居跡は、昭和57年度16軒、昭和59年 3 軒の計19軒を検出した。土壌は、昭和57年度28基、昭和59年度22基の計50基を検出した。

遺構内の出土遺物は、土師器を中心に、須恵器、鉄製品等である。



第138図 歴史時代遺構配置図

(1) 竪穴住居跡と出土遺物

第12表 第301号竪穴住居跡観察表

位 置	E F-29、E G-29、E H-29			図	139、173図											
	E F-30、E G-30、E H-28															
平面形	(方形) 路線外の東側半分は未調査															
計測値	東 壁		南 壁		西 壁		北 壁									
	壁 長	未 掘	未 完 掘		525cm		未 完 掘									
	壁 高	"	"		4~40cm		"									
面積				主軸方位	N-14.1°-E											
壁	ほぼ垂直に立ち上がる。しまりがあり、しっかりしている。貼り付けた可能性がある。															
周溝	北西コーナーから北壁沿いに浅い落ち込みがみられるが、断定し得ない。															
床	貼り床で、ほぼ平坦であるが、南側がやや下がる。全体的に粘性をもっている。カマド付近はかなりかたくしまっている。															
ピット	床面で1基検出した。柱穴ではない。															
カマド	形 態 半地下式			位 置 西壁北寄り												
	同位置で改築が行われている。燃焼部の焼土は径15cm、厚さ2cmである。袖部は粘土で構築されている。煙道部は上部が削平され掘り方に近い部分しか残存していなかった。															
覆土	11層に区分できた。黒色土を基調とし、混入物は砂粒が中心となる。3・9・11層に若干のバミスを混入する。湿性・粘性・しまり等により分層した。															
出土遺物	土師器坏、甕、須恵器甕が出土した。															
備考	北壁に張り出し部を有するが、削平されたためセクション面で確認した。 第333号・第340号溝状ピットを掘り込んでいる。															
ピット計測値	番号	長(cm)	短(cm)	深(cm)	番号	長(cm)	短(cm)	深(cm)	番号	長(cm)	短(cm)	深(cm)	番号	長(cm)	短(cm)	深(cm)
	1				7				13				19			
	2				8				14				20			
	3				9				15				21			
	4				10				16				22			
	5				11				17				23			
	6				12				18				24			

第13表 第302号竪穴住居跡観察表

位 置	E E-39・40、E F-39・40			図	140、174、175図											
	E G-39・40															
平 面 形	(方形) 南側半分が削平されている。															
計 測 値	東 壁		南 壁		西 壁		北 壁									
	壁 長	(350cm)	(380cm)		(345cm)		(355cm)									
	壁 高	25~29cm	-		-		23~35cm									
面 積	(14.4㎡)			主 軸 方 位												
壁	若干外反するが、ほぼ垂直に立ち上がる。傾斜地のため、高位の北側部分は基本層序の第Ⅴ層で、低位の南側は第Ⅳ層である。しっかりしている。															
周 溝	存在しない。															
床	平坦で、地山と同一方向に若干傾斜している。カマド付近はかたくしまっている。貼り床ではない。															
ピ ッ ト	4基検出し、すべてのピットから遺物が出土した。															
カ マ ド	形 態				位 置	南西壁西寄り										
	燃焼部のほかは、削平により残存していなかった。焼土は径約50cmで最大厚8cmである。袖部分で焼けた粘土が少量確認された。															
覆 土	36層に区分できた。暗褐色土を基調とし、炭化物を多量に混入する。炭化物は覆土上面から床面まで分布していた。パミスの混入量・色調・しまり等により分層した。															
出 土 遺 物	土師器甕、須恵器甕、輪の羽口1点、刀子の材料と思われる鉄製品1点が出土した。															
備 考																
ピ ッ ト 計 測 値	番号	長(cm)	短(cm)	深(cm)	番号	長(cm)	短(cm)	深(cm)	番号	長(cm)	短(cm)	深(cm)	番号	長(cm)	短(cm)	深(cm)
	1	59	50	36	7				13				19			
	2	76	64	54	8				14				20			
	3	77	66	56	9				15				21			
	4	80	74	48	10				16				22			
	5				11				17				23			
	6				12				18				24			

第14表 第303号竪穴住居跡観察表

位 置	E A - 45・46、E B - 45・46・47			図	149、176、177、178、179、180図												
	E C - 45・46・47																
平 面 形	方形																
計 測 値	壁 長	東 壁 188cm		南 壁 185cm		西 壁 180cm		北 壁 197cm									
	壁 高	77~87cm		46~76cm		34~46cm		33~87cm									
面 積	12.0㎡			主 軸 方 位		N-12.4°-W											
壁	垂直に立ち上がる。地山のⅣ層下層~Ⅵ層を壁面とし、しっかりしている。 南壁東寄りの壁面にナベ底状の掘り込みが認められる。南壁カマド西側部がやや湾曲している。																
周 溝	存在しない。																
床	貼り床で、全体的にしまりがあり、特にカマド付近はかたい。平坦であるが、中央東側が若干窪んでいる。																
ピ ッ ト	3基検出した。壁面に1基、床面で2基であるが、柱穴と断定できるものはない。 壁面のピット3はナベ底状に壁面を抉り、カマドの構築途中でやめたものと考えられる。																
カ マ ド	形 態	トンネル式			位 置	南壁西寄り											
	燃焼部は掘り込まれている。焼土は30cm×80cmの長楕円形で厚さは7cm×9cmである。袖部は芯材に軽石を用い、粘土でつき固めて構築している。 煙道は壁際からやや下向き、煙出し孔直下が最も深い。煙出し孔は内から外に向かって傾斜している。																
覆 土	56層に区分できた。暗褐色土と褐色土を基調とし、部分的に黄褐色土が混入する。 全体に1mm~3mmのパミスと細砂粒を混入する。																
出 土 遺 物	北東コーナー近くの56層中から鉄鏝（雁又鏝）が1点出土した。尖頭部は北東を向いていた。 土師器片、甕、袖珍土器、貝殻が出土した。																
備 考																	
ピ ッ ト 計 測 値	番号	長(cm)	短(cm)	深(cm)	番号	長(cm)	短(cm)	深(cm)	番号	長(cm)	短(cm)	深(cm)	番号	長(cm)	短(cm)	深(cm)	
	1	58	42	30	7				13	19							
	2	82	29	42	8				14	20							
	3				9				15	21							
	4				10				16	22							
	5				11				17	23							
	6				12				18	24							

第15表 第304号竪穴住居跡観察表

位 置	EC-45・46		図	142、143、180、181図												
	ED-45・46															
平 面 形	ゆがんだ台形状を呈する。															
計 測 値	東 壁		南 壁		西 壁		北 壁									
	壁 長	310cm	262cm	283cm	295cm											
	壁 高	56~79cm	39~55cm	39~51cm	40~77cm											
面 積	8.2㎡		主 軸 方 位		N-22.9°-E											
壁	東壁は外傾するが、他は垂直に立ち上がる。東壁は雑な掘り込みで、この面に地山と同色の粘土を貼り付けている。カマド上部の壁も同様の構築法である。															
周 溝	存在しない。															
床	貼り床で、非常にかたくしまっている部分と、粘性をもち、やわらかい部分がある。															
ピ ッ ト	12基検出した。西壁と北壁の壁面に斜めに穿たれたピットが確認された。柱穴と断定できるものはないが、1・6・12の3基が柱穴と思われる。															
カ マ ド	形 態		半地下式		位 置		東壁中央南寄り									
	<p>熱焼部の焼土は35cm×65cmの長楕円形で、中央部に軽石が埋められ支脚として使用されている。袖部は軽石を芯材とし、粘土で構築され、焼化を受けている。</p> <p>煙道は地山を掘り込み、粘土等で構築され、天井・側壁とも炭化している。</p> <p>煙出し孔底部は砂層に至っているため不明確である。</p>															
覆 土	56層に区分できた。暗褐色土・暗黄褐色土が基調で、バミス・砂粒が混入している。部分的に黒褐色土・粘土が堆積している。床面から20cm~30cmの高さに白色の火山灰がブロック状に混入していた。															
出 土 遺 物	カマド北側や貼り壁の粘土中から土師器甕の底部が出土した。															
備 考																
ピ ッ ト 計 測 値	番号	長(cm)	短(cm)	深(cm)	番号	長(cm)	短(cm)	深(cm)	番号	長(cm)	短(cm)	深(cm)	番号	長(cm)	短(cm)	深(cm)
	1	42	34	17	7	17	14	8	13				19			
	2	48	22	14	8	32	30	8	14				20			
	3	108	82	14	9	24	14	6	15				21			
	4	60	44	17	10	21	12	12	16				22			
	5				11	12	11	15	17				23			
	6	48	26	5	12	48	29	22	18				24			

第16表 第305号堅穴住居跡観察表

位 置	E E-44・45・46		図	144、181図												
	E F-45															
平 面 形	ややゆがんだ方形															
計 測 値		南 東 壁	南 西 壁	北 西 壁	北 東 壁											
	壁 長	327cm	270cm	295cm	268cm											
	壁 高	49~65cm	31~49cm	29~65cm	68~76cm											
面 積	7.5㎡		主 軸 方 位	N-8.5°-E												
壁	部分的にゆるやかに立ち上がるが、全体的にはほぼ垂直な立ち上がりである。砂層部分はもろい。南東壁と北西壁が緩い弧状を呈する。															
周 溝	南東壁下に長楕円形のピット2基が検出されたが、周溝の一部とは断定し得ない。															
床	貼り床で、おおむね平坦であるが、中央部に若干高い部分がある。															
ピ ッ ト	7基検出した。柱穴と断定できるものはないが、1・2・7が柱穴と思われる。															
カ マ ド	形 態	①半地下式 ②半地下式		位 置	①南西壁西寄り ②南西壁東寄り											
	2基構築されていた。②廃棄後に①を構築したものである。煙道・煙出し孔・燃烧部は非常に類似した構築法である。②の住居跡内部の施設は撤去されていた。燃烧部は両者とも掘り込まれ、①は37cm×60cm②は42cm×51cmの楕円形の焼土を確認した。①の袖部は軽石を混入するが芯材として床面に埋設したのではない。煙道は粘土等で構築され②は天井・側壁とも炭化している。煙出し孔の底部は共に掘り窪めて構築している。															
覆 土	20層に区分できた。暗褐色土を基調とし、地山の崩壊土の混入もみられる。木根による攪乱を受けている部分が多い。															
出 土 遺 物	土師器環・甕が出土した。															
備 考																
ピ ッ ト 計 測 値	番号	長(cm)	短(cm)	深(cm)	番号	長(cm)	短(cm)	深(cm)	番号	長(cm)	短(cm)	深(cm)	番号	長(cm)	短(cm)	深(cm)
	1	26	21	6	7	36	24	14	13				19			
	2	46	30	10	8				14				20			
	3	79	22	3	9				15				21			
	4	50	12	1	10				16				22			
	5	18	16	25	11				17				23			
	6	14	15	17	12				18				24			

第17表 第306竪穴住居跡観察表

位 置	E B-48・49、E C-47・48・49			図	145、146、182、183図											
	E D-48・49															
平 面 形	ゆがんだ方形を呈する。															
計 測 値	東 壁		南 壁		西 壁		北 壁									
	壁 長	380cm	390cm		425cm		400cm									
	壁 高		75~107cm		42~76cm		21~29cm									
面 積	13.9㎡			主 軸 方 位	N-20°-W											
壁	垂直に立ち上がる。東・南壁はかたくしっかりしている。西・北壁はやわらかい。北壁のほぼ中に2箇所窪みが見られる。															
周 溝	存在しない。															
床	平担で、かたくしまっている。															
ピ ッ ト	3基検出した。内2基は北壁面に掘り込まれた奥行き20cmと28cmの半円形のピットである。															
カ マ ド	形 態	半地下式			位 置	南壁東寄り										
	燃燒部の焼土は54cm×56cmである。袖部は軽石を芯材として粘土等で構築し、湾曲の度合いが強い。煙道はゆるく傾斜している。煙出しはやや外傾する。															
覆 土	61層に区分できた。褐色土を基調とし、パミス・砂粒等を混入する。部分的に床面から10cm~20cm高い部分に、火山灰と思われる白色のブロックを混入する。															
出 土 遺 物	土師器坏、甕、須恵器甕が出土した。															
備 考																
ピ ッ ト 計 測 値	番号	長(cm)	短(cm)	深(cm)	番号	長(cm)	短(cm)	深(cm)	番号	長(cm)	短(cm)	深(cm)	番号	長(cm)	短(cm)	深(cm)
	1	71	64	21	7				13				19			
	2	84	-	20	8				14				20			
	3	68	-	28	9				15				21			
	4				10				16				22			
	5				11				17				23			
	6				12				18				24			

第18表 第320号竪穴住居跡観察表

位 置	D R - 39・40、D S - 38・39・40・41			図	147、185図											
	E A - 38・39・40・41															
平面形	方形															
計測値	東 壁		南 壁		西 壁		北 壁									
	壁 長	674cm		736cm		690cm										
	壁 高	-		-		40~30cm										
面積	(49.6㎡)			主軸方位												
壁	垂直に立ち上がる。周溝部分はオーバーハングしている。貼り壁と思われ、北壁ではかなりの崩落がみられる。															
周溝	ほぼ全周すると思われる。周溝中にビット状に深くなっている部分が8箇所あった。															
床	貼り床である。平担で、全体的にやわらかい。															
ビット	24基検出した。柱穴と思われるものは12基である。他に周溝中にビット状の深い部分が8箇所あった。															
カマド	形態				位置	東壁中央南寄り										
	削平のため燃焼部の焼土のみを確認した。45cm~55cmで、厚さは最大8cmである。															
覆土	45層に区分できた。住居跡中央部は3層のみであるが、壁際では複雑に分層された。															
出土遺物	土師器環、甕、須恵器甕、袖珍土器が出土した。															
備考	第312号・350号・351号溝状ビット・第330号・334号土坑を切り、第327号・335号土坑に切られている。															
ビット計測値	番号	長(cm)	短(cm)	深(cm)	番号	長(cm)	短(cm)	深(cm)	番号	長(cm)	短(cm)	深(cm)	番号	長(cm)	短(cm)	深(cm)
	1	74	40	32	7	30	28	8	13	100	72	23	19	72	24	19
	2	60	48	23	8	90	68	15	14	72	64	25	20	60	40	14
	3	88	48	17	9	25	40	41	15	92	28	9	21	42	36	19
	4	36	36	18	10	40	36	17	16	48	44	17	22	100	64	10
	5	52	40	20	11	88	72	23	17	30	28	14	23	60	54	21
	6	44	32	34	12	100	80	56	18	56	52	-	24	30	28	4

第19表 第321号竪穴住居跡観察表

位 置	E D-50・51・52			図	148、185、186、187図											
	E E-50・51															
平面形	方形															
計測値	東 壁		南 壁		西 壁		北 壁									
	壁 長	388cm	310cm		414cm		347cm									
面 積	壁 高		16~27cm		18~29cm		35~91cm									
	12.4㎡			主軸方位	N-69.3°-E											
壁	ほぼ垂直に立ち上がる。西壁が南寄りやや内側に入る。															
周 溝	存在しない。															
床	貼り床で、全体にしまりがあり、特にカマド付近がかたくしまっている。															
ピ ッ ト	9基検出した。内、柱穴は7基で、大形の2基は貯蔵穴と考えられる。															
カ マ ド	形 態	半地下式			位 置	東壁南寄り										
	燃焼部の焼土は約1m×1mで厚さ6cmである。袖部は芯材に軽石を用い、粘土等で構築している。削平のため煙道の上部及び煙出し孔は残存しない。															
覆 土	38層に区分できた。褐色土を基調とし、バミス及び砂粒が混入している。															
出土遺物	カマド燃焼部の上で土師器甕1個体、他に土師器杯・甕・袖珍土器が出土した。															
備 考	第349号溝状ピットを切っている。															
ピ ッ ト 計 測 値	番号	長(cm)	短(cm)	深(cm)	番号	長(cm)	短(cm)	深(cm)	番号	長(cm)	短(cm)	深(cm)	番号	長(cm)	短(cm)	深(cm)
	1	20	19	19	7	20	20	14	13				19			
	2	26	21	15	8	16	16	13	14				20			
	3	34	24	28	9	112	90	18	15				21			
	4	59	46	20	10				16				22			
	5	22	18	13	11				17				23			
	6	21	20	17	12				18				24			

第20表 第322号竪穴住居跡観察表

位 置	E A-49、D S-49			図	149、187、188図											
	D T-48・49・50															
平 面 形	方形															
計 測 値	壁 長	東 壁 311cm		南 壁 338cm		西 壁 298cm		北 壁 334cm								
	壁 高	50~73cm		10~50cm		10~26cm		25~70cm								
面 積	8.1m ²			主 軸 方 位	N-7.8°-W											
壁	ほぼ垂直に立ち上がり、しまっている。															
周 溝	東壁下の一部と北壁下中ほどから西壁下にかけて検出した。															
床	貼り床で、全体的にしまっている。															
ピ ッ ト	11基検出した。内、柱穴は10基である。															
カ マ ド	形 態	半地下式			位 置	南壁西寄り										
	燃烧部の焼土は径30cmで、厚さ最大8cmである。中央部に径15cmで非常にかたい灰が堆積していた。袖部は軽石及び珩岩を芯材とし、粘土等で構築している。煙道及び煙出し孔は削平のため存在しなかった。															
覆 土	38層に区分できた。褐色土を基調とし、バミス・砂粒が混入している。炭化物を多く含む。															
出 土 遺 物	須恵器甕及び燃烧部直上から支脚（土師器小形甕）が出土した。															
備 考	焼失家屋で、南壁から中央にかけて丸太状の炭化材が検出された。															
ピ ッ ト 計 測 値	番号	長(cm)	短(cm)	深(cm)	番号	長(cm)	短(cm)	深(cm)	番号	長(cm)	短(cm)	深(cm)	番号	長(cm)	短(cm)	深(cm)
	1	37	18	21	7	23	18	13	13				19			
	2	50	40	20	8	20	13	17	14				20			
	3	60	40	27	9	42	32	19	15				21			
	4	32	28	14	10	60	30	5	16				22			
	5	52	42	21	11	45	20	8	17				23			
	6	38	29	16	12				18				24			

第21表 第323号竪穴住居跡観察表

位置	D S-53・54・55、E A-54・55			図	150、188図											
	D T-53・54・55															
平面形	長方形															
計測値	壁長	477cm		南壁	405cm		西壁	515cm		北壁	393cm					
	壁高	44~54cm		3~45cm		2~10cm		10~41cm								
面積	17.9㎡			主軸方位	N-48.0°-W											
壁	垂直に立ち上がる。木根による攪乱のため、南西コーナーから北西コーナーにかけてのプランが不明瞭である。															
周溝	南壁下で床面よりやや低い部分が検出されたが断定し得ない。															
床	貼り床で、しまっている。															
ビット	9基検出した。柱穴は4基で、2基は柱痕が確認された(4・9)壁面に1基ビットが検出された。1・2・3は貼り床面下で検出した。															
カマド	形態	半地下式			位置	南壁東寄り										
	<p>燃焼部の焼土は40cm×45cmで、厚さは最大10cmである。袖部は芯材を用いず粘土によるものである。煙道上部及び煙出し孔は削平のため残存しない。</p>															
覆土	43層区分できた。暗褐色土と黄褐色土を基調とし、バミス・砂粒が混入している。															
出土遺物	土師器環、甕、土製品が出土した。															
備考																
ビット計測値	番号	長(cm)	短(cm)	深(cm)	番号	長(cm)	短(cm)	深(cm)	番号	長(cm)	短(cm)	深(cm)	番号	長(cm)	短(cm)	深(cm)
	1	64	58	32	7	34	13	6	13				19			
	2	80	60	65	8	27	8	14	14				20			
	3	86	46	22	9	47	28	21	15				21			
	4	34	24	22	10				16				22			
	5	60	33	15	11				17				23			
	6	44	31	10	12				18				24			

第22表 第324号竪穴住居跡観察表

位 置	D S - 57・58			図	151・188図											
	D T - 57・58															
平 面 形	ゆがんだ方形															
計 測 値	東 壁		南 壁		西 壁		北 壁									
	壁 長	302cm	238cm		250cm		209cm									
	壁 高	49~52cm	11~50cm		11~12cm		9~49cm									
面 積	6.3㎡			主 軸 方 位	N-44.5°-W											
壁	垂直に立ち上がる。木根による攪乱で、北西コーナーから南西コーナーにかけてのプランが不明瞭である。															
周 溝	存在しない。															
床	貼り床で、北西コーナー付近がやや落ち込む。															
ピ ッ ト	1基検出した。南西コーナーの壁面に斜位に掘り込まれている。															
カ マ ド	形 態	半地下式			位 置	南壁東寄り										
	燃焼部の焼土は径45cmで、厚さは最大7cmである。中央部に20cm×20cmほどの石が置かれていた。袖部は芯材を用いず、粘土で構築されている。煙道上部及び煙出し孔は、削平のため残存していない。															
覆 土	13層に区分できた。暗褐色土と褐色土を基調とし、バミス・砂粒が混入している。また、木根による攪乱を受けている部分もみられる。															
出 土 遺 物	土師器甕が出土した。															
備 考																
ピ ッ ト 計 測 値	番号	長(cm)	短(cm)	深(cm)	番号	長(cm)	短(cm)	深(cm)	番号	長(cm)	短(cm)	深(cm)	番号	長(cm)	短(cm)	深(cm)
	1	106	53	23	7				13				19			
	2				8				14				20			
	3				9				15				21			
	4				10				16				22			
	5				11				17				23			
	6				12				18				24			

第23表 第325号竖穴住居跡観察表

位 置	D P-56・57			図	152、188、189図												
	D Q-56・57																
平 面 形	方形																
計 測 値	東 壁		南 壁		西 壁		北 壁										
	壁 長	260cm		270cm		(290cm)		(210cm)									
	壁 高	36~43cm		4~21cm		4~5cm		4~24cm									
面 積	(6.5m ²)			主 軸 方 位	N-31.8°-E												
壁	ほぼ垂直に立ち上がるが、外反する部分もある。残存部分は少ないが、しっかりしている。																
周 溝	存在しない。																
床	おおむね平坦であるが、小さい起伏が観察される。																
ピ ッ ト	検出しなかった。																
カ マ ド	形 態 半地下式			位 置 南壁東寄り													
	燃焼部の焼土は37cm×41cmで、厚さは7cmである。袖部は軽石を芯材とし、粘土等で構築している。煙道は天井部及び側壁が炭化している。 煙道上部と煙出し孔は削平により残存していない。																
覆 土	49層に区分できた。暗褐色土を基調とし、パミス及び砂粒の混入がみられる。																
出 土 遺 物	土師器坏、鬘、須恵器袋が出土した。																
備 考	西壁から竖穴中央にかけて第333号土壇に切られている。																
ピ ッ ト 計 測 値	番号	長(cm)	短(cm)	深(cm)	番号	長(cm)	短(cm)	深(cm)	番号	長(cm)	短(cm)	深(cm)	番号	長(cm)	短(cm)	深(cm)	
	1				7				13				19				
	2				8				14				20				
	3				9				15				21				
	4				10				16				22				
	5				11				17				23				
	6				12				18				24				

第24表 第326号竪穴住居跡観察表

位 置	DM-62・63 DN-61・62・63・64			図	153、154、189、190図											
	DO-61・62・63・64 DP-62・63															
平 面 形	(方形)															
計 測 値	壁 長	602cm		南 壁 (590cm)		西 壁 (600cm)		北 壁 (630cm)								
	壁 高	55~63cm		(0)~18~22cm		(0)		(0)~10~54cm								
面 積	(35.1㎡)			主 軸 方 位		N-1.8°-E										
壁	垂直に立ち上がる															
周 溝	存在しない。															
床	平坦であるが中央から北東部がやや高い。															
ピ ッ ト	3基検出した。内、2基は貯蔵穴である。															
カ マ ド	形 態 半地下式			位 置		南壁東寄り										
	焼部部の焼土は、47cm×60cmで厚さは最大8cmである。 袖部は軽石を芯材とし、粘土等で構築している。左袖部が極端に膨らむ。 右袖部の一部が取り去られたものか、本来この形状であったものかは不明である。 煙道は天井部及び側壁が炭化していた。 煙道上部及び煙出し孔は削平のため残存していない。															
覆 土	54層に区分できた。暗褐色土及び暗褐色土を基調とし、バミス・砂粒を混入する。北側及び南側の一部は木根による攪乱が多い。															
出 土 遺 物	土師器環、襷、袖珍土器、須恵器襷、支脚2点が出土した。															
備 考	焼失家屋である。															
ピ ッ ト 計 測 値	番号	長(cm)	短(cm)	深(cm)	番号	長(cm)	短(cm)	深(cm)	番号	長(cm)	短(cm)	深(cm)	番号	長(cm)	短(cm)	深(cm)
	1	70	62	41	7				13				19			
	2	89	81	24	8				14				20			
	3	42	12	36	9				15				21			
	4				10				16				22			
	5				11				17				23			
	6				12				18				24			

第25表 第327号竪穴住居跡観察表

位 置	E E-53・54			図	154、190図											
平 面 形	方形															
計 測 値	東 壁	244cm		南 壁	(250cm)		西 壁	(260cm)		北 壁	256cm					
	壁 長	39~52cm		壁 高	22~24cm		壁 高	70~80cm		壁 高	54~87cm					
面 積	5.8㎡			主 軸 方 位	N-34.5°-E											
壁	東壁・北壁は内傾する部分があり、他はほぼ垂直である。															
周 溝	存在しない。															
床	貼り床で、かたくしまっている。															
ピ ッ ト	1基検出した。径16cm×28cm、深さ6cmで、カマド西側に位置する。															
カ マ ド	形 態	トンネル式			位 置	北壁東寄り										
	燃焼部は若干の焼土が検出されただけで、赤変していない。 袖部は粘土で構築され、かたくしまっている。 煙出し孔上部は外反している。															
覆 土	46層に区分できた。褐色土と明黄褐色土を基調とし、全体的に色調も明るく、しまっている。															
出 土 遺 物	土師器甕が出土した。															
備 考	南西コーナーを第310号土壇に切られている。															
ピ ッ ト 計 測 値	番号	長(cm)	短(cm)	深(cm)	番号	長(cm)	短(cm)	深(cm)	番号	長(cm)	短(cm)	深(cm)	番号	長(cm)	短(cm)	深(cm)
	1				7				13				19			
	2				8				14				20			
	3				9				15				21			
	4				10				16				22			
	5				11				17				23			
	6				12				18				24			

第26表 第328号竪穴住居跡観察表

位 置	DQ-47・48			図	155、190、191図											
	DR-48															
平 面 形	方形															
計 測 値	壁 長	東 壁 240cm		南 壁 220cm		西 壁 264cm										
	壁 高	54~60cm		25~41cm		13~14cm										
面 積	4.6m ²			主 軸 方 位	N-90.0°-E											
壁	ほぼ垂直に立ち上がる。															
周 溝	存在しない。															
床	貼り床である。平坦で、ややしまりに欠ける。															
ピ ッ ト	4基検出した。柱穴と断定できるものはない。															
カ マ ド	形 態	トンネル式			位 置	東壁南寄り										
	燃焼部の焼土は、径30cmほどで厚さは最大5cmである。 袖部は、ほとんど残存していなかった。 煙道部はゆるやかに下向き、煙出し孔の真下で最も深くなる。煙出し孔直下はやや外反する。															
覆 土	64層に区分できた。暗褐色土を基調とし、バミス・砂粒が混入している。															
出 土 遺 物	土師器甕、須恵器甕、支脚1点が出土した。															
備 考	時期不詳の溝が横切っている。															
ピ ッ ト 計 測 値	番号	長(cm)	短(cm)	深(cm)	番号	長(cm)	短(cm)	深(cm)	番号	長(cm)	短(cm)	深(cm)	番号	長(cm)	短(cm)	深(cm)
	1	14	11	8	7				13				19			
	2	22	16	4	8				14				20			
	3	8	6	1	9				15				21			
	4	38	22	5	10				16				22			
	5				11				17				23			
	6				12				18				24			

第27表 第329号竪穴住居跡観察表

位 置	DR-43・44			図	156、191図							
	DS-43・44											
平 面 形	方形											
計 測 値	東 壁		南 壁		西 壁		北 壁					
	壁 長	270cm		240cm		230cm 240cm						
	壁 高	67~93cm		50~88cm		46~47cm 53~76cm						
面 積	4.9㎡			主 軸 方 位	N-88°-E							
壁	やや外反ぎみに立ち上がる。全体的にしまっているが、東壁はもろい。北東・南東コーナーでは中位に張り出した袋状のピットを検出した。											
周 溝	存在しない。											
床	貼り床で、カマド周辺は、かたくしまっている。南西部はしまりに欠ける。											
ピ ッ ト	5基検出した。2基はコーナーの袋状のピットである。											
カ マ ド	形 態	トンネル式			位 置	東壁南寄り						
	住居跡内の施設はほとんど残存しておらず、右側の袖の一部と焼土だけを確認した。煙道は中ほどでやや下向き、煙出し孔の直下で最も深くなる。煙出し孔直下は外反する。											
覆 土	35層に区分できた。暗褐色土を基調とする。全体的に粘土粒とパミスを混入し、粘性をもっている。また、部分的に酸化鉄を含む。南東コーナーのピット下部には、炭化物・酸化鉄等が混入し、3cm×5cmの炭化物も出土した。											
出 土 遺 物	土師器環、甕が出土した。											
備 考												
ピ ッ ト 計 測 値	番号	長(cm)	短(cm)	深(cm)	番号	長(cm)	短(cm)	深(cm)	番号	長(cm)	短(cm)	深(cm)
	1	60	32	12	7				13			19
	2	19	11	9	8				14			20
	3	27	20	10	9				15			21
	4	96	28	7	10				16			22
	5	88	62	17	11				17			23
	6				12				18			24

第28表 第401号竪穴住居跡観察表

位 置	DM-60、DM-61、DM-62			図	157、191、192図											
	DN-60、DN-61、DN-62															
平 面 形	(方形) 路線外の南西部は不明。															
計 測 値	東 壁		南 壁		西 壁		北 壁									
	壁 長		切 り 合 い		未 完 掘		314cm									
面 積	壁 高		"		"		40~67cm									
				主 軸 方 位												
壁	ほぼ垂直に立ち上がる。壁面の剥落が少なく、遺存状態が良い。															
周 溝	存在しない。															
床	地山(八戸火山灰層)を床とし、全体に軽い凹凸がある。															
ピ ッ ト	床面で2基、東壁の外側で2基検出した。床面の2基は柱穴である。															
カ マ ド	形 態				位 置											
	調査区外に存在すると思われる。南壁寄りの床面で、焼土と焼けた礫を検出した。															
覆 土	16層に区分できた。暗褐色土を基調とし、上部に中振浮石、全体に八戸火山灰を混入する。八戸火山灰は壁寄りに多く、壁面から剥落したものである。															
出 土 遺 物	土師器坏、甕、砥石が出土した。															
備 考	第414~416号土坑、第402・403号溝状ピットを切っている。															
ピ ッ ト 計 測 値	番号	長(cm)	短(cm)	深(cm)	番号	長(cm)	短(cm)	深(cm)	番号	長(cm)	短(cm)	深(cm)	番号	長(cm)	短(cm)	深(cm)
	1	35	28	36	7				13				19			
	2	36	34	14	8				14				20			
	3	30	26	33	9				15				21			
	4	32	27	17	10				16				22			
	5				11				17				23			
	6				12				18				24			

第29表 第402号竪穴住居跡観察表

位 置	DM-56・57・58、DN-56・57・58		図	158、192図													
	DO-56・57・58																
平 面 形	長方形																
計 測 値	壁 長	432cm	465cm	440cm	488cm												
	壁 高	26~58cm	7~16cm	4~9cm	4~34cm												
面 積	21.6㎡		主 軸 方 位														
壁	遺存状態の良い東壁では、ほぼ垂直に立ち上がる。壁上部では壁面の剥落が著しい。																
周 溝	東・西壁沿いと、北壁沿いの一部に存在し、全体に浅い掘り込みである。																
床	地山（八戸火山灰層）を床としているが、部分的に貼り床がみられる。貼り床は地山の土を利用したもので、全体に大きな凹凸がある。																
ピ ッ ト	床面で9基検出した。ピット1~4は貯蔵穴と考えられ、ピット4は2個のピットが重複したものである。																
カ マ ド	形 態	半地下式		位 置	南壁東寄り												
	近世以降の溝によって壊され、袖の一部が遺存する。袖部は、石を芯材とし、地山の土を固めて構築している。																
覆 土	4層に区分できた。黒褐色土を基調とし、中振浮石・八戸火山灰・焼土を混入する。																
出 土 遺 物	土師器坏・甕が出土した。																
備 考	焼失家屋と考えられる。床面に火熱を受けた痕跡があり、炭化材の細片が出土している。床面の南壁寄りで浅い溝を検出した。																
ピ ッ ト 計 測 値	番号	長(cm)	短(cm)	深(cm)	番号	長(cm)	短(cm)	深(cm)	番号	長(cm)	短(cm)	深(cm)	番号	長(cm)	短(cm)	深(cm)	
	1	86	70	46	7	69	36	4	13					19			
	2	88	83	60	8	52	40	13	14					20			
	3	124	98	56	9	30	30	24	15					21			
	4	140	104	62	10				16					22			
	5	56	52	51	11				17					23			
	6	56	54	13	12				18					24			

第30表 第403号竪穴住居跡観察表

位 置	E I - 44・45・46、E J - 44・45・46、		図	157、193図												
	E K - 45															
平 面 形	(方形) 路線外の南東部は不明															
計 測 値	東 壁	南 壁	西 壁	北 壁												
	壁 長	未 掘	未 掘	未 完 掘	562cm											
	壁 高	"	"	"	57~86cm											
面 積				主軸方位												
壁	北壁では急傾斜で立ち上がる。壁上部では壁面の剥落が著しい。															
周 溝	存在しない。															
床	地山(八戸火山灰層)を床としている。全体として南東に傾斜し、凹凸が著しい。															
ピ ッ ト	床面で7基検出し、ピット2~5・7は柱穴と考えられる。															
カ マ ド	形 態				位 置											
	調査区外に存在すると思われる。南壁寄りの床面で焼土を検出した。															
覆 土	28層に区分できた。暗褐色土を基調とし、八戸火山灰を混入する。															
出 土 遺 物	土師器坏・甕が出土した。															
備 考	第414号土壇を切っている。															
ピ ッ ト 計 測 値	番号	長(cm)	短(cm)	深(cm)	番号	長(cm)	短(cm)	深(cm)	番号	長(cm)	短(cm)	深(cm)	番号	長(cm)	短(cm)	深(cm)
	1	未完掘			7	26	24	42	13				19			
	2	34	33	49	8				14				20			
	3	25	20	45	9				15				21			
	4	46	40	51	10				16				22			
	5	46	42	28	11				17				23			
	6	未完掘			12				18				24			

(2) 土坑と出土遺物

第31表 第301号土坑観察表

位 置	D P-27、D Q-27		図	159図
計 測 値	口 径	底 径	深 さ	
	(112) × 100cm	88 × 84cm	23 ~ 64cm	
形 状	平 面 形		断 面 形	
	開口部はほぼ円形で、底面はやや角ばる。		長方形	
壁	北～西の壁はしっかりしている。南西壁はゆるやかに立ち上がり、他は、垂直に立ち上がる。			
底 面	平坦でしまりがある。			
堆 積 土	11層に区分できた。暗褐色を基調とし、中礫浮石の混入が多くみられる。			
出 土 遺 物				
備 考				

第32表 第303号土坑観察表

位 置	E C-37・38、E D-37・38		図	159図
計 測 値	口 径	底 径	深 さ	
	192 × 175cm	197 × 171cm	75 ~ 40cm	
形 状	平 面 形		断 面 形	
	不整形		開口部から全体にゆるやかに内湾する。 西側部分に一段低く壁を穿ったピットがある。	
壁	しまりがある。			
底 面	起伏がみられる。付属のピットはナベ底状を呈する。			
堆 積 土	13層に区分できた。褐色土・暗褐色土・黒褐色土を基調としているが、黄褐色土がベルト状に2本入る。(下部のものは明黄褐色土) 第10層を境として、2期に分かれて堆積したようにみられる。			
出 土 遺 物				
備 考	西壁に130cm × 110cmの袋状のピットが構築されている。			

第33表 第304号土坑観察表

位置	EF-51・52		図	159図
計測値	口 径	底 径	深 さ	
	121×111cm	189×93cm	20～56cm	
形 状	平 面 形		断 面 形	
	円形		逆台形	
壁	かたくてしっかりしている。全体的にはほぼ垂直に立ち上がるが、ゆるやかに立ち上がる部分も見られる。			
底 面	ほぼ平坦で、中央部が壁際よりやや低い。			
堆 積 土	12層に区分できた。ほとんどが暗褐色土を基調とし、黄褐色土（地山の崩壊土と思われる）が混入する。全体的に炭化物を混入し、かたい土とやわらかい土が入り混じっている。人為的な堆積と思われる。			
出土遺物				
備 考				

第34表 第305号土坑観察表

位置	EE-52、EF-52		図	160図
計測値	口 径	底 径	深 さ	
	173×168cm	150×140cm	44～81cm	
形 状	平 面 形		断 面 形	
	円形		長方形	
壁	ほぼ垂直に立ち上がるが、東壁はゆるやかに立ち上がる。かたくしっかりしている。			
底 面	平坦であるが、若干の起伏がある。			
堆 積 土	20層に区分できた。暗褐色土を基調とし、黄褐色土が多く混入する。上層には炭化物の混入が多くみられるが、ほとんど原形を留めていない。一部埋めもどしの様相を呈するが、自然的な堆積状態を示すと思われる。			
出土遺物				
備 考				

第35表 第306号土坑観察表

位 置	E E-57・58		図	160図
計 測 値	口 径	底 径		深 さ
	300×266cm	222×244cm		48~98cm
形 状	平 面 形		断 面 形	
	不整形。北壁上面（確認面）は崩落していると思われる。大きくひろがる。		中位からやや内湾する。	
壁	北壁を除く上部はしっかりとしている。中位下半~下位にかけて地山がもろいために不明瞭な部分がある。立ち上がりはほぼ垂直で、南・北壁は中位より外反する。			
底 面	平坦で、しまりがあり、南側に向かってやや傾斜している。若干の粘性をもつ。			
堆 積 土	30層に区分できた。暗褐色土・褐色土を基調とし、黒褐色土・黄褐色土の混入がみられる。			
出 土 遺 物				
備 考	壁面（北壁）に沿って、底面直上に幅10cm~30cm、厚さ3cm~6cmほどの灰白色粘土が帯状に回っている。壁際では壁と接している。			

第36表 第307号土坑観察表

位 置	E D-47		図	161図
計 測 値	口 径	底 径		深 さ
	143×128cm	112×102cm		34~49cm
形 状	平 面 形		断 面 形	
	円形		中位から上半は外反し、下半は袋状を呈する。	
壁	地山のゆるい部分は崩落してはっきりしない。			
底 面	中央部がやや低く、しまりがある。			
堆 積 土	20層に区分できた。暗褐色土を基調とし、暗茶褐色土等をブロック状に混入する。中央やや北寄りの中位に火山灰と思われる白色土をブロック状に混入する。			
出 土 遺 物				
備 考				

第37表 第308号土坑観察表

位 置	E F-43・44		図	161・193・194図
計 測 値	口 径	底 径	深 さ	
	152×138cm	130×129cm	20～5cm	
形 状	平 面 形		断 面 形	
	やや台形に近い方形		鍋底状	
壁	ゆるやかに立ち上がる。			
底 面	ほぼ平坦で、木根による攪乱のため、起伏が若干みられる			
堆 積 土	15層に区分できた。木根の攪乱が著しいため、全体がしまりに欠ける炭化物、土器の混入が見られる。			
出 土 遺 物	木根による攪乱を著しく受け、土器片（土師器内黒環・甕）が抱き上げられた状態で出土した。			
備 考	削平され、更に本土坑中央に杉の切株が位置していた。			

第38表 第309号土坑観察表

位 置	E B-35・36・37		図	162、195、196図
計 測 値	口 径	底 径	深 さ	
	340×300cm	348×302cm	64～125cm	
形 状	平 面 形		断 面 形	
	方形		フラスコ状	
壁	地山のゆるい部分は若干崩落しているが、概ねしっかりしている。壁の立ち上がりは場所によって異なるが、ほぼ垂直である。開口部から少し下がり若干内に張り出す。			
底 面				
堆 積 土	40層に区分できた。暗褐色土・黒褐色土を基調とし、黄褐色土が帯状に堆積している。上部に焼土・粘土・灰・炭化物の混入した層がみられる。			
出 土 遺 物	土師器杯・甕、須恵器甕、支脚1点、袖珍土器、土製品、鉄器が出土した。			
備 考	中央部に不整形のビット1基、南・北壁に袋状のビット各1基の計3基のビットを検出した。			

第39表 第310号土坑観察表

位 置	E C - 53、E E - 53・54		図	154・197図
計 測 値	口 径	底 径		深 さ
	(218)×200cm	128×134cm		54～65cm
形 状	平 面 形		断 面 形	
	円形		逆台形	
壁	南壁はほぼ垂直であるが、他は50°～60°の傾斜で立ち上がる。			
底 面	ほぼ平坦で、しまりがある。			
堆 積 土	36層に区分できた。黒褐色土・暗褐色土・褐色土を基調とする。			
出 土 遺 物	土師器甕が出土した。			
備 考	第327号住居跡を切っている。			

第40表 第311号土坑観察表

位 置	E C - 49・50		図	161図
計 測 値	口 径	底 径		深 さ
	160×148cm	125×116cm		27～46cm
形 状	平 面 形		断 面 形	
	円形		鍋底状	
壁	ゆるやかに立ち上がり、しっかりしている。木根による攪乱のため、もろい部分がある。			
底 面	木根による攪乱のため、やや起伏がある。しまりもある。			
堆 積 土	19層に区分できた。黒(暗)褐色土と褐色土を基調とするが、壁寄りでバミスの多く混入した層がみられる。覆土に炭化物粒を若干含む。			
出 土 遺 物				
備 考				

第41表 第312号土壇観察表

位 置	E D - 49・50		図	163・197図
計 測 値	口 径	底 径		深 さ
	134×115cm	98×73cm		33～51cm
形 状	平 面 形		断 面 形	
	不整形		鍋底状	
壁	立ち上がりはゆるやかである。木根の攪乱による起伏がみられる。			
底 面	ほぼ平川であるが、やや起伏がある。しまりもある。			
堆 積 土	15層に区分できた。暗褐色土と褐色土を基調とし、壁際で地山の崩壊土と思われるバミス等の混入がみられる。			
出土遺物	土師器裏が出土した。			
備 考				

第42表 第313号土壇観察表

位 置	D S - 45、D T - 45		図	163・197図
計 測 値	口 径	底 径		深 さ
	172×160cm	151×141cm		52～74cm
形 状	平 面 形		断 面 形	
	円形		逆台形	
壁	ほぼ垂直に立ち上がる。一部にもろい部分がみられる。			
底 面	ほぼ平川で、しまりがある。			
堆 積 土	22層に区分できた。			
出土遺物	土師器裏、須恵器裏が出土した。			
備 考	北寄りに円形ピット1基を検出した。(67cm×61cm 深さ80cm～40cm)			

第43表 第314号土坑観察表

位 置	E B-39、E C-39		図	163・197図
計 測 値	口 径		底 径	
	260×255cm		276×270cm	
形 状	平 面 形		断 面 形	
	円形		台形	
壁	内傾しているがしまりがあり、しっかりしている。			
底 面	中央部がやや低いが、平坦である。			
堆 積 土	33層に区分できた。 全体的にしまりに欠ける。			
出 土 遺 物	土師器片 6			
備 考	第115号土坑に切られている。			

第44表 第315号土坑観察表

位 置	E B-39		図	163・197図
計 測 値	口 径		底 径	
	(130)×95cm		122×88cm	
形 状	平 面 形		断 面 形	
	不整形(台形)		部位によって、形状が異なる。	
壁	上部に後世の盛土をかぶっている部分があり、北壁上面ははっきりしない。 しっかりしている。			
底 面	平坦で、しっかりしている。			
堆 積 土	8層に区分できたが、全体的にしまりに欠ける。			
出 土 遺 物	土師器甕が出土した。			
備 考	第114号土坑に切られている。			

第45表 第316号土坑観察表

位 置	E A - 37・38、E B - 37・38		図	164図
計 測 値	口 径	底 径	深 さ	
	160×115cm	156×111cm	8～19cm	
形 状	平 面 形		断 面 形	
	長方形		長方形	
壁	垂直に立ち上がる。			
底 面	平坦である。			
堆 積 土	7層に区分できた。暗褐色土を基調とし、壁崩壊土の黄褐色土等が混入する。			
出 土 遺 物				
備 考	削平されている。			

第46表 第318号土坑観察表

位 置	D Q - 42・43、D R - 42・43		図	164・197図
計 測 値	口 径	底 径	深 さ	
	150×120cm	138×107cm	48～68cm	
形 状	平 面 形		断 面 形	
	長方形		長方形	
壁	しっかりしている。北壁は若干内傾し、他はほぼ垂直である。 部分的に壁にゆがみが見られる。			
底 面	平坦で、しっかりしている。			
堆 積 土	14層に区分できた。しまりのある土が上位に混入する。			
出 土 遺 物	土師器甕、縄文土器片が出土した。			
備 考				

第47表 第319号土坑観察表

位 置	E B-44・45、E C-44・45		図	165・197図
計 測 値	口 径		底 径	
	197×172cm		76×80cm	
形 状	平 面 形		断 面 形	
	不整形		中位に膨らみが見られる。	
壁	地山の硬軟によって、しまりが異なる。			
底 面	ほぼ平坦で、東側部分はやや起伏がある。			
堆 積 土	36層に区分できた。暗褐色土と褐色土を基調とする。 焼土・粘土等を土器の集中部とほぼ同じレベルで検出した。			
出 土 遺 物	床面から、30cm～40cm上の部分に土器（甕）が集中して出土した。 床面から、5cm～10cm上の部分に10個体の貝殻が出土した。			
備 考				

第48表 第320号土坑観察表

位 置	E C-44・45		図	165図
計 測 値	口 径		底 径	
	126×126cm		125×114cm	
形 状	平 面 形		断 面 形	
	円形		部分的に内湾する。	
壁	立ち上がりは一定ではないが、壁はほぼ垂直である。しっかりしている。			
底 面	しっかりしているが、若干の起伏が見られる。中央から南側にハート型の窪みがある。			
堆 積 土	27層に区分できた。			
出 土 遺 物				
備 考				

第49表 第322号土坑観察表

位 置	DR-50、DS-50		図	165・197図
計 測 値	口 径	底 径		深 さ
	186×170cm	178×148cm		65~95cm
形 状	平 面 形		断 面 形	
	円形		長方形	
壁	西半分は、溝状ピットの覆土を壁としているが、掘り込みはしっかりしている。 東側も同様である。立ち上がりは垂直である。			
底 面	平坦で、しっかりしている。西半分は、やわらかい。			
堆 積 土	26層に区分できた。暗褐色土を基調としているが、全体がしまりに欠ける。			
出 土 遺 物	土師器甕が出土した。			
備 考				

第50表 第323号土坑観察表

位 置	EF-36・37 (EG-36・37)		図	166・197図
計 測 値	口 径	底 径		深 さ
	(159)×—cm	(183)×—cm		(64)~(33)cm
形 状	平 面 形		断 面 形	
	円形		フラスコ状を呈する。	
壁				
底 面				
堆 積 土				
出 土 遺 物	土師器杯、甕が出土した。			
備 考	半分が調査区外である。			

第51表 第325号土坑観察表

位 置	(EF-37・38)(EG-37・38)		図	166図
計 測 値	口 径		底 径	
	(117)×—cm		(120)×—cm	
形 状	平 面 形		断 面 形	
			(逆台形)	
壁				
底 面				
堆 積 土				
出 土 遺 物				
備 考	プランを確認できなかった。			

第52表 第327号土坑観察表

位 置	DR-39・40 DS-39・40		図	167・198図
計 測 値	口 径		底 径	
	490×215cm		444×170cm	
形 状	平 面 形		断 面 形	
	不整形		(不整形)	
壁	北半分は、320号住居跡の覆土・床と似ているためはっきりしない。			
底 面	南半分は平坦であるが、北半分は起伏が多い。			
堆 積 土				
出 土 遺 物	土師器坏・甕、須恵甕が出土した。			
備 考	第320号住居跡内に位置し、住居跡・第334・335号土坑を切っている。			

第53表 第330号土坑観察表

位置	DS-40		図	167図
計測値	口 径		底 径	
	115×110cm		129×112cm	
形状	平 面 形		断 面 形	
	円形		フラスコ状	
壁	しまりがある。			
底面	平坦である。			
堆積土	黄褐色土を基調とし、全体的に粘性が強い。			
出土遺物				
備考	第320号住居跡内に位置し、本土坑が新しい			

第54表 第332号土坑観察表

位置	DO-59・60、DP-59・60		図	168・197図
計測値	口 径		底 径	
	246×232cm		240×234cm	
形状	平 面 形		断 面 形	
	円形		長方形	
壁	全体的にはほぼ垂直であるが、東壁は内傾する。			
底面	平坦で、しまりがある。			
堆積土	24層に区分できた。褐色土・暗褐色土を基調としている。			
出土遺物	土師器坏・甕が出土した。			
備考				

第55表 第333号土坑観察表

位 置	D P -56・57		図	152・198図
計 測 値	口 径		底 径	
	(187)×(172)cm		144×176cm	
形 状	平 面 形		断 面 形	
	円形		長方形	
壁	立ち上がりは、ほぼ垂直である。			
底 面	平坦で、しっかりしている。			
堆 積 土	ほぼ自然堆積と思われるが、西側下部は、人為的堆積の可能性もある。			
出 土 遺 物	58片の土師器片が出土した。			
備 考	第325号住居跡を切っている。			

第56表 第334号土坑観察表

位 置	D S -39		図	167・198図
計 測 値	口 径		底 径	
	258×250cm		250×180cm	
形 状	平 面 形		断 面 形	
	不整形		鍋底状	
壁	東～北壁にかけてはしっかりしているが、南～西壁は、第320号住居跡の貼り床と、第334号土坑の覆土の区別がはっきりしないため、不明である。			
底 面	不明瞭である。			
堆 積 土				
出 土 遺 物	土師器片が出土した。			
備 考	第320号住居跡と、第327号土坑に、また、新しい時期の穴によって切られている。			

第57表 第335号土壇観察表

位置	DS-40、DR-40		図	167図
計測値	口 径		底 径	
	140×135cm		98×98cm	
形状	平 面 形		断 面 形	
	不整形		鍋底状	
壁	不明瞭である。			
底面	不明瞭である。			
堆積土				
出土遺物				
備考	第320号住居跡・第327号土壇に切られている。 東南コーナーがやや窪む。			

第58表 第336号土壇観察表

位置	DP-54、DQ-54		図	168・198図
計測値	口 径		底 径	
	(240)×226cm		220×190cm	
形状	平 面 形		断 面 形	
	円形		鍋底状	
壁	南～西壁にかけては立ち上がりが垂直で、しっかりしている。 北壁は、ゆるやかに立ち上がる。東壁は不明である。			
底面	ほぼ平坦である。			
堆積土	ブロック状に堆積している部分が多い。			
出土遺物	土師器装が出土した。			
備考	性格不明の落ち込みを切っている。 プラン確認時においても、明確なプランは確認し得ず、2～3基の土壇の切り合いと思われた。セクションに切り込みが確認されたために、本土壇のプランが推定された。			

第59表 第401号土坑観察表

位 置	DN-60、DO-60		図	169・198図
計 測 値	口 径		底 径	
	185×114cm		172×136cm	
形 状	平 面 形		断 面 形	
	ゆがんだ楕円形である。		長軸断面はクライ状 短軸断面は袋状である。	
壁	上部では壁面の剥落が著しい。			
底 面	部分的に凹凸がある。			
堆 積 土	9層に区分できた。暗褐色土を基調とするが、全体として八戸火山灰を多量に混入する。			
出土遺物	土師器杯・甕、須恵器袋が出土した。			
備 考				

第60表 第402号土坑観察表

位 置	DN-55、DN-56		図	169図
計 測 値	口 径		底 径	
	80×78cm		72×68cm	
形 状	平 面 形		断 面 形	
	円形である。		クライ状である。	
壁	ほぼ垂直に立ち上がる			
底 面	ほぼ平田である。			
堆 積 土	3層に区分できた。暗褐色土を基調とし、八戸火山灰を混入する。			
出土遺物				
備 考				

第61表 第403号土坑観察表

位 置	DN-56		図	169図
計 測 値	口 径	底 径		深 さ
	64×62cm	58×50cm		14~18cm
形 状	平 面 形		断 面 形	
	ゆがんだ円形である。		タライ状である。	
壁	全体的に壁面の剥落が著しい。			
底 面	全体的にかなり凹凸がある。			
堆 積 土	2層に区分できた。暗褐色土を基調とし、八戸火山灰を混入する。			
出土遺物				
備 考				

第62表 第404号土坑観察表

位 置	DN-55、DN-56、DO-55、DO-56		図	169図
計 測 値	口 径	底 径		深 さ
	96×80cm	88×60cm		24~31cm
形 状	平 面 形		断 面 形	
	ゆがんだ楕円形である。		タライ状である。	
壁	全体的に壁面の剥落が著しい。			
底 面	全体的に凹凸が著しい。			
堆 積 土	2層に区分できた。褐色土を基調とし、八戸火山灰を混入する。			
出土遺物				
備 考	第405号土坑を切っている。			

第63表 第405号土坑観察表

位 置	DN-55、DO-55		図	169図
計 測 値	口 径		底 径	
	75×70cm		62×50cm	
形 状	平 面 形		断 面 形	
	ゆがんだ円形である。		タライ状である。	
壁	部分的に壁面の剥落が著しい。			
底 面	全体にかなり凹凸がある。			
堆 積 土	4層に区分できた。褐色土を基調とし、八戸火山灰を混入する。			
出 土 遺 物				
備 考	第404号土坑に切られている。			

第64表 第406号土坑観察表

位 置	DN-55		図	169図
計 測 値	口 径		底 径	
	76×70cm		60×58cm	
形 状	平 面 形		断 面 形	
	ゆがんだ円形である。		タライ状である。	
壁	全体的に壁面の剥落が著しい。			
底 面	全体に凹凸が著しい。			
堆 積 土	3層に区分できた。褐色土を基調とし、八戸火山灰を混入する。			
出 土 遺 物				
備 考				

第65表 第407号土坑観察表

位置	DN-55		図	169図
計測値	口径	底径		深さ
	71×63cm	58×44cm		10~14cm
形状	平面形		断面形	
	ゆがんだ楕円形である。		タライ状である。	
壁	全体的に壁面の剥落が著しい。			
底面	全体に軽い凹凸がある。			
堆積土	褐色土を基調とし、八戸火山灰を混入する。			
出土遺物				
備考				

第66表 第408号土坑観察表

位置	DM-55、DM-56		図	169・198図
計測値	口径	底径		深さ
	134×104cm	114×84cm		15~24cm
形状	平面形		断面形	
	ゆがんだ楕円形である。		タライ状である。	
壁	全体的に壁面の剥落が著しい。			
底面	全体に大きな凹凸がある。			
堆積土	褐色土を基調とし、八戸火山灰を混入する。			
出土遺物	土師器甕が出土した。			
備考				

第67表 第409号土坑観察表

位 置	DM-53		図	170図
計 測 値	口 径	底 径		深 さ
	70×64cm	64×61cm		24～26cm
形 状	平 面 形		断 面 形	
	ゆがんだ円形である。		タライ状である。	
壁	垂直に近い立ち上がりである。			
底 面	ほぼ平坦である。			
堆 積 土	3層に区分できた。暗褐色土を基調とし、八戸火山灰を混入する。			
出 土 遺 物				
備 考				

第68表 第410号土坑観察表

位 置	DN-53、DO-53		図	170図
計 測 値	口 径	底 径		深 さ
	132×96cm	110×75cm		34～37cm
形 状	平 面 形		断 面 形	
	ゆがんだ楕円形である。		鍋底状である。	
壁	部分的に壁面の剥落が著しい。			
底 面	全体に軽い凹凸がある。			
堆 積 土				
出 土 遺 物				
備 考				

第69表 第411号土坑観察表

位置	D O -51、D P -51		図	170図
計測値	口 径	底 径	深 さ	
	158×154cm	168×148cm	34~46cm	
形 状	平 面 形		断 面 形	
	ゆがんだ円形である。		部分的に袋状となる。	
壁	部分的に壁面の剥落が著しい。			
底 面	全体が南に傾斜し、凹凸がある。			
堆 積 土	15層に区分できた。暗褐色土を基調とし、八戸火山灰を多量に混入する。			
出土遺物				
備 考				

第70表 第412号土坑観察表

位置	D N -51、D N -52		図	170図
計測値	口 径	底 径	深 さ	
	176×170cm	206×190cm	96~98cm	
形 状	平 面 形		断 面 形	
	ゆがんだ円形である。		袋状である。	
壁	上部で壁面の剥落が著しい。			
底 面	ほぼ平坦である。			
堆 積 土	16層に区分できた。暗褐色土を基調とし、八戸火山灰を混入する。			
出土遺物	炭化した種子（ヒエ？）が出土した。			
備 考				

第71表 第413号土坑観察表

位 置	DN-51、DN-52、DO-51、DO-52		図	171・198図
計 測 値	口 径	底 径	深 さ	
	—×—cm	—×—cm	—～—cm	
形 状	平 面 形		断 面 形	
	円形又は楕円形と考えられる。 調査区外の南半部は不明。		袋状である。	
壁	上部で壁面の剥落が著しい。			
底 面	貼り底であるが全体に凹凸が著しい。			
堆 積 土	14層に区分できた。褐色土を基調とし、八戸火山灰を多量に混入する。			
出土遺物	土師器装が出土した。			
備 考				

第72表 第414号土坑観察表

位 置	DM-60、DN-60		図	171図
計 測 値	口 径	底 径	深 さ	
	136×126cm	123×110cm	13～84cm	
形 状	平 面 形		断 面 形	
	ゆかんだ方形である。		クライ状である。	
壁	遺存する部分では、垂直に近い立ち上がりである。			
底 面	全体に軽い凹凸がある。			
堆 積 土	6層に区分できた。暗褐色土を基調とし、八戸火山灰を混入する。			
出土遺物				
備 考	第401号竪穴住居跡に切られている。			

第73表 第415号土壇観察表

位置	DN-60、DN-61		図	171図
計測値	口 径		底 径	
	-×-cm		-×-cm	
形状	平 面 形		断 面 形	
	形状	円形又は楕円形と考えられる。		筒状である。
壁	部分的に壁面の剥落が著しい。			
底 面	ほぼ平坦である。			
堆 積 土	10層に区分できた。暗褐色土を基調とし、八戸火山灰を混入する。			
出土遺物				
備 考	第401号竪穴住居跡に切られている。			

第74表 第416号土壇観察表

位置	DM-61		図	171図
計測値	口 径		底 径	
	-×-cm		-×-cm	
形状	平 面 形		断 面 形	
	形状	円形又は楕円形と考えられる。		タライ状である。
壁	全体的に壁面の剥落が著しい。			
底 面	全体に凹凸がある。			
堆 積 土	4層に区分できた。黒褐色土を基調とし、八戸火山灰を混入する。 1層は、第401号竪穴住居跡の貼り床の可能性が有る。			
出土遺物				
備 考	第401号竪穴住居跡に切られている。			

第75表 第417号土坑観察表

位 置	E I -46、E J -46	図	172・198図
計 測 値	口 径	底 径	深 さ
	183×180cm	204×200cm	58～80cm
形 状	平 面 形		断 面 形
	円形である。		袋状である。
壁	全体的に壁面の剥落が著しい。		
底 面	部分的に深掘りされ、凹凸が激しい。		
堆 積 土	19層に区分できた。褐色土を基調とし、八戸火山灰を多量に混入する。		
出 土 遺 物	土師器甕が出土した。		
備 考			

第76表 第418号土坑観察表

位 置	E K -45	図	172・198図
計 測 値	口 径	底 径	深 さ
	108×102cm	86×76cm	40～52cm
形 状	平 面 形		断 面 形
	円形である。		クライ状である。
壁	部分的に壁面の剥落が著しい。		
底 面	ほぼ平坦である。		
堆 積 土	10層に区分できた。褐色土を基調とし、八戸火山灰を多量に混入する。		
出 土 遺 物	土師器甕が出土した。		
備 考			

第77表 第419号土坑観察表

位置	EJ-44		図	172図
計測値	口 径		底 径	
	--×--cm		--×--cm	
形状	平 面 形		断 面 形	
	円形又は楕円形と考えられる。 調査区外の南東部は不明。		袋状である。	
壁	壁面の剥落が著しい。			
底面	凹凸がある。			
堆積土	18層に区分できた。暗褐色土を基調とし、八戸火山灰を混入する。			
出土遺物				
備考	第403号竪穴住居跡に切られている。			

第78表 第420号土坑観察表

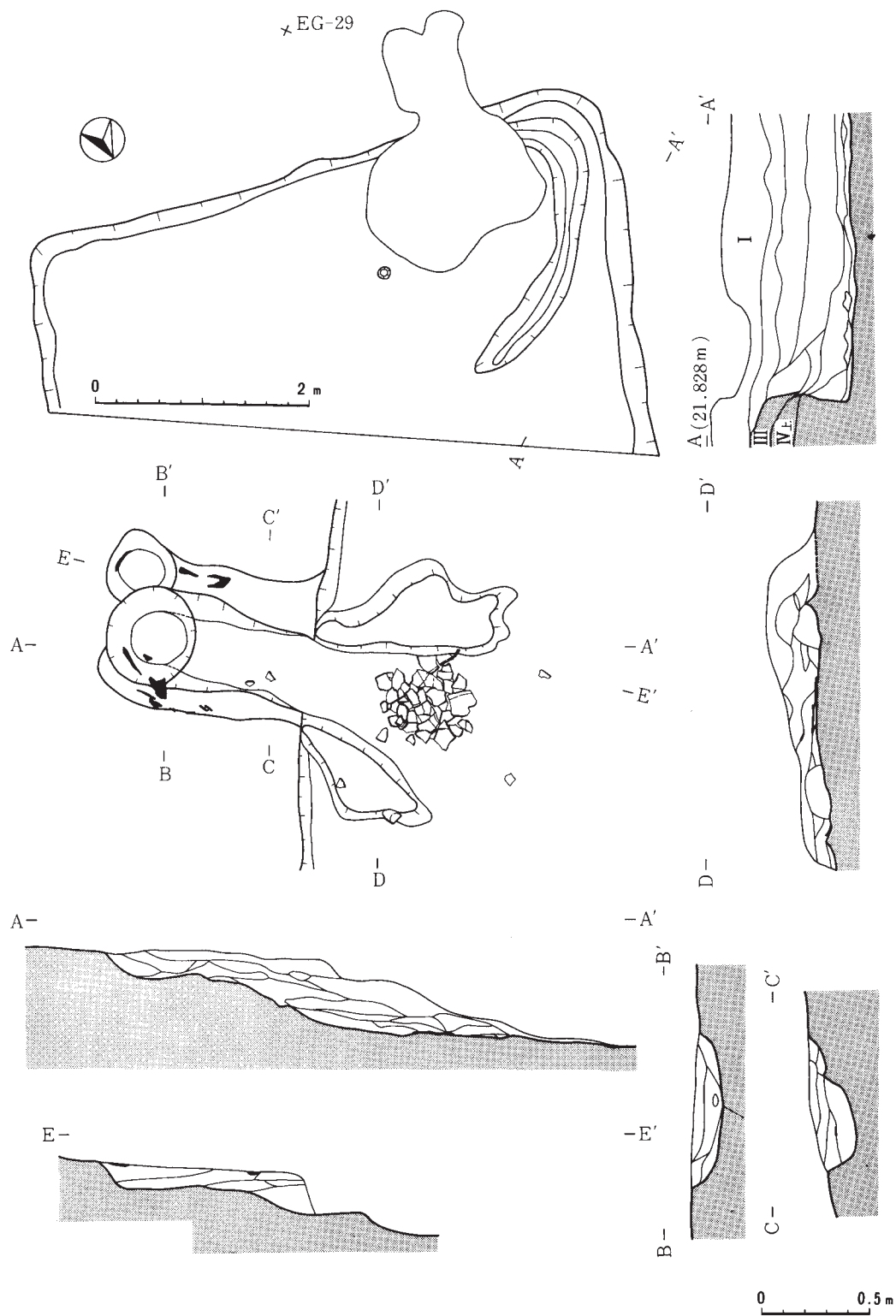
位置	DO-55		図	172図
計測値	口 径		底 径	
	--×--cm		--×--cm	
形状	平 面 形		断 面 形	
	ゆがんだ長方形と考えられる。		不明である。	
壁	若干の立ち上がりを確認した。			
底面	全体として北東に傾斜し、大きな凹凸がある。			
堆積土	底面直上には、黄褐色土が堆積する。			
出土遺物				
備考	第421号土坑に切られている。			

第79表 第421号土坑観察表

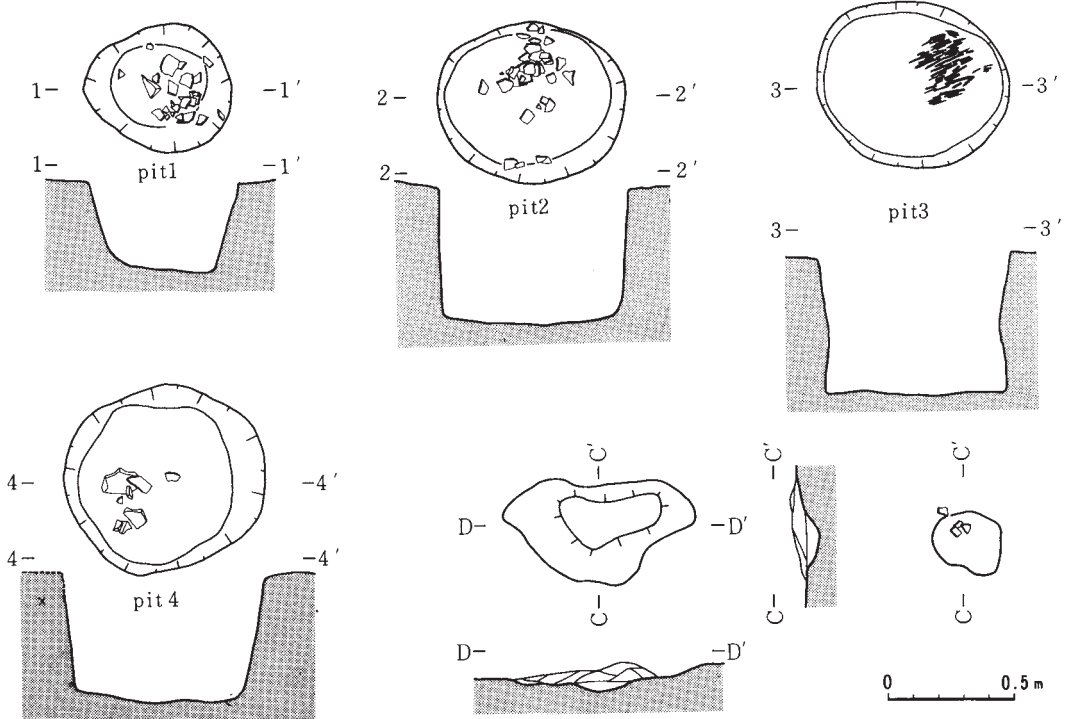
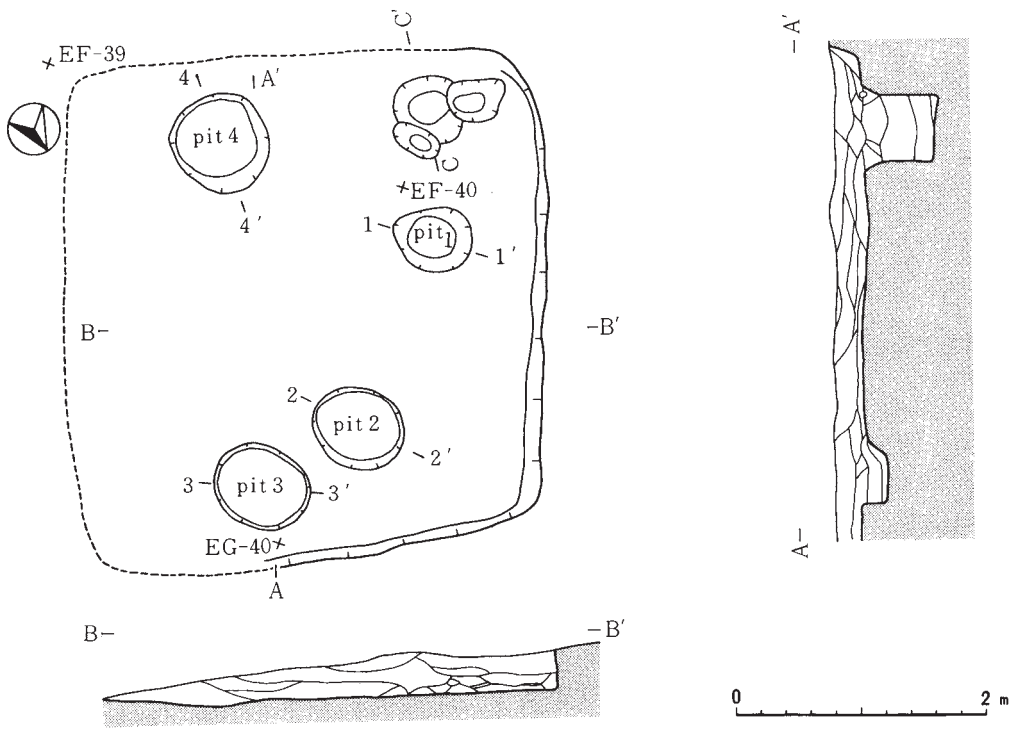
位 置	D O -55、D O -56、D P -55、D P -56	図	172図
計 測 値	口 径	底 径	深 さ
	298×166cm	270×140cm	7～35cm
形 状	平 面 形	断 面 形	
	ゆがんだ長方形である。	鍋底状である。	
壁	全体的に壁面の剥落が著しい。		
底 面	全体として、南西に傾斜し、部分的に凹凸がある。		
堆 積 土	2層に区分できた。黒褐色土を基調とし、八戸火山灰を混入する。		
出 土 遺 物			
備 考	第420号土坑を切っている。		

第80表 第422号土坑観察表

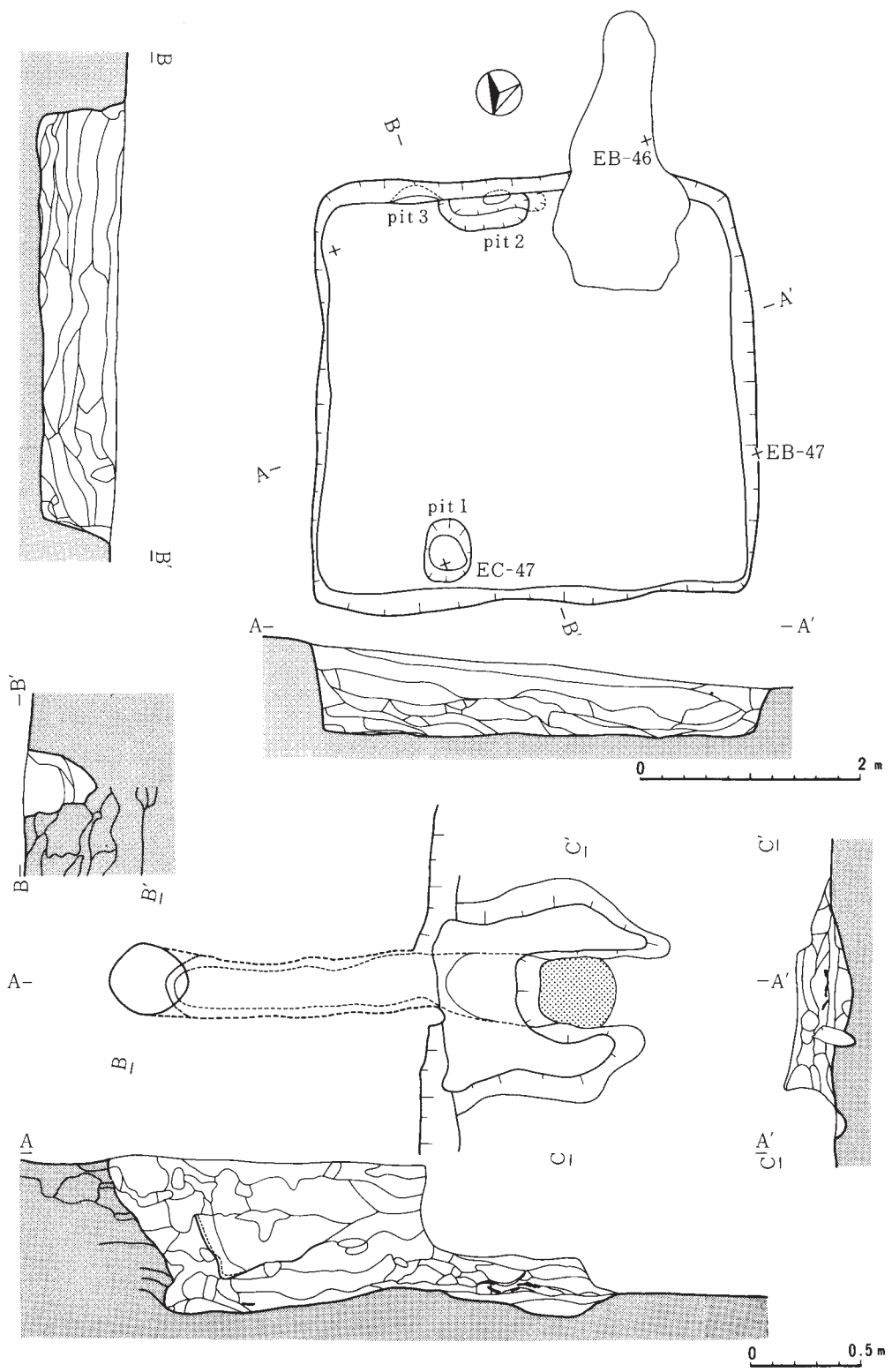
位 置	D O -56	図	172図
計 測 値	口 径	底 径	深 さ
	144×129cm	118×109cm	18～25cm
形 状	平 面 形	断 面 形	
	ゆがんだ円形である。	クライ状である。	
壁	部分的に壁面の剥落が著しい。		
底 面	ほぼ平坦である。		
堆 積 土	2層に区分できた。暗褐色土を基調とし、八戸火山灰を混入する。		
出 土 遺 物			
備 考			



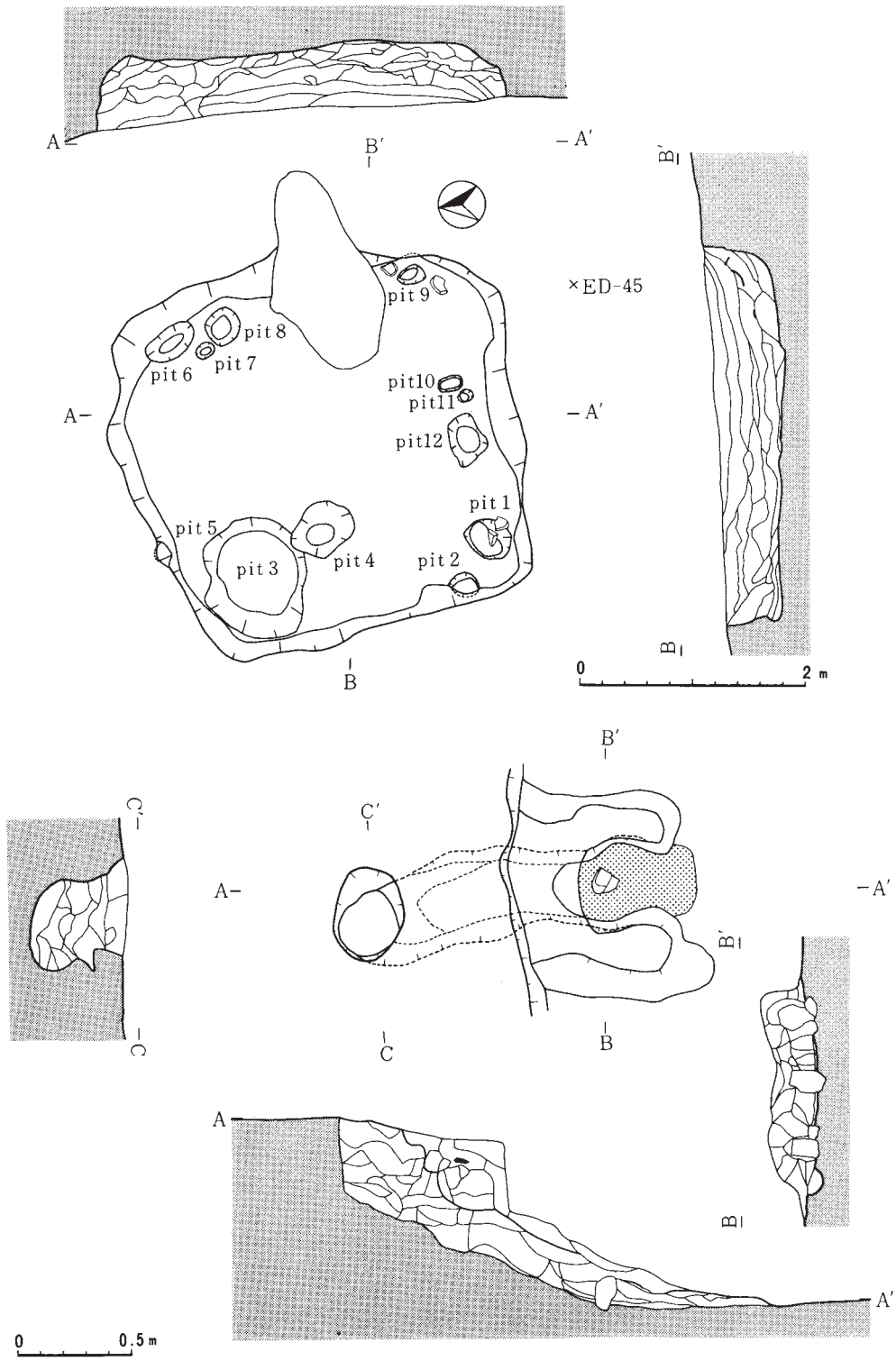
第139图 第301号竖穴住居跡



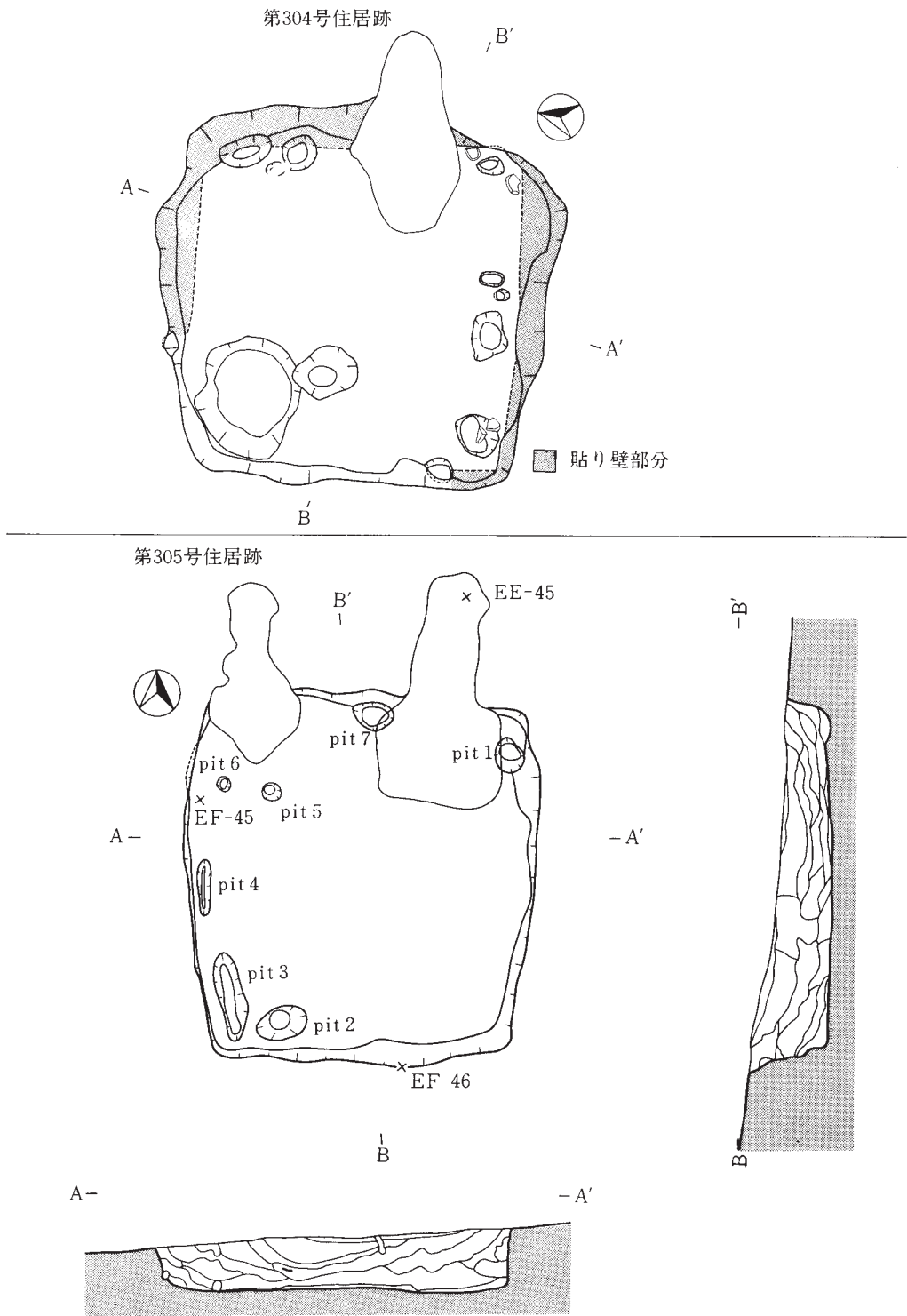
第140图 第302号竖穴住居跡



第141图 第303号竖穴住居跡

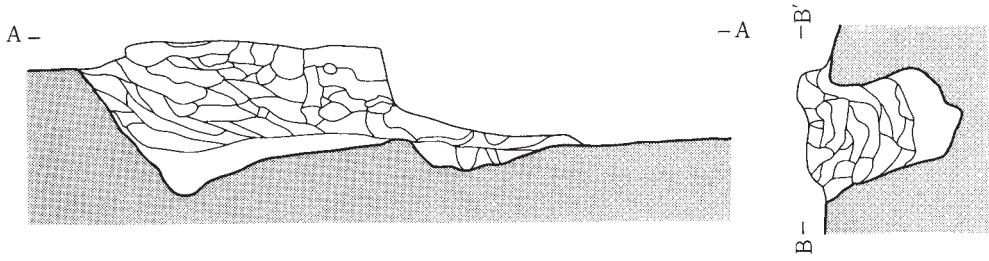
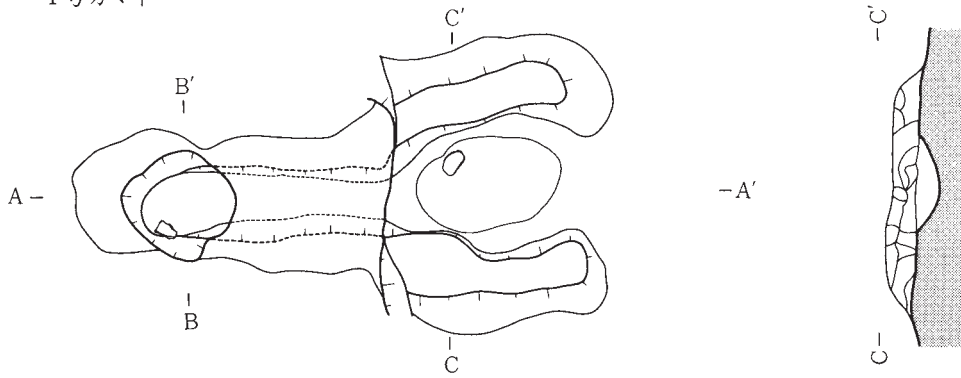


第142图 第304号竖穴住居跡

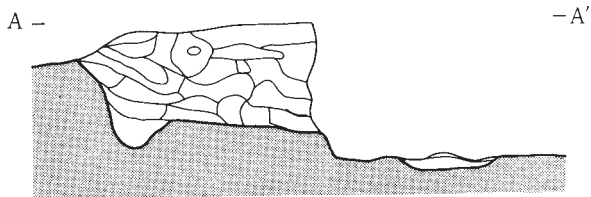
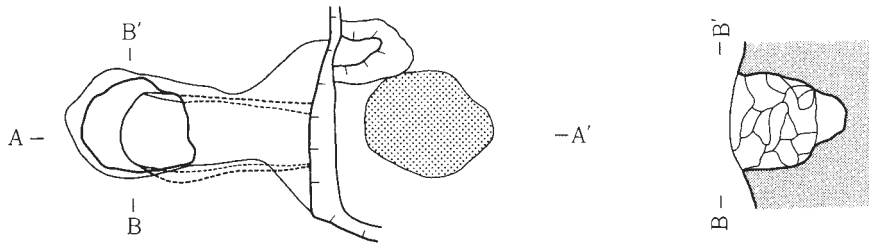


第143図 第304・305号竪穴住居跡

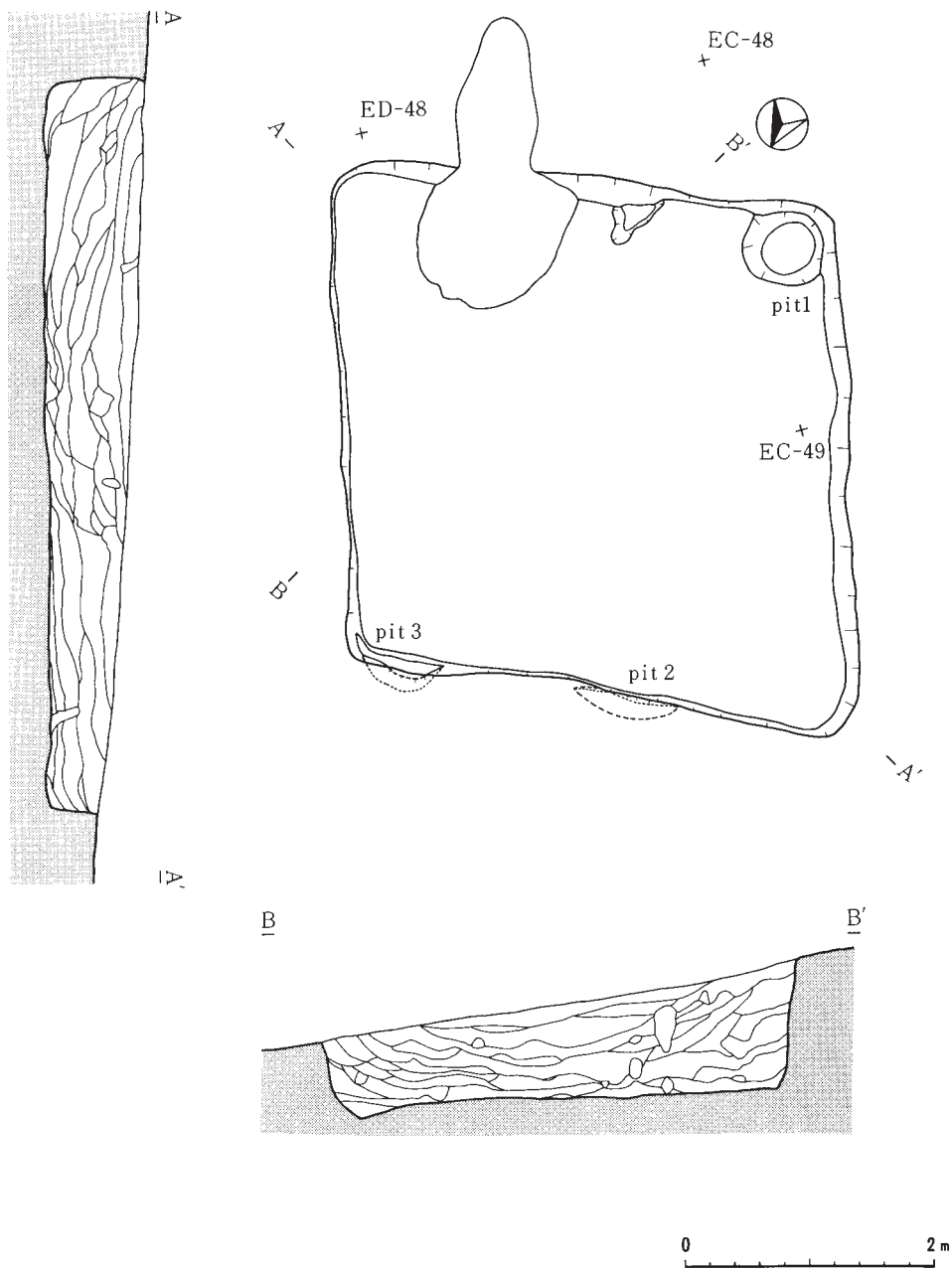
1号カマド



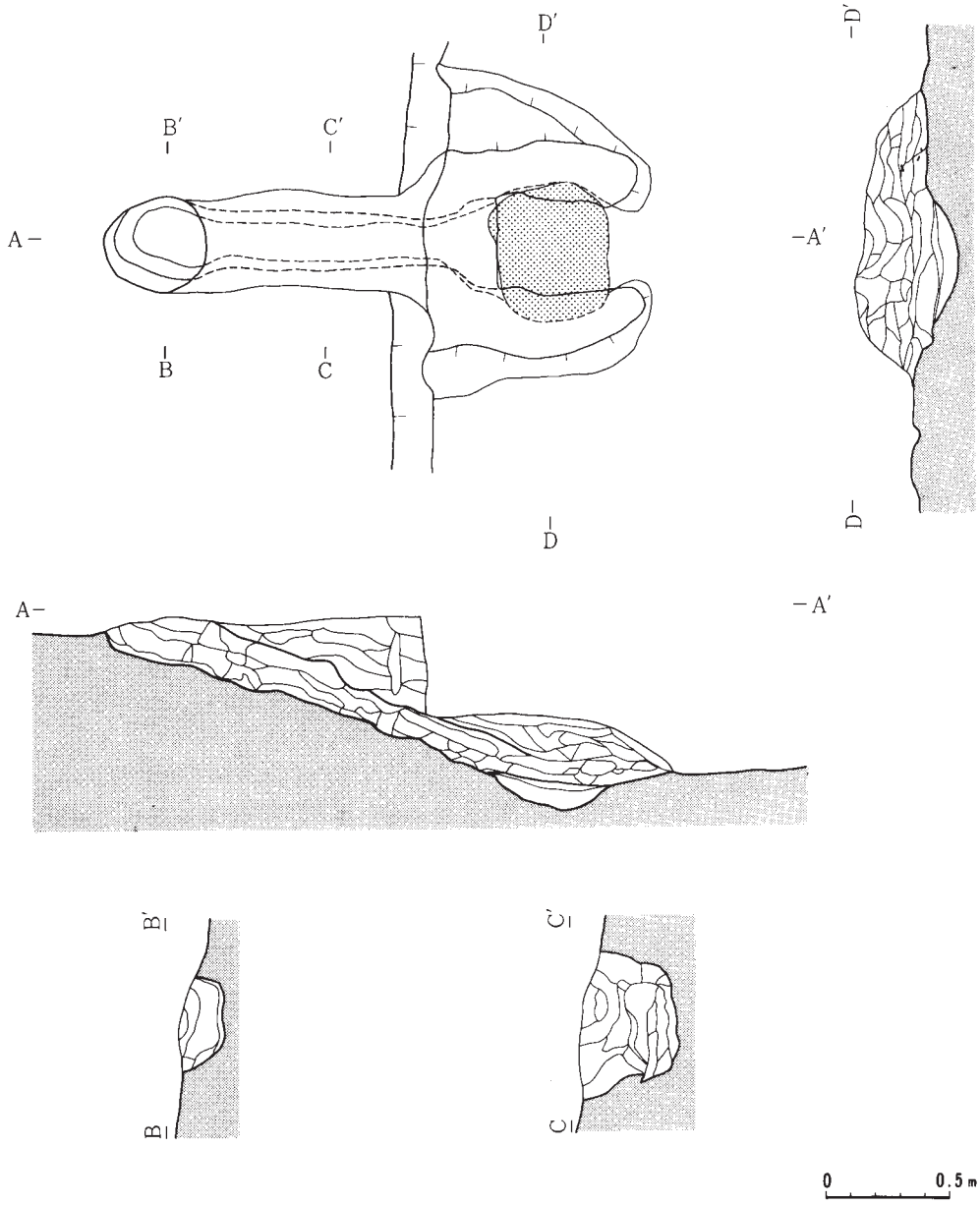
2号カマド



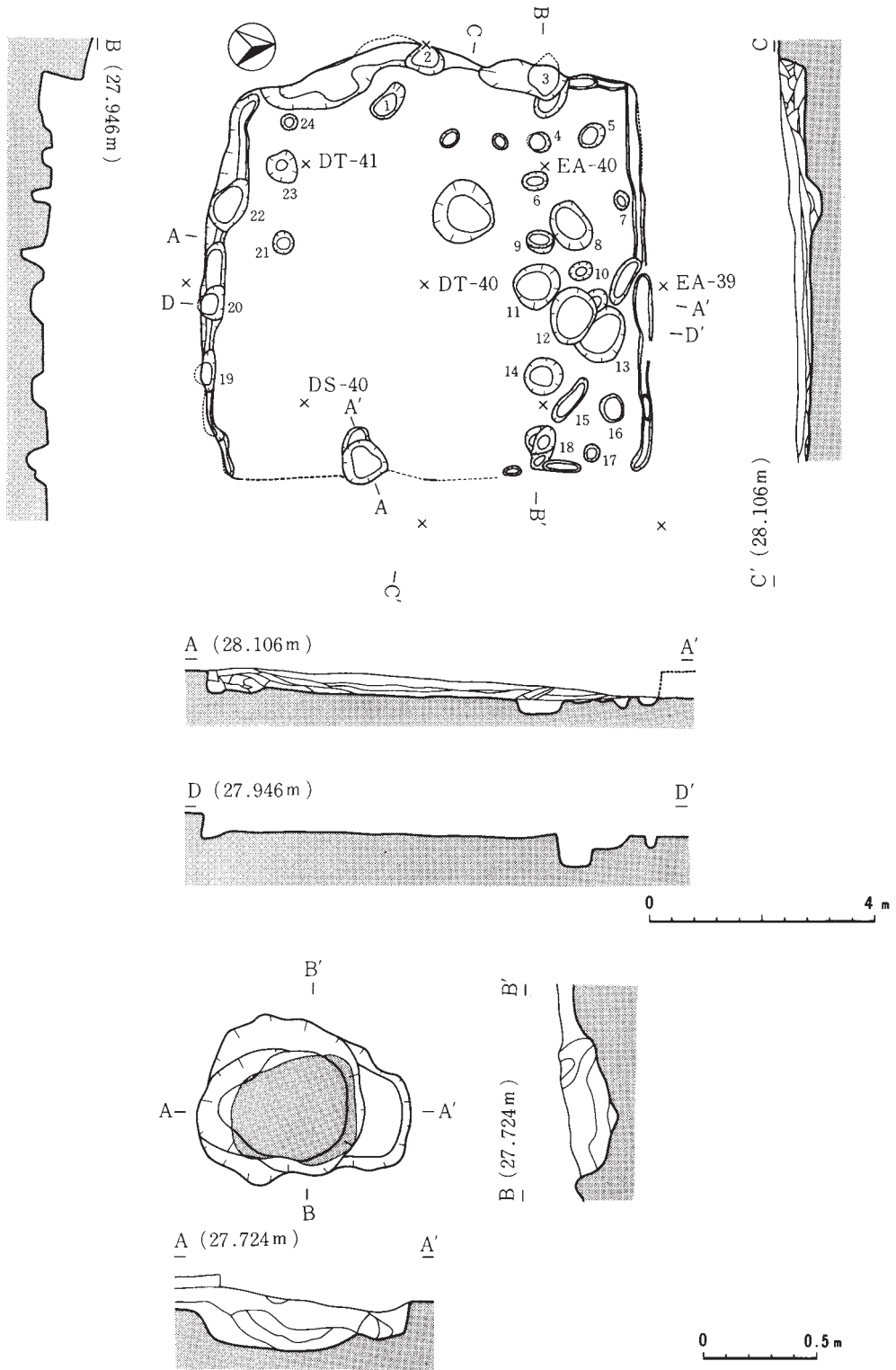
第144図 第305号竪穴住居跡



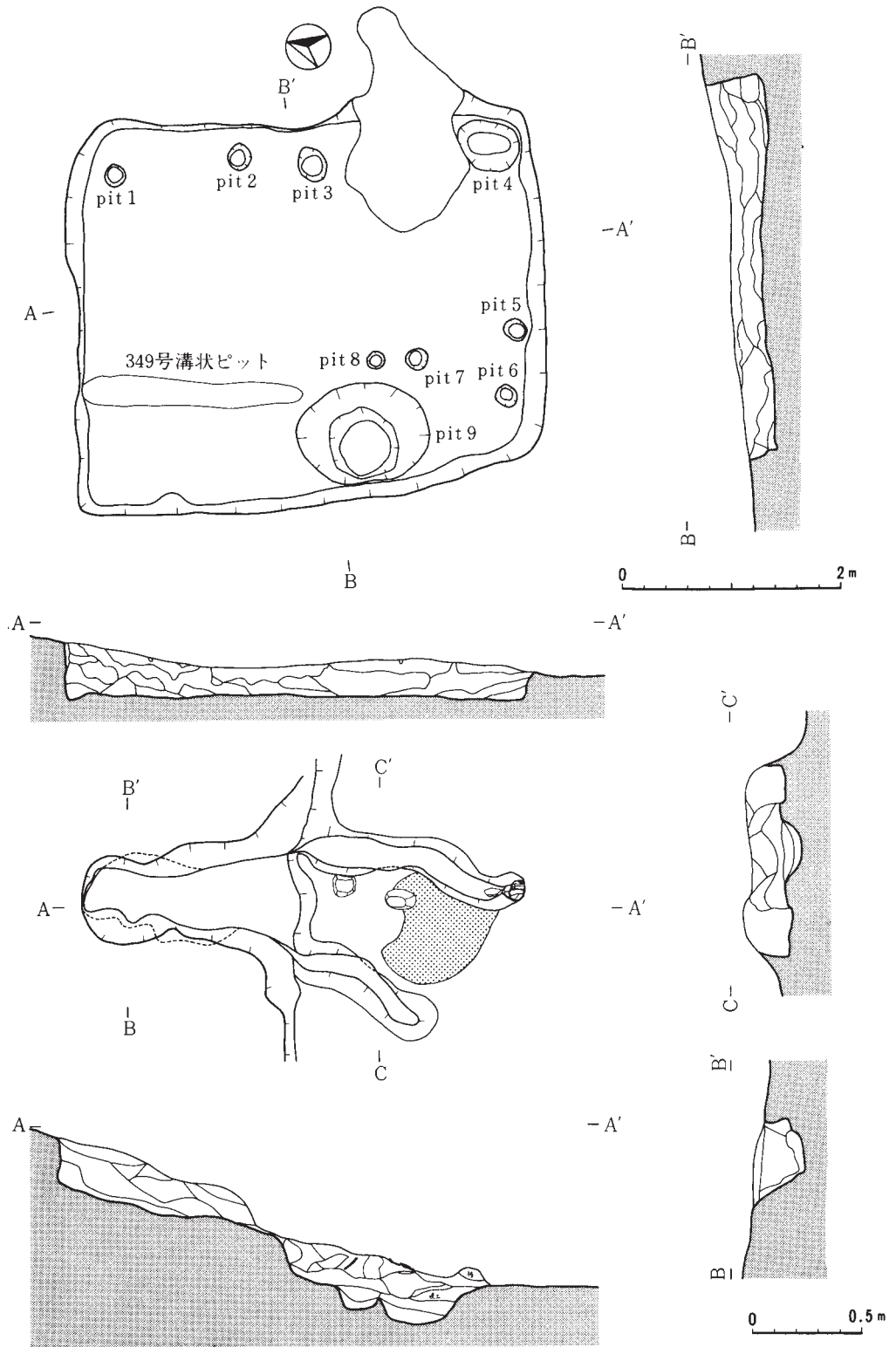
第145図 第306号竖穴住居跡



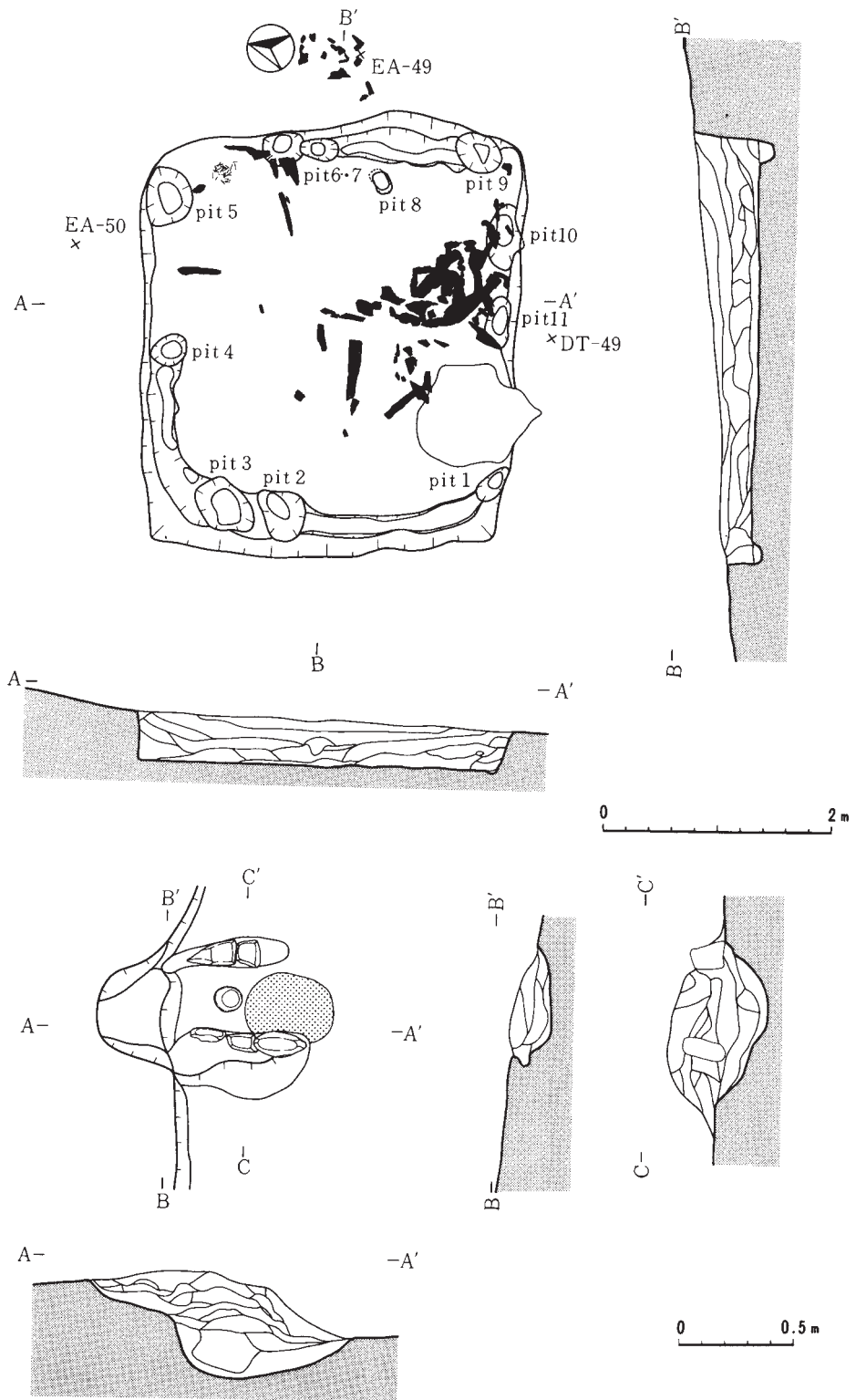
第146图 第306号竖穴住居跡



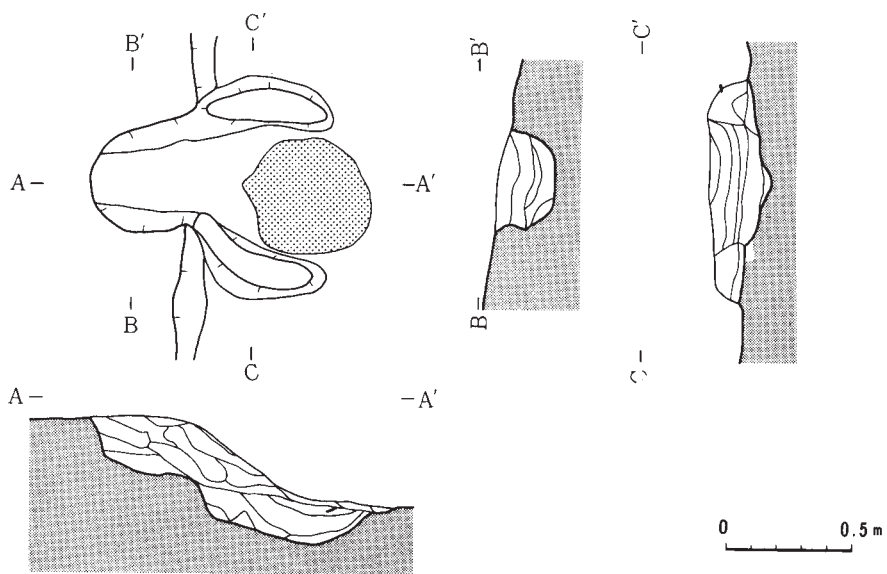
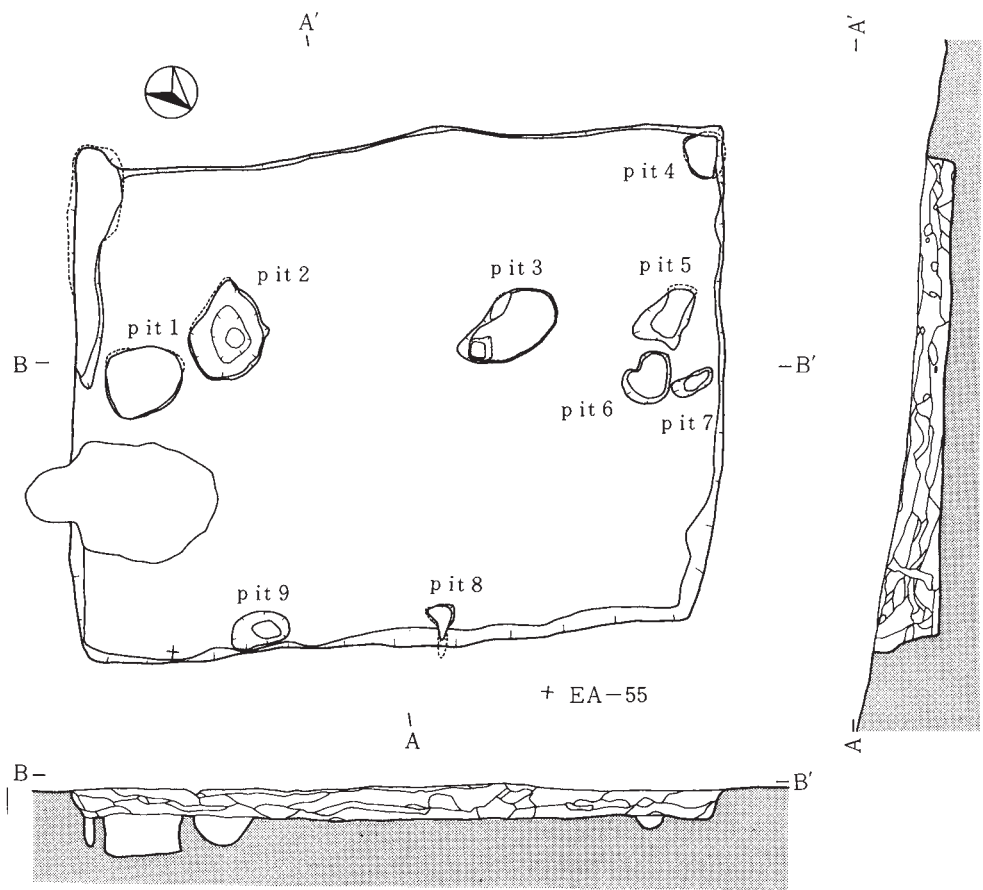
第147図 第320号豎穴住居跡



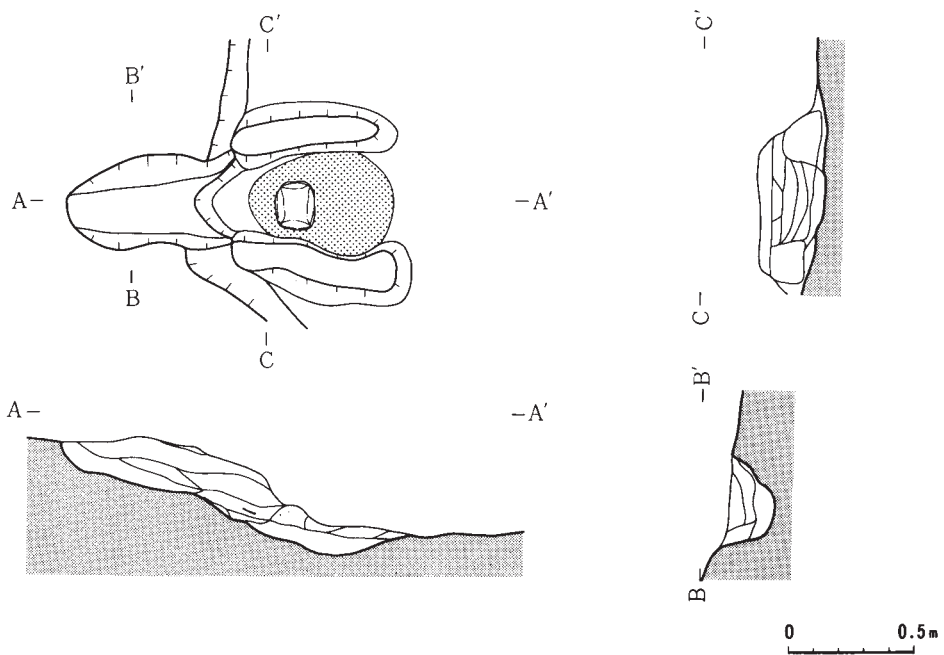
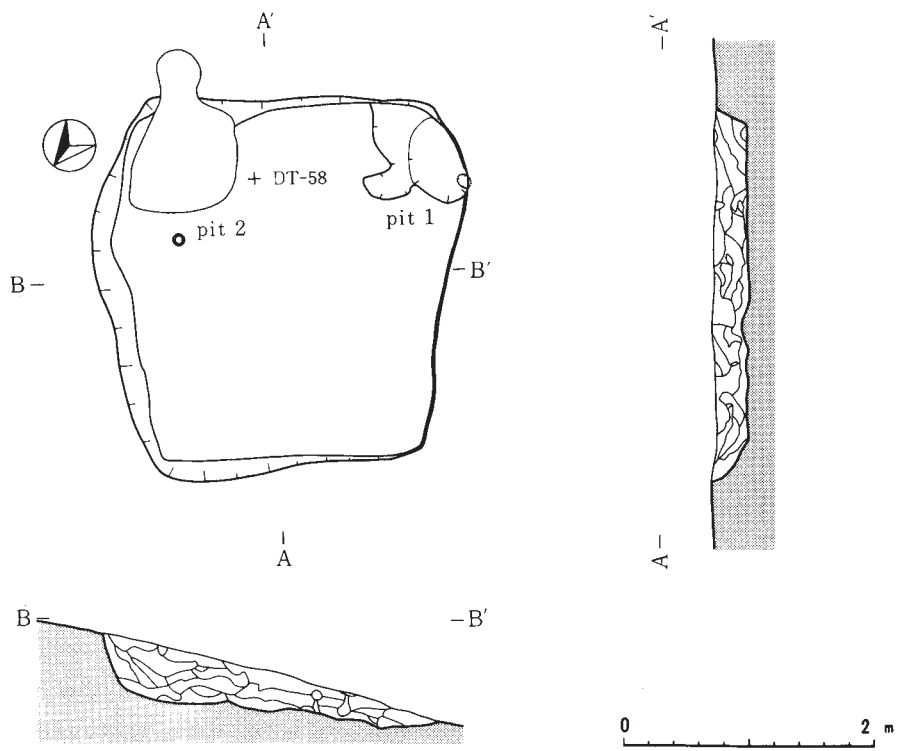
第148図 第321号竪穴住居跡



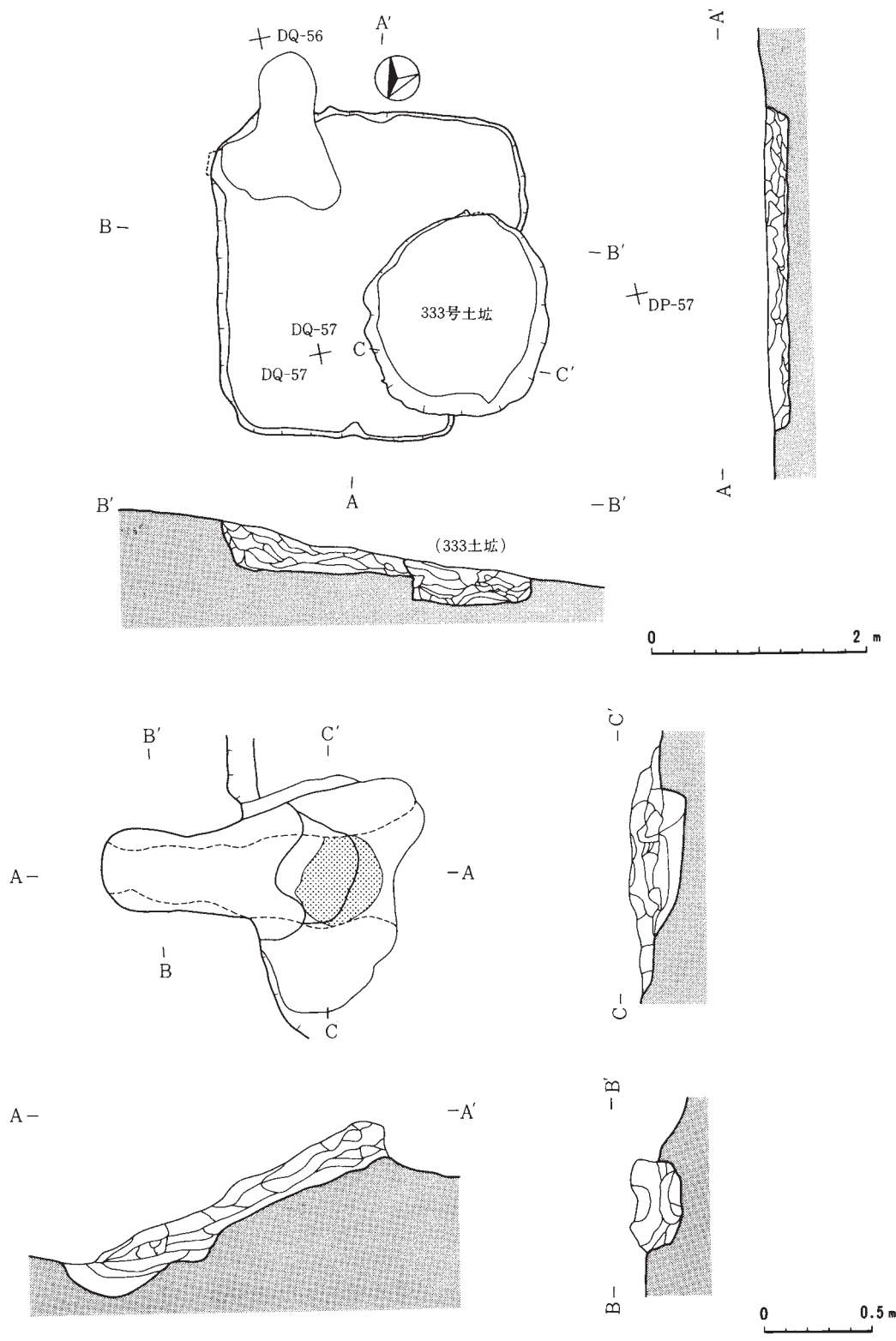
第149图 第322号竖穴住居跡



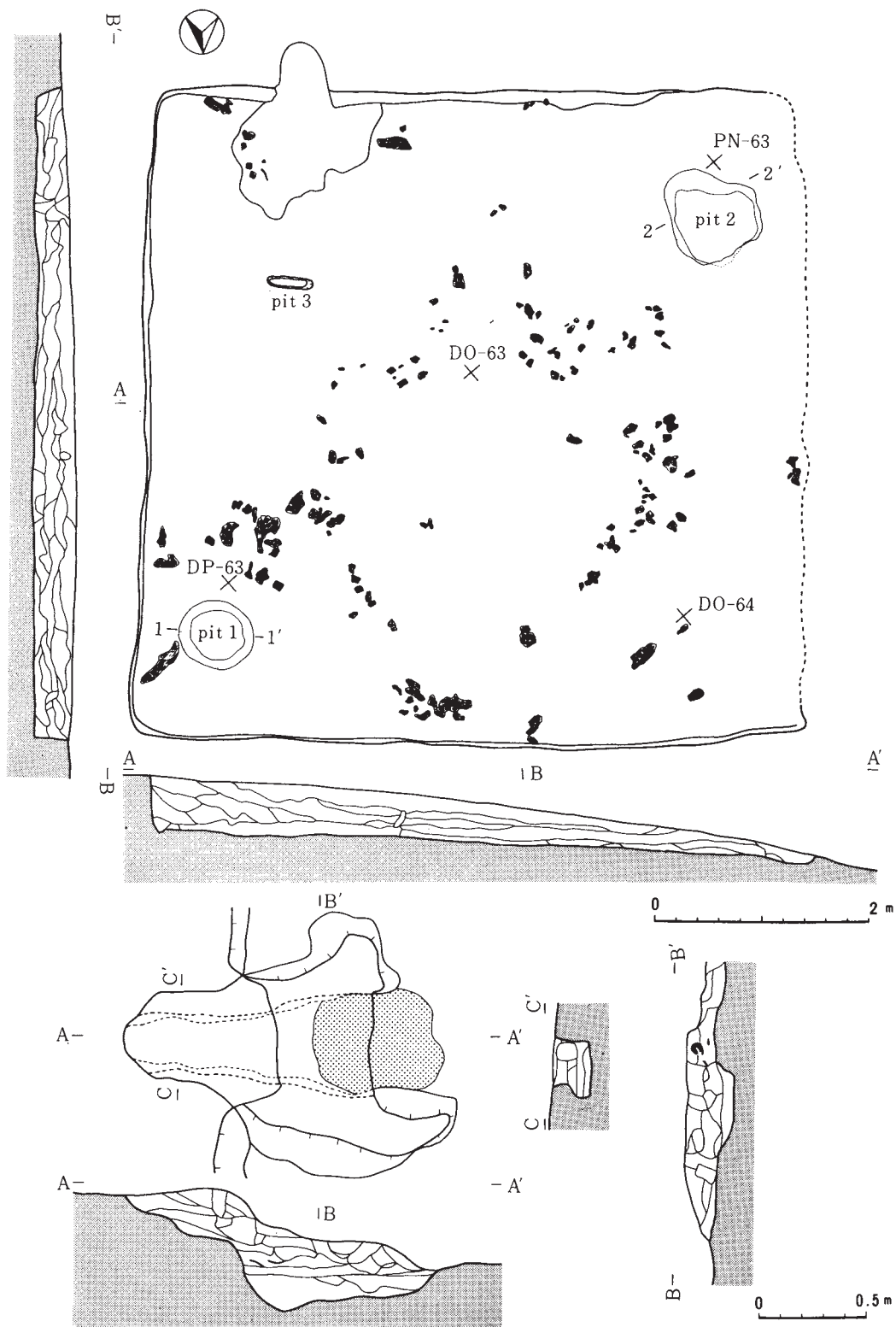
第150图 第323号竖穴住居跡



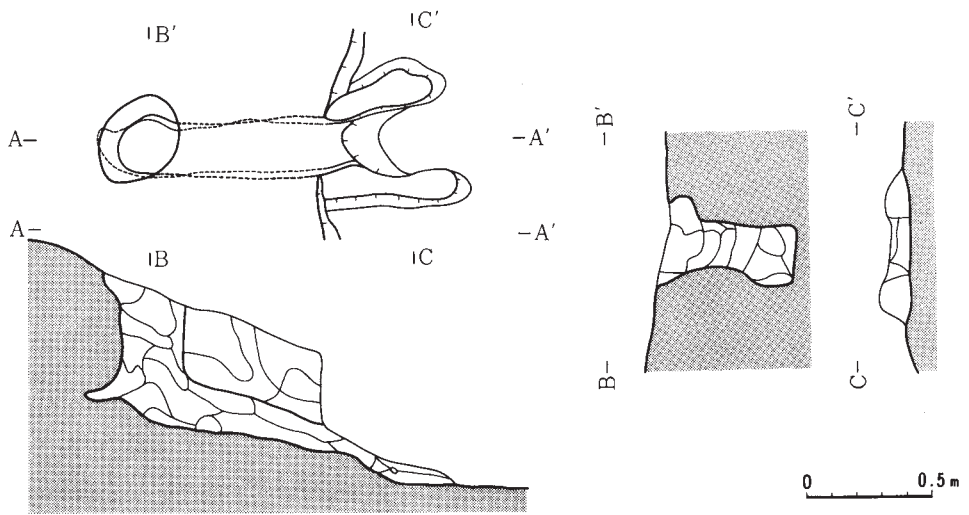
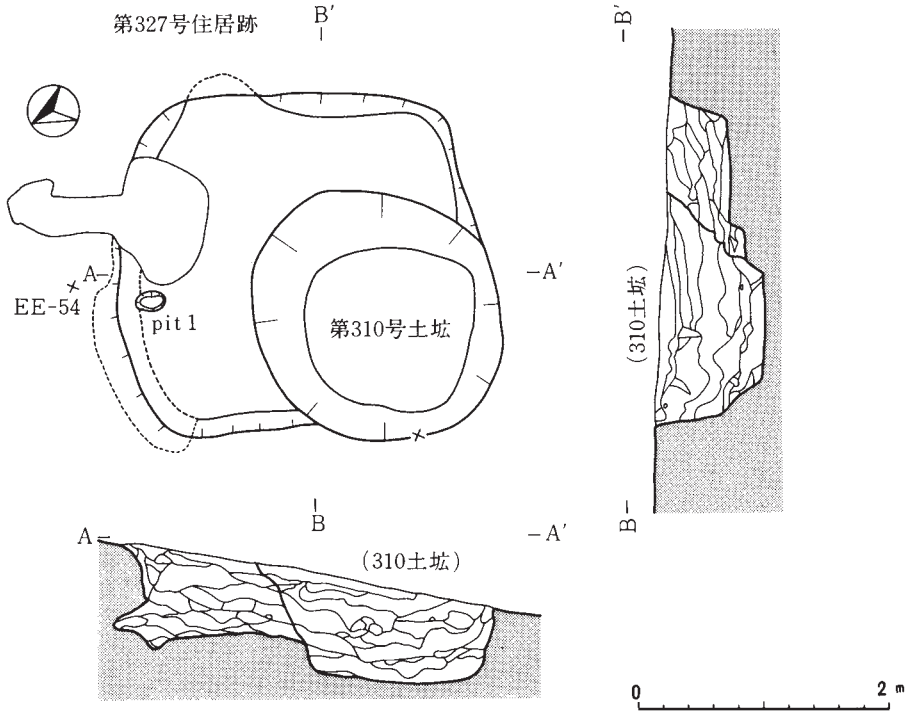
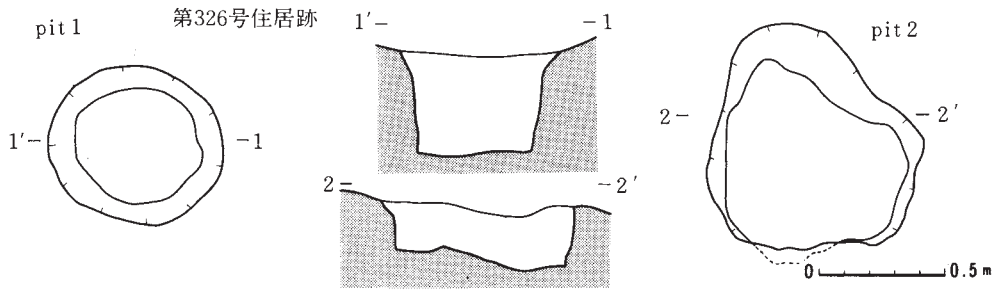
第151图 第324号竖穴住居跡



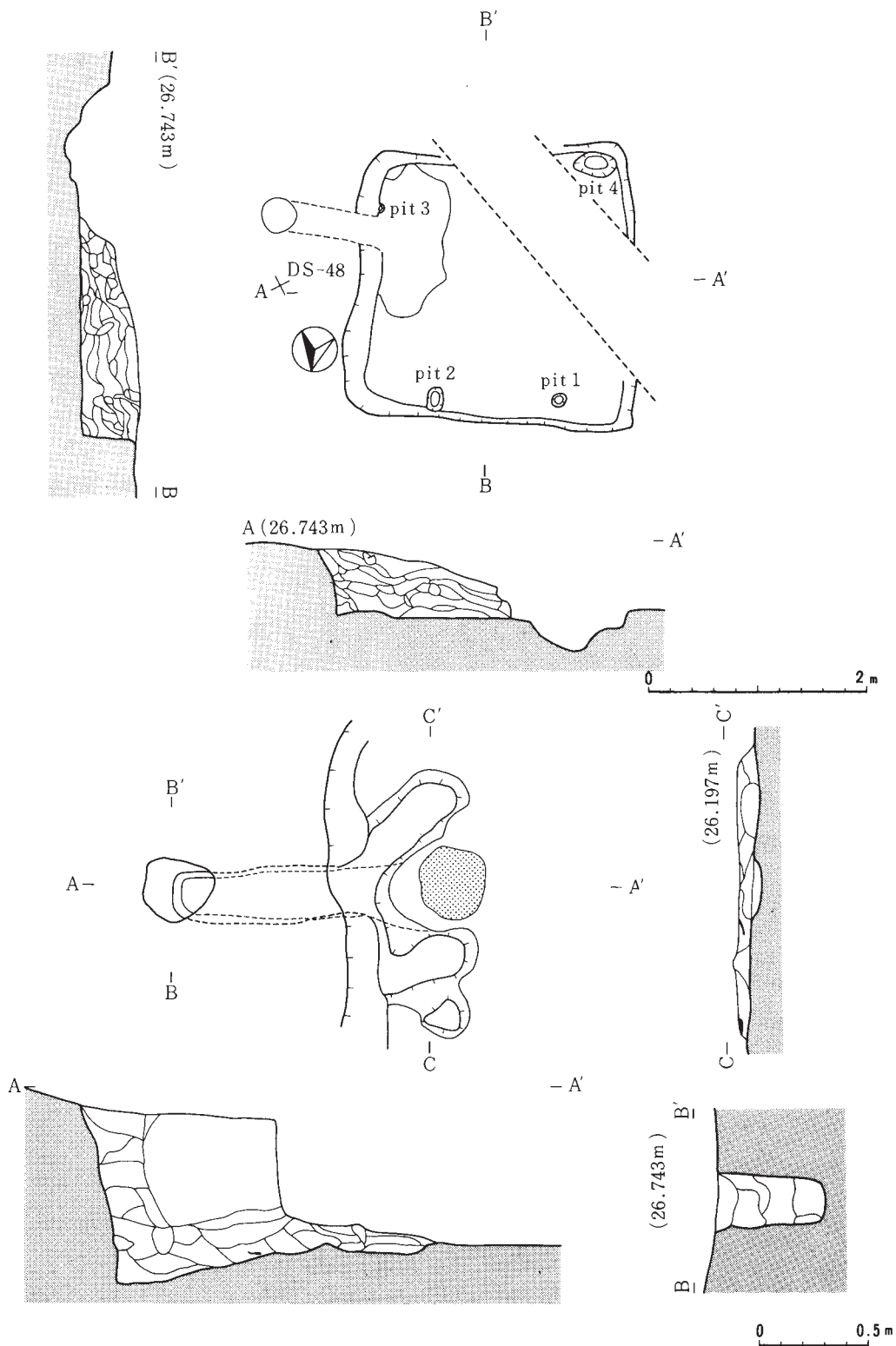
第152图 第325号竖穴住居跡



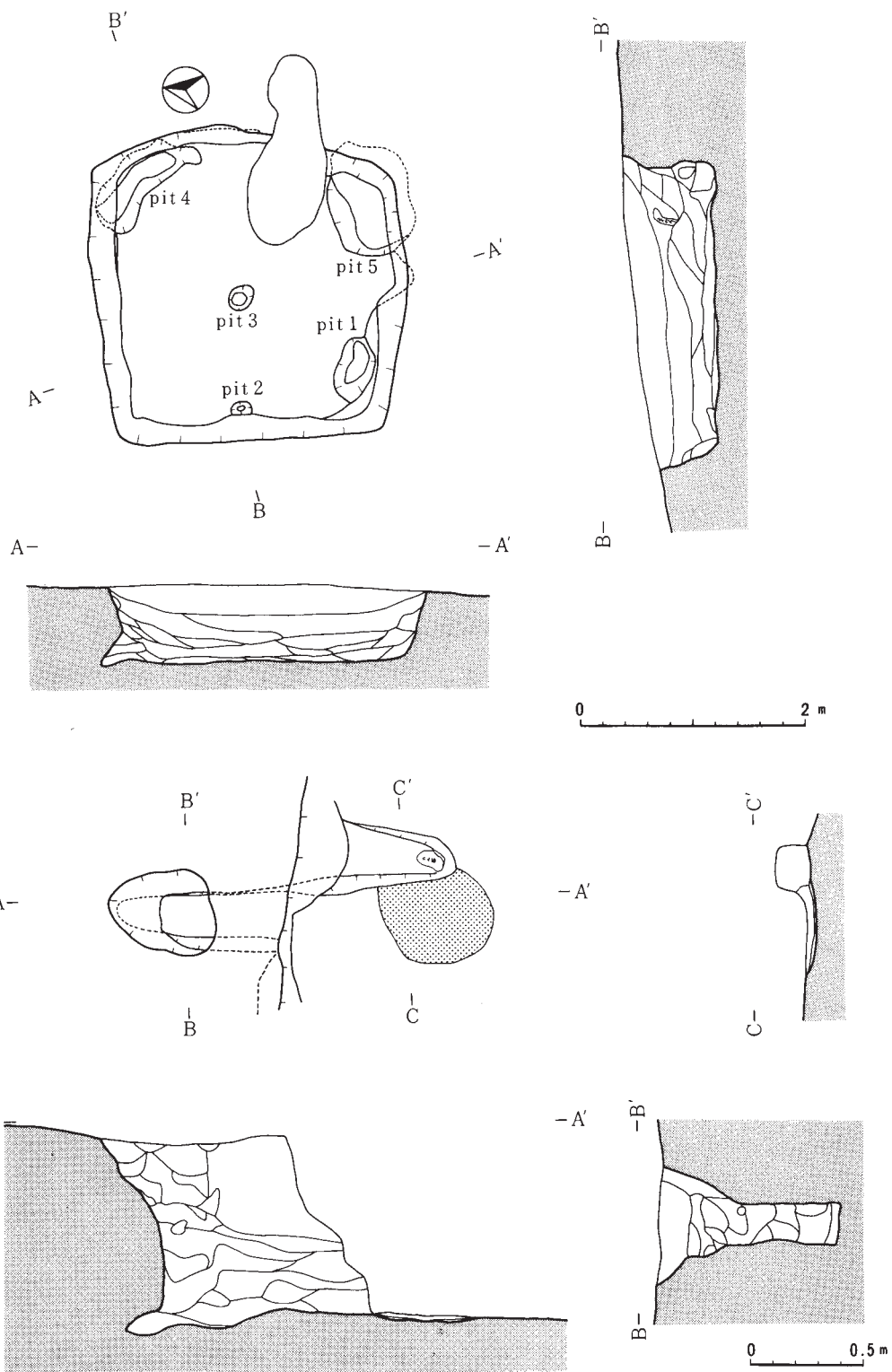
第153图 第326号竖穴住居跡



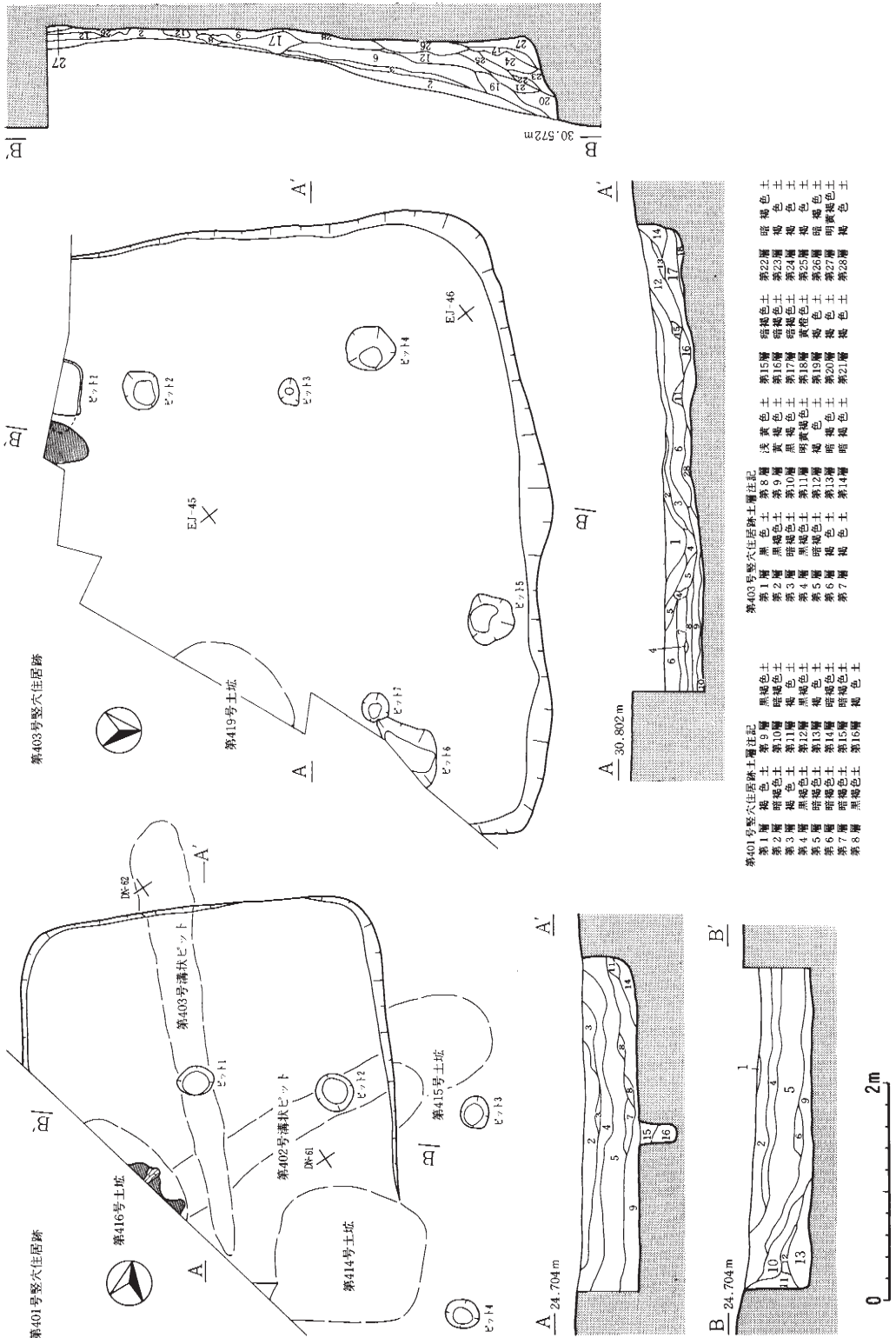
第154图 第326·327号竖穴住居跡



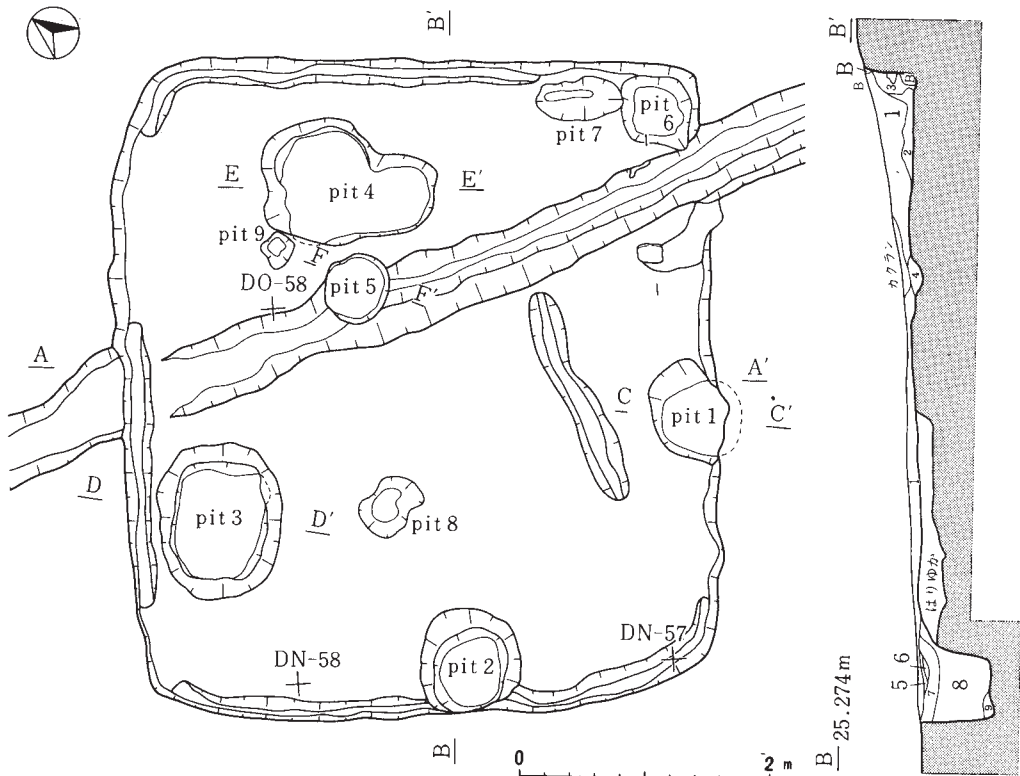
第155图 第328号竖穴住居跡



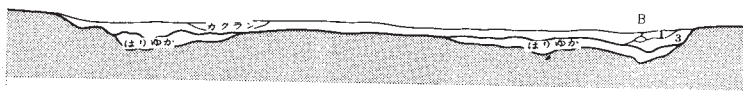
第156图 第329号竖穴住居跡



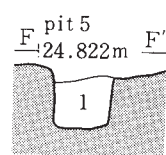
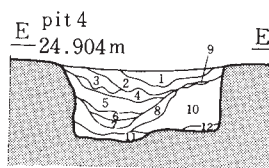
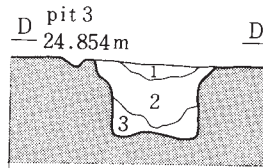
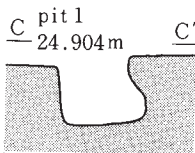
第157図 第401・403号竪穴住居跡



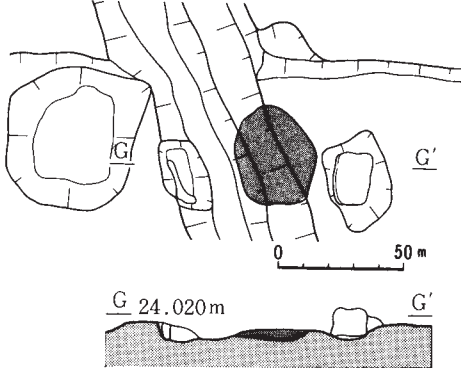
A 25.274m



土層注記
 第1層 褐色土
 第2層 暗褐色土
 第3層 暗褐色土
 第4層 暗褐色土
 間口 八戸火山灰



カマド



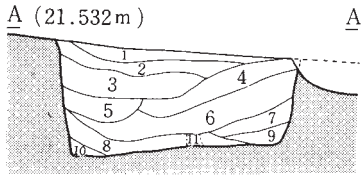
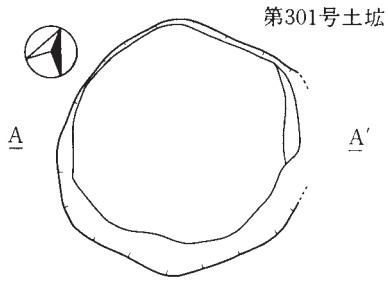
ピット2土層注記
 第5層 暗褐色土
 第6層 暗褐色土
 第7層 暗褐色土
 第8層 暗褐色土
 第9層 褐色土

ピット3土層注記
 第1層 暗褐色土
 第2層 暗褐色土
 第3層 暗褐色土

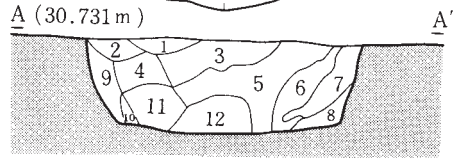
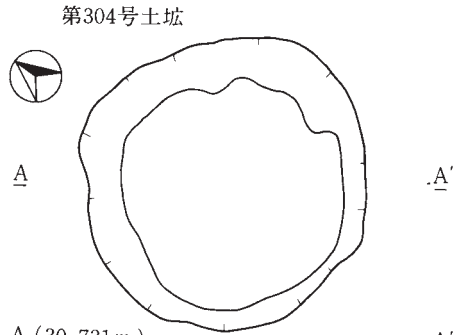
ピット5土層注記
 第1層 褐色土

ピット4土層注記
 第1層 褐色土
 第2層 暗褐色土
 第3層 褐色土
 第4層 暗褐色土
 第5層 暗褐色土
 第6層 暗褐色土
 第7層 暗褐色土
 第8層 暗褐色土
 第9層 暗褐色土
 第10層 暗褐色土
 第11層 暗褐色土
 第12層 暗褐色土

第158図 第402号竪穴住居跡



- 第301号土坑
- | | | | |
|-----|------|------|------|
| 第1層 | 暗褐色土 | 第6層 | 暗褐色土 |
| 第2層 | 暗褐色土 | 第7層 | 褐色土 |
| 第3層 | 暗褐色土 | 第8層 | 褐色土 |
| 第4層 | 暗褐色土 | 第9層 | 暗褐色土 |
| 第5層 | 褐色土 | 第10層 | 暗褐色土 |
| | | 第11層 | 暗褐色土 |



- 第304号土坑
- | | | | |
|-----|------|------|------|
| 第1層 | 暗褐色土 | 第7層 | 黄褐色土 |
| 第2層 | 暗褐色土 | 第8層 | 黄褐色土 |
| 第3層 | 暗褐色土 | 第9層 | 暗褐色土 |
| 第4層 | 暗褐色土 | 第10層 | 暗褐色土 |
| 第5層 | 暗褐色土 | 第11層 | 暗褐色土 |
| 第6層 | 暗褐色土 | 第12層 | 暗褐色土 |

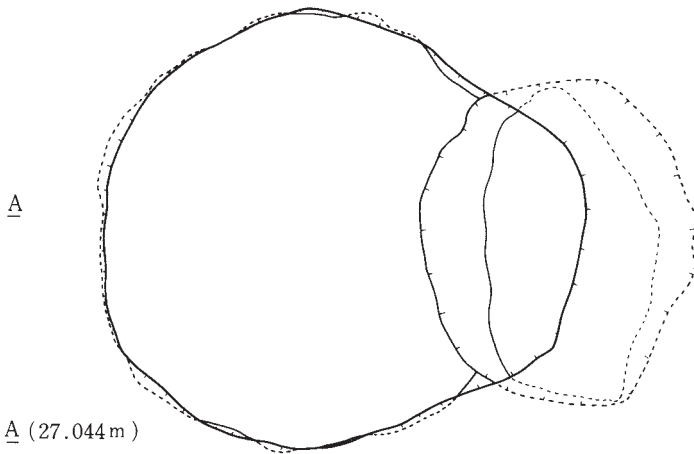
+ED-37

B1



第303号土坑

B1



A (27.044 m)

A'

A'

B1

B1

B1

B1

B1

B1

B1

B1

B1

B1

B1

B1

B1

B1

B1

B1

B1

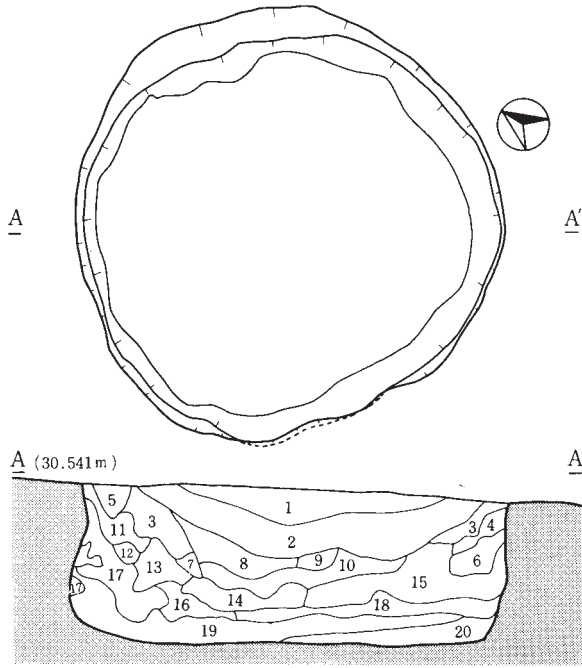
B1

- 第303号土坑
- | | | | |
|-----|------|------|-------|
| 第1層 | 褐色土 | 第7層 | 黑褐色土 |
| 第2層 | 黄褐色土 | 第8層 | 黑色土 |
| 第3層 | 褐色土 | 第9層 | 黑褐色土 |
| 第4層 | 暗褐色土 | 第10層 | 暗褐色土 |
| 第5層 | 暗褐色土 | 第11層 | 明黄褐色土 |
| 第6層 | 黑褐色土 | 第12層 | 明黄褐色土 |
| | | 第13層 | 明黄褐色土 |

0 0.5 m

第159图 第301·303·304号土坑

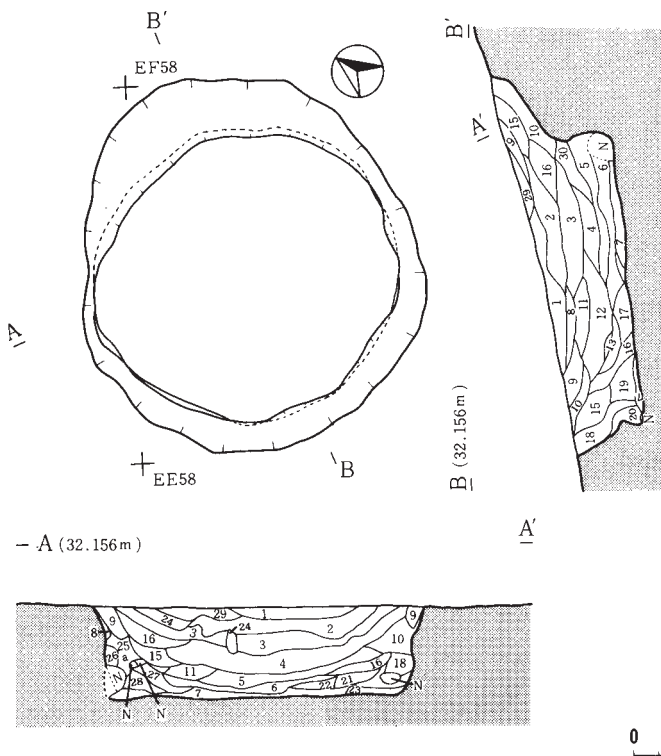
第305号土坑



第305号土坑

第1層	暗褐色	土
第2層	暗褐色	土
第3層	暗褐色	土
第4層	暗褐色	土
第5層	暗褐色	土
第6層	暗褐色	土
第7層	暗褐色	土
第8層	暗褐色	土
第9層	暗褐色	土
第10層	暗褐色	土
第11層	暗褐色	土
第12層	暗褐色	土
第13層	暗褐色	土
第14層	暗褐色	土
第15層	暗褐色	土
第16層	暗褐色	土
第17層	暗褐色	土
第18層	暗褐色	土
第19層	暗褐色	土
第20層	暗褐色	土

第306号土坑

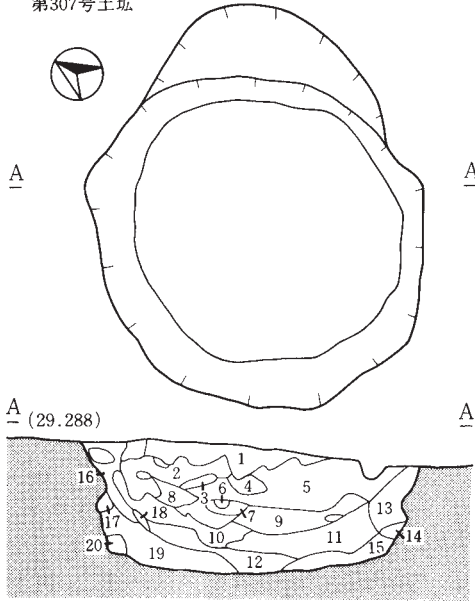


第306号土坑

第1層	暗褐色	土
第2層	暗褐色	土
第3層	暗褐色	土
第4層	暗褐色	土
第5層	暗褐色	土
第6層	暗褐色	土
第7層	暗褐色	土
第8層	暗褐色	土
第9層	暗褐色	土
第10層	暗褐色	土
第11層	暗褐色	土
第12層	暗褐色	土
第13層	暗褐色	土
第14層	暗褐色	土
第15層	暗褐色	土
第16層	暗褐色	土
第17層	暗褐色	土
第18層	暗褐色	土
第19層	暗褐色	土
第20層	暗褐色	土
第21層	暗褐色	土
第22層	暗褐色	土
第23層	暗褐色	土
第24層	暗褐色	土
第25層	暗褐色	土
第26層	暗褐色	土
第27層	暗褐色	土
第28層	暗褐色	土
第29層	暗褐色	土
第30層	暗褐色	土

第160图 第305·306号土坑

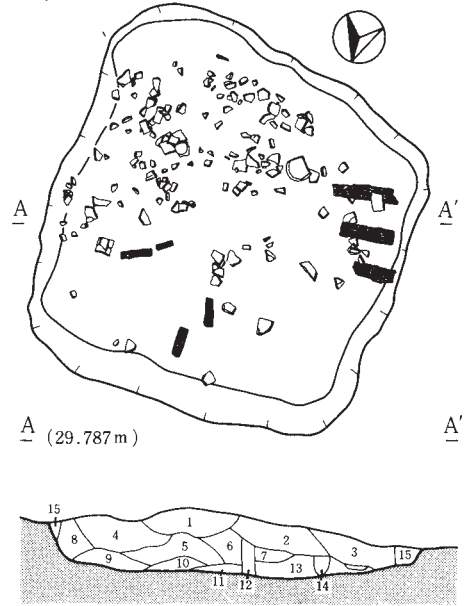
第307号土坑



第307号土坑

- | | |
|-----------|------------|
| 第1層 暗褐色土 | 第11層 暗褐色土 |
| 第2層 暗黃褐色土 | 第12層 暗黑褐色土 |
| 第3層 暗褐色土 | 第13層 暗褐色土 |
| 第4層 暗褐色土 | 第14層 暗褐色土 |
| 第5層 暗褐色土 | 第15層 暗褐色土 |
| 第6層 灰白色土 | 第16層 暗茶褐色土 |
| 第7層 黑灰色土 | 第17層 明黃褐色土 |
| 第8層 暗茶褐色土 | 第18層 暗褐色土 |
| 第9層 暗褐色土 | 第19層 暗茶褐色土 |
| 第10層 暗褐色土 | 第20層 暗茶褐色土 |

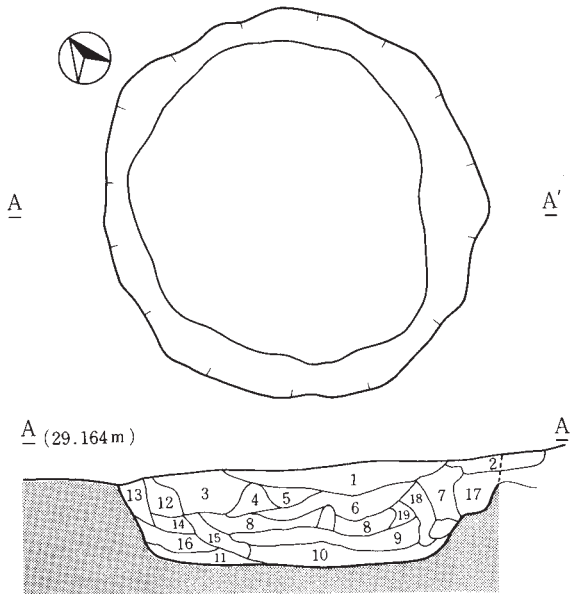
第308号土坑



第308号土坑

- | | |
|-----------|-----------|
| 第1層 黃褐色土 | 第1層 褐色土 |
| 第2層 黃褐色土 | 第2層 褐色土 |
| 第3層 黃褐色土 | 第3層 褐色土 |
| 第4層 黃褐色土 | 第4層 褐色土 |
| 第5層 黃褐色土 | 第5層 褐色土 |
| 第6層 黃褐色土 | 第6層 褐色土 |
| 第7層 黃褐色土 | 第7層 暗褐色土 |
| 第8層 黃褐色土 | 第8層 暗褐色土 |
| 第9層 黃褐色土 | 第9層 暗褐色土 |
| 第10層 黃褐色土 | 第10層 暗褐色土 |
| 第11層 黃褐色土 | 第11層 暗褐色土 |
| 第12層 黃褐色土 | 第12層 暗褐色土 |
| 第13層 黃褐色土 | 第13層 暗褐色土 |
| 第14層 黃褐色土 | 第14層 暗褐色土 |
| 第15層 黃褐色土 | 第15層 暗褐色土 |

第311号土坑



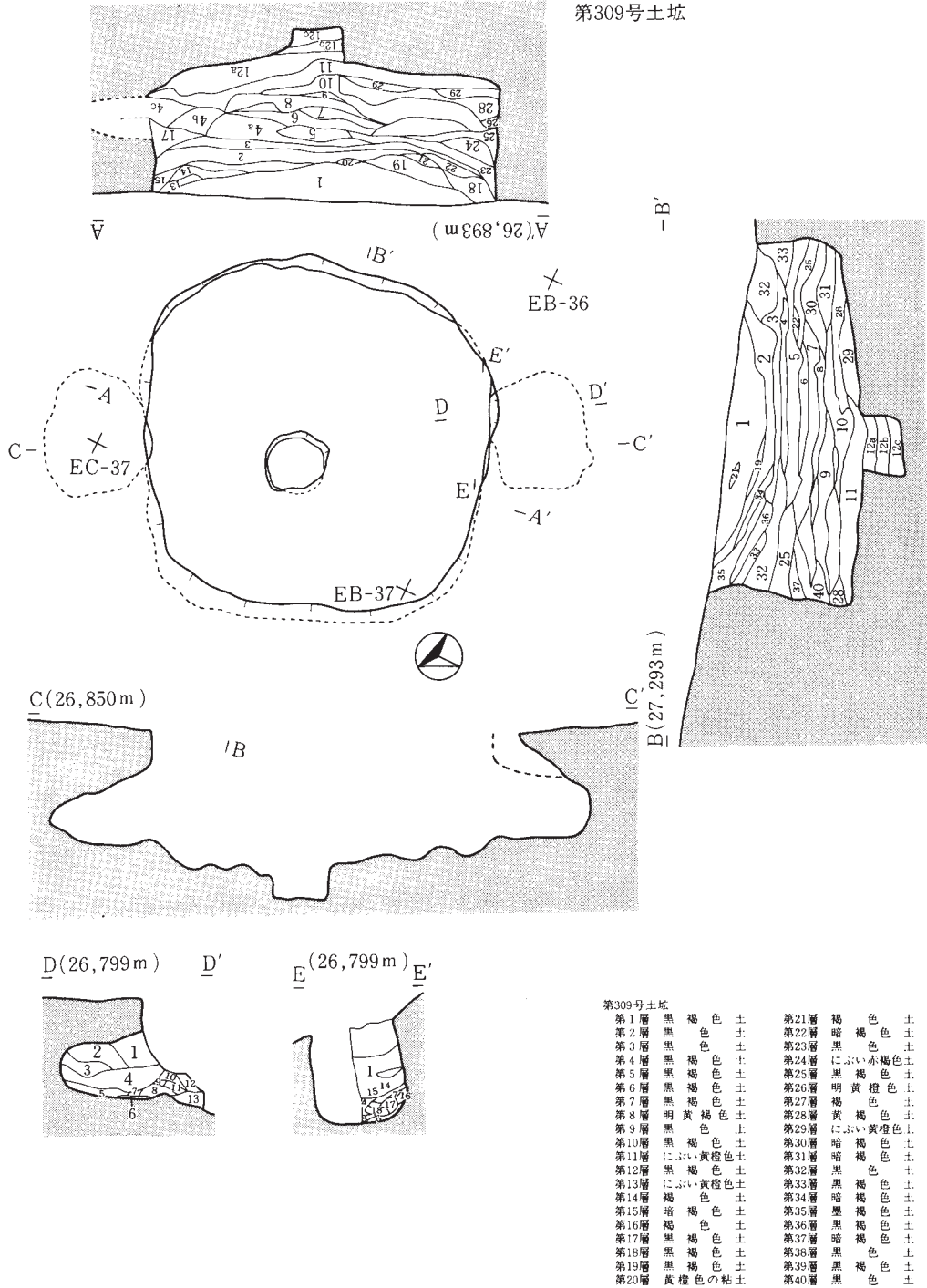
第311号土坑

- | | |
|------------|-----------|
| 第1層 黑褐色土 | 第1層 褐色土 |
| 第2層 黑褐色土 | 第2層 褐色土 |
| 第3層 黑褐色土 | 第3層 褐色土 |
| 第4層 黑褐色土 | 第4層 褐色土 |
| 第5層 黑褐色土 | 第5層 褐色土 |
| 第6層 黑褐色土 | 第6層 褐色土 |
| 第7層 黑褐色土 | 第7層 褐色土 |
| 第8層 黑褐色土 | 第8層 褐色土 |
| 第9層 黑褐色土 | 第9層 褐色土 |
| 第10層 黑褐色土 | 第10層 褐色土 |
| 第11層 黑褐色土 | 第11層 褐色土 |
| 第12層 黑褐色土 | 第12層 褐色土 |
| 第13層 黑褐色土 | 第13層 褐色土 |
| 第14層 黑褐色土 | 第14層 褐色土 |
| 第15層 黑褐色土 | 第15層 褐色土 |
| 第16層 黑褐色土 | 第16層 褐色土 |
| 第17層 暗黃褐色土 | 第17層 暗褐色土 |
| 第18層 暗黃褐色土 | 第18層 暗褐色土 |
| 第19層 暗黃褐色土 | 第19層 暗褐色土 |

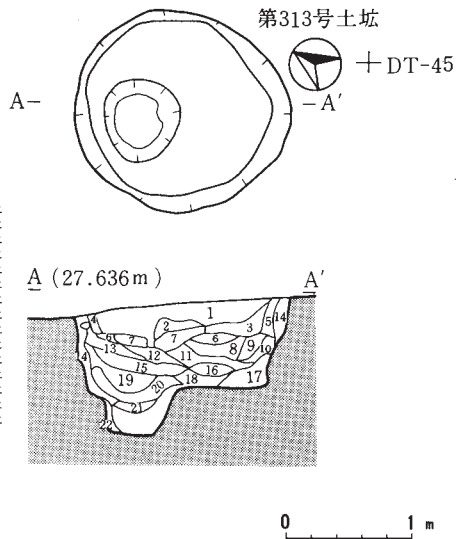
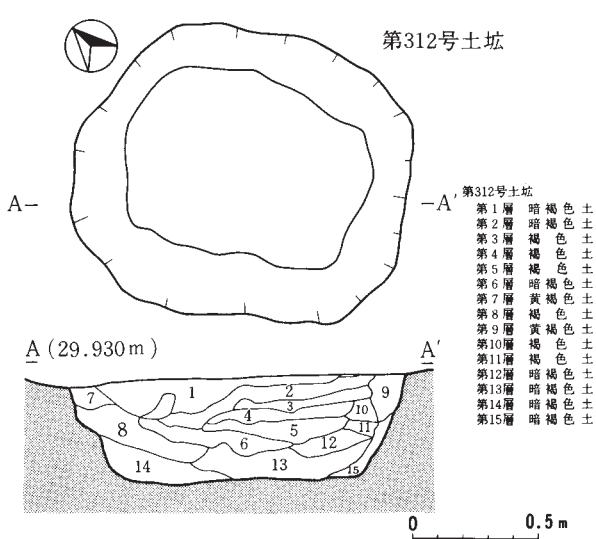
0 0.5 m

第161图 第307·308·311号土坑

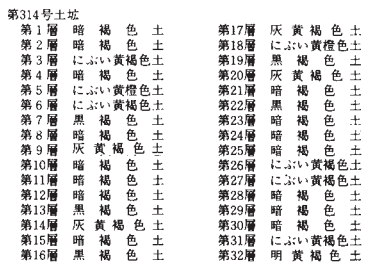
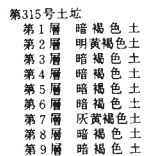
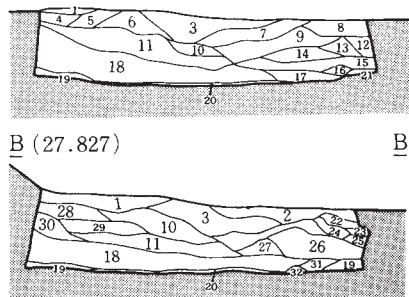
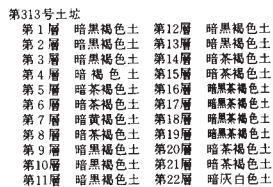
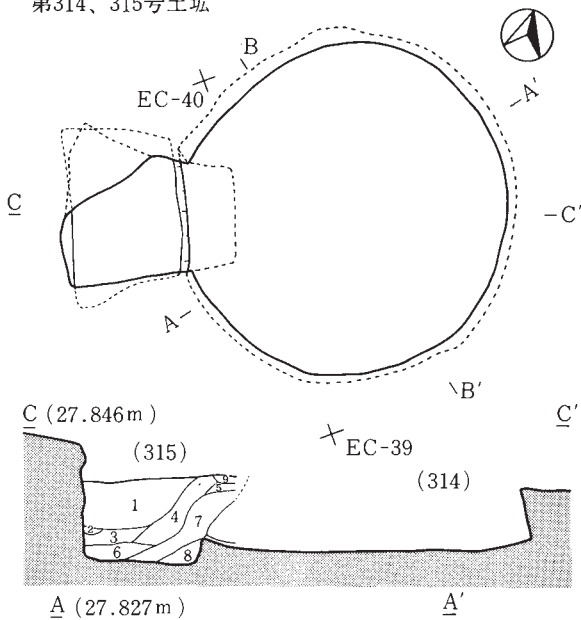
第309号土坑



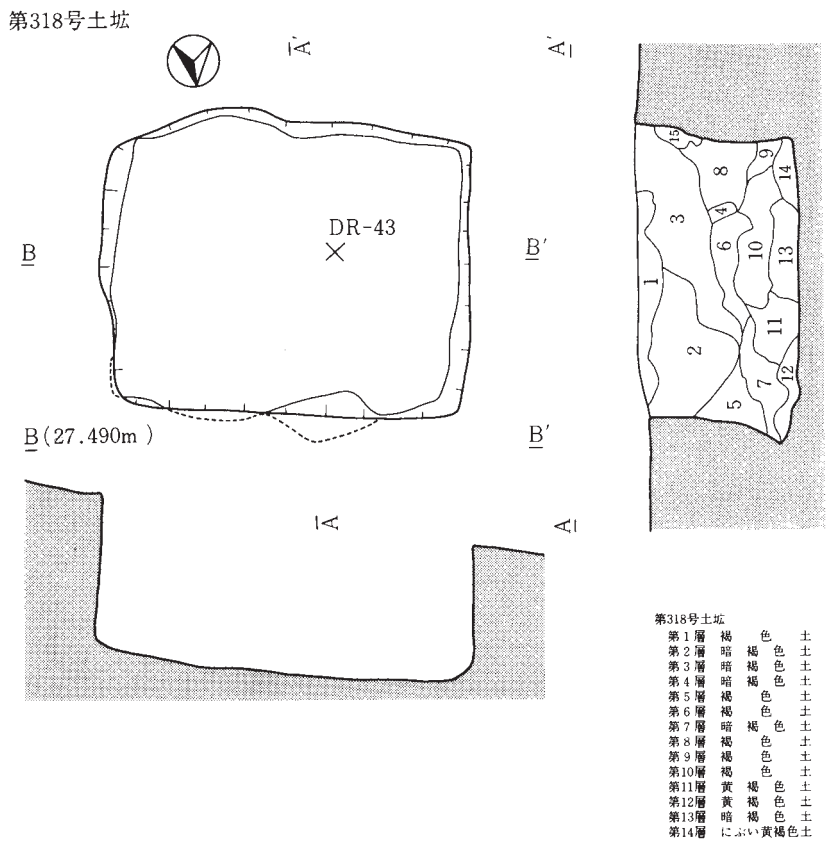
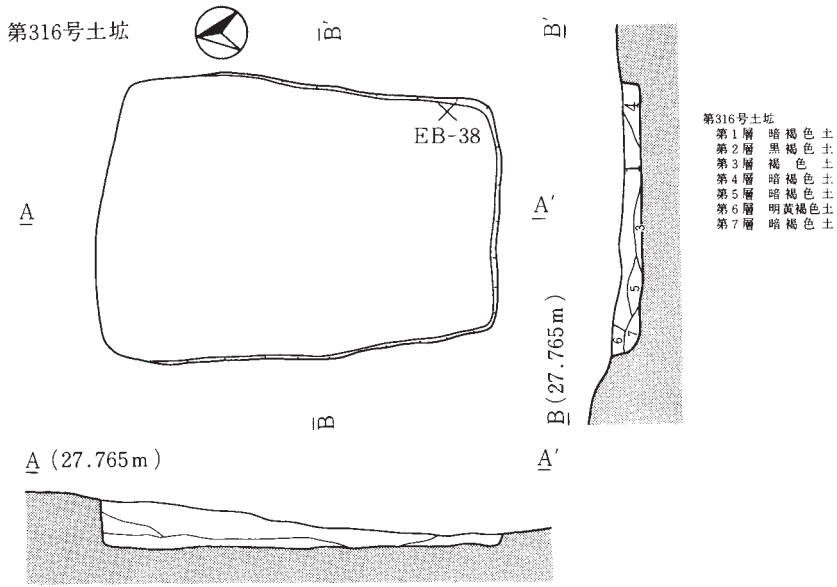
第162図 第309号土坑



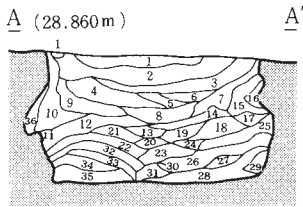
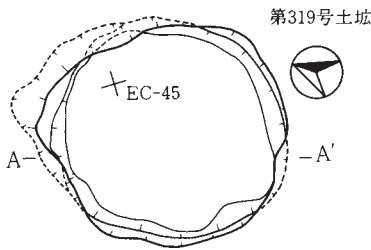
第314、315号土坑



第163図 第312~315号土坑

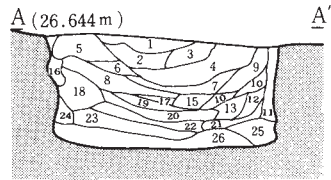
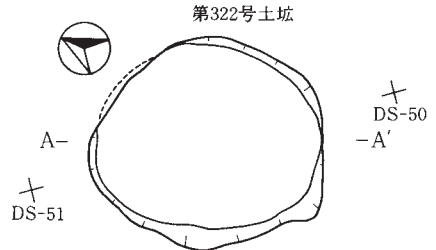


第164图 第316·318号土坛



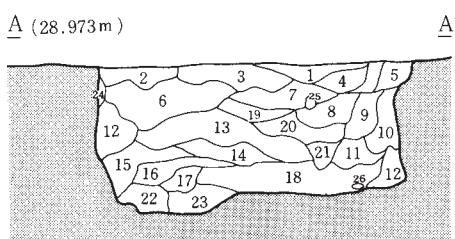
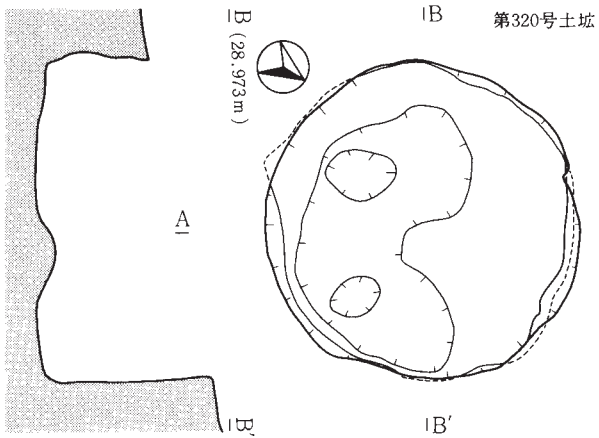
第319号土坑

第1層	暗褐色	土
第2層	黑褐色	色
第3層	暗褐色	土
第4層	暗褐色	土
第5層	暗褐色	土
第6層	暗褐色	土
第7層	暗褐色	土
第8層	暗褐色	土
第9層	暗褐色	土
第10層	暗褐色	土
第11層	暗褐色	土
第12層	暗褐色	土
第13層	暗褐色	土
第14層	暗褐色	土
第15層	暗褐色	土
第16層	暗褐色	土
第17層	暗褐色	土
第18層	暗褐色	土
第19層	暗褐色	土
第20層	暗褐色	土
第21層	暗褐色	土
第22層	暗褐色	土
第23層	暗褐色	土
第24層	暗褐色	土
第25層	暗褐色	土
第26層	暗褐色	土
第27層	暗褐色	土
第28層	暗褐色	土
第29層	暗褐色	土
第30層	暗褐色	土
第31層	暗褐色	土
第32層	暗褐色	土
第33層	暗褐色	土
第34層	暗褐色	土
第35層	暗褐色	土



第322号土坑

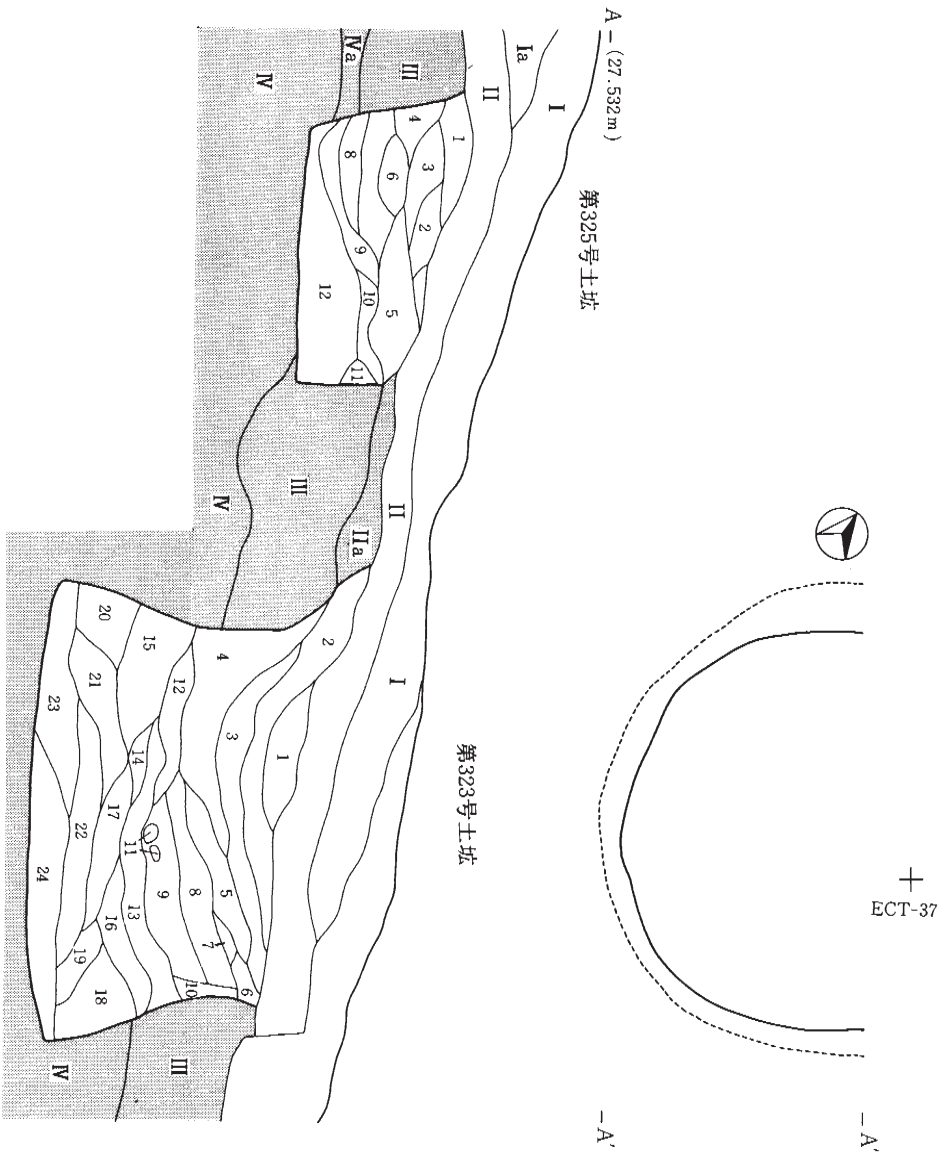
第1層	暗褐色	土
第2層	暗褐色	色
第3層	暗褐色	土
第4層	暗褐色	土
第5層	暗褐色	土
第6層	暗褐色	土
第7層	暗褐色	土
第8層	暗褐色	土
第9層	暗褐色	土
第10層	暗褐色	土
第11層	暗褐色	土
第12層	暗褐色	土
第13層	暗褐色	土
第14層	暗褐色	土
第15層	暗褐色	土
第16層	暗褐色	土
第17層	暗褐色	土
第18層	暗褐色	土
第19層	暗褐色	土
第20層	暗褐色	土
第21層	暗褐色	土
第22層	暗褐色	土
第23層	暗褐色	土
第24層	暗褐色	土
第25層	暗褐色	土
第26層	暗褐色	土



第320号土坑

第1層	灰明黄	褐色	土
第2層	明黄	褐色	色
第3層	明黄	褐色	土
第4層	明黄	褐色	土
第5層	明黄	褐色	土
第6層	暗褐色	褐色	土
第7層	暗褐色	褐色	土
第8層	暗褐色	褐色	土
第9層	暗褐色	褐色	土
第10層	暗褐色	褐色	土
第11層	暗褐色	褐色	土
第12層	暗褐色	褐色	土
第13層	暗褐色	褐色	土
第14層	暗褐色	褐色	土
第15層	暗褐色	褐色	土
第16層	暗褐色	褐色	土
第17層	暗褐色	褐色	土
第18層	暗褐色	褐色	土
第19層	暗褐色	褐色	土
第20層	暗褐色	褐色	土
第21層	暗褐色	褐色	土
第22層	暗褐色	褐色	土
第23層	暗褐色	褐色	土
第24層	暗褐色	褐色	土
第25層	暗褐色	褐色	土
第26層	暗褐色	褐色	土
第27層	暗褐色	褐色	土

第165图 第319·320·322号土坑



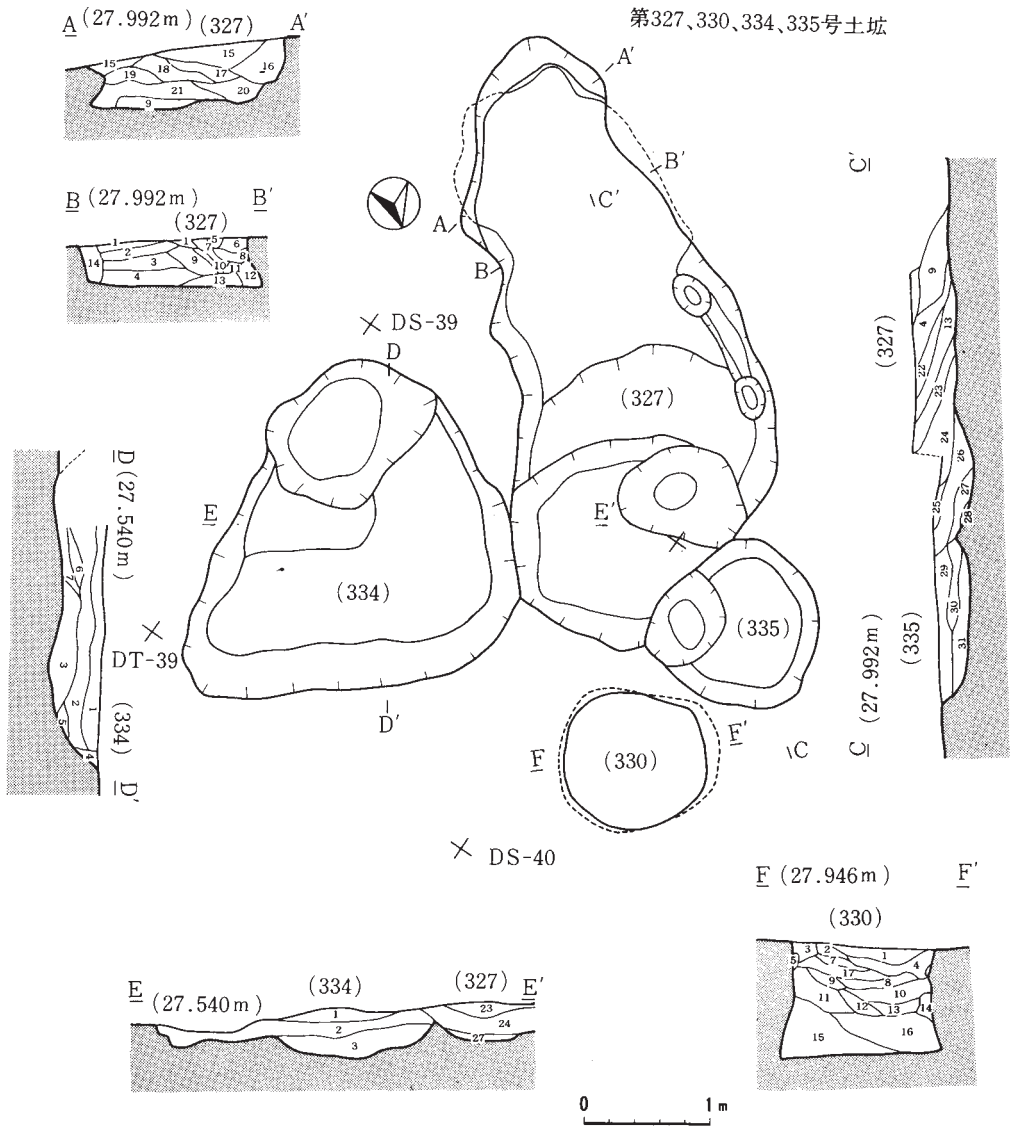
A-(27.532m)
第325号土坡

第323号土坡

- 第322号土坡
- 第1層 褐色包色土
 - 第2層 黑褐色包色土
 - 第3層 黑褐色包色土
 - 第4層 黑褐色包色土
 - 第5層 黑褐色包色土
 - 第6層 黑褐色包色土
 - 第7層 黑褐色包色土
 - 第8層 黑褐色包色土
 - 第9層 黑褐色包色土
 - 第10層 黑褐色包色土
 - 第11層 黑褐色包色土
 - 第12層 黑褐色包色土
 - 第13層 黑褐色包色土
 - 第14層 黑褐色包色土
 - 第15層 黑褐色包色土
 - 第16層 黑褐色包色土
 - 第17層 黑褐色包色土
 - 第18層 黑褐色包色土
 - 第19層 黑褐色包色土
 - 第20層 黑褐色包色土
 - 第21層 黑褐色包色土
 - 第22層 黑褐色包色土
 - 第23層 黑褐色包色土
 - 第24層 黑褐色包色土

- 第325号土坡
- 第1層 褐色包色土
 - 第2層 黑褐色包色土
 - 第3層 黑褐色包色土
 - 第4層 黑褐色包色土
 - 第5層 黑褐色包色土
 - 第6層 黑褐色包色土
 - 第7層 黑褐色包色土
 - 第8層 黑褐色包色土
 - 第9層 黑褐色包色土
 - 第10層 黑褐色包色土
 - 第11層 黑褐色包色土
 - 第12層 黑褐色包色土

第166图 第323·325号土坡



第327・335号土壇

第1層	黒褐色土	第17層	明黄褐色土
第2層	にぶい黄褐色土	第18層	明黄褐色土
第3層	黄褐色土	第19層	明黄褐色土
第4層	にぶい黄褐色土	第20層	明黄褐色土
第5層	明黄褐色土	第21層	黒褐色土
第6層	黒褐色土	第22層	黒褐色土
第7層	にぶい黄褐色土	第23層	にぶい黄褐色土
第8層	明黄褐色土	第24層	にぶい黄褐色土
第9層	浅黄色土	第25層	にぶい黄褐色土
第10層	にぶい黄褐色土	第26層	にぶい黄褐色土
第11層	にぶい黄褐色土	第27層	暗褐色土
第12層	にぶい黄褐色土	第28層	黒褐色土
第13層	にぶい黄褐色土	第29層	浅黄色土
第14層	黄褐色土	第30層	浅黄色土
第15層	暗褐色土	第31層	浅黄色土
第16層	暗褐色土		

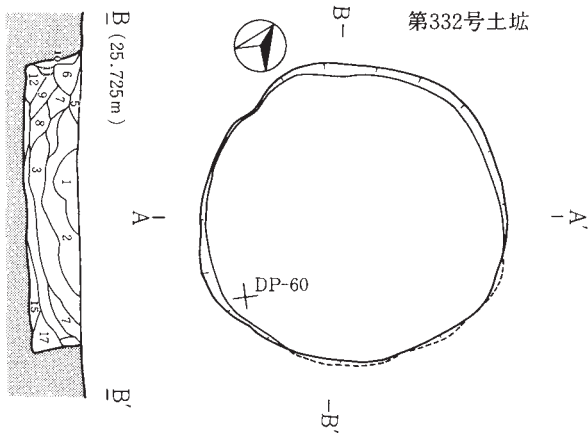
第330号土壇

第1層	褐色土
第2層	黄褐色土
第3層	黄褐色土
第4層	黄褐色土
第5層	浅黄褐色土
第6層	明黄褐色土
第7層	黄褐色土
第8層	黄褐色土
第9層	浅黄褐色土
第10層	浅黄褐色土
第11層	にぶい黄褐色土
第12層	浅黄色土
第13層	にぶい黄褐色土
第14層	明黄褐色土
第15層	にぶい黄褐色土
第16層	にぶい黄褐色土
第17層	黄褐色土

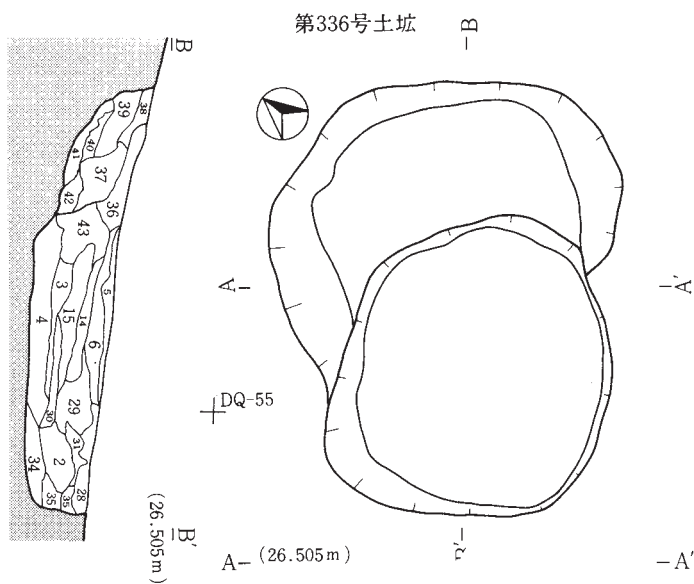
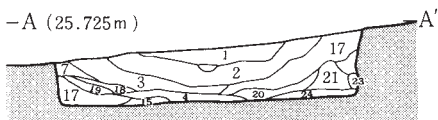
第334号土壇

第1層	にぶい黄褐色土
第2層	にぶい黄褐色土
第3層	にぶい黄褐色土
第4層	浅黄色土
第5層	浅黄色土
第6層	浅黄色土
第7層	にぶい黄褐色土
第8層	にぶい黄褐色土
第9層	暗褐色土
第10層	浅黄色土

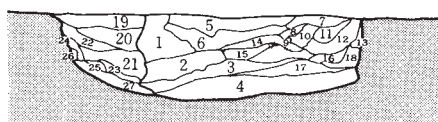
第167図 第327・330・334・335号土壇



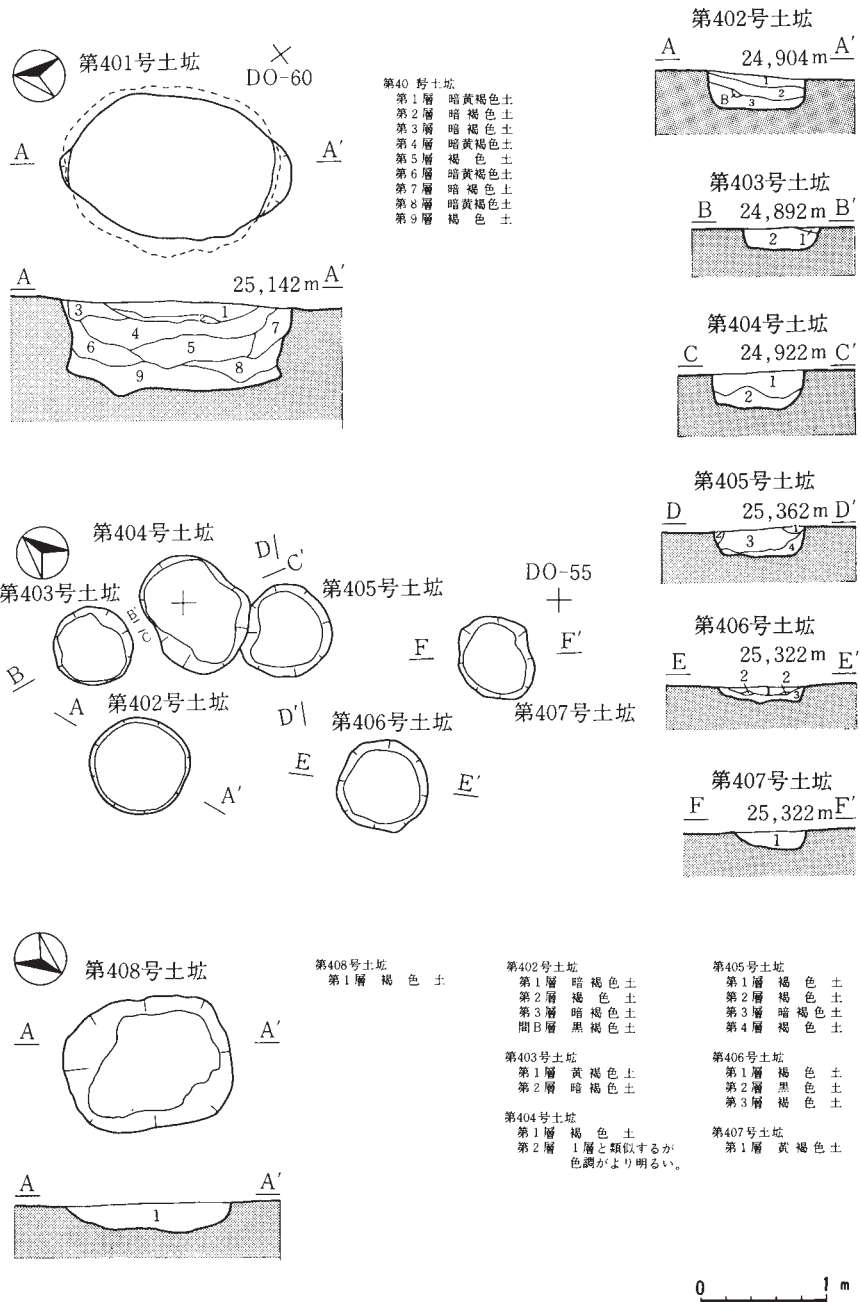
- 第332号土坑
- | | | |
|------|-----|---|
| 第1層 | 褐色 | 土 |
| 第2層 | 暗褐色 | 土 |
| 第3層 | 暗褐色 | 土 |
| 第4層 | 暗褐色 | 土 |
| 第5層 | 暗褐色 | 土 |
| 第6層 | 暗褐色 | 土 |
| 第7層 | 暗褐色 | 土 |
| 第8層 | 暗褐色 | 土 |
| 第9層 | 暗褐色 | 土 |
| 第10層 | 暗褐色 | 土 |
| 第11層 | 暗褐色 | 土 |
| 第12層 | 暗褐色 | 土 |
| 第13層 | 暗褐色 | 土 |
| 第14層 | 暗褐色 | 土 |
| 第15層 | 暗褐色 | 土 |
| 第16層 | 暗褐色 | 土 |
| 第17層 | 暗褐色 | 土 |
| 第18層 | 暗褐色 | 土 |
| 第19層 | 暗褐色 | 土 |
| 第20層 | 暗褐色 | 土 |
| 第21層 | 暗褐色 | 土 |
| 第22層 | 暗褐色 | 土 |
| 第23層 | 暗褐色 | 土 |
| 第24層 | 暗褐色 | 土 |



- 第336号土坑
- | | | |
|------|----|---|
| 第1層 | 褐色 | 土 |
| 第2層 | 褐色 | 土 |
| 第3層 | 褐色 | 土 |
| 第4層 | 褐色 | 土 |
| 第5層 | 褐色 | 土 |
| 第6層 | 褐色 | 土 |
| 第7層 | 褐色 | 土 |
| 第8層 | 褐色 | 土 |
| 第9層 | 褐色 | 土 |
| 第10層 | 褐色 | 土 |
| 第11層 | 褐色 | 土 |
| 第12層 | 褐色 | 土 |
| 第13層 | 褐色 | 土 |
| 第14層 | 褐色 | 土 |
| 第15層 | 褐色 | 土 |
| 第16層 | 褐色 | 土 |
| 第17層 | 褐色 | 土 |
| 第18層 | 褐色 | 土 |
| 第19層 | 褐色 | 土 |
| 第20層 | 褐色 | 土 |
| 第21層 | 褐色 | 土 |
| 第22層 | 褐色 | 土 |
| 第23層 | 褐色 | 土 |
| 第24層 | 褐色 | 土 |
| 第25層 | 褐色 | 土 |
| 第26層 | 褐色 | 土 |
| 第27層 | 褐色 | 土 |
| 第28層 | 褐色 | 土 |
| 第29層 | 褐色 | 土 |
| 第30層 | 褐色 | 土 |
| 第31層 | 褐色 | 土 |
| 第32層 | 褐色 | 土 |
| 第33層 | 褐色 | 土 |
| 第34層 | 褐色 | 土 |
| 第35層 | 褐色 | 土 |
| 第36層 | 褐色 | 土 |
| 第37層 | 褐色 | 土 |
| 第38層 | 褐色 | 土 |
| 第39層 | 褐色 | 土 |
| 第40層 | 褐色 | 土 |
| 第41層 | 褐色 | 土 |
| 第42層 | 褐色 | 土 |
| 第43層 | 褐色 | 土 |

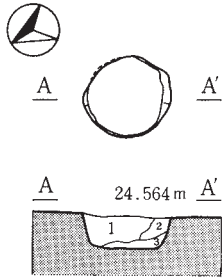


第168図 第332・336号土坑



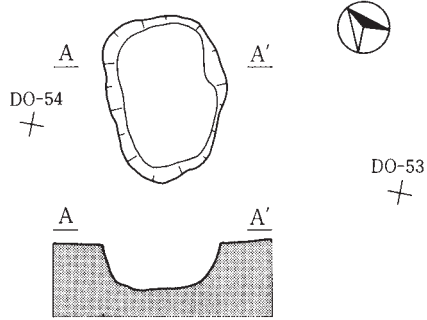
第169図 第401～408号土坑

第409号土坛

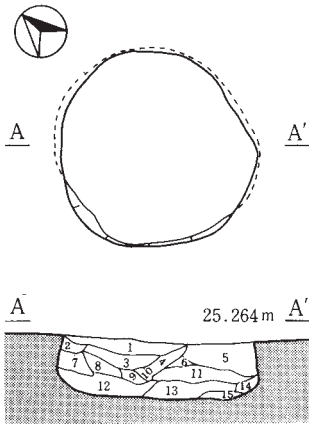


- 第409号土坛
 第1層 暗褐色土
 第2層 褐色土
 第3層 黑褐色土

第410号土坛

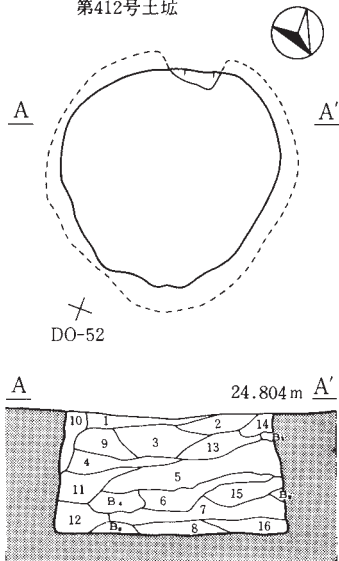


第411号土坛



- 第411号土坛
 第1層 褐色土
 第2層 暗褐色土
 第3層 暗褐色土
 第4層 暗褐色土
 第5層 暗褐色土
 第6層 暗褐色土
 第7層 暗褐色土
 第8層 暗褐色土
 第9層 暗黄褐色土
 第10層 暗黄褐色土
 第11層 暗黄褐色土
 第12層 暗黄褐色土
 第13層 暗黄褐色土
 第14層 暗黄褐色土
 第15層 明黄褐色土

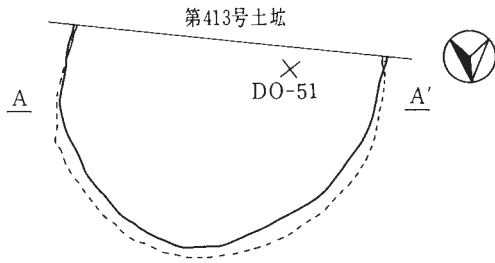
第412号土坛



- 第412号土坛
 第1層 暗褐色土
 第2層 褐色土
 第3層 褐色土
 第4層 褐色土
 第5層 暗褐色土
 第6層 褐色土
 第7層 明褐色土
 第8層 暗褐色土
 第9層 暗褐色土
 第10層 黑褐色土
 第11層 暗褐色土
 第12層 暗褐色土
 第13層 褐色土
 第14層 黑褐色土
 第15層 暗褐色土
 第16層 暗褐色土
 B₁ 暗褐色土
 B₂ 暗褐色土
 B₃ 黄褐色土
 B₄ 黑褐色土

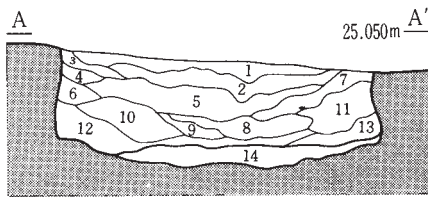


第170图 第409~412号土坛



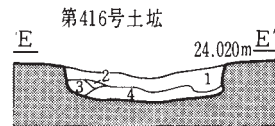
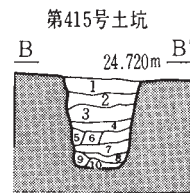
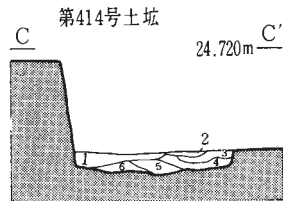
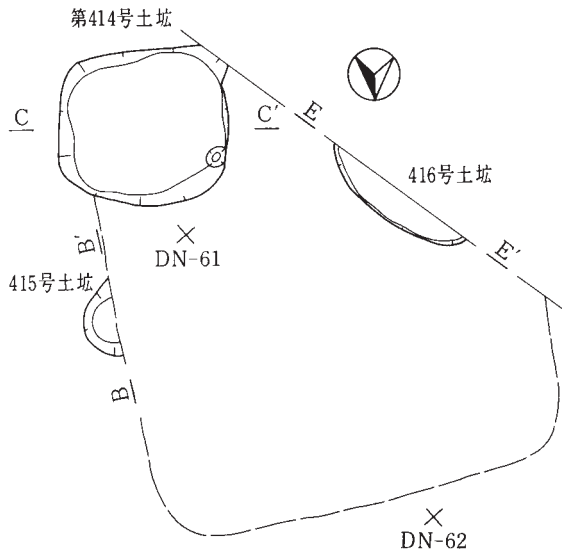
- 第413号土坑
- 第1層 褐色土
 - 第2層 黄褐色土
 - 第3層 暗褐色土
 - 第4層 黄褐色土
 - 第5層 暗褐色土
 - 第6層 褐色土
 - 第7層 褐色土
 - 第8層 褐色土
 - 第9層 黄褐色土
 - 第10層 黄褐色土
 - 第12層 褐色土
 - 第13層 褐色土
 - 第14層 暗褐色土

- 第415号土坑
- 第1層 褐色土
 - 第2層 暗褐色土
 - 第3層 暗褐色土
 - 第4層 暗褐色土
 - 第5層 暗褐色土
 - 第6層 暗褐色土
 - 第7層 暗褐色土
 - 第8層 暗褐色土
 - 第9層 暗褐色土
 - 第10層 暗褐色土
 - 間B層 明黄色土

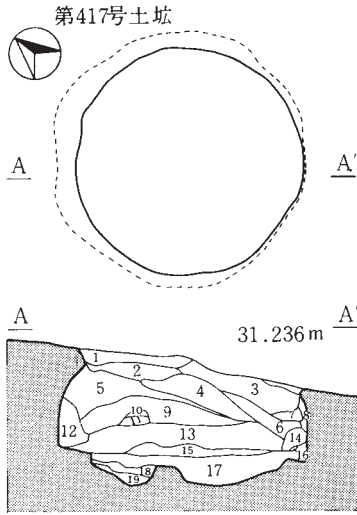


- 第414号土坑
- 第1層 暗褐色土
 - 第2層 暗褐色土
 - 第3層 黄褐色土
 - 第4層 暗褐色土
 - 第5層 暗褐色土
 - 第6層 暗褐色土

- 第416号土坑
- 第1層 暗褐色土
 - 第2層 暗褐色土
 - 第3層 暗褐色土
 - 第4層 暗褐色土



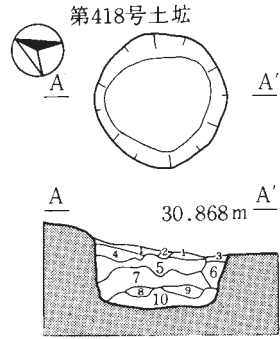
第171图 第413~416号土坑



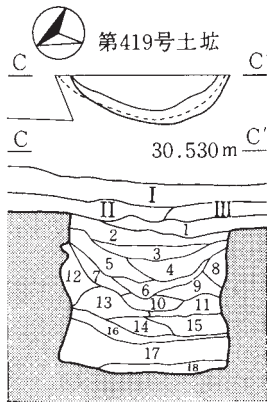
EJ-46

+

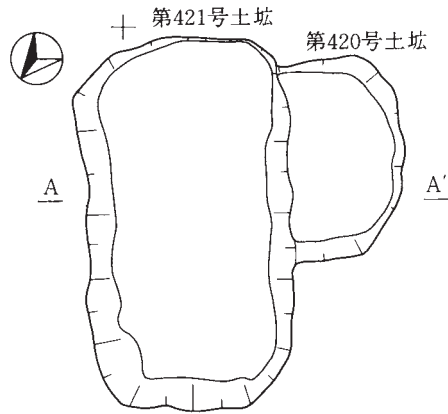
- 第417号土坛
- | | |
|------|------|
| 第1層 | 暗褐色土 |
| 第2層 | 褐色土 |
| 第3層 | 褐色土 |
| 第4層 | 褐色土 |
| 第5層 | 暗褐色土 |
| 第6層 | 褐色土 |
| 第7層 | 黑褐色土 |
| 第8層 | 暗褐色土 |
| 第9層 | 暗褐色土 |
| 第10層 | 暗褐色土 |
| 第11層 | 暗褐色土 |
| 第12層 | 褐色土 |
| 第13層 | 褐色土 |
| 第14層 | 黄褐色土 |
| 第15層 | 褐色土 |
| 第16層 | 暗褐色土 |
| 第17層 | 明黄色土 |
| 第18層 | 黄褐色土 |
| 第19層 | 黑褐色土 |



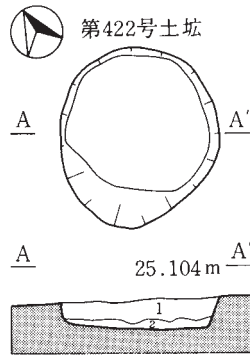
- 第418号土坛
- | | | | |
|-----|------|------|------|
| 第1層 | 黑褐色土 | 第6層 | 褐色土 |
| 第2層 | 明黄色土 | 第7層 | 褐色土 |
| 第3層 | 褐色土 | 第8層 | 暗褐色土 |
| 第4層 | 褐色土 | 第9層 | 褐色土 |
| 第5層 | 褐色土 | 第10層 | 褐色土 |



- 第419号土坛
- | | | | | | |
|------|------|------|------|------|------|
| 第1層 | 褐色土 | 第13層 | 黑褐色土 | 第16層 | 黑褐色土 |
| 第2層 | 暗褐色土 | 第14層 | 暗褐色土 | 第17層 | 褐灰色土 |
| 第3層 | 暗褐色土 | 第15層 | 暗褐色土 | 第18層 | 暗褐色土 |
| 第4層 | 暗褐色土 | | | | |
| 第5層 | 暗褐色土 | | | | |
| 第6層 | 暗褐色土 | | | | |
| 第7層 | 暗褐色土 | | | | |
| 第8層 | 暗褐色土 | | | | |
| 第9層 | 暗褐色土 | | | | |
| 第10層 | 暗褐色土 | | | | |
| 第11層 | 暗褐色土 | | | | |
| 第12層 | 暗褐色土 | | | | |

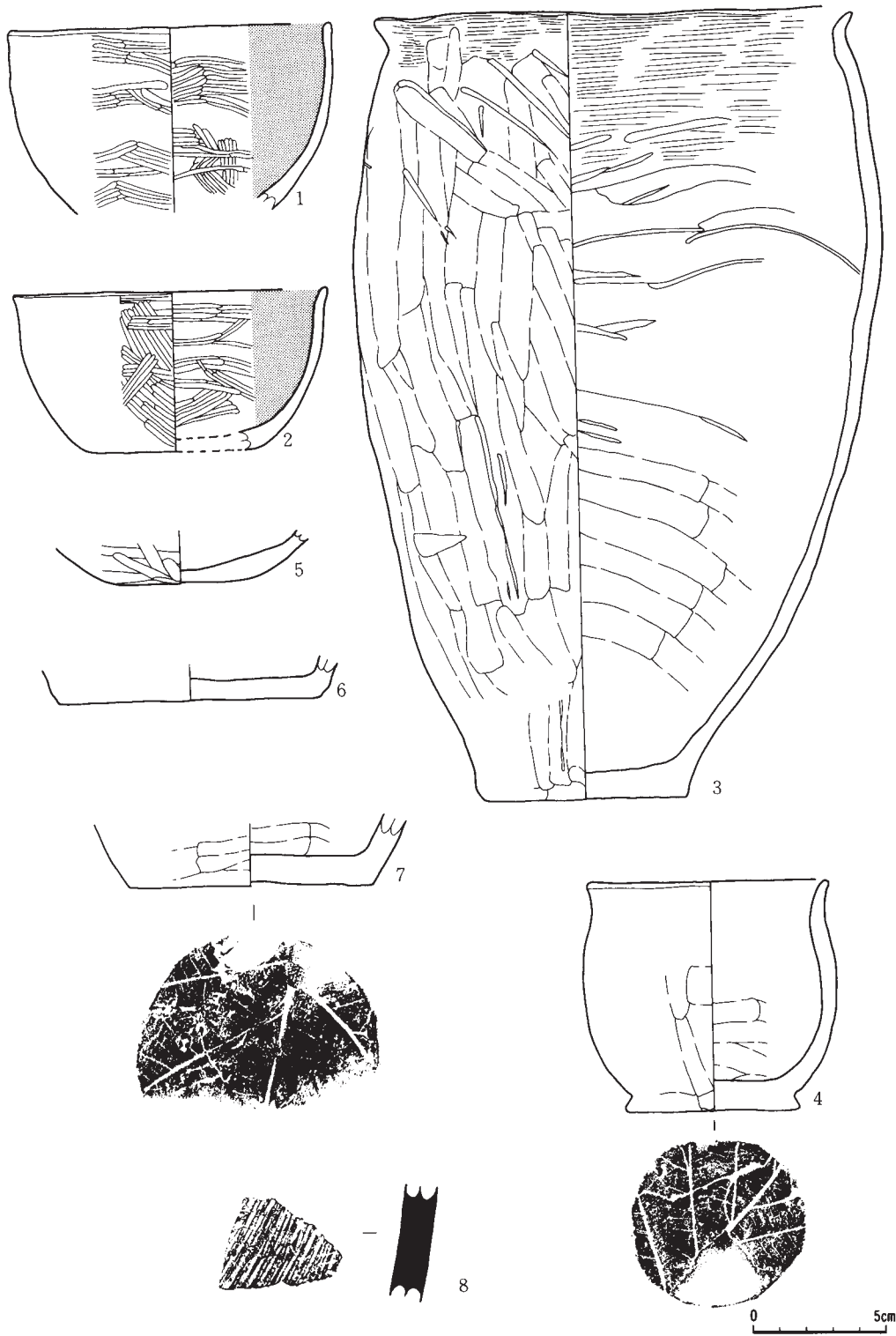


- 第420-421号土坛
- | | |
|-----|------|
| 第1層 | 黑褐色土 |
| 第2層 | 暗褐色土 |
| 第3層 | 黑褐色土 |
- 第422号土坛
- | | |
|-----|------|
| 第1層 | 暗褐色土 |
| 第2層 | 褐色土 |

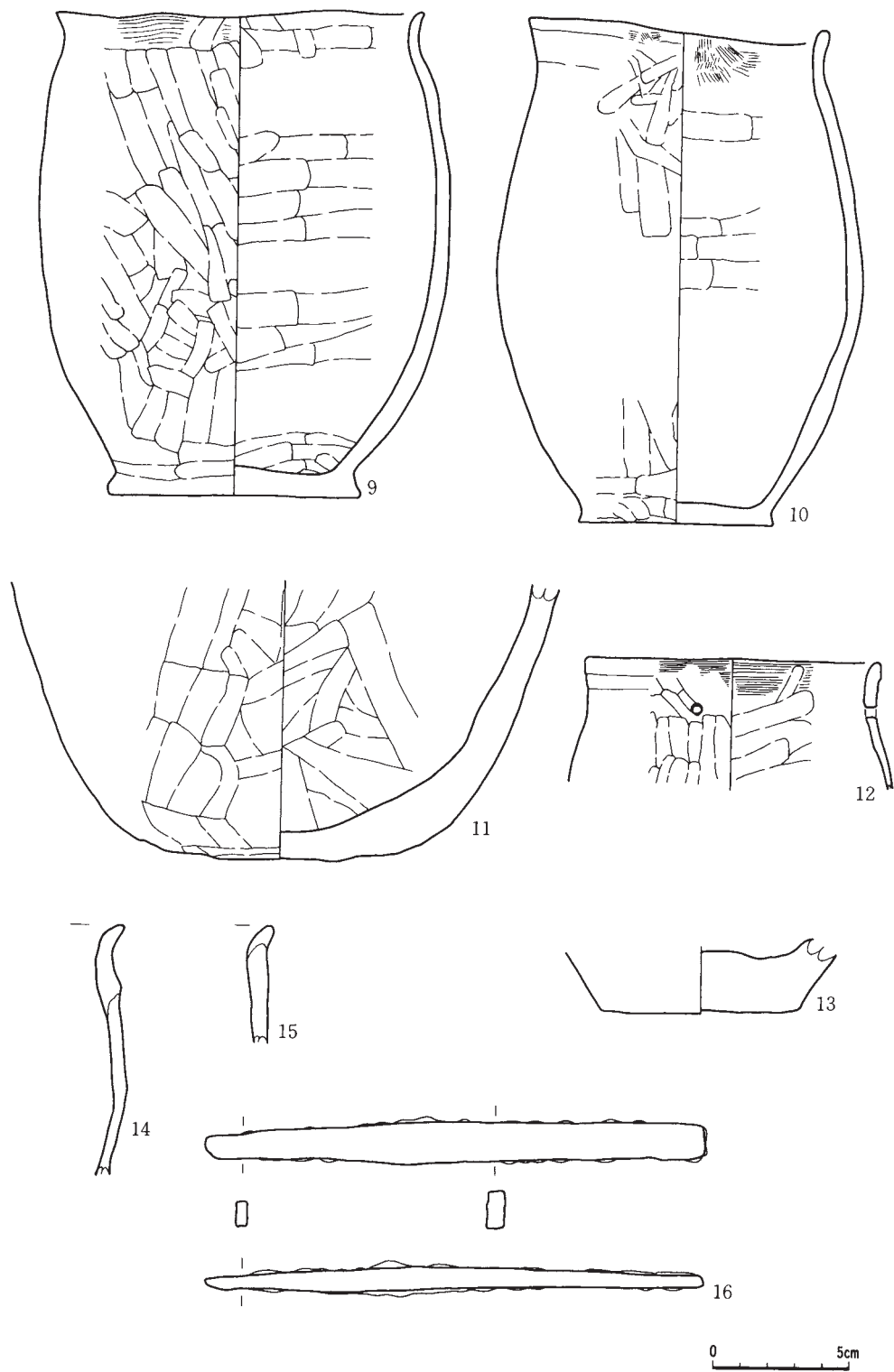


第172图 第417~422号

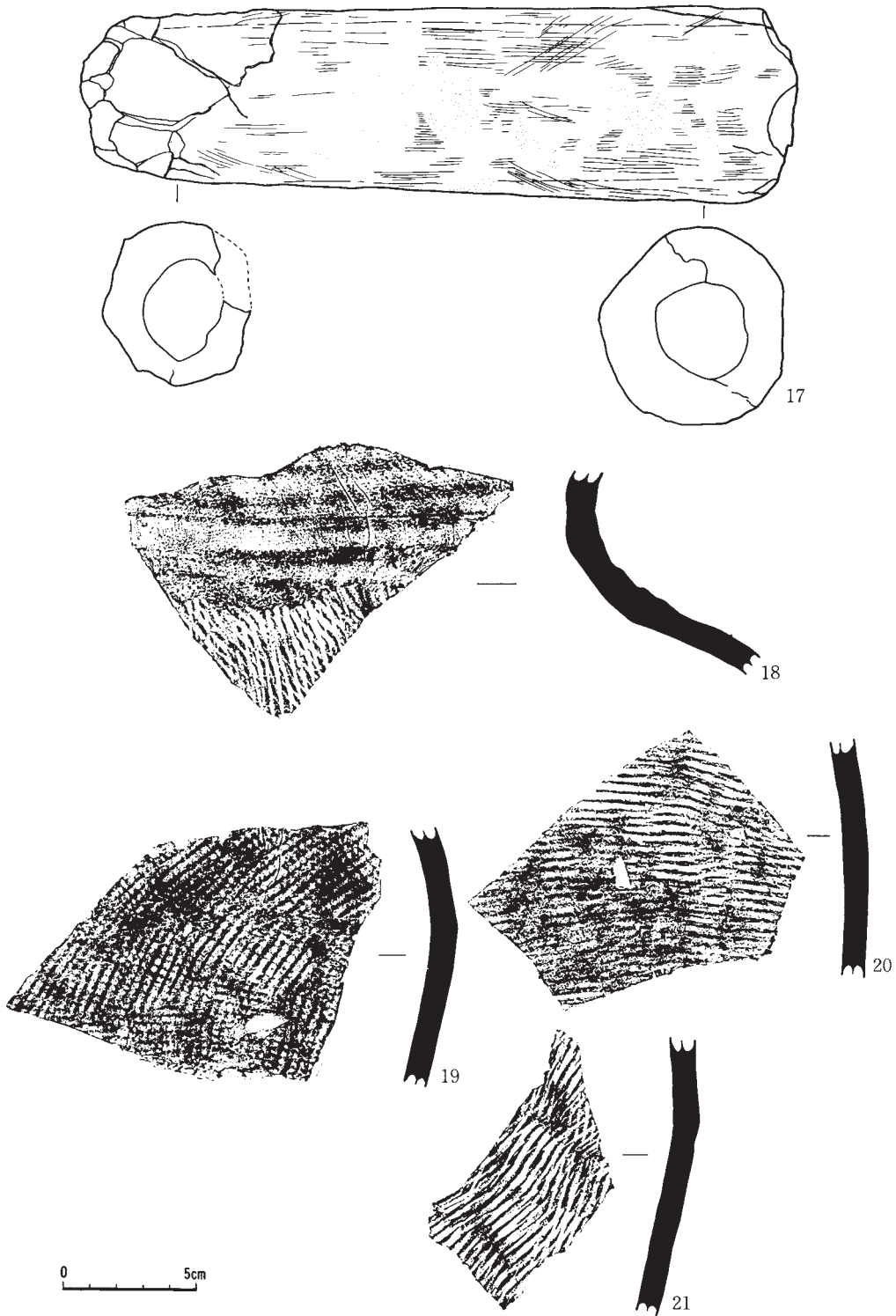
第172图 第417~422号土坛



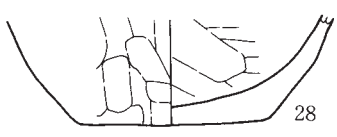
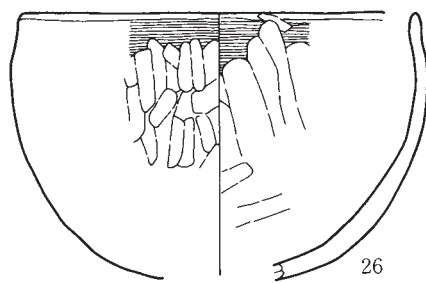
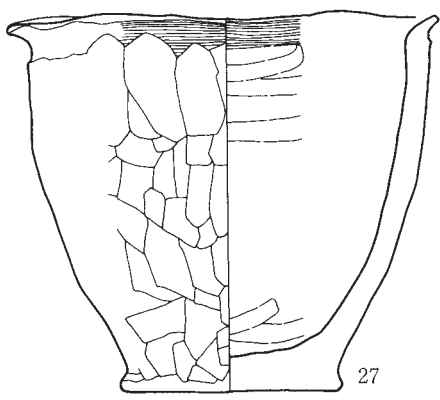
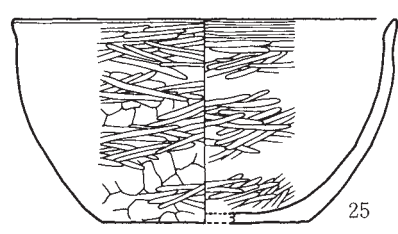
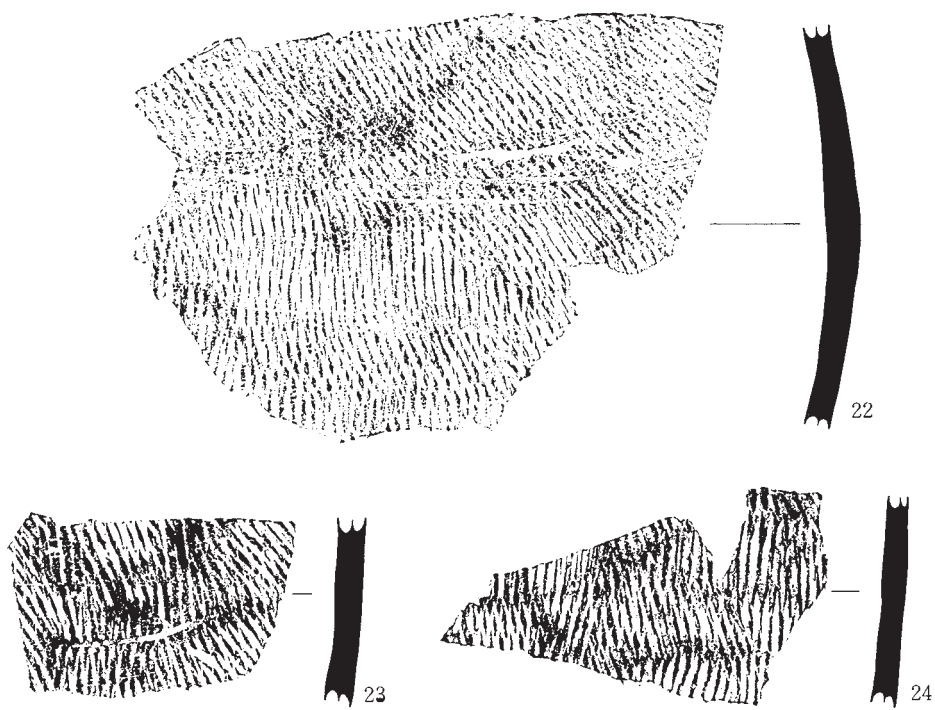
第173图 第301号竖穴住居跡出土遺物実測図



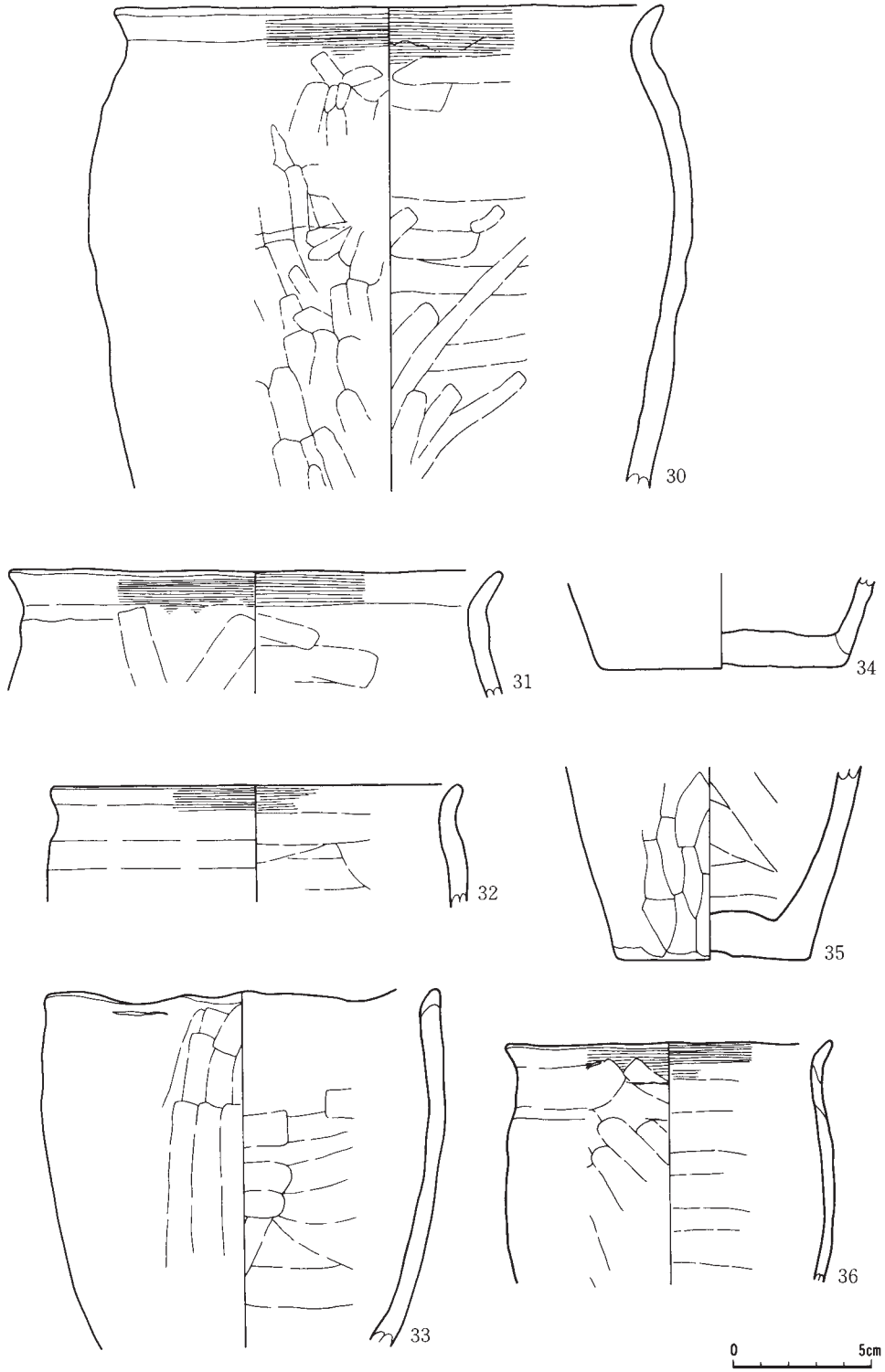
第174図 第302号豎穴住居跡出土遺物実測図



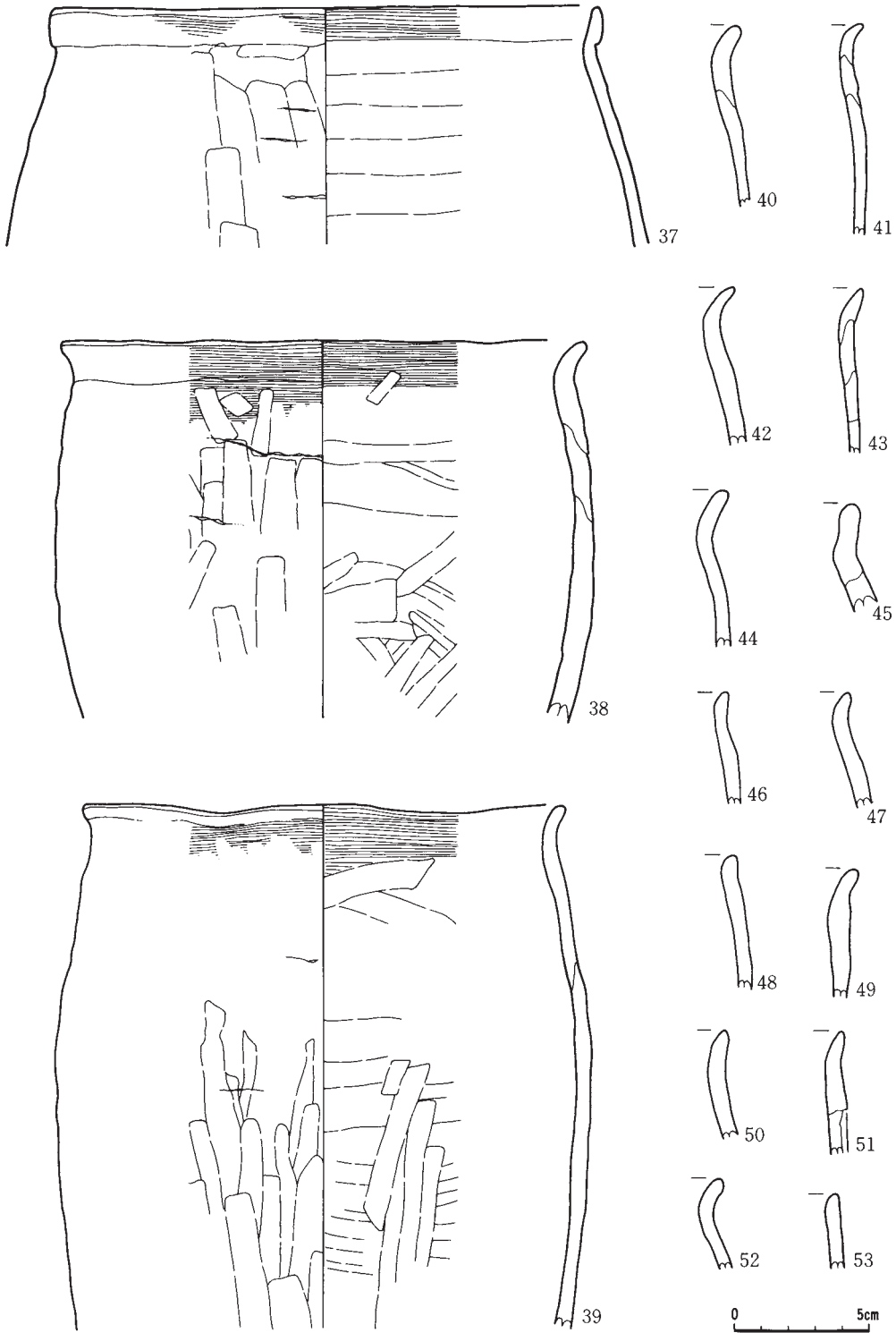
第175图 第302号竖穴住居跡出土遺物実測図



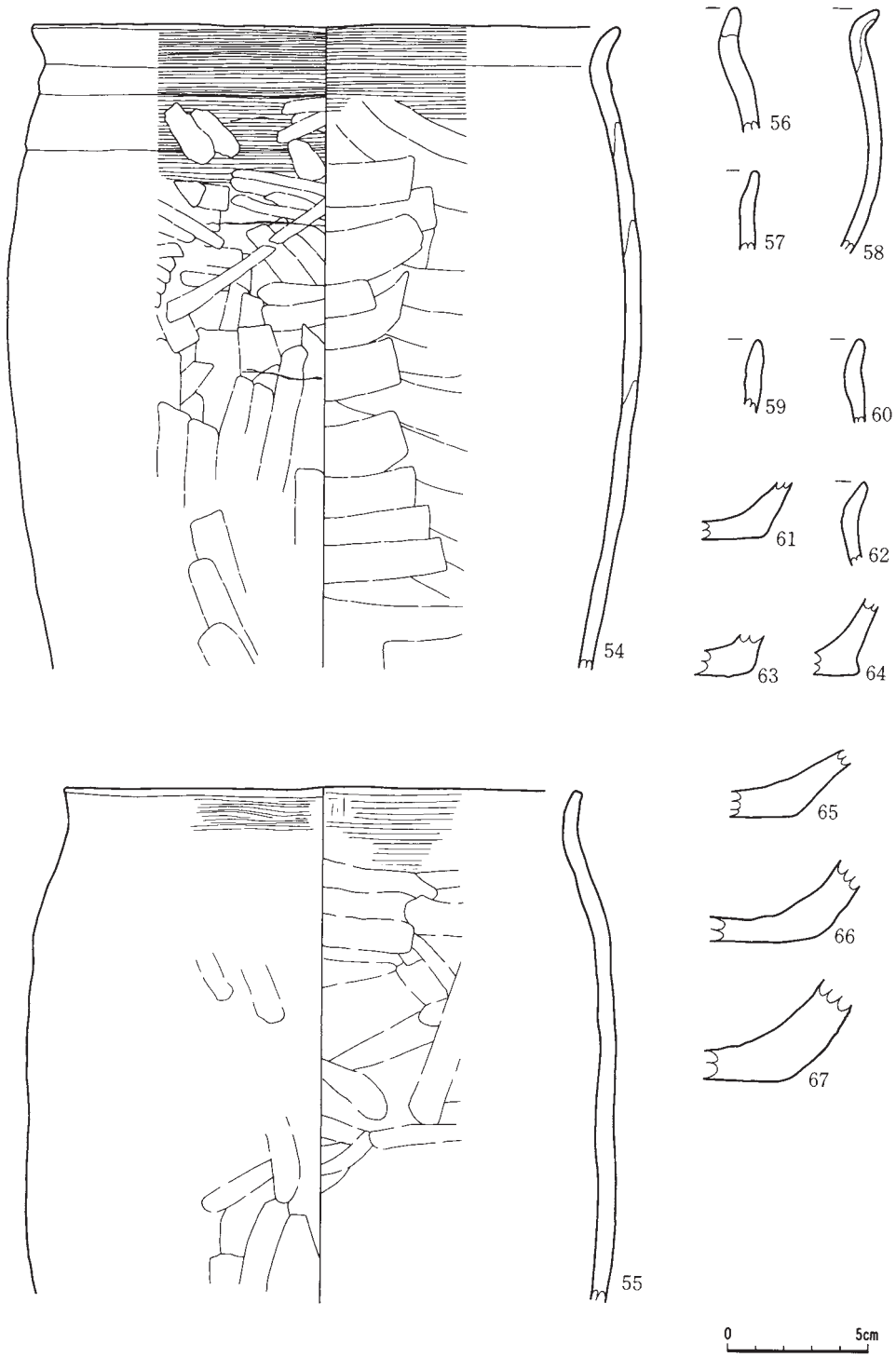
第176图 第302·303号竖穴住居迹出土遗物实测图



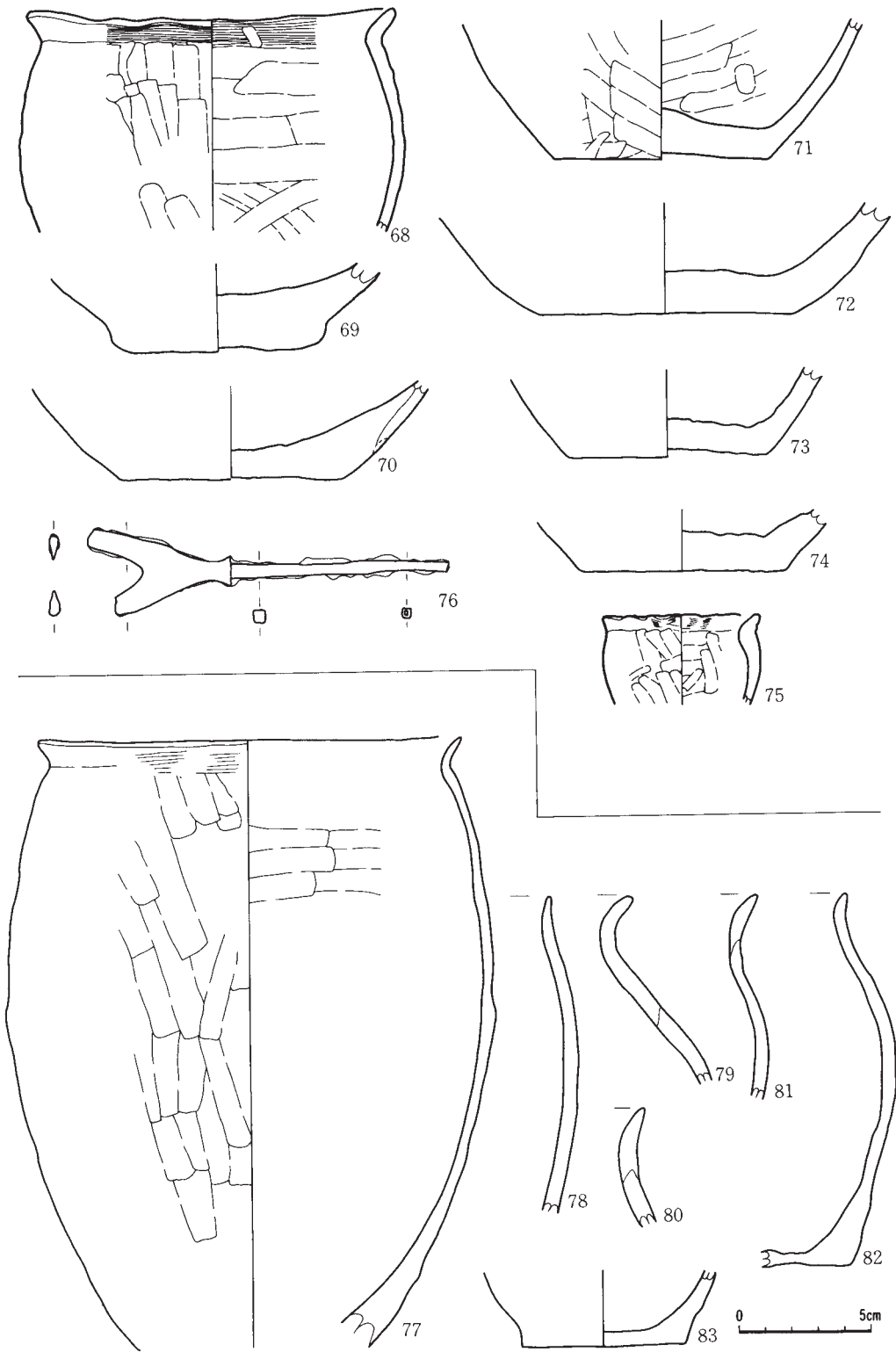
第177图 第303号竖穴住居跡出土遺物実測図



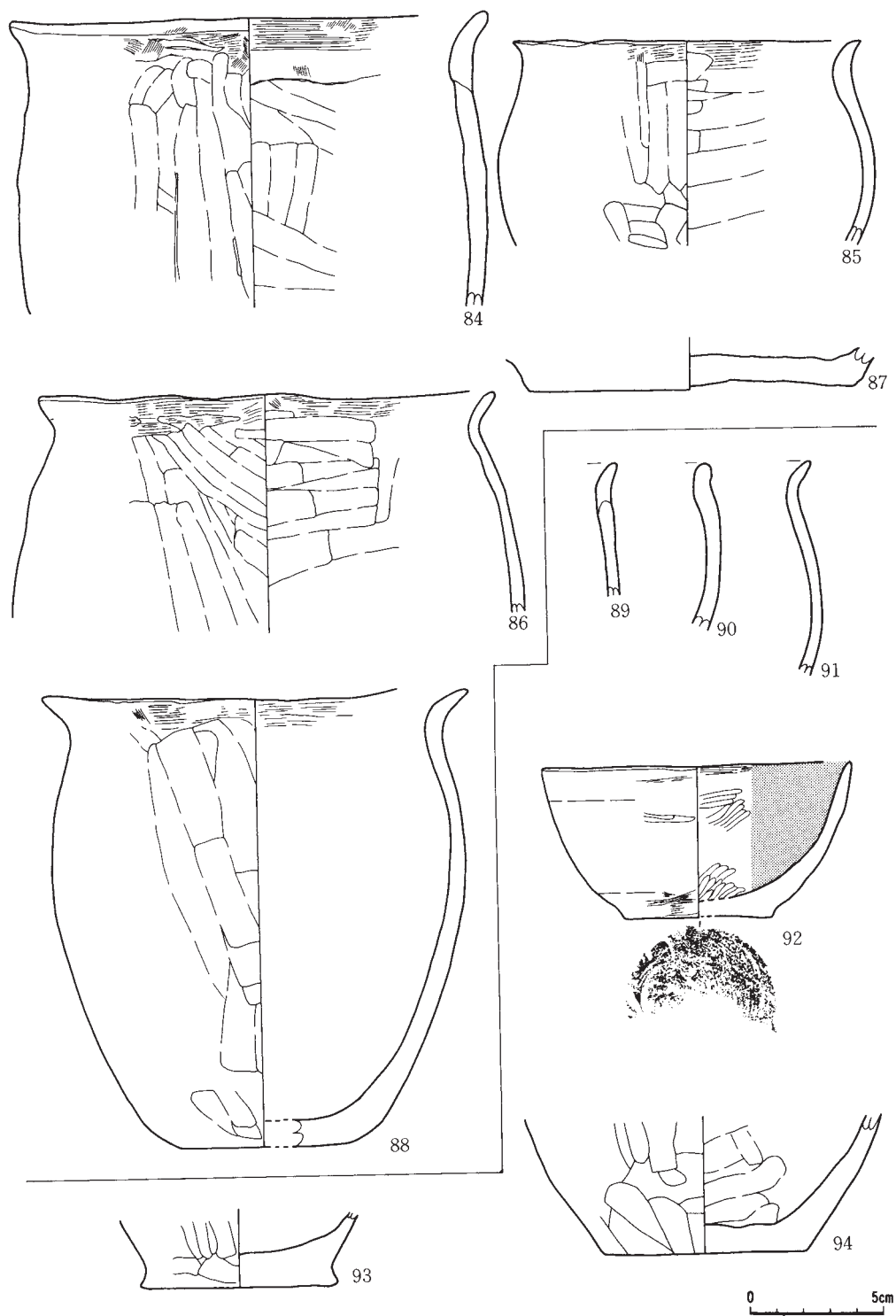
第178图 第303号竖穴住居跡出土遺物実測図



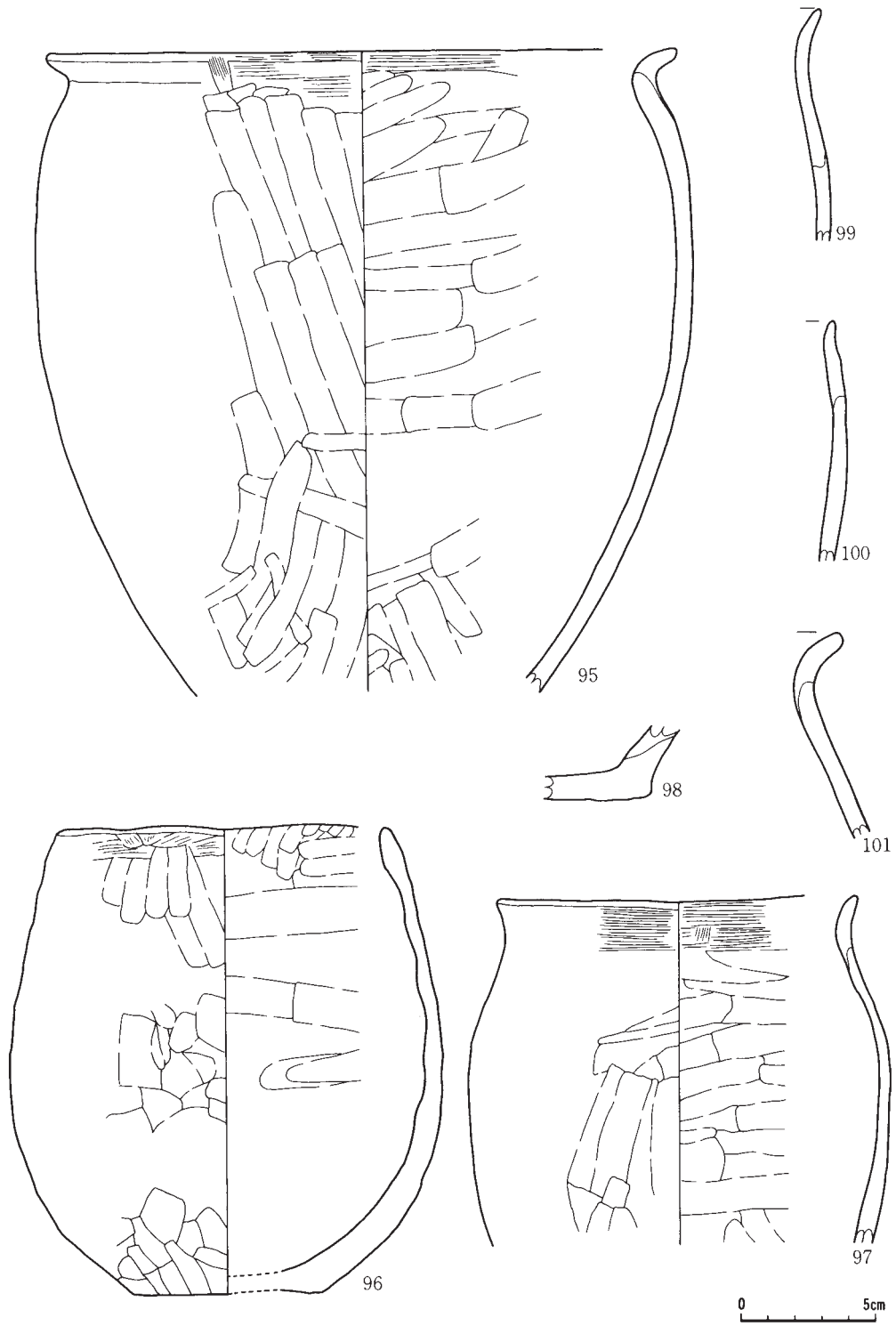
第179图 第303号豎穴住居跡出土遺物実測図



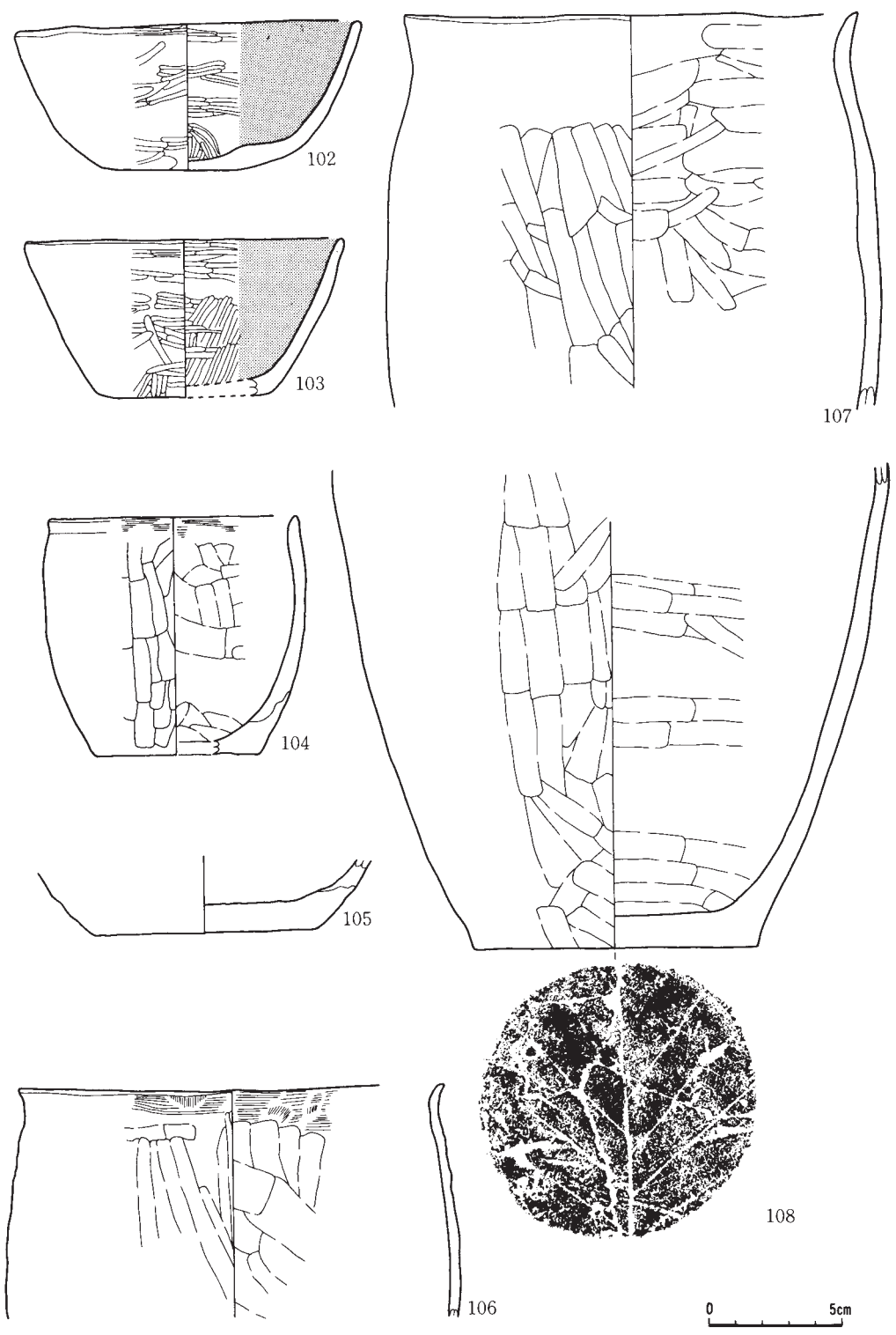
第180图 第303·304号竖穴住居跡出土遺物実測図



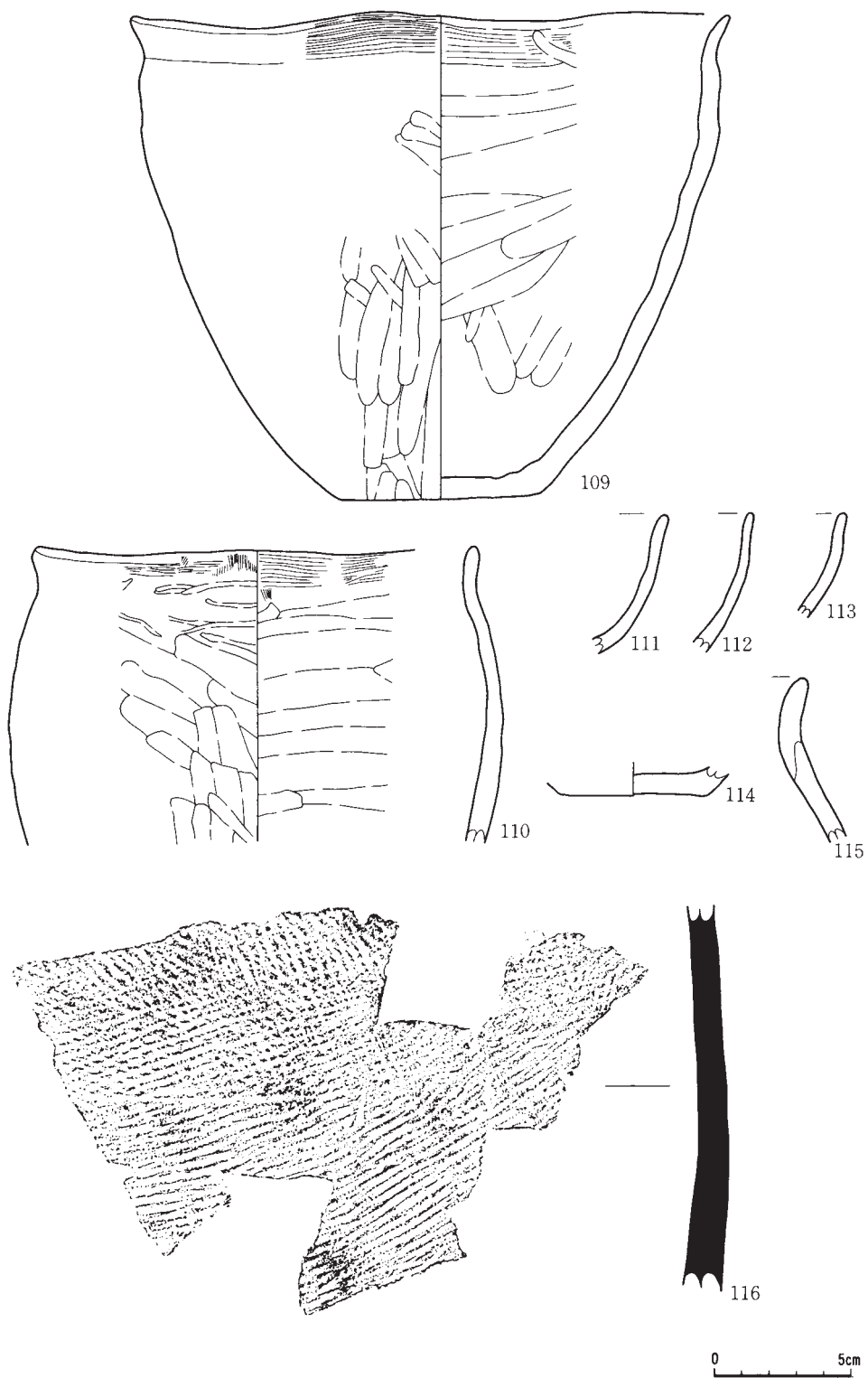
第181図 第304・305号竖穴住居跡出土遺物実測図



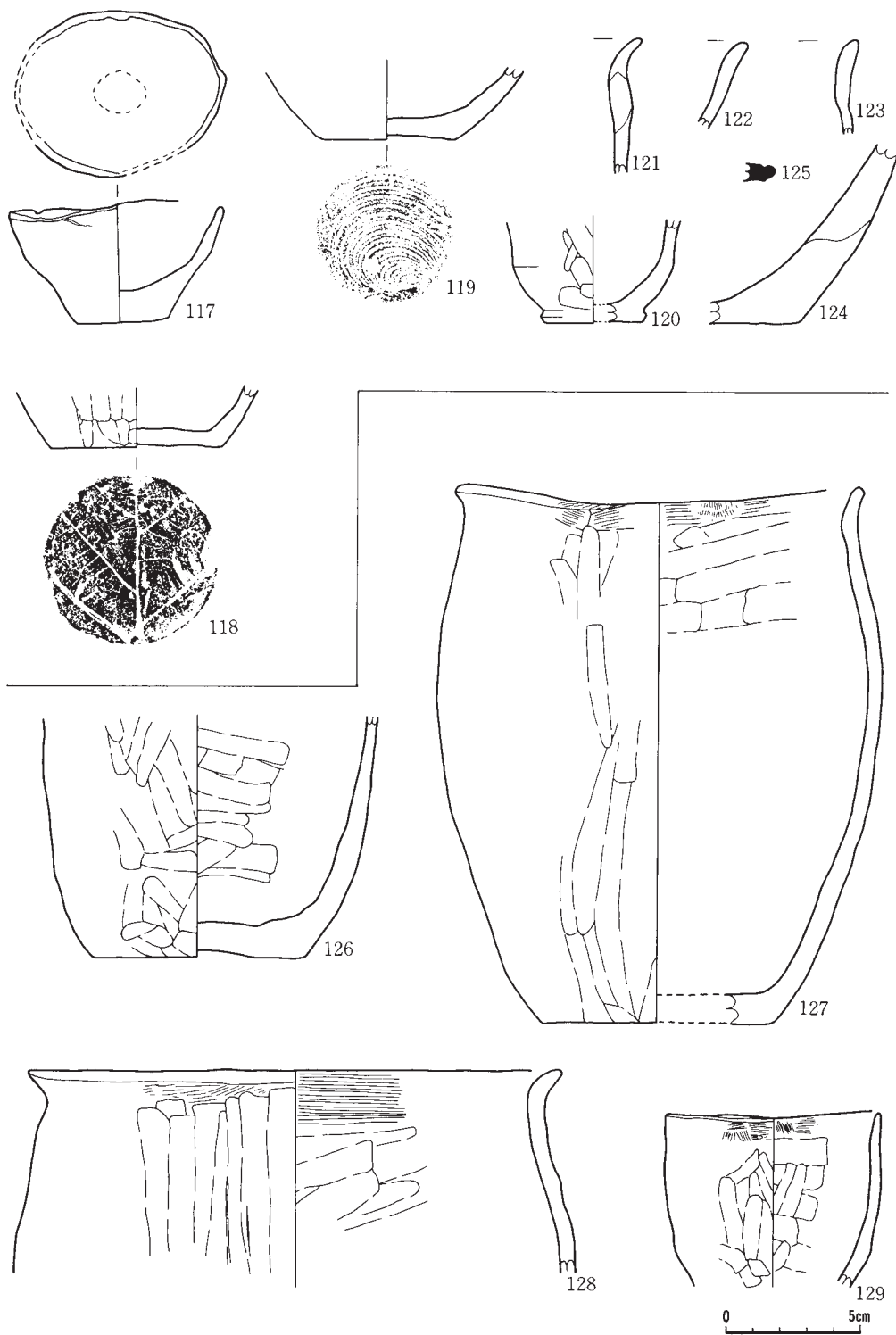
第182図 第305号竖穴住居跡出土遺物実測図



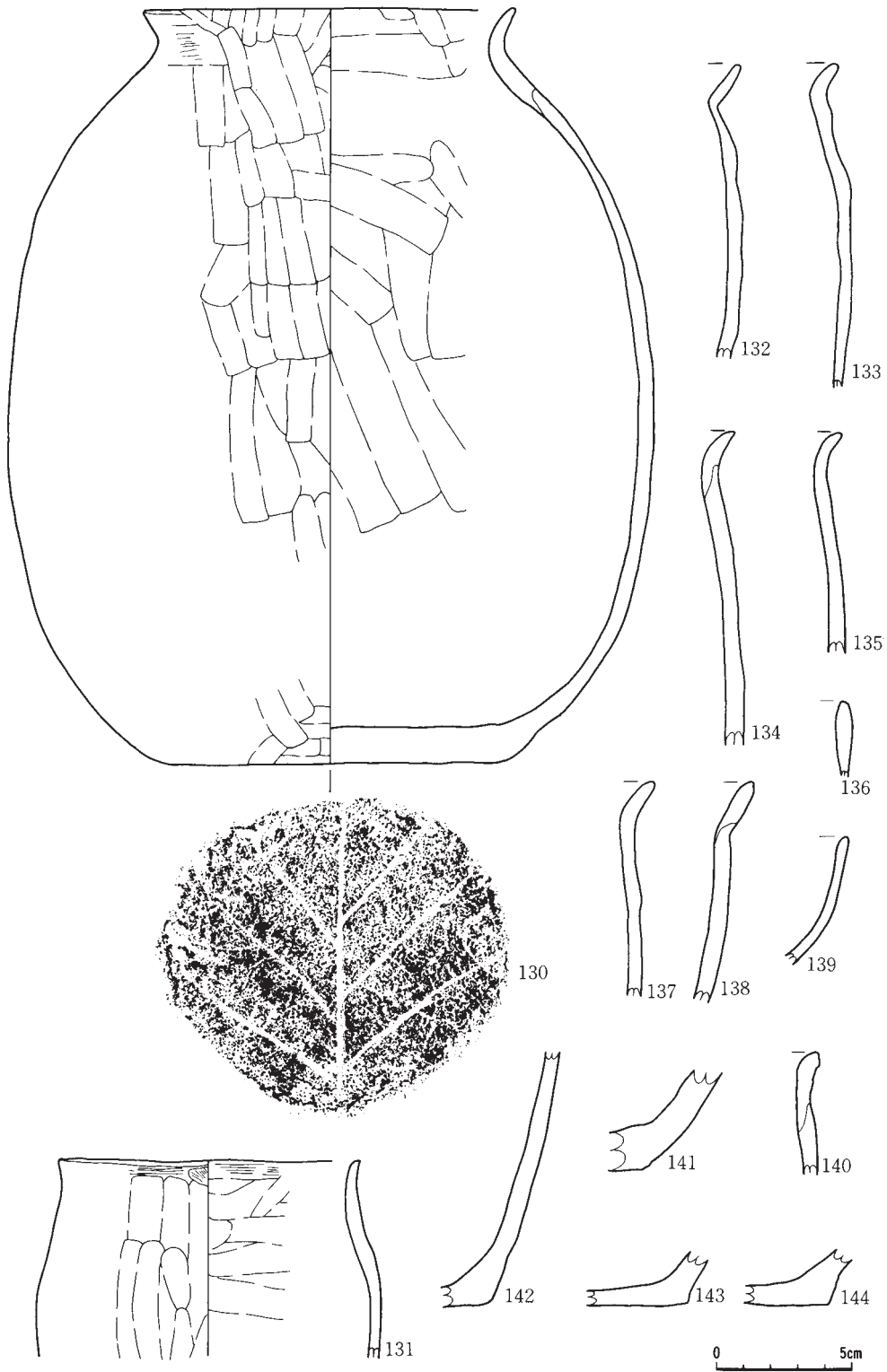
第183図 第306号豎穴住居跡出土遺物実測図



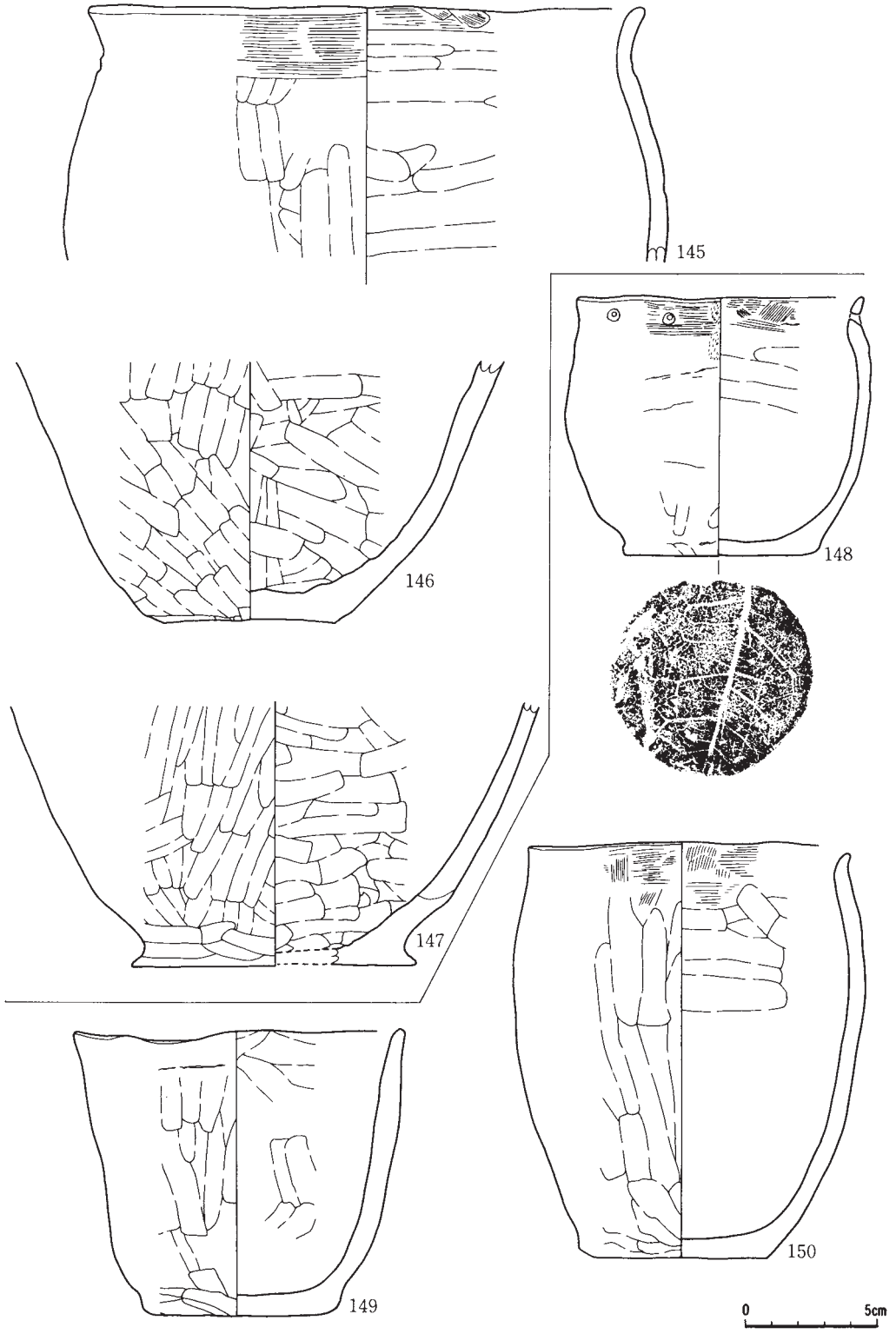
第184图 第306号竖穴住居跡出土遺物実測図



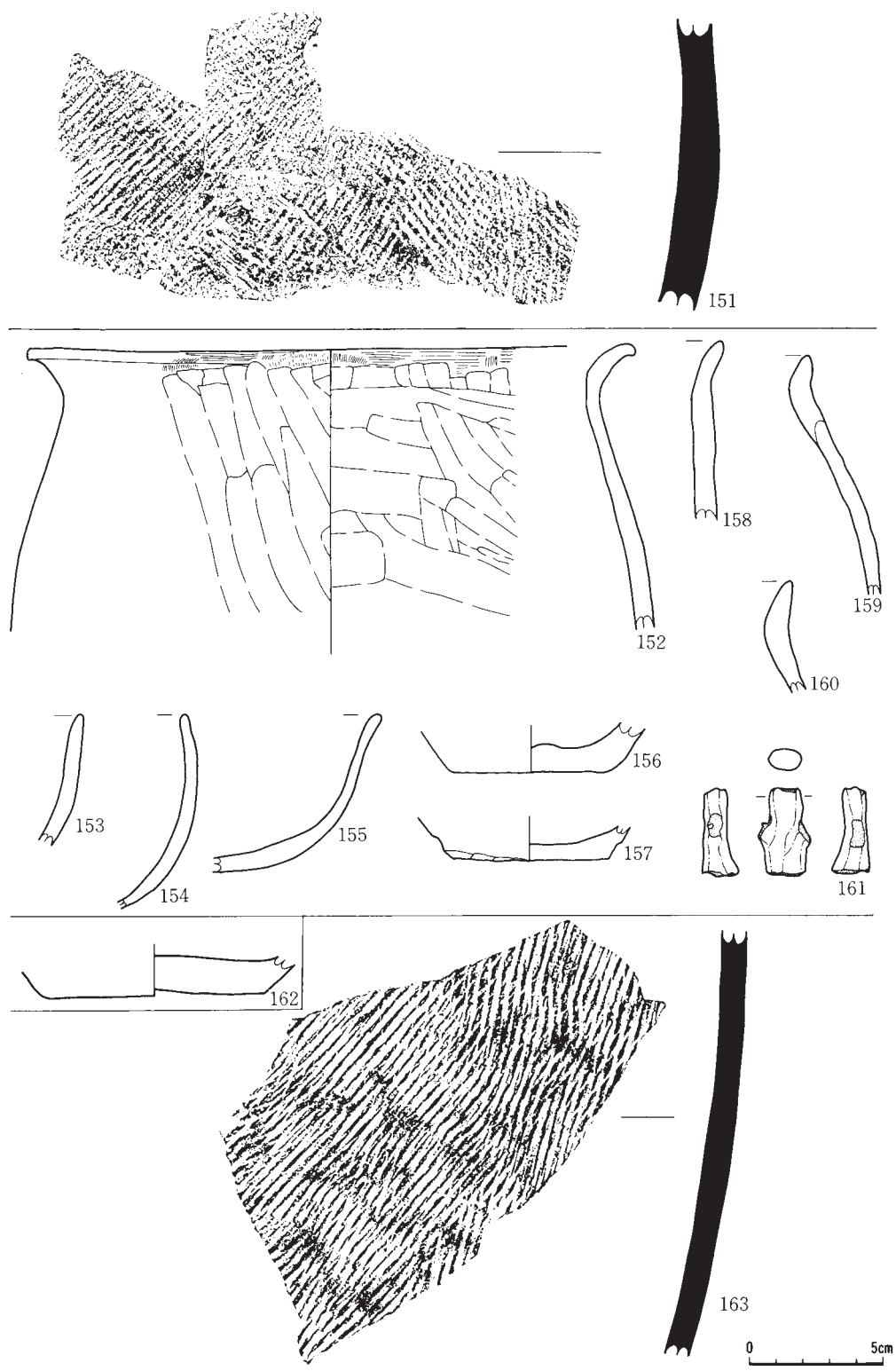
第185图 第320·321号豎穴住居跡出土遺物実測図



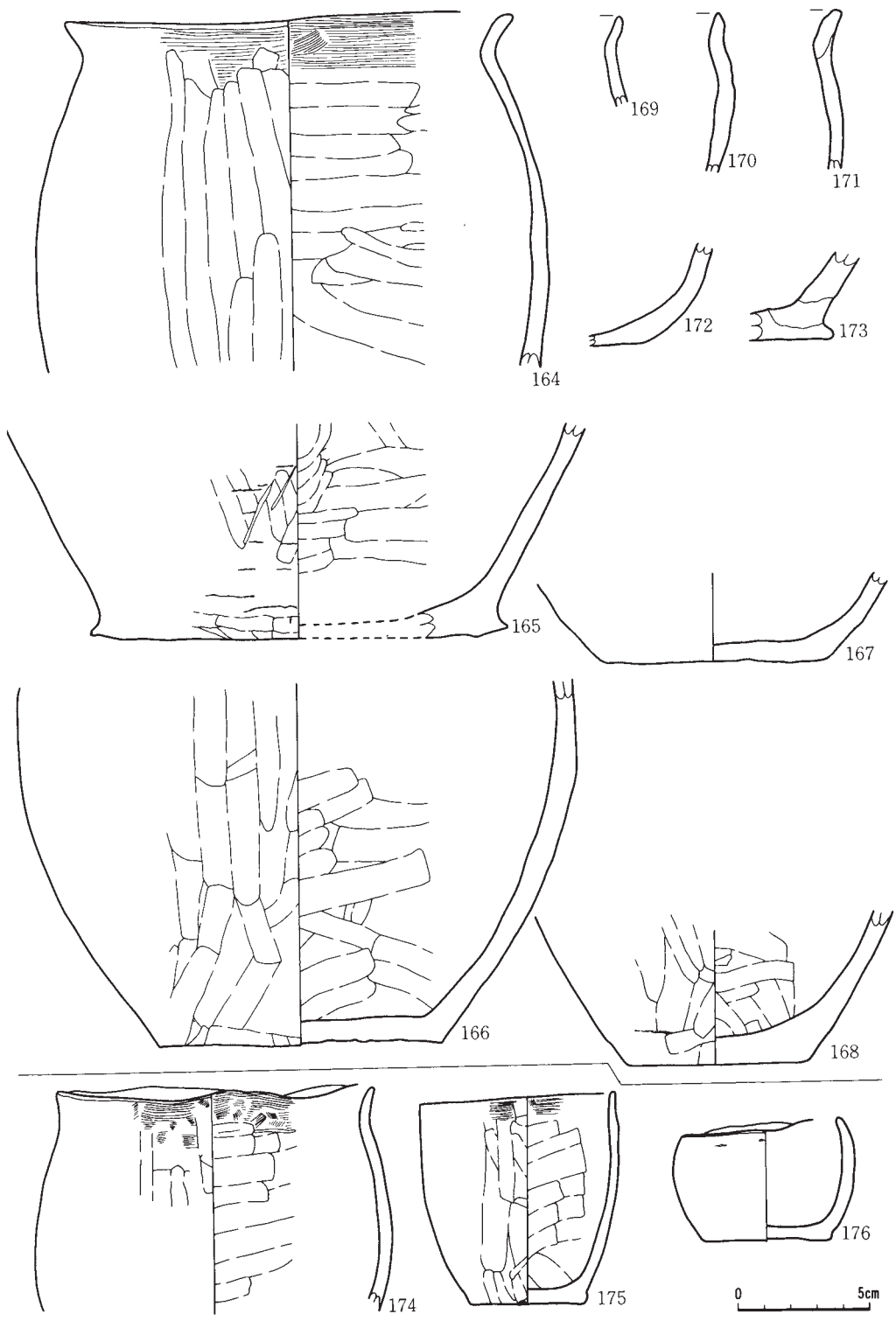
第186图 第321号竖穴住居跡出土遺物実測図



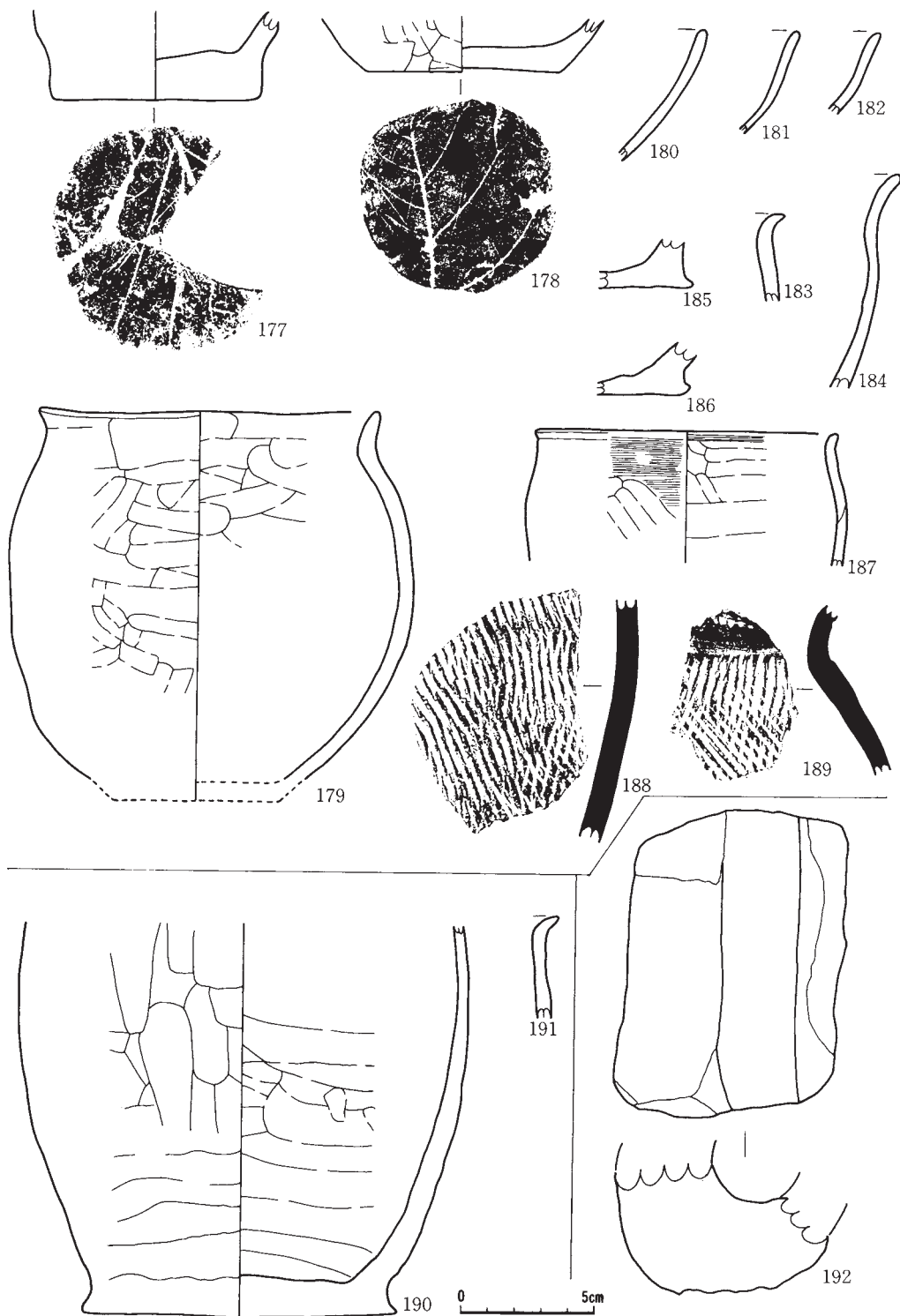
第187图 第321·322号豎穴住居跡出土遺物実測图



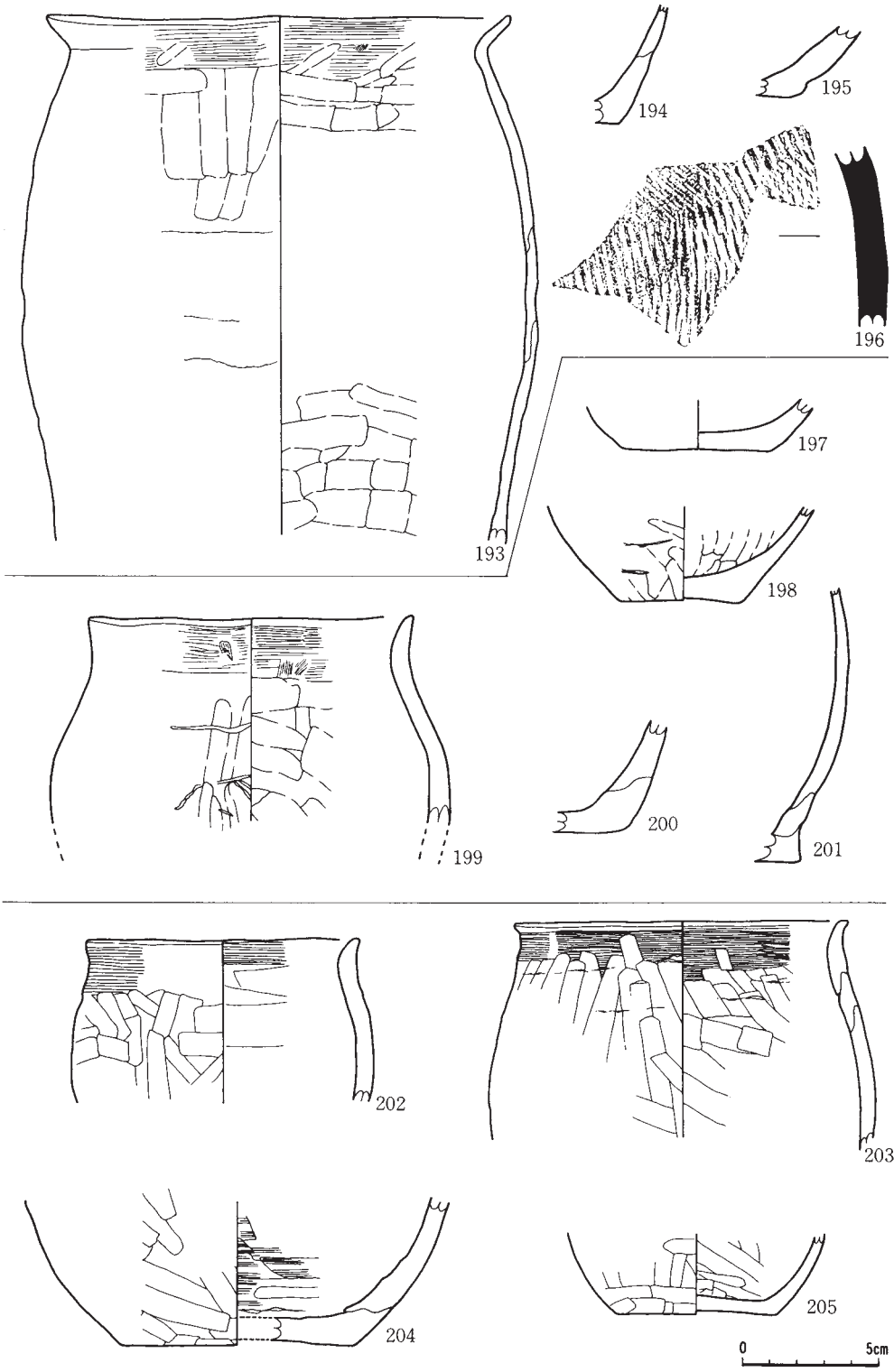
第188図 第322~325号竖穴住居跡出土遺物実測図



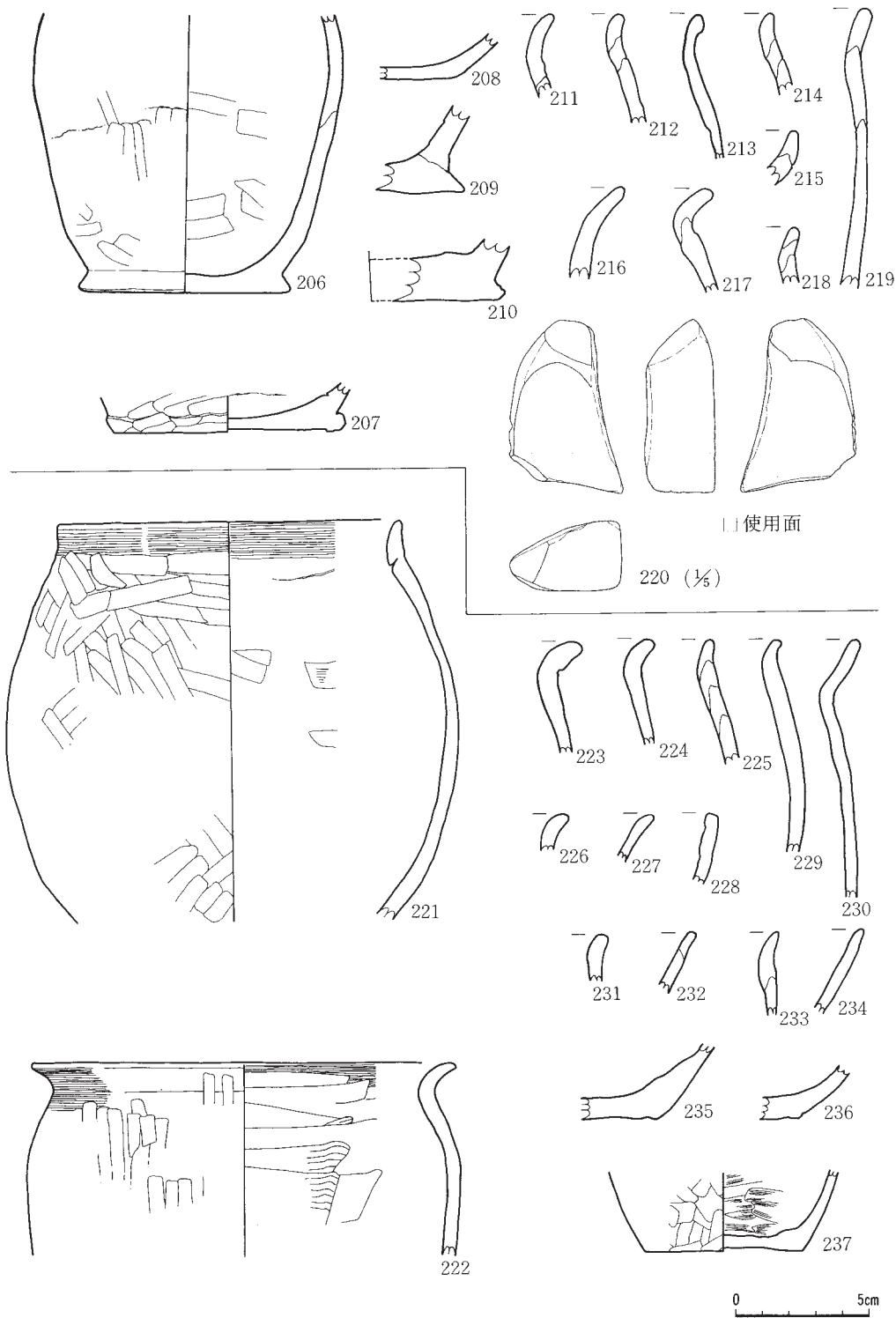
第189图 第325·326号竖穴住居跡出土遺物実測図



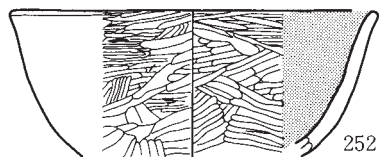
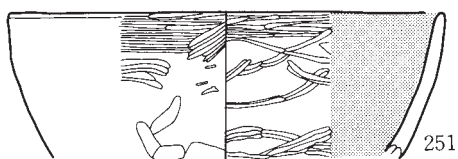
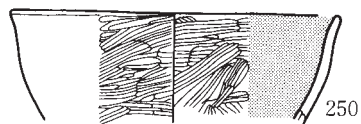
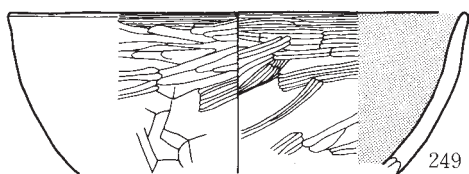
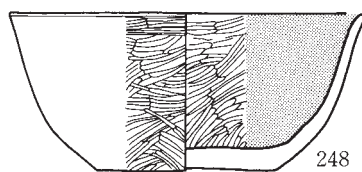
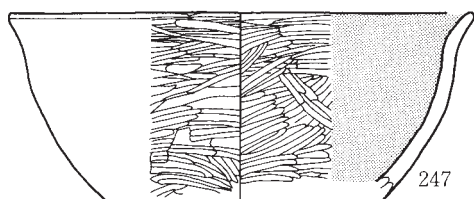
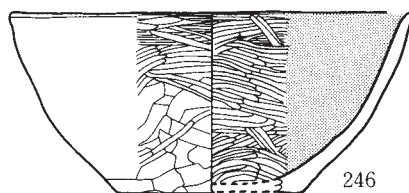
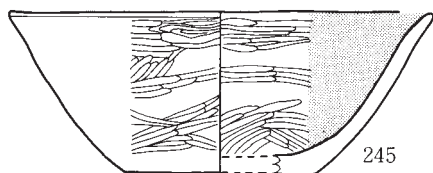
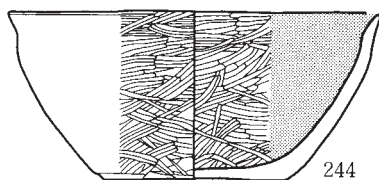
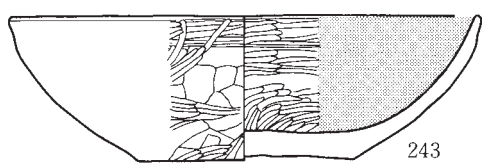
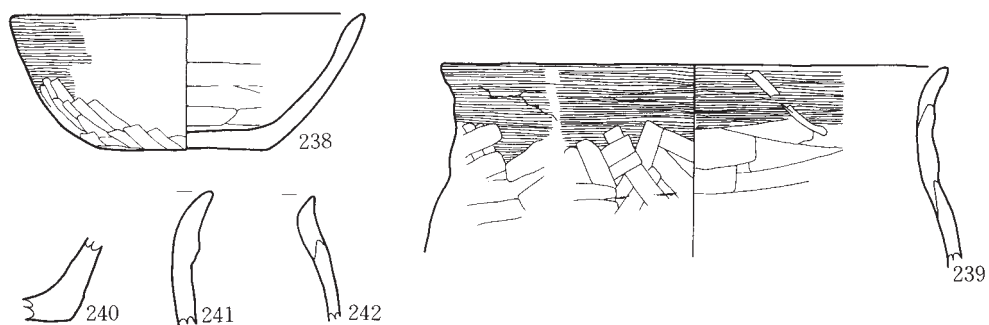
第190图 第326~328号竖穴住居跡出土遺物実測図



第191图 第328·329·401号竖穴住居跡出土遺物実測図

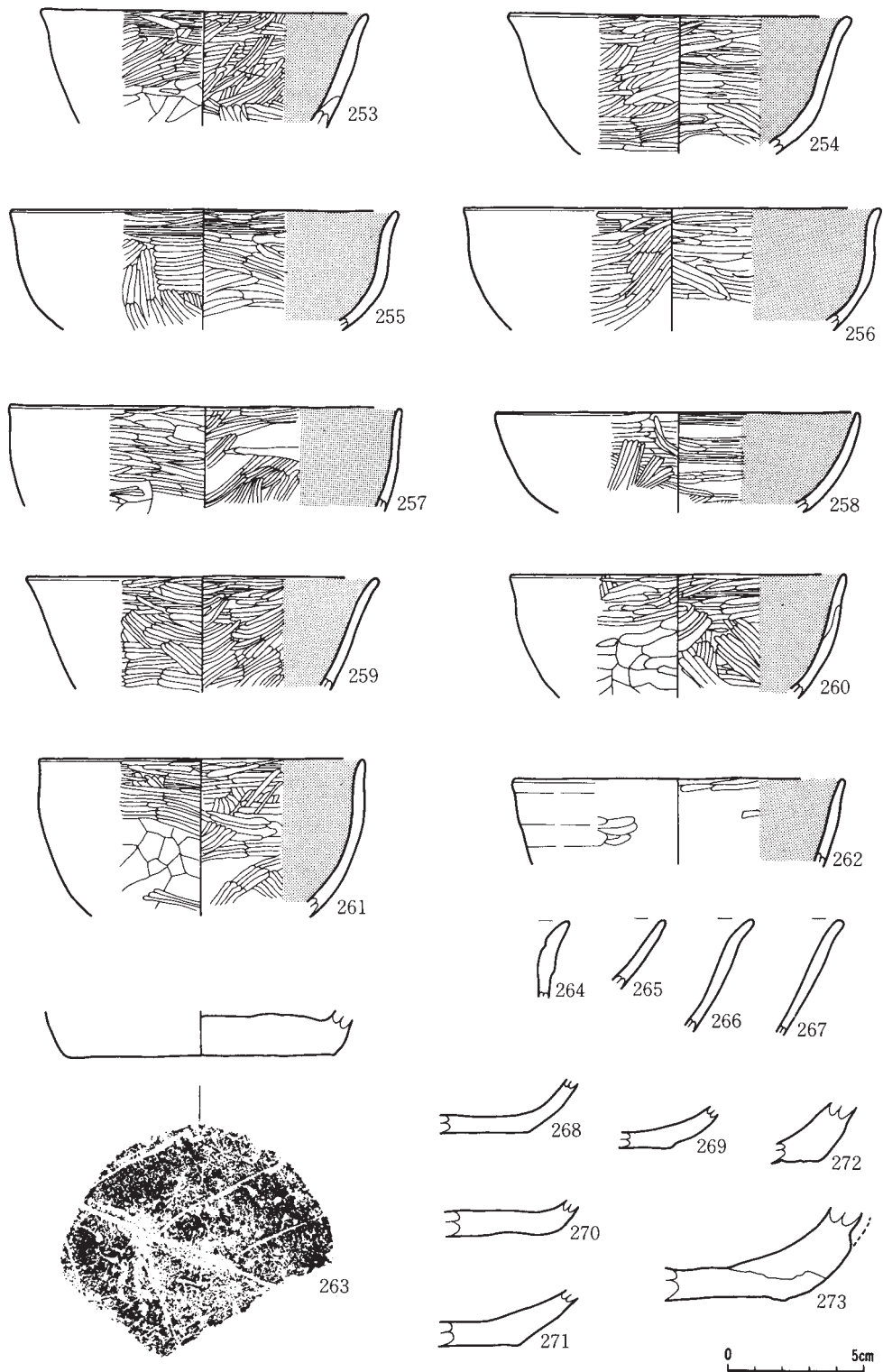


第192図 第401・402号竖穴住居跡出土遺物実測図

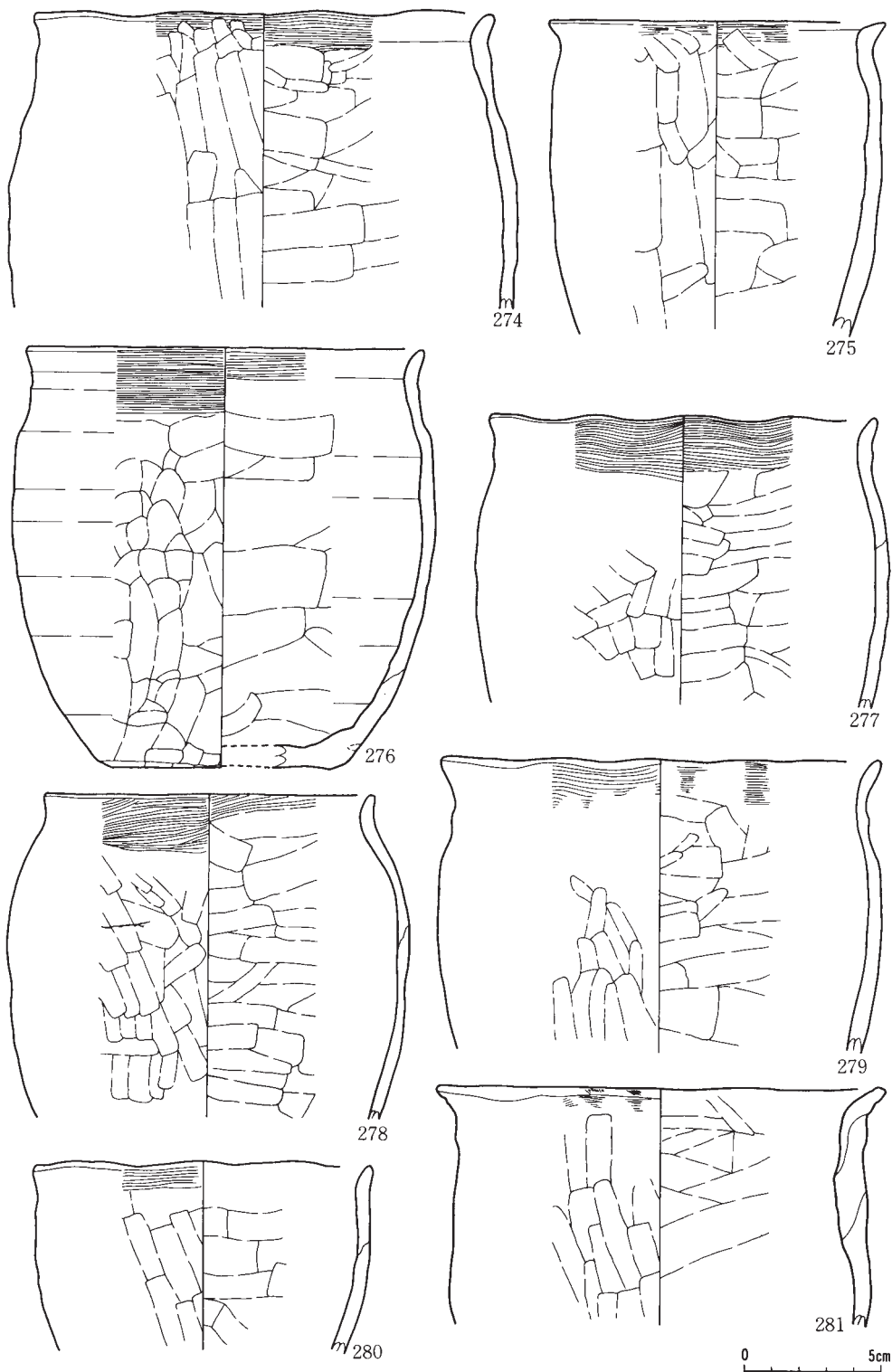


0 5cm

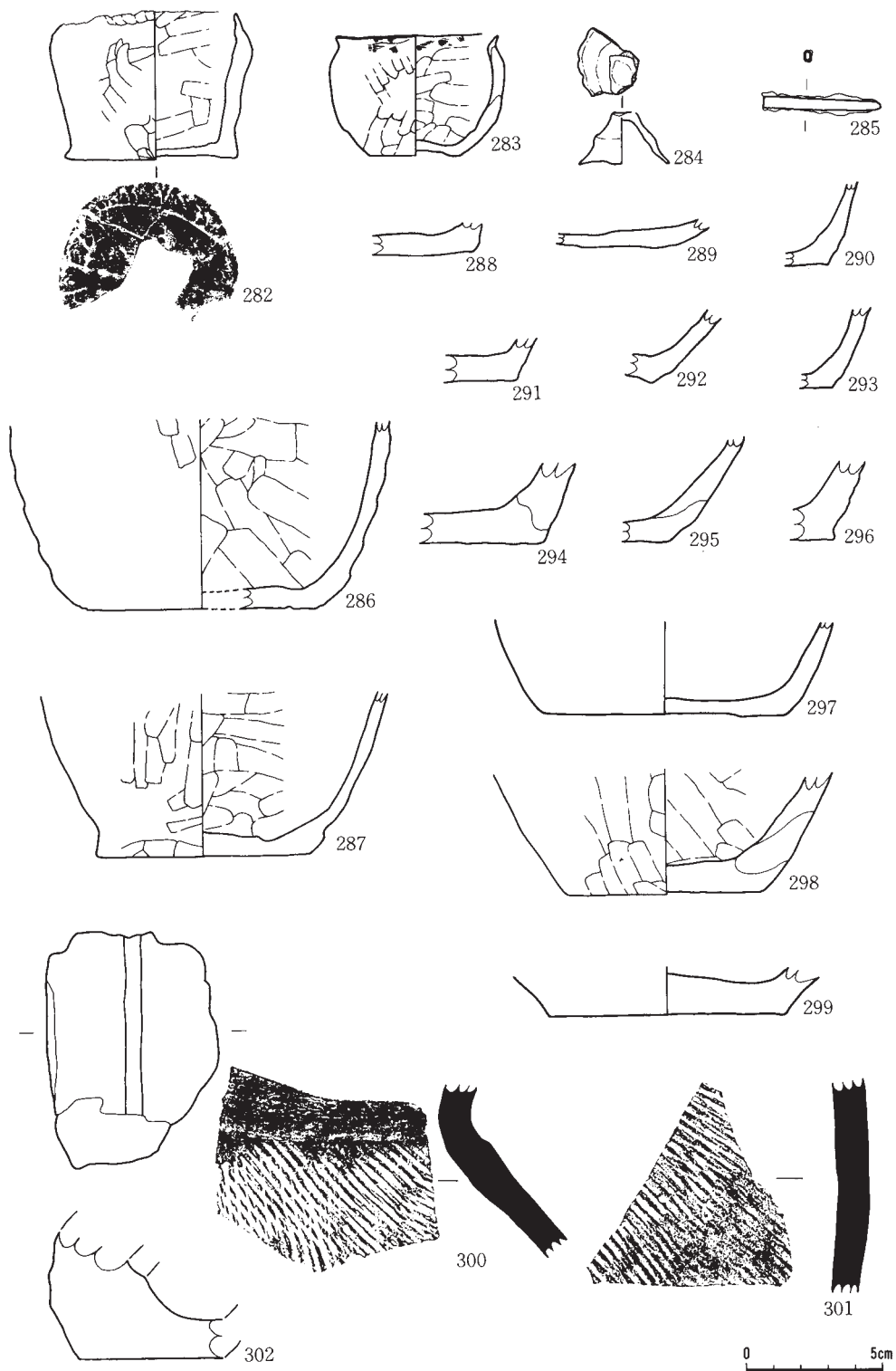
第193图 第403号堅穴住居跡・第308号土坑出土遺物実測図



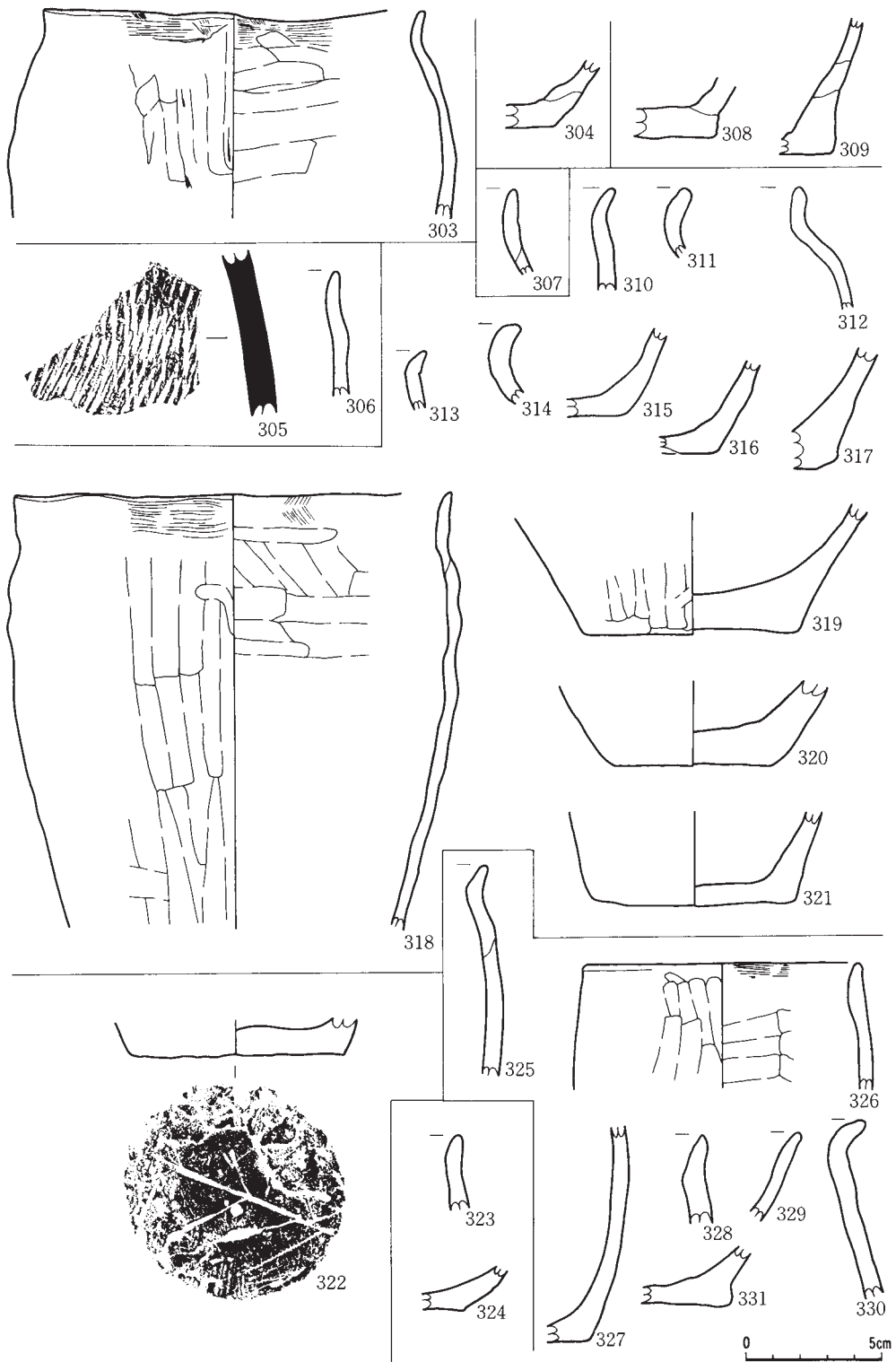
第194图 第308号土坛出土遗物实测图



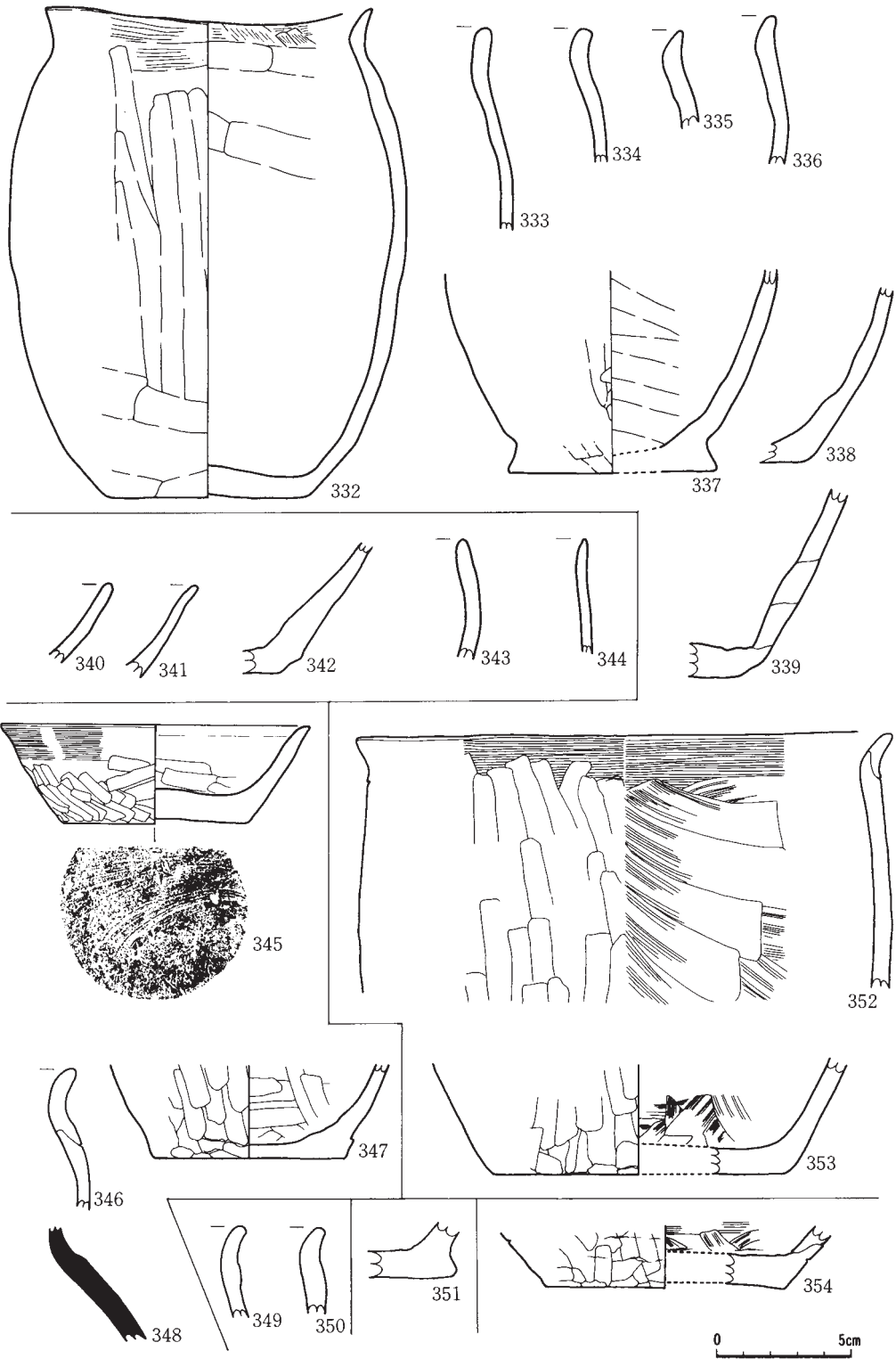
第195図 第309号土坑出土遺物実測図



第196图 第309号土坑出土遗物实测图



第197图 第310~332号土坑出土遺物実測図



第198図 第333~336・401~418土塚出土遺物実測図

第2節 遺構外出土遺物

第3・4次の調査で出土した歴史時代の遺物は土師器片・須恵器片等約650片である。すべて破片での出土で、接合するものは少ない。ほとんどが土師器長胴甕の胴部片である。

土師器

坏 ほとんどが内面黒色処理の施されたもので破片数は少なく、総個体数は不明である。

口縁部がやや外反するものと内湾ぎみのものがあり、底部外面には回転糸切り痕が観察されるものと切り離し後に調整が加えられているものがある。二次火熱を受けて黒色処理部分が赤変しているものも数片認められる。

甕 小形甕と長胴甕とがあり、長胴甕の破片がほとんどを占める。

口縁部は胴部より肥厚するものとほぼ同様の厚さをもつものがあり、短かく外反するものが多い。また直立するもの内傾するものなど形状は多岐に亘る。直立及び内傾するものは小形のものが多い。胴部は上位に最大径を有するもの及び中位に最大径を有するものがあり、前者が多い。底部の立ち上がり方は多様であるが、おおむね緩い立ち上がりである。かく状に張り出すものも認められ、底面に木葉痕を有するものも数点ある。

器外面の整形痕は、底部から胴部中央にかけてはケズリの痕跡が認められ、さらにヘラ状工具によるナデが施されている。ケズリの痕跡が口縁部直下に及んでいるものも数点ある。口縁部は横位に指頭等によるナデが施されている。

器内面は口縁部は横ナデ・胴部から底部はヘラ状工具による横位・斜位のナデが施されている。外面に比してていねいな調整が成されている。

小形のもの全般に精緻な作りのものが多く、長胴甕が多く歪んでいるのに対して、歪みは少い。補傾孔を有するものも認められた。

8は、口縁部が長く外反し、器外面から口縁部内面にミガキが施され、非常に光沢がある。他の甕に比して古手の感を受けるが、1片だけの出土で、器全容を把握できず、

その他、

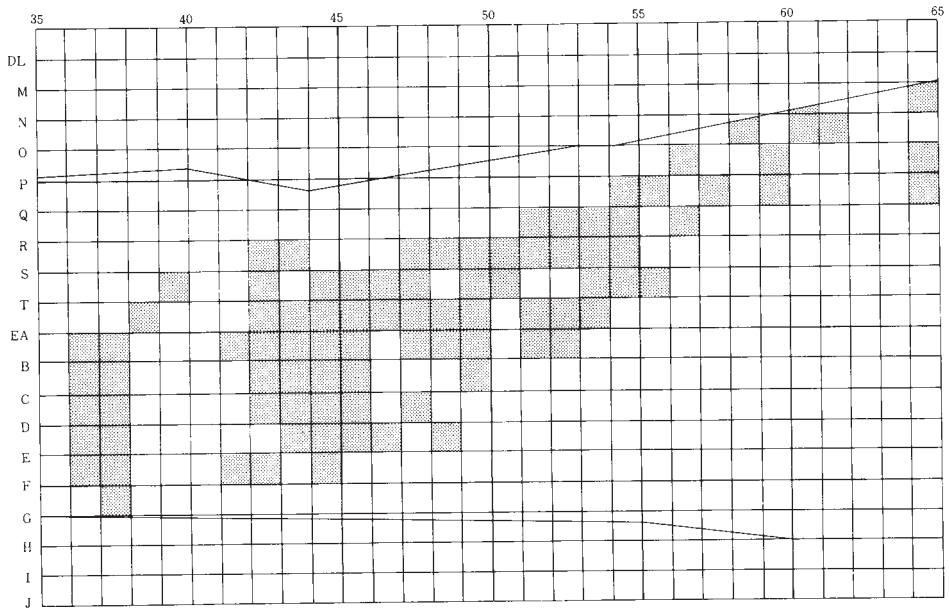
7は、長頸壺の頸部片と思われるもので、内外面とも黒色である。黒色処理によるものと推定される。胎土は精選されているが3mm大の細礫を微量含んでいる。

袖珍土師器の破片と思われるものが数点認められた。

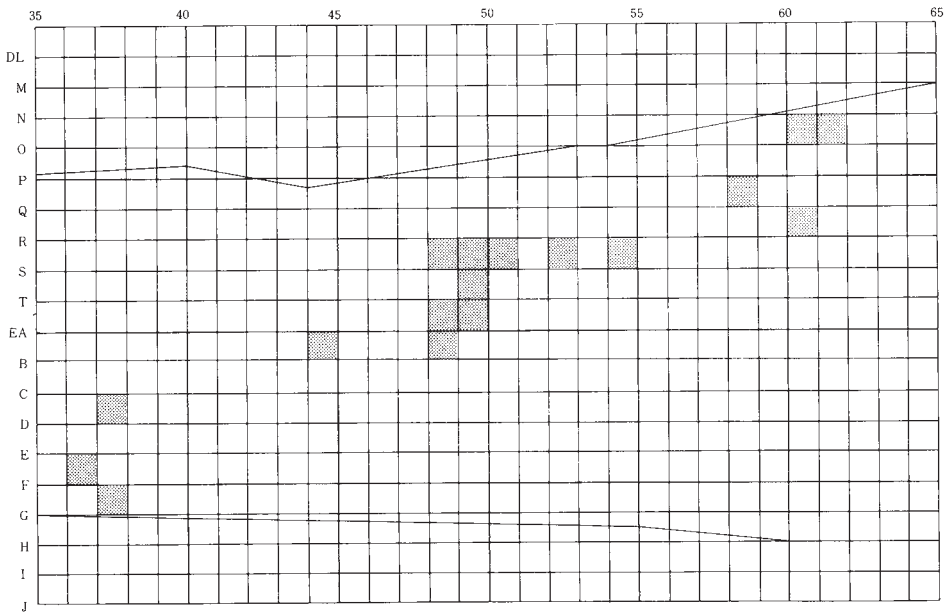
須恵器

すべて大窯の破片で、総個体数は不明である。外面に敲き目が認められる。無文の破片も1点認められた。内面に明確な当て木の痕跡を有するものはないが、器内面に若干の起伏が認められる。坏は本遺跡では出土しなかった。(白鳥)

土師器

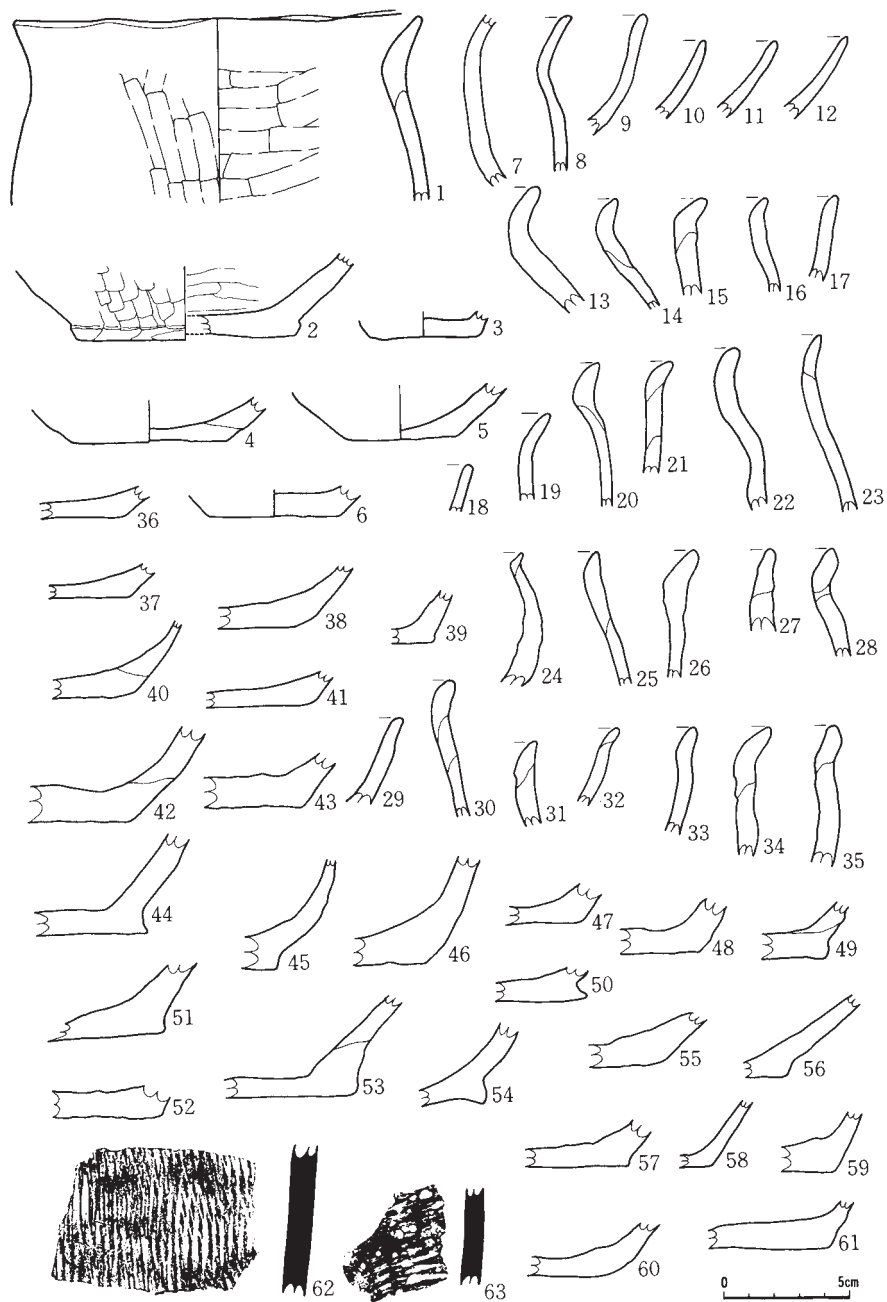


須恵器



0 20 m

第199図 出土遺物分布図



第200図 遺構外出土遺物実測図

第81表 出土遺物観察表(1)

図	番	器種	層	外	面	内	面	口	径	底	径	高	さ	備	考
第301号住居跡															
	1	土坏	床	直	ミ	ガ	キ	ミ	ガ	キ	・	内	黒	(122)	
	2	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	(118)	60
	3	土甕	床	直	ケ	ズ	リ	・	ナ	テ	ナ	テ	ナ	184	79
	4	"	カ	マ	ド	ナ	テ	ナ	テ	ナ	テ	ナ	テ	91	66
	5	土坏	床	直	"	"	"	"	"	"	"	"	"	(62)	297
	6	土甕			ケ	ズ	リ	・	ナ	テ	ナ	テ	ナ	(76)	97
	7	"	カ	マ	ド	ナ	テ	ナ	テ	ナ	テ	ナ	テ	(91)	
	8	須	甕												木葉痕
第302号住居跡															
	9	土甕			ケ	ズ	リ	・	ナ	テ	ナ	テ	ナ	(136)	94
	10	"			"	"	"	"	"	"	"	"	"	117	(72)
	11	"			"	"	"	"	"	"	"	"	"	(110)	179
	12	"			ナ	テ	ナ	テ	ナ	テ	ナ	テ	ナ		186
	13	"			ケ	ズ	リ	・	ナ	テ	ナ	テ	ナ		(84)
	14	"			ナ	テ	ナ	テ	ナ	テ	ナ	テ	ナ		(54)
	15	"			ナ	テ	ナ	テ	ナ	テ	ナ	テ	ナ		
	16	鉄	器												刀子素材
	17	羽	口												
	18	須	甕		タ	タ	キ	目							頸部
	19	"			"	(格	子	目	状)					肩部
	20~24	"			"										
第303号住居跡															
	25	土坏			ミ	ガ	キ	ミ	ガ	キ	・	内	黒	(128)	70
	26	"			"	"	"	"	"	"	"	"	"	(132)	68
	27	"			"	"	"	"	"	"	"	"	"	(144)	126
	28	土甕	カ	マ	ド	ケ	ズ	リ	・	ナ	テ	ナ	テ	ナ	64
	29	土坏	"												
	30	土甕			ナ	テ	ナ	テ	ナ	テ	ナ	テ	ナ	(200)	
	31	"			"	"	"	"	"	"	"	"	"	(180)	
	32	"			"	"	"	"	"	"	"	"	"	(150)	
	33	"			ケ	ズ	リ	・	ナ	テ	ナ	テ	ナ	(144)	
	34	"			"	"	"	"	"	"	"	"	"		(86)
	35	"	カ	マ	ド	ケ	ズ	リ	・	ナ	テ	ナ	テ	ナ	70
	36	"	カ	マ	ド	ナ	テ	ナ	テ	ナ	テ	ナ	テ	(118)	
	37	"	"		"	"	"	"	"	"	"	"	"	(204)	
	38	"	"		"	"	"	"	"	"	"	"	"	(196)	
	39	"	カ	マ	ド	"	"	"	"	"	"	"	"	(180)	
	40	"	カ	マ	ド	"	"	"	"	"	"	"	"		
	41	"	カ	マ	ド	"	"	"	"	"	"	"	"		
	42~51	"													
	52	"													赤焼
	53	"	ビ	ツ	ト										
	54	"			ナ	テ	ナ	テ	ナ	テ	ナ	テ	ナ	(210)	
	55	"			ケ	ズ	リ	・	ナ	テ	ナ	テ	ナ	(186)	
	56	"	カ	マ	ド	"	"	"	"	"	"	"	"		
	57	"													
	58	"													304Hと接合
	59~67	"													
	68	"			ナ	テ	ナ	テ	ナ	テ	ナ	テ	ナ	(140)	
	69	"			ケ	ズ	リ	・	ナ	テ	ナ	テ	ナ		(62)
	70	"			"	"	"	"	"	"	"	"	"		(84)
	71	"			"	"	"	"	"	"	"	"	"		(82)
	72	"	カ	マ	ド	"	"	"	"	"	"	"	"		(98)

第82表 出土遺物観察表(2)

図番	器種	層	外面	内面	口径	底径	高さ	備考
73	土甕		ケズリ・ナデ	ナ デ		(76)		
74	"		"	"		(80)		
75	袖珍	カマド			(60)			
76	鉄鍬							雁又
第304号住居跡								
77	土甕		ナ デ		(162)			
78~80	"		"					
81	"							赤焼
82	"							
83	"					(62)		小型
84	"		ナ デ	ナ デ	(160)			
85	"		ケズリ・ナデ	"	(130)			
86	"		ナ デ	"	(172)			
87	"					(124)		
88	"		ケズリ・ナデ	ナ デ	(160)	170	(60)	
第305号住居跡								
89~90	土甕							
91	"	カマド						赤焼
92	土坏		ロクロ・ナデ	ナデ・内黒	(116)	(56)	58	回転糸切痕
93	土甕		ケズリ・ナデ			(54)		
94	"		"	ナ デ		76		
95	"		ナ デ	"	(234)			
96	"		ケズリ・ナデ	"	(120)	(72)	173	
97	"		"	"	(136)			
98~101	"							
第306号住居跡								
102	土坏	床直	ミガキ	ミガキ・内黒	131	55	51	ヘラ切り?
103	"		"	"	(120)	63	59	"
104	土甕		ナ デ	ナ デ	(94)	(62)	90	
105	"					(84)		
106	"	床直	ナ デ	ナ デ	(162)			
107	"	カマド	"	"	(172)			
108	"	床直	"	"		108		木葉痕
109	"	"	"	"	(112)	74	180	
110	"		"	"	(165)			
111	土坏		ミガキ	ミガキ・内黒				
112	"	床直	"	"				
113	"		"	"				
114	"					54		
115	土甕							
115	須甕							
第320号住居跡								
117	袖珍				(59~79)	34	53	
118	土甕		ナ デ	ナ デ		64		木葉痕
119	土坏					50		回転糸切痕
120	袖珍		ナ デ			(38)		
121	土甕							
122	土坏		ミガキ	ミガキ・内黒				
123	"							赤焼
124	土甕							
125	須甕							口唇端

第83表 出土遺物観察表(3)

図番	器種	層	外面	内面	口径	底	徒高	高さ	備考	
第321号住居跡										
126	土甃	床直	ナ	テ			78			
127	"	"	"	"	151	(66)	200			
128	"	"	"	"	(200)					
129	袖珍	"								
130	土甃	"	ナ	テ	ナ	テ	(138)	130	231	木葉痕
131	"	"	"	"	(112)					
132~133	"	カマド								
134~135	"	床直								
136	"	"								
137	"	カマド								
138	"	ピット								
139	土坏	床直								
140	土甃	ピット								
141~142	"	床直								
143	"	"								
144	"	"								
145	"	"			212					
146	土甃	カマド	ナ	テ	ナ	テ		65		
147	"	"	ケズリ・ナテ	"			(108)			
第322号住居跡										
148	土甃	カマド	ナ	テ	ナ	テ	98	74	100	補修孔・木葉痕
149	"	"	ケズリ・ナテ	"			123	62	110	
150	"	"	"	"			123	66	157	45 II D S 49 II と接合
151	須甃	"								
第323号住居跡										
152	土甃		ナ	テ	ナ	テ	(228)			
153~155	土坏		ミガキ	ミガキ	内黒					
156	土甃		ケズリ・ナテ				(58)			
157	"						60			
158	"									
159	"	カマド								
160	"	"								
161	土製品									
第324号住居跡										
162	土甃						(83)			木葉痕
第325号住居跡										
163	須甃									
164	土甃	カマド	ナ	テ	ナ	テ	(170)			
165	"	"	ケズリ・ナテ	"				(168)		木葉痕
166	"	カマド	ナテ	テ	ナ	テ		(108)		木葉痕
167	"	"						(96)		
168	"	"	ケズリ・ナテ	ナ	テ					
169~171	"									
172	土坏			内	黒					
173	土甃									木葉痕
第326号住居跡										
174	土甃	カマド	ナ	テ	ナ	テ	121			
175	袖珍	"					75	43	80	
176	"	"					60	49	41~47	
177	土甃	カマド						72		木葉痕

第84表 出土遺物観察表(4)

図番	器種	層	外 面	内 面	口 径	底 径	高 さ	備 考
178	土甕		ナ デ	ナ デ		76		木葉痕
179	"		"	"	119			
180~181	土坏		"	ナデ・内黒				
182	"	カマド	"	"				
183	土甕	床 直						
184	"	カマド						
185	"	床 直						木葉痕
186	"							"
187	"	カマド	ナ デ	ナ デ	(114)			
188	須甕							
189	"							頸 部
第327号住居跡								
190	土甕					118		輪積み痕
191	"							
第328号住居跡								
192	支脚	カマド						
193	土甕	"			(85)			
194	"	"						
195	"							
196	須甕							
第329号住居跡								
197	土坏			内 黒				回転糸切痕
198	土甕		ナ デ	ナ デ		42		
199	"		"	"	(120)			
200	"		"	"				
201	"							木葉痕、赤焼
第401号住居跡								
202	土甕		ナ デ	ナ デ	(101)			炭化物付着
203	"		"	"	(123)			
204	"		"	"		(85)		木葉痕
205	"		"	"		(49)		
206	"		"	"		80		
207	"		ケズリ・ナデ	"		86		木葉痕
208	土坏							
209	土甕							木葉痕
210	"							"
211~219	"							
220	砥石							
第402号住居跡								
221	土甕	カマド 床 直	ケズリ・ナデ	ナ デ	(130)			
222	"	"	ナ デ	"	(160)			
223	"	床 直		"				
224	"							
225	"	カマド						
226~228	"							
229~230	"	床 直						
231	"							
232	"	カマド						
233	"							
234	土坏							
235	土甕	床 直						

第85表 出土遺物観察表(5)

図番	器種	層	外面	内面	口径	底径	高さ	備考
236	土坏							木葉痕
237	土甃		ケズリ・ナデ	ナデ		(60)		
第403号住居跡								
238	土坏	床直	ナデ	ナデ	118	55	45	炭化物付着
239	土甃	"	"		(168)			
240	"	"						木葉痕
241	"	"						
242	"	"						
第308号土壙								
243	土坏		ミガキ・ナデ	ミガキ・内黒	(158)	72	48	
244	"		"	"	(122)	59	52	静止糸切痕?
245	"		"	"	(142)	(62)	54	
246	"		" ナデ	"	(134)	(60)	51	静止糸切痕?
247	"		"	"	(156)			
248	"		"	"	(118)	(59)	52	
249	"		"	"	(154)			
250	"		"	"	(110)			
251	"		" ナデ	"	(146)			
252	"		"	"	(123)			
253	"		" ナデ	"	(121)			
254	"		"	"	(126)			
255	"		"	"	(144)			
256	"		"	"	(154)			
257	"		" ナデ	"	(145)			
258	"		"	"	(134)			
259	"		"	"	(130)			
260	"		" ナデ	"	(124)			
261	"		" "	"	(121)			
262	"		"	"	(122)			
263	土甃					99		木葉痕
264	"							
265~270 土坏								
271	土甃							木葉痕
272	"							
273	"							
第309号土壙								
274	土甃		ケズリ・ナデ	ケズリ	(170)			
275	"		ケズリ	"	126			
276	"		ケズリ・ナデ	ナデ	146	(8)	154	赤焼?
277	"		ケズリ	ケズリ	(142)			
278	"		ケズリ・ナデ	ナデ	(122)			
279	"		"	"	(162)			
280	"		"	"	(122)			
281	"		"	"	(166)			
282	袖珍		ケズリ・ナデ	"	58	63	53	木葉痕
283	"				(60)	34	(44)	
284	土製品							
285	鉄器							鉄銚茎?
286	土甃		ケズリ・ナデ	ナデ		(84)		
287	"		ケズリ・ナデ	"		80		
288	"							
289	土坏							
290	土甃							木葉痕

第86表 出土遺物観察表(6)

図番	器種	層	外 面	内 面	口 径	底 径	高 さ	備 考		
291~295	土甕									
296	"							木葉痕		
297	"		ナ	テ			(88)			
298	"						70			
299	"						(86)			
300	須甕							頸部		
301	須甕									
302	支脚									
第310号土壙										
303	土甕		ナ	テ	ナ	テ	(140)			
第312号土壙										
304	土甕							木葉痕		
第313号土壙										
305	須甕									
306	土甕									
第315号土壙										
307	土甕									
第318号土壙										
308	土甕									
309	"							木葉痕		
第319号土壙										
310~317	土甕									
318	"		ナ	テ	ナ	テ	(164)			
319	"						78	木葉痕		
320	"						(58)			
321	"						72			
第322号土壙										
322	土甕						80	木葉痕		
第323号土壙										
323	土甕							糸切痕・赤焼?		
324	土坏									
第332号土壙										
325	土甕									
326	"		ナ	テ	ナ	テ	(104)			
327~328	"									
329	土坏				内	黒				
330~331	土甕									
第333号土壙										
332	土甕		ケズリ・ナテ	ナ	テ		122	72	183	赤焼・325Hと接合
333~336	"									
337	"		ナ	テ	ナ	テ		(78)		
338~339	"									
第327・334号土壙										
340	土坏				内	黒				
341	"									赤焼?

第87表 出土遺物観察表(7)

図番	器種	層	外面	内面	口径	底径	高さ	備考
342	土甕							
第336号土壙								
343~344	土甕							
第401号土壙								
345	土坏		ケズリ・ナデ	ナデ	(116)	70	37	糸切痕
346	土甕							
347	"		ケズリ・ナデ	ナデ		(72)		
348	須甕							頸部
第408号土壙								
349~350	土甕							
第413号土壙								
351	土甕							木葉痕
第417号土壙								
352	土甕		ナデ	ナデ	(200)			
353	"		ケズリ・ナデ	"	(108)			木葉痕
第418号土壙								
354	土甕		ケズリ	ナデ				木葉痕

第88表 遺構外出土遺物観察表(1)

図番	器種	地区	層	外面	内面	口径	底径	高さ	備考
1	土甕	35II				(164)			
2	"	E F 49	II				(88)		
3	袖珍	E C 44	II				42		
4	土甕	E C 37					(62)		
5	"	40III	II				(44)		
6	"	E B 44	II				(52)		
7	土長頸つぼ	D Q-52							
8	土甕	E B 26							
9	土坏	50II	III						
10	"	D T 46	II						
11	"	D R 53							
12	"	D Q 54							
13	土甕	E F 37							
14	"	D R 43	II						
15	"	D P-56							
16	"	E B 43	II						
17	"	D R 53	II						
18	土坏								
19	土甕								
20	"	E D 44	II						
21	"	D T 52	II						
22	"	D S 26							
23	"	D S 44							
24	"	E A 44	II						
25	"	E A 44							
26	"	E F 37							
27	"	D T 49	II						
28	"	E A 44	II						
29	土坏	E C 43	II						

第89表 遺構外出土遺物観察表(2)

図番	器種	地区	層	外面	内面	口径	底径	高さ	備考
30	土 甕	D T 59							
31	" "	D S 53							
32	土 坏	D S 53							
33	土 甕	D N 60							
34	" "	D R 51							
35	" "	D N 60							
36	土 坏	50II							
37	" "	D R 50							
38	土 甕	D T 53	II						
39	" "	E C 30							木葉痕
40	" "	D T 49	II						
41	" "	D Q 52							
42	" "	E A 42	II						
43	" "	E A 36							
44	" "	E A 51							木葉痕
45	" "	65II							
46	" "	D Q 52, D T 53							
47	" "	D T 44							
48	" "	E C 42							
49	" "	D R 48	I						木葉痕
50	" "	D T 51							"
51	" "	P Q -52							
52	" "	E F 28							木葉痕
53	" "	E E 43	II						
54	" "	45II							
55	" "	D R 47	I						
56	" "	E A 45	I						
57	" "	D M 64							
58	土 坏	D T 46	I						
59	土 甕	D Q 52							
60	" "	D T 53							
61	" "	D R 52							
62	須 甕	E F 27							
63	" "	D P 58							

第 章 溝状ピットと出土遺物

昭和57年度56基、昭和59年度5基の計61基を検出した。個々の溝状ピット（以下ピットという）の検出地点、計測値は一覧表にまとめた。

平面形状 溝状を呈する。幅がほぼ均一なもの、中ほどが膨らむもの、部分的に幅が異なるものがあり、更に幅広のもの、幅の狭いもの、その中間的なものがみられる。また若干湾曲するものもみられる。

く断面形状 長軸上では、開口部が底面より長いもの、短いもの、ほぼ同一なものがある。壁面の形状は垂直なもの、一様な傾斜をもつもの、中位から傾斜するもの、中位が突出するもの、袋状のもの等と多様である。また底面が平坦なもの、一方に傾斜するもの、中位が高くなるもの及び低くなるものがある。昭和57・59年度検出のものは、おおむね、開口部が底面より長いものが多く、底面が開口部より長いものは15基である。両者の差は20～30cmほどが多いが、309号ピットが52cm、348号ピットが72cmと底面が非常に長い。

短軸上ではU字状・字状・Y字状等の形態があり、開口部より底面の幅が大きいものは検出されなかった。

規模 長さは204cm～422cmで、300cm～360cmに集中し、幅は17cm～106cmで、30cm～70cmに集中する。底面の幅は6～17cmに集中する。

検出層位 地山面及び第層で確認したため掘り込み面はほとんど不明である。ピットのの一部が路線外にあるもの及び、標準土層観察用のベルトにかかった数基は、掘り込み面がだまかではあるが把握できた。

301・304号ピットは層を掘り込んで、覆土上部に第層が堆積している。306号ピットは、層を掘り込み、覆土上部に第層が流入している。この上部の土は、第層と同一のものか、また、類似した土なのかは不明であるが、観察結果からは、第層が覆っていると考えられる。

重複 縄文時代の住居跡と重複しているもの。309号ピット - 314号住居跡と317号住居跡を切っている。310号ピット - 314号住居跡を切っている。平安時代住居跡と重複しているもの。349号ピット - 321号住居跡に切られている。ピットどうしが重複するもの。324・325号ピット - 325号ピットが新しい。334・335号ピット - 335号ピットが新しい。346・347号ピット - 346号ピットが新しい。357・358号ピット - 358号ピットが新しい。402・403号ピット - 403号ピットが新しい。404・405号ピット - 405号ピットが新しい。ピットどうしの重複の角度は、402・403号ピットが67°大きく開くのを除くと、それぞれ、21°・23°・25°・17.5°と大きな変化はなく、ほぼ地形に沿った構築がうかがえる。

遺物を含むピット 301・309・310・333・340・341・352・401・402・403・404

の11基に遺物が含まれていた。

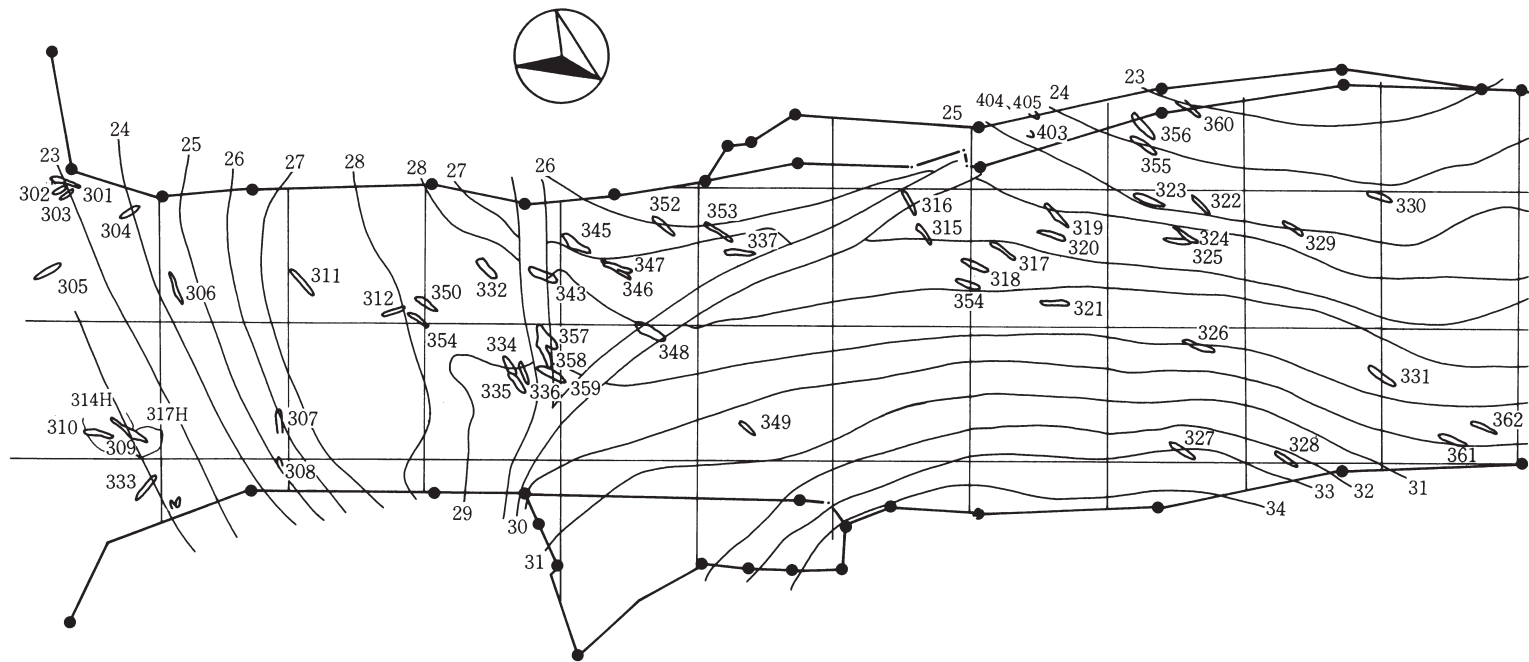
- 301号ピット 第 群土器 6片
- 309号ピット 第 群土器 4片・第 群土器 1片
- 310号ピット 第 群土器 1片・第 群土器 1片
- 333号ピット 第 ?群土器 1片・第 群土器 2片・第 群土器 2片
- 340号ピット 第 群土器 2片
- 341号ピット フレーク 1点
- 352号ピット 磨製石斧 1点(刃部残存)
- 401号ピット 第 群土器(微細破片) 1片
- 402号ピット 第 群土器 3片・第 群土器(微細破片) 2片
- 403号ピット 第 群土器 3片・第 群土器 1片
- 404号ピット 第 群土器 2片

長軸方位 若干集中する部分があるが、一定しない。やや斜めではあるが、等高線に平行するものがほとんどで、等高線と直交するものは7基と少ない。

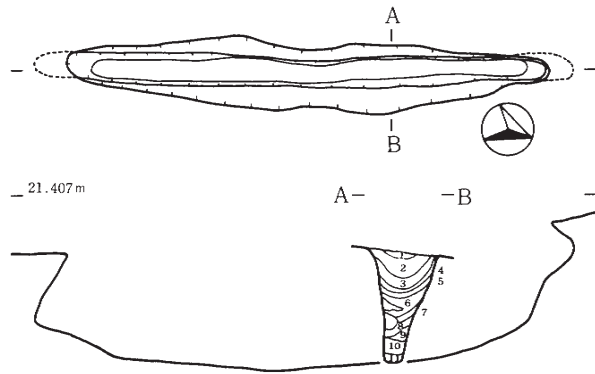
時期 掘り込み面が不明のため、ほとんどのピットが時期不詳である。301・304号ピットは、中撤浮石層形成後と思われる。306号ピットは、中撤浮石層形成前と思われる。309・310号ピットは縄文時代早期の住居跡を掘り込んでいる。309号ピットは、早稲田5類期の住居跡を切り、その覆土上部に焼土が流入し、更に、開口部と同一レベル上に早稲田5類土器の一部(復原可能な数個体)が散在していた。また、南側部分に長七谷地 群土器が散在していた。(317号住居跡の項参照)このことから309号ピットは、早稲田5類期の所産と思われるが、同一時期(同一土器形式)においてリビングサイトとハンティングサイトの性格を有することにより一部の危惧が感じられることから、長七谷地 群期以前の所産としてとらえることとする。

計測表中の長軸方向は全て北方向を基準とした。

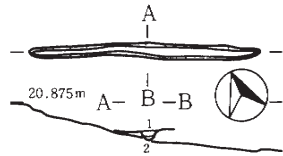
(白鳥)



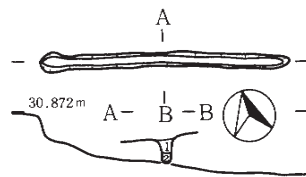
第201図 溝状ピット配置図



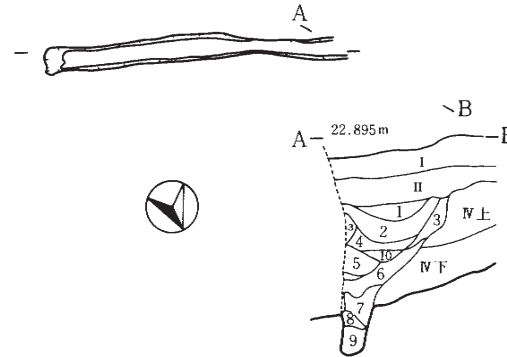
- 第301号溝状ピット
 第1層 黒褐色土
 第2層 暗褐色土
 第3層 暗褐色土
 第4層 黒褐色土
 第5層 暗褐色土
 第6層 黒褐色土
 第7層 暗褐色土
 第8層 暗褐色土
 第9層 暗褐色土
 第10層 暗褐色土
 第11層 暗褐色土



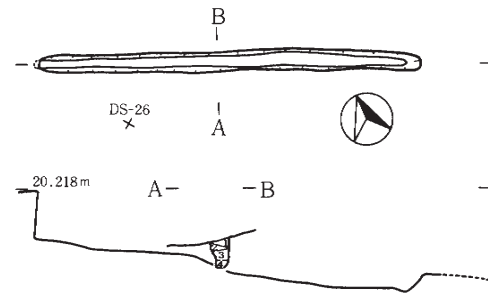
- 第302号溝状ピット
 第1層 黒褐色土
 第2層 黒色土



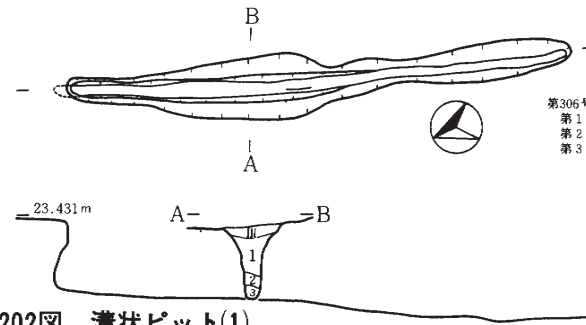
- 第303号溝状ピット
 第1層 黒褐色土
 第2層 黒色土



- 第304号溝状ピット
 第1層 黒色土
 第2層 黒褐色土
 第3層 黒褐色土
 第4層 黒褐色土
 第5層 黒褐色土
 第6層 黒褐色土
 第7層 暗褐色土
 第8層 暗褐色土
 第9層 暗褐色土
 第10層 黒褐色土



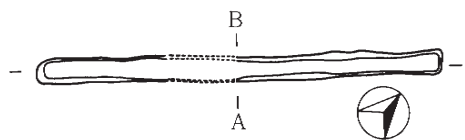
- 第305号溝状ピット
 第1層 暗褐色土
 第2層 暗褐色土
 第3層 黒色土
 第4層 暗黄褐色土



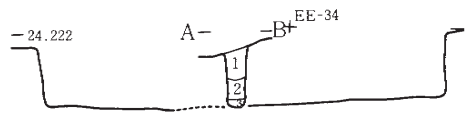
- 第306号溝状ピット
 第1層 黒褐色土
 第2層 黒褐色土
 第3層 黒褐色土



第202図 溝状ピット(1)

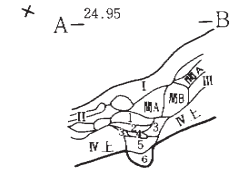


第307号溝状ビット
 第1層 黒褐色土
 第2層 黒褐色土
 第3層 黒褐色土

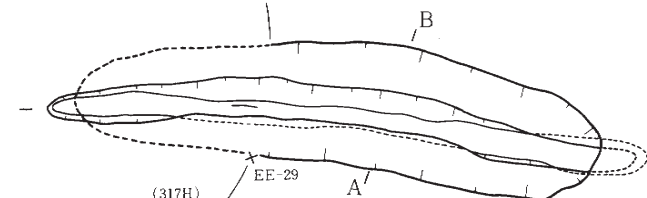


EF-34

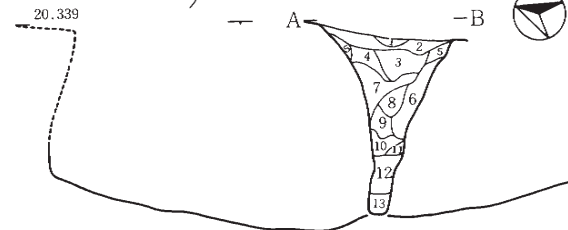
× A-24.95



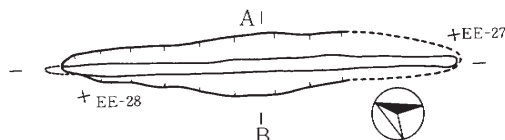
第308号溝状ビット
 第1層 暗褐色土
 第2層 暗褐色土
 第3層 黒褐色土
 第4層 暗褐色土
 第5層 黒褐色土
 第6層 黒褐色土
 間A層 黒褐色土
 間B層 黒褐色土



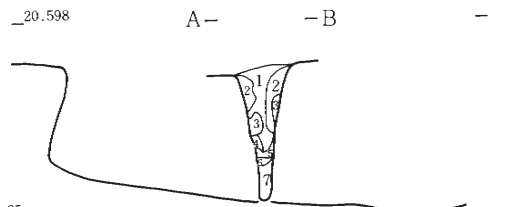
20.339



第309号溝状ビット
 第1層 黒褐色土
 第2層 黒褐色土
 第3層 黒褐色土
 第4層 黒褐色土
 第5層 黒褐色土
 第6層 暗褐色土
 第7層 暗褐色土
 第8層 黒褐色土
 第9層 黒褐色土
 第10層 暗褐色土
 第11層 暗褐色土
 第12層 暗褐色土
 第13層 黒褐色土

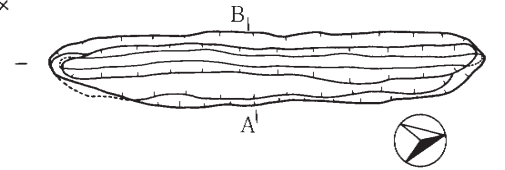


第310号溝状ビット
 第1層 黒褐色土
 第2層 黒褐色土
 第3層 黒褐色土
 第4層 黒褐色土
 第5層 暗褐色土
 第6層 黒褐色土
 第7層 黒褐色土

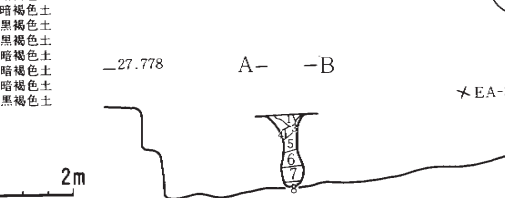
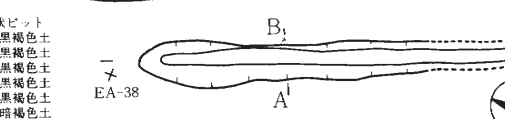
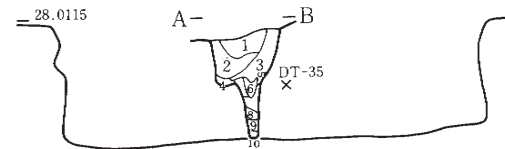


DS-35

×



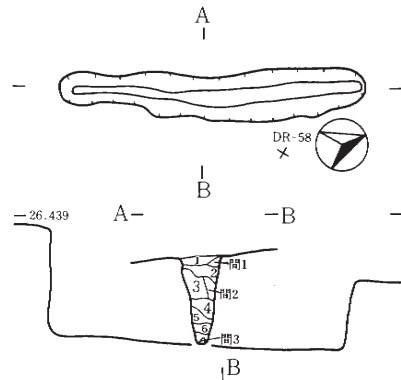
第311号溝状ビット
 第1層 黒褐色土
 第2層 暗褐色土
 第3層 暗褐色土
 第4層 明黄褐色土
 第5層 浅黄褐色土
 第6層 暗褐色土
 第7層 暗褐色土
 第8層 暗褐色土
 第9層 灰白色土
 第10層 暗褐色土



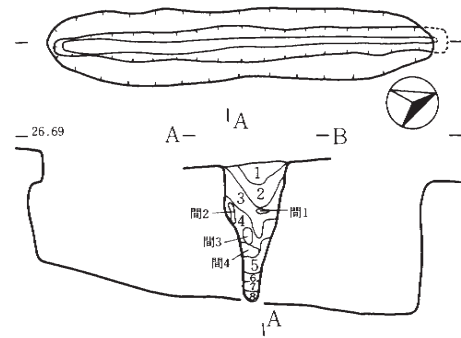
第312号溝状ビット
 第1層 暗褐色土
 第2層 明黄褐色土
 第3層 明黄褐色土
 第4層 浅黄褐色土
 第5層 明黄褐色土
 第6層 明黄褐色土
 第7層 黒褐色土
 第8層 黒褐色土

0 2m

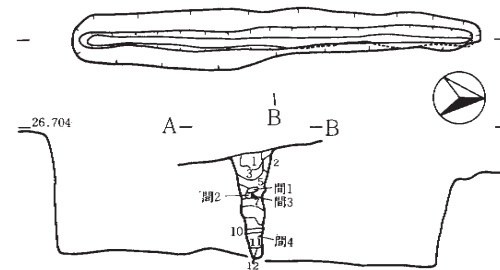
第203図 溝状ビット(2)



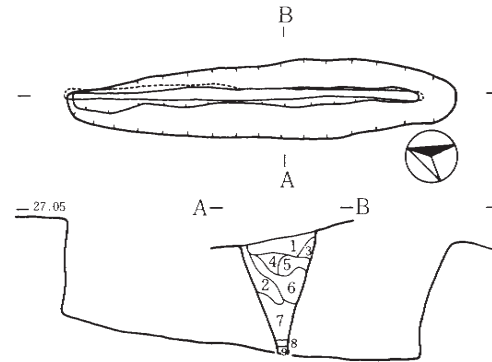
- 第315号溝状ピット
 第1層 黒褐色土
 間1 褐色土
 第2層 暗褐色土
 間2 褐色土
 第3層 暗褐色土
 第4層 黒褐色土
 第5層 黒褐色土
 第6層 黄褐色土
 第7層 黒色土
 間3 黄橙色土



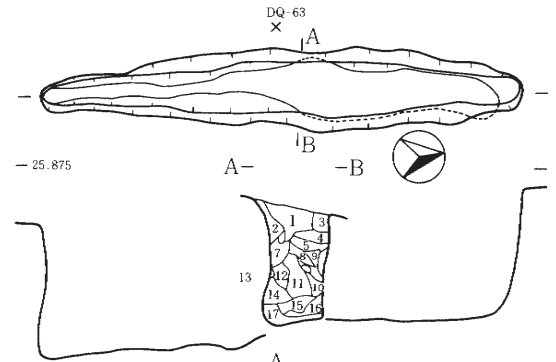
- 第316号溝状ピット
 第1層 黒褐色土
 第2層 暗褐色土
 第3層 褐色土
 間1 明黄褐色土
 第4層 明黄褐色土
 間2 明黄褐色土
 第5層 明黄褐色土
 第6層 明黄褐色土
 第7層 明黄褐色土
 第8層 明黄褐色土
 間4 黒褐色土と褐色土の混合土



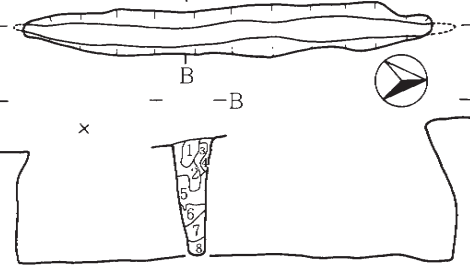
- 第317号溝状ピット
 第1層 暗褐色土 1010層 明黄褐色土
 第2層 褐色土 褐色土
 第3層 暗褐色土 1111層 黒褐色土
 第4層 黄褐色土 第12層 黒褐色土
 第5層 黒褐色土 間1層 褐色土
 第6層 黒褐色土 間2層 褐色土
 第7層 黒褐色土 褐色土
 第8層 暗褐色土 間3層 明黄褐色土
 第9層 褐色土 間4層 明黄褐色土



- 第318号溝状ピット
 第1層 褐色土
 第2層 褐色土
 第3層 暗褐色土
 第4層 暗褐色土
 第5層 暗褐色土
 第6層 黒褐色土
 第7層 黒褐色土
 第8層 黒褐色土
 第9層 におい黄褐色土



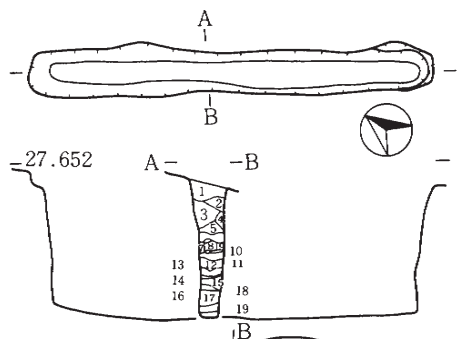
- 第319号溝状ピット
 第1層 黒褐色土
 第2層 褐色土
 第3層 明褐色土
 第4層 明褐色土
 第5層 暗褐色土
 第6層 暗褐色土
 第7層 褐色土
 第8層 明褐色土
 第9層 褐色土
 第10層 黄灰色土
 第11層 暗褐色土
 第12層 明褐色土
 第13層 明褐色土
 第14層 黄灰色土
 第15層 黄灰色土
 第16層 黄褐色土
 第17層 黒褐色土
 第18層 黒褐色土
 B1層 黄灰色土



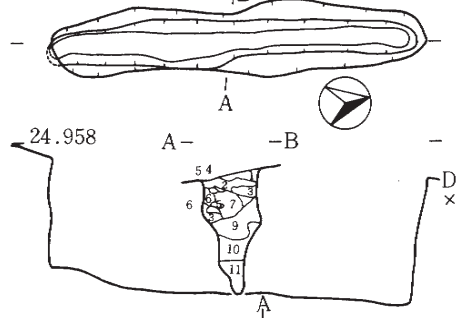
- 第320号溝状ピット
 第1層 暗褐色土
 第2層 暗褐色土
 第3層 暗褐色土
 第4層 褐色土
 第5層 暗褐色土
 第6層 褐色土
 第7層 黒褐色土
 第8層 黄白色土

0 2m

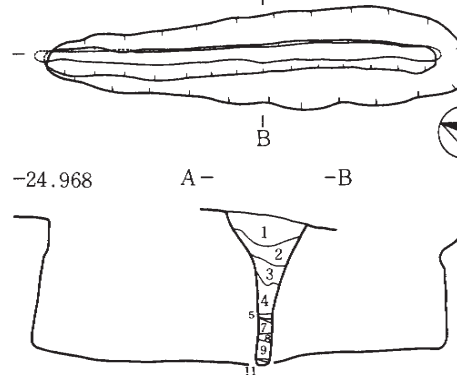
第204図 溝状ピット(3)



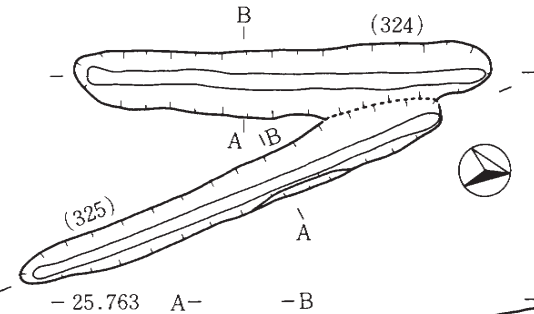
- 第321号溝状ピット
 第1層 淡砂褐色土
 第2層 暗褐色土
 第3層 褐色土
 第4層 褐色土
 第5層 暗褐色土
 第6層 暗黄色土
 第7層 褐色土
 第8層 黄褐色土
 第9層 暗黄褐色土
 第10層 暗黄褐色土
 第11層 褐色土
 第12層 黑褐色土
 第13層 褐色土
 第14層 明黄褐色土
 第15層 黄褐色土
 第16層 黄褐色土



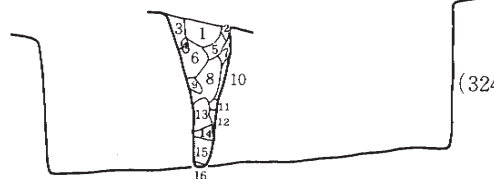
- 第322号溝状ピット
 第1層 褐色土
 第2層 褐色土
 第3層 黄褐色土
 第4層 褐色土
 第5層 黑褐色土
 第6層 褐色土
 第7層 黑褐色土
 第8層 褐色土
 第9層 黑褐色土
 第10層 褐色土
 第11層 暗黄褐色土



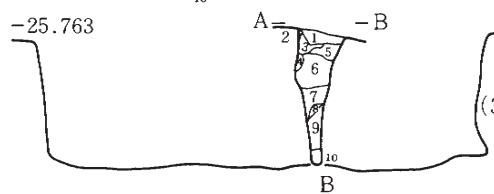
- 第323号溝状ピット
 第1層 褐色土
 第2層 黑褐色土
 第3層 黑褐色土
 第4層 暗黄褐色土
 第5層 暗褐色土
 第6層 淡黄褐色土
 第7層 暗褐色土
 第8層 暗褐色土
 第9層 暗黄褐色土
 第10層 黑褐色土
 第11層 灰白色土



- 第324号溝状ピット
 第1層 暗褐色土
 第2層 褐色土
 第3層 暗褐色土
 第4層 黄褐色土
 第5層 褐色土
 第6層 褐色土
 第7層 褐色土
 第8層 暗褐色土
 第9層 黄褐色土
 第10層 黄褐色土
 第11層 黄褐色土
 第12層 黄褐色土
 第13層 黄褐色土
 第14層 黄褐色土
 第15層 褐色土
 第16層 黑褐色土



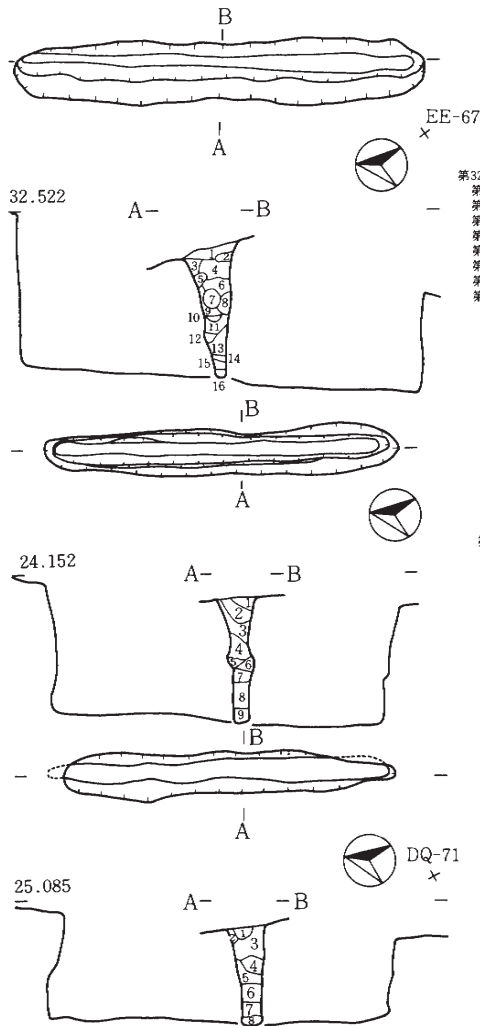
- 第325号溝状ピット
 第1層 暗褐色土
 第2層 黄褐色土
 第3層 褐色土
 第4層 黄褐色土
 第5層 黑褐色土
 第6層 暗褐色土
 第7層 黄褐色土
 第8層 黄褐色土
 第9層 黑褐色土
 第10層 黑褐色土



- 第326号溝状ピット
 第1層 褐色土
 第2層 褐色土
 第3層 褐色土
 第4層 褐色土
 第5層 褐色土
 第6層 褐色土
 第7層 褐色土
 第8層 暗褐色土
 第9層 暗褐色土
 第10層 暗褐色土
 第11層 暗褐色土
 第12層 褐色土



第205図 溝状ピット(4)

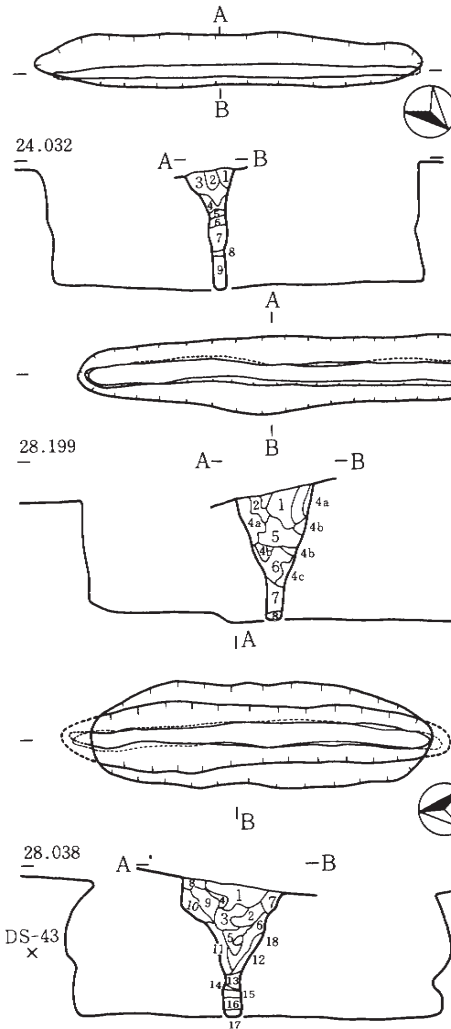


- 第327号溝状ピット
 第1層 褐色土
 第2層 暗黒褐色土
 第3層 黄褐色土
 第4層 黄褐色土
 第5層 黄褐色土
 第6層 黄褐色土
 第7層 黄褐色土
 第8層 黄褐色土

- 第9層 褐色土
 第10層 褐色土
 第11層 褐色土
 第12層 褐色土
 第13層 褐色土
 第14層 褐色土
 第15層 褐色土
 第16層 褐色土

- 第328号溝状ピット
 第1層 暗黒褐色土
 第2層 暗黒褐色土
 第3層 暗黒褐色土
 第4層 暗黒褐色土
 第5層 暗黒褐色土
 第6層 暗黒褐色土
 第7層 暗黒褐色土
 第8層 暗黒褐色土
 第9層 暗黒褐色土

- 第329号溝状ピット
 第1層 褐色土
 第2層 褐色土
 第3層 褐色土
 第4層 暗黒褐色土
 第5層 暗黒褐色土
 第6層 暗黒褐色土
 第7層 暗黒褐色土
 第8層 暗黒褐色土



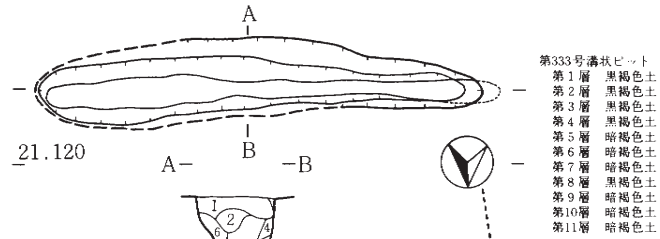
- 第330号溝状ピット
 第1層 褐色土
 第2層 暗黒褐色土
 第3層 暗黒褐色土
 第4層 暗黒褐色土
 第5層 暗黒褐色土
 第6層 暗黒褐色土
 第7層 暗黒褐色土
 第8層 暗黒褐色土
 第9層 暗黒褐色土

- 第331号溝状ピット
 第1層 暗黒褐色土
 第2層 暗黒褐色土
 第3層 暗黒褐色土
 第4層 暗黒褐色土
 第5層 暗黒褐色土
 第6層 暗黒褐色土
 第7層 暗黒褐色土
 第8層 暗黒褐色土
 第9層 暗黒褐色土

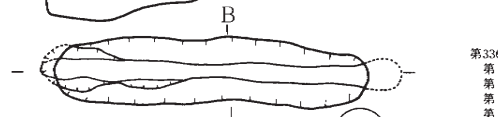
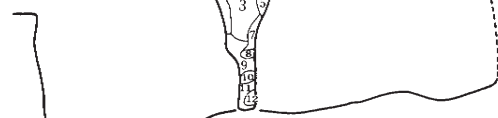
- 第332号溝状ピット
 第1層 褐色土
 第2層 褐色土
 第3層 褐色土
 第4層 暗黒褐色土
 第5層 暗黒褐色土
 第6層 暗黒褐色土
 第7層 暗黒褐色土
 第8層 暗黒褐色土
 第9層 暗黒褐色土
 第10層 暗黒褐色土
 第11層 暗黒褐色土
 第12層 暗黒褐色土
 第13層 暗黒褐色土
 第14層 暗黒褐色土
 第15層 暗黒褐色土
 第16層 暗黒褐色土
 第17層 暗黒褐色土
 第18層 暗黒褐色土

0 2m

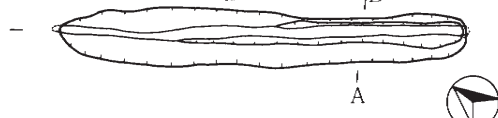
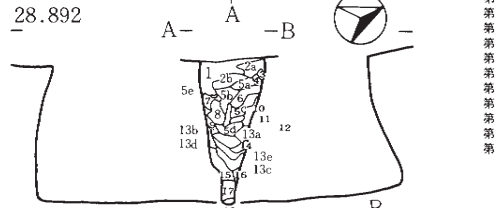
第206図 溝状ピット(5)



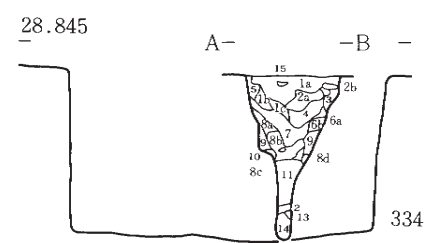
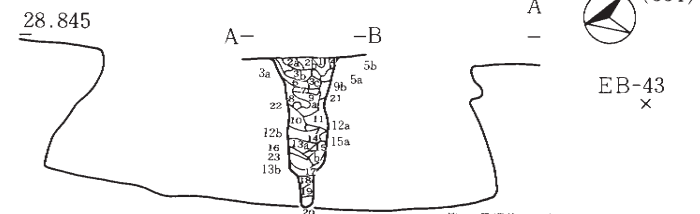
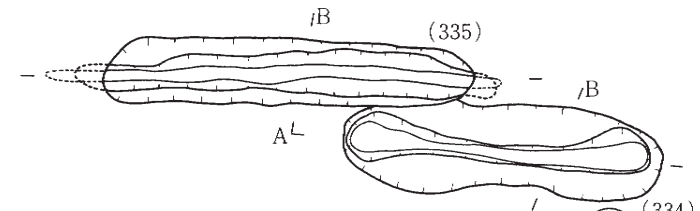
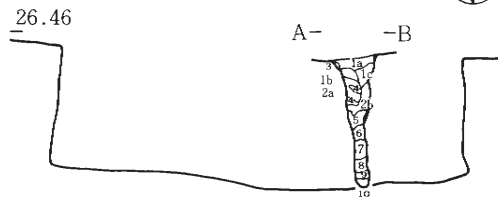
- 第333号溝状ピット
- 第1層 黒褐色土
 - 第2層 黒褐色土
 - 第3層 黒褐色土
 - 第4層 黒褐色土
 - 第5層 暗褐色土
 - 第6層 暗褐色土
 - 第7層 暗褐色土
 - 第8層 暗褐色土
 - 第9層 暗褐色土
 - 第10層 暗褐色土
 - 第11層 暗褐色土



- 第336号溝状ピット
- 第1層 黄褐色土
 - 第2層 暗褐色土
 - 第3層 暗褐色土
 - 第4層 暗褐色土
 - 第5層 暗褐色土
 - 第6層 暗褐色土
 - 第7層 暗褐色土
 - 第8層 暗褐色土
 - 第9層 暗褐色土

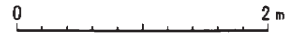


- 第337号溝状ピット
- 第1層 黒褐色土
 - 第2層 黒褐色土
 - 第3層 黒褐色土
 - 第4層 黒褐色土
 - 第5層 暗褐色土
 - 第6層 暗褐色土
 - 第7層 暗褐色土
 - 第8層 暗褐色土
 - 第9層 暗褐色土
 - 第10層 暗褐色土
 - 第11層 暗褐色土

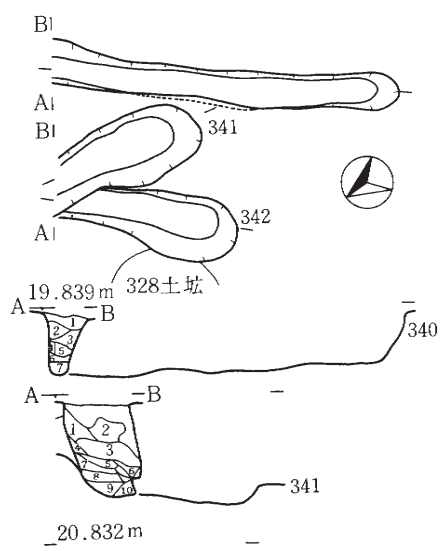


- 第335号溝状ピット
- 第1層 明黄褐色土
 - 第2層 明黄褐色土
 - 第3層 明黄褐色土
 - 第4層 明黄褐色土
 - 第5層 明黄褐色土
 - 第6層 明黄褐色土
 - 第7層 明黄褐色土
 - 第8層 明黄褐色土
 - 第9層 明黄褐色土
 - 第10層 明黄褐色土
 - 第11層 明黄褐色土
 - 第12層 明黄褐色土
 - 第13層 明黄褐色土
 - 第14層 明黄褐色土
 - 第15層 明黄褐色土
 - 第16層 明黄褐色土
 - 第17層 明黄褐色土
 - 第18層 明黄褐色土
 - 第19層 明黄褐色土
 - 第20層 明黄褐色土
 - 第21層 明黄褐色土
 - 第22層 明黄褐色土
 - 第23層 明黄褐色土

- 第334号溝状ピット
- 第1層 灰褐色土
 - 第2層 灰褐色土
 - 第3層 灰褐色土
 - 第4層 灰褐色土
 - 第5層 灰褐色土
 - 第6層 灰褐色土
 - 第7層 灰褐色土
 - 第8層 灰褐色土
 - 第9層 灰褐色土
 - 第10層 灰褐色土
 - 第11層 灰褐色土
 - 第12層 灰褐色土
 - 第13層 灰褐色土
 - 第14層 灰褐色土
 - 第15層 灰褐色土
 - 第16層 灰褐色土



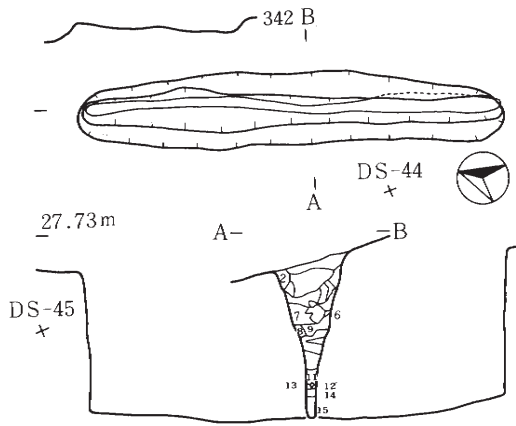
第207図 溝状ピット(6)



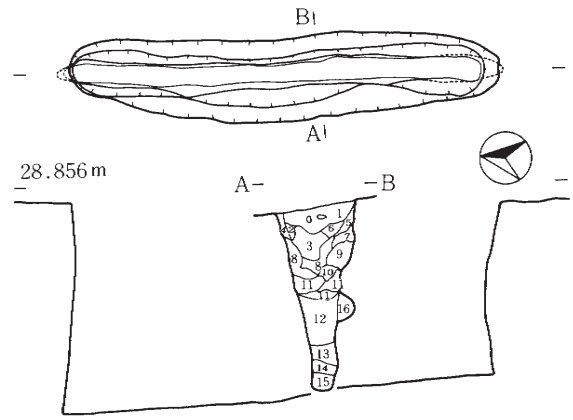
- 第340号溝状ピット
- 第1層 暗褐色土
 - 第2層 暗褐色土
 - 第3層 黒褐色土
 - 第4層 黄褐色土
 - 第5層 黒褐色土
 - 第6層 黒褐色土
 - 第7層 黒褐色土

- 第341号溝状ピット
- 第1層 黒褐色土
 - 第2層 暗褐色土
 - 第3層 暗褐色土
 - 第4層 黒褐色土
 - 第5層 暗褐色土
 - 第6層 暗褐色土
 - 第7層 黄褐色土
 - 第8層 黄褐色土
 - 第9層 黄褐色土
 - 第10層 黄褐色土
 - 第A層 暗褐色土
 - 第13層 暗褐色土

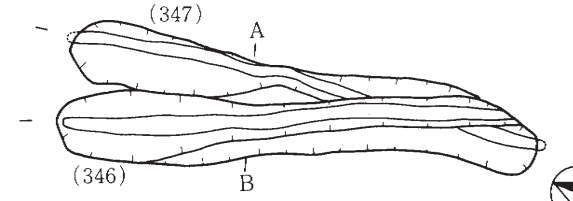
第342号溝状ピット



- 第343号溝状ピット
- 第1a層 褐色土
 - 第1b層 褐色土
 - 第1c層 褐色土
 - 第2層 褐色土
 - 第3a層 黄褐色土
 - 第3b層 黄褐色土
 - 第3c層 黄褐色土
 - 第4a層 黄褐色土
 - 第4b層 黄褐色土
 - 第5層 黄褐色土
 - 第6層 黄褐色土
 - 第7層 褐色土
 - 第8層 黄褐色土
 - 第9層 黄褐色土
 - 第10a層 オリーブ褐色土
 - 第10b層 黄褐色土
 - 第11層 黄褐色土
 - 第12層 黄褐色土
 - 第13層 黄褐色土
 - 第14層 黄褐色土
 - 第15層 黄褐色土



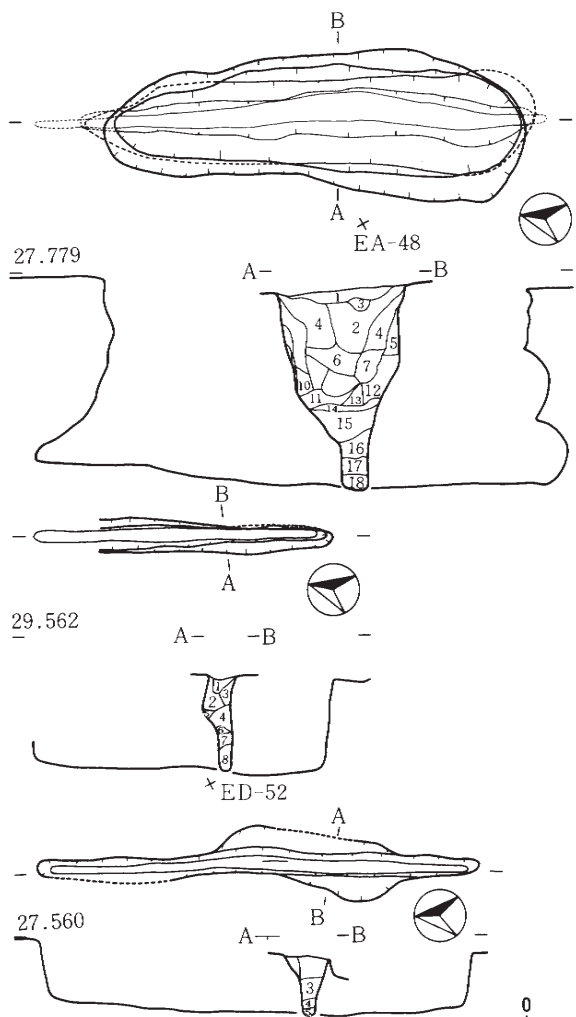
- 第345号溝状ピット
- 第1層 暗褐色土
 - 第2層 暗褐色土
 - 第3層 暗褐色土
 - 第4層 暗褐色土
 - 第5層 暗褐色土
 - 第6層 暗褐色土
 - 第7層 暗褐色土
 - 第8a層 黄褐色土
 - 第8b層 黄褐色土
 - 第9層 黄褐色土
 - 第10層 黄褐色土
 - 第11a層 黄褐色土
 - 第11b層 黄褐色土
 - 第11c層 黄褐色土
 - 第12層 黄褐色土
 - 第13層 オリーブ褐色土
 - 第14層 黄褐色土
 - 第15層 黄褐色土
 - 第16層 明褐色土



- 第346-347号溝状ピット
- 第1a層 暗褐色土
 - 第1b層 暗褐色土
 - 第2a層 暗褐色土
 - 第2b層 暗褐色土
 - 第3層 暗褐色土
 - 第4a層 暗褐色土
 - 第4b層 暗褐色土
 - 第5層 暗褐色土
 - 第6層 オリーブ褐色土
 - 第7層 黄褐色土
 - 第8層 黄褐色土
 - 第9層 暗褐色土
 - 第10層 暗褐色土
 - 第11層 暗褐色土
 - 第12a層 黄褐色土
 - 第12b層 黄褐色土
 - 第13層 オリーブ褐色土
 - 第14層 暗褐色土
 - 第15層 暗褐色土
 - 第16層 暗褐色土



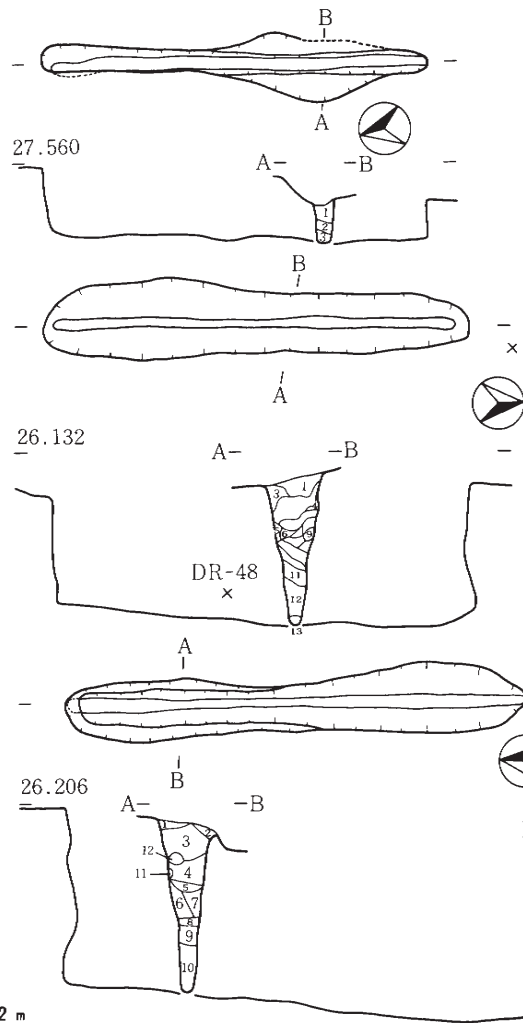
第208図 溝状ピット(7)



- 第348号溝状ピット
- 第1層 黒褐色土
 - 第2層 黒褐色土
 - 第3層 褐色土
 - 第4層 黄褐色土
 - 第5層 黄褐色土
 - 第6層 黒褐色土
 - 第7層 黄褐色土
 - 第8層 黄褐色土
 - 第9層 黄褐色土
 - 第10層 黄褐色土
 - 第11層 黄褐色土
 - 第12層 黄褐色土
 - 第13層 黄褐色土
 - 第14層 黄褐色土
 - 第15層 黄褐色土
 - 第16層 黄褐色土
 - 第17層 黄褐色土
 - 第18層 黄褐色土

- 第349号溝状ピット
- 第1層 黄褐色土
 - 第2層 黄褐色土
 - 第3層 黄褐色土
 - 第4層 黄褐色土
 - 第5層 黄褐色土
 - 第6層 黄褐色土
 - 第7層 黄褐色土
 - 第8層 黄褐色土

- 第350号溝状ピット
- 第1層 黒褐色土
 - 第2層 黄褐色土
 - 第3層 黄褐色土
 - 第4層 黄褐色土
 - 第5層 黄褐色土



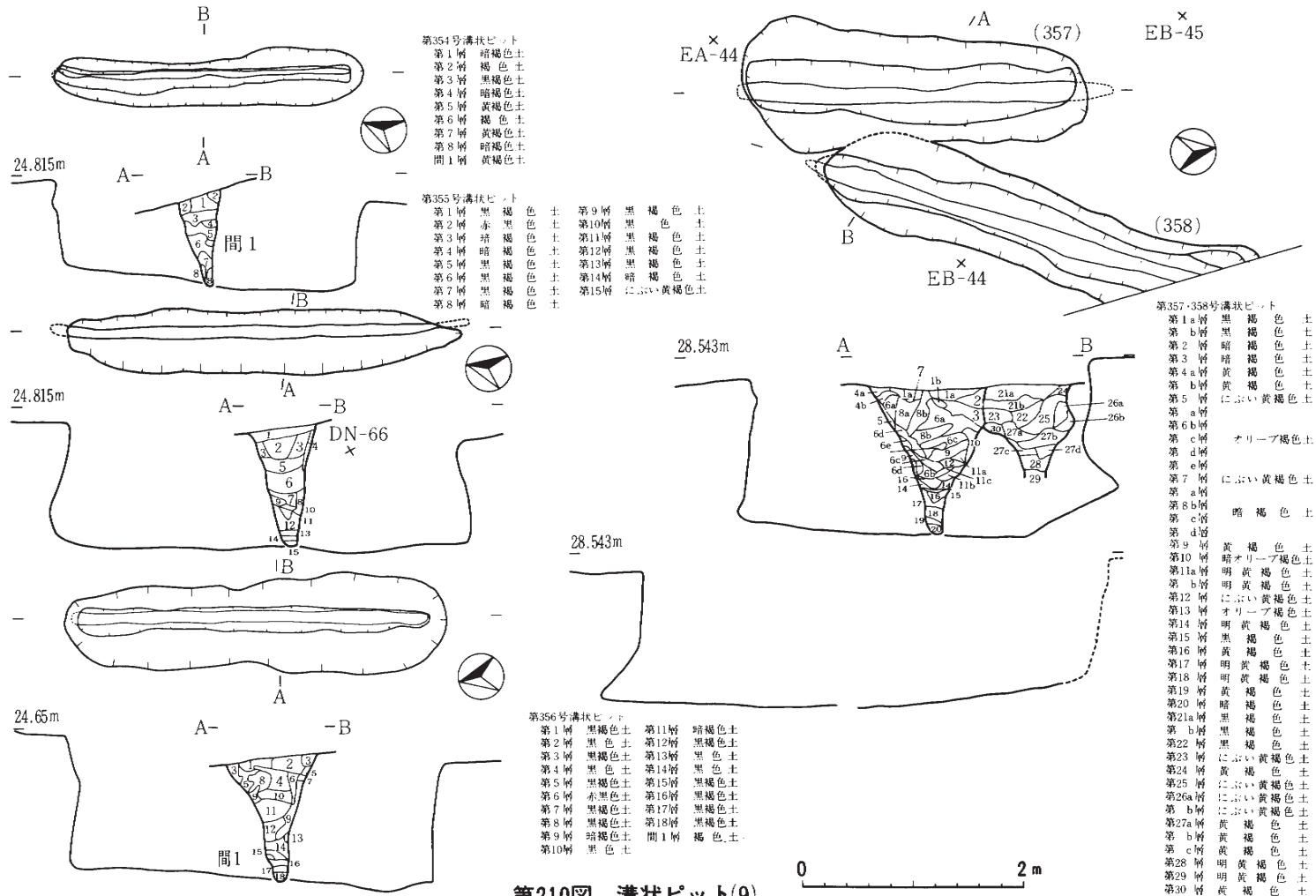
- 第351号溝状ピット
- 第1層 明黄褐色土
 - 第2層 暗褐色土
 - 第3層 浅黄褐色土

- 第352号溝状ピット
- 第1層 黒褐色土
 - 第2層 暗褐色土
 - 第3層 褐色土
 - 第4層 オリーブ褐色土
 - 第5層 褐色土
 - 第6層 黄褐色土
 - 第7層 暗褐色土
 - 第8層 暗オリーブ褐色土
 - 第9層 暗オリーブ褐色土
 - 第10層 暗褐色土
 - 第11層 暗オリーブ褐色土
 - 第12層 黄褐色土
 - 第13層 黄褐色土

- 第353号溝状ピット
- 第1層 褐色土
 - 第2層 暗褐色土
 - 第3層 暗褐色土
 - 第4層 暗褐色土
 - 第5層 暗褐色土
 - 第6層 暗褐色土
 - 第7層 暗褐色土
 - 第8層 褐色土
 - 第9層 褐色土
 - 第10層 黄褐色土
 - 第11層 暗褐色土
 - 第12層 暗褐色土

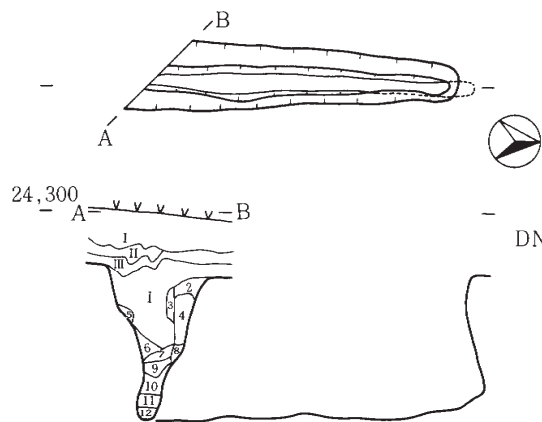
0 2 m

第209図 溝状ピット(8)

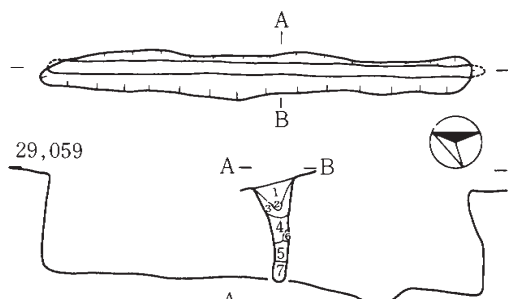


第210図 溝状ピット(9)

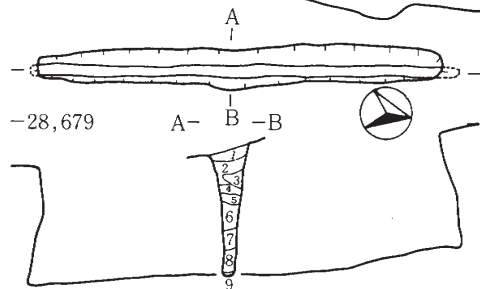
0 2m



- 第360号溝状ピット
- | | | |
|------|--------|---|
| 第1層 | 黒色 | 土 |
| 第2層 | にぶい黄褐色 | 土 |
| 第3層 | 黒色 | 土 |
| 第4層 | 黒褐色 | 土 |
| 第5層 | 暗褐色 | 土 |
| 第6層 | 黒褐色 | 土 |
| 第7層 | 黒褐色 | 土 |
| 第8層 | にぶい黄褐色 | 土 |
| 第9層 | 黒褐色 | 土 |
| 第10層 | 暗褐色 | 土 |
| 第11層 | 暗褐色 | 土 |
| 第12層 | 褐色 | 土 |



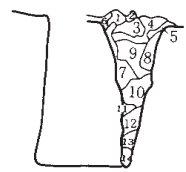
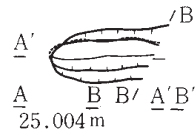
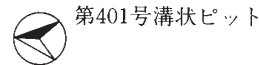
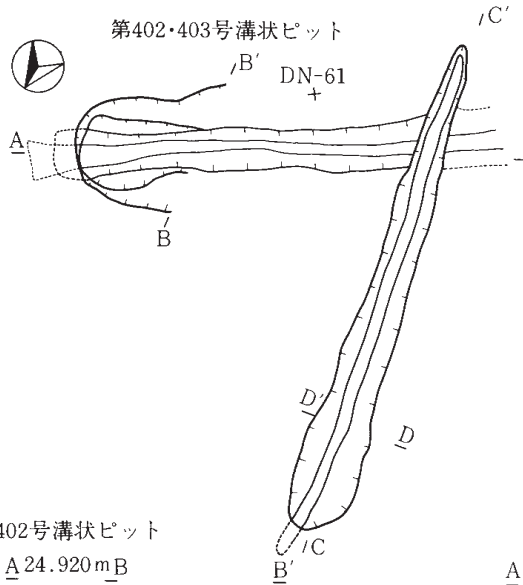
- 第361号溝状ピット
- | | | |
|-----|-----|---|
| 第1層 | 褐色 | 土 |
| 第2層 | 褐色 | 土 |
| 第3層 | 暗褐色 | 土 |
| 第4層 | 暗褐色 | 土 |
| 第5層 | 黒褐色 | 土 |
| 第6層 | 褐色 | 土 |
| 第7層 | 黒褐色 | 土 |



- 第362号溝状ピット
- | | | |
|-----|-----|---|
| 第1層 | 暗褐色 | 土 |
| 第2層 | 暗褐色 | 土 |
| 第3層 | 黒褐色 | 土 |
| 第4層 | 暗褐色 | 土 |
| 第5層 | 黒褐色 | 土 |
| 第6層 | 黒褐色 | 土 |
| 第7層 | 黒褐色 | 土 |
| 第8層 | 暗褐色 | 土 |
| 第9層 | 暗褐色 | 土 |

第211図 溝状ピット(10)



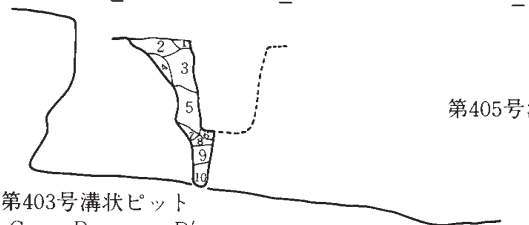


- 第401号溝状ピット
- 第1層 黒褐色土
 - 第2層 明黄褐色土
 - 第3層 黒褐色土
 - 第4層 黒褐色土
 - 第5層 明黄褐色土
 - 第6層 暗褐色土
 - 第7層 暗黄褐色土
 - 第8層 黒褐色土
 - 第9層 明黄褐色土
 - 第10層 明黄褐色土
 - 第11層 明黄褐色土
 - 第12層 黒褐色土
 - 第13層 明黄褐色土
 - 第14層 黒褐色土

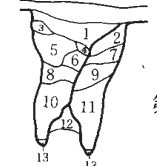
- 第403号溝状ピット
- 第1層 暗褐色土
 - 第2層 暗褐色土
 - 第3層 暗褐色土
 - 第4層 暗褐色土
 - 第5層 暗褐色土
 - 第6層 暗褐色土
 - 第7層 暗褐色土
 - 第8層 暗褐色土
 - 第9層 暗褐色土
 - 第10層 暗褐色土
 - 第11層 暗褐色土
 - 第12層 暗褐色土

第402号溝状ピット

A 24.920m B



第405号溝状ピット



- 第402号溝状ピット
- 第1層 褐色土
 - 第2層 暗褐色土
 - 第3層 黒褐色土
 - 第4層 黄褐色土
 - 第5層 暗褐色土
 - 第6層 暗褐色土
 - 第7層 明黄褐色土
 - 第8層 明黄褐色土
 - 第9層 明黄褐色土
 - 第10層 黒褐色土

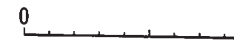
- 第404・405溝状ピット
- 第1層 暗褐色土
 - 第2層 暗褐色土
 - 第3層 暗褐色土
 - 第4層 暗褐色土
 - 第5層 暗褐色土
 - 第6層 暗褐色土
 - 第7層 暗褐色土
 - 第8層 暗褐色土
 - 第9層 暗褐色土
 - 第10層 暗褐色土
 - 第11層 暗褐色土
 - 第12層 暗褐色土
 - 第13層 暗褐色土

第403号溝状ピット

C 24.620m D D'



第405号溝状ピット



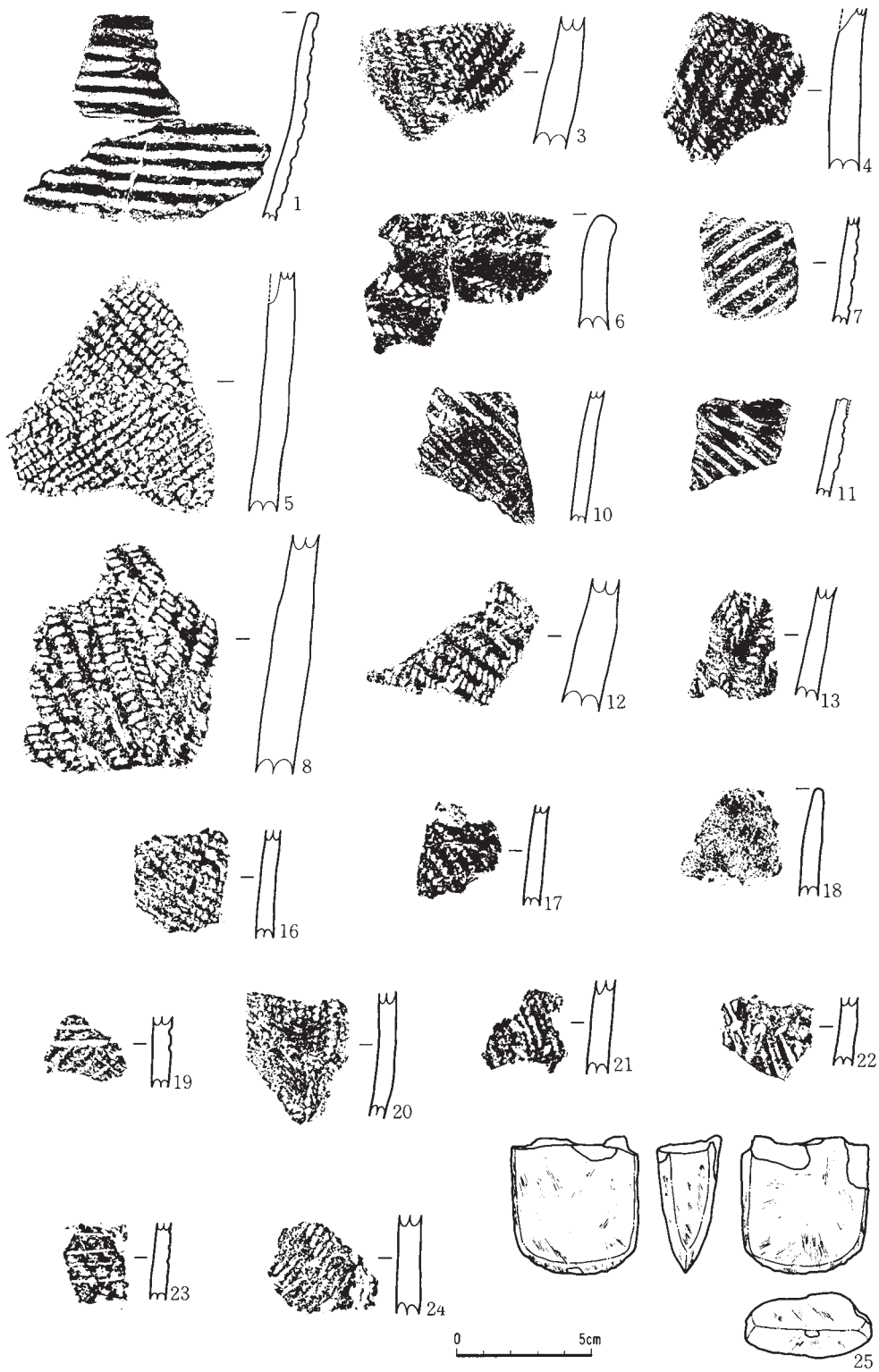
第212図 溝状ピット(11)

第90表 溝状ピット計測表(1)

No.	グリッド	長 (cm)			幅 (cm)			深 (cm)	長軸方向	備 考
		上	中	下	上	中	下			
301	DO・DP-26他	385	433	350	(56)	21	15	50~103	20.8°W	314Hと317Hを切っている。 314Hを切っている } 旧 } 新
302	DP-25・26	(184)			(15)			(4~12)	66°W	
303	DP-26	(198)			(16)			(4~20)	73°W	
304	DQ-28	217			(22)			(120)	67°W	
305	DS-25・26	305		297	15		10	(16~36)	66.5°W	
306	DS・DT-30	405		413	55		12	(55~65)	22.5°E	
307	ED・EE-34	327		316	20		10	(46~50)	47°E	
308	EE・EF-34				(25)		(10)		28°E	
309	EE・ED-27・28	422	472	474	98	30	13	89~147	13.3°W	
310	EE-27他	(330)			50		10	74~110	28.1°W	
311	DS-35他	(347)	337	338	57	21	8	83~100	10°E	
312	DT-38・39	(320)		289	30		12	40~70	59.3°W	
315	DQ-57・58	245		232	35		12	55~83	22°E	
316	DP・DQ-57	310	312	248	65	29	8	87~107	23.5°E	
317	DR-60・61	328	315	310	47	19	7	72~98	2.3°W	
318	DR-59・60	310	279	283	60	13	9	56~92	17°W	
319	DQ・DP-63他	384	378	359	59	40	15	104~106	7.4°E	
320	DQ・DR-62	326		354	33		14	90~113	2.9°E	
321	DT-62・63	324		296	32		15	102~116	34.2°W	
322	DQ-68他	300	295	290	47	34	16	87~102	12°E	
323	DP-65・66	333	312	325	68	21	12	105~115	21.3°W	
324	DQ-67-68	334		317	52		11	105~116	8.5°W	
325	DQ-67他	359		347	38		10	97~102	29.5°W	
326	EA-67・68	397	332	402	60	62	12	98~113	20°W	
327	EE-67	329	325	311	44	27	8	81~123	3°W	
328	EE-70・71	283	269	258	33	23	10	94~105	4.5°W	
329	DQ-70・71	264		273	38		15	62~83	9.5°W	
330	DP-74・75	309		295	42		9	93~98	44°W	
331	EB-74他	376	358	363	63	17	12	89~121	31.5°W	
332	DR・DS-41・42	272	310	295	79	48	16	97~109	4°E	
333	EF・EG-29	(355)	342	365	60	40	12	100~126	88°W	

第91表 溝状ピット計測表(2)

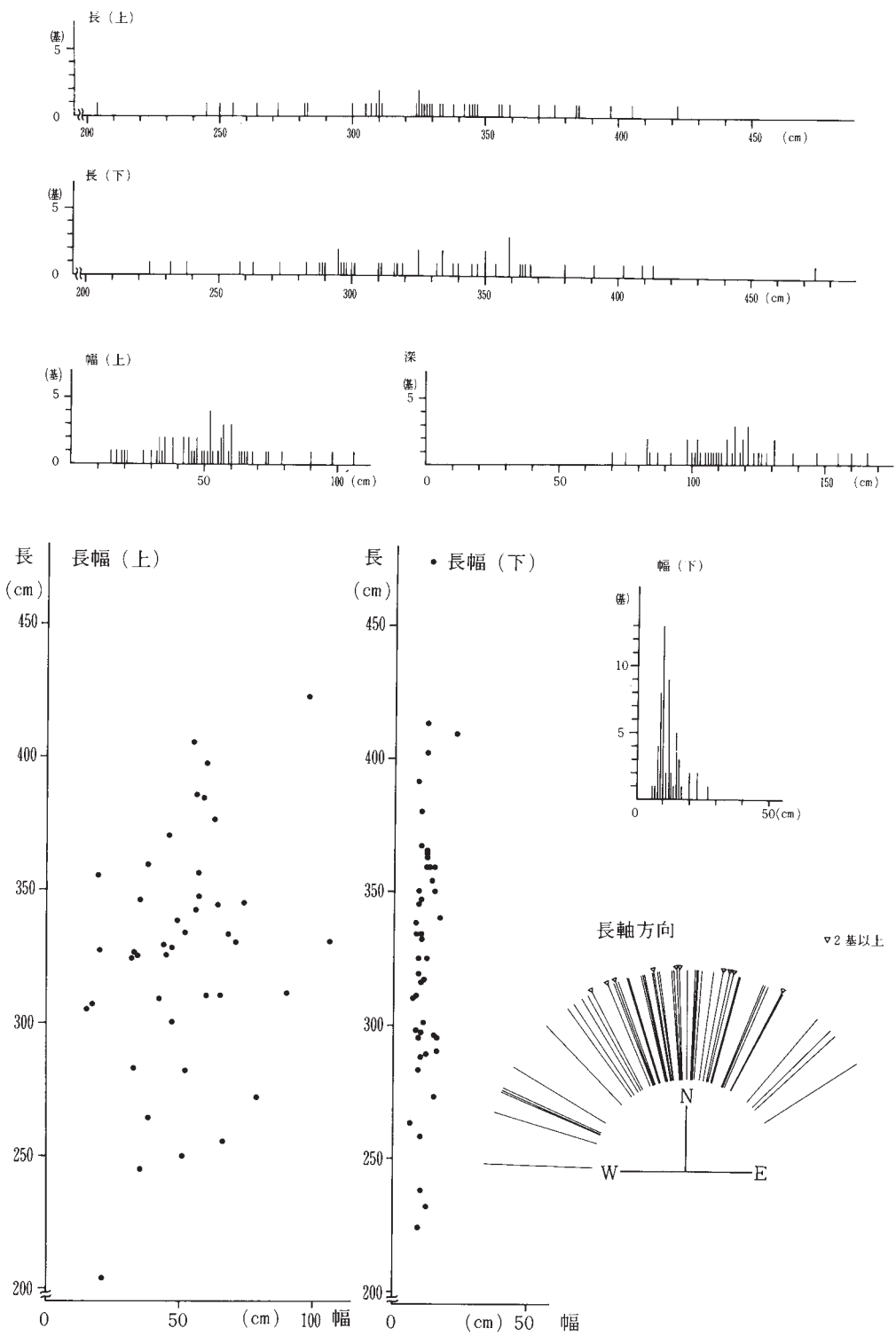
No.	グリット	長 (cm)			幅 (cm)			深 (cm)	長軸方向	備 考
		上	中	下	上	中	下			
334	EB-42・43	255	243	238	66	15	10	122~131	15°E	} 旧 新
335	EC-43他	(297)	337	364	53	34	12	100~121	12°E	
336	EB・EC-43	250		288	51		10	108~116	27.5°E	
337	DR-50・51	325		334	45		10	95~111	36.5°W	
340	EG-29・30				27		20		40°E	
341	EG-30				57		27		(12.5°E)	
342	EG-30				40		23	(13)	(45°E)	
343	DS-43・44	342	335	332	56	23	10	115~125	17.5°W	
345	DR-45他	344	340	359	64	40	13	137~166	3°W	
346	DR・DS-46他	(385)		359			12	127~138	28°W	
347	"	(380)		391			9	102~119	13°W	
348	EA-47・48他	330	347	409	106	86	23	150~160	9.5°W	} 321Hを切っている
349	ED-51・52	204		224	21		9	70~75	12.4°W	
350	DT-39・40	355		334	19		8	(43~48)	0°	
351	DT・EA-39	307		301	17		11	(32~55)	12.5°E	
352	DQ-48	338	336	319	49	16	9	75~118	2°E	
353	DQ・DR-50	370	335	367	46	28	10	135~145	3.8°W	
354	DS-59・60	282	273	263	52	22	6	75~83	21.2°W	
355	DN-65・66	356		380	57		10	95~108	8°W	
356	DO-65・66他	345	329	325	74	23	9	107~121	14.5°E	
357	EA-43・44	311	297	340	90	32	17	131~155	10°E	
358	EA-44他	(415)	(410)	(405)	73	46	20	84~119	27.4°E	
360	DM-67・68				52	30	15	(113~124)	2.5°E	} 旧 新
361	EE-76・77	346		350	35		9	75~87	23°W	
362	AD-77・78	325		345	34		9	92~101	22.9°W	
401	DM				42	23	17	131	2°W	
402	DM・DN-61				(90)	(37)	10	125~128	57°E	} 旧 新
403	DN-61他			426	52		10	(110)	10°W	
404	DM-62							(109)		} 旧 新
405	"							(105)		



第213図 溝状ピット出土遺物

第92表 溝状ピット出土遺物一覧表

図	出土地点	層	文 様		備 考
			外 面	内 面	
1	301ピット	フク土	平行沈線	貝殻条痕	VI群、6片同一個体
2	〃				
3	309ピット		LR		X群
4	〃		LR		〃
5	〃		RL、LR		〃
6	〃		LR		〃 口唇にLRの圧痕
7	310ピット		平行沈線	貝殻条痕	VI群
8	〃		LR		X群
9	333ピット		無文		V?群
10	〃		格子目状沈線	貝殻条痕	VI群
11	〃		平行沈線	〃	〃
12	〃		RL		X群
13	〃		R(LRR)		〃
14	340ピット		細隆起線		VI群
15	〃		無文		〃
16	402ピット		RL		I群
17	〃		RL		〃
18	〃		無文		〃
19	403ピット		無節→沈線		〃
20	〃		RL		〃
21	〃		RL		〃
22	〃		沈線、刺突		XIII群
23	404ピット		無節→沈線		I群
24	〃		無節L		〃
25	352ピット	フク土	磨製石斧		欠損品



第214図 溝状ピット計測分布図

第 3 章 第 3 ・ 4 次調査の成果

縄文時代

- 1、遺構は、縄文時代早期の竪穴住居跡13軒、土壇7基、焼土25箇所、集石2箇所、剥片の集積1箇所を検出した。
- 2、第404号竪穴住居跡は、早期初頭の日計式期のもので、この時期の住居跡は本県では初めて検出されたが、東北地方でもその検出例は数少なく、貴重な資料と考えられる。
- 3、第404号竪穴住居跡を除く12軒の住居跡は、比高差3m50cm、約10°の勾配をもつ東側斜面の約500㎡の範囲に立地して、重複が著しい。これを時期別にみると、ムリシ式期3軒、赤御堂期1軒、早稲田5類期5軒、不明3軒である。
- 4、早稲田5類期の第308号住居跡は、長軸が11m、短軸が7mを越す楕円形の大型住居跡である。柱穴の配列等から推定するならば、内部に間仕切をもつ特殊な性格を有する住居跡と考えられる。
- 5、土器は、早期初頭の日計式土器から、前期初頭の長七谷地群土器に及ぶ10数型式の土器がほとんど間断なく出土した。ただし、層位的関係についての把握は困難なものが多い。
- 6、ムシリ式に後続するものとして売場第群土器を設定したが、これは第群土器の一部をも含んで型式をなし、赤御堂式との間を継ぐものと考えられる。
- 7、本遺跡出土の早稲田5類土器は、押圧縄文による文様構成をなすものが多いことや、縄文を羽状に構成するなど、比較的新しい様相を示している。
- 8、剥片石器類は、石鏃、石槍、石匙等縄文時代に通有なもので、遺構の内外から多数出土したが、遺構や土器との伴出関係が明瞭なものは少ない。
- 9、剥片の接合資料により、縄文時代早期における剥片剥離技術の一端を把握することができた。

歴史時代

- 1、遺構は、平安時代の竪穴住居跡19軒、土壇50基を検出した。
- 2、第304・309号住居跡で貼り壁（仮称）が検出され、住居の構築技法の一端をうかがい知ることができた。また、壁面に袋状のピットを有する住居跡が3軒認められ、カマドの構築経過の一端がうかがわれた。
- 3、土壇は垂直に立ち上がるものがほとんどで、この遺構の特徴となるものである。伴出遺物は覆土からのものが多いが、第308号土壇では、床面上から多数の内面黒色処理の土師器杯が多量に出土し、この時期の土壇の内途の一つとして土器の収納施設が考えられる。また、出

土した炭化物から上屋を有する可能性も示している。

- 4、遺物は、土師器・須恵器が中心で、他に、第306号住居跡から雁又の鉄鏃・第302号住居跡から刀子の材料とみられる棒状の鉄が出土した。
- 5、土師器は、内黒処理等の特徴から、古い時期のものも認められるが、おおむねは10世紀から11世紀初頭のものと思われる。
- 6、集落は、縄文時代には、低地に構成されるのに対し、この時代にはほとんどが高い部分に構成される特徴を有する。また、住居が近接していることや土壌との切り合い等から、数期に分かれて営なまれたものと推定される。

第 章 売場遺跡の分析と考察

第 1 節 縄文時代の土器

(1) 第 群土器について

第 群土器は、物見台式あるいは千歳式の範ちゅうに含めることが可能な土器（B類）と、明らかにその系統上にあるが、種々の特徴で異質な点が多く、これらの型式に含めることが困難な土器（A類、C類）を含む。

A類は次のような特徴をもつ。

(1) 器形は、波状口縁を主体にし、体部から口縁部にかけて緩く内湾ぎみに立ち上がり、体部上位でわずかにくびれる。このくびれはB類のように大きくない。

口唇部の形状はB類に近く、丸味を有し、外傾するものが主体を占める。

(2) 波状の頂部に付される突起は通常1個で、B類のように左右に小突起をもたない。

(3) 文様帯は、概ね、やや内湾する部分に限定され、しかもその幅もB類に比較して狭い。

(4) 文様要素は、貝殻腹縁圧痕文を主体にし、一部に刺突文、沈線文を伴うか、あるいは刺突文、沈線文だけのものがある。

(5) 文様構成は複雑な幾何学文様をとらず、矢羽根状や単純な三角形、あるいは四角形を基本とする。

(6) 外面及び内面の調整は、ほとんど磨きが施されず、工具のなでによるものが多い。

このような特徴を有するものは、千歳遺跡や物見台遺跡には見られず、むしろ北海道住吉町を標式とする住吉町下層式や中野B遺跡第 群土器とも共通する。しかし、器形上、あるいは文様構成の多様化などの点では、より千歳式に近いものといえる。すなわち、千歳式の前段階に位置づけることが可能な土器群といえよう。

また、C類土器は、B類土器に一般的であった体部上位の屈曲部が完全に消失し、口縁部からストレートに体部下半に至ること、B類でみられた大波状の頂部に貼付けられた突起は消失し、3個の類似した小波状となること、口唇部断面が「□」状に成形されること、文様要素は沈線文及び刺突文を主体にし、その構成は縦に長い幾何学文様となること、内外面の調整は粗い条痕によることなどの特徴がある。

これらは、千歳式、あるいは物見台式の範ちゅうから逸脱したものであるが、文様要素、あるいは文様構成上では明らかにその系統上にあるものといえる。これらの特徴は千歳遺跡（昭和47年度調査の第 類土器〔三浦：1972〕）や蛇王洞遺跡第 層出土の土器（林：1968）に比較

的に近いものといえよう。

しかし、C類土器は本遺跡においては出土量が少なく、しかも他遺跡においてもまとまった出土例がなく、型式として成立するかどうか今後の課題であろう。

このように、売場遺跡第 群土器は、千歳式あるいは物見台式を主体にしながら、その前後の時期としてのA類、B類が含まれる。その編年上の位置づけは、物見台式系として把握される中で、住吉町下層式 売場 群A類 売場 群B類(千歳式) 売場 群C類としての変遷が考えられる。(三浦)

(2) 第 群土器について

第 群土器は、矢羽根状沈線文・沈線文十刺突文を特徴とするもので、従来第 群とともに糸痕文系土器のムシリ 式・早稲田3類に包括されていたものである。しかし、大グリッド55 等において第 群を混じえずに分布していたこと、及び、本群土器を包含する第339号土壌が、第 群土器を包含する土壌を切っていたことからムシリ 式を細分することとした。従って第 群土器は、沈線文を主体とする平底のムシリ 式と縄文糸痕土器の初現である尖底の赤御堂式の間隙を埋めるものとしての位置が与えられる。ただし、第 群土器と第 群土器との関係については現在のところ不明な点が多く、これに関しては留保しておく。

本群土器の特徴とムシリ 式及び赤御堂式との関係は、概略以下の如くである。

胎土等 植物性繊維を含まず、砂粒を多く含むものが多い。緻密で硬い。器厚は7～8mmで、ムシリ 式に比べ厚い。

器面調整 個体によってかなりの差はあるが、全般的に良好で光沢を有するものもある。ただし、器内面に成形時のものと考えられる指頭の凹凸や、接合部の痕跡をリング状に残すものが多く、この点後続する赤御堂式や早稲田5類に共通する。

器形 平縁と考えられ、口縁部が直立ないしやや外反し、胴部上半が若干膨らみをもつ尖底土器である。底部は乳房状に丸みを帯び、乳頭状の突起に近い極く小さな平底をもつものもある。平底のムシリ 式とは大きく異なり、尖底である赤御堂式に類するが器形の細部において異なる。また、胴部中央付近に段をもつものがある。

文様 全体を知り得たものはないが、矢羽根状沈線、沈線文十刺突文が特徴的である。ただし、沈線文+刺突文のものをすべて第 群としてムシリ 式から分離することはできないようである。これに関しては、文様構成の面から更に検討を要する。また、赤御堂式にも、沈線文、短沈線・刺突文を施文したものが若干認められる。施文具は、棒状工具・円竹管・半截竹管・劣截竹管などが主として用いられるが、先端部が割りばし状のものも用いられる。更に、結節回転文や貝殻腹縁文をも併せて施文したものもある。

器面における沈線文の施文が、器形の成形時において粘土帯の接合と交互に行われものも存

在するが、これは赤御堂式や早稲田5類土器に多用される手法である。

口唇上端には、器表面と同一の施文具によって刻みが付されたものが多いようである。この種の刻みは、ムシリ式・赤御堂式・早稲田5類の前半期にみられるものである。ただし、後二者にあつては縄文を施文したものが多い。

内面は、通常の貝殻条痕文、細かな条痕文・施文具の不明な条痕文、器面と同一な施文具による沈線文等を施したものがある。沈線文を施したものは、ムシリ式や赤御堂式には認められず、量的には多くないものの、本群土器の特徴の一つといえる。

第群土器は、概略以上の特徴をもつが、成形と施文の関係・器面調整・器形等の面で赤御堂式に類似する部分が多く認められるのである。

第群土器について簡単に述べたが、この第群土器は単独で型式として成立し、ムシリ式と赤御堂式の間隙を埋めるものではない。第群A類としたもののなかで第98図4～9の斜縄文と撚糸文を施文した土器は、第群土器がまとまって出土した55等から出土したもので、胎土や器面調整等は第群土器と全く同一で、第101図99も同様である。更に、第群B類は、微量の植物性繊維を含む点において第群及び第群A類と異なるが、ほぼ共伴するものと考えられる。それは、沈線文や刺突文が多用されること、縄文の節が小さくしかも浅く施文されること、更には縄文の施文方向が沈線ないし刺突文の方向に引きずられたものがあるなど、従来の赤御堂式には含めることができないためである。あるいは、このB類は赤御堂式の細分型式で、その初期に位置付けられる可能もあるが、ここでは、第群A・B類をも含めて売場群土器と称することにする。

売場群の類例は早稲田貝塚やムシリ遺跡をはじめとして多々あるが、特に、縄文を施文したものを共伴して出土した例は、これまでのところ赤御堂遺跡（八戸市教委1976）と、岩手県大渡野遺跡（岩手県教委1979）の2遺跡のようである。

赤御堂遺跡では、器面に斜行縄文あるいは斜行縄文と沈線文を施文し、内面にも沈線文を施文した例、矢羽根状沈線文の下位に斜縄文ないし貝殻腹縁文を施文した例などがあり、これらを工藤竹久氏は、「ムシリ式土器そのものではないように考えられる」として『ムシリ式系土器』と称した。

大渡野遺跡では、第一群土器の多くと、縄文を地文として刺突文を加えた第2群b3類、器内面における沈線文が特徴的な第2群C類が共伴したものと考えることが可能である。しかし、第2群b3類土器の内面に斜縄文を施文したものが多い点は売場群と異なり、赤御堂式により近似した様相を示すといえる。

以上、ムシリ式と赤御堂式の間で売場群を位置付けることによって、条痕文系土器から縄文条痕系土器への変遷過程が容易に理解することができる。（三宅）

(3) 第 群土器について

第 群土器はいわゆる縄文尖底土器と呼ばれる土器群で、赤御堂式あるいは早稲田 4 類に比定される。該期の資料は県内では、八戸市赤御堂遺跡（八戸市教委1975）、長七谷地貝塚（青森県教委1980）、長七谷地 8 号遺跡（八戸市教委1981）、上北郡百石町日ケ久保貝塚（百石町教委1974）、同六ヶ所村唐貝地貝塚（佐藤達夫1961）、三沢市早稲田貝塚（佐藤達夫他1960）から、県外では岩手県崎山弁天遺跡、秋田県岩井堂洞穴遺跡から比較的まとまった資料が出土している。

赤御堂式（早稲田 4 類）の編年上の位置は、唐貝地貝塚・早稲田貝塚の調査結果から層位的にムシリ 式に後続し早稲田 5 類に先行することが明確となっている。しかし、個々の土器型式を吟味すると、なおそれぞれの型式間に空白があり、連続的に推移したとは考えられておらずその前後に数型式の土器型式の存在が予想されている。例えば、長七谷地 8 号遺跡第 群土器 b 類は赤御堂式と早稲田 5 類の間に位置するものとされている。

また赤御堂式自体の細分の可能性も検討されているが、現在のところ明確に提示された意見はない。

本遺跡から出土した本群土器は前述した分類規準により A 類・B 類に大別される。今回の調査結果からは A 類・B 類が互いに独立した型式で時期差を有するものが、それとも単一型式内におけるバラエティなのかは明確にすることではなかった。しかし、赤御堂式自体が将来的に細分される可能性が十分考えられるので、ここでは A 類・B 類それぞれについてその編年的位置について若干述べてみたい。

A 類は従来の赤御堂式として理解されるが、細部では検討される点が多い、例えば他の赤御堂式に比べて内面の縄文施文の頻度が低い点、口縁が外反せず底部まで直線的に伸びる円錐形に近い器型の存在などの点などである。

B 類はやはり現在のところ赤御堂式として理解されるが、その内容を見ると後続する早稲田 5 類と類似する点が幾つかある。繊維は含まないが胎土・焼成・器厚は早稲田 5 類と非常に良く似ており、その他にも口唇部施文、内面施文の減少、太めの原体・原体の側面圧痕の出現、土器の大型化など早稲田 5 類にみられる諸特徴と共通の要素を見いだすことができる。逆に A 類では早稲田 5 類に近い要素は少ない。

以上の点から、A 類 B 類への変遷も十分に可能性として考えられる。とすれば長七谷地 8 号遺跡や 群土器と B 類との関連が今後の課題となろう。

赤御堂式は従来その編年的位置を東北地方南部の上川名 式、梨木畑式、関東の茅山上層式に対比されてきたが、最近の県内の調査例をみると幾つかの問題点が指摘されており再検討の時期に来ていると言える。

（岡田）

(4) 群土器について

第6号住居跡出土の土器群を中心とするもので、その特徴は以下のとおりである。

(1) 器形は、口縁部からやや内湾しながら体部下半に至り、底部が丸底の深鉢形を主体とする。口縁部は平坦口縁で、やや外反するものもあるが、概ね、直立するものが多い。口端は面取りされたもの、丸味をもつものなどがある。

(2) 胎土及び焼成の度合は、群土器（早稲田5類）に近く、多量の植物性繊維を含み、しかも軟質である。

(3) 内面の調整は群土器（長七谷地群）のように、篋状工具を使用したものがほとんど無く、指頭圧痕によるものが主体を占める。

(4) 外面の文様は、単軸絡条体の原体を使用するもの、0段2条か0段多条の原体を使用するもの、撚糸の側面圧痕を用いるものなどがある。

単軸絡条体は、第群土器と異なり縄を密に巻きつけ、しかも施文方法においても、横位、縦位の回転で整然性が高い。0段多条の原体を使用するものは、第群土器のものよりは整然性があるが、第群土器のように明瞭な帯状を示さない。

このような特徴を有する本群土器は、型式学的に、早稲田5類に後出するものとして把握できる。また、本群土器期の第6号住居跡は、長七谷地群期の第5号住居跡に切られていることから、それ以前のものであることは明白である。すなわち、早稲田5類と、長七谷地群期の中間に位置づけられよう。しかし、東北地方北部の土器編年上、特定できる型式が存在しなく、しかも、空間的な広がりが理解されていない点で、独立した型式として把握するには問題も多い。今後の課題であろう。

(三浦)

第2節 縄文時代の石器

石ヒの使用方法について

石ヒについては第1・2次調査において裏面の細部調整、裏面の歯こぼれ、表面の稜の片寄り、側縁の膨らみ、先端の辺の傾きの5項目について観察した。これを集計すると第93表のようになる。

これをみるとかなり左右の差がはっきりしており「1 - L 2 - R 3 - R 4 - L 5 - R」が一般的な状態である。これはつまり、裏面の細部調整すなわち歯つぶしと考えると、それぞれがある左側が手をあてがう側と考えられ、歯こぼれのある右側は作業対象にあてられた刃部ということになる。そうすると表面の稜の片寄りは、刃部側を厚くすることによる強化、側縁が左に膨らむ形態は手にうまく合うようにするため、先端の辺が右下がりなのは刃部の端を

第93表 石ヒ観察集計表

	1 (%)	2 (%)	3 (%)	4 (%)	5 (%)
観察個数	33 (100)	18 (100)	50 (100)	39 (100)	19 (100)
L	27 (82)	3 (17)	10 (20)	31 (79)	4 (21)
R	5 (15)	12 (67)	35 (70)	8 (21)	15 (79)
R L (M)	1 (3)	3 (17)	5 (10)		

鋭利にするためと考えられよう。このような使用方法は熊沢遺跡の報告で指摘された、右手使用でつまみ部を手中とし、刃縁を内にむけて手前に引いて削る方法(青森県教育委員会:1977)に合致する。図3は1-R、2-L、3-L、4-R、図2は1-R、3-L、4-R、5-Lと一般的なものと反対であり左ききの人の使用したものと考えられる。(坂本)

直刃斧・篋状石器類の観察(注)

直刃斧・篋状石器類40点について肉眼及び実体顕微鏡により刃部等の観察を行った。以下、形態、製作方法、刃部形態、刃部観察の所見の順で記載し、刃部については一部分の拡大スケッチを付した。

なお、形態は以下のように記号で示した。

1類A.....両側縁がほぼ直線で、台形を基本とするもの。

B.....両側縁が内湾し、三角形を基本とするもの。

2類C.....形態及び製作手法は1類に近似するが、刃部面に調整剥離を有するもの。(平面形態は撥形で、両側縁は内湾する。

3類D.....平面形態が台形を基本とし、両側縁がほぼ直線を呈するもの。(刃部辺は直線を呈するものと若干丸みを帯びるものがある。)

E.....平面形態が三角形を基本とし、両側縁及び刃部が丸みをもつもの。

F.....平面形態が長楕円形を基本とし、刃部は円刃で両側縁までまわり込むもの。

1 類

1.(図209-9)

〔形態〕 A

〔製作方法〕 両側縁からの荒い打ち欠きにより全面を加工している。主要剥離面の側縁も同様の剥離技法によるが、第一次剥離面を大きく残す。また基端部には自然面を残す。

〔刃部形状〕 片刃で若干丸みを帯びる。

〔刃部観察〕 刃部付近全体にわたり摩滅しているが、擦痕はみられない。両側縁及び、刃部中央部の刃こぼれ痕はほとんど摩滅していない。主要剥離面倒の刃部にはかなり荒い擦痕があり、光沢を帯びている。擦痕の方向は刃部辺に村しほぼ垂直である。

2 .(図209 - 1)

〔形 態〕 A

〔製作方法〕 第一次剥離面を刃部に利用し、両側縁とも荒い打ち欠きにより成形されている。成形の段階で、主要剥離面のバルブを除去している。

〔刃部形状〕 片刃で丸みを帯び湾曲している。

〔刃部観察〕 刃部左側が比較的摩耗の度合いが大きく、刃こぼれ痕の稜線がつぶれ光沢を帯びている。若干ながら擦痕がみられ、刃部辺に対し65°~75°の角度を示す。主要剥離面側では刃部付近に細かい擦痕がみられ、その方向は背面刃部と一致する。主要剥離面右側の刃部に直交するような擦痕がみられる。

3 .(図209 - 4)

〔形 態〕 A

〔製作方法〕 第一次剥離面を刃部に利用し、両側縁とも荒い打ち欠きにより成形されている。両面とも刃部付近を残し、ほぼ全面加工で基端部は押庄による剥離で調整されている。

〔刃部形状〕 ほぼ直刃の片刃である。

〔刃部観察〕 刃縁部だけの摩耗で、刃こぼれ痕の稜線が「トロトロ」に摩滅し、光沢を帯びている。しかし、擦痕は観察されない。主要剥離面側刃部付近には、細かいが比較的長い擦痕がみられ、光沢を帯びている。擦痕の方向は刃部辺に対しほぼ垂直である。

4 .(図209 - 6)

〔形 態〕 B

〔製作方法〕 両側縁とも荒い打ち欠きにより成形されている。背面は刃部面を残すが、腹面は第一次剥離面を半分以上残している。基部付近の横断面形状は菱形を呈し、基端部も全体と同じ厚さに調整されている。

〔刃部形状〕 片刃で若干丸みを帯びる。

〔刃部観察〕 刃部全体が摩耗し、光沢を帯びているが、擦痕はみられない。また、刃部中央部の刃こぼれ痕には摩耗痕はみられない。主要剥離面側、刃部中央部とも摩耗度は少ない。しかし両サイドでは細かい擦痕がみられその方向は刃部辺に対してほぼ垂直である。

5 .(図209 - 3)

〔形 態〕 B

〔製作方法〕 両側縁とも荒い打ち欠きにより成形されている。また、基端部も調整されているが、両面とも刃部直上付近には加工を加えず第一次剥離面を残している。

〔刃部形状〕 直刃の片刃である。

〔刃部観察〕 刃部面にはほとんど摩耗痕は認められないが、主要剥離面倒刃部には若干の擦

痕がみられ、その方向は刃部辺に村しほぼ垂直である。この擦痕は細かく浅い。

6 .(図210 - 21)

〔形 態〕 B

〔製作方法〕 第一次剥離による厚い大形の剥片を利用し、荒い打ち欠きにより両面を加工している。また、主要剥離面側からの打ち欠きにより刃部を作り出しているが、刃部の両端は調整の段階で剥離されている。

〔刃部形状〕 片刃で丸みを帯びる。

〔刃部観察〕 刃部面側では刃部付近に摩滅痕がみられ、光沢を帯びている。刃部中央部に若干の細かい擦痕があり、その方向は刃部辺に対しほぼ垂直である。主要剥離面倒では刃縁部に細かい擦痕があり、方向は同じである。

7 .(図209 - 5)

〔形 態〕 B

〔製作方法〕 第一次剥離による薄い剥片を利用し、表面には自然面を残している。両面とも打ち欠きによる両縁加工にとどめ、刃部は自然面のカーブを利用している。

〔刃部形状〕 片刃で丸みを帯びる。

〔刃部観察〕 刃部縁に刃こぼれがあり、刃部中央部から左側に若干擦痕がみられる。擦痕は非常に細かく、その方向は刃部に対し垂直である。主要剥離面側でも刃縁部と同様の擦痕がみられる。

2 類

8 .(図209 - 8)

〔形 態〕 C

〔製作方法〕 両側縁とも荒い打ち欠きにより成形されている。刃部面及び、主要剥離面側刃部付近は、第一次剥離面を残しているが、刃縁部には押圧剥離によるていねいな調整を加えている。基端部は第一次剥離の段階で裁断されている。

〔刃部形状〕 片刃で丸みを帯び、両端にかけて湾曲する。

〔刃部観察〕 刃部縁に刃こぼれ痕がみられるが、擦痕はみられない。しかし主要剥離面側では刃部中央部付近にこまかい擦痕がみられ「トロトロ」に摩滅しているが、その方向は刃部辺に対しほぼ垂直である。

9 .(図211 - 24)

〔形 態〕 C

〔製作方法〕 全周がていねいな押圧による剥離で成形され、両面中央部には第一次剥離面を残している。両面から調整を加え刃部を作り出している。

〔刃部形状〕 両刃で丸みを帯びる。

〔刃部観察〕 刃部全体の剥離稜線が摩滅し、光沢を帯びている。剥離稜線に微細な擦痕がみられ、その方向は刃部辺に対しほぼ 65° ~ 75° の角度である。主要剥離面側では刃部面側より摩耗度は少ないが微細な擦痕が観察できた。その方向は 65° ~ 75° の角度で、刃部面側と一致する。

3 類

10.(図211 - 27)

〔形 態〕 D

〔製作方法〕 第一次剥離により薄い剥片を作る。その打点は右側縁の刃部寄りにあり、バルブを除去した後、側縁を調整し最終的に刃部を作り出している。基端部に自然面を残す。

〔刃部形状〕 片刃で若干丸みを帯びる。

〔刃部観察〕 刃部中央部の剥離稜線から基部中央部までかなり摩滅し、擦痕もみられ、その方向は刃部辺に村しほぼ 70° ~ 80° の角度である。しかし刃縁部にはみられない。主要剥離面側では細かい擦痕が主として左側に集中し、擦痕と刃部辺との角度は 70° ~ 80° で、背面と一致する。

11.(図211 - 32)

〔形 態〕 D

〔製作方法〕 第一次剥離により薄い剥片を作り、その背面は押圧剥離により全面加工し、主要剥離面は両縁加工にとどめている。基端部に自然面を残す。

〔刃部形状〕 片刃で若干丸みを帯びる。

〔刃部観察〕 全面がかなり摩耗し、右側半分の剥離の稜線が面を呈している。刃部付近も「トロトロ」に摩滅しているが擦痕はみられない。右側縁の摩滅が激しく、側縁に対して平行に荒い擦痕がみられた。擦痕は非常に細かく密である。主要剥離面側の刃部付近に荒い擦痕があり、その方向は刃部辺に村しほぼ垂直で、長く密である。また、左側縁には側縁に対して平行な擦痕が密に走っている。全面が相当摩耗し、時間的にも長く使用されたものと思われる。

12.(図211 - 29)

〔形 態〕 D

〔製作方法〕 薄い剥片を利用し、刃部面は押圧技法による全面剥離で成形されている。主要剥離面倒では側縁部加工のみにとどめ、最終的に押圧剥離により刃部を作り出している。

〔刃部形状〕 直刃の片刃である。

〔刃部観察〕 刃縁部にほぼ垂直な細かい擦痕があり、剥離の稜線が丸くなっている。主要剥離面側刃部付近にも同様な擦痕がみられ、角度も一致する。

13.(図211 - 34)

〔形態〕 D

〔製作方法〕 第一次剥離により薄手の剥片を作った後、主要剥離面側の刃部にあるバルブを除去している。刃部面は全面加工であるが、主要剥離面側では両縁加工にとどめ、最終的に刃部を作り出している。基部を折損しているが、折損面に敲打痕があり、再利用と思われる。

〔刃部形状〕 片刃で若干の丸みを帯びる。

〔刃部観察〕 刃部面は摩滅しているが擦痕はみられない。主要剥離面側の刃部付近に細かい擦痕がみられ光沢をおびている。擦痕の方向は刃部辺に対し、75°～85°の角度をもっている。また、微細な刃こぼれ痕もある。

14.

〔形態〕 E

〔製作方法〕 薄い剥片を利用し、主要剥離面側には第一次剥離面を残すが、側縁は押圧により調整されている。また、刃部面は押圧による大形の剥離で全面加工している。刃部は同じ手法によるていねいな作りである。

〔刃部形状〕 片刃である。

〔刃部観察〕 刃部全体の調整剥離痕が摩滅し、丸みを帯びている。刃部の右側に若干の擦痕がみられ、その方向は刃部辺に対しほぼ垂直である。主要剥離面側は刃部中央部の左側に擦痕が集中し、光沢を帯びて「トロトロ」に摩滅している。その方向は刃部辺に対し垂直で刃部面側と一致する。

15.(図211 - 25)

〔形態〕 E

〔製作方法〕 第一次剥離による薄い剥片を利用し、二次加工で両面の両側縁を大まかに調整したのち、押圧剥離で刃部を作り出している。主要剥離面側の刃部は加工されていない。

〔刃部形状〕 片刃である。

〔刃部観察〕 刃縁部は刃こぼれが多く、摩滅が激しいが擦痕は若干みられる程度である。擦痕の方向は主要剥離面と直角に交わる。

16.(図210 - 13)

〔形態〕 E

〔製作方法〕 第一次剥離による厚手の剥片を利用し、両面とも側縁から打ち欠いた大きな剥離を有する。刃部面側には刃部及び両側縁に階段状のこまかい調整剥離痕がみられるが、裏面にはほとんどみられない。横断面は菱形を呈する。

〔刃部形状〕 片刃である。

〔刃部観察〕 刃部面側にはほとんど摩滅及び擦痕はみられない。しかし、主要剥離面側の刃部付近全体に摩滅による光沢がみられ、刃部右側に多数の擦痕がみられる。表面が「トロトロ」に摩滅しており、擦痕の方向は刃部辺に対し75°~85°の角度である。またこの擦痕と直交するような擦痕も数条みられる。

17.(図210 - 19)

〔形態〕 E

〔製作方法〕 第一次剥離による薄い剥片を利用し、主要剥離面側は大きな剥離で加工されている。刃部面は全面加工で両側縁を調整後、刃部を押圧による剥離で加工している。

〔刃部形状〕 片刃である。

〔刃部観察〕 刃部面には細かい刃こぼれ痕がみられるが擦痕はみられない。主要剥離面側には刃縁部全体に若干の細かい擦痕があり、その方向は刃部辺に対し垂直である。また、刃縁部剥離の稜線が若干摩滅し、光沢を帯びている。

18.(図210 - 23)

〔形態〕 E

〔製作方法〕 大形の厚い剥片を利用し、荒い打ち欠きにより成形されている。両面加工であるが刃部は裏面からの打撃による剥離で作り出されている。両面とも側縁は荒い調整である。

〔刃部形状〕 片刃である。

〔刃部観察〕 刃部付近にはほとんど擦痕はみられない。しかし剥離の稜線は摩滅し丸くなっている。胴部及び基部では両面とも剥離の稜線が「トロトロ」に摩滅し、擦痕もみられる。擦痕の方向は刃部辺に対しほぼ垂直で、比較的短い。刃部付近の高い所にも刃部辺に直交する擦痕がみられる。裏面の刃部付近にも細かく短い擦痕がみられる。また、基部付近にも若干の擦痕がみられる。しかし刃部面側より摩耗度は少ないようである。

19.(図211 - 30)

〔形態〕 E

〔製作方法〕 薄い剥片を利用し、刃部面は押圧剥離により全面加工されている。また、主要剥離面は同技法による両縁加工にとどめ、第一次剥離面を大きく残している。刃部の作りや調整はいいである。

〔刃部形状〕 片刃である。

〔刃部観察〕 刃縁部は「トロトロ」に摩滅しているが擦痕はみられない。また、胴部から基部の高い部分も「トロトロ」に摩滅し、荒い擦痕がみられる。擦痕の方向は刃部辺に村しほぼ垂直である。両側縁には擦痕はみられない。主要剥離面側は、刃部付近に荒い擦痕がみられ、「トロトロ」に摩滅し、光沢を帯びている。擦痕は比較的長く、その方向は刃部辺に対

しほぼ垂直である。側縁及び基部付近には、ほとんどみられない。

20.(図210 - 15)

〔形態〕 F

〔製作方法〕 薄い剥片を利用し、荒い打ち欠きによる調整で背面のみ成形されている。刃部の作りも大きい剥離で調整されている。

〔刃部形状〕 片刃で薄い。

〔刃部観察〕 刃部付近の稜線が「トロトロ」に摩滅し丸くなり、光沢を帯びている。若干の擦痕もみられ、その方向は刃部辺に村し75°~85°である。主要剥離面の刃部付近にも細かい擦痕がみられる。

直刃斧・石篋類に属する石器は総点数50点出土した。そのうち顕微鏡観察で使用痕を明瞭に確認できるものは22点である。使用痕の観察では、擦痕の有無、状態、方向、摩耗状態、光沢等に主眼をおいた。(倍率は30~60倍を多用し、状況に応じて変更)

1類に属するもの(注)は、いわゆるトランシェ様石器といわれ、従来、ナイフ的要素がある(富樫泰時、東北考古学の諸問題1976)といわれている。本遺跡出土の資料を詳細に観察すると、主として主要剥離面の刃部付近に、刃部辺にほぼ直交するような擦痕が観察される。擦痕は胴部及び基部付近にはほとんどみられない。また、両側縁はほとんど使われないうで、光沢及び摩耗は少ないようである。刃部は、中央部が激しく摩滅するものと、両端が激しく摩滅するものがあり、前者には中央部に大きな刃こぼれがみられ、後者には刃部全体に細かい刃こぼれがみられる。このことから、これらの石器はナイフ的機能をもつものではなく、基部側を手前に、刃部側を前面にし、主要剥離面を下に向けて持ち、前に強く押し出すような形で使われたものと思われる。ナイフの用途であるならば、擦痕は刃部辺に対し平行あるいはほぼ水平にみられるはずであり、直交する形にはならない。また、手斧的要素も考えられるが、着柄の有無は観察されなかった。

2類に分類されたものは、製作方法は1類と同様であるが、刃部一帯に調整剥離が施され、刃部を再生したものではないかとも思われる。しかし、刃部を再生しなければならないほどの使用痕跡は認められないが、短期間の使用と思われる若干の擦痕は認められる。この擦痕は主に、主要剥離面の刃部中央部付近に集中し、比較的細かい。方向は刃部辺に対しほぼ垂直に近い刃部面では、摩耗は激しいが、擦痕は若干みられる程度で、その方向は表裏面とも一致する。

- 1類と同様の使用痕跡が認められることから、使用方法は同じではないかと思われる。

3類に分類されたもの(注)は、石篋あるいは篋状石器と称されるもので、使用痕跡が観察されたものは11点である。これらは、いちじるしく摩滅し、鏡状の光沢を放つ、また、比較的こまかい擦痕が多い。擦痕の方向は刃部辺に対し、65°~90°の角度であるが、垂直なものもほと

んどである。刃部付近の擦痕は主要剥離面に多い。胴部から基部にかけて擦痕をもつものは少ない。また、側縁はほとんど使用されていない。刃部面では、刃部付近に摩耗の痕跡はあるが、擦痕はほとんどみられない。刃部縁に細かい刃こぼれ痕がみられるが、打撃による刃こぼれ痕とは思われない。このことから使用方法は、1類、2類と同様であると思われる。しかし、これらの石器には、刃部の面側において胴部から基部にかけて全体的に摩耗し、刃部辺に対し、70°~90°の擦痕をもつものが4点あるが(3、14、15、23)擦痕の付き方から別の使用方法と思われる。また、(14)は表裏面とも激しく摩滅し、刃部に垂直な擦痕と右側縁付近に側縁と平行する擦痕がみられ、ナイフの?用途と兼用したものと思われる。

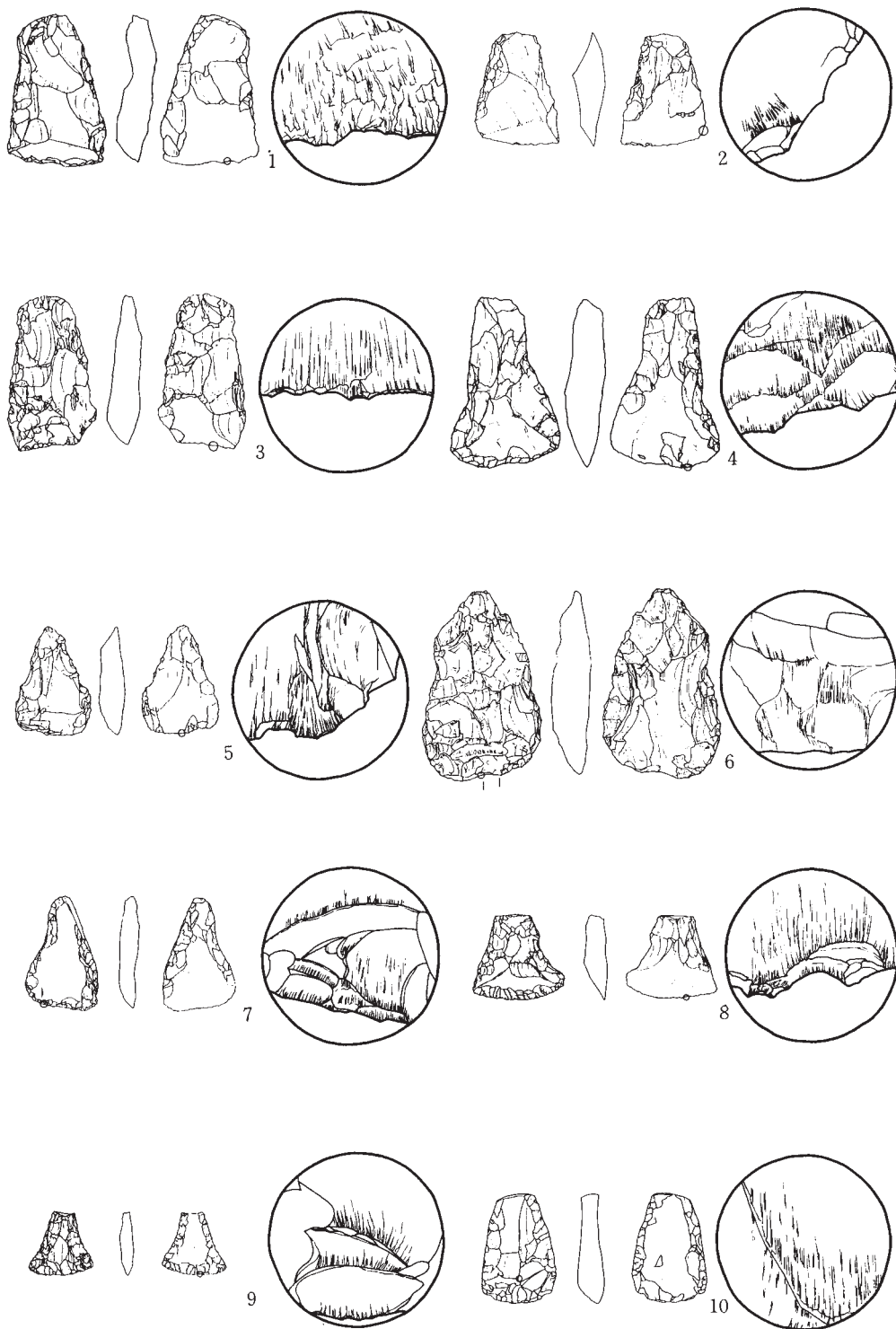
1類は、一般に縄文時代早期の貝殻腹縁文系や刺突文系に伴って出土し、3類は前期初頭から出現し始める。本遺跡は、物見台式、ムシリ式、早稲田5類、赤御堂式、長七谷地群の5型式が出土した早期中葉から前期初頭にかけての遺跡である。このことから1、3類は形態を変えながら、断続使用されたもので、2類はこの中間に位置するものと思われる。(高坂)

注 本稿は第1次調査の担当者高坂一夫が執筆し、坂本が編集したものである。

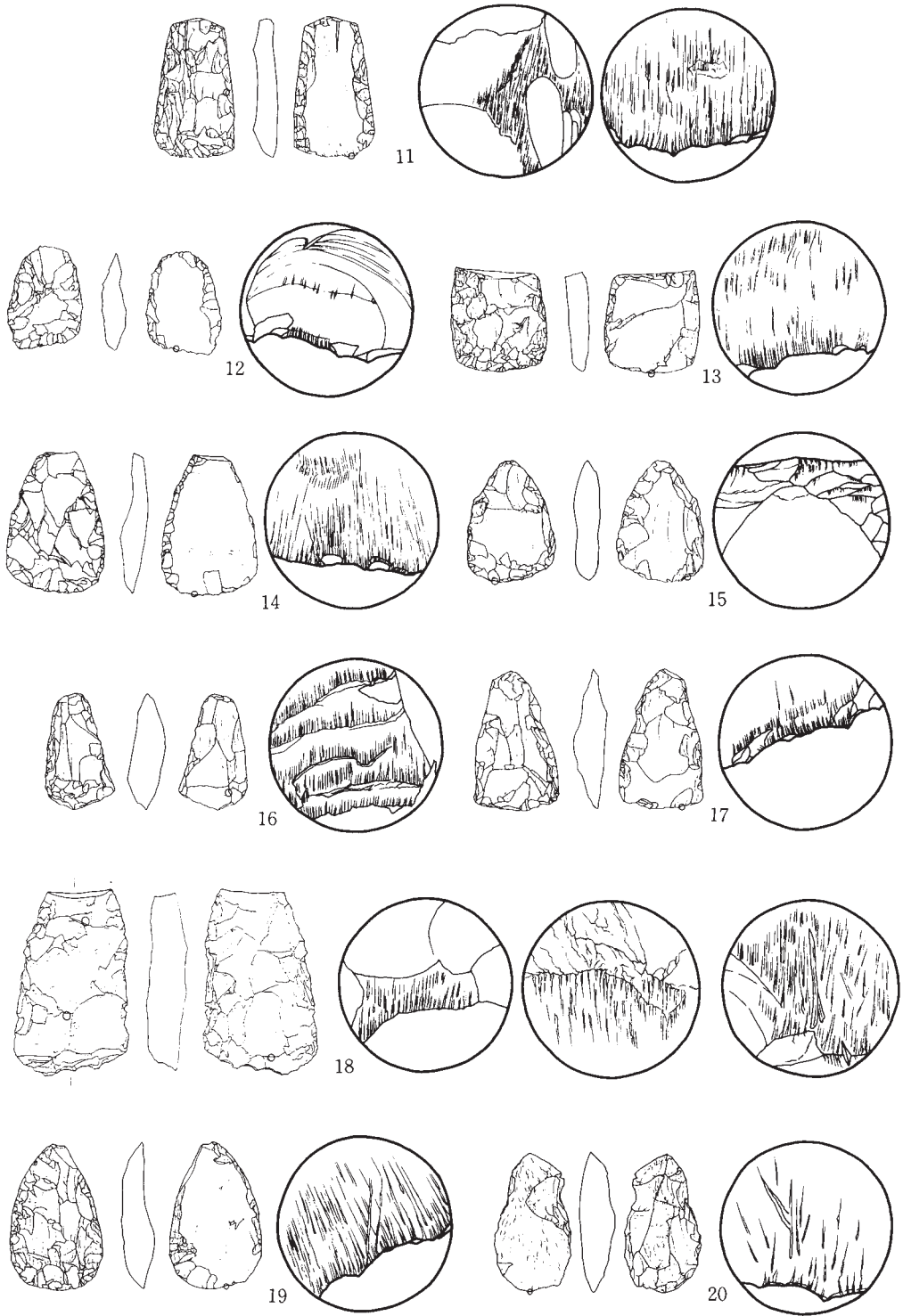
ここでの分類は他の部分での分類と若干異なるため、ここでの分類にあてはまる個体の実測図の番号と坂本の分類を以下に呈示する。資料は第1・2次調査のものである。

1類	2類	3類
1 図209 - 9 (類)	8 図209 - 8 (類)	10 図211 - 27 (b類)
2 図209 - 1 (類)	9 図211 - 24 (b類)	11 図211 - 32 (b類)
3 図209 - 4 (類)		12 図211 - 29 (b類)
4 図209 - 6 (類)		13 図211 - 34 (b類)
5 図209 - 3 (類)		14 (b類)
6 図210 - 21 (a類)		15 図211 - 25 (b類)
7 図209 - 5 (類)		16 図210 - 13 (a類)
		17 図210 - 19 (a類)
		18 図210 - 23 (a類)
		19 図211 - 30 (b類)
		20 図210 - 15 (a類)

(坂本)



第215図 使用痕観察図(1)



第216図 使用痕観察図(2)

直刃斧・石筥類

従来、直刃斧（トランシュ様石器）や、筥状石器と呼ばれているものにおおむね相当するものである。本遺跡の資料では、本類のうちの Ⅰ類が直刃斧に、Ⅱ類が筥状石器に近いものと思われる。しかし、本類を他の剥片石器類（石鏃・石匕など）に比較すると、加工があまり細かではなく、形態も整ったものが少なく、個体間のばらつきが大きい。そして、Ⅰ類とⅡ類の間でも形態的に製作技法上似るものが多い。更に他の遺跡でも、直刃斧を石筥の中に入れて分類しているものが多い。このため本報告では、これらを一括して、同じ分類の中で扱うことにした。本類に全般的にみられる特徴としては以下のことがあげられる。

二等辺三角形ないし台形。

縁辺部に細部調整が加えられ薄い。

側縁を中央にして縦断面をみると、表側が厚く裏側が薄い。

「基端」の形態は様々で規格性が認められない。

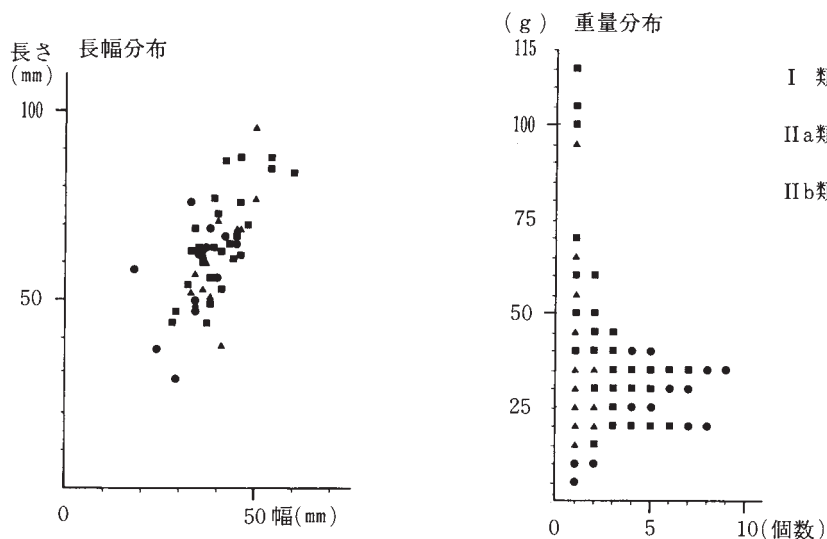
「刃部」の縦断面はかなり厚いもの、薄いものがあるが、いずれも末端は鋭い。

「刃部」は直線的で「側縁」は交互剥離によりジグザグ状のものが多い。

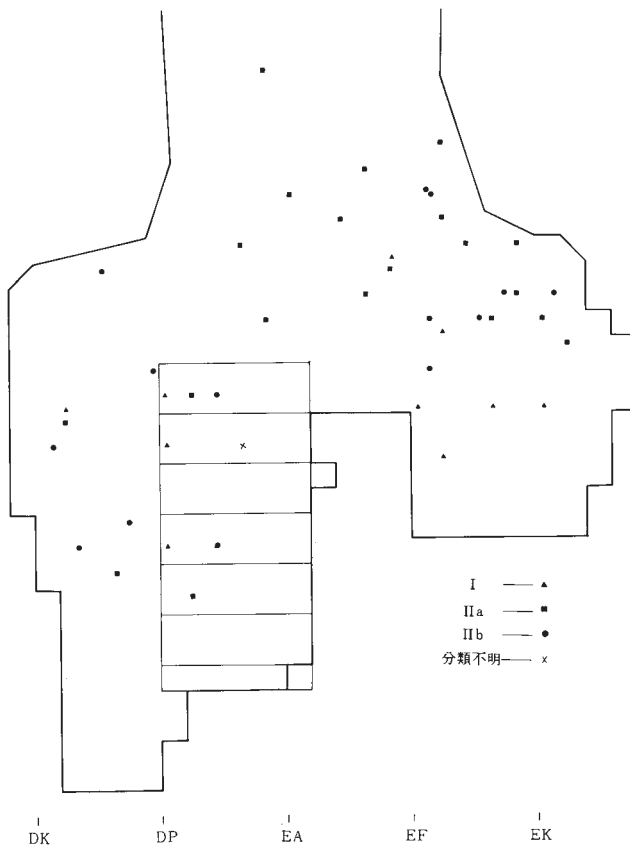
計測値の最大値・最小値・平均値は以下のとおりである。

第94表 直刃斧・石筥類計測値集計表

分類	長さ mm			幅 mm			厚さ mm			重量 g		
	最大	最小	平均	最大	最小	平均	最大	最小	平均	最大	最小	平均
I	96	38	63.7	50	33	40.8	19	8	14.7	93.5	14.5	37.7
II a	88	44	65.4	60	28	40.8	26	9	15.8	115.0	12.5	43.5
III b	76	29	57.2	45	18	34.2	14	6	10.6	38.7	4.1	22.6
計	96	29	63	60	18	39.2	26	6	14.3	115.0	4.1	37.1



第217図 直刃斧・石筥類計測値集計グラフ



第218図 直刃斧・石筈類分布図

更に側縁と刃部について観察し、それぞれを以下の項目について分類して次の表に記載した。

- A. 側縁形 1. 内湾するもの 2. 直線的なもの 3. 外へ膨らむもの
- B. 刃部形 1. 直線状 2. やや膨らむ 3. 大きく膨らむ
- C. 側縁の傾き 1. 刃部に向ってやや開く 2. 刃部に向って大きく開く
- D. 刃部の傾き 1. 水平 2. 左下がり 3. 右下がり
- E. 刃部断面の角度 1. 小 2. 大
- F. 裏面の側縁調整 1. 深く大きく粗いもの 2. 浅く小さく整然としたもの
- G. 刃部裏面の剥離 1. 全体にみられるもの 2. 部分的にみられるがないもの
- H. 打点(表面からみて) R - 右方 L - 左方 U - 上方 D - 下方
 RU - 右斜上 LU - 左斜上 RD - 右斜下 LD - 左斜下

これを分類ごとに集計すると下の表ようになる。これらの図・表から、次のことが各類の相違点としてあげられる。

側 縁 形..... 類では、凸のもの、直線状のもの、凹のものがそれぞれ同数である。

第95表 直刃斧・石筈類集計表

分類	遺構内	遺構外	計	破損率%
I	3(0)	11(0)	14(0)	0
II	a	7(0)	22(1)	3.4
	b	1(0)	15(3)	18.7
	計	10(0)	37(4)	8.5
合計	13(2)	54(10)	67(12)	17.9

第96表 直刃斧・石筈類石質一覧

《直刃斧、石筈類》

石器分類	石質分類	珪質頁岩	頁岩	碧玉	玉髓	鉄石英
		1 I	9	4		
2 IIa	28	4	2	1		
3 IIb	16	1				
計	54	9	2	1	1	

第97表 直刃斧・石筥類観察表

番号	A. 側縁形	B. 刃部形	C. 側縁傾	D. 刃部傾	E. 刃部角度	F. 裏面側縁調整	G. 刃部裏面の剝離	H. 打点	番号	A. 側縁形	B. 刃部形	C. 側縁傾	D. 刃部傾	E. 刃部角度	F. 裏面側縁調整	G. 刃部裏面の剝離	H. 打点
1	2	2	1	1	1	1	2	R		3	2	1	1	1	2	1	L
2	2	1	1	1	2	1	2	L		3	2	1	1	1	1	1	?
9	2	2	1	1	2	1	2	U		2	1	2	1	1	1	2	L
	2	2	1	1	1	1	2	R		2	2	1	1	2	2	2	?
6	1	2	1	1	1	1	2	LU		3	2	1	1	2	1	1	?
3	1	1	2	1	1	1	2	R		2	-	1	1	2	1	2	?
5	1	1	2	1	1	2	2	RU		3	2	1	1	1	1	1	D
10	3	1	1	1	1	2	1	R		3	-	1	1	2	1	2	?
7	3	1	1	1	1	1	2	?		3	2	1	1	1	2	1	L
	3	2	1	1	2	1	1	?		2	2	1	1	2	1	1	RD?
4	3	1	1	1	2	1	2	?		1	3?	?	-	2	1	2	UO
8	1	2	2	1	2	1	2	RU		2	2	1	1	1	1	1	UO
20	2	1	1	1	2	2	2	U		3	2		1	2	1	2	?
17	3	2	2	2	1	1	2	L	31	3	1	1	2	2	1	2	D
	3	3	1	1	1	1	2	LD		3	2	1	1	2	2	2	RD
	3	2	1	1	1	1	2	L	30	3	2	1	1	2	2	1	RD
19	3	2	1	1	1	1	2	?	28	3	2	1	1	2	2	2	R
13	2	2	1	1	2	1	2	?	32	2	2	1	1	2	2	2	LD
12	3	1	1	1	1	1	2	L	27	3	2	1	1	2	2	2	?
	2	1	1	1	1	2	2	?	25	3	2	2	1	2	1	2	L
15	3	3	1	1	1	1	2	LU	33	3	3	1	1	1	2	2	U
	3	3	2	1	1	2	1	D	29	3	1	1	3	2	2	2	U
18	3	2	1	1	1	1	2	U		3	1	1	1	1	1	2	LU
22	3	2	1	1	2	2	2	?	26	3	2	1	2	2	1	2	LU
16	3	2	1	1	2	1	2	L	24	1	2	2	1	1	2	1	?
	3	2	1	1	1	1	1	?		2	2	1	1	2	1	1	?
21	3	2	1	1	1	1	2	?	7	1と3	2	1	-	2	2	1	LD
23	2	2	1	1	2	1	2	?									

第98表 直刃斧・石筥類観察集計表

	I %	IIa %	IIb %	計 %
A. 側縁形	1 4 33	1 3 1	7 6 11	11
	2 4 33	9 31	2 14 15	27
	3 4 33	19 66	10 71 33	60
B. 刃部形	1 6 50	4 14 3	21 13 24	24
	2 6 50	19 66	10 71 35	64
	3 - -	4 14 1	7 5 9	9
C. 側縁傾	1 9 75	23 79	12 86 44	80
	2 3 25	3 10 2	14 8 15	15
D. 刃部傾	1 12 100	27 93	10 71 44	80
	2 - -	1 3 2	14 3 5	5
	3 - -	- - 1	7 1 2	2
E. 刃部角度	1 7 58	17 59	3 21 27	49
	2 5 42	12 41	11 79 28	51
F. 裏面側縁調整	1 10 83	22 76	5 36 37	67
	2 2 17	7 24 9	64 18 33	33
G. 刃部裏面の剝離	1 2 17	9 31	4 29 15	27
	2 10 83	18 62	10 71 38	69

第99表 直刃斧・石筥類観察集計表(打点)

	R	L	U	D	RU	LU	RD	LD	不明
I	4	1	1	0	2	1	0	0	3
IIa	0	7	4	3	0	1	0	0	14
IIb	1	1	2	1	0	3	2	2	3
計	5	9	7	4	2	5	2	2	19

a類・ b類では凸のものが多数で、直線状のものが少数、凹湾ぎみのものは a類・ b類とも1点ずつである。

刃部形..... 類では、直線状のもの、ゆるく湾曲したものが半数ずつあり、強い湾曲のものはない。 a類・ b類では、ゆるい湾曲のものが過半数で、直線状のもの、強い湾曲のものは少数である。

刃部角度..... 類と a類では、角度の小さいものが大きいものよりやや多い。 b類では角度の大きいものが多数を占めている。

裏面の側縁調整..... 類と a類は、深いものが多数である。 b類では浅いものが、若干深いものより多く、細かい剥離となっている。

打点..... 類では、右側ないし斜め右側のものが多く、 a類では、左側からの(裏面の第1次剥離面)ものが多く、次いで上下からのもので、右側、斜め右側のものはない。 b類では様々な方向のものがみられる。

大きさ..... a類が最大で、類がそれよりやや小さく、 b類はかなり小形となっている。

また、各類とも差のあまりみられない点は以下の事項である。

側縁傾き.....下がゆる開くものが多く、下が大きくハの字形に開くものはわずかである。

刃部傾き・ ...ほとんどが平刃で、斜刃のものはわずかである。

刃部裏の剥離が刃の全線に及ぶものは少ない。

裏面にバルブを残すものが3個で、 a類のみである。

また、八幡により指摘されていたアスファルト等の付着はない。

以上、本類石器の製作方法・形態上の特徴などを分類ごとにみたが、次に、本類石器の使用について考えてみたい。本類の石器は一般に、冒頭に述べたような共通の特徴をもつものである。この特徴から考えると、

1. 長軸に交わる長い側辺が直線的であるため、これを刃部とする利器
2. 形態・大きさから、また、加藤らの紹介した例(加藤・鶴丸:1980)のような使用痕は見当たらないことから「手持ち」とは考えられず、調整され強化された側縁部に着柄するものと思われる。

この使用方法から、具体的な運動方向・使用対象との位置関係は次のものが考えられる。

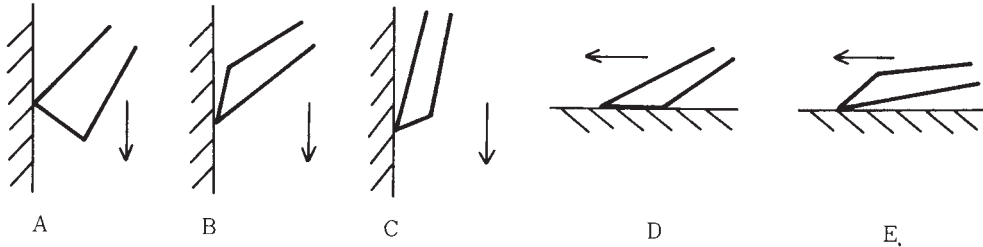
A. 縦斧的運動

B. 横斧的運動

C．手斧的運動

D．かんな、のみの運動

E．「木の皮はぎ」(鈴木：1977)的運動



このうち、Aの縦斧的な運動については「刃部」と「側縁」の角の調整が雑であること、また、そこに磨滅等使用の跡がみうけられないこと等から該当しないと思われる。更に、本報告の中で高坂が顕微鏡観察から推定した使用法からすると、C又はEの可能性が強い。これは、鈴木次郎が直刃斧について示した「手斧」や「木の皮はぎ」という用途(鈴木：1977)を裏付けるものである。

しかし、類と a類、 b類がすべて同一の用途のものであるとは断定できない。分類のように、類は刃部に第1次剥離面を残すもの、 a類は刃部に粗い細部調整が加わるもの、 b類はそれが丁寧なものである。また、刃部の角度も類、 a類と b類ではかなり異なる傾向があり、これからしても類の方が刃部が鋭いものである。更に、前述したような各要素における相違点が有する。

本石器における各分類間の相違は用途の違いによるのか、あるいは同一の用途における時期の違いによるのか、または同様の目的のためのものであるが年月の経過につれて作業の方法も少しずつ変化していったということであるのかなど考えられるが、本遺跡においては各分類間の時期差や使用痕跡の差を肥えることができなかったためこれは今後の課題である。

(坂本)

磨製石斧

刃部の使用痕の観察について

顕微鏡により磨製石斧の使用痕を観察した。対象資料は欠損品及び破損品がほとんどで完形品は3点である。(斧の番号は観察表の番号である)

1〔刃部形状〕両凸刃。〔製作〕敲打による成形で研磨による調整。〔観察〕両面ともに擦痕が認められる。方向は両面とも中軸線に対し約120の傾きをもつ。非常に荒く長く長い擦痕である。表面が若干密で、奥の方まで観察される。刃部辺は摩滅により波状を呈している。

2〔刃部形状〕両凸刃。〔製作〕剥離 敲打による成形で研磨による調整。〔観察〕摩滅は両面に認められるが表面には擦痕は観察されなかった。裏面の擦痕は中軸線に対し平行である。短かく細かく全体に密で、特に刃部中央に密集している。刃部の奥までは達していない。

3〔刃部形状〕両凸刃。〔製作〕研磨による調整である。本来擦切技法によるものと思われるが擦切痕は観察されなかった。〔観察〕全体に刃こぼれが激しく刃部本来の鋭さに欠ける。両面とも擦痕が認められたが非常にまばらである。方向は中軸線に対し平行で、両面とも同一方向である。細かく長い、刃部の奥までは達していない。

4〔刃部形状〕弱凸強凸片刃様の両凸刃。〔製作〕擦切磨製。〔観察〕両面とも荒く長く長い擦痕である。中軸線に対し約12°の傾斜をもち刃部の奥まで至っている。両面とも同一方向で非常に密である。刃部辺は摩滅により波状を呈する。

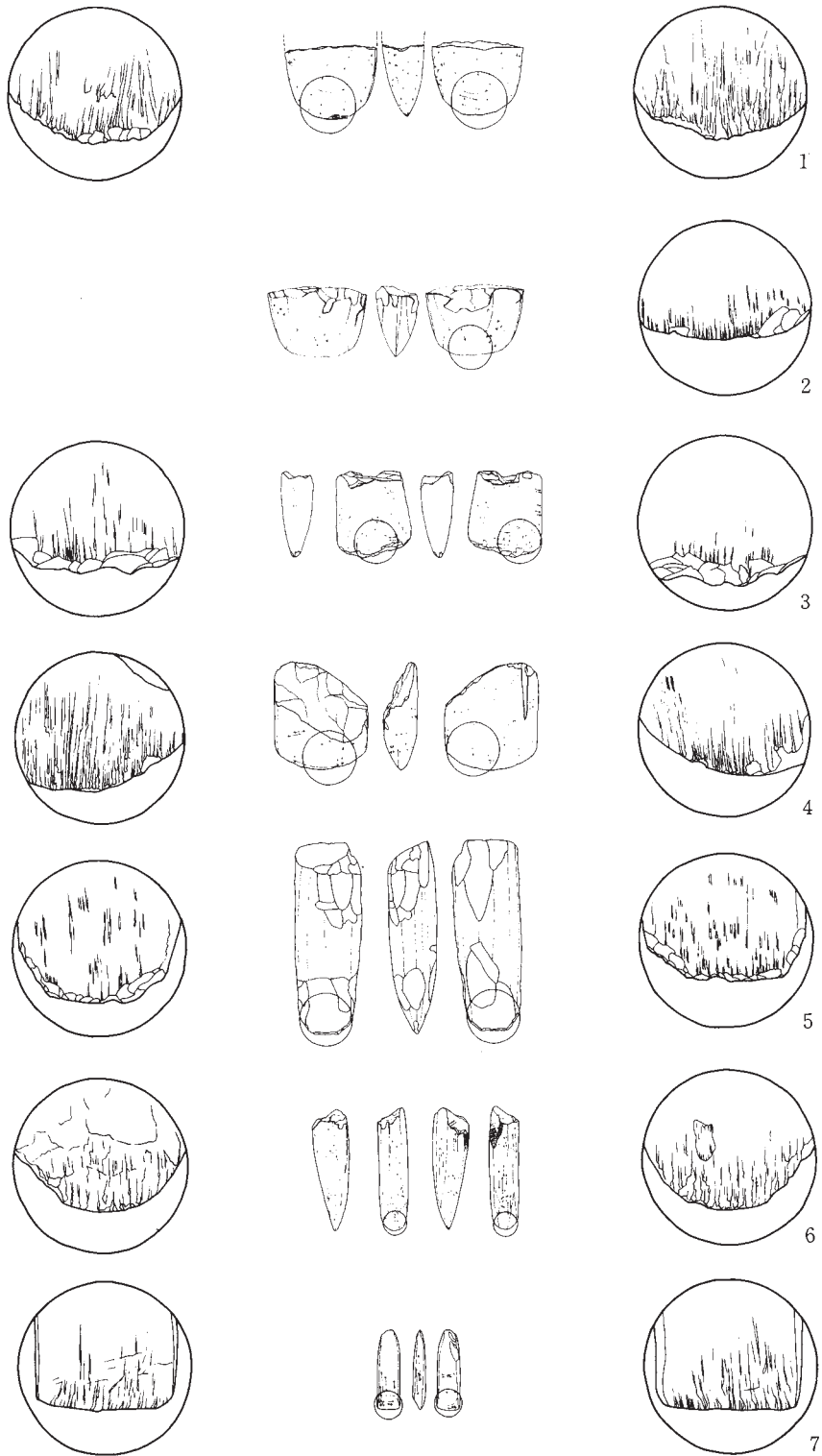
10〔刃部形状〕両凸刃。〔製作〕敲打による成形で研磨による調整。〔観察〕両面に擦痕が認められる。方向は中軸線に対し平行で刃部近くが密である。特に刃部中央部は摩滅により窪んで、擦痕も密である。細かく長く刃部より奥まで達している。中軸線に対して22°~23°の傾斜角をもつ擦痕も若干観察された。これは表面ではまとまった状態で確認されるが、裏面ではまばらである。平行する擦痕と同じ太さであるが、より深い擦痕である。

12〔刃部形状〕両凸刃。〔製作〕擦切磨製。〔観察〕両面に擦痕が認められる。中軸線に対し約21°の傾きをもち、非常に長く鎬部分まで達している。表面ではまばらだが、裏面では密である。中軸線に対し8°の傾斜角をもつ擦痕も認められる。これは表面に密である。

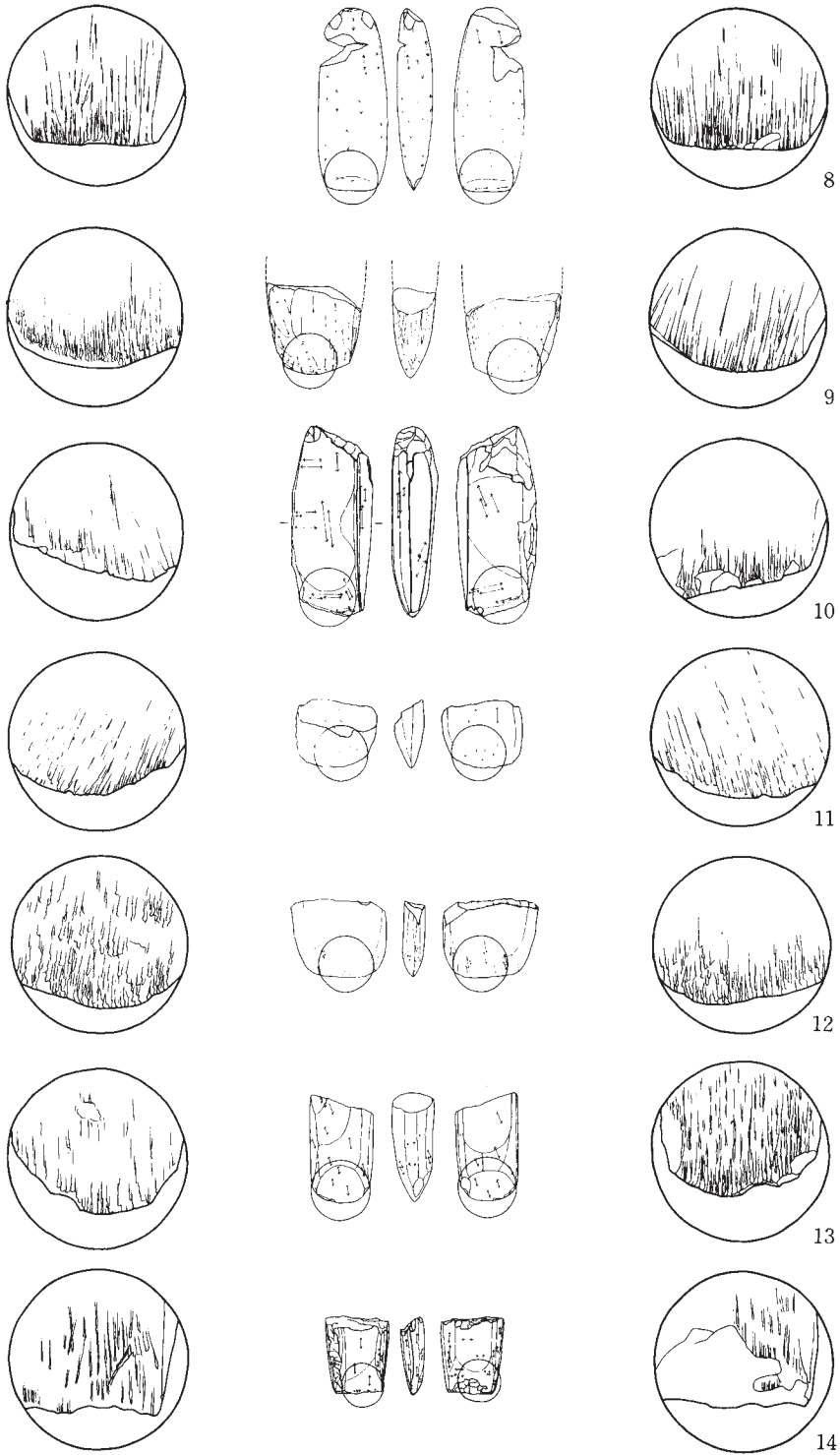
15〔刃部形状〕弱凸強凸片刃〔製作〕研磨による調整。〔観察〕両面に擦痕が認められる。石質による影響もあるが、非常に長く荒い擦痕である。方向は中軸線に対し平行である。表面の方がより奥まで達している。刃部幅全てに観察され、刃部辺は摩滅により波状を呈している。刃こぼれによる剥落痕は認められず、両面とも非常に密である。

これらを含めた観察結果を第100表に示した。

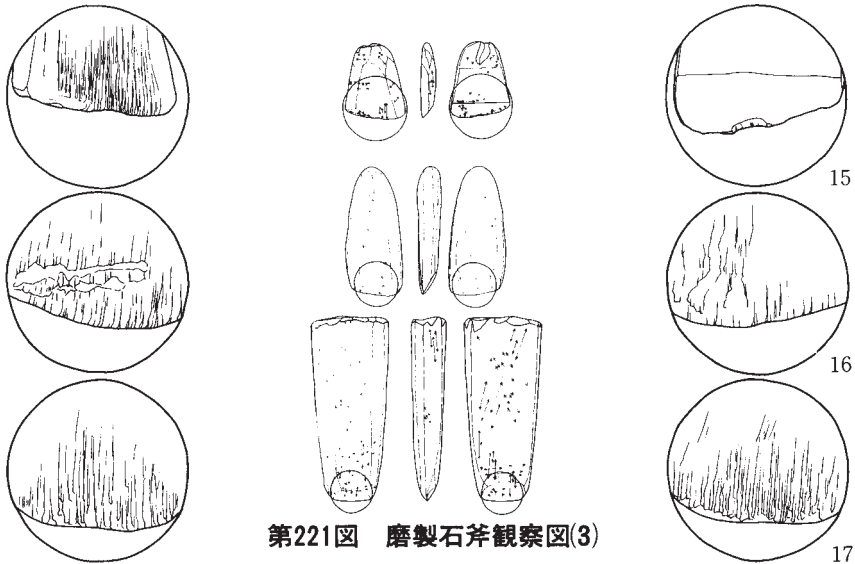
この項は高坂一夫の観察によったが、分類基準等の変更により白鳥が再構成したものである。



第219図 磨製石斧観察図(1)



第220図 磨製石斧観察図(2)



第221図 磨製石斧観察図(3)

第100表 使用痕観察表

No.	擦痕の方向		刃部形状	擦痕の強い面	分類	観察図	備考
	表面	裏面					
1	12°	12°	円刃・両凸刃	表面		1	
2	—	平行	〃 〃	裏面		2	
3	平行	〃	〃 〃			3	
4	12°	12°	〃 〃			4	
5	平行	平行	直刃 〃	裏面	V	8	4 H
6	21°	21°	円刃 〃			9	
7	平行	平行	偏刃 〃		III	10	
8	21°	21°	〃 〃			11	
9	平行	平行	〃 〃			12	
10	〃 22~23°	〃 22~23°	直刃 〃	裏面	II	5	
11	平行	平行	円刃 〃			13	
12	21°	21°	偏刃・弱凸強凸両刃		IV	6	
13	平行 21°	平行 21°	〃 〃		I		
14	—	—	円刃・両凸刃		I		
15	平行 18°	平行 18°	直刃・弱凸強凸片刃		IV	7	
16	平行	平行	〃 両凸刃			14	
17	平行	—	偏刃・弱凸強凸片刃		V	15	
18	平行	平行	〃 〃	裏面	I	16	
19	平行	平行	直刃・両凸刃			17	

打製石斧

打製石斧は加工の痕跡によって5類に細分した。分類基準と各点数は次のとおりである。

類 - 刃部のみ加工のもの16点、類 - 片面を両側縁だけ加工しているもの26点、類 - 片面を全面加工し他の面は自然面のもの29点、類 - 片面を全面加工し他の面は1側縁のみ加工しているもの20点、類 - 片面を全面加工し他の面は両側縁のみ加工しているもの25点。他に欠損品58点の計174点が出土した。ここでは打製石斧の中心となる～類について記す。

～類は、円礫の曲面の緩やかな部分を素材として打ち欠き、表皮面はほぼ無加工の状態で、破砕面を加工して斧としたものである。加工の痕跡は、側縁部中央に若干の敲打痕を有するものもあるが、大部分は剥離痕だけである。自然面を残す面の加工痕は側縁部に剥離痕を残すだけで、面の中央部までには及んでない。刃部も同様に自然面側には加工痕跡は認められない。破砕面は全面加工として扱えたが、この面の中央部分が打ち欠いた時点で平坦な面を構成している場合は、成形は縁辺部だけに行われている。

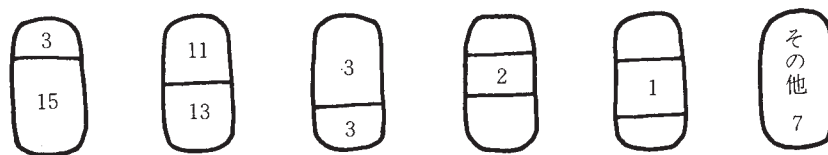
側縁部の加工は、器体中央部において入念に行われ、量的な比率は明確ではないが、剥離後に敲打（潰し）が行われているものも多い。

第1・2次の整理における坂本の観察によると側縁加工は器体の中央部 $\frac{1}{3}$ ～ $\frac{2}{3}$ に行なわれており、基端及び刃部寄りには少ない傾向を示している。また、この加工は器体中軸線に対して平行もしくは、やや開くが対称形を呈するように行われている。このことから類は側縁加工が不必要なもの（成形が自然面に及ばなくてもよかったもの）、類は1側縁だけ加工が必要だったもの、類は両側縁に加工が必要だったものと言い換えられる。

類中には、1側縁が敲打により部分的に平坦面を構成しているのに対して、他方は剥離後の敲打が行なわれず鋭利であるものが認められる。

これら側縁加工は器体固定のために行なわれたものと推察され、刃部形状（円刃・偏刃）の差異に関係なく器体中軸線に対称に作出されている。言い換えれば、刃部の形状にはあまり注意が払われておらず、おおまかな形状の規定の中で作出され、自然面を残すことに意味があったものと思われる。側縁の鋭利なものは、柄装着時に両調整される未使用品の可能性も考えられる。またこれらの加工の特徴から～類は全て柄に装着して使用するものであることが伺われる。

欠損品の残存部分とその点数（・類も含む）は図に示した。折損部は横位及び斜位であるが、縦割れをしているものが数点ある。これらの欠損品の折損部位は前述の側縁加工の上下両端とおおむね合致する。和野前山遺跡（県理文報82集）において観察された折損部位もほぼ同様の結果を示しており、本遺跡の～類に限らず石斧の器体固定部はこの部分に位置するものと思われる。



本遺跡出土の打製石斧は両面加工のものが、磨製石斧の可能性を有する数点を除いてほとんど認められない（刃部・側縁加工を除く）。また完形品が欠損品の2倍であること、及び出土範囲がほぼ限定されることなどの特徴を有する。土器との共伴関係が不明確なため使用時期については言及できないが、～類は形状・技法等の諸特徴及び出土範囲が限定されることなどから、ほぼ単一時期の所産と推察される。

またこの類の点数が非常に多いことから、1.一時に大量に必要となった、2.ある時期にまとめて製作しておいた、3.交易品して製作したなどが考えられる。3の場合は、非常に簡単な作りで、軽便に製作できること、また石斧の工房としての施設及び打ち欠いた破片等が確認されないことなどから、交易品としては性格づけられない。2は一地点から集中して出土しなかったことから保管場所が考えられず、1の必要性によるためとすることが妥当と思われる。このことは、この類が土掘り具と考えられることから、製作した時期に竪穴（住居・土壇）の構築が準備・進行していたとも推察される。（白鳥）

打製石斧と石錘の分布及び時期について

本遺跡出土の打製石斧と石錘の計測値による傾向分布は第 図に示した。両者とも重量・長さにおいては大きくはずれるものは少なく、ある一定の規格に沿って作出されたことが伺われる。出土地点の分布は第 図のように大きく異なる。この相異が何に起因するかは不明であるが、利器（穴掘り具）としての打製石斧と漁労具としての石錘との機能の差によることも考えられる。しかし両者とも遺構内出土のものは少なく、打製石斧は微高地部分に、石錘は緩傾斜面に集中する。また石錘は1次調査時に試掘範囲からの出土で、おおむね第 層中に含まれていた。打製石斧は野積みされていた可能性が考えられるが、石錘は網の存在を考えると野積みされた可能性は希薄で、網からはずされたものが放置・廃棄されたとするほうが妥当と考えられるが推定の域を出ない。

時期的な点からは、打製石斧は土器との伴出関係が不明瞭であるが、石錘の一部（EG-29グクッド出土の13点）は尖底土器（第3次・第37図-1）と伴出した。しかし全体的には、各群土器が重なりあって出土している部分も多く、明確には把握できない。（白鳥）

打製石斧にみられる磨滅・敲打痕について

打製石斧は主に打欠により成形され、自然面と剥離面で器表面が覆われているが、この自然面と剥離面に磨滅や敲打などによると思われる痕跡が認められるものが多い、これらの痕跡については、第1・2次調査の各個体を観察し計測表に記載したが、これらを次の表に集計した。

これには、観察した各痕跡のうち「磨滅」「敲击」「擦り」などの造岩鉱物の潰れを生じているもののみを取りあげ、1個体に複数の痕跡があってもすべてを累積したものである。この表でみると、

各類とも縁辺部とくに側縁部に多くの痕跡がある。

類は表面にもかなりみられる。

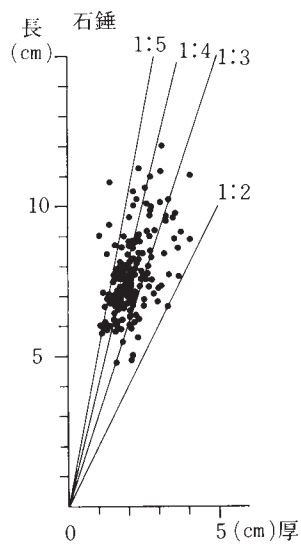
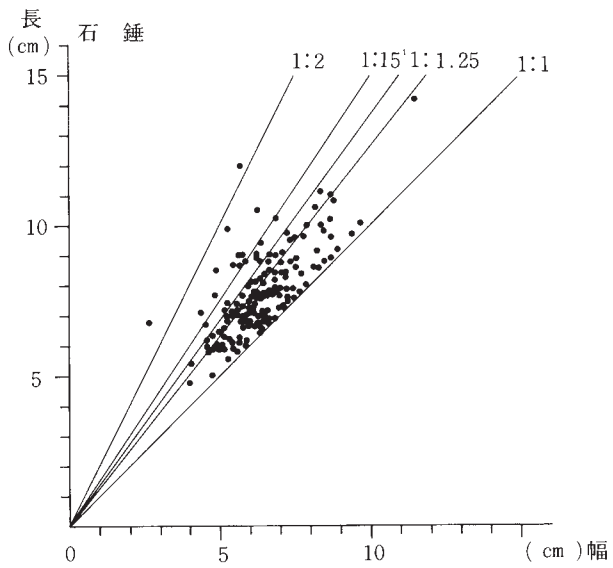
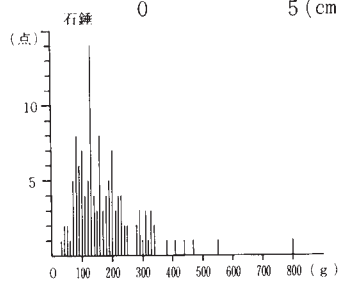
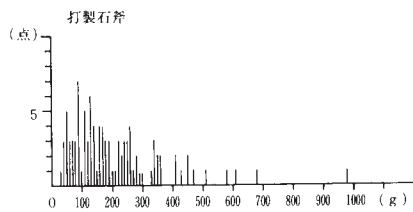
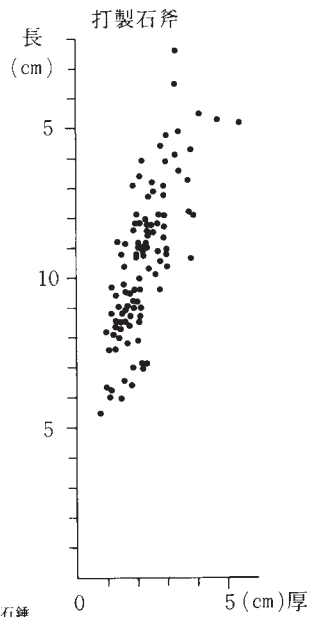
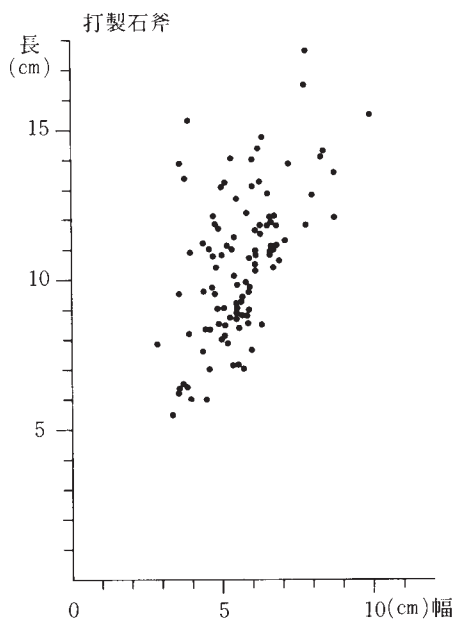
類を除いて裏面にもかなりの痕跡がみられる。

縁辺の痕跡では ~ 類は側縁に多く、その中でも比較的中央付近の位置（dとg）に多い。類では絶対数が少ないが、むしろ基端や刃縁に比較的多い傾向がある。

これらの傾向について若干の解釈を加えると、 ~ 類で側縁部に多いのは、着柄などのためにここが歯潰しされたためと考えられる。裏面や自然面の残る類の表面にみられるものも着柄や手持ちのために磨擦力を強めるためではないかと思われる。（坂本）

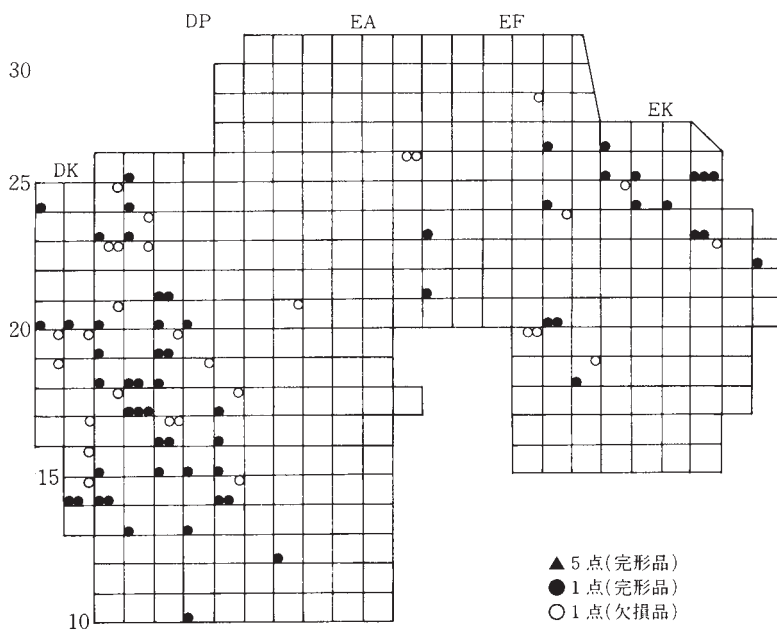
第101表 打製石斧の磨滅・敲打痕集計表

		I類 ^{13%}	II類 ^{23%}	III類 ^{29%}	IV類 ^{20%}	V類 ^{24%}	分類不能	計
1	a	3	4	8	5	4	4	28
	b	6	5	4	3	5	5	28
	c	1	12	9	8	12	3	45
	d	1	13	11	10	16	2	53
	e	1	13	8	8	8	3	41
	f	2	11	8	7	10	2	40
	g	2	10	13	8	15	2	50
	h	2	9	6	8	8	3	36
計		18	77	67	57	78	24	321
2	a	1	3		1	1	2	8
	b	2	5		1	1		9
	c	1	3		1	1	1	7
	d	1	3	1	1	1	1	8
	e	1	2		1	1	1	6
	f	1	3		1	1		5
	g	1	2		1	1		7
	h	1	3		1	1	1	6
	i	2	3		1	1	1	8
	j	2	4		1	1	1	9
	k	1	4		1	1	1	8
計		14	35	1	11	11	9	81
3	a	1	3	1		1		6
	b	1	3	1	1	1	1	8
	c	1	2	2		2	1	8
	d	1	2	2		2	1	8
	e	1	3	2		2	1	9
	f	1	2	3		4		10
	g	1	3	3	1	3		11
	h	1	3	3	1	3		11
	i	2	2	4		2		10
	j	1	2	3		1		7
	k	1	2	2		1		6
計		12	27	26	3	22	4	94
総計		44	139	94	71	111	37	496

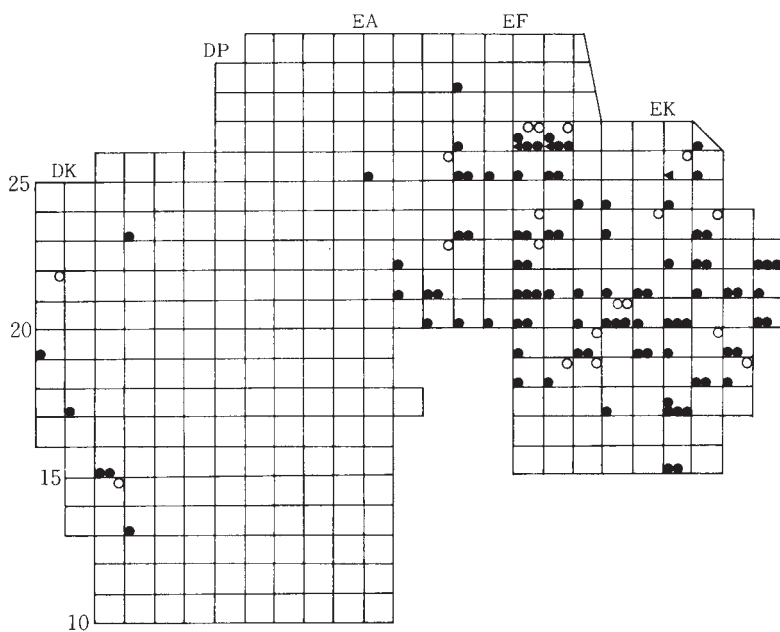


第222図 打製石斧・石錘計測分布図

打製石斧



石 錘



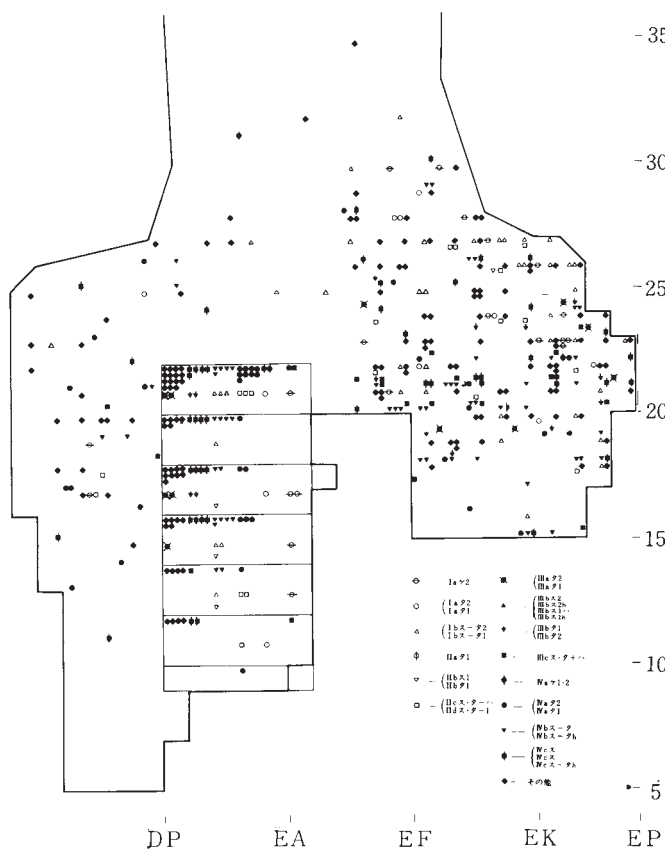
第223図 打製石斧・石錘出土分布図

磨敲凹石類について

木類は、従来敲石・磨石・凹石などと呼ばれてきたものを一括したものである。それは従来の名称が一定の形態・成形・使用痕をもったものに付されているというよりも、同一の名のものにかなりいろいろな形態・成形・使用痕をもつものが含まれ、また逆に同じ特徴をもつものに対してさまざまな名称が与えられているものがあるからである。

本類は、特定の形態・成形・使用痕をもつものでも他の成形・使用痕が付随したり、同程度に複数の成形・使用痕がみられ複数の機能をもっていると考えられるものが多い。このためこれらを一括して一群のものとしてとらえた。

本類の石器の特徴は、器体の大部分が自然の礫表皮であり、自然面に対して成形・使用痕などの人為的な作用の痕跡をあまり多く残していないということである。これは、石錘や石皿類も同様であるが石錘は機能が文字どおり錘という特定の働きにほぼ限定されると考えられる形態をとっているし、石皿類もその重量等から作業台としての性格に限定されるものである。また計測値からみた場合は第103表のような値を示している。



第102表 磨敲凹石類集計表

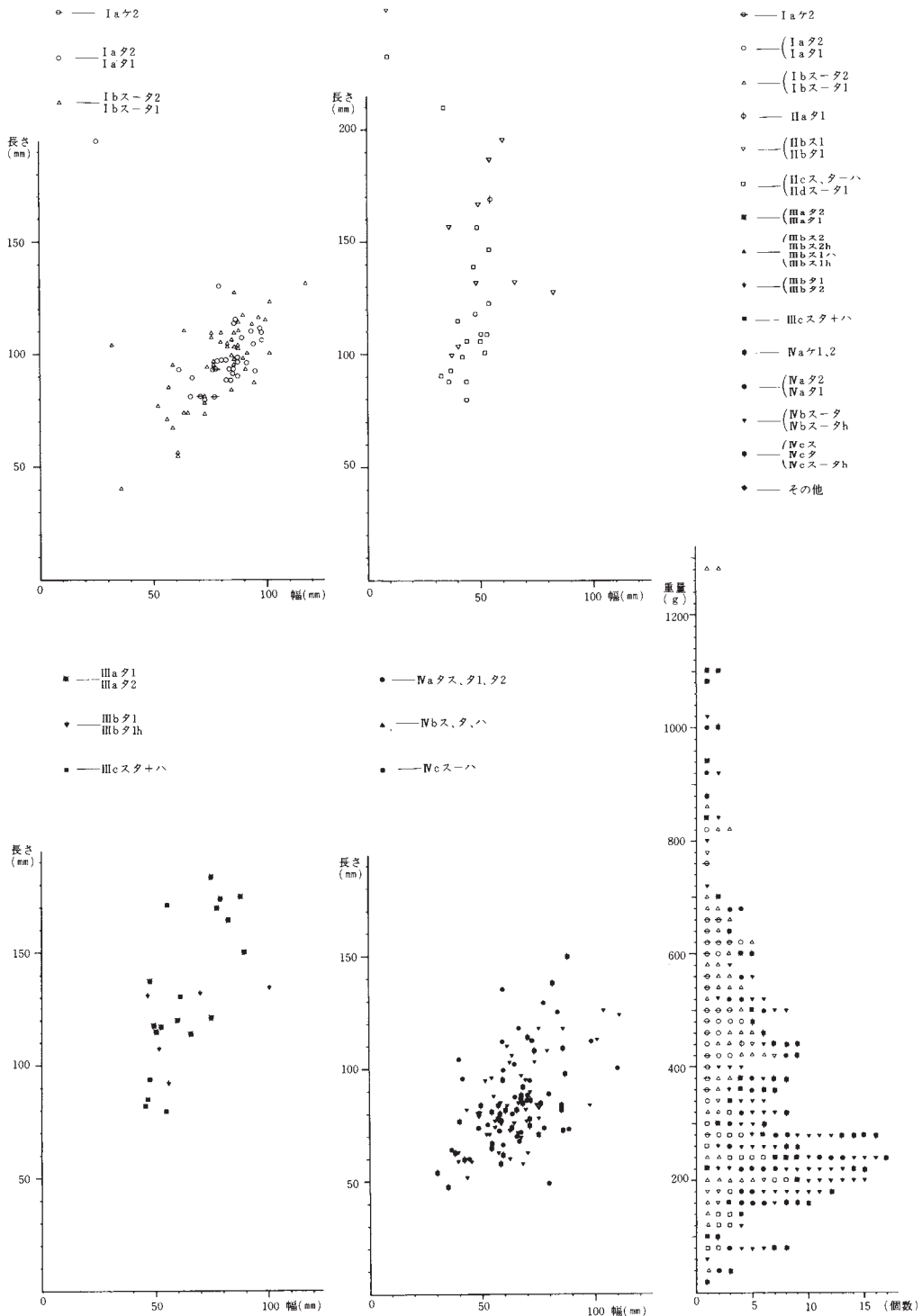
分類	遺構内	遺構外	計	破損率 (%)
1 Ia ケース		23 (2)	23 (2)	8.6
2 Ia タ	2	13 (2)	15 (2)	13.3
3 Ib スータ	12 (2)	48 (8)	60 (10)	16.6
4 IIa タ	2 (1)	1 (1)	3 (2)	66.6
5 IIb スータ	4	13 (5)	17 (5)	29.4
6 IIc II d	1	23 (3)	24 (3)	12.5
7 IIIa タ	1	16 (1)	17 (1)	5.8
8 IIIb ス	105 (90)	698 (553)	803 (643)	80.0
9 IIIb タ	1 (1)	28 (8)	29 (9)	31.0
10 IIIc	8 (1)	23 (17)	24 (18)	75
11 IVa ケース		2 (1)	2 (1)	50
12 IVa タ	8	43 (16)	51 (16)	31.3
13 IVb スータ	10 (5)	75 (31)	85 (36)	42.3
14 IVc	6 (2)	55 (15)	61 (17)	27.8
合計	153 (102)	1,061 (663)	1,214 (765)	63.0

第103表 磨敲凹石類計測値集計表

分類	長さ mm			幅 mm			厚さ mm			電量 g		
	最大	最小	平均	最大	最小	平均	最大	最小	平均	最大	最小	平均
1. Iaケース	111	81	99.0	97	64	82.7	59	31	43.0	769	286	540.4
2. Iaタ	113	80	95.5	98	67	84.2	58	33	42.9	831	280	499.8
3. Ibスータ	123	40	95.1	118	32	78.4	79	23	41.2	1,280	50	490.9
4. IIaタ		169			54			33			451	
5. IIbスータ	197	100	144.8	82	36	52.3	61	17	32.4	781	164	356.3
6. IIc IIId	210	80	115.3	54	32	44.8	54	17	31.9	330	86	213.7
7. IIIaタ	184	114	140.8	90	48	68.2	54	25	38.8	1,131	212	573.6
8. IIIbス	199	77	128.0	100	35	68.5	84	22	48.8	1,440	91	571.6
9. IIIbタ	170	92	122.4	101	47	62.1	75	28	40.2	844	222	405.4
10. IIIc	171	80	107.2	61	46	52.1	44	22	32.2	517	100	266
11. IVaケース		89			79			62			686	
12. IVaタ	145	60	88.3	110	36	62.8	76	18	42.1	1,012	55	338.9
13. IVbスータ	126	51	83.7	111	39	64.4	72	25	38.5	1,210	66	326.5
14. IVc	150	48	83.2	91	30	63.7	73	19	43.8	1,114	38	345.7
1 ~ 14	199	40	108.2	118	30	67.6	79	17	43.1	1,280	38	456.3

第104表 磨敲凹石類石質一覧表

石器 分類	石質 分類	頁	黒	安	砂	閃	凝	珩	輝	チ	ホ	石	石	泥	玉	玄	斑	多	礫	粘	流	斑	輝	緑	緑	珪	碧	石	ス	古	礫	鉄	
		岩	石	山	岩	緑	灰	岩	岩	ト	ル	英	英	岩	岩	武	岩	安	岩	板	岩	岩	岩	岩	岩	頁	頁	英	コ	期	質	石	
1. Iaケース			15	1		1																											
2. Iaタ	2		8	5				2	1																								
3. Ibスータ		24	27			1		7										1											1				
4. IIaタ	1		6																														
5. IIbスータ	2		2	12		2	1														1												
6. IIc IIId	2		10	5		3		1	3		2																						
7. IIIaタ			5	3		2		1	1																								
8. IIIbス	33	391	343	11	31	11	20	34				5			5	5		1		5							2				3		
9. IIIbタ	1		7	4					2																								
10. IIIc	1		3	5					1											1													
11. IVaケース			1	1																													
12. IVaタ	2		26	5		6		3	1																			1					3
13. IVbスータ			24	20		9		2	27	1																1							
14. IVc	1		21	5		4			13																								
その他	4		88	70	1	13	5	9	17	1				1		1				1								1	1	2			
計	49		625	512	12	71	18	37	108	3	2	5		1	5	6		2	2	6					1		2	2	2	5	3		



第225図 磨敲凹石類計測値集計グラフ

本類の石器を分類する要素としては、前述したように形態・成形・使用痕の位置・種類・程度があげられる。このほかには石材の種類も重要な要素として考えられる。

本報告では、形態を第1の分類の基準とし、次に成形・使用痕の礫の中における位置を第2の基準として分類した。成形・使用痕の種類や程度については、「擦り」や「敲き」などの状態はかなり連続的なものであるし、またこれらを生じた成形ないし使用の作業自体もこのような「擦り」や「敲き」などのことばだけで表現できないいろいろな要素の絡んだ複雑なものと思われるからである。このため成形・使用痕の種類や程度については2次的な分類基準（観察項目）とした。このように、分類（観察）基準を設定したのは、本類の石器は他類のように形態が定形的でなく、成形・使用痕も区分の明瞭でない様々なものがみられるため、各要素を通して多面的にとらえるためである。

各類の石器をみてみると、かなり特徴的なものがみられる。まずaタ1のものは平坦面の一部に「敲き」のみられるものであるが、これは各形態にみられる。この成形・使用痕は他のものと複合する場合が多く、直接これが作業の対象物に対しての使用の結果の痕跡ではなく、石器を手で持って使用する際の手がかりとしてのものが多いのではないかと考えられる。とすればこれは使用の痕跡ではなくあらかじめ加えられた痕跡ということになる。

aタ2のものは、aタ1と同様の機能も考えられるが、個々の「敲き」が小さく比較的深い多数の傷状の凹みとなっているものなどはいわゆる鼠歯状痕に近いもので、ストーンリタッチャー的使用法が考えられる。

aケース2の痕跡は 類（円盤状の形態）に多く、特に「ケ」の場合は非常に滑らかで光沢を放っている。

bス - タ1の痕跡は各形態にみられるものである。痕跡が「擦り」か「敲き」か判然としないやや荒れている程度のもので多くみられる。 類（長い側縁をもつ形態）にみられるものは、程度2（側縁全体）の痕跡とは明瞭に区別しがたい中間的なもの、つまり一部分とぎれるものや側縁の中央に片寄って端の方にないもののがかなりあり、 b - ス2とは同一の使用方法のもが多いと考えられる。なお bス - タ1はチャートのもので大半を占めている。

cス - タ - 八のものは 類（棒状の形態）と 類に多くみられる。いずれにおいても痕跡が「敲き」のもので多く、これらは端部を対象物に対してぶつける作業に用いられたものと考えられる。「剥離」もそのような作業の際に結果的に生じたものと思われる。dス - タのものは 類にみられ、主に「敲き」の痕跡が端部ではなくそこからやや離れた側縁部に部分的にみられるものであり、金槌を使うように、痕跡と反対側を握って振り降し、痕跡の部分を対象物にあてる作業によるものではないかと思われる。 （坂本）

b類ス2について

磨敲凹石類の中でも本類は、長い側縁部をもつ礫を用いてその側縁全体に「擦り」のみられるものである。従来特殊磨石（八木：1976）や、三角柱状磨石（青森県教育委員会：1982）と呼ばれてきたものである。和野前山遺跡の報告ではその使用方法について多様な角度から検討されている（青森県教育委員会：1984）。以下の分析はこれを踏まえて行ったものである。

特徴として次のことがあげられる。

1. 計測値の最大値・最小値・平均値は

長さがそれぞれ 199mm・77mm・128mm

幅がそれぞれ 100mm・35mm・69mm

厚さがそれぞれ 84mm・22mm・49mm

重量がそれぞれ 1,440g・91g・572g である。

（ bス1を含む）

2. 感覚的にみた形態などは長い側縁部をもち、断面が三角形、四角形、不整楕円形、片手で持てるくらいの重量である。

3. 長い側縁部の全体に「擦り」の跡がみられ、平坦になっている。「擦り」の面は、滑らかでつるつるしているものからザラついているものまでみられる。

4. 「擦り」の脇に剥離がみられるものが多い。

5. 平坦な面や「擦り」のない側縁、端部などに「敲き」がみられるものが多い。

6. 破損品が多い（破損率80.0%）。破損は「擦り」のある側縁をたち切る面で生じているものが多い。

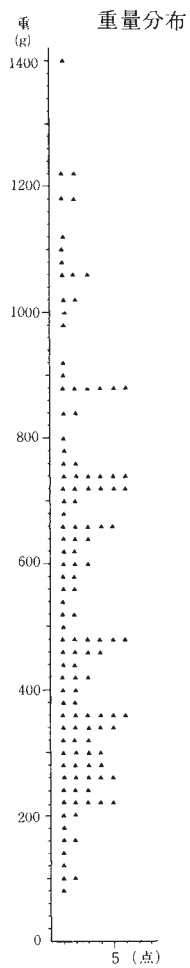
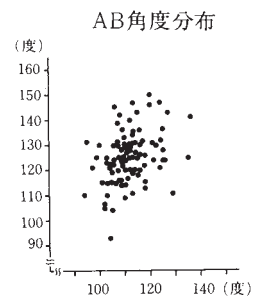
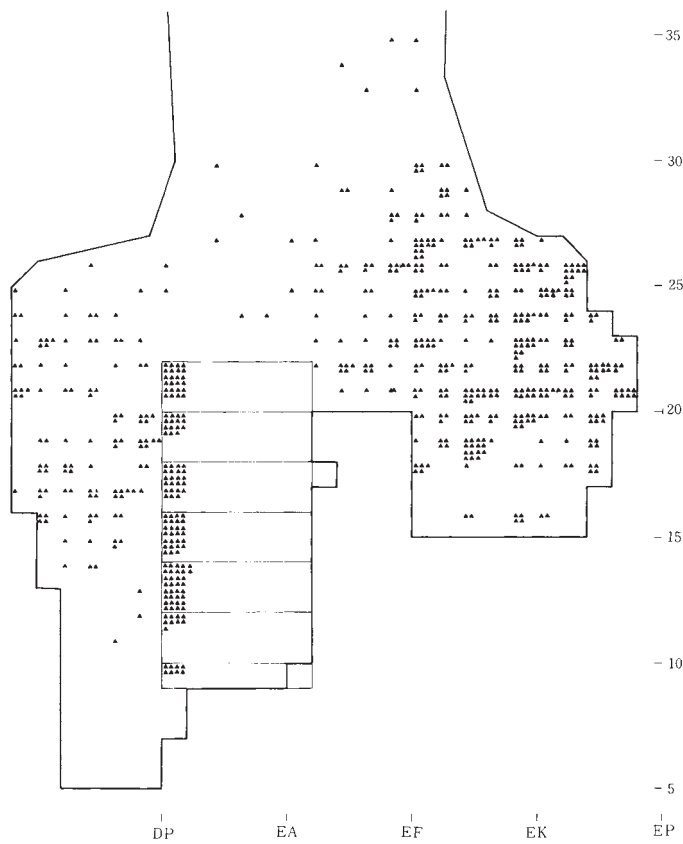
以上の点が特徴であるが、「擦り」面の状態を観察すると「擦り」面は両側面に対して同一角度でないものが多いことがみられる。これに注目しいくつかの観察項目をあげ、個々のものの観察を行った。第105表のとおりである。とりあげたものは、第1・2次のほぼ完形のもので主に厚味のある形態のもので、扁平なものなどは含まれない。総数85点で、複数の側縁に「擦り」のみられるものがあるため観察した「擦り」面の数は92である。

観察の項目とその分類基準は次のとおりである。まず次の基準で、「擦り」面の両脇の面のうちA面をきめる。

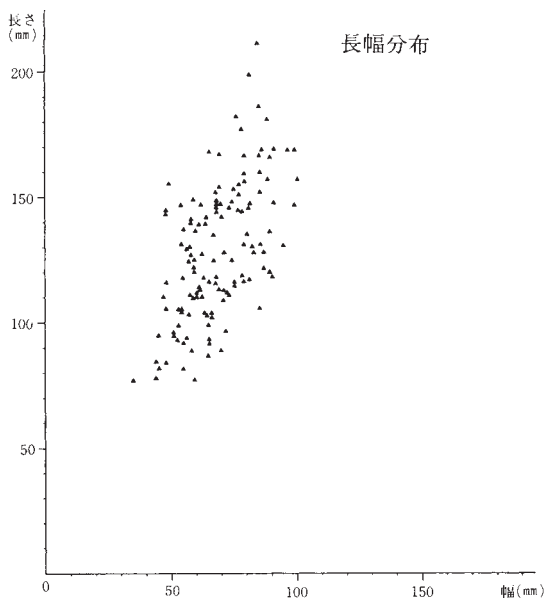
A面の基準

1. 「擦り」面の長軸に対して垂直な面で切った断面を考え、その断面において「擦り」の面を上にしたとき、「擦り」面とその脇の2つの面で作られる角度が小さい方をAとする。

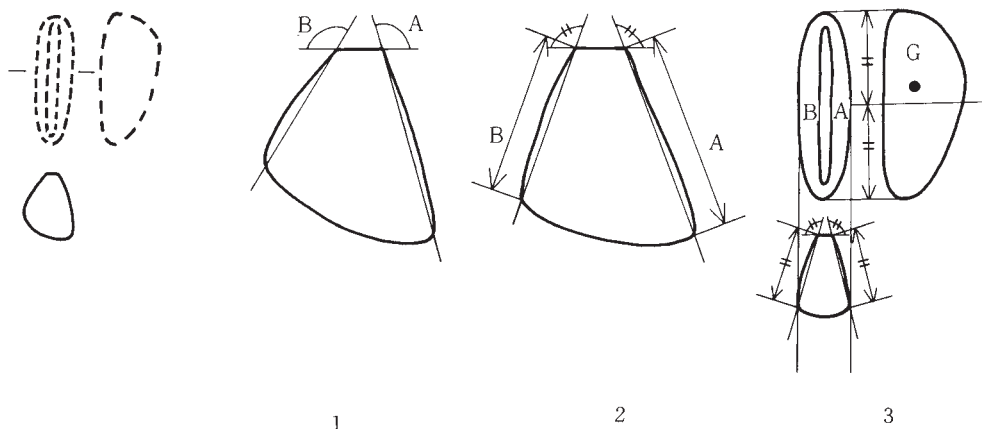
2. 1でその角度の差が明瞭でない場合は、1の断面で長い辺をもつ側の面をAとする。



IIIb類ス2分布図



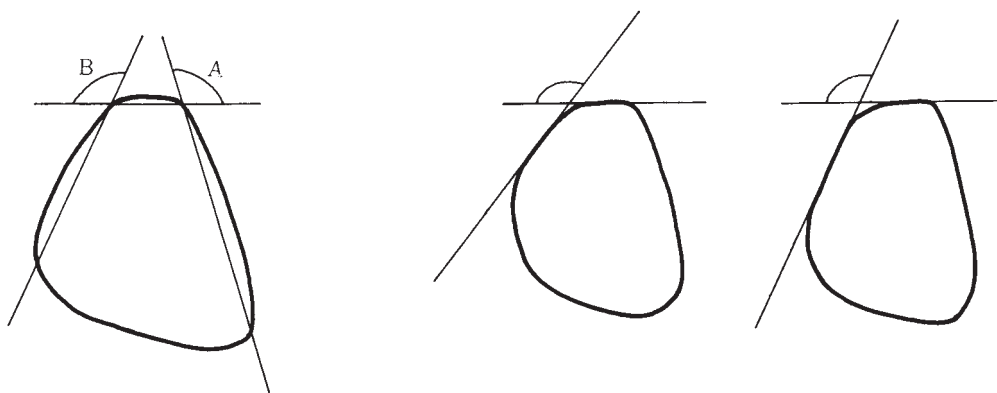
第226図 分布・計測値分布図



3. 2でも辺の長さの差が明瞭でない場合側縁を正面に縦にしてみて重心が中央より上になるようにおいた場合側縁の右側にくる面をA面とする。

このようにしてA面をきめた後「擦り」面をはさんで反対の面をB面とする。そして次の観察を行なった。

1. 「擦り」面の角度」「擦り」面とA面とB面とがつくる角度（「擦り」面やA面、B面は平面ではないが、およそ下の図のような基準で計測した）。角度が近く明瞭な差のないものつまり、1でA面を決定できないものは を付した。



2. 「側面の長さ」A面の基準の2でみたようなA面・B面の断面での長さ。A面が長いとき ($A > B$)、B面が長いとき ($A < B$)、ほぼ同じ長さのとき ($A = B$) と分けた。

3. 「重心」A面の基準の3でみたのと逆に、まずA面を「擦り」面の右においたとき重心が

第105表 III b類ス2観察表

(ア・イ・ウは同一個体中に複数の「擦り」面のあるもの)

実測図 番号	角 A	度 B	長さ	重心	ハクリ の位置	片ベリ	タ タ キ	実測図 番号	角 A	度 B	長さ	重心	ハクリ の位置	片ベリ	タ タ キ		
175 ア イ	△136-141	A=B	上	—	AB	下端		180	106-130	A	中	A	B	A上			
	117-132	A=B	上	—	A				165	109-114	A	上	A>B				
	△135-125	A	下	A=B	—	C、中、上			△118-115	A=B	上	A=B	A				
	104-122	A	上	A=B	—				163	108-142	A	下	A=B				
	△102-106	A=B	下	A=B	A	C、下			△125-136	A	上	—		A上、B上			
	115-143	A	中	A	—	A上下、B上			△112-125	A=B	上	—					
	113-147	A	中	—	—	A上下、B-C下			141	105-122	A=B	上	—				
	104-121	A	上	A>B	—				△124-121	A=B	上	A=B					
	145	122-130	A	上	—	—	上下端			△116-120	A=B	上	A=B				
	194	103-123	A	上	A>B	—	A中、A上			112-130	A=B	上	B				
184	99-125	A	上	A	B	A上、B上		195ア	108-125	A	中	A		A下			
	△126-124	A	上	A=B	—	A上、B中		イ	95-131	A	中	A		A上			
173	108-116	A=B	下	A=B	—	A中上		107-130	A	下	—		A-B全、A下、B下				
158	106-145	A	下	A	B	B下、C下		190ア	110-133	A	上	A					
181	△115-118	A=B	上	A>B	—	A上		190イ	△125-128	A=B	上	A					
	△110-114	A>B	下	A=B	—	B上		182	116-126	A=B	上	A=B		A下、B上下、B-C中			
142	△105-104	A=B	上	—	—			△118-126	A=B	下	A		A上、B中				
186	116-130	A<B	上	A=B	B	A上		116-136	A	上	A	B					
	109-125	A<B	中	—	A			114-131	A	中	A						
	104-122	A=B	上	A=B	—			110ア	112-120	A	上	—		B上、中、下、C上中、下端			
	106-115	A>B	上	A=B	A			イ	118-113	A	下	—					
159	107-120	A	上	A=B	—			157	△103-110	A	下	A=B					
	146	120-150	A	上	—	—	上端、B-C中	138	101-115	B	中	—					
179	121-131	A	中	—	B>A	A中、B下、A-B中、 A-C中、B-C下		139	100-130	A	上	—					
	111-127	A	上	—	—	A上、A-C上中、C下、 B中		△	A	上	—						
	113-134	A	上	A	—			187	114-127	A	上	A	B	A中、A-C中下、下端			
	105-115	A	中	A=B	—			104	113-125	A	下	—		下端			
	120-146	A	中	—	—	A中		△110-120	A	下	A=B	A	A-C全、B-C全				
	114-120	B	上	A	—			103-115	A	下	—	A	下端				
	110-109	A=B	中	A=B	—			161	△115-125	A	上	A	A下	A-C中			
	166	△ 94-110	A=B	上	A>B	—		185	103-125	A	上	A					
	154	127-143	A	上	—	—		151	113-118	A	上	—					
	179	109-124	A	中	A	B	A上下、B上、C下、上下端		192	105-119	A=B	上	A=B				
112-128		A	上	A>B	—			110-124	A	上	A						
△102-105		A	上	A=B	—			△106-124	A	下	A=B	B	B-C中				
188ア		△	A=B	上	A	B	A中C下	172ア	107-131	A	中	A>B					
183	111-117	A	中	A>B	B	A上、C中下		イ	113-129	A	中	A=B					
	109-136	A	中	A>B	—	A上		196	129-111	A=B	上	A>B					
191	109-128	A	中	A=B	—	A-C中~下		ア	△113-111	A=B	上	—		A下、B下			
193	107-139	A	下	A	B	B中		イ	124-147	A	上	—					
178	97-121	A	上	A>B	—	B中の上		170	110-129	A	上	A	B				
155	△108-116	A=B	上	A=B	—	A上		△117-122	A	下	A<B						
189	112-140	A	上	A	—	A中の上、下		△104-93	A	中	A=B						
								112-130	A	上	A>B						
								174	124-132	A	上	A=B		A上中、A-B上、C中の上			

中心より上(上)か下(下)か中心付近か(中)を分けた。3の基準でA面を決定した時は自動的に上となる。

4. 「剥離」「擦り」面の脇の剥離がどちら側にくるか。

A面側のみ A
 B面側のみ B
 A面側がB面側より多 $A > B$
 A面側がB面側より少 $A < B$
 A面側とB面側ほぼ同じ $A = B$
 ハクリなし

5. 「片べり」「擦り」面の脇の片べりがどちらにみられるか。4と同じ。

6. 「敲击」「擦り」面を正面、A面を右にした場合、「敲击」の位置がA面B面あるいはそれ以外の面(C面)その中間の稜(A-B、B-C、A-C)またその中で上、中、下どこにくるか。

第106表 III b 類ス 2 観察集計表(1)

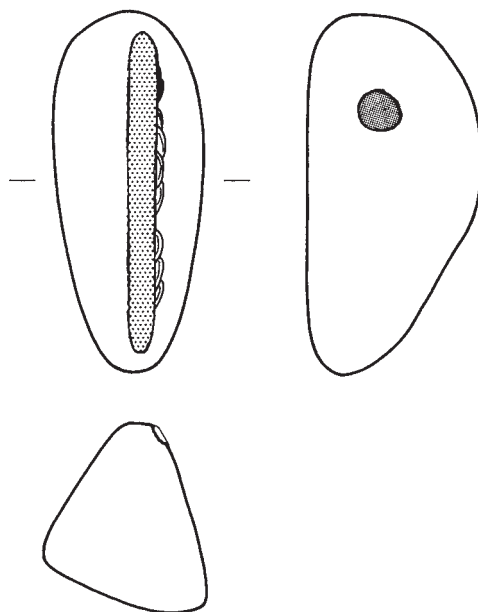
III b 類ス 2 観察集計表(2)

長さ	角度 重心 剥離	A > B				$\Delta A \doteq B$				計			
		上	下	中	計	上	下	中	計	上	下	中	計
A A > B	$\frac{A}{A > B}$	14	2	8	24	1			1	15	2	8	25
	$\frac{B}{A < B}$						1		1		1		1
	$\frac{A=B}{A=B}$	13	5	7	25	5	4	1	10	18	9	8	35
	計	27	7	15	49	6	5	1	12	33	12	16	61
B A < B	$\frac{A}{A > B}$	1			1					1			1
	$\frac{B}{A < B}$												
	$\frac{A=B}{A=B}$	1		2	3					1		2	3
	計	2		2	4					2		2	4
A=B	$\frac{A}{A > B}$	1	2		3	5	1		6	6	3		9
	$\frac{B}{A < B}$				1				1				1
	$\frac{A=B}{A=B}$	4	2	1	7	8	2		10	12	4	1	17
	計	6	4	1	11	13	3		16	19	7	1	27
計	$\frac{A}{A > B}$	16	4	8	28	6	1		7	22	5	8	35
	$\frac{B}{A < B}$				1		1		1	1	1		2
	$\frac{A=B}{A=B}$	18	7	10	35	13	6	1	20	31	13	11	55
	計	35	11	18	64	19	8	1	28	54	19	19	92

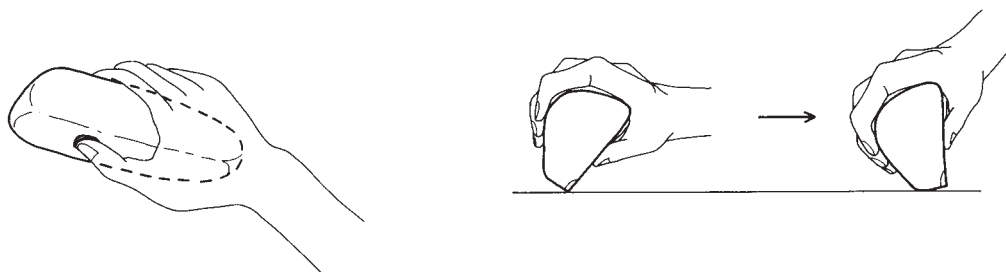
角度Aのもの65個のうち			
長 さ	A	49%	75%
	B	4	6
	A=B	11	17
重 心	上	35	54
	下	11	17
	中	18	28
剥 離	A(A > B)	28	43
	B(A < B)	1	2
	A=Bまたは-	35	55
片 べ り	A	5	8
	B	13	20
	-	48	74
敲 き	A上	14	22
	A下	5	8

本類については以上のように観察し、第106表に集計した。この表などこれまでに考えてきたことから導かれる特徴として以下のことがあげられる。

1. 平面形（側面形）は、幅が一定でなく全体としてみても、側縁を基軸として考えその両端の中心点を通り基軸に垂直な面で礫を分割したときに重心がその面の近くにこない。つまり重心が中心からずれているものが多い。
2. 「擦り」のある側縁とその両脇の面とのなす角度は異なるものが多い。
3. 「擦り」のあるA面を手前にみて側縁を左にすると重心は上にくる。
4. 角度の小さい方をA面とすると、A面側の方が、「擦り」の側縁からほかの側縁までの距離が長い。
5. 平坦面の「敲き」はA面の上方にくるものが多い。
6. 側縁の脇の「剥離」はA面側に多い。
7. 「擦り」面の脇の片減りは、B面側に多くできる傾向にある。



以上の傾向からいえることは、「擦り」面の左右に非対称な運動が行なわれていることを示すものである。この石器の使用法について片手で持って何かに対して接触して作業をし、その作業の結果として側縁部に「擦り」の面ができたという仮定のもとに考えると、「擦り」面と反対側に右手の掌をあてがいA面の上部の「敲き」の部分に親指をあて、B面に他の残った



4指をあてて握り、台の上の向う側に礫が体の正面に平行かやや斜めになる位置で「擦り」面を下にしてA面側を台に向けるようにたたきつけ、そのまま手前に引くつまり「擦り」面の長軸方向と直角に近い方向にすり寄せ、最後はB面側が台に向けられた角度となり、また台上に持ちあげて台の向う側に手をのばす。この動作が繰り返されたものと推定される。

つまり

5からは、あらかじめ施した「敲き」を手がかりとして握ること。

3からは、まず片手で持ち上げ振りおろす運動がしやすいように握った時に、重心が手の前の前にくるようにもつこと。

4からは、親指母指球が長く平坦なA面側にあてがわれ他の指が短いC面（A面B面以外の面）及びB面を包み込むような形で保持されること。

2からは、母指球のあたるA面側は、母指球や親指を台にぶつけないようにするため台との間には石器の中の角度（A）とは逆に大きな角度（ $180 - A$ ）が生じ、B面側は反対に第2～4指という細いものがくるために小さな角度（ $180 - B$ ）でおさまるためであること。

6からは、腕を伸ばしてA面が台に向かうような角度で、このA面側の稜を強く対称物にぶつけるために結果的に生じたか、または対象物に対して大きな摩擦が働くようにあらかじめ施されたこと。

7からは、運動の後半でA面が上に向いていき逆にB面が台にふせられるような角度となっていて、この動きが平坦な台の上を台の上面と平行な方向に移動しながらなされて、こすりながらまくり上げるような作業であること。

以上のように解釈されるからである。

またこのような使用法を考えると本類の中の特異 - な状態を示すものについて次のように解釈できるのではないだろうか。

「擦り」面の中央付近に稜をもつものについては、角度が $A = B$ が多いため上下両方が左手でも使用したこと。

172・195では2側縁に「擦り」がみられ二等辺三角形の断面でどちらの「擦り」面を基準にしてみても角度の小さい方と長さの長いA面とが一致する。

第4号住居跡出土のものでは「側面の長さ」はAが長く、「剥離」もA側だが重心が下で、A面の「敲き」も下にある。これは左手による使用（左利き）のためのものと考えられる。

以上のように推定した動作は、前にも述べたが対象物を側縁で敲き、そのまま側縁と直角方向または斜め方向の手前に引きながらこすりつけるという作業であり、具体的な内容としては、獣皮、魚皮、樹皮を柔らかくすることなどが考えられる。

観察した92点のうち26点はA Bの角度の差が顕著ではなかった。これはこれらの石器の用い方が異るとも考えられるが、他の多くと同じ使用方法であっても礫の形態に制約された結果と考えることもできる。いずれにしてもここでは多数のものをまとめて統計的に扱ったが、再び個々のものについて検討することが必要と思われる。

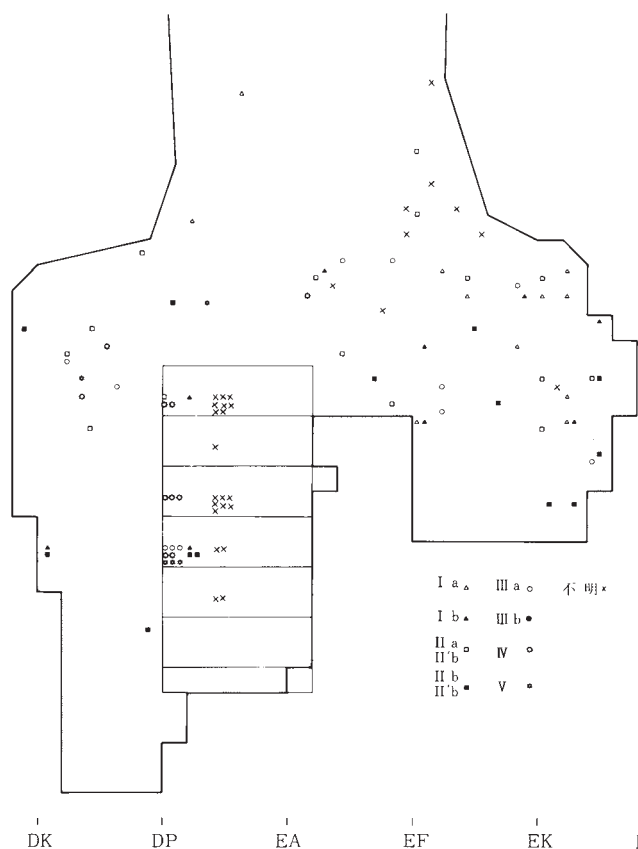
なお本類の「擦り」面の状態はなめらかで光沢があり、「研磨」に近いものから荒れて「敲き」様のものまでみられる。しかしその違いにより他の形態や観察項目に目立った相違はみられな

いようである。これは石器の使用方法の違いでなく「擦り」面の使用ひん度の違いによるものではないだろうか。すり石の「擦り」面に、目立てがおこなわれ荒さをつけて使用し、長く使用するに従って滑らかになっていくということであろう。(坂本)

石皿類

石皿類は、従来の石皿・台石・砥石などを一括したものである。これらの主体部分での分布や、各部類ごとの数量、破損率、石質については、下の図と表に示した。本石器のきわだった特徴として76.6%と破損率が高いことがあげられる。これは、破損するまでの長期間にわたって使用されたことや、破損しやすいような強い打撃などを受けたことなどのためと考えられる。分布の状態をみると、DP～EBラインと、9～22ラインに囲まれた斜面部分に、破損品が多い。このことはこの斜面が遺物の捨場の性格をもつためではないかと思われる。また、類と類はDRラインより南西側の地域と破損品と同様斜面部分に多い。この地域は、平安時代の遺構が分布するところであるが、類にはこの時代の砥石が含まれていると思われる。

(坂本)



第227図 石皿類分布図

第107表 石皿類集計表

分類	遺構内	遺構外	計	破損率	
I	a	14 (6)	17 (7)	41.2	
	b	2 (2)	10 (2)	40	
	計	2 (2)	24 (8)	32 (13)	40.6
II	a	8 (5)	22 (18)	31 (24)	77.4
	b	6 (2)	10 (5)	17 (8)	47.1
	計	14 (7)	32 (23)	48 (32)	66.7
III	a	2 (2)	16 (22)	18 (15)	83.0
	b	0	2 (2)	2 (2)	100
計	2 (2)	20 (14)	23 (17)	73.9	
IV	0	13 (5)	13 (5)	38.5	
V	3	7 (5)	11 (5)	45.5	
合計	46 (36)	179 (139)	235 (180)	76.6	

第108表 石皿類石質一覧

石器分類	石質分類	頁	安山	砂岩	閃緑岩	凝灰岩	輝緑岩	多孔質・安山岩	粘板岩
		岩	岩	岩	岩	岩	岩	岩	岩
I	a	7	1	2					
	b	4	1	1	1				
	計	11	1	3	1				
II	a	2	11	6		1			1
	b	2	2	1					
	計	2	13	7		1			1
III	a	7	2					5	
	b	1	1					1	
	計	7	3					6	
IV	a		7	3		2			
	b		3	3					
	計		2	2		2		1	
V	a		2					1	
	b		2						
	計		2					1	
合計	計	2	31	16	3	5	1	7	1

第3節 平安時代

平安時代の住居跡について

貼り壁（仮称）について

今調査で、地山とは異なるが地山と非常に類似した性質の土を壁とする住居跡を数軒確認した。調査時において検出される壁は、おおむね「掘り方」を意味し、このため粘土等を貼り付けて壁としているようにみられることから、この地山面に貼り付けられた粘土を貼り壁と仮称した。これがそのまま壁となることもあると思われるが、多くは居住空間の本来の壁とは異なっていると考えられる。貼り壁は「腰板」の存在を基本的なものとするれば、「掘り方」と「腰板」間の充填物（詰め物）としての性格を有する。竪穴住居を構築時に「掘り方」がいびつ（掘り過ぎ等）である場合などにおいて「腰板」と地山との空間を埋める必要性が生じる。「腰板」が検出されない場合は、この充填物の内側、つまり住居跡内の面が壁として理解される。

住居構築の手順からすれば、貼り壁は上屋を構築する前の工程として理解される。腰板設置の前段階か後段階かは判然としないが、設置後に粘土等を充填したとすれば、突き固めによる圧力や土の重みなどで腰板が住居内部に押し出されると思われることから腰板設置前に貼り付け、突き固められたものと推察される。この場合には、縄張り等によって設置位置の決定がなされたものと思われる。

この貼り壁の検出により一部の平面形状のいびつな住居跡についても、壁直下に周溝が存在するものを除いては、居住空間の矩形化が成されていたことが類推される。

また従来、地山・壁の崩落土として取り扱った覆土の一部は、この貼り壁の崩落によるものも含まれると考えられる。

本遺跡では304号・309号住居跡で明確に把握されたが、すべての壁に該当する訳ではない。したがって、この2軒の住居跡のほかに、一部の壁だけが柔かい住居跡などは、貼り壁の可能性があったと考えられる。

304号住居跡は、特に掘り方がいびつで、貼り壁となる粘土の量も非常に多量である。この粘土はカマド燃焼部上部及びカマドの掘り方にまで及んでいる。貼り壁の内部のラインは、おおむね柱穴によって区画されるラインとほぼ同一である。

壁面のピットについて

303号・304号・306号住居跡の壁面に1～2箇所、壁外に向けて半円形のピットが穿たれている。これらはすべて段を構成しておらず物を置く用途を有してはいない。前項の貼り壁同様に「腰板」によって隠れる部分に存在する。またこれらは、壁の残存状態にもよるが、カマドの煙道の高さとおおむね同レベルか、若干上部に位置している。303号住居跡では、カマド

が南壁東寄りにあるのに対しピットは南壁西寄りに、304号住居跡では、カマドが東壁中央やや南寄りにあるのに対しピットは北壁中央に、306号住居跡は、カマドが南壁東寄りにあるのに対しピットは北壁西寄りと北壁東寄りの2箇所に、各々位置している。竪穴構築時（掘り込んである時点での）掘り過ぎとも思われるが、カマドの構築予定部分であった可能性が考えられ、掘り込む前に風向等に対して何らかの検討がなされた結果として、痕跡が残されたものと思われる。

歴史時代の土壌について

昭和54年度13基・昭和57年度28基・昭和59年度22基の計63基を検出した。このうちの半数以上の土壌から土師器片が出土した。当該時期の土壌は瓮茶沢遺跡（県埋文報67集）・根城跡東構地区（八戸市埋文報11集）等で検出・報告されている。

平面形は、円形37基・長方形10基・方形3基・長楕円形2基・不整形7基・不明4基で円形が最も多い。壁はほぼ垂直のものが多く、この中にはやや外傾するもの及びやや内傾するものがみられ、部分的に内傾及び外傾するものも数基ある。また、袋状を呈するもの、フラスコ状を呈するもの、壁にピットを有するもの、底面に柱穴様のピットを有するものなどが確認された。底面はおおむね平坦面を構成しているが、中央が若干窪むものや若干の起伏がみられるものもある。ナベ底状を呈するものは6基と少ない。

覆土は、黒褐色土・暗褐色土を基調とし、全体にしまりに欠け縄文時代の遺構の覆土とは性格が異なる。自然的堆積状況を呈するものが多いが、短期間に埋まったと思われるものと人為的に埋めもどされたと思われるものはロームと黒褐色土等が互層を呈して堆積している。

焼土・炭化物を混入するものも多く認められる。第309号土壌中央の柱穴状のピットから笹・カヤ等を焼却した時に残る非常にフワフワした灰が検出された。

遺物は覆土中から出土したものが多いが、底面直上からのものも少なくない。第308号土壌は底面上から20個体以上の土師器杯及び3個体以上の甕が出土した。第319号土壌覆土中から10個体以上の貝殻が出土した。土器は、復原可能のもの出土は少なく、ほとんどが破片での出土である。縄文時代の遺物包含層の存在により覆土中に縄文時代土器を混入する土壌も多い。

内部施設を有する土壌は大形のものが多く、壁面に袋状のピットを有するもの（12号・303号・309号）及び底面に柱穴状のピットを有するもの（9号・10号・309号・313号）が検出された。袋状の小ピットは用途が不明であるが、これら土壌が貯蔵用と考えると貯蔵対象物の仕分け及び特殊な物の格納などの機能を有するものと思われる。柱穴状のピットからは柱痕は確認されず、また柱を埋めた痕跡も認められなかった。このことから、このピットは常設の柱を有せず、使用時に柱を挿入し、仮固定する機能を持つものと考えられる。

大形のものは貯蔵庫と考えられるが、小形のものは断定できる要素に乏しい。壁面が垂直で底面も平坦なもの（作りが丁寧なもの）とそうでないものがあることから、これらの用途は異なるものと思われる。また焼土・炭化物・炭化材等の出土から上屋を相定できるものもある。これらのことから土壌は貯蔵庫（室的な用途）及び墓墳の可能性が考えられる。

重複関係では、住居を切り込んでいるものが数基あるが、住居に切られているものは皆無である。しかし住居及び土壌の覆土が非常に似かよっていることから時間的な隔りは少ないものと推定される。

時期的には、土師器の年代から10世紀から11世紀のものと推定されるが、一部の土壌はそれ以降の可能性も考えられる。（不整形のもの及び規模の小さなもの）

土師器について

本遺跡出土の歴史時代の遺物は、土師器・須恵器・鉄製品等で、土師器が主体をなす。須恵器は大甕が破片で出土しているが、坏は皆無である。

土師器坏、ロク口使用の痕跡（切り離し及びロク口目など）が確認されるものは非常に少なく、器内外面に丁寧な調整を施している。また内面黒色処理を施しているものがほとんどである。ロク口使用の痕跡は明確ではないが、湾曲が均一でゆがみが少ないことなどからロク口使用のものと考えられる。ロク口を使用していないと思われるものも数片認められる。底部が丸底ぎみのものも数点出土しており、特に303号住居跡のものは大形である。

器外面の調整はミガキによるもので非常に光沢がある。底外面はナデ及びミガキが施され、切り離し痕を磨消している。坏が集中して出土した308号土壌のものは、桜井第 型式期の、段を有する坏の調整技法と類似点が認められ、特に器高の低い坏の口縁部の湾曲は 型式に次ぐものと考えられるような作りである。しかし、これらの器内外面の調整は新しい時期にも見られる要素であるため即断できない。

土師器甕 ロク口使用のものは非常に少なく、小形のものに限定される。長胴甕及びこれらの甕は口縁部がゆがんでいるものが多く、口縁直下までケズリの痕跡を有するものも多い。

成形は巻き上げによるものと思われ、ケズリ・ヘラナデ・横ナデの調整痕が認められる。ケズリの痕跡がナデによって完全に磨消されているものは少く、特に胴部中央までは多くの個体上で認められ、棒状又はヘラ状工具の側面先端で強く引っかかれた痕跡を有するものもある。

小形のものは、器体のゆがみが少なく、堅緻である。補修孔を有するものも数点ある。

これらの甕は、比較的新しい時期の様相を呈しており、カキ目や口縁部の長く外反するものまた薄手のものなど古手の様相を呈するものは非常に少ない。特に口縁部が長く外反し、外面にミガキの施されたものは、3次調査の遺構外出土のもの1片である。

その他、器厚10cm程のコップ形の器形を呈するもの及び器高5cm程の非常に小形の袖珍土器

も数点みられる。「あかやき」と思われるものも認められるが、量的には少ない。

時期 坏は古い様相を呈するものが多いが、甕は新しい傾向を示すものが多く、住居跡等の出土例からも、これらは共伴して出土しているため時期的に古く溯ることはできない。308号土壙等のセット関係（薄手の堅緻な甕破片を伴出）から9世紀末の可能性も考えられるが、おおむね10世紀前半から11世紀にかけての所産と推定される。（白鳥）

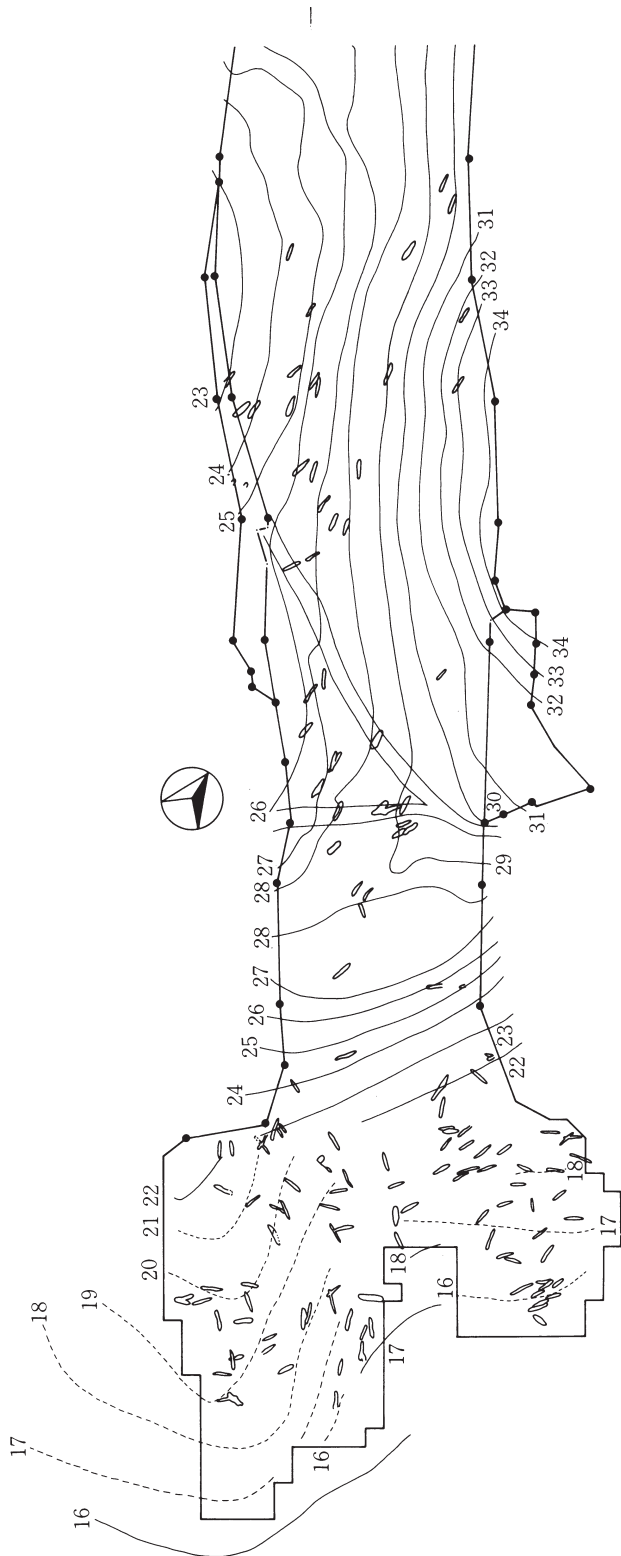
第4節 溝状ピット

172基のピットを検出した。調査範囲内の分布状況は、第 図のとおりである。（等高線は3次調査のもので、1・2次の調査範囲は調査終了後の標高のため点線で示した。）形状・規模等は各調査の項に記載したとおりで、ここでは分布及び時期について述べる。

分布 調査区は西に傾斜する部分と南へ傾斜する部分とに分けられ、長軸方向は、前者ではおもに北方向を中心にする傾向を示すが、後者では統一性は認められない。特に1次の調査地点は微高地を形成しており、方向は一定していない。これらの方向性は傾斜と大きな関連性が認められ、若干斜めではあるが、おおむね等高線に平行する。このことは、ピット間の切り合いが直交するなどの大きな角度差を持つものが、1次の調査範囲を除いては、少ないことなどからも伺われる。ピットは傾斜の急な部分には少なく緩傾斜部分に多く分布し、低地に多い傾向を示す。

時期 ほとんどのピットが第 層（中坵浮石相当層）を切り込んでいるが、路線端及び土層観察用のベルトに係ったピットの中で覆土中に 層が流入しているものが数基認められる。これらは 層が軟質のため埋没過程において壁の一部が崩落したためとも思われるが、断定し得ない。また第309号ピットは、早稲田5類期の住居を切り込み、さらに早稲田5類土器及び焼土がピット覆土上部を覆っていることから当該時期の所産となるものと思われるが、単一土器形式中で、居住 獵場 居住の変遷が行われたと考えることに危惧が感じられることから、同ピットの他の部分を覆っていた長七谷地 群土器までの時期幅の中で捉えることとしたい。（検出状況は第317号住居跡参照）多くのピットは平安時代の住居跡に切られているが、第33号ピットは歴史時代の土師器を包含する大型の溝状ピット（第47号）を切っている。これらことから、本遺跡の溝状ピットの時期は古いものは、縄文時代早期（早稲田5類期）から前期前半（長七谷地 群期）の間、また第 層が覆っていると思われるものは前期前半以前、最も新しい時期のものは、平安時代以降である。他のピットは前期以降で平安時代以前と考えられるが、時期は断定し得ない。

（白鳥）



第228図 溝状ピット配置図

引用参考文献

- 山内清男 1929 「関東北に於ける繊維土器」
山内清男 1932 「日本遠古之文化」
八幡一郎 1935 「奥羽地方発見の篋状石器」『人類学雑誌』第50巻第5号
伊東信雄 1940 「宮城県遠田郡不動堂村素山貝塚調査報告」(『奥羽史料調査部報告』2)
赤星直忠 1948 「神奈川県野島貝塚」『考古学集刊』1
江坂輝弥 1950 「青森県下北郡東通村尻屋物見台遺跡調査報告」『考古学雑誌』第36巻第4号
加藤 孝 1951 「宮城県上川名貝塚の研究」『宮城学院女子大学研究論集』
児玉作左衛門・大場利夫 1953 「函館市住吉町遺跡の発掘について」『北方文化研究報告』第8輯
北海道大学
児玉作左衛門・大場利夫 1954 「函館市春日町出土の遺物について」『北方文化研究報告』第9輯
北海道大学
江坂輝弥 1954 d 「青森県下北郡吹切沢遺跡」 日本考古学年報2
1954 e 「青森県下北郡ムシリ遺跡」 日本考古学年報2
1955 a 「青森県下北郡吹切沢遺跡」 日本考古学年報3
1955 b 「青森県下北郡ムシリ遺跡」 日本考古学年報3
大場利夫他 1955 「函館市梁川町遺跡」 函館市立博物館
江坂輝弥 1956 a 「田戸住吉町系文化」 若木考古
1956 a 「各地域の縄文式土器 - 東北」『日本考古学講座』3
草間俊一 1956 「岩手県日戸遺跡調査報告」『岩手大学学芸部研究報告』10
岡本 勇 1957 「茅山貝塚」『横浜市立博物館報』1
杉原荘介・芹沢長介 1957 「(1)土器」『明治大学文学部考古学研究報告』第2冊
江坂輝弥 1957 b 「ムシリ 式土器について」『先史時代』5
二本柳正一・角鹿扇三・佐藤達夫 1957 「青森県上北郡早稲田貝塚」『考古学雑誌』第43巻第1号
日本考古学会
佐藤達夫他 1958 「青森県上北郡早稲田貝塚」『考古学雑誌』第43巻第2号
二本柳正一・角鹿扇三・佐藤達夫・渡辺兼庸 1960 「早稲田貝塚」『上北考古会報告』1 上北考古会
岡本 勇 1961 「三浦市鷲ガ島台遺跡」『横浜市立博物館報』5
佐藤達夫 1961 「青森県上北郡出土の早期縄文土器追加」『考古学雑誌』第46巻第4号
二本柳正一・佐藤達夫 1961 「六ヶ所村出土早稲田5類土器」『上北考古会報告』2 上北考古会
二本柳正一 1961 C 「六ヶ所村出土早稲田5類土器」『上北考古学会報告』2
二本柳正一・角鹿扇三 1961 a 「六ヶ所村尾鮫出土の土器」『上北考古学会誌』2
渡辺兼庸 1961 b 「六ヶ所村表館出土の土器」『上北考古学会誌』2
林 謙作 1962 「東北地方早期縄文文化の展望」『考古学研究』第9巻第2号
岡本 勇・戸沢充則 1965 「縄文文化の発展と地域性 - 関東」『日本の考古学』
芹沢長介・林 謙作 1965 「岩手県蛇王洞洞穴」『石器時代』7
草間俊一他 1966 「盛岡市一本松熊の沢遺跡」『郷土資料写真集』10
後藤勝彦 1968 「宮城県七ヶ浜町吉田浜貝塚 - 仙台湾周辺の考古学的研究 - 」『宮城県の地理と歴史』3
目黒吉明 1969 「古亀田遺跡」『福島県史』1
山下孫継他 1969 「岩井堂岩陰遺跡発掘調査報告書」
興野義一 1970 「宮城県大寺遺跡出土の早期縄文土器」『古代文化』第22巻第11号
名久井文明 1971 「青森県芦野遺跡の土器群について」『考古学雑誌』第57巻第2号
1972 「東北北部における縄文時代早期の新型式二例」『研究紀要』第2集 青森県立

三戸高等学校

- 八幡一郎 1972 「日本中部山地に於ける縄文早期文化の研究」(上)(中)
- 三浦圭介 1973 「むつ小川原開発に伴う新住区予定地内埋蔵文化財分布試掘調査報告書」 青森県教育委員会
- 吉田 格 1973 「関東の石器時代」
- 石岡憲雄 1974 「東北地方早期縄文時代土器型式編年に関して」『遮光器』8号
- 鈴木克彦 1974 「日ヶ久保貝塚発掘調査報告書」百石町教育委員会
- 名久井文明 1974 「北日本縄文式早期編年に関する一試考」『考古学雑誌』第60巻第3号
- 竹島国基 1975 「宮田貝塚 - 昭和48年7月発掘調査報告書 - 」福島県小高町教育委員会
- 芳賀英一 1975 「常世遺跡の早期縄文式土器に就いて」『遮光器』9
- 八戸市教育委員会 1975 「赤御堂遺跡発掘調査概要報告書」
- 工藤竹久他 1976 「赤御堂遺跡発掘調査概要報告書」八戸市教育委員会
- 杉山 武他 1976 「千歳遺跡(13)発掘調査報告書」青森県教育委員会
- 白石市『白石市史』別巻考古資料編 1976
- 富樫泰時 1976 「トランシェ様石器について」『東北考古学の諸問題』
- 三宅徹也 1976 「下田代納屋B遺跡発掘調査報告書」青森県立郷土館調査報告書第1集 青森県立郷土館
- 八木光則 1976 いわゆる特殊磨石について - 中部地方における縄文早期の石器群研究への問題提起 - 『信濃』28 - 4
- 上総国分寺台遺跡調査団 1977 『西広貝塚 - 上総国分寺代遺跡調査報告3』
- 神奈川県教委 1977 『神奈川県埋蔵文化財調査報告13尾崎遺跡』
- 鈴木次郎 1977 「縄文時代の直刃式片刃打製石器について」『神奈川考古』2
- 青森県教育委員会 1978 『青森県埋蔵文化財調査報告書第38集 熊沢遺跡』
- 青森県教育委員会 1978 「新納屋遺跡(2)」『むつ小川原開発予定地域内埋蔵文化財試掘調査概要』青森県埋蔵文化財調査報告書第42集
- 白鳥良一 1978 「宮城県七ヶ沢町左道貝塚の縄文前期土器について」『宮城史学』第6号 宮城教育大学
- 相原康二 1979 「大渡野遺跡」『東北縦貫道埋文報告』 岩手県教育委員会
- 佐川正敏 1979 「中野遺跡A地点グループ 37 地区の土器」『函館空港・中野遺跡』 みやま書房
- 三宅徹也 1979 「早期編」『蛭沢遺跡』 青森市蛭沢遺跡発掘調査団
- 青森県教育委員会 1980 f 「長七谷地貝塚遺跡発掘調査報告書 - 昭和52年度第1次発掘調査」 長七谷地貝塚
- 1981 a 「表館遺跡発掘調査報告書」
- 大湯卓二 1980 「土器」『長七谷地貝塚遺跡発掘調査報告書』 青森県埋蔵文化財調査報告書第57集
- 青森県教育委員会 1982 『青森県埋蔵文化財調査報告書第67集 発茶沢遺跡』
- 安孫子昭二 1982 「子母口式土器の再検討 - 清水柳遺跡第二群土器の検討を中心として - 」『東京考古』 東京考古談話会同人
- 加藤邦雄 1982 「縄文尖底土器」『縄文文化の研究』第3巻 縄文土器1 雄山閣
- 青森県教育委員会 1983 『青森県埋蔵文化財調査報告書第77集 松原遺跡・陣馬川原遺跡・槻ノ木遺跡』
- 青森県教育委員会 1984 『青森県埋蔵文化財調査報告書第82集 和野前山遺跡』

青森県埋蔵文化財調査報告書第93集

大タルミ遺跡発掘調査報告書

昭和 59 年 度

青 森 県 教 育 委 員 会

目 次

調査に至る経過と調査要項	381
1. 調査に至る経過	381
2. 調査要項	381
調査の方法と基本層序及び経過	383
1. 調査の方法と基本層序	383
2. 調査の経過	383
検出遺構	387
1. 溝状ピット	387
まとめ	394

調査に至る経過と調査要項

1. 調査に至る経過

八戸北バイパス建設は、国道45号の八戸市高館付近の交通緩和をはかって計画されたもので、昭和49年に、建設に先立ち路線予定地内の埋蔵文化財の分布調査を実施した。その際、確認された遺跡は、売場遺跡、大タルミ遺跡、和野前山遺跡である。

大タルミ遺跡は、これら3遺跡の中間に位置し、歴史時代の遺跡と推定されているものである。この遺跡の調査については、建設省東北地方建設局青森工事事務所の依頼を受け、昭和56年に実施することになった和野前山遺跡の発掘調査に並行して、まず試掘調査を行い、遺跡の性格や路線内の範囲を明らかにした後、発掘調査は昭和57年に実施することにした。

試掘調査は、昭和56年6月17日から同月26日まで和野前山遺跡のスタッフにより行われた。その結果、遺物の出土は全くなく、試掘面積343㎡内から3基の遺構（溝状ピット）が確認されたのみであったが、この遺構は「群」を成す性格をもつことから、青森工事事務所と協議し、昭和57年度には、その広がり調査することを目的として、周辺約3,000㎡を対象に発掘調査を実施することになった。

2. 調査要項

(1) 調査目的

建設省一般国道45号八戸北バイパス建設工事に先立ち、当該地区に所在する大タルミ遺跡の発掘調査を実施して、その記録保存を行い、埋蔵文化財の活用を計るものである。

(2) 調査期間

昭和57年9月22日～昭和57年10月30日

(3) 遺跡名及び所在地

大タルミ遺跡 八戸市大字河原木大タルミ

(4) 調査予定面積

3,000㎡

(5) 調査委託者

建設省東北地方建設局青森工事事務所

(6) 調査主体者

青森県教育委員会

(7) 調査担当機関

青森県埋蔵文化財調査センター

(8) 調査協力機関

八戸市教育委員会、三八教育事務所

(9) 調査参加者

調査指導員	小井田幸哉	青森県文化財保護審議会委員
調査指導員	村越 潔	弘前大学教育学部教授 青森県文化財保護審議会委員
調査協力員	岩谷喜代美	八戸市教育委員会教育長
調査員	三辻 利一	奈良教育大学教授
"	木村 克彦	八戸工業大学助教授
"	滝沢 幸長	光星学院開発局職員 (現・八戸市文化財審議会委員)
"	松山 力	県立八戸高等学校教諭
"	橋本 正信	県立三戸高等学校教諭 (現・県立八戸南高等学校教諭)
"	中田 隆也	八戸市立根城中学校教諭

青森県埋蔵文化財調査センター

所 長	工藤 泰典	
次 長	古井 陸夫	(現・公立学校共済組合浅虫保養所帰帆荘支配人)
"	須藤 昭二	

総務課長	森内 四郎	(現・県立五所川原東高等学校事務長)
"	館浦 善清	

調査第二課長	山田 洋一	
調査補助員	五十嵐敬昌	
"	加川 正宏	
"	内山 文子	
"	神 真澄	

調査の方法と基本層序及び経過

1. 調査の方法と基本層序

(1) 調査区の設定

道路建設用の中心杭の 123と 125を結ぶ線を南北方向の基準線とし、124でこれに直交する線を東西方向の基準線として、調査地区全域に4m四方のグリッドを設定した。そして、124杭の縦線を6ラインとして南へ5・4・3、北へ7・8・9の順に番号を付し、更に、124杭の横線をGラインとして東へH・I・J、西へF・E・Dとアルファベット文字を付した。各グリッドの呼称は、北東隅の杭番号により、例えばD-7グリッド等と呼称した。

(2) 発掘調査方法

遺跡の土層の堆積状況を観察するため、適宜セクションベルトを設けて、グリッドごとに掘り進めた。

基本層序は、第1層、第2層、第3層と上から順にローマ数字で示した。

遺構は、すべて土層観察用のセクションベルトを設けて掘り下げ、実測図は、すべて1/20の縮尺で作成した。

遺構内の堆積土は、上から順に1層、2層、3層とアラビア数字で示した。なお、遺構番号については、試掘時に確認した3基(第1号~第3号)に連続し、検出順に号数を付した。

写真撮影は、確認状況、土層断面、調査経過、完掘状況等、適宜行った。

2. 調査の経過

9月22日から草刈り等の環境整備を行い、終了した地区からグリッド設定にとりかかった。9月24日、まず、調査区南端部の6~10ラインにかけて粗掘り作業を開始したが、早々に溝状ピット3基(5号~7号)のプランを確認した。

9月下旬には10~15ラインに粗掘りを進めたが、調査区の中央東側の一画が、表土が欠如して地山が露出していたため、その部分については遺構の有無を確認するに留めた。この地区では、試掘時にトレンチにかかった溝状ピット3基(1号~3号)の全容を確認した。

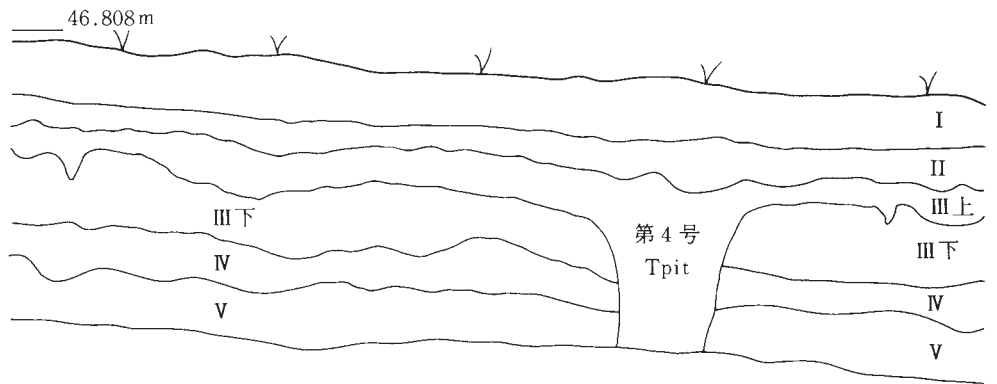
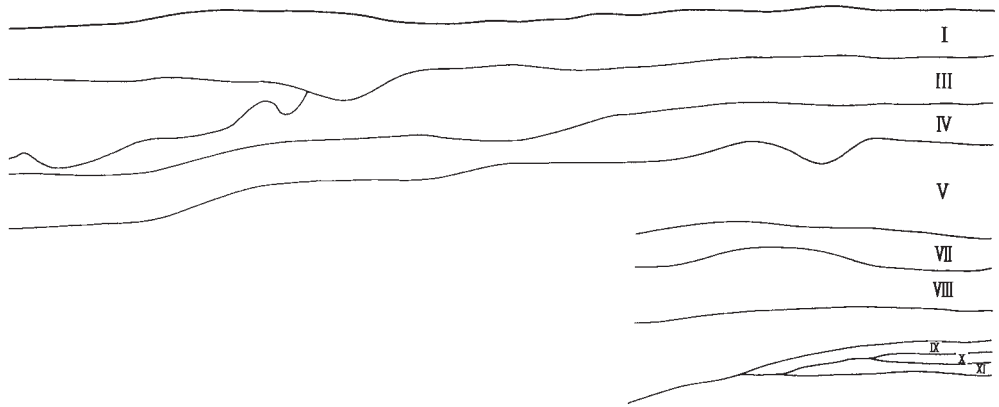
10月上旬から中旬にかけて、確認済みの溝状ピットの精査、写真撮影等を行い、また、粗掘りも21ライン付近まで進めた。この地区の東側は、地山の一部に重機のキャタピラの跡が認め



第1図 グリッド・遺構配置図

— 48.792 m

C-11附近



第2図 層序図

られるなど表土がかく乱されていた。

10月下旬、粗掘りは26ライン付近で終了。西側路線外との境界付近で確認した4号溝状ピットほか8号、9号ピットの精査並びに東西、南北メインセクションの図面を作成し、10月30日調査を終了した。

基本層序注記

- 層 黒色土、表土 シルト質、湿性、しまりあり。草木根混入
- 層 黒褐色土、表土 黒褐色土と褐色土の混合土層
- 層 黒色土 シルト質、2～5mmのにぶい橙色の浮石を、極めて少量であるが均一に含む。湿性あり、しまりなくもろい。
- 層 黒色土 シルト質、中礫浮石と黒色土との混合土層
- 層 黒褐色土 砂質、シルト層、中礫浮石相当層、湿性若干あり、しまりなし、層の基準層
- 層 暗褐色土 中礫浮石を少量含む、湿性ややあり、しまりあり。
- 層 黒褐色土 シルト・粘土質、1～10mmの黄橙色と明黄褐色の浮石を含む。浮石は層にかけて徐々に混入度が増す。粘性に富み、しまりあり、非常に固い、湿性に富む。
- 層 黒褐色～暗褐色土 シルト・粘土質、1～10mmの黄橙色と明黄褐色の浮石を全体に多く含む。層より粘性なし、しまりあり、非常に固い、不連続であり層厚は一様でない。
- 層 黄橙色浮石層 2～20mmの浮石層に若干の褐色土が混入している。しまりあり、粘性なし、南部浮石層。
- 層 明黄褐色浮石質土層 不連続な層であり、間層的な性格をもつ、非常に固い部分がある。しまりあり。
- 層 黄橙色浮石層 2～20mmの浮石層である。層よりしまりあり、粘性なし。南部浮石層
- 層 明黄褐色火山灰層 粘土質・シルト質の混合土層、湿性あり。
- 層 黄橙色火山灰層 浮石を少量含む、しまりあり、湿性・粘性若干あり、八戸火山灰の層相当層（風化層）と思われる。
- 層 明黄褐色砂質火山灰層 層の間層的性格を持つ、砂っぽく1～5mmの浮石を少量混入する。しまりなし、層同様八戸火山灰の層相当層（風化層）と思われる。

層 明黄褐色砂質粘土層 粘土と砂の混合土層的な性格をもつ。湿性、しまりあり。八戸火山灰層の層。

検 出 遺 構

1 . 溝状ピット

試掘時に所在を確認した3基(第1号~第3号)を含め、計9基の溝状ピットを検出した。遺物は、出土しなかった。

第1号溝状ピット(第4図、第1図版)

〔位置と確認〕 D - 10・F - 10・E - 11グリッドに位置し、南側半分を第層上面で確認した。なお、北側半分は、試掘時に第層を若干掘り下げた面で確認している。

〔平面形・規模〕 開口部では、長軸352cm、短軸45cmで、中央が若干膨らんでいる。壙底部では、長軸320cm、短軸12cmで細長く、深さは平均90cmである。

〔壁・底面〕 長軸の断面形態は、底面の一端がほぼ垂直に、他端は外傾ぎみに立ち上がる形状のものである。短軸の断面形態は、開口部から壙底部にかけて、両壁面が徐々に狭まる形状を示す。底面はほぼ平坦である。

〔覆土〕 自然堆積の状況で、11層に細分できた。

第2号溝状ピット(第4図、第1図版)

〔位置と確認〕 C - 11・C - 12グリッドに位置し、北側半分を第層上面で確認した。なお、南側半分は、試掘時に第層を若干掘り下げた面で確認している。

〔平面形・規模〕 開口部では、長軸332cm、短軸48cmで、壙底部では、長軸284cm、短軸7cm、深さは平均100cmである。

〔壁・底面〕 長軸の断面形態は、底面の一端が緩やかな曲線状の立ち上がりを示し、他端は開口部に向かって徐々に外傾する形状のものである。短軸の断面形態は、2段になり、開口部から壁面中位にかけてはやや幅広で落ち込み、それより下部は急に狭まる形状を示す。底面は多少起伏がある。

〔覆土〕 自然堆積の状況で、14層に細分できた。

第3号溝状ピット(第4図、第1図版)

〔位置と確認〕 E - 12グリッドに位置し、北側半分を第 層上面で確認した。なお、南側半分は、試掘時に同一面で確認している。

〔平面形・規模〕 開口部では、長軸418cm、短軸90cmで、幾分、蛇行ぎみの不整な形状を示す。底部では、長軸415cm、短軸13cmで細長く、深さは、最深部で125cmであるが、大半は90～100cmである。

プラン確認の際、南端部が二股になっていたため重複を予想したが、掘り下げの結果、南西端の落ち込みは立木の木根によるものと判明した。

〔壁・底面〕 長軸の断面形態は、底面の両端がフラスコ状に広がる形状のものである。短軸の断面形態は、2段になり、上段が幅広のU字状に大きく落ち込み、それより下部は急に狭まる形状を示す。底面は多少起伏がある。

〔覆土〕 11層に細分できたが、11・10層が自然堆積した後、木根の土圧等により壁面が崩落(4層)し、覆土がかくらんを受けたものと思われる。

第4号溝状ピット(第5図、第1図版)

〔位置と確認〕 C - 21グリッド付近に位置し、第 層上面で確認したが、西端部が調査区域外にかかった。

〔平面形・規模〕 遺構の一部が調査区域外にかかったため、推定値であるが、開口部では長軸が約370cm、短軸が55cmで、残存する一端が若干膨らみをもっている。壙底部では、長軸が約345cm、短軸が5cmで細長く、深さは平均130cmである。

〔壁・底面〕 長軸の東側断面形態は、底面から開口部へほぼ垂直に立ち上がる。短軸の断面形態は、開口部から壙底部にかけて、両壁面が徐々に狭まる形状を示す。底面は多少起伏があり、西方向へ高くなる。

〔覆土〕 自然堆積の状況で、7層に区分できた。

第5号溝状ピット(第5図、第1図版)

〔位置と確認〕 - 8グリッドに位置する。南側半分のプランが不明瞭であったため、北側部分よりおよそ20cm掘り下げた面で確認した。

〔平面形・規模〕 開口部では、長軸368cm、短軸35cmで、北端が若干膨らんでいる。壙底部では、長軸364cm、短軸10cmで、幾分蛇行し細長い。深さは平均80cmである。

〔壁・底面〕 長軸の断面形態は、底面の両端ともほぼ垂直に立ち上がる形状のものである。短軸の断面形態は、2段になり、開口部から壁中位までは緩い傾斜で狭まるが、それより下部

はほぼ垂直に落ち込む。底面は平坦である。

〔覆土〕 自然堆積の状況で、8層に区分できた。

第6号溝状ピット（第5図、第1図版）

〔位置と確認〕 E - 8・F - 8・F - 9グリッドに位置し、第1層上面で確認した。

〔平面形・規模〕 開口部では、長軸355cm、短軸20cm、壙底部では、長軸345cm、短軸10cmで細長い。深さは平均85cmである。

〔壁・底面〕 長軸の断面形態は、底面の両端とも、立ち上がり付近で若干オーバーハングしそれより上部はほぼ垂直に立ち上がる。短軸の断面形態は、開口部から壙底部へほぼ垂直に近い傾斜を示す。底面は多少起伏があり、南側が深く北側が浅い。

〔覆土〕 自然堆積の状況で、5層に区分できた。

第7号溝状ピット（第6図、第1図版）

〔位置と確認〕 D - 6・E - 6・D - 7グリッドに位置し、第1層上面で確認した。

〔平面形・規模〕 開口部では、長軸383cm、短軸55cmで、両端がややとがっている。壙底部では、長軸362cm、短軸10cmで、若干蛇行している。深さは、最深部で113cm、浅いところで85cmである。

〔壁・底面〕 長軸の断面形態は、底面の一端が内湾し、他端は不整な波状で立ち上がる。短軸の断面形態は、開口部から底部にかけて、両壁面が徐々に狭まる形状を示す。底面は両端部がやや深く、中央部が幾分高い。

〔覆土〕 自然堆積の状況で、6層に区分できた。

第8号溝状ピット（第6図、第1図版）

〔位置と確認〕 C - 23・D - 23・C - 24・D - 24グリッドに位置し、第1層上面で確認した。

〔平面形・規模〕 開口部では、長軸310cm、短軸65cmで、長楕円形に近い形状を示す。壙底部では、長軸288cm、短軸15cmで、深さは平均137cmである。

〔壁・底面〕 長軸の断面形態は、底面の一端が、若干の凸凹をもつもののほぼ垂直な立ち上がりをみせるが、他端は徐々に外傾する形状を示す。短軸の断面形態は、開口部から壙底部へやや急な傾斜で直線的に狭まる。底面は平坦であるが、東側が若干深くなっている。

〔覆土〕 自然堆積の状況で、8層に区分できた。

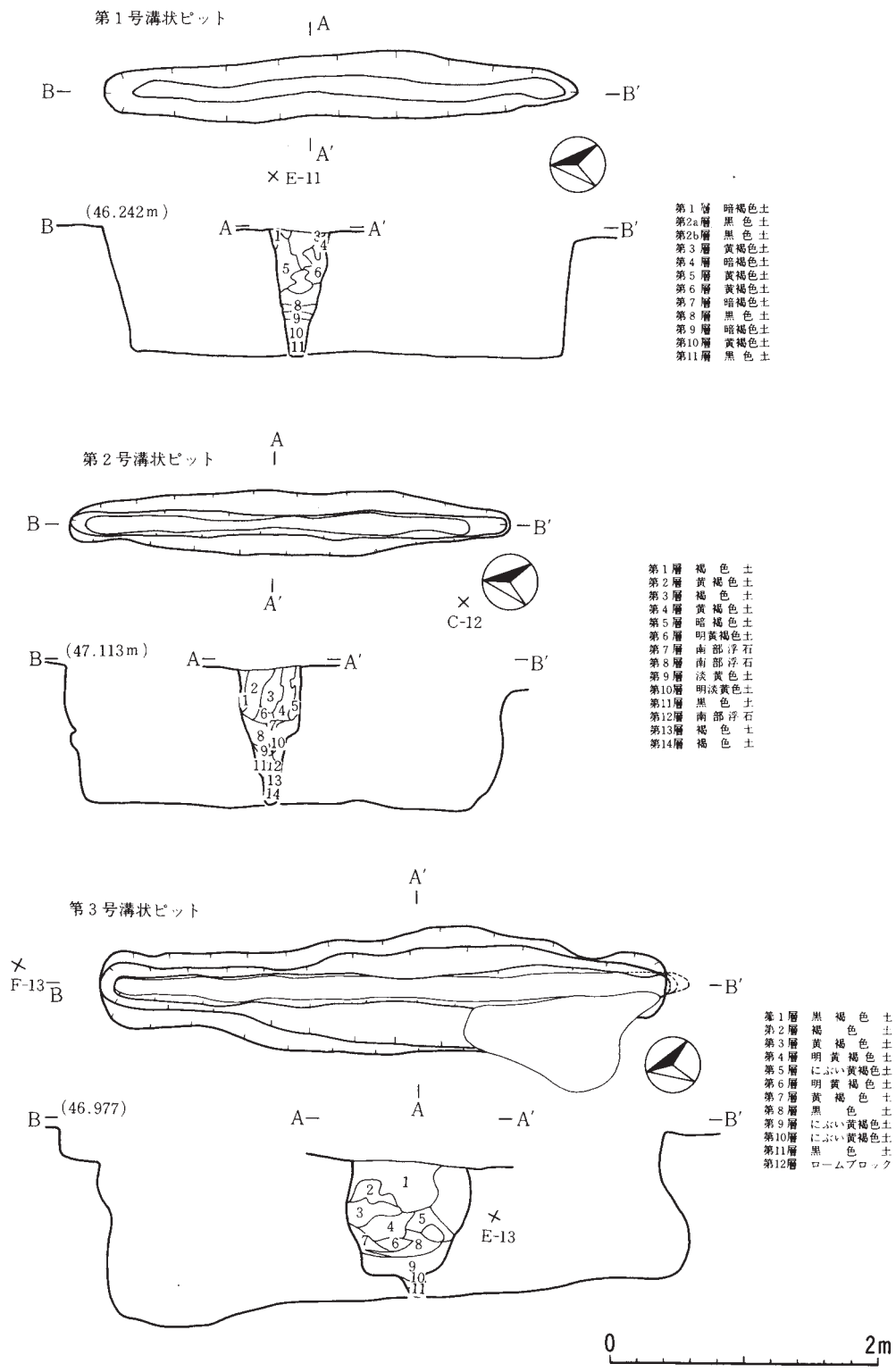
第9号溝状ピット(第6図、第1図版)

〔位置と確認〕 D - 21・E - 21・D - 22グリッドに位置し、第 層上面で確認した。

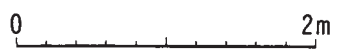
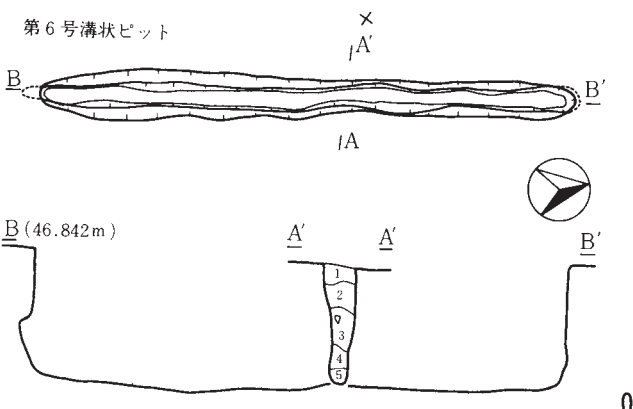
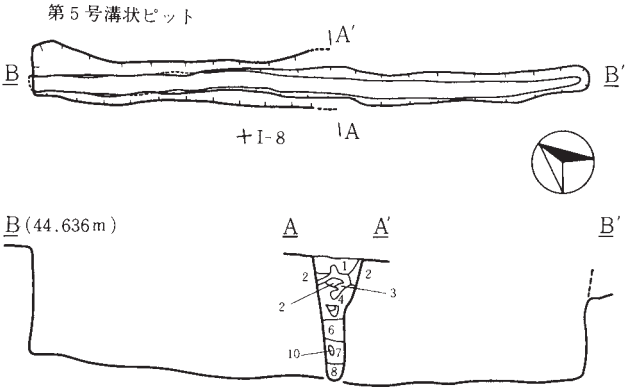
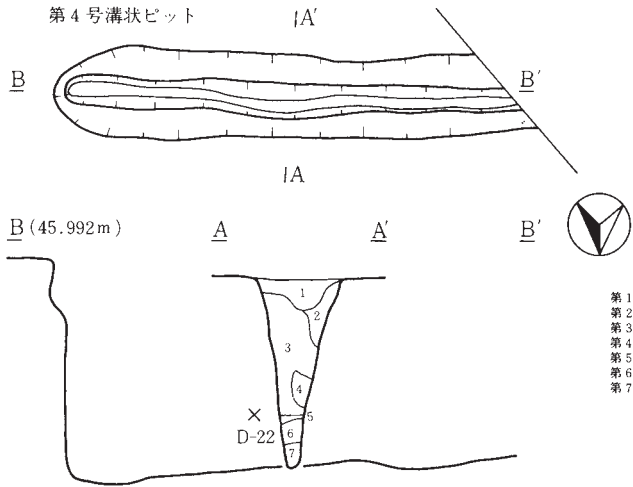
〔平面形・規模〕 開口部では、長軸346cm、短軸55cmで、西端側が若干膨らみが大きい。壙底部では、長軸345cm、短軸12cmで、幾分蛇行し、深さは平均110cmである。

〔壁・底面〕長軸の断面形態は、底面の一端がほぼ垂直に立ち上がるが、他端は幾分オーバーハングぎみに立ち上がる。短軸の断面形態は、撥状を示し、開口部から壙底部にかけて、緩やかにカーブしながら狭まる。底面は多少起伏があり、東側がやや高い。

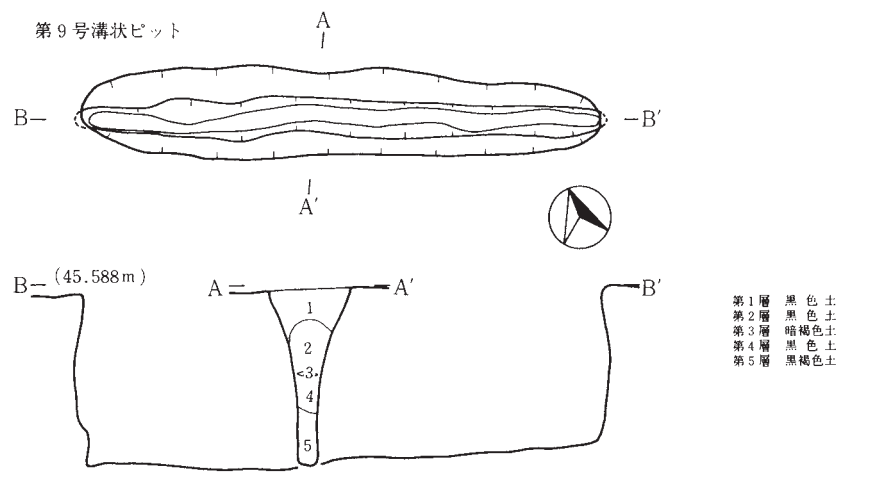
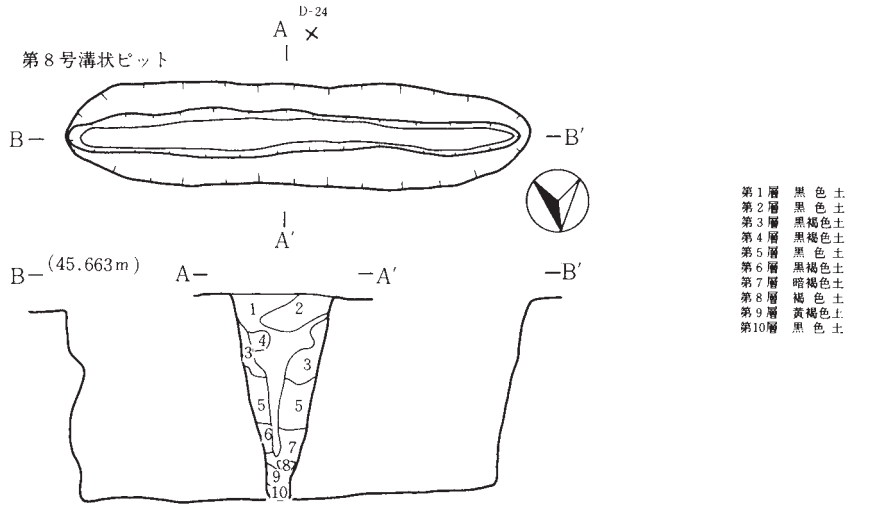
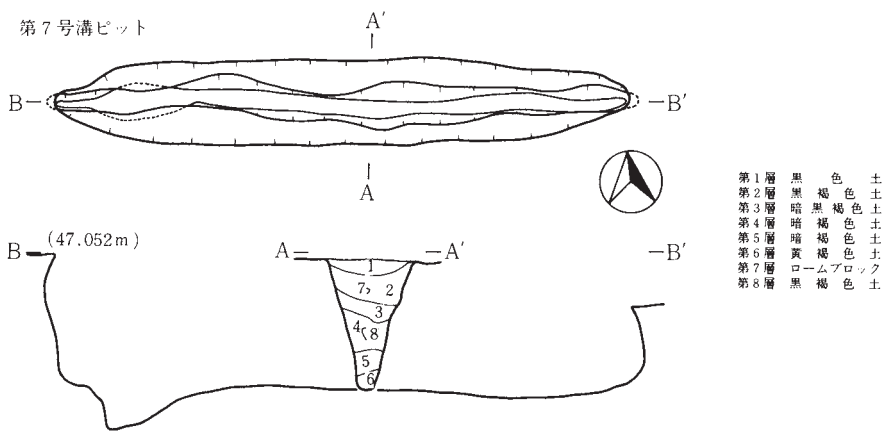
〔覆土〕 自然堆積の状況で、5層に区分できた。



第3図 溝状ピット(1)



第4図 溝状ピット(2)



第5図 溝状ピット

ま と め

本遺跡は、五戸川と浅水川の間丘陵・段丘群の東部、高館段丘（中位段丘）の南縁部に所在する（標高約48m）。かつて土師器片が採集されたことから、歴史時代（平安時代？）の遺跡（散布地）として周知されていたものである。

既述のように、試掘調査の際にも遺物の出土はなく、遺構（溝状ピット）のみの確認に終わったことから、発掘調査は専ら“遺構の検出”に主眼をおいた。

その結果、やはり推測したように遺構内外とも遺物の出土はなく、溝状ピット9基を検出するにとどまった。

このピットの構築年代については、推定の参考資料となる遺物がないため層位的に把握するよりすべはないが、基本層序からみて、いずれも第 層（中礫浮石粒が多量に混入した層）上面で落ち込みを確認していることから、縄文時代前期末以降の構築と考えることができよう。

また、これらの機能的な面については、ごく限られた資料からその実態を特定することは難しいのであるが、このピットをほぼ定説化している“狩猟に係わる遺構”と想定し、この地区は、かつて、主体部を他所にもつ遺跡の“狩り場”的な一郭であったととらえたい。（山田）

写 真 图 版





308H



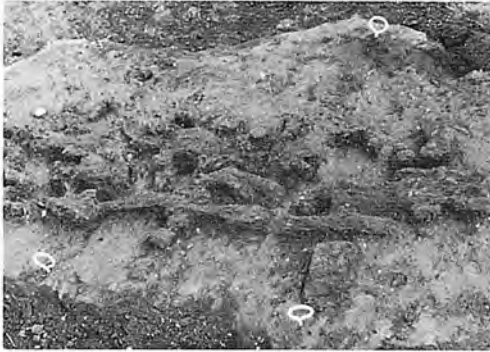
308Hピット62



308Hピット50



308H・310H



309H



309H



310H



312-314H



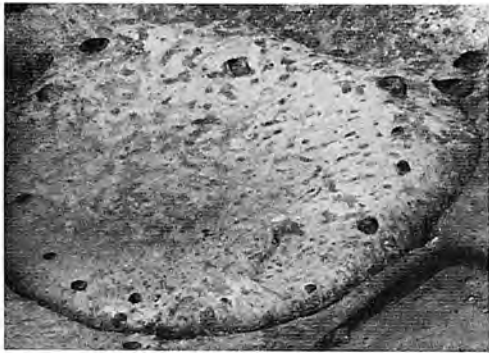
313H



314H



315H



316H



317H



404H



328土坑



301H



302H・ピット





303H 鉄鍬



303H 鉄鍬



303H 貝殻



304H



305H





306H



320H



321H

322H





323H



325H・333土坑



326H



327H



328H



329H



401H

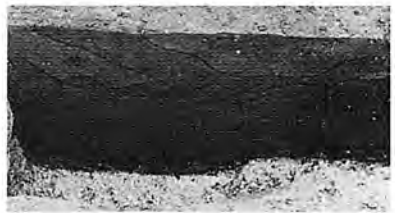
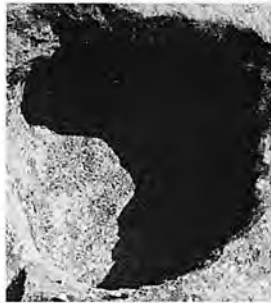


ピット 2

ピット 4

ピット 3

ピット 1



402H



403H



301土塚



303土塚



304土塚



305土塚



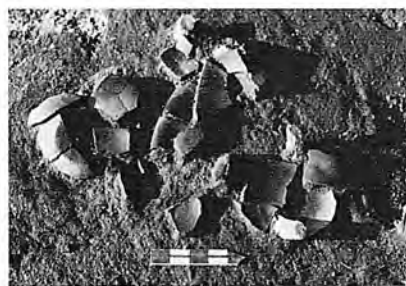
306土塚



307土塚

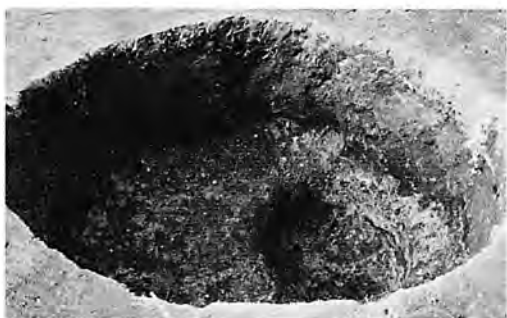


308土塚





309土坑



313土坑



316土坑



314·315土坑



318土坑



319土坑



323土坑



319土坑



332土坑



402~407土坑



401土坑



402土坑



404・405土坑



406土坑



407土坑



409土坑



408土坑



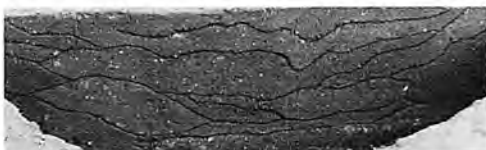
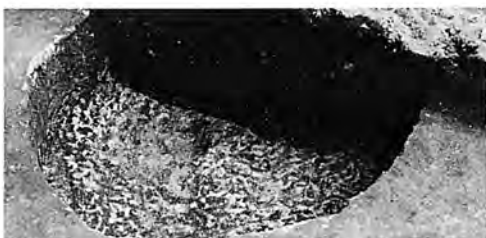
410土坑



411土坑



412土坑



413土坑



414土坑



417土坑



418土坑



420·421土坑



422土坑



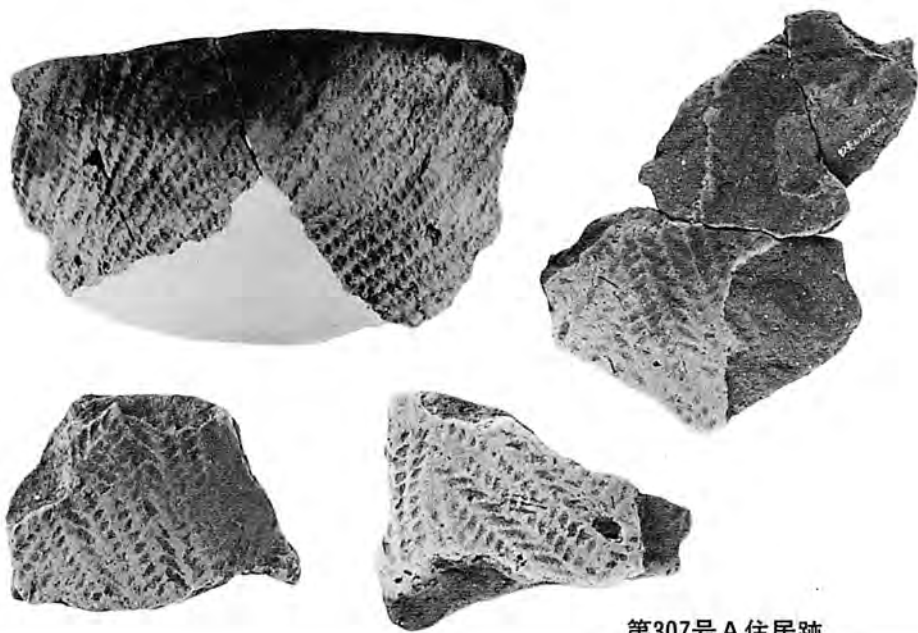
308T · P





DS
57
フレック
出土
状況





第307号 A 住居跡



第307号 B 住居跡

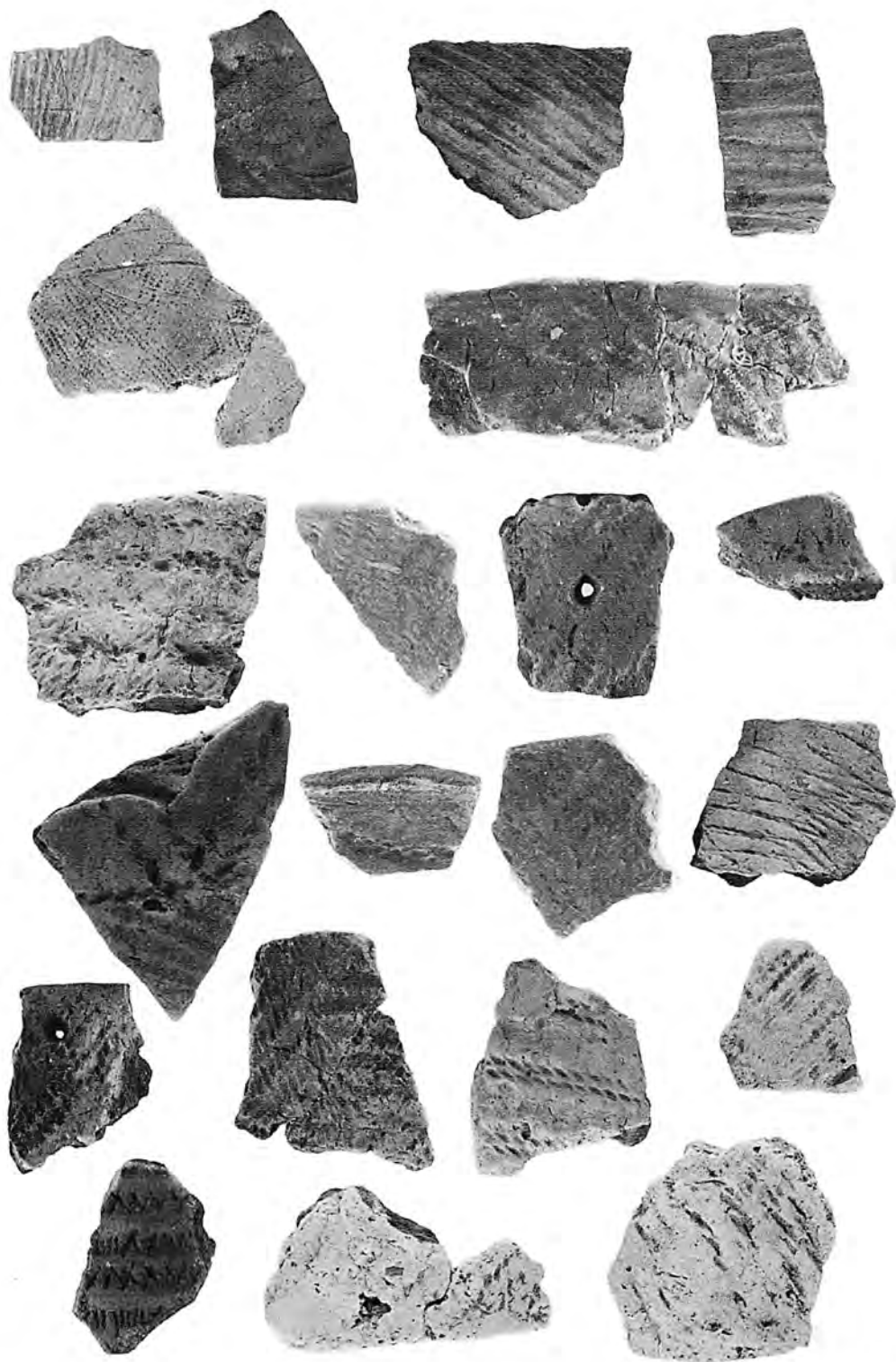


第307号住居跡 C 土坑



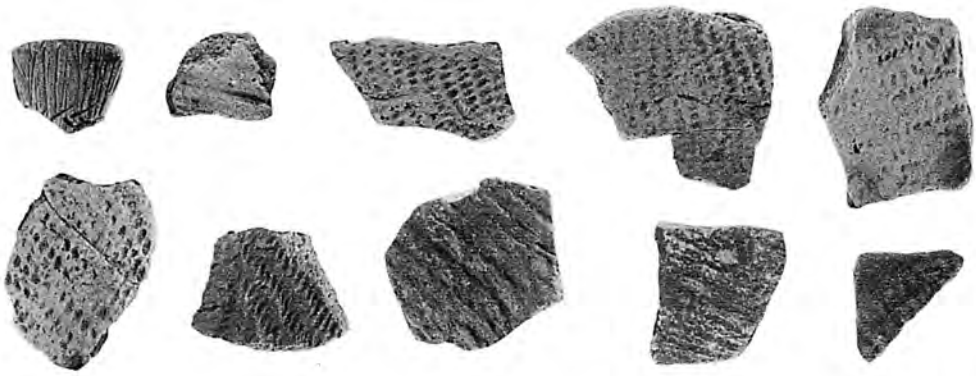
第308号住居跡

遺構内出土土器

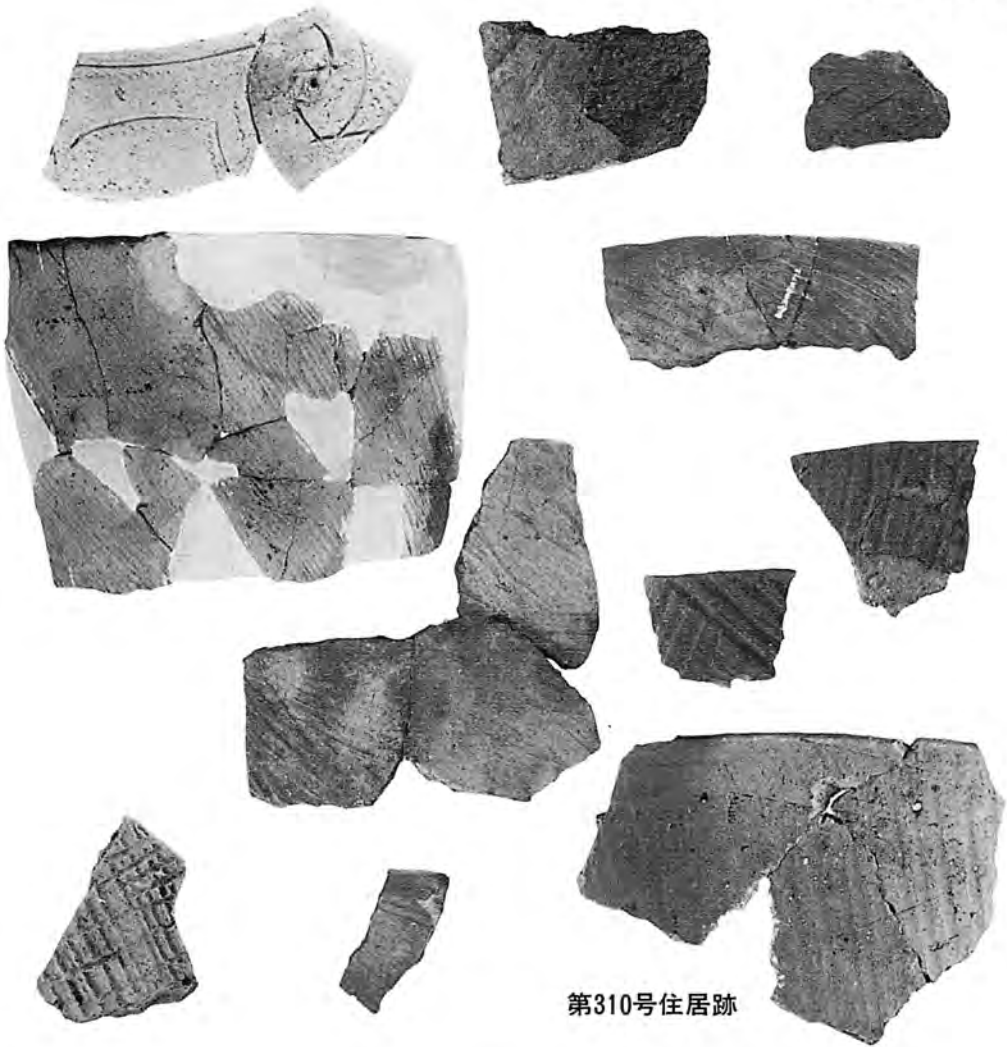


遺構内出土土器

第308号住居跡

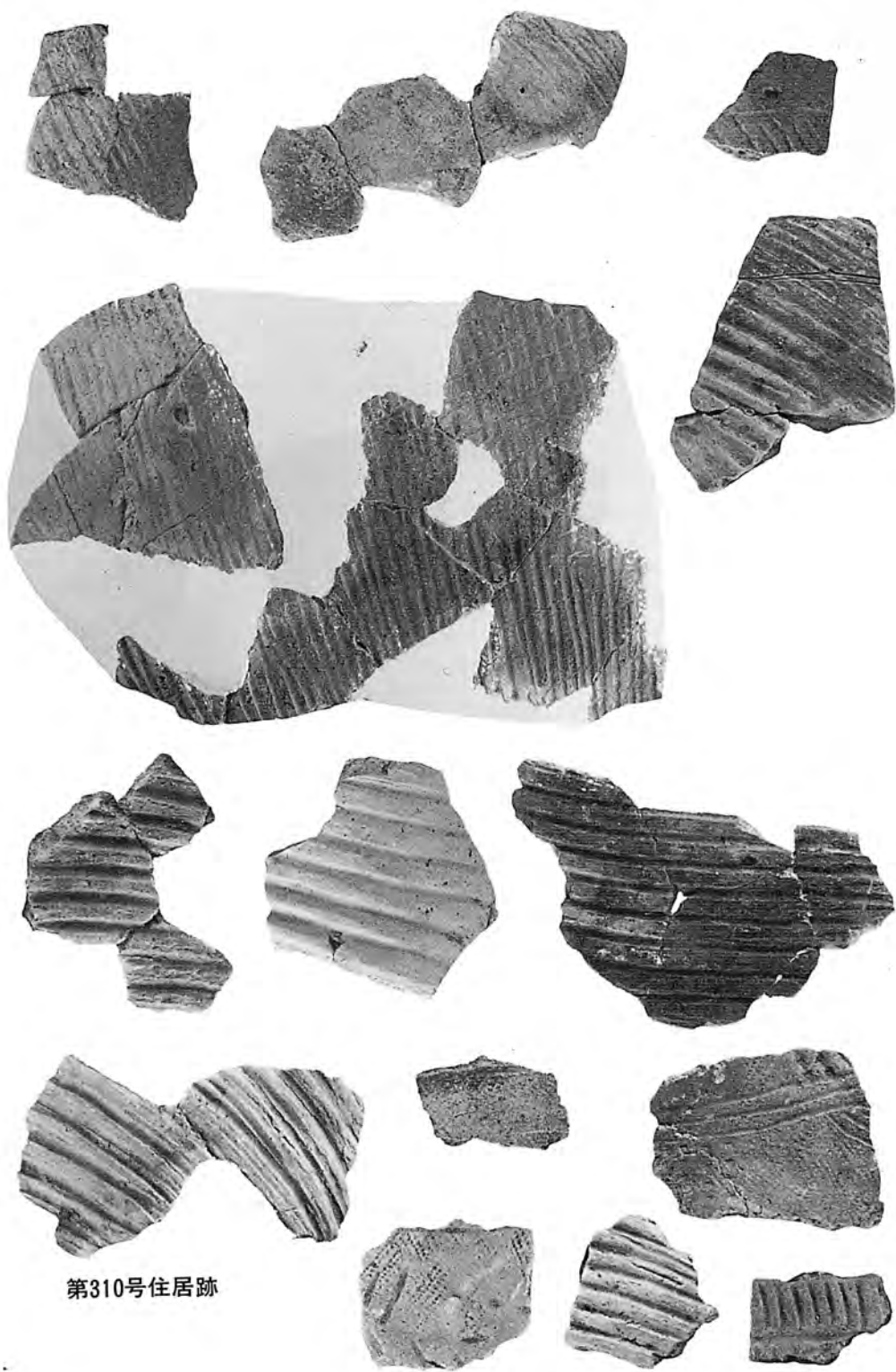


第309号住居跡



第310号住居跡

遺構内出土土器

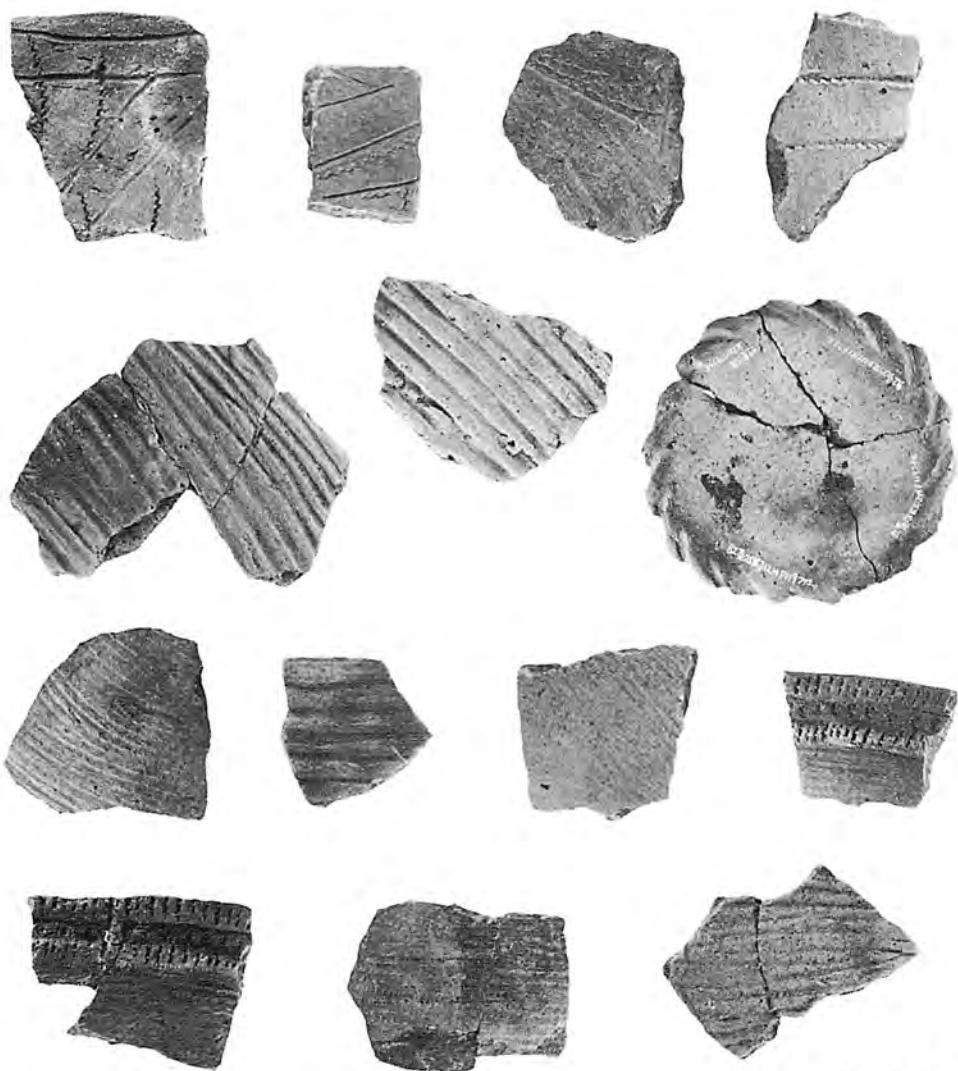


第310号住居跡

遺構内出土土器



第310号住居跡

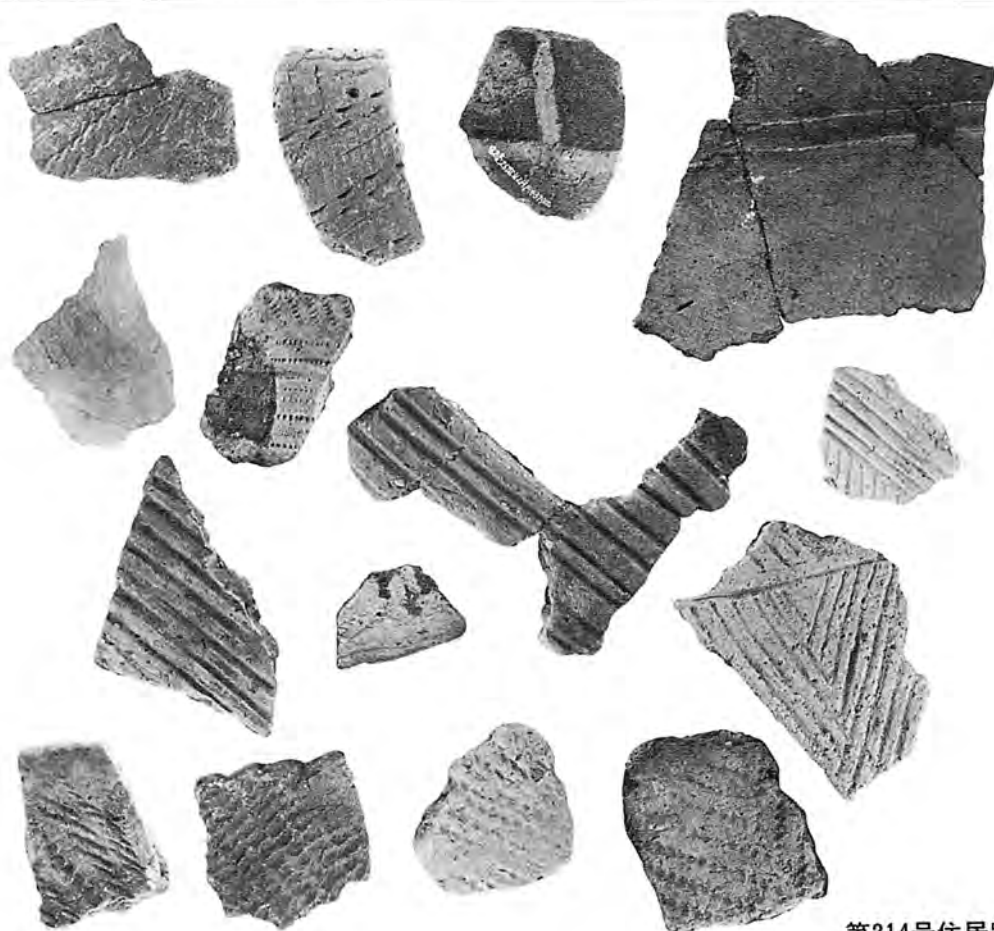


第312号住居跡

遺構内出土土器



第313号住居跡



第314号住居跡

遺構内出土土器

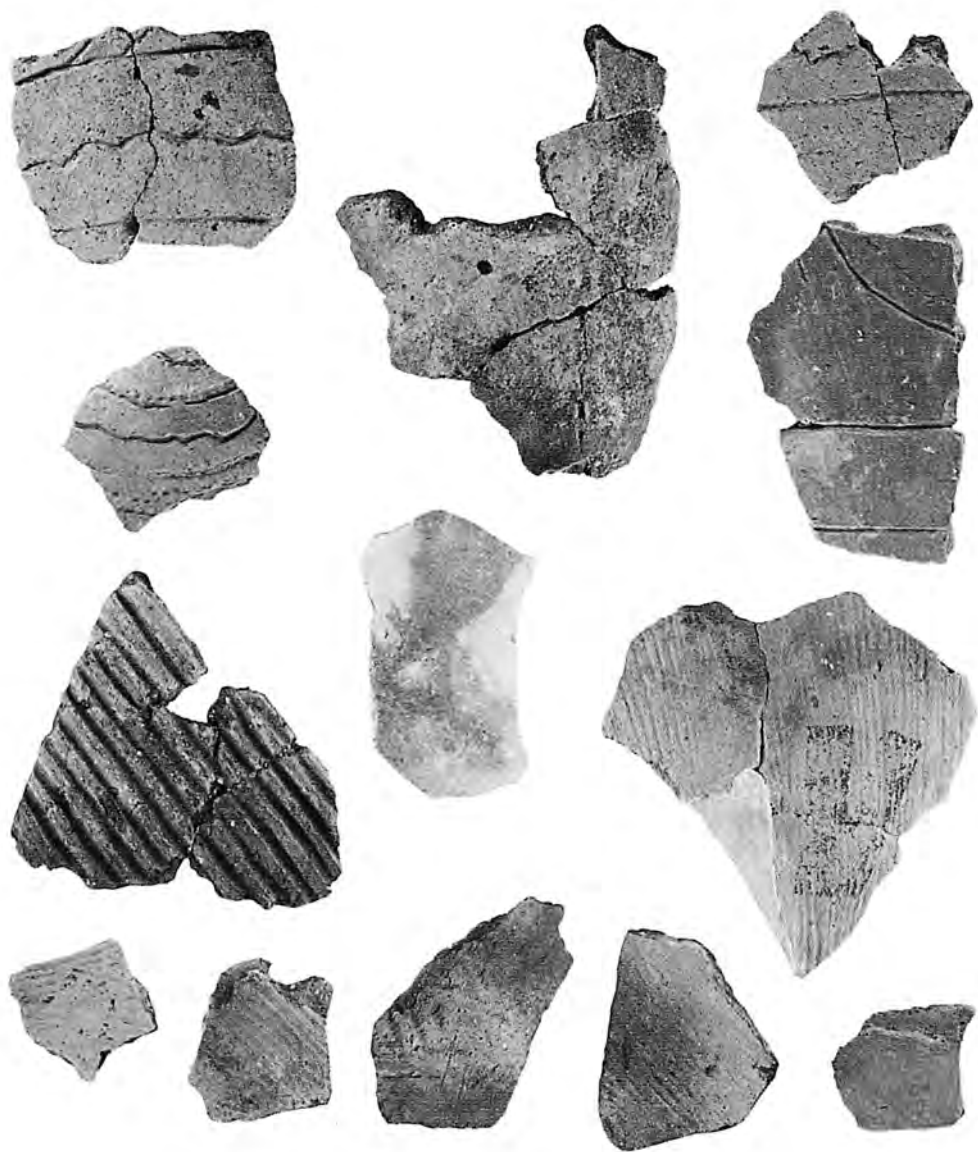


第314号住居跡



第315号住居跡

遺構内出土土器

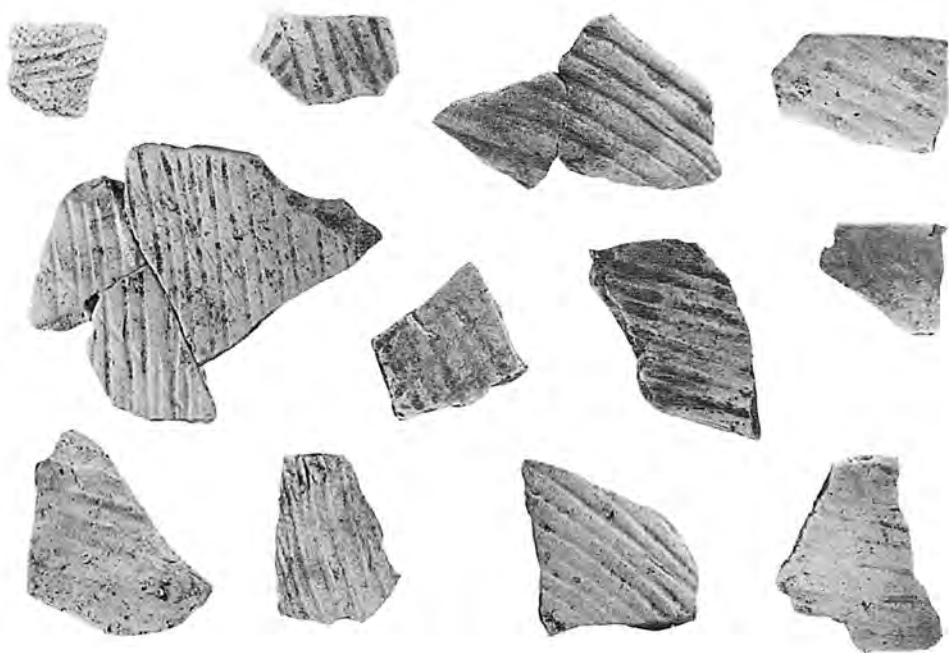


第315号住居跡

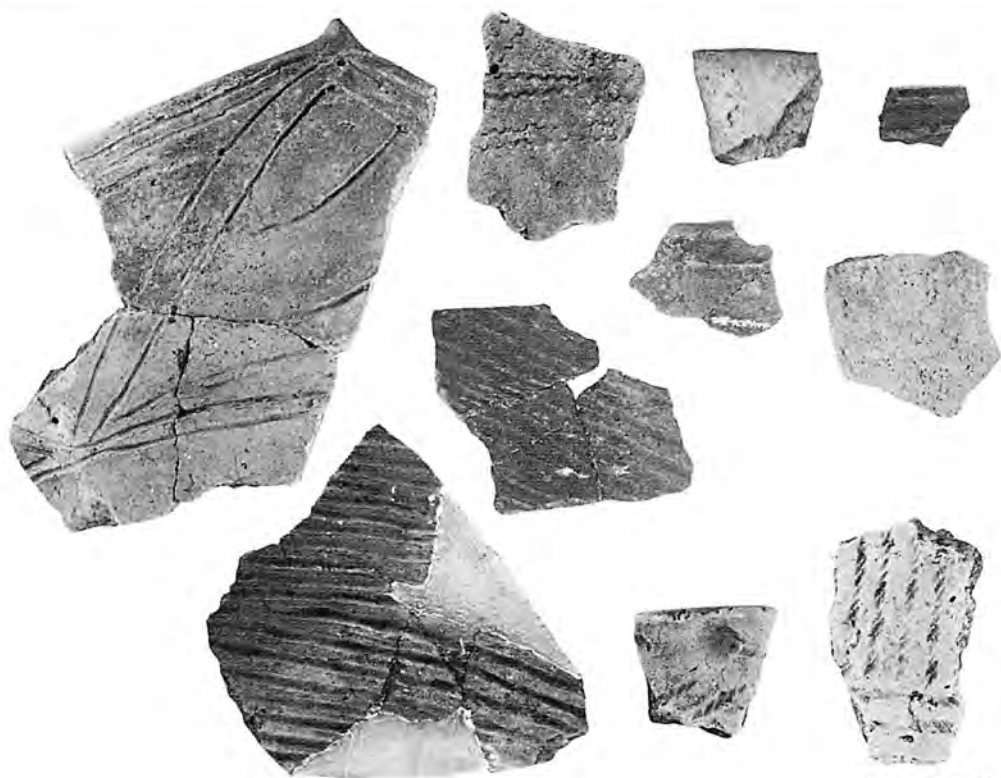


第316号住居跡

遺構内出土土器

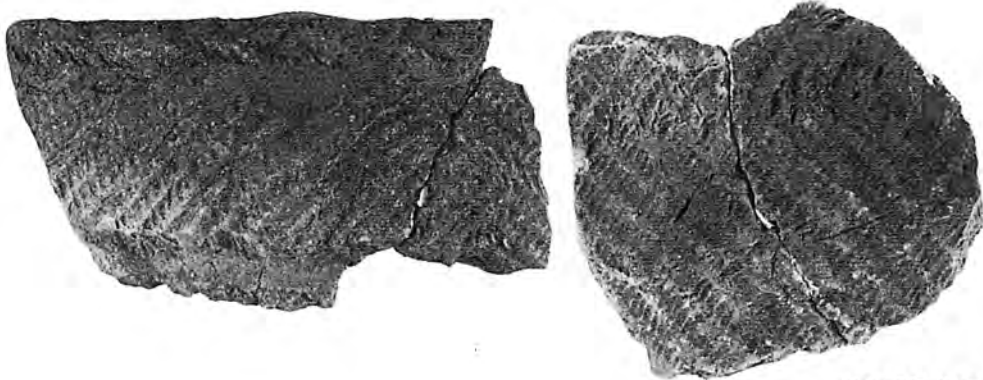


第316号住居跡



第317号住居跡

遺構内出土土器

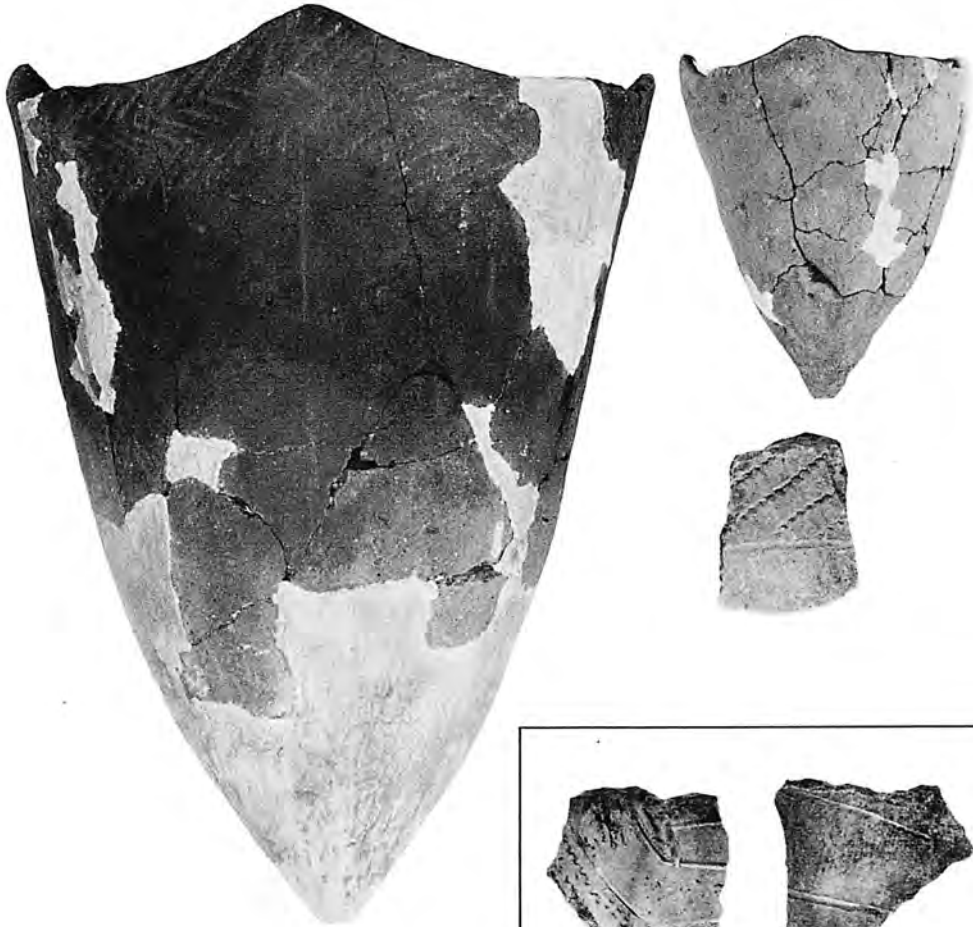


第317号住居跡



第404号住居跡

遺構内出土土器



第328号土坑

第331号土坑

第337~339号土坑



遺構内出土土器



第337～339号土坑

遺構内出土土器

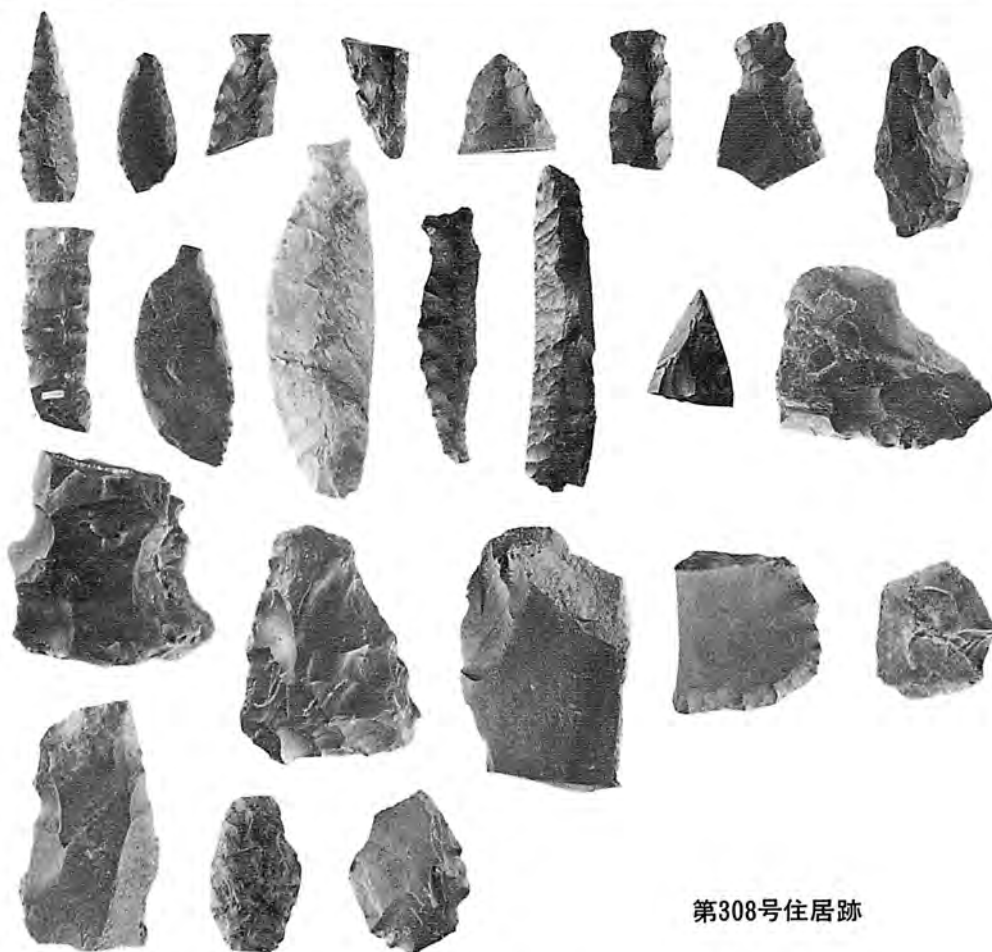


第338・339号土坑

遺構内出土土器



第307号住居跡



第308号住居跡

遺構内出土石器



第308号住居跡



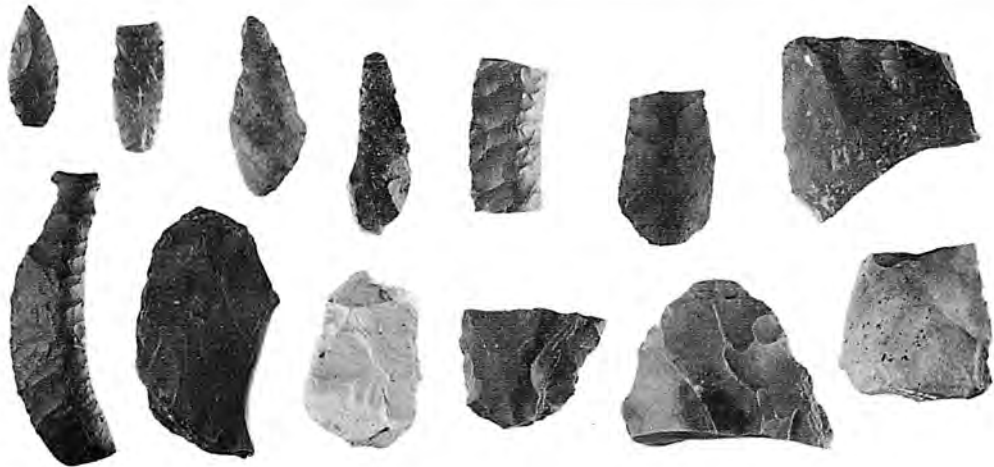
第309号住居跡



第310号住居跡



第314号住居跡



遺構内出土石器



第315号住居跡



第317号住居跡

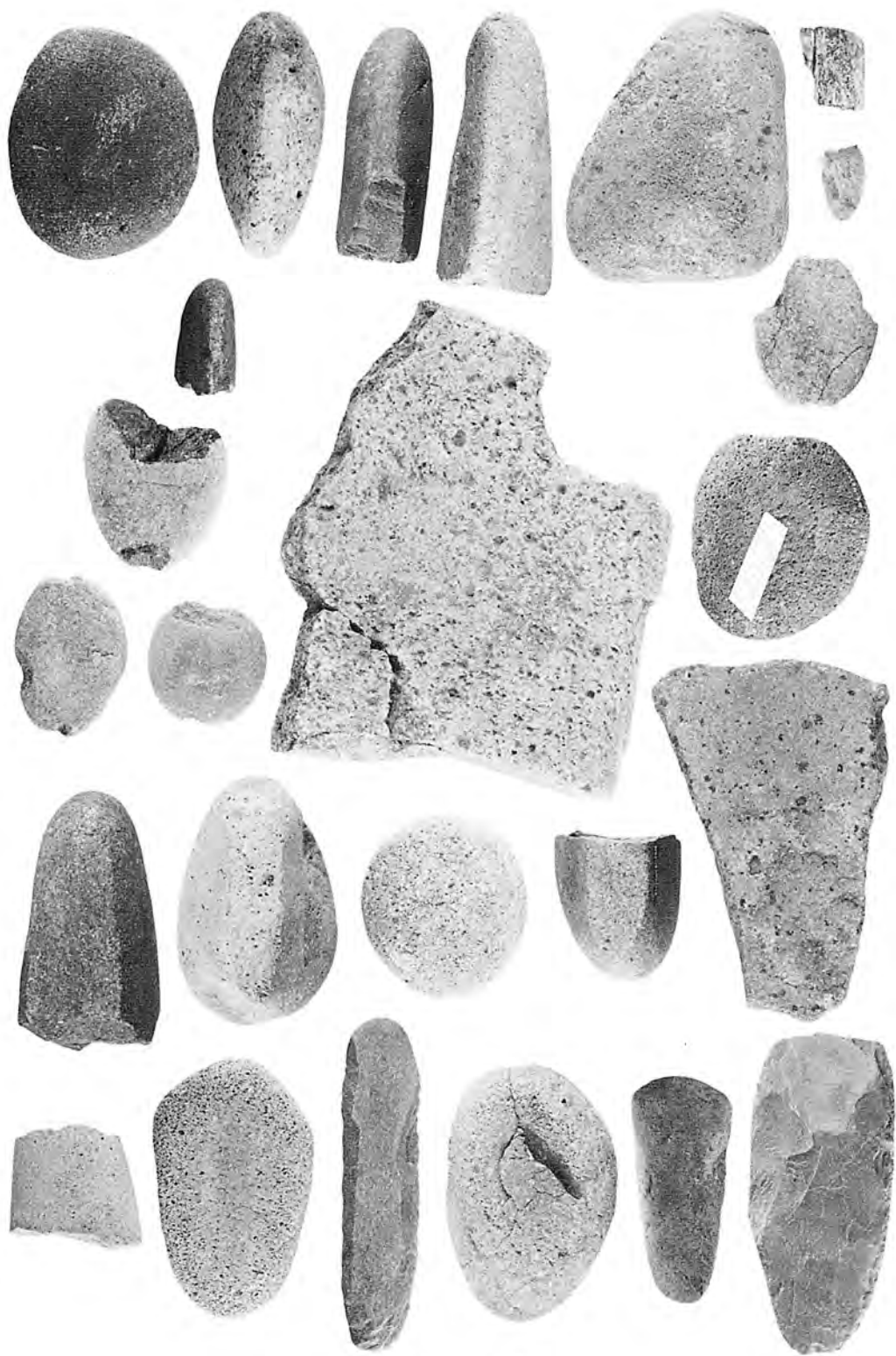


第421号住居跡

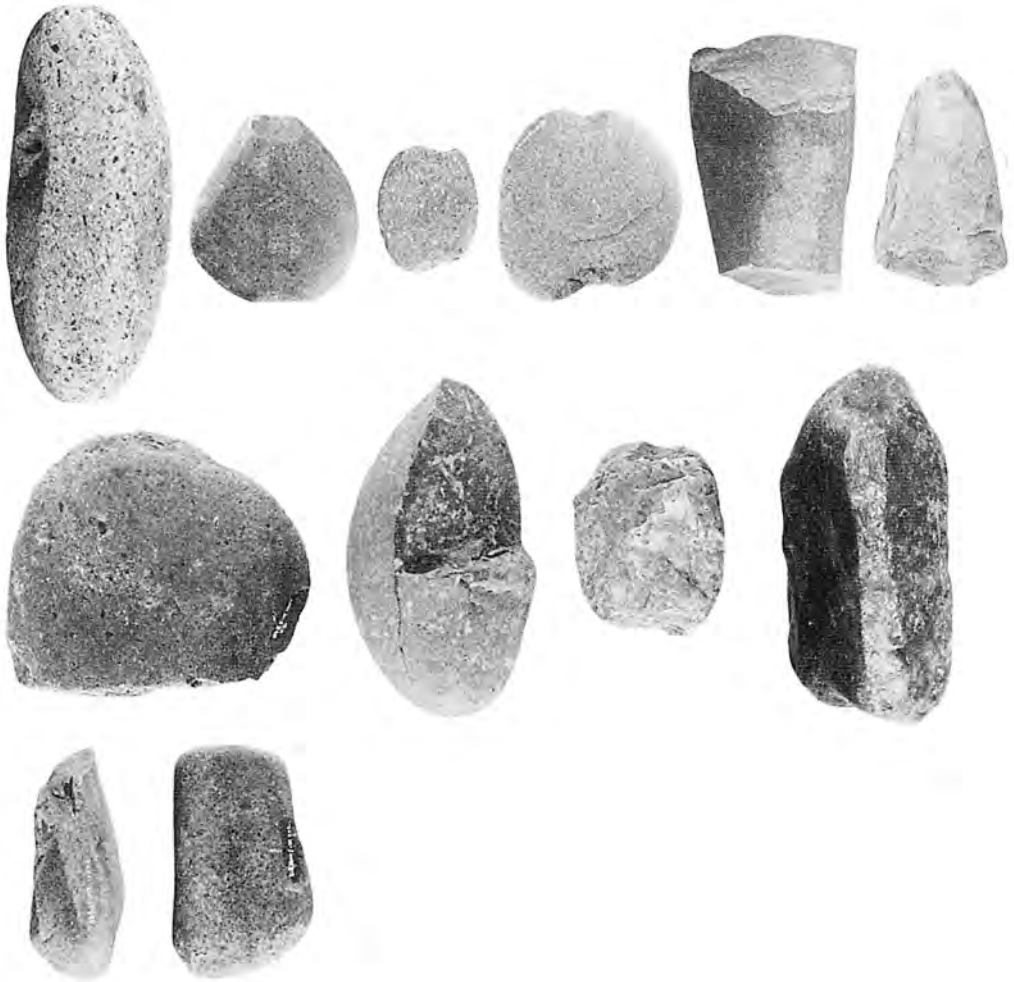


第316号住居跡

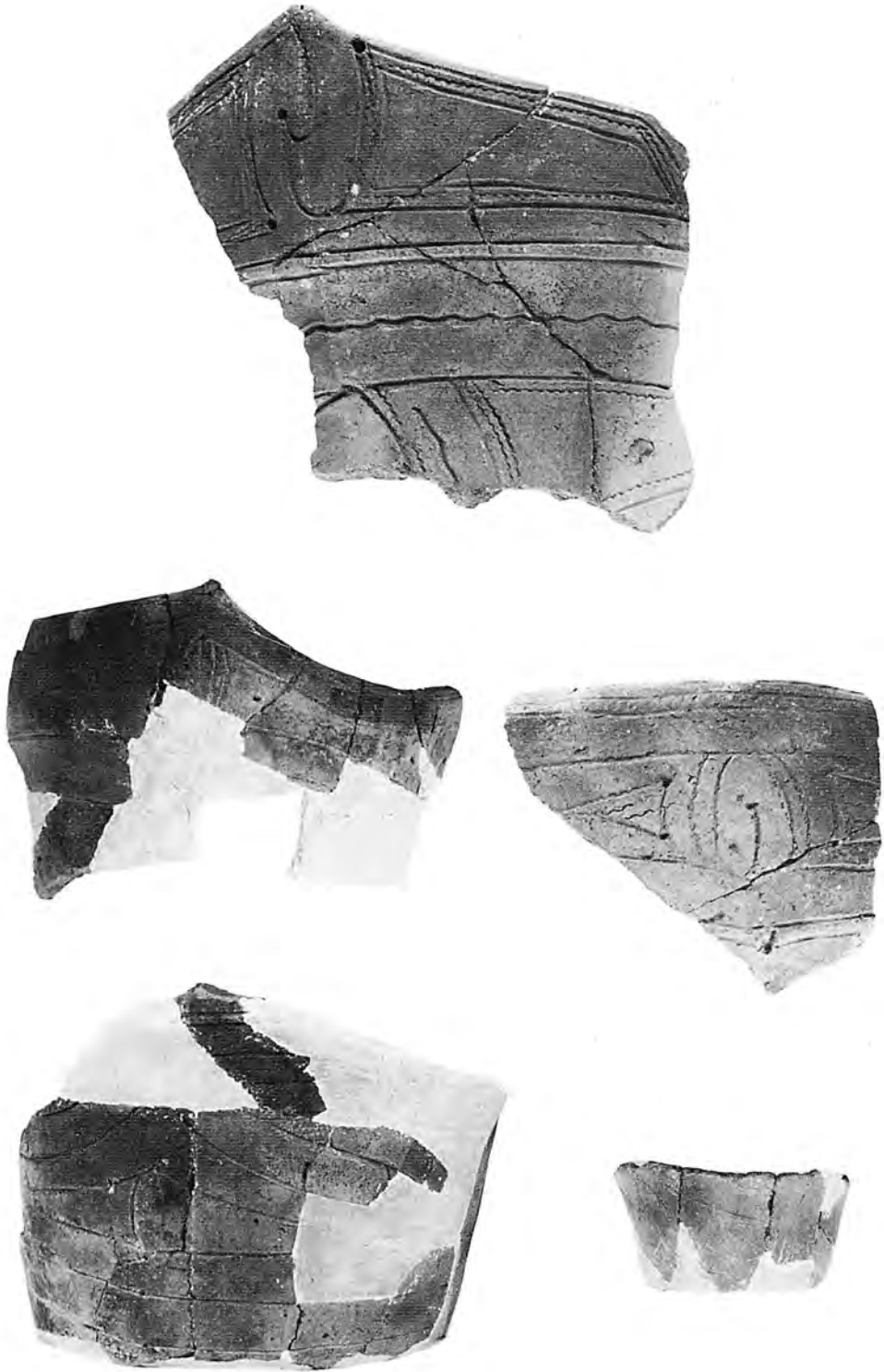
遺構内出土石器



遺構内出土石器



遺構内出土石器



遺構外出土第V群土器



第311号住居跡



第311号住居跡



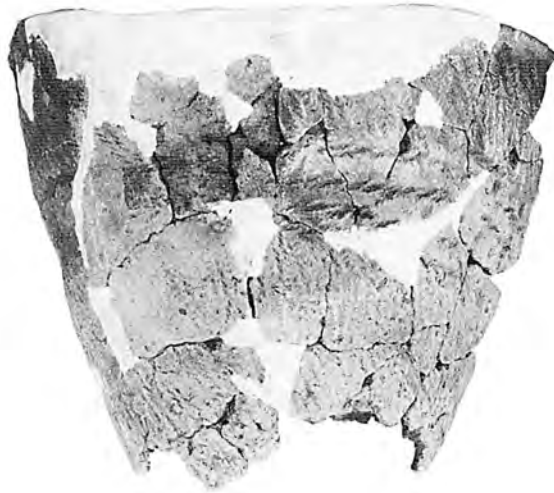
第317号住居跡

第X群土器



第X群土器

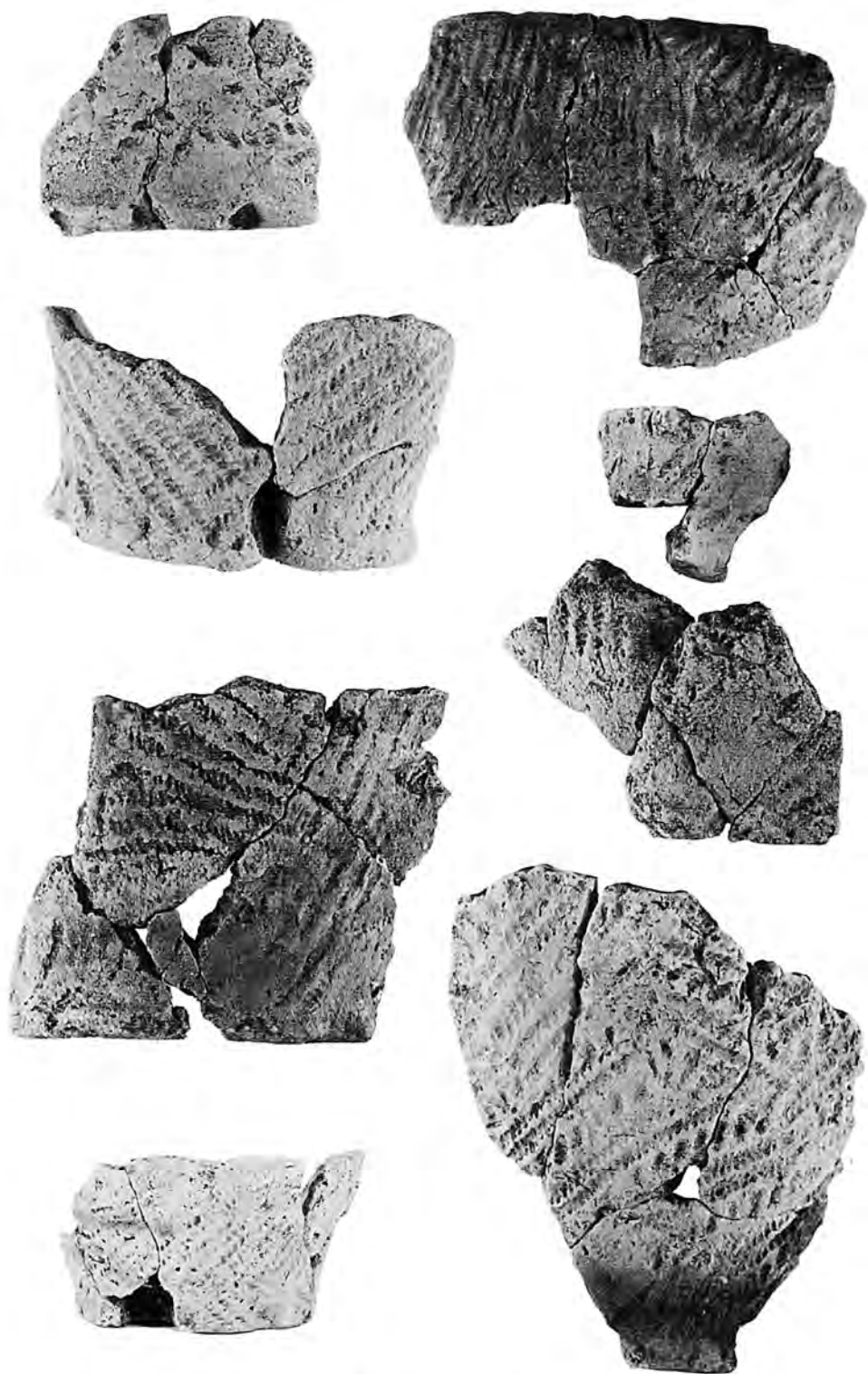
第317号住居跡



遺構外出土第 X 群土器



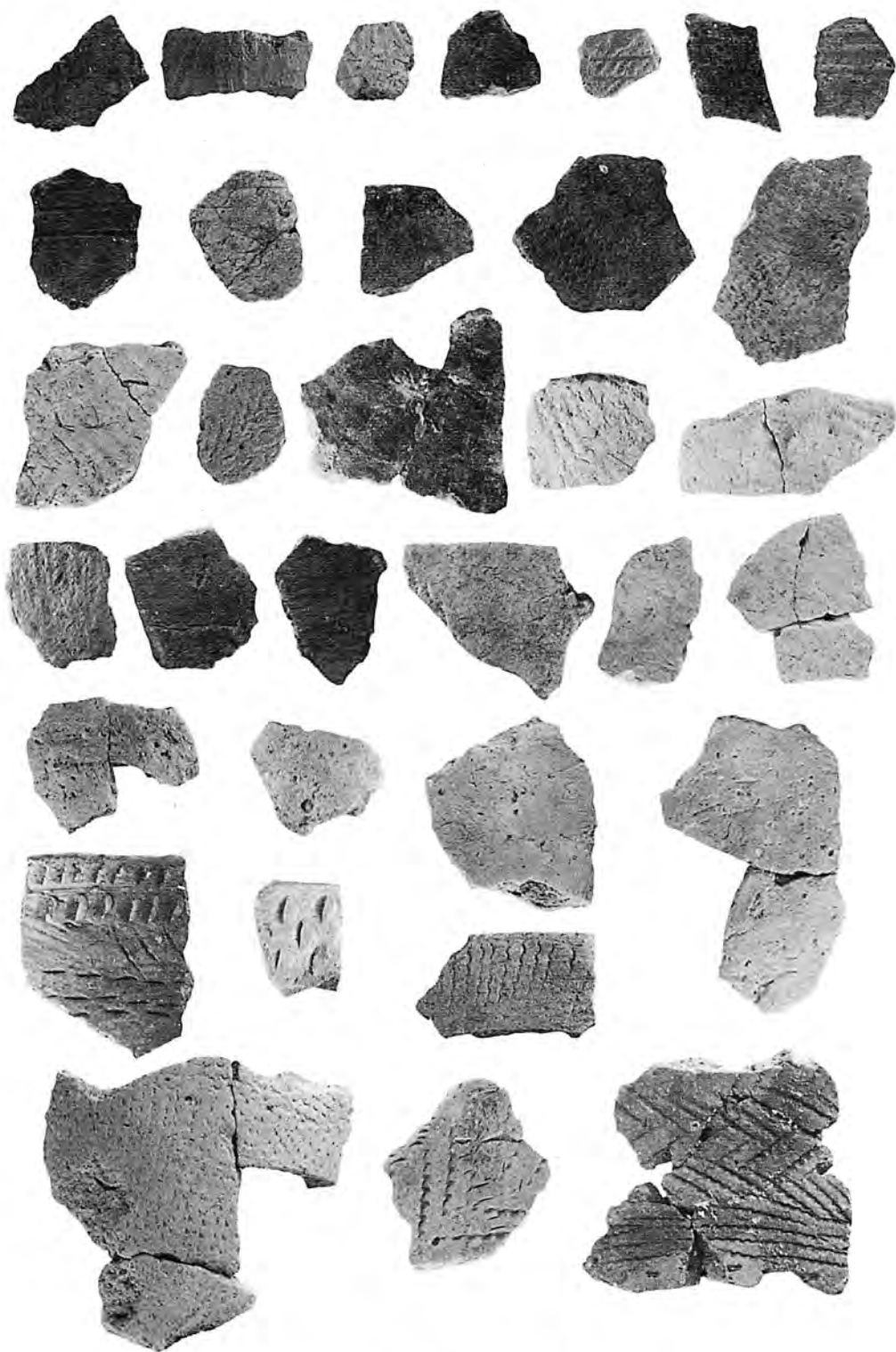
遺構外出土第V群土器



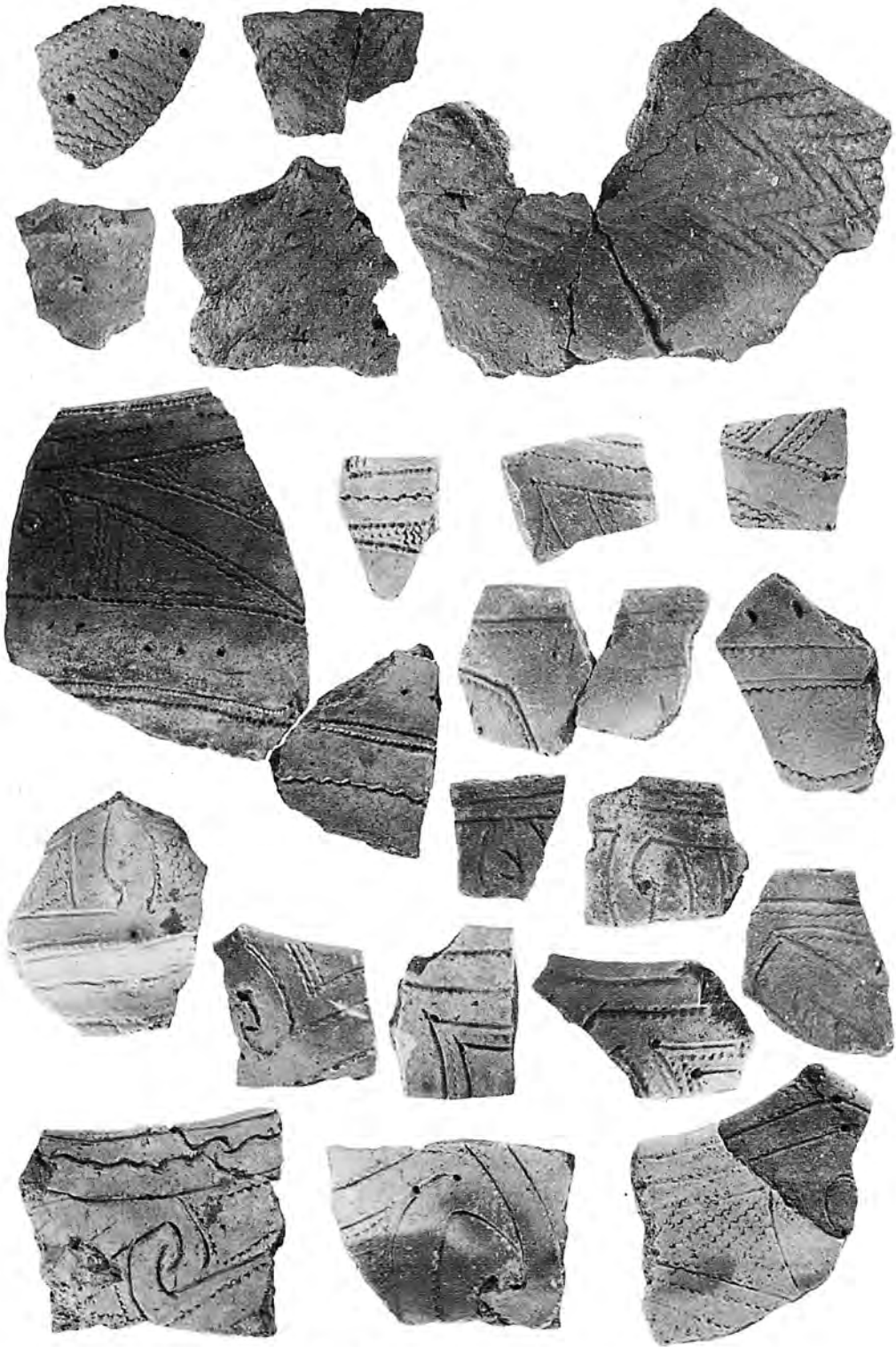
遺構外出土第X群土器



第311号住居跡
第Ⅳ・ⅩⅤ群土器



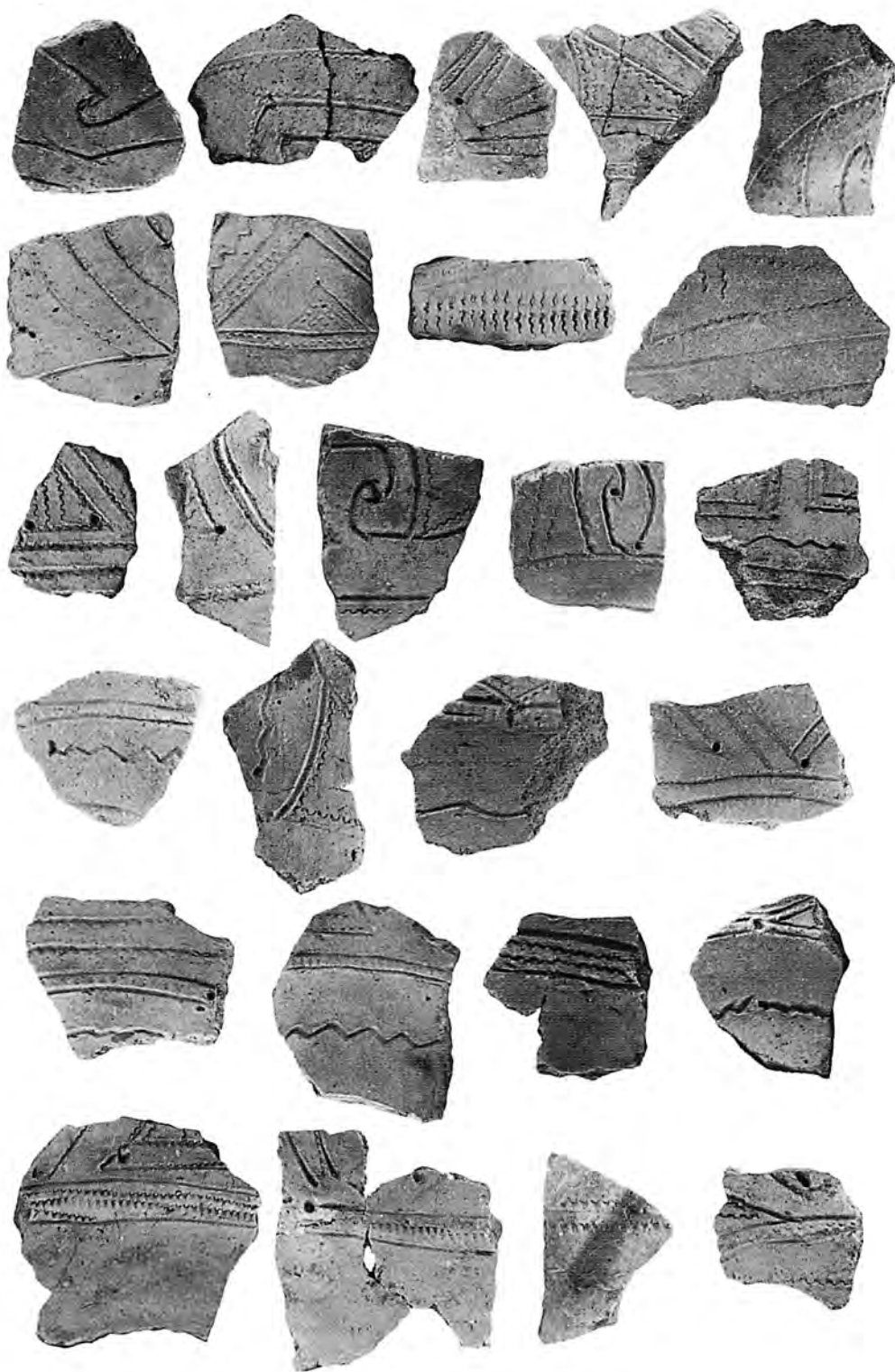
遺構外出土第 I・第 II 群土器



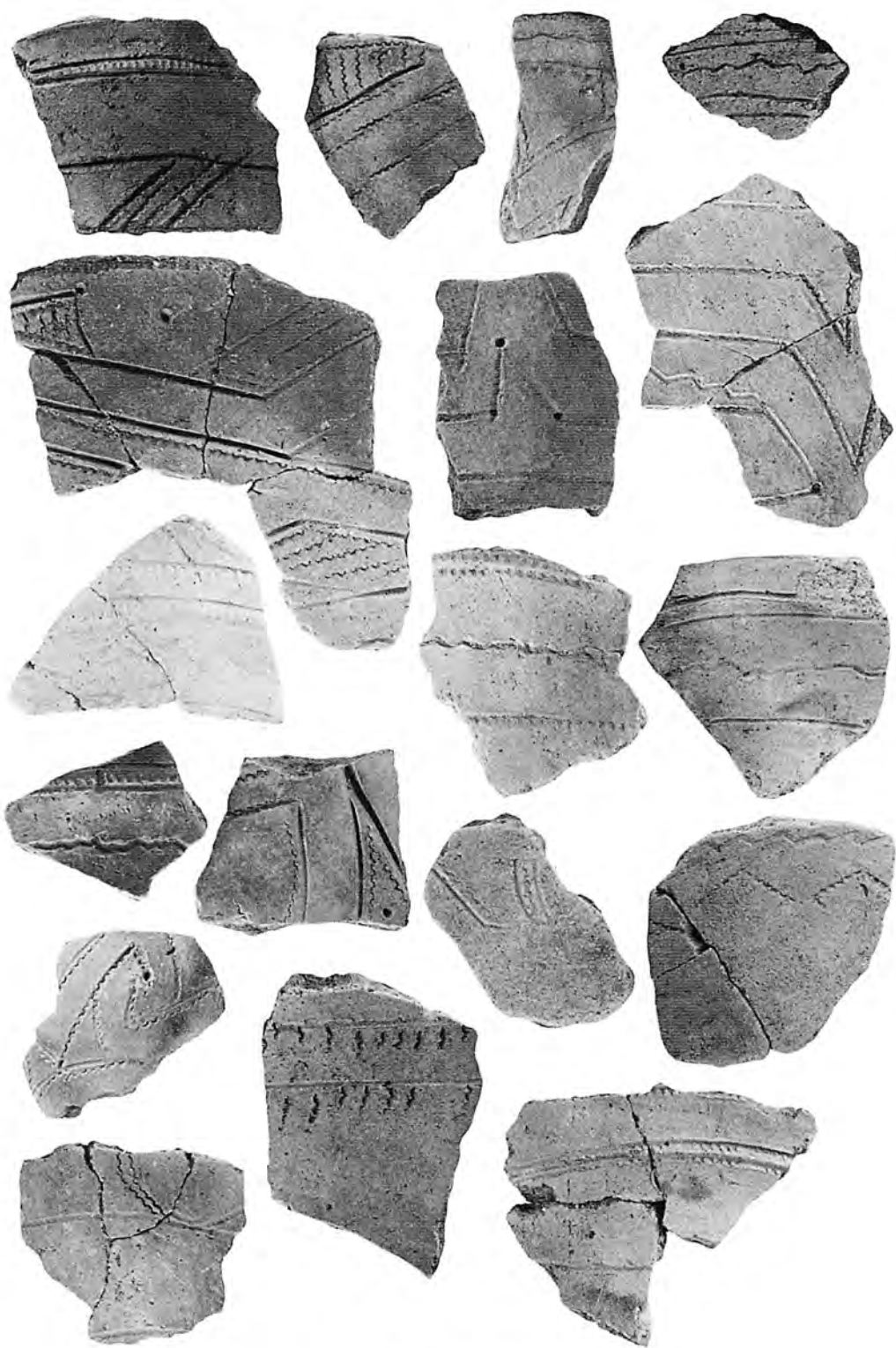
遺構外出土第Ⅱ～第Ⅴ群土器



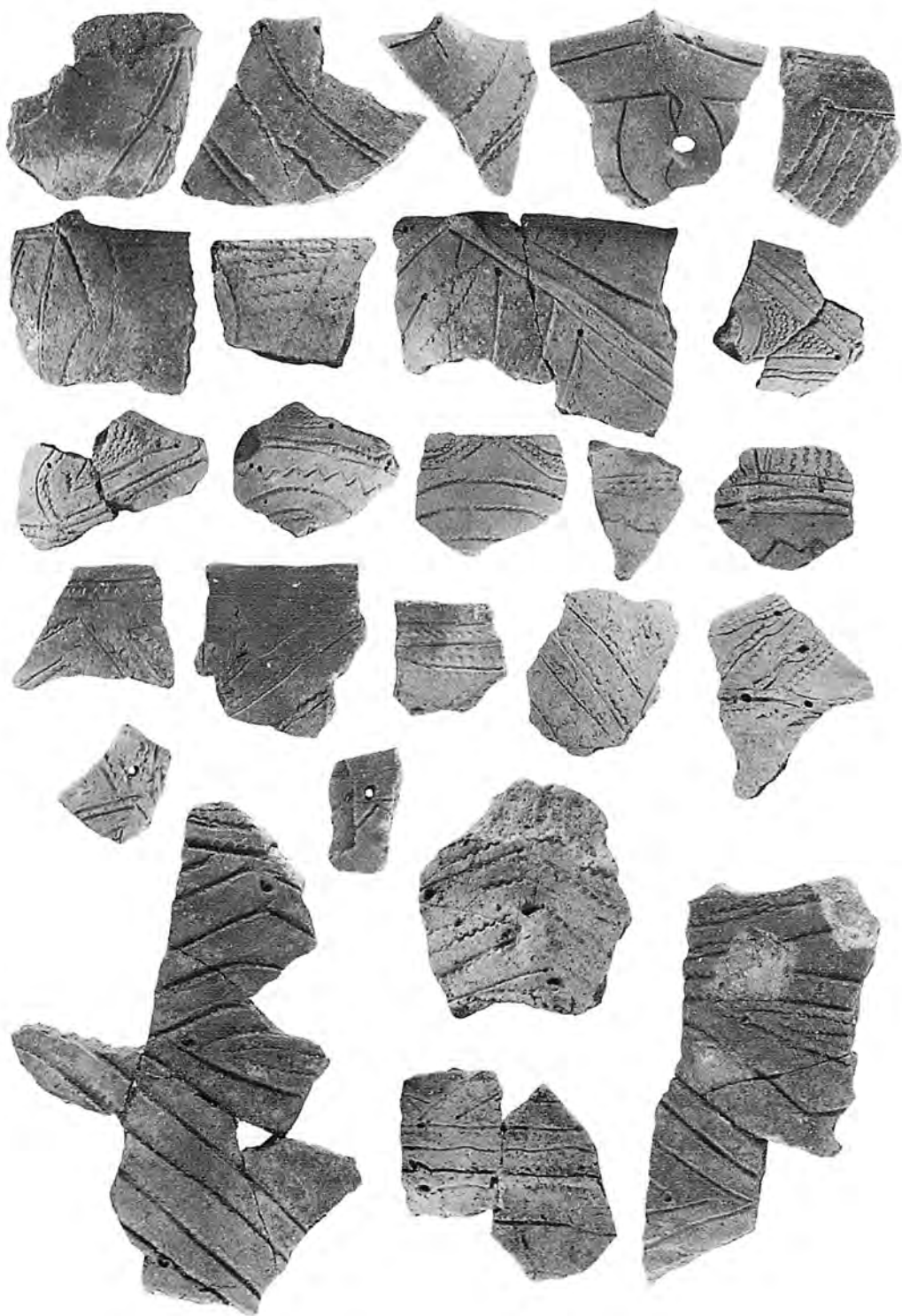
遺構外出土第V群土器



遺構外出土第V群土器



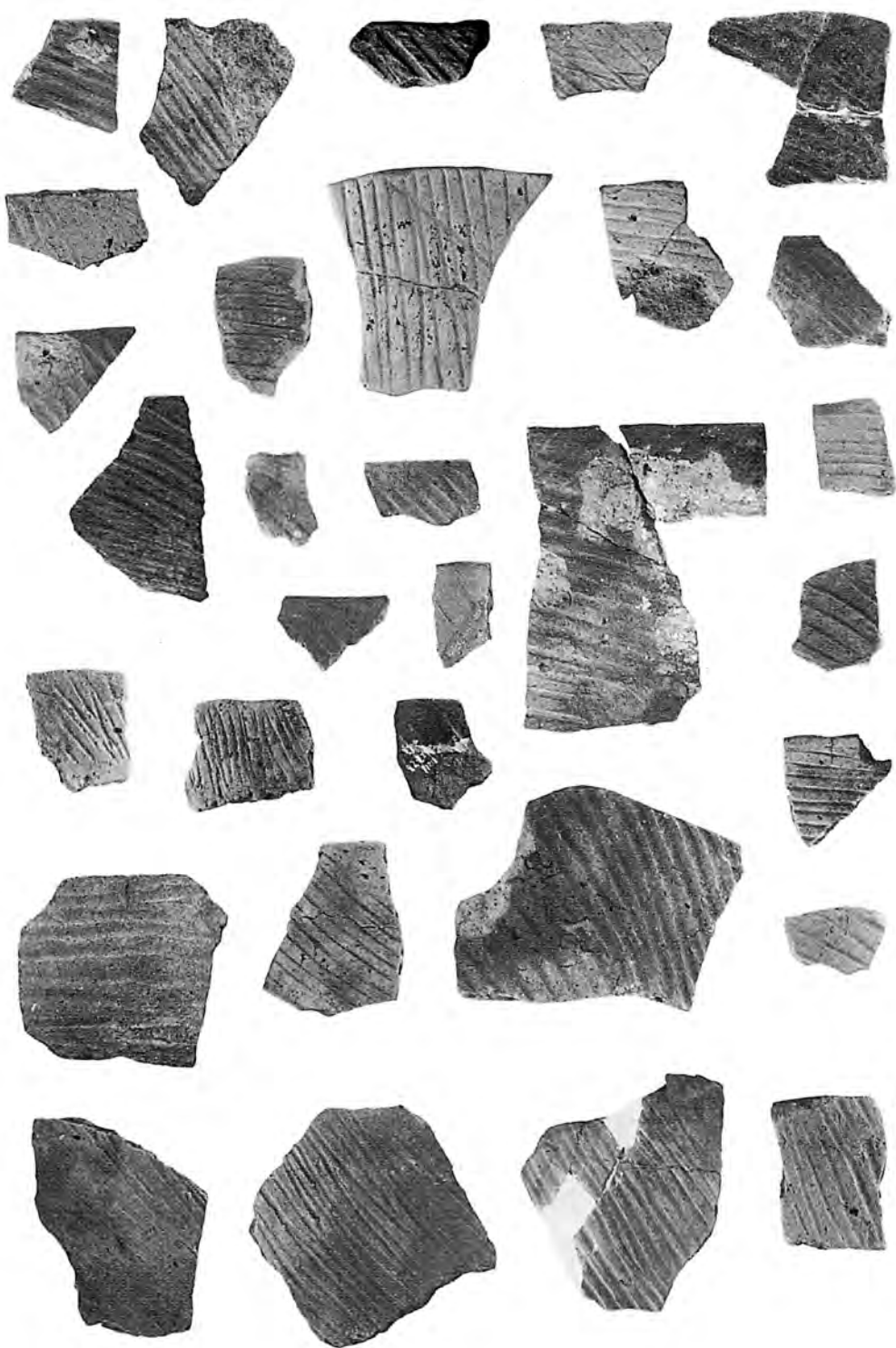
遺構外出土第V群土器



遺構外出土第V群土器



遺構外出土第V群土器



遺構外出土第VI群土器



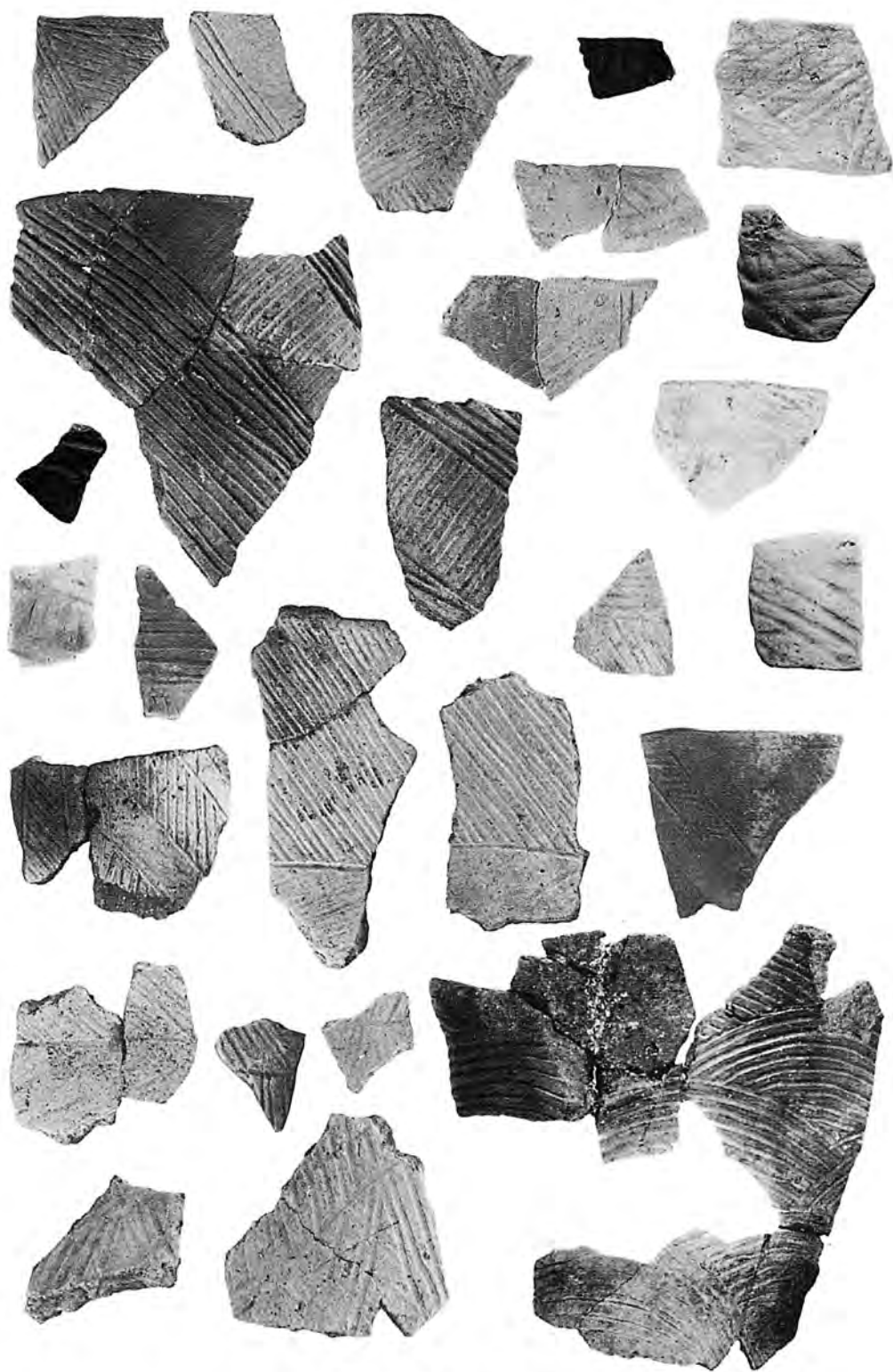
遺構外出土第VI群土器



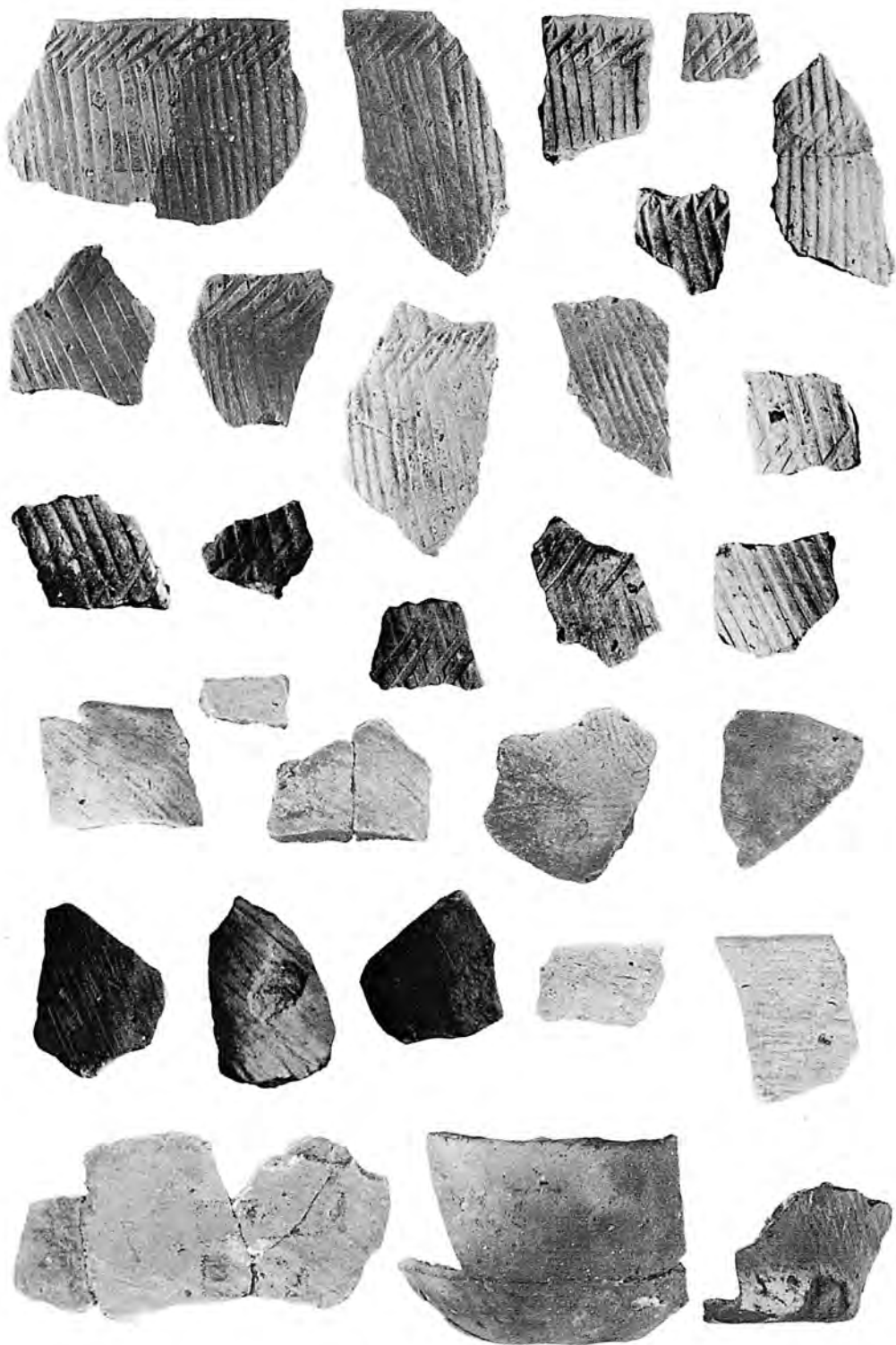
遺構外出土第VI群土器



遺構外出土第VI群土器



遺構外出土第VI群土器



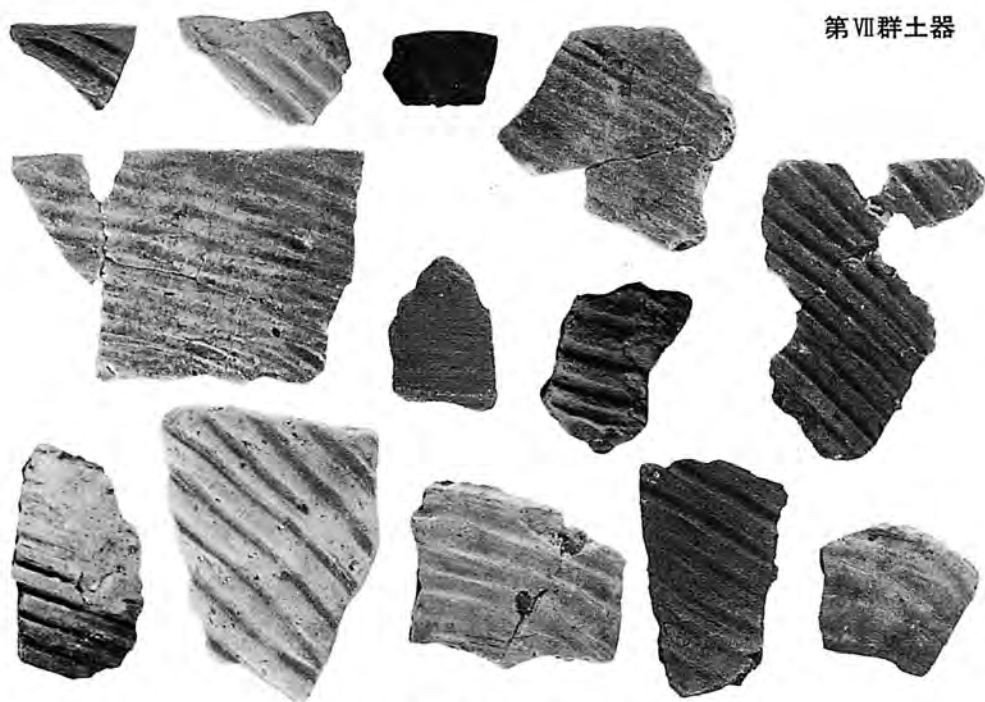
遺構外出土第VI群土器



遺構外出土第VI群土器

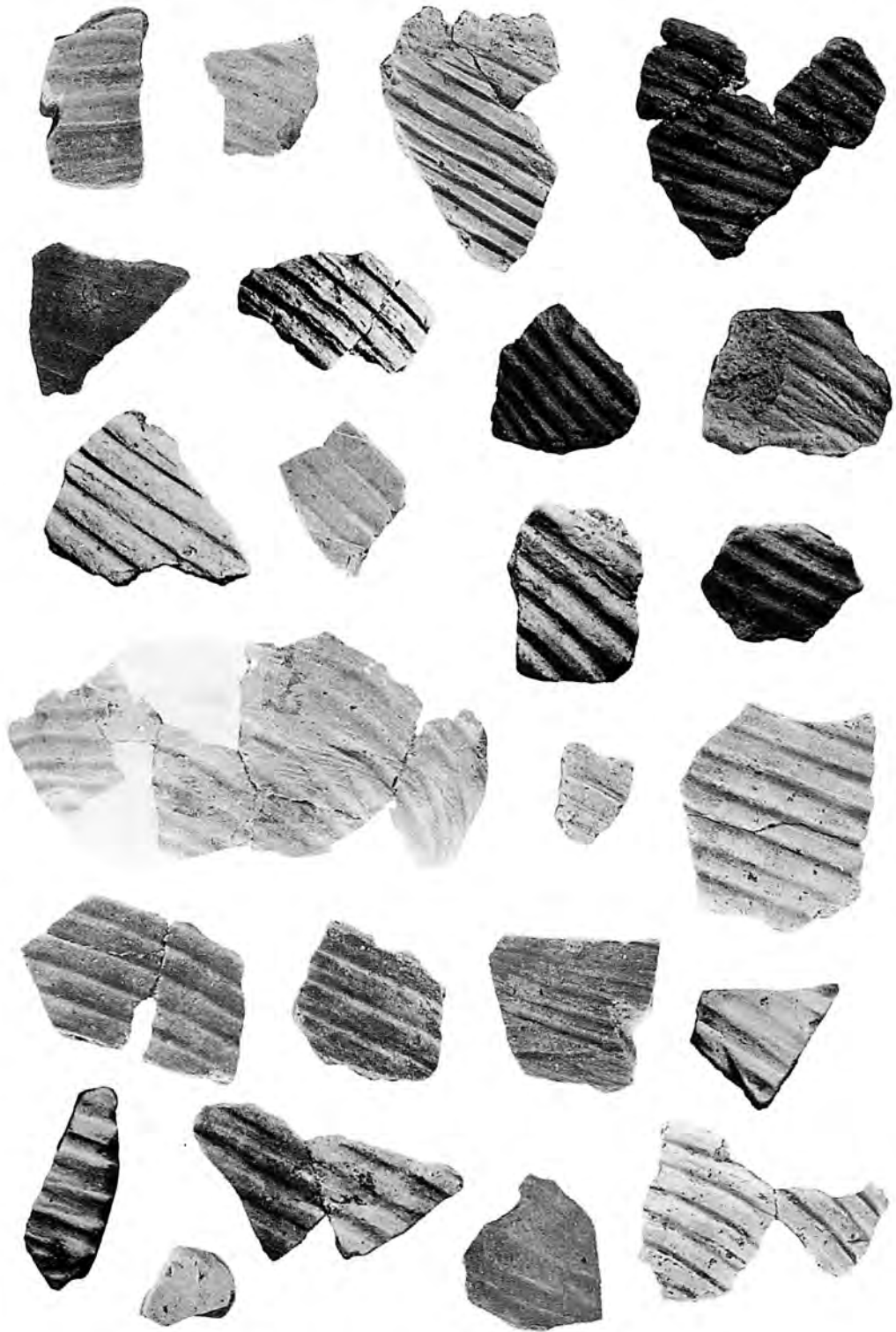


第VI群土器

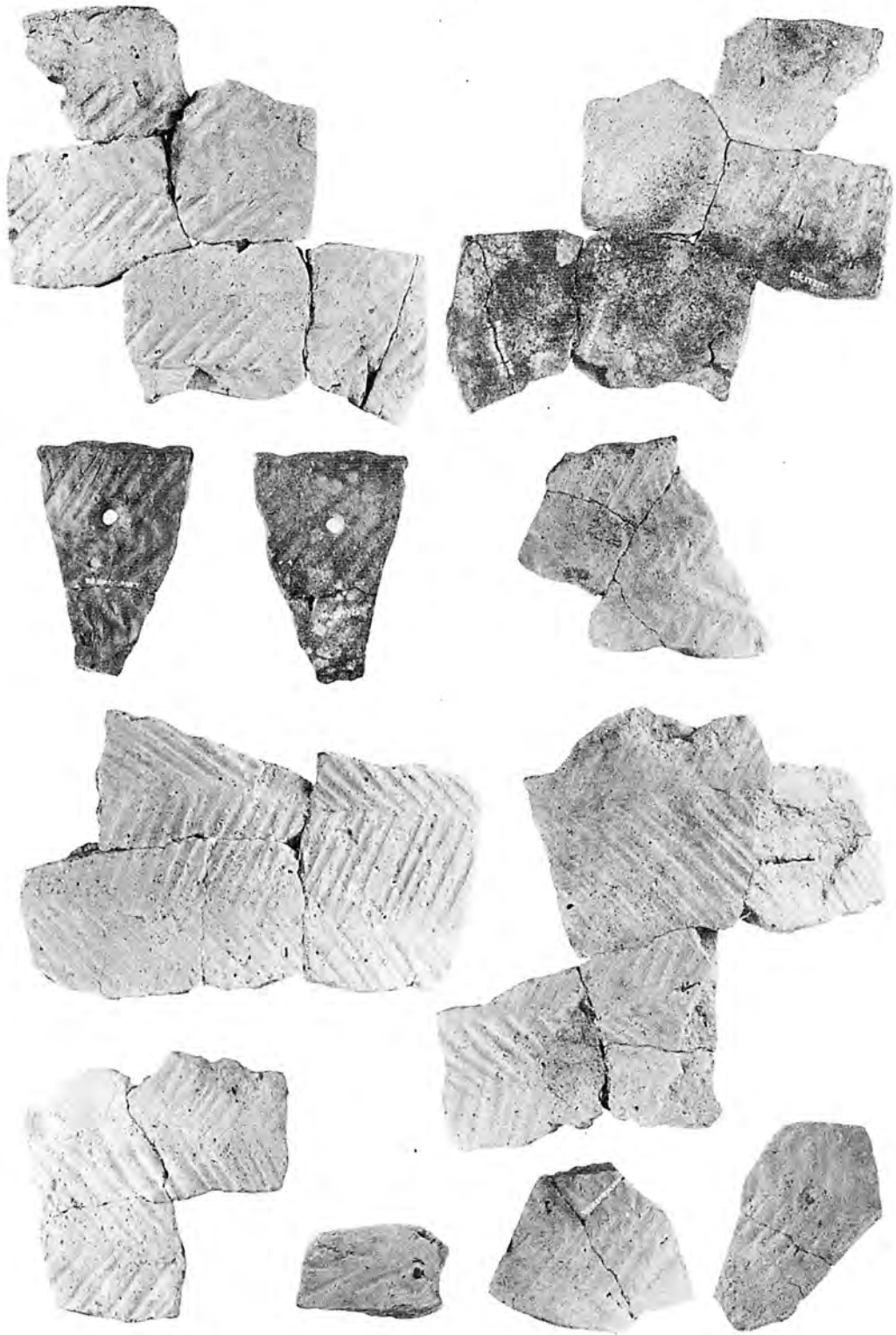


第VII群土器

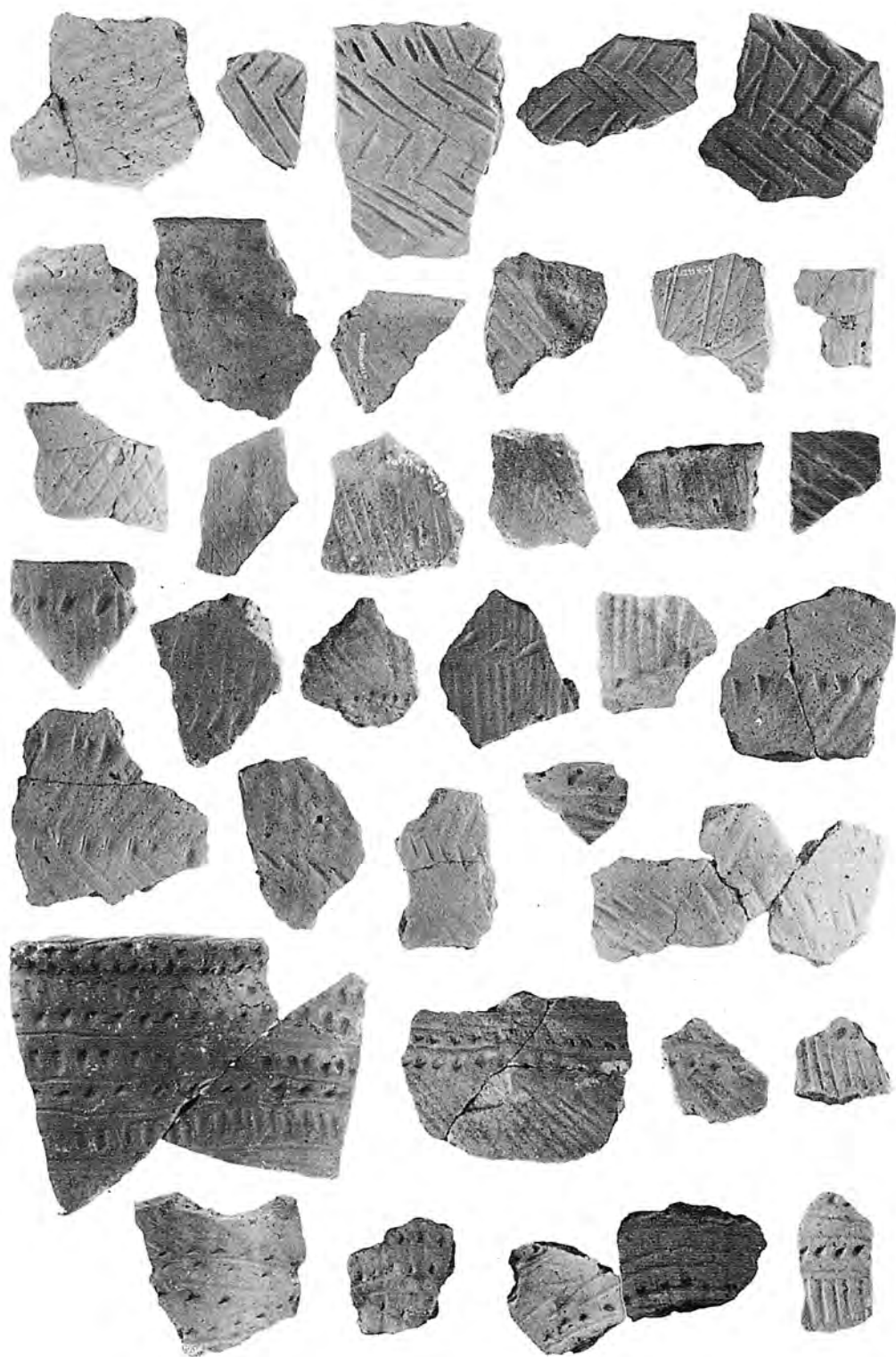
遺構外出土第VI・第VII群土器



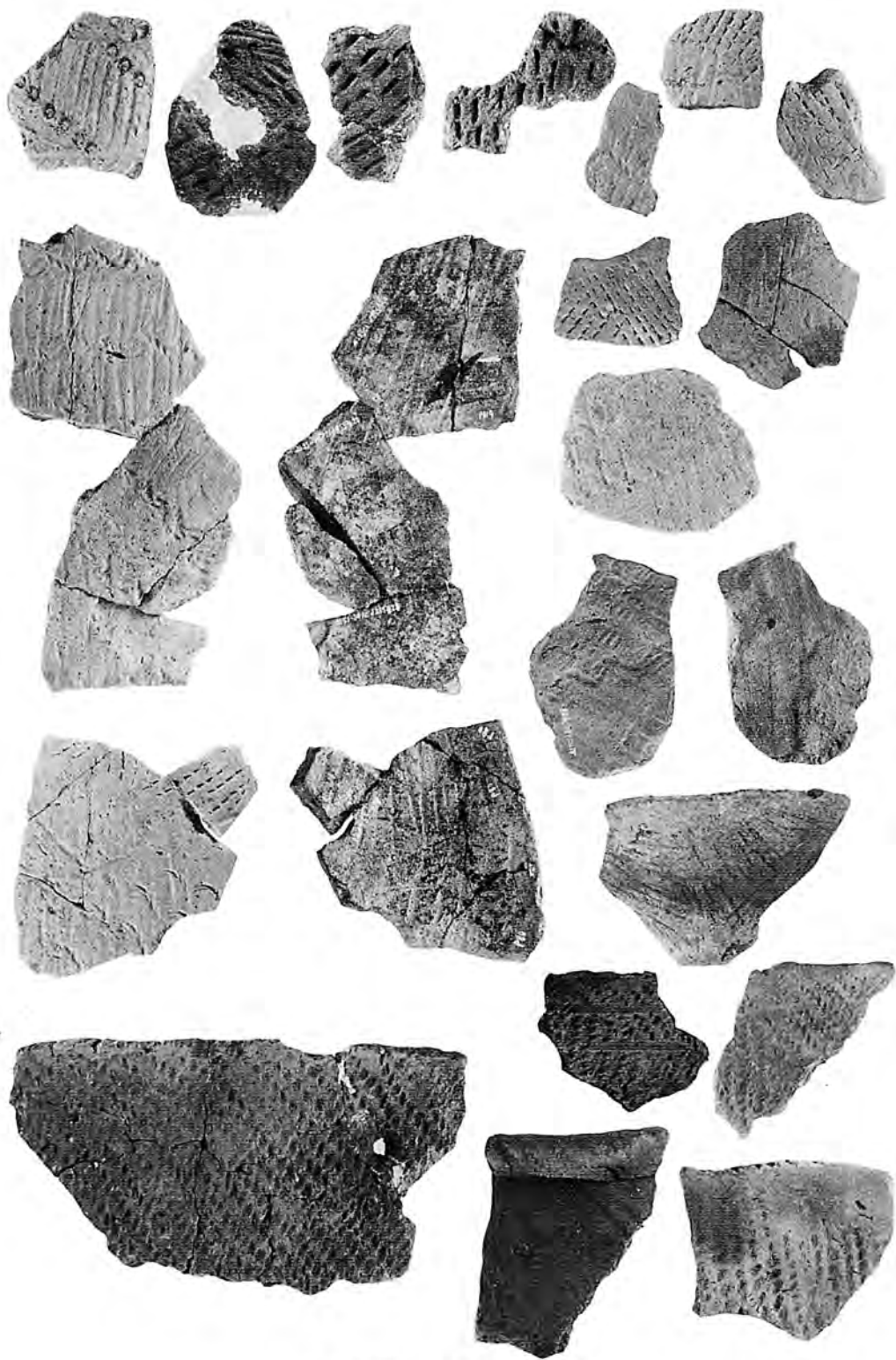
遺構外出土第Ⅶ群土器



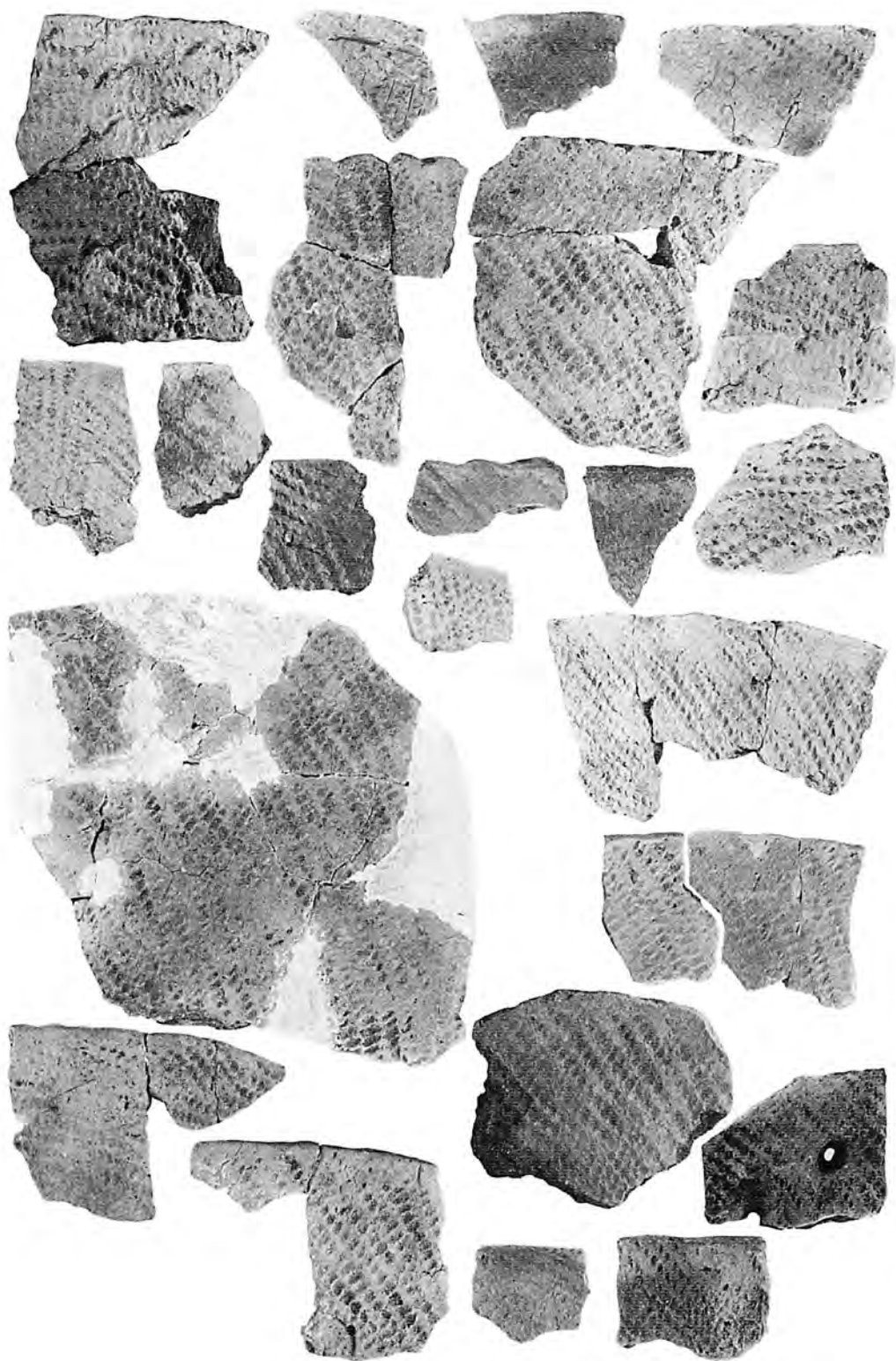
遺構外出土第Ⅷ群土器



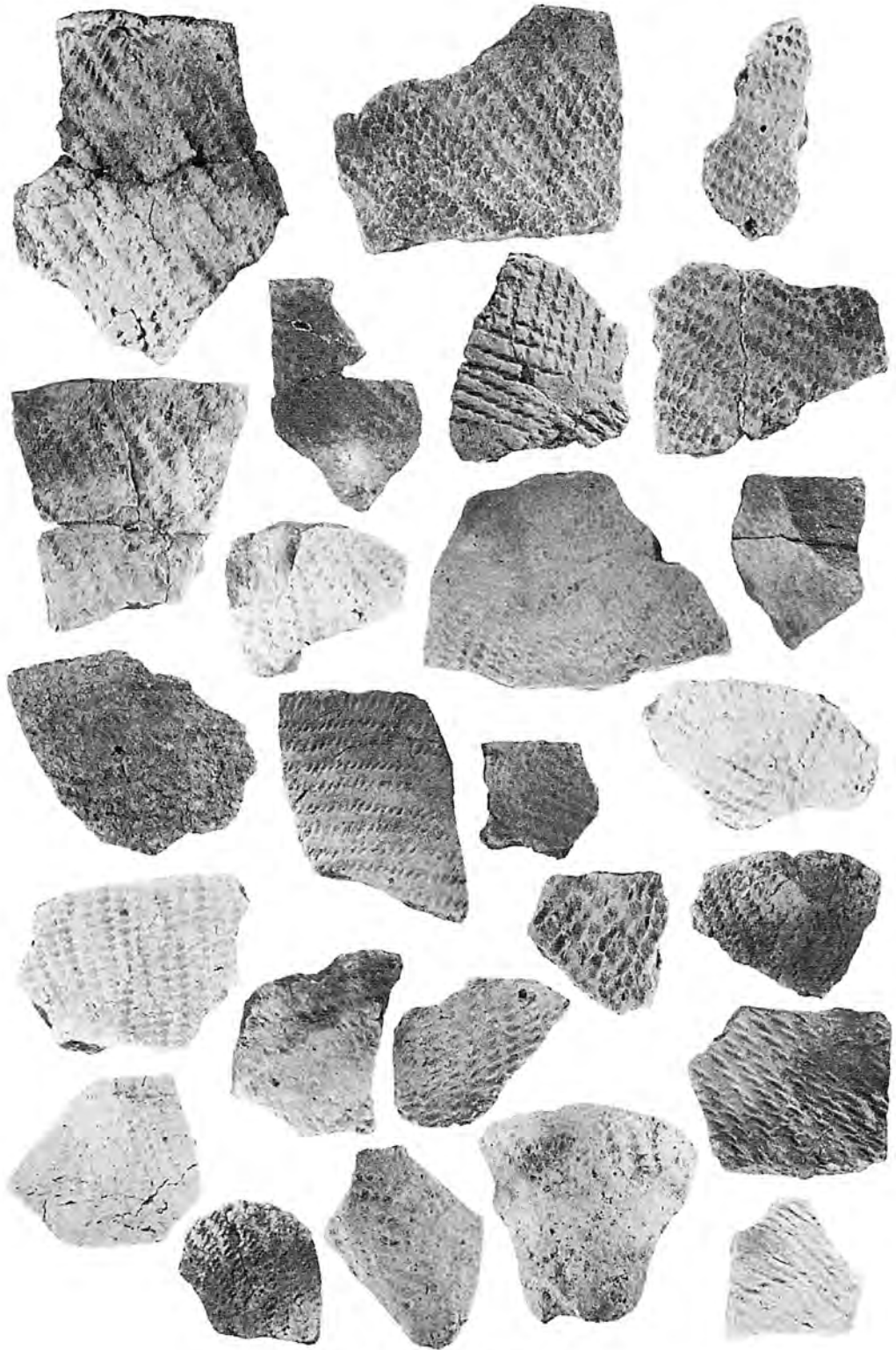
遺構外出土第Ⅷ群土器



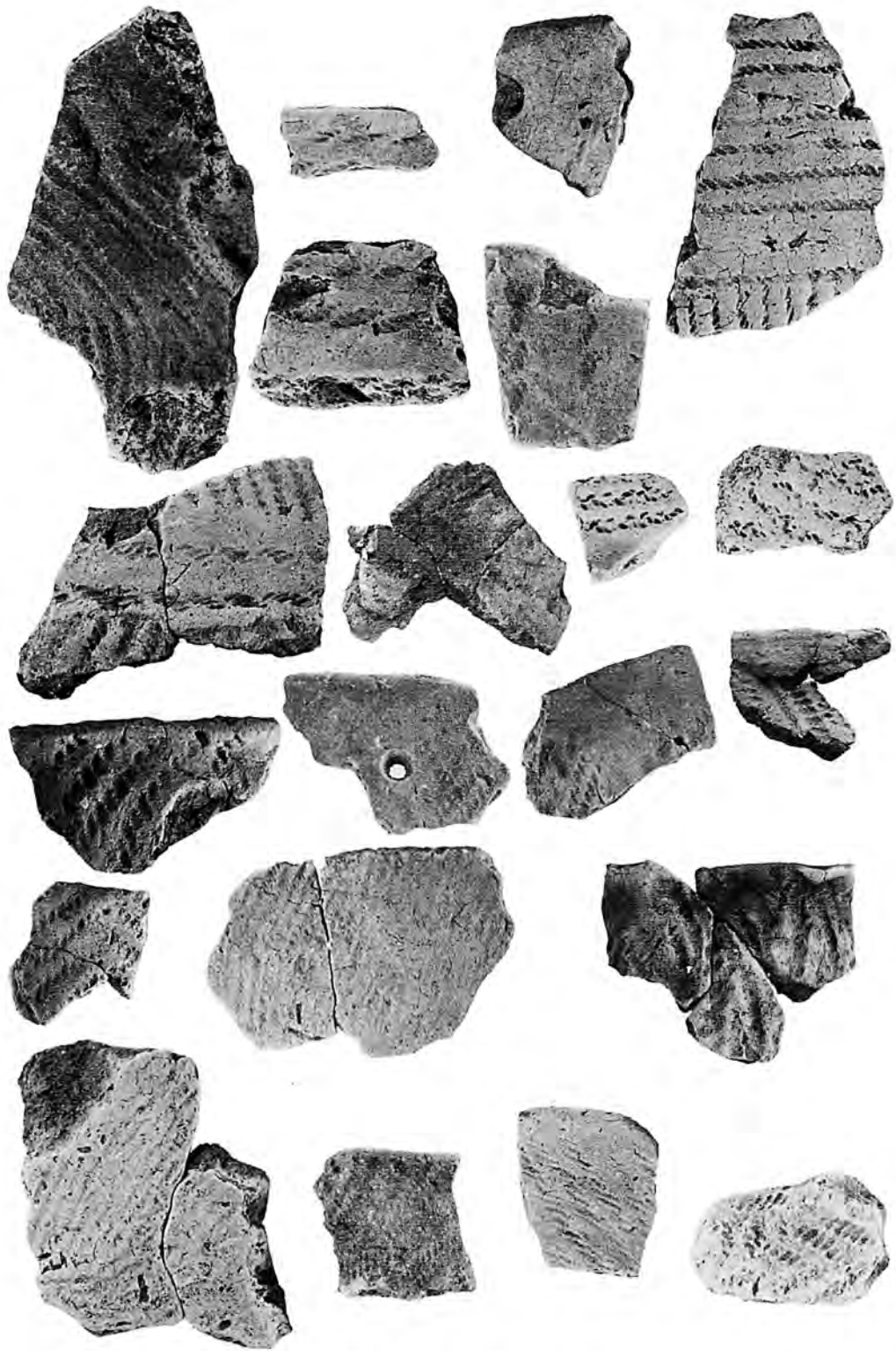
遺構外出土第Ⅷ・第Ⅸ群土器



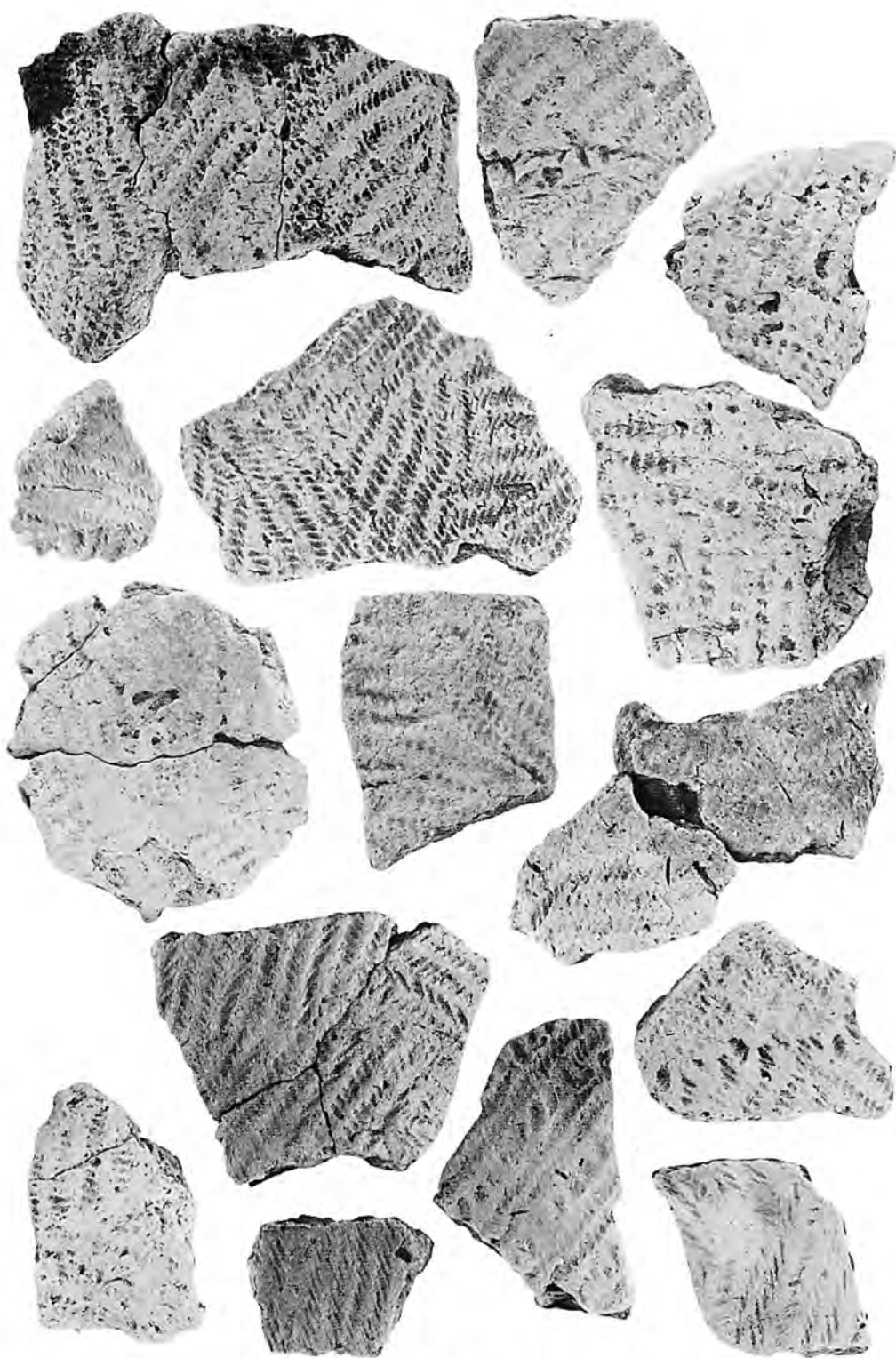
遺構外出土第Ⅸ群土器



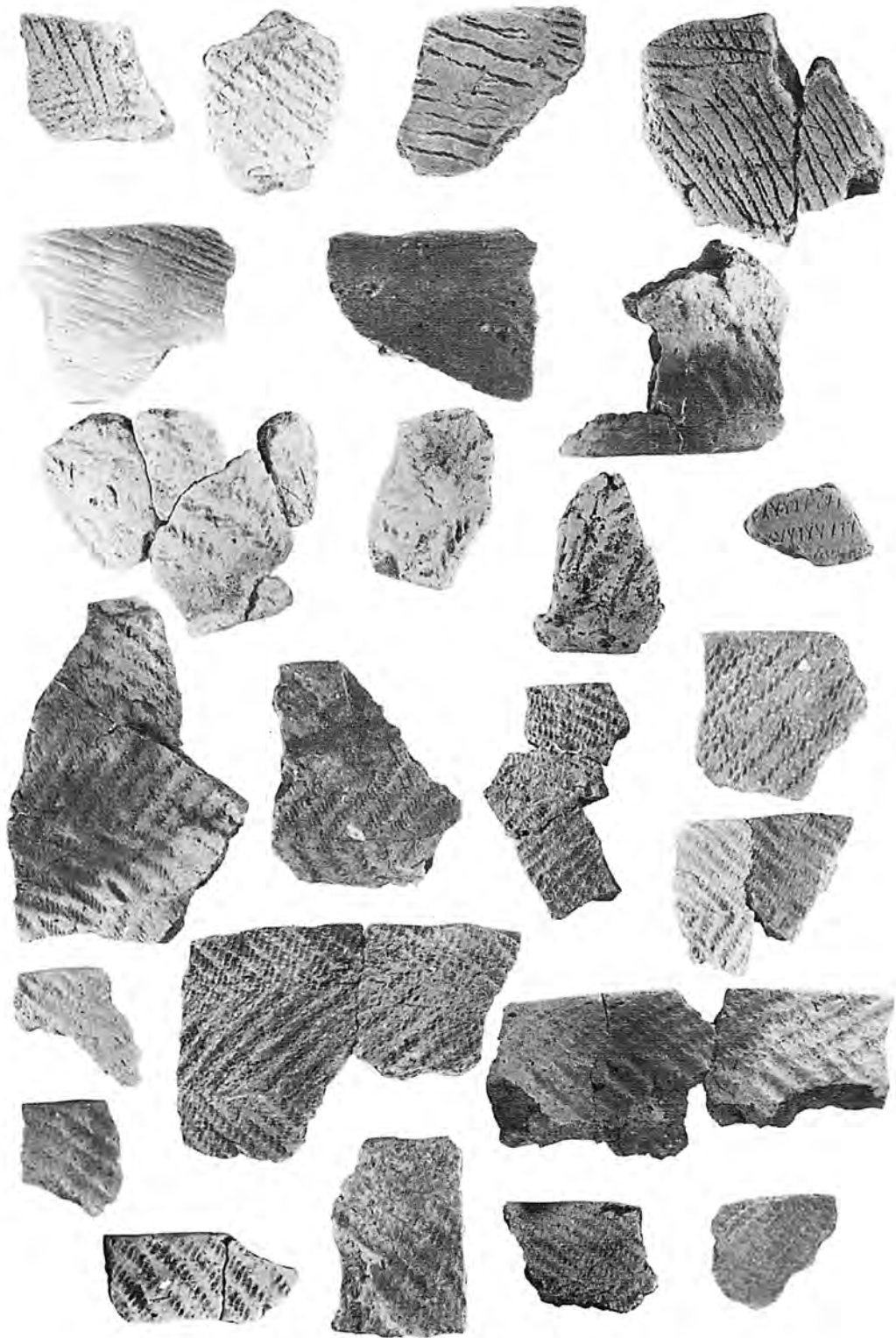
遺構外出土第Ⅸ群土器



遺構外出土第X群土器



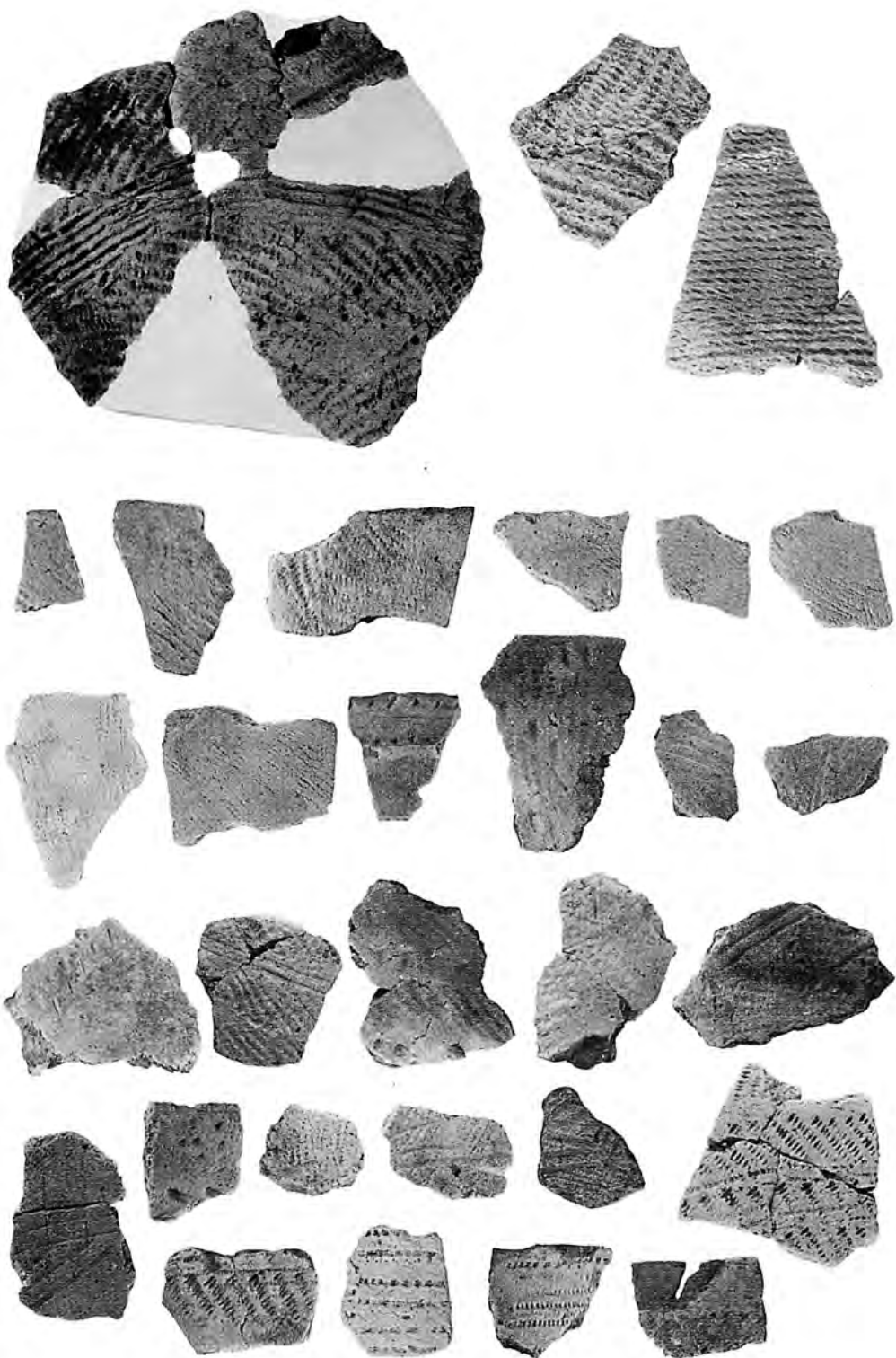
遺構外出土第X群土器



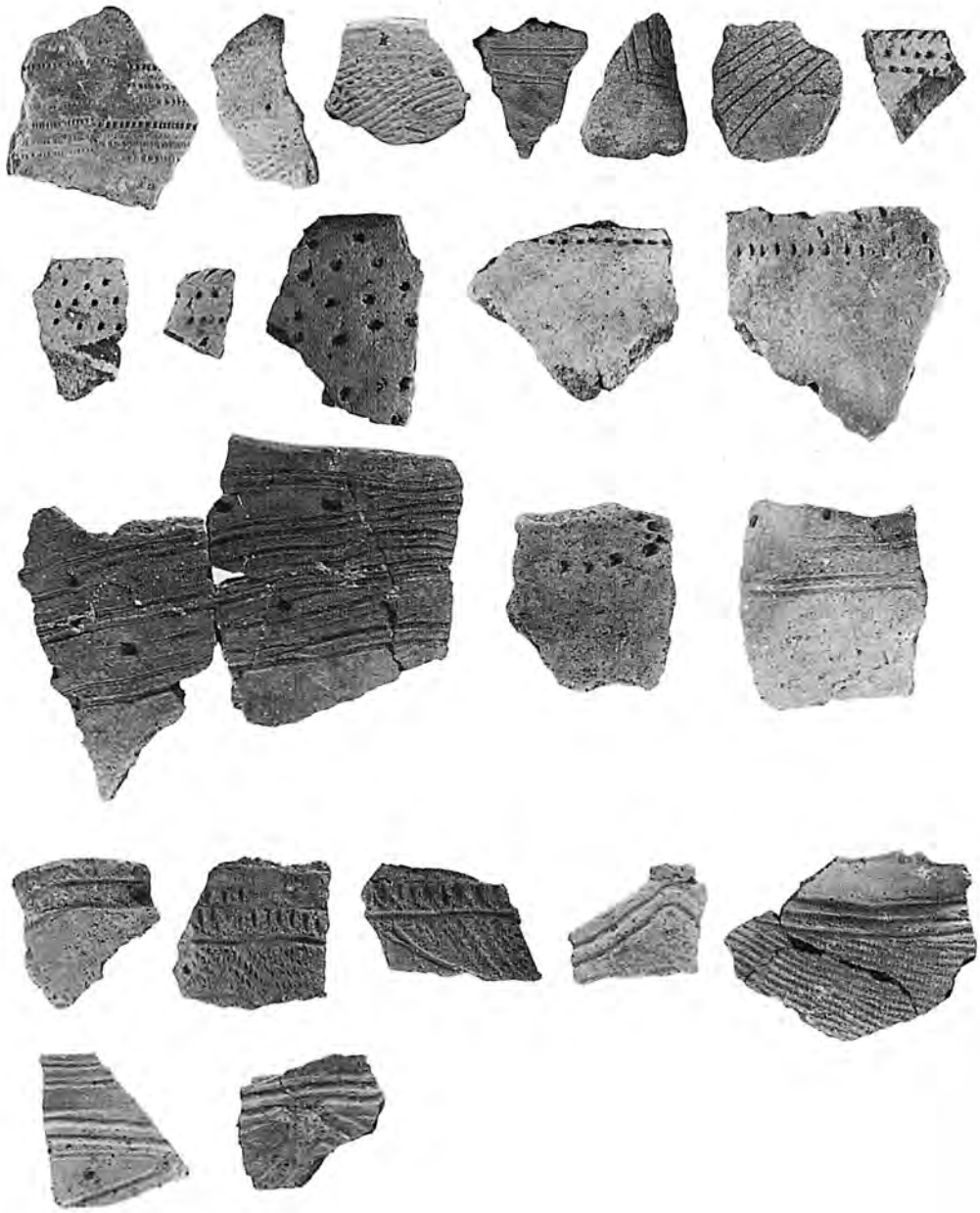
遺構外出土第X・XI・XII群土器



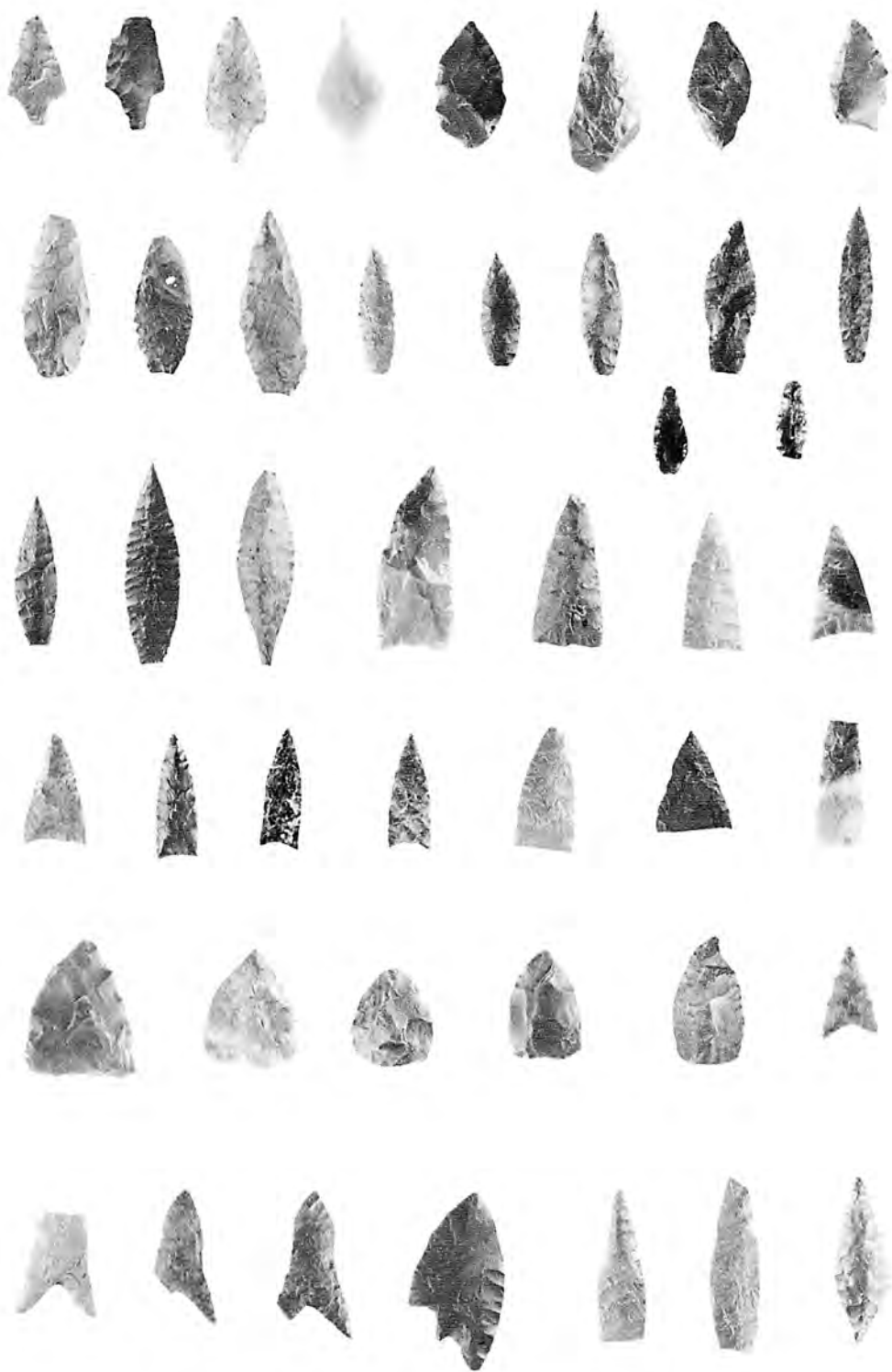
遺構外出土第XIV群土器



遺構外出土第XIII・XV群土器



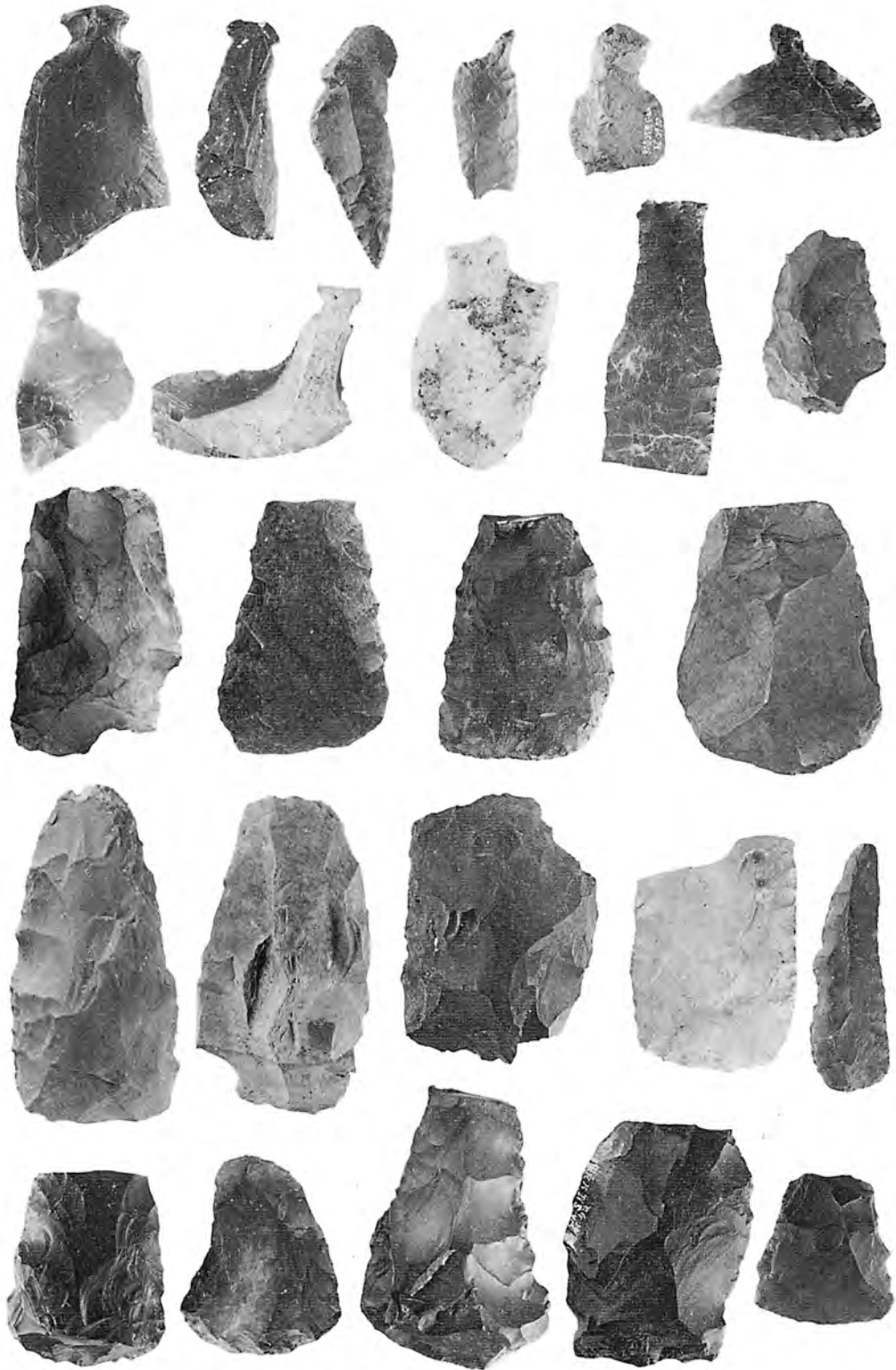
遺構外出土第XV～第XVII群土器



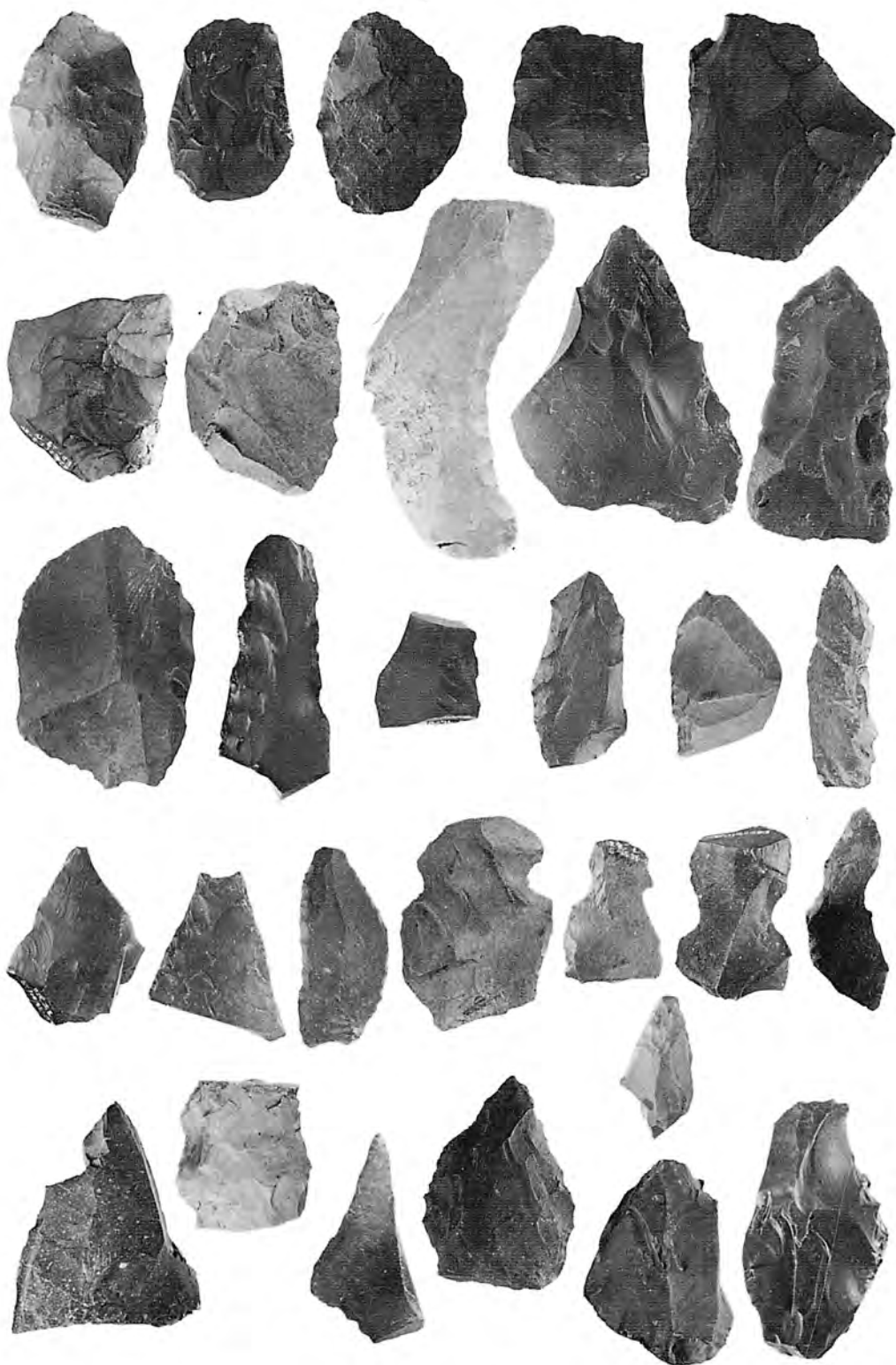
遺構外出土石器



遺構外出土石器



遺構外出土石器



遺構外出土石器



接合資料 1

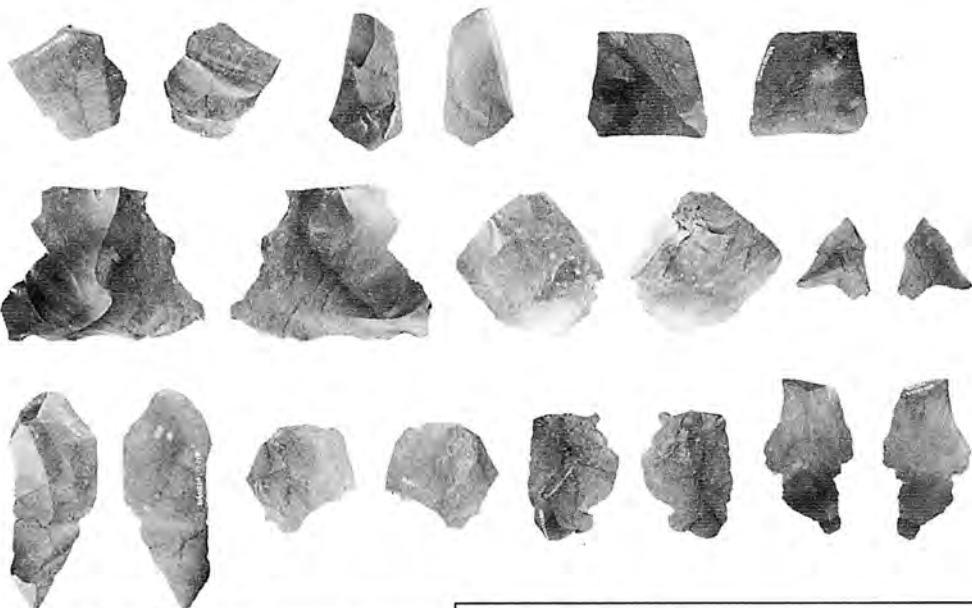


接合資料 2

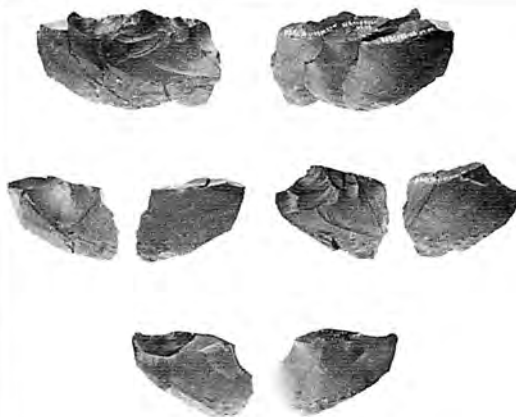
接合と剥片



接合資料 3



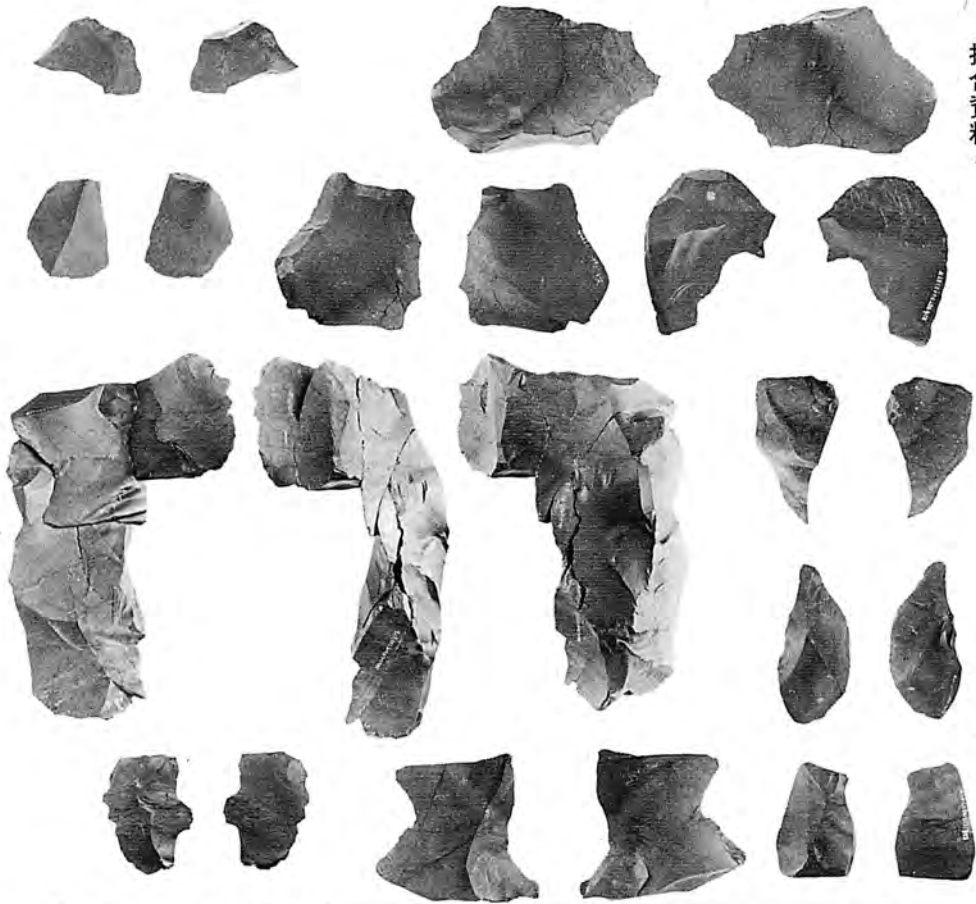
接合資料 6



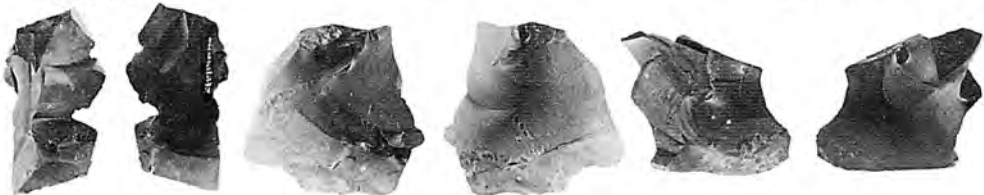
接合資料 7

接合と剝片

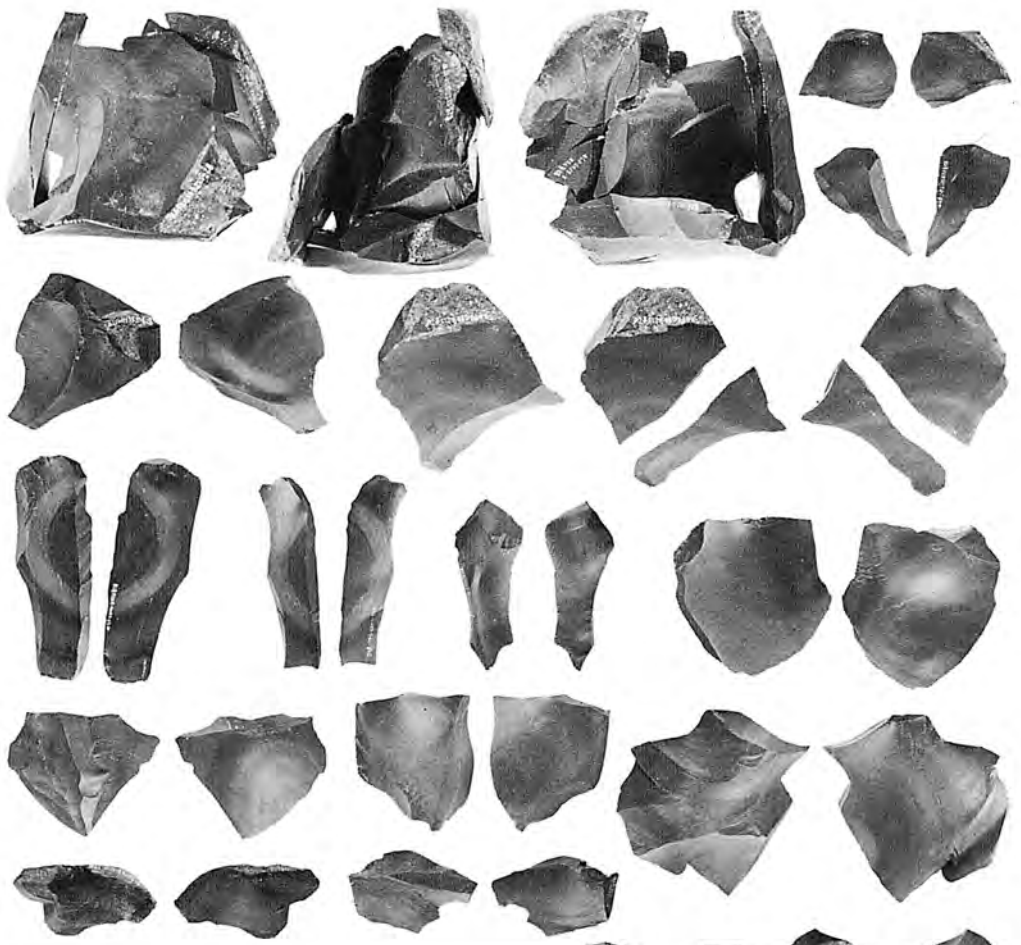
接合資料 4



接合資料 5



接合と剝片



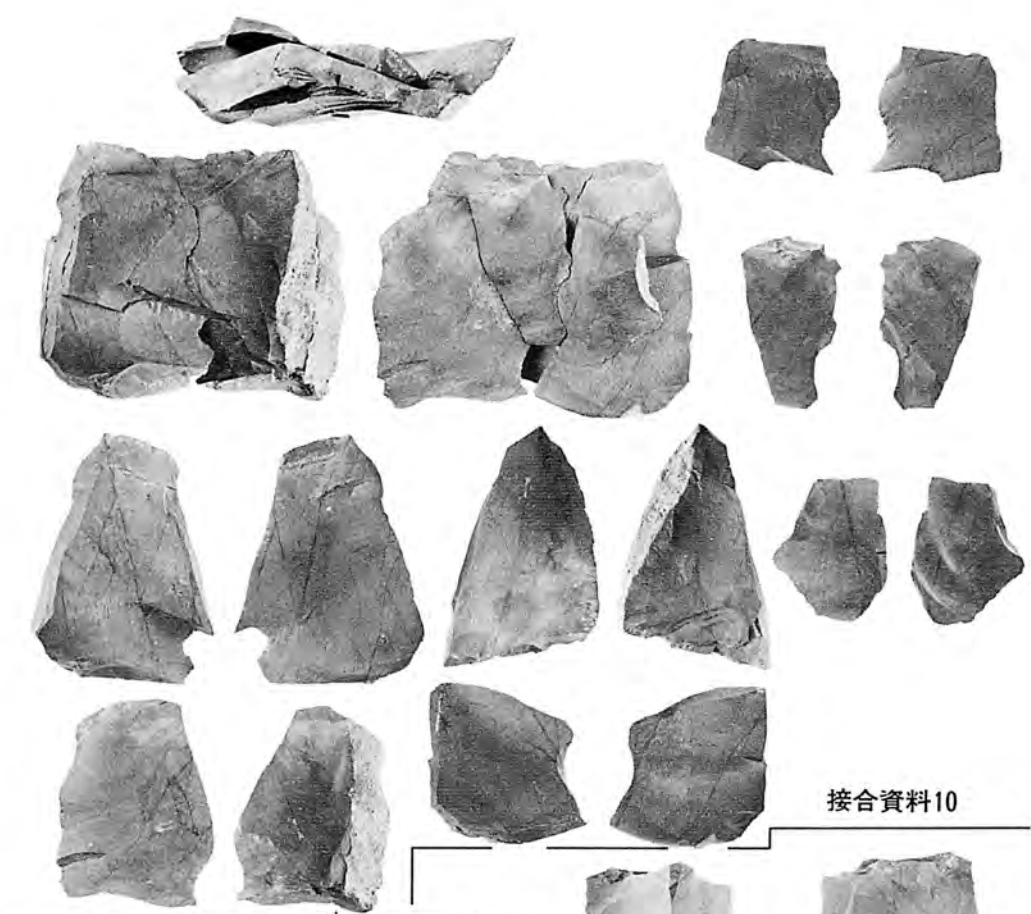
接合資料 8



接合資料 9

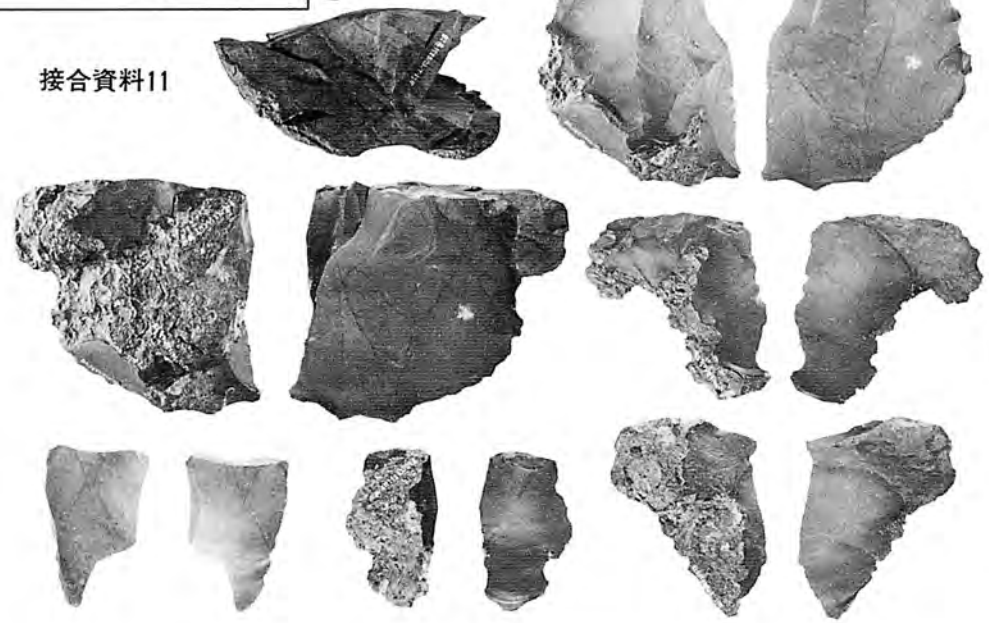


接合と剝片



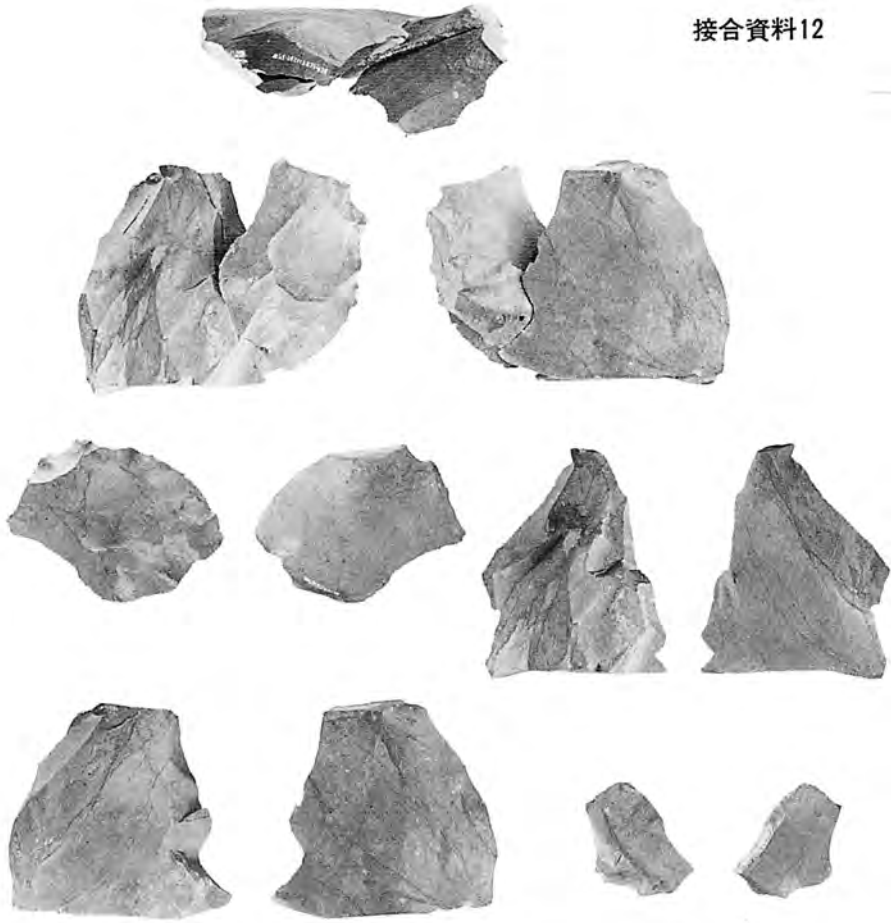
接合資料10

接合資料11



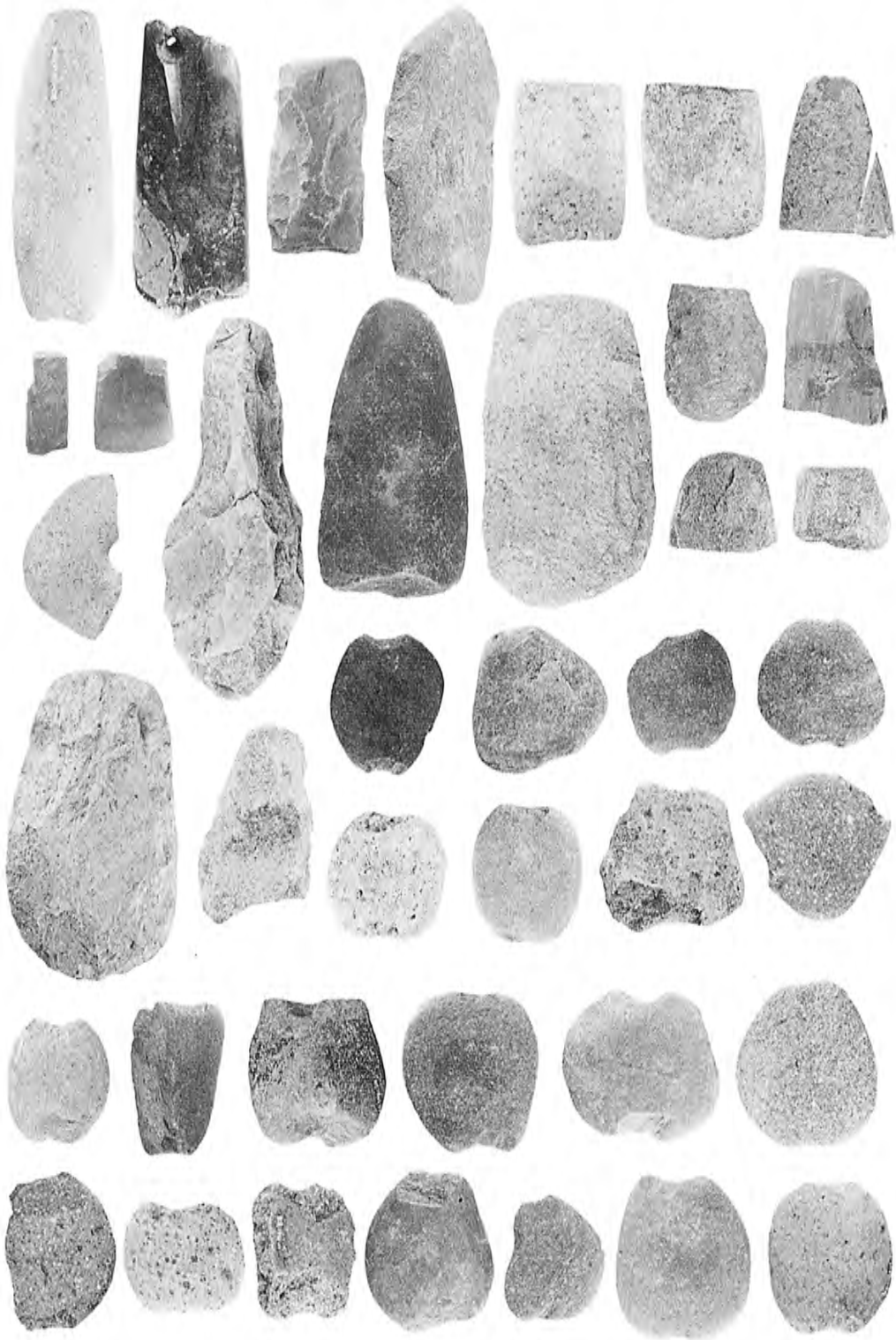
接合と剥片

接合資料12

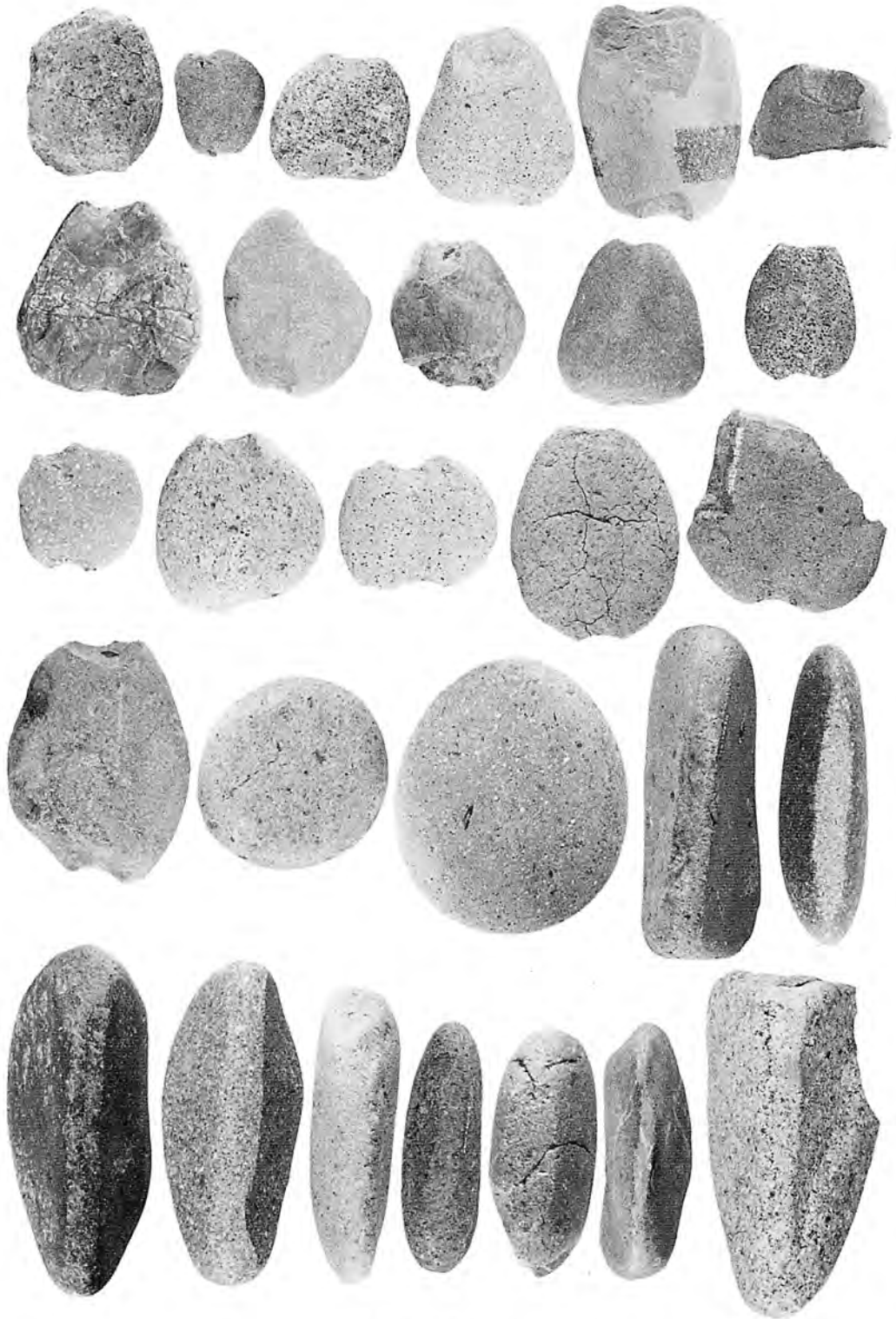


接合資料13

接合と剥片



遺構外出土石器

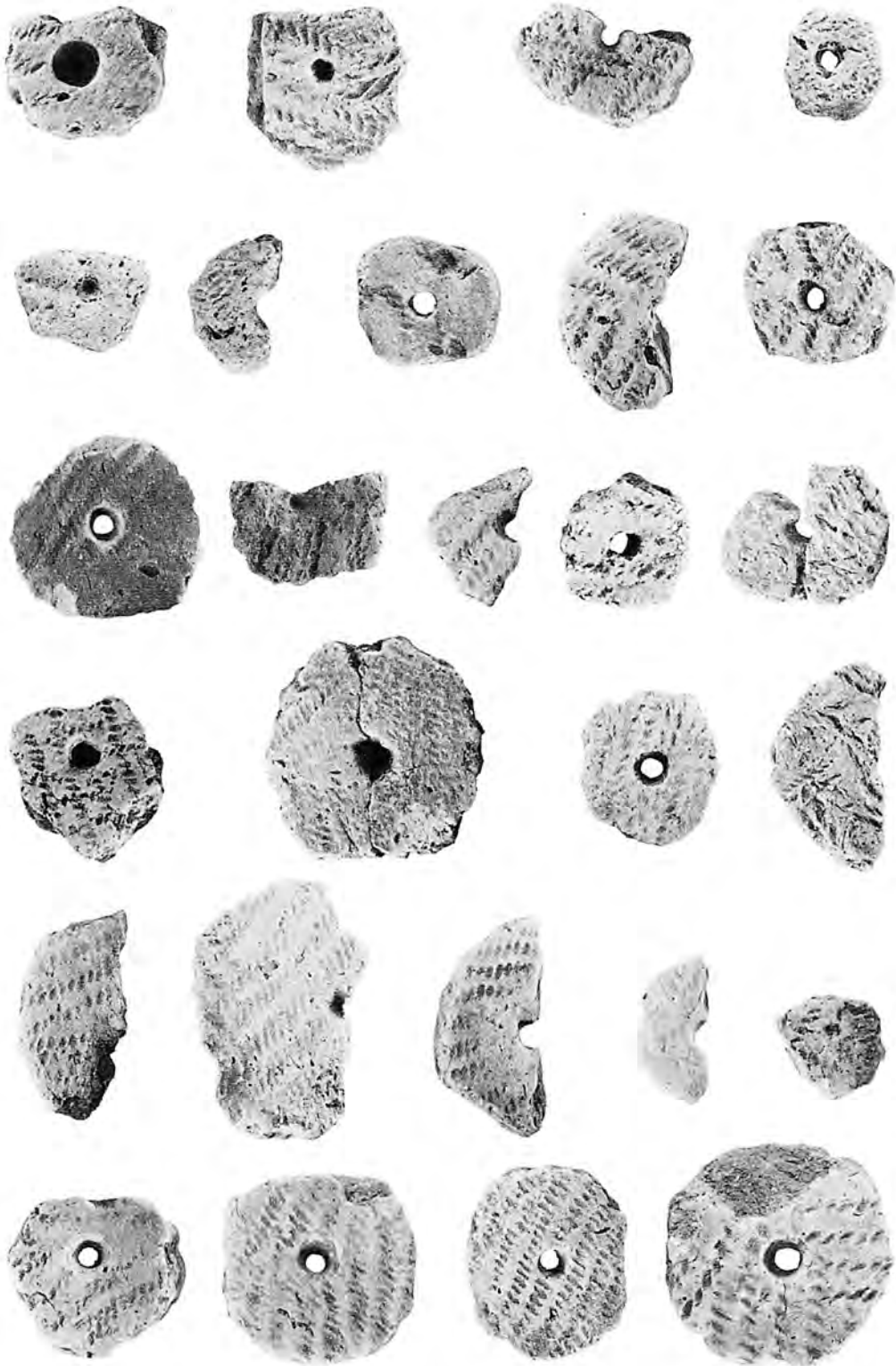


遺構外出土石器



遺構外出土石器

有孔土製品





第301号住居跡



第302号住居跡



遺構内出土遺物(1)



第303号住居跡

第304号住居跡



遺構内出土遺物(2)



第305号住居跡



第306号住居跡



第320号住居跡



遺構内出土遺物(3)



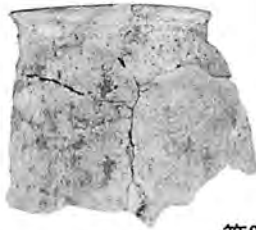
第321号住居跡



第322号住居跡



第323号住居跡



第325号住居跡



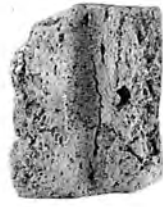
第326号住居跡



遺構内出土遺物(4)



第327号住居跡



第328号住居跡



第329号住居跡



第402号住居跡



第401号住居跡



第403号住居跡



第308号土坑



第309号土坑



第319号住居跡

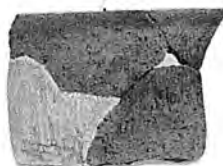


遺構内出土遺物(5)

第333号土坑



第401号土坑



第417号土坑

遺構外



遺構内出土遺物(6)



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10

1	全	景	ト
2	号	状	ツ
3	1	溝	ト
4	3	状	ト
5	4	溝	ト
6	5	状	ト
7	6	溝	ト
8	7	状	ト
9	8	溝	ト
10	9	状	ト

青森県埋蔵文化財調査報告書第93集

売場遺跡発掘調査報告書

(第3次、第4次調査)

大タルミ遺跡発掘調査報告書

—一般国道45号八戸北バイパス建設に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書—

発行日 昭和60年3月31日

発行・編集 青森県埋蔵文化財調査センター
青森市大字新城字天田内 152-15

印刷 青森市合浦一丁目2番12号
東北印刷工業株式会社
